沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 111 集

普天間石川原第一遺跡
普天間グスクンニー遺跡
普天間下原古墓群

－キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書－

令和 4（2022）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが沖縄防衛局の委託を受け、平成 29（2017）年度～令和元（2019）年度に実施したキャンプ瑞慶覧内に所在する海軍病院関係者の住宅建設に伴う東普天間住宅地区発掘調査成果をまとめたものです。

今回調査を行った普天間石川原第一遺跡、普天間グスクンニー遺跡、普天間下原古墓群は、宜野湾市字普天間に所在し、沖縄戦前まであった普天間古集落の北西側にあたります。

普天間石川原第一遺跡では大きな二つの埋没谷を確認し、貝塚時代は谷筋が蛇行する起伏に富んだ地形でした。グスク時代の列状ピット群、谷地を段状に区画する石列、溝状遺構が確認されたとともに、コムギの炭化種実が多く検出され、グスク時代は階段状の畑跡が広がっていたことが確認されました。近世～近代の普天間古集落から続く道跡も検出されたとともに、耕作関連遺構は普天間石川原第一遺跡や普天間グスクンニー遺跡でも確認されています。

普天間下原古墓群は、掘込墓や亀甲墓・破風墓によって構成される墓地群で、出土した厨子甕に記載されている銘書からは、普天間古集落の墓域であることが確認されました。墓は地形を上手く利用して構築していることがわかり、発掘調査によって当時の墓地造営における土木技術を知ることができます。墓の付近でサンゴを焼き生石灰づくりから漆喰を製造して墓の仕上げを行っていたことや、儀礼と考えられる獣骨埋設遺構も確認されています。さらに､墓庭からは沖縄戦時の壕跡と戦没者の遺骨が検出されました。

今回の本報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として利用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後となりましたが、様々なご指導・御助言・御協力を頂きました関係機関並びに関係各位に、心から厚く御礼申し上げます。

令和４（2022）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　瑞慶覧　勝利

例　言

１　本報告書は、沖縄防衛局によるキャンプ瑞慶覧内の東普天間住宅地区住宅建設に伴う造成工事に際して、普天間石川原第一遺跡・普天間グスクンニー遺跡・普天間下原古墓群の記録保存を目的とした発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。

２　本発掘調査および資料整理業務は、沖縄防衛局と沖縄県が委託契約を交わし、沖縄県教育庁文化財課の指導のもと、宜野湾市教育委員会など関係者の協力を得て、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

３　現地での発掘調査は平成 29 ～令和元（平成 31）年度に実施し、資料整理作業・発掘調査報告書作成は平成 30 ～令和３年度に実施した。

４　地図は国土地理院の電子国土 WEB システムから配信された地理院地図・基盤地図情報および宜野湾市教育委員会提供図を利用した。航空写真は宜野湾市教育委員会より提供されたものである。

５　本報告で使用している座標は、世界測地系の第 XV 系である。

６　本報告書の構成は、第３章:普天間石川原第一遺跡、第４章：普天間グスクンニー遺跡、第５章：普天間下原古墓群とし、遺跡ごとに報告を行う。遺構・遺物の写真は巻末にまとめている。

７　土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づく。第３・４章に掲載した遺構の土色・観察所見は、遺構一覧表に示した。

８　遺構図の縮尺は、第３・４章の遺構全体図や土層図は規模に応じた縮尺とし、遺構個別図は基本１/40 とした。第５章の墓展開図も規模に応じた縮尺とした。

９　遺物図の縮尺は、土器は 1/2、陶磁器類は 1/3、厨子甕は 1/8 を基本とした。第３章の遺構図と合わせて掲載した遺物図の縮尺は基本 1/6 とした。

10　遺物の番号は、遺跡別で通し番号を付した。

11　本書の編集は、当センター埋蔵文化財資料整理員の協力を得て、具志堅清大が行った。執筆は、下記以外は具志堅が行った。なお、石器・石製品の分類・石材同定については、大堀皓平（沖縄県教育庁文化財課）の協力を得た。

第３章第３節（1)･第４章第２節･第５章第３節（1）
遺物の分類と概要：厨子甕、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、石器・石製品・石造物、骨製品、貝製品、金属製品、鍛治関連遺物、銭貨、瓦・瓦製品…照屋匠美
本土産陶磁器、円盤状製品、ガラス製品、プラスチック製品・その他の製品…我喜屋優真
第３章第４節（1)･第４章第２節･第５章第４節（1）
脊椎動物遺体…亀島慎吾
第３章第４節（2)・第５章第４節（2）
貝類遺体…照屋匠美
第３章第５節　自然科学分析…
パリノ・サーヴェイ株式会社
第５章第３節（11）壕跡出土遺物…我喜屋優真
第５章第５節　銘書の分析…山田浩世
（沖縄県教育庁文化財課）
第５章第６節　人骨の分析…土肥直美
（元琉球大学医学部）

12　本書に掲載した写影は、現地調査状況を具志堅清大、南勇輔、照屋匠美、我喜屋優真、久場大暉、廣岡凌、奥平大貴、太田樹也、城間宏次朗、波照間紗希、平良悟、根間翔吾が撮影した。
遺物写真および赤外線写真は伊禮若奈、與儀暁裕が撮影した。X 線写真は具志堅が撮影した。

13　現地調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。
なお、19 号墓墓庭の壕跡から出土した戦没者人骨と壕跡出土遺物については、資料整理後に沖縄県平和記念財団戦没者遺骨収集情報センターに移管した。

14　文化財保護・教育普及・学術研究を目的として本報告書を複製して利用する場合は、掲載許可申請等は不要である。利用にあたっては出典を明記すること。

目　次

序
例言

第１章　調査の経過
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　体制 …… 2
第３節　調査経過 …… 3
第１項　発掘調査経過 …… 3
第２項　資料整理経過 …… 7
第３項　包蔵地範囲及び名称の変更 …… 8

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　遺跡の立地と地理的環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 10

第３章　普天間石川原第一遺跡の調査成果
第１節　調査の方法 …… 13
第２節　基本層序 …… 16
第３節　遺構と出土遺物 …… 17
（１）遺物の分類と概要 …… 17
（２）１区 …… 24
（３）２区 …… 28
（４）３区 …… 34
（５）４区 …… 34
（６）５区 …… 41
（７）６区 …… 57
（８）７区 …… 62
第４節　自然遺物 …… 93
（１）　脊椎動物遺体 …… 93
（２）　貝類遺体 …… 95
第５節　自然科学分析 …… 96

第４章　普天間グスクンニー遺跡の調査成果
第１節　調査の方法と層序 …… 113
第２節　遺構 …… 113
第３節　遺物 …… 113
第４節　自然遺物 …… 115
脊椎動物遺体 …… 115

第５章　普天間下原古墓群の調査成果
第１節　調査の方法 …… 116
第２節　古墓の概要と基本層序 …… 117
第３節　古墓と出土遺物 …… 118
（１）遺物の分類と概要 …… 118
（２）１・２号墓 …… 122
（３）３・32・33 号墓 …… 124
（４）４号墓 …… 127
（５）５号墓 …… 128
（６）７・25・29・30 号墓 …… 133
（７）８・９・28 号墓 …… 138
（８）10 号墓 …… 141
（９）11 号墓 …… 143
（10）16・24 号墓 …… 143
（11）19 号墓・壕跡と戦没者人骨 …… 147
（12）21 号墓 …… 152
（13）26・31・36 号墓（４区内） …… 153
（14）27 号墓（２区内） …… 154
（15）34・35 号墓（５区北側内） …… 158
（16）その他の遺構 …… 159
第４節　自然遺物 …… 168
（１）　脊椎動物遺体 …… 168
（２）　貝類遺体 …… 175
第５節　銘書の分析 …… 176
第６節　人骨の分析 …… 179

第６章　総括
第１節　普天間石川原第一遺跡の調査成果 …… 186
第２節　普天間グスクンニー遺跡の調査成果 …… 193
第３節　普天間下原古墓群の調査成果 …… 194
第４節　結語 …… 199

参考文献 …… 200
巻末図版 …… 205
報告書抄録 …… 299

挿図目次

第 1 図　包蔵地変更範囲図 ……8
第 2 図　沖縄県宜野湾市の位置図 ……9
第 3 図　宜野湾市の地形と遺跡の位置 ……9
第 4 図　キャンプ瑞慶覧内の包蔵地範囲図 ……10
第 5 図　昭和 20 年の普天間周辺 ……11
第 6 図　キャンプ瑞慶覧の地区名 (平成 24 年撮影) ……11
第 7 図　周辺の遺跡 ……12
第 8 図　グリッド設定図 ……14
第 9 図　調査区位置・グリッド配置図 ……15
第 10 図　1 区土層断面図 ……24
第 11 図　1 区第 1 遺構面の遺構 ……24
第 12 図　1 区第 1 遺構面出土遺物 ……24
第 13 図　1 区第 1 遺構面 ……25
第 14 図　1 区 SS1001・1002(第 2 遺構面) ……26
第 15 図　1 区第 2 遺構面 ……26
第 16 図　1 区第 2 遺構面の遺構 ……27
第 17 図　1 区第 2 遺構面出土遺物 ……27
第 18 図　1 区第 3 面 (地山面) ……27
第 19 図　1 区第 3 面出土遺物 ……27
第 20 図　2 区土層断面図 ……28
第 21 図　2 区第 1 遺構面 ……29
第 22 図　2 区第 1 遺構面の遺構 ……30
第 23 図　2 区第 1 遺構面出土遺物 ……31
第 24 図　2 区第 2 遺構面出土遺物 ……32
第 25 図　2 区第 2 遺構面 ……32
第 26 図　2 区第 2 遺構面の遺構 ……33
第 27 図　3 区の遺構 ……34
第 28 図　3 区出土遺物 ……34
第 29 図　4 区土層断面図 ……35
第 30 図　4 区第 1 遺構面の遺構 1 ……36
第 31 図　4 区第 1 遺構面の遺構 2 ……37
第 32 図　4 区第 1 遺構面出土遺物 ……37
第 33 図　4 区第 2 遺構面の遺構 ……38
第 34 図　4 区第 2 遺構面出土遺物 ……38
第 35 図　4 区第 3 遺構面の遺構 1 ……39
第 36 図　4 区第 3 遺構面出土遺物 ……40
第 37 図　4 区第 3 遺構面の遺構 2 ……40
第 38 図　5 区土層断面図 1 ……41
第 39 図　5 区土層断面図 2 ……42
第 40 図　5 区第 1 遺構面 ……43
第 41 図　5 区第 1 遺構面の遺構 1 ……44
第 42 図　5 区第 1 遺構面の遺構 2 ……45
第 43 図　5 区第 1 遺構面の遺構 3 ……46
第 44 図　5 区第 1 遺構面出土遺物 ……47
第 45 図　5 区第 2 遺構面 ……48
第 46 図　5 区第 2 遺構面の遺構 1 ……49
第 47 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 2 ……50
第 48 図　5 区第 2 遺構面の遺構 2 ……51
第 49 図　5 区第 2 遺構面出土遺物 1 ……51
第 50 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 2 ……52
第 51 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 3 ……52
第 52 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 4 ……53
第 53 図　5 区第 2 遺構面出土遺物 2 ……53
第 54 図　5 区第 2 遺構面の遺構 3 ……54
第 55 図　5 区第 2 遺構面の遺構分布図 ……54
第 56 図　5 区第 2 遺構面の遺構 4 ……55
第 57 図　5 区第 2 遺構面出土遺物 ……55
第 58 図　5 区第 3 遺構面 ……55
第 59 図　5 区貝塚前期土器出土状況 ……56
第 60 図　5 区第 3 遺構面 (SS5004) ……56
第 61 図　5 区 SS5004 ……56
第 62 図　5 区 SS5004 出土遺物 (埋没谷 2) ……56
第 63 図　5 区第 3 遺構面出土遺物 ……56
第 64 図　6 区土層断面図 ……57
第 65 図　6 区第 1 遺構面の遺構 1 ……58
第 66 図　6 区第 1 遺構面の遺構 2 ……59
第 67 図　6 区第 1 遺構面出土遺物 ……59
第 68 図　6 区第 2 遺構面の遺構 1 ……60
第 69 図　6 区第 2 遺構面の遺構 2 ……61
第 70 図　6 区第 3 面出土遺物 ……61
第 71 図　6 区第 3 面（地山面）……61
第 72 図　7 区の遺構と出土遺物 ……62
第 73 図　出土遺物 1（貝塚前期土器）……63
第 74 図　出土遺物 2（貝塚前期土器）……64
第 75 図　出土遺物 3（貝塚前期土器）……65
第 76 図　出土遺物 4（貝塚後期土器）……66
第 77 図　出土遺物 5（グスク土器・カムィヤキ・朝鮮系無釉陶器）……67
第 78 図　出土遺物 6（青磁・白磁）……68
第 79 図　出土遺物 7（白磁・青花・中国産褐釉陶器・本土産近世陶器・本土産近代磁器・沖縄産施釉陶器）…69
第 80 図　出土遺物 8（沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・厨子甕・陶質土器・円盤状製品・ガラス製品）……70
第 81 図　出土遺物 9（石器）……71
第 82 図　出土遺物 10（石器・石製品・骨製品・貝製品・羽口・銭貨・金属製品・プラスチック製品）……72
第 83 図　哺乳類同定標本数（NISP%）……93
第 84 図　層序別貝類出土割合 ……95
第 85 図　生息域別貝類出土割合（MINI）……95
第 86 図　暦年較正結果 ……99
第 87 図　SD2001 における炭化種実群集の層位変化 ……104
第 88 図　炭化種実（令和 2 年度分析調査）……109
第 89 図　炭化葉・炭化種実（令和 3 年度分析調査）……110
第 90 図　炭化材 1（令和 3 年度分析調査）……111
第 91 図　炭化材 2（令和 3 年度分析調査）……112
第 92 図　普天間グスクンニー遺跡の遺構 ……114
第 93 図　普天間グスクンニー遺跡出土遺物 ……115
第 94 図　古墓群の地区 ……116
第 95 図　亀甲墓の部位名称 ……117
第 96 図　古墓の位置 ……121
第 97 図　1・2 号墓 ……122
第 98 図　1・2 号墓出土遺物 ……123
第 99 図　3 号墓 1 ……124
第 100 図　3 号墓 2 ……125
第 101 図　32 号墓 ……125
第 102 図　33 号墓 ……126
第 103 図　3・32・33 号墓出土遺物 ……126
第 104 図　4 号墓 1 ……127
第 105 図　4 号墓 2 ……128
第 106 図　4 号墓出土遺物 ……128
第 107 図　5 号墓 ……129
第 108 図　5 号墓出土遺物 1 ……130
第 109 図　5 号墓出土遺物 2 ……131
第 110 図　5 号墓出土遺物 3 ……132
第 111 図　5 号墓出土遺物 4 ……133
第 112 図　7 号墓 1 ……133
第 113 図　7 号墓 2 ……134
第 114 図　25 号墓 ……135
第 115 図　30 号墓 ……135
第 116 図　7 号墓出土遺物 1 ……136
第 117 図　7 号墓出土遺物 2 ……137
第 118 図　7・25・29・30 号墓出土遺物 ……138
第 119 図　8 号墓 ……139
第 120 図　9・28 号墓 ……140
第 121 図　8 号墓出土遺物 ……140
第 122 図　9・28 号墓出土遺物 ……141
第 123 図　10 号墓 ……142
第 124 図　10 号墓出土遺物 ……143
第 125 図　11 号墓 ……143
第 126 図　11 号墓出土遺物 ……144
第 127 図　16 号墓 1 ……144
第 128 図　16・24 号墓 ……145
第 129 図　16 号墓出土遺物 1 ……146
第 130 図　16 号墓出土遺物 2 ……147
第 131 図　19 号墓 ……148
第 132 図　19 号墓出土遺物 ……149

第 133 図　壕跡出土遺物 ……150
第 134 図　19 号墓壕跡と戦没者人骨……151
第 135 図　21 号墓……152
第 136 図　21 号墓出土遺物……152
第 137 図　26・31・36 号墓位置図 ……153
第 138 図　26・31・36 号墓 ……153
第 139 図　31・36 号墓出土遺物 ……154
第 140 図　27 号墓……155
第 141 図　27 号墓出土遺物 1 ……156
第 142 図　27 号墓出土遺物 2 ……157
第 143 図　35 号墓……158
第 144 図　34 号墓出土遺物……158
第 145 図　石積み 1 ～ 9……159
第 146 図　石積み 8・9 出土遺物 ……160
第 147 図　哺乳類同定標本数 (NISP%) ……168
第 148 図　19 号墓出土ブタ下顎骨……169
第 149 図　19 号墓出土ブタ頭蓋骨……169
第 150 図　哺乳類各古墓出土数 ……169
第 151 図　イヌ頭蓋骨計測値比較 ……174
第 152 図　イヌ下顎骨計測値比較 ……175
第 153 図　生息域別貝類出土割合 (MINI) ……175
第 154 図　普天間下原古墓被葬者の構成 ……179
第 155 図　27 号墓厨子 1 内出土の指骨……180
第 156 図　27 号墓厨子甕 1 ～ 3　人骨取り上げ図 ……181
第 157 図　普天間石川原遺跡の埋没谷地形 ……187
第 158 図　貝塚時代前期の地形復元 ……187
第 159 図　貝塚時代前期土器の平面分布図 ……188
第 160 図　貝塚時代後期土器の平面分布図 ……188
第 161 図　埋没谷の貝塚時代土器出土割合 ……188
第 162 図　貝塚後期後半～グスク時代初期の遺構分布 ……190
第 163 図　グスク時代の遺構分布 ……190
第 164 図　5 区埋没谷 1 の遺構と堆積……191
第 165 図　周辺のグスク時代遺跡分布図 ……192
第 166 図　近世～近代の遺構分布 ……193
第 167 図　漆喰・モルタル塗りの墓と SL5001 ……195
第 168 図　昭和 20 年撮影航空写真と東普天間住宅地区 ……197
第 169 図　海軍病院地区の獣骨埋設遺構 ……198
第 170 図　昭和 20 年撮影航空写真と東普天間住宅地区・海軍病院地区……198
第 171 図　集落と墓域 ……198

挿表目次

第 1 表　東普天間住宅地区発掘調査事業行程一覧 ……3
第 2 表　普天間石川原第一遺跡調査一覧 ……3
第 3 表　普天間グスクンニー遺跡調査一覧 ……3
第 4 表　普天間下原古墓群調査一覧 ……3
第 5 表　包蔵地範囲及び遺跡名称変更一覧 ……8
第 6 表　普天間石川原第一遺跡 (1 ～ 7 区) 基本層序対応関係……16
第 7 表　出土点数・個体数 1 ……18
第 8 表　出土点数・個体数 2 ……20
第 9 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 1 ……73
第 10 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 2 ……74
第 11 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 3 ……75
第 12 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 4 ……76
第 13 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 5 ……77
第 14 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 6 ……78
第 15 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 7 ……79
第 16 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 8 ……80
第 17 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 9 ……81
第 18 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 10 ……82
第 19 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 11 ……83
第 20 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 12 ……84
第 21 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 13 ……85
第 22 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 14 ……86
第 23 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 1 ……87
第 24 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 2 ……88
第 25 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 3 ……89
第 26 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 4 ……90
第 27 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 5 ……91
第 28 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 6 ……92
第 29 表　脊椎動物遺体種類一覧 ……93
第 30 表　普天間石川原第一遺跡魚類集計表 ……93
第 31 表　哺乳類同定標本数 (NISP)……93
第 32 表　普天間石川原第一遺跡哺乳類集計表 ……94
第 33 表　遺構別貝類出土数 ……95
第 34 表　貝類の生息場所類型 ……95
第 35 表　分析試料および分析項目一覧 ……97
第 36 表　放射性炭素年代測定結果 (1) ……100
第 37 表　放射性炭素年代測定結果 (2) ……101
第 38 表　放射性炭素年代測定結果 (3) ……102
第 39 表　令和 2 年度分析調査微細物分析結果 (1) ……102
第 40 表　令和 2 年度分析調査微細物分析結果 (2) ……103
第 41 表　令和 2 年度分析調査炭化種実出土状況 ……103
第 42 表　令和 3 年度微細物分析結果 ……105
第 43 表　令和 3 年度炭化材同定結果 ……106
第 44 表　普天間グスクンニー遺跡遺構・出土遺物一覧 ……113
第 45 表　普天間グスクンニー遺跡遺物観察一覧 ……115
第 46 表　普天間グスクンニー遺跡 ……115
第 47 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 1 ……160
第 48 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 2 ……161
第 49 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 3 ……162
第 50 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 4 ……163
第 51 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 1 ……163
第 52 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 2 ……164
第 53 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 3 ……165
第 54 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 4 ……166
第 55 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 5 ……167
第 56 表　脊椎動物遺体種類一覧 ……168
第 57 表　哺乳類同定標本数(NISP)……168
第 58 表　a（古墓）……170
第 59 表　b（古墓）……171
第 60 表　c（古墓）……172
第 61 表　d（古墓）……173
第 62 表　ブタ臼歯の計測値 ……173
第 63 表　イヌ臼歯の計測値 ……173
第 64 表　イヌ脊椎・四肢骨の計測値 ……173
第 65 表　イヌ頭蓋骨（５号墓 墓室内Ⅰ層出土）計測値 ……174
第 66 表　イヌ頭蓋骨・下顎骨（５号墓 墓室内Ⅰ層出土）計測値と比較表 ……174
第 67 表　イヌ下顎骨（５号墓 墓室内Ⅰ層出土）計測値 ……175
第 68 表　古墓別貝類出土表 ……175
第 69 表　銘書一覧表 ……178
第 70 表　普天間下原古墓群被葬者の推定最小個体数 ……179
第 71 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 1 ……182
第 72 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 2 ……183
第 73 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 3 ……184
第 74 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 4 ……185

図版目次

図版 1　普天間石川原第一遺跡（１区）……205
図版 2　普天間石川原第一遺跡（１区）……206
図版 3　普天間石川原第一遺跡（２区）……207
図版 4　普天間石川原第一遺跡（２区）……208
図版 5　普天間石川原第一遺跡（２区）……209
図版 6　普天間石川原第一遺跡（２区）……210
図版 7　普天間石川原第一遺跡（２区）……211
図版 8　普天間石川原第一遺跡（３区）……212
図版 9　普天間石川原第一遺跡（４区）……213
図版 10　普天間石川原第一遺跡（４区）……214
図版 11　普天間石川原第一遺跡（４区）……215
図版 12　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……216
図版 13　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……217

図版 14　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……218
図版 15　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……219
図版 16　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……220
図版 17　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……221
図版 18　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……222
図版 19　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……223
図版 20　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……224
図版 21　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……225
図版 22　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……226
図版 23　普天間石川原第一遺跡（５区北側）……227
図版 24　普天間石川原第一遺跡（５区南側）……228
図版 25　普天間石川原第一遺跡（5 区南側）……229
図版 26　普天間石川原第一遺跡（5 区南側）……230
図版 27　普天間石川原第一遺跡（６区）……231
図版 28　普天間石川原第一遺跡（６区）……232
図版 29　普天間石川原第一遺跡（6 区）……233
図版 30　普天間石川原第一遺跡（6 区）……234
図版 31　普天間石川原第一遺跡（7 区）……235
図版 32　普天間石川原第一遺跡出土遺物 1 ……236
図版 33　普天間石川原第一遺跡出土遺物 2 ……237
図版 34　普天間石川原第一遺跡出土遺物 3 ……238
図版 35　普天間石川原第一遺跡出土遺物 4 ……239
図版 36　普天間石川原第一遺跡出土遺物 5 ……240
図版 37　普天間石川原第一遺跡出土遺物 6 ……241
図版 38　普天間石川原第一遺跡出土遺物 7 ……242
図版 39　普天間石川原第一遺跡出土遺物 8 ……243
図版 40　普天間石川原第一遺跡出土遺物 9 ……244
図版 41　普天間石川原第一遺跡出土遺物 10 ……245
図版 42　普天間石川原第一遺跡出土遺物 11 ……246
図版 43　普天間石川原第一遺跡出土遺物 12 ……247
図版 44　普天間石川原第一遺跡出土遺物 13 ……248
図版 45　普天間グスクンニー遺跡の遺構と出土遺物……249
図版 46　普天間下原古墓群……250
図版 47　普天間下原古墓群（1・2 号墓）……252
図版 48　普天間下原古墓群（3 号墓）……253
図版 49　普天間下原古墓群（3・32・33 号墓）……254
図版 50　普天間下原古墓群（4 号墓）……255
図版 51　普天間下原古墓群（5 号墓）……256
図版 52　普天間下原古墓群（7・25・29・30 号墓）……257
図版 53　普天間下原古墓群（8・9・28 号墓）……258
図版 54　普天間下原古墓群（10・11 号墓）……259
図版 55　普天間下原古墓群（16・24 号墓）……260
図版 56　普天間下原古墓群（19 号墓）……261
図版 57　普天間下原古墓群（19 号墓）……262
図版 58　普天間下原古墓群（19 号墓壕跡と戦没者人骨）‥263
図版 59　普天間下原古墓群（21・26・31・36 号墓）……264
図版 60　普天間下原古墓群（27 号墓）……265
図版 61　普天間下原古墓群（34・35 号墓）……266
図版 62　普天間下原古墓群（石積み及び不明遺構）……267
図版 63　普天間古集落の獣骨埋設遺構（海軍病院地区Ⅲ地区）
……268
図版 64　普天間古集落の獣骨埋設遺構（海軍病院地区Ⅲ地区）
……269
図版 65　普天間下原古墓群出土遺物 1 ……270
図版 66　普天間下原古墓群出土遺物 2 ……271
図版 67　普天間下原古墓群出土遺物 3 ……272
図版 68　普天間下原古墓群出土遺物 4 ……273
図版 69　普天間下原古墓群出土遺物 5 ……274
図版 70　普天間下原古墓群出土遺物 6 ……275
図版 71　普天間下原古墓群出土遺物 7 ……276
図版 72　普天間下原古墓群出土遺物 8 ……277
図版 73　普天間下原古墓群出土遺物 9 ……278
図版 74　普天間下原古墓群出土遺物 10 ……279
図版 75　普天間下原古墓群出土遺物 11 ……280
図版 76　普天間下原古墓群出土遺物 12 ……281
図版 77　普天間下原古墓群出土遺物 13 ……282
図版 78　普天間下原古墓群出土遺物 14 ……283
図版 79　普天間下原古墓群出土遺物 15 ……284
図版 80　普天間下原古墓群出土遺物 16 ……285
図版 81　普天間下原古墓群出土遺物 17 ……286
図版 82　普天間下原古墓群出土遺物 18 ……287
図版 83　普天間下原古墓群出土遺物 19 ……288
図版 84　普天間下原古墓群出土遺物 20 ……289
図版 85　普天間下原古墓群出土遺物 21 ……290
図版 86　普天間下原古墓群出土遺物 22 ……291
図版 87　普天間下原古墓群出土遺物 23 ……292
図版 88　銘書の赤外線写真 1 ……293
図版 89　銘書の赤外線写真 2 ……294
図版 90　脊椎動物遺体（上：5 号墓・下：19 号墓）……295
図版 91　脊椎動物遺体 1 ……296
図版 92　脊椎動物遺体 2 ……297
図版 93　脊椎動物遺体 3 ……298

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

海軍病院の移設計画と試掘調査　平成８年12月の沖縄に関する特別行動委員会（SACO）の最終報告にて、キャンプ桑江内の海軍病院をキャンプ瑞慶覧内に移設することが合意され、海軍病院の移設候補地として、普天満宮西側の米軍住宅地域が挙がった。平成10年に沖縄県教育委員会（以下、県教委）により、18箇所の試掘調査を行った結果、広く普天間古集落（旧名称：普天間古集落遺跡）・普天間石川原第一遺跡（旧名称：普天間石川原遺跡）が確認された。その後、平成16年に沖縄防衛局より宜野湾市教育委員会（以下、市教委）へ文化財の有無の照会が行われた。市教委の要請を受けて、県教委及び市教委は、平成16～19年度（市教委は平成17・18年度）に海軍病院建設予定地全域（東普天間住宅地区を含む）の試掘調査を実施し、広範囲で埋蔵文化財包蔵地を確認した。沖縄防衛局、県教委、市教委は工事計画と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、病院本体範囲の記録保存調査を最優先で実施する方向で調整が進められた。

病院地区の発掘調査　平成20年３月28日付けで、沖縄防衛局、県教委、市教委の３者で病院地区における埋蔵文化財の取り扱いに関する「協定書」を交わし、平成20年度から海軍病院建設に伴う記録保存調査が県教委及び市教委により行われることとなった。県教委（沖縄県立埋蔵文化財センター）による発掘調査は、平成20年度に病院本体範囲から着手し、続いて関連施設等の工事にかかる範囲の調査を行い、平成25年度で病院地区の発掘調査は終了した。調査成果は平成26～28年度に報告している（沖縄県埋文2015a、2015b、2016、2017）。また、市教委による発掘調査は平成19年度から着手し、平成26年度には調査を終了し、平成27・28年度に調査成果を報告している（宜野湾市教委2011、2016、2017）。

東普天間住宅地区の計画に係る調整　病院地区の発掘調査が進められているなか、東普天間住宅地区において病院関係者の住宅建設を進めたいと沖縄防衛局からの要望があり、平成23～24年度に沖縄防衛局、県教委、市教委の三者による発掘調査に関する調整が繰り返し行われた。

県教委と市教委は、沖縄防衛局から提供された工事計画図をもとに、必要な発掘調査面積等について検討を行い、平成16～19年度の試掘調査で追加の試掘調査が必要なことを確認した。また、病院地区の協定書（平成20年３月28日付け）には当初東普天間住宅地区を含んでいたものの、その後の覚書（平成22年３月31日付け）では病院地区とは事業が異なることから協定から除いており、東普天間住宅地区の発掘調査については新たな協定の締結が必要となることも確認された。

沖縄防衛局とは、追加の試掘調査と古墓群の範囲確認のための補足調査を行うことと、病院地区とは別に協定を締結する方向で調整が進められた。

追加試掘調査　平成25年度には試掘調査予定箇所の現地確認を行い、県教委が追加の試掘調査、市教委が古墓群の現況測量調査を行うこととなった。翌平成26年度には試掘調査および古墓の範囲確認調査が実施された。市教委は平成26年４月～５月に普天間下原古墓群の調査を実施し、県教委は平成27年２月～３月に北側斜面緑地部の試掘調査を実施し、予定地の埋蔵文化財について把握がなされた。

調査実施主体の決定　上記の調査を受けて、工事予定地内に埋蔵文化財が所在するものの、工事の計画変更は困難とされ、沖縄防衛局から市教委へ発掘調査依頼があった（平成28年３月14日付沖防企移第26号）。本事業は調査規模が大きく、またキャンプ桑江南側の返還にかかる重要な事案であることもあり、市教委では対応が困難として、県教委へ協力を依頼した（平成28年４月19日付宜教文第29号－3）。これを受けて県教委は記録保存調査を実施することを回答した（平成28年４月27日付け教文第159号）。

調査対象の決定　沖縄防衛局による工事計画では、住宅建設に伴う広範囲での造成工事が予定されていた。工事範囲計画内に所在する普天間石川原第一遺跡 (旧名称：普天間石川原遺跡)、普天間グスクンニ―遺跡、普天間下原遺跡、普天間下原古墓群を調査の対象とした。発掘調査区は、試掘調査成果を踏まえて県教委および市教委で検討し設定した。そして工事の影響が及ぶ恐れのある古墓も全て調査対象となった。

協定の締結　東普天間住宅地区における埋蔵文化財の取り扱いについて、沖縄防衛局と県教委で「協定書」が平成29年３月21日付けで締結された。協定では、平成29年度に発掘調査を開始し、平成30年度末までに全体の発掘作業を終了し、令和３年度末までに資料整理と報告書の作成を行い、事業を完了することが示された。

その後、造成工事範囲拡大に伴う追加調査のため、発掘調査期間を令和元（平成31）年度末までとする覚書（平成30年11月２日付）を交わした。

第２節　体制

本報告の普天間石川原第一遺跡・普天間グスクンニー遺跡・普天間下原古墓群の発掘調査は、平成 29 ～令和元（平成 31）年度に現地での発掘作業、平成 30 ～令和３年度にかけて資料整理・報告書作成を行った。実施体制は以下のとおりである。

事業形態　沖縄防衛局受託事業
事業期間　平成 29（2017）～令和３（2021）年度
　発掘調査　平成 29 ～令和元（平成 31）年度
　資料整理　平成 30 ～令和３年度
　報告書作成　令和３年度
事業主体　沖縄県教育委員会
　平敷昭人（教育長：平成 29 ～令和元年度）
　金城弘昌 (教育長：令和２～３年度）
事業主管　沖縄県教育庁文化財課
　萩尾俊章（課長：平成 29 年度）、濱口寿夫（課長：平成 30 ～令和元年度）、諸見友重 (課長：令和２～３年度)、上地博（記念物班長：平成 29 年度）、仲座久宜（記念物班長：平成 30 ～令和３年度）、知念隆博 (主任専門員：平成 29 ～令和元年度)、神村智子（指導主事:平成 29 年度）、宮城淳一 (主任:令和２年度)、大堀皓平 (主任専門員：令和３年度)
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター
　金城亀信（所長：平成 29 年度）、登川安政（参事兼所長：平成 30 年度）、城田久嗣（所長：令和元年度）、瑞慶覧勝利（所長：令和２～３年度）、濱口寿夫（副参事：平成 29 年度）、真栄田義光（副参事：令和元～２年度）、比嘉智博（総務班長：平成 29 ～ 30 年度）、池田みき子（総務班長：令和元～３年度）、當山彬（主事：平成 29 ～令和２年度）、石原昌一郎（主任：令和３年度）
調査総括　仲座久宜(調査班長:平成 29 年度)、中山晋(調査班長：平成 30 ～令和３年度）
調査担当　具志堅清大 (主任：平成 29 ～令和元年度)、南勇輔（専門員:平成 29 年度）、荻堂匠美（専門員:平成 30 ～令和元年度）
調査補助
　史跡・埋蔵文化財調査員
　　平成 29 年度：久場大暉、廣岡凌、根間翔吾
　　平成 30 年度：太田樹也、城間宏次朗、根間翔吾
　　令和元年度：平良悟、波照間紗希、根間翔吾
　　調査協力：我喜屋優真、奥平大貴（平成 29 年度）
整理担当　具志堅清大 (主任：平成 30 ～令和３年度)、照屋匠美（専門員：平成 30 ～令和２年度、主任：令和３年度)、整理協力:亀島慎吾(主任、令和３年度）
整理補助
　史跡・埋蔵文化財調査員
　　令和２年度：我喜屋優真、古堅あゆみ
　埋蔵文化財資料整理員
　　平成 30 年度：玉那覇美野、仲間文香、松田仁美、宮城友香
　　令和元年度：赤嶺雅子、池宮城聡子、市川里恵、伊藤恵美利、狩俣由利、小波津由加里、崎原美智子、島袋久美子、鈴木友璃子、平良貴子、玉那覇美野、知花香織、津多恵、手嶋永子、又吉純子、松田仁美
　　令和２年度：赤嶺雅子、伊藤恵美利、伊禮若奈、小波津由加里、島袋久美子、下地麻利恵、平良貴子、玉城実子、玉那覇美野、富平砂綾子、又吉純子、松田仁美、嶺井幸恵
　　令和３年度：赤嶺雅子、安次嶺沙織、伊藤恵美利、伊禮若奈、小波津由加里、玉那覇美野、又吉純子
　資料整理協力：與儀暁裕（令和２～３年度）、上田麻紀子、上原園子、宮城かの子、津多恵（令和３年度）

業務委託
　発掘調査支援業務委託
　　㈱埋蔵文化財サポートシステム（平成 29 ～令和元年度）
　　平島義孝（調査員：平成 29 ～ 30 年度）、知花一正（調査員：平成 30 年度）、橋本厚司（調査員：平成 30 ～令和元年度）、堤浩一朗（調査補助員：平成 30 年度、調査員：令和元年度）、青木翔太郎（調査補助員：平成 29 年度）、高橋亨（調査補助員：平成 29 ～ 30 年度）、喜屋武志保（調査補助員：平成 30 ～令和元年度）、亀島正（調査補助員：平成 30 ～令和元年度）、上原尚樹（土木施工管理技士:平成 29 ～ 30 年度)、新垣桂之(土木施工管理技士：令和元年度）

　　㈱イビソク（平成 29 年度）
　　喜多亮輔（調査員）、仲座琢磨（調査補助員）、宗仲航汰（調査補助員）、木村寛之（土木施工管理技士）

　遺物図化委託　㈱埋蔵文化財サポートシステム (令和元年度)
　自然科学分析　パリノ・サーヴェイ㈱（平成 30・令和２～３年度）
　人骨分析　土肥直美（令和２年度）

調査指導及び協力者（所属等は当時）

山野真二郎、原国政大、狩俣雅之、山内健太郎、山本奈央子（沖縄防衛局企画部移設整備課）
真喜志昂、古謝宏行（米陸軍工兵隊日本地区沖縄事務所（OAO））
與那覇政之、ニコラス・チェンバレー、喜友名朝由（在沖米軍海兵隊施設技術部環境保全課）
金城博文、大城友嘉（公益財団法人沖縄県平和記念財団　戦没者遺骨収集情報センター）
吉村純、仲村健、伊藤圭、長濱建起、仲村毅、金城りお、来間千明（宜野湾市教育委員会文化課）
安和吉則、菅原広史、瑞慶覧長順（浦添市教育委員会文化課）
保久盛陽（南風原町教育委員会生涯学習文化課）
上地克哉（読谷村教育委員会文化振興課）
南勇輔（与論町教育委員会事務局生涯学習課）
仲程勝哉（公益財団法人沖縄県文化振興会　公文書管理課）
土肥直美（元琉球大学医学部准教授）、菊池泰弘（佐賀大学医学部）
中西裕見子（大阪府教育委員会）
山田浩世（沖縄県教育庁文化財課史料編集班）
丸山真史（東海大学）

第３節　調査経過

平成 29 ～令和元年度に実施した普天間石川原第一遺跡 (調査面積：8,292 ㎡)、普天間グスクンニ―遺跡 (調査面積：400 ㎡)、普天間下原古墓群 (古墓 29 基、調査面積：5,593 ㎡) の 3 遺跡の発掘調査総面積は 14,285 ㎡ (調査区と古墓が重複する範囲あり)、出土遺物は遺物収納コンテナ 101 箱に及んだ。

発掘調査から資料整理、報告書作成の経過については以下のとおりである。

第１項　発掘調査経過

１　平成 29 年度　(１～４区・古墓群の調査)

県教委と防衛局は「キャンプ瑞慶覧（H29）東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査業務委託（沖縄県）」の契約を平成 29 年 5 月 24 日付で締結した。計画範囲は、樹木が繁茂した状況のため、早期の現場着手を目的として、沖縄防衛局により樹木伐採業務が実施された。樹木伐採に際し、埋蔵文化財及び古墓の石積み等が崩落しないよう慎重な作業が求められることから、発掘調査経験のある業者へ委託された。伐採の進捗状況に応じ現地確認を行った。

発掘調査着手に向け、入域パス取得申請、掘削申請、現場事務所の設置および電気・水道の分岐、高所作業車による撮影許可申請などの米軍への申請手続き、発掘調査支援業務委託の発注などの準備を行った。

また、発掘調査面積が 1000 ㎡を超えることから沖縄県赤土等流出防止条例に基づく届出（平成 29 年 6 月 5 日付埋文第 186 号）、さらに調査面積 3000 ㎡以上でもあるため土壌汚染対策法に基づく届出（平成 29 年 6 月 5 日付け埋文第 185 号）を中部保健所へ行った。

調査準備が整った後、調査に着手した。平成 29 年度は普天間石川原第一遺跡 1 ～ 4 区 (合計 2,900 ㎡)、普天間下原古墓群 (17 基合計：4,000 ㎡) の発掘調査を実施した。

古墓群は当初 11 基の調査予定であったが、調査により 10 基の古墓が新たに確認された。新規確認された古墓のうち、厨子亀と人骨を含む 4 基については、墓地埋葬法の規定に基づき官報公告を実施し、１年間の公告期

第１表　東普天間住宅地区発掘調査事業行程一覧

項目	平成29	平成30	令和元	令和２	令和３
発掘調査					
資料整理					
報告書刊行					

第２表　普天間石川原第一遺跡調査一覧

調査年度	地区名	調査面積（㎡）	延調査面積（㎡）
H29	1区	540	1,620（３面）
H29	2区	400	800（２面）
H29	3区	550	550（１面）
H29	4区	1,410	4,230（３面）
H30	5区北側	2,570	7,710（３面）
H31	5区南側	1,322	3,966（３面）
H31	6区	1,100	3,300（３面）
H31	7区	400	400（１面）
合計		8,292	22,576

第３表　普天間グスクンニー遺跡調査一覧

調査年度	地区名	調査面積（㎡）
H30	5区北側	400

第４表　普天間下原古墓群調査一覧

調査年度	墓数	調査面積（㎡）
H29	17基	4,000
H30	12基	1,593
合計		5,593

※普天間石川原第一遺跡と重複範囲あり。

間終了後の平成 30 年度以降に発掘調査を行うこととなり、平成 29 年度は 17 基の調査を実施した。

さらに、調査中の古墓（19 号墓）の墓庭より壕跡と戦没者遺骨が検出され、沖縄警察署、在日米海軍犯罪捜査局（NCIS）、宜野湾市環境福祉総務課、戦没者遺骨収集情報センター等と調整を行い、記録後に取り上げを行った。

調査は平成 29 年８月 23 日から平成 30 年３月 14 日まで実施した。調査着手後は９月６日付で県教育長あてに文化財保護法第 99 条第１項の規定による発掘調査着手の報告を行い、調査終了後は、平成 30 年３月 15 日付埋文第 674 号にて終了報告を行った。出土遺物は遺物収納コンテナ 65 箱に及び、平成 30 年３月 15 日付埋文第 673 号にて、文化財課長を経由し、平成 30 年３月 29 日付教文第 1711 号で県教育長より宜野湾警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行った。

なお、現地作業は発掘調査支援業務として当センターの監理のもと、１・３・４区は株式会社埋蔵文化財サポートシステム、２区、古墓群は株式会社イビソクが実施した。以下、調査の進捗について調査日誌をもとに記す。

１・３・４区

平成 29 年

８月：10 日から測量及び現場事務所周辺の環境整備を行う。18 日に磁気探査を実施し安全を確認後、23 日から１区の表土掘削着手。

９月：12 日で１区の表土掘削完了。１区東側でグスク時代の堆積層（Ⅲ層）を確認する。平面の精査を行い、近世～近代の溝状遺構、植栽痕とみられるピット群を確認する。28 日に１区の遺構検出状況（１面目）の空撮。また、１区の調査に並行して３・４区の表土掘削を進めた。なお、台風 18 号接近（９月 13 日～ 15 日）に伴い台風対策を実施。

10 月：１区はピット群・溝状遺構の掘削と記録作業、完掘作業を進める。13 日に１区の遺構完掘状況（１面目）の空撮。18 日には１区東壁沿いにサブトレンチを掘削しⅢ層中に石列（SS1001・1002）を確認。周辺より青磁やカムィヤキが出土。石列の図化・記録後、31 日よりⅢ層の重機掘削着手。３区の表土掘削は 23 日に完了、26 日より遺構検出作業を実施。なお、台風 22 号接近（10 月 27 日）に伴い台風対策を実施。

11 月：１区はⅢ層を掘削し、Ⅳ層および地山上面でグスク時代の炉跡（SL1001）や溝状遺構などを確認。７日には１区の遺構検出状況（２面目）の空撮。８日から溝状遺構・炉跡（SL1001）の掘削と記録作業を進めた。16 日に１区の遺構完掘状況（２面目）と３区の遺構検出状況の空撮。17 日からは１区の貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）を人力掘削し、土器や石器が出土。その後、重機によりⅤ層（地山面）の谷地形を検出し、29 日に完掘状況の写真撮影。３区は 21 日から遺構掘削着手。４区は表土掘削中にⅡ層上面で近代の石列状遺構が検出され、27 日に記録作業を実施。

12 月：１区は５日に記録作業を終え調査完了。３区は６日に３区の遺構完掘状況の空撮を実施。11 日に記録作業を終え調査完了。４区は表土掘削を継続して行う。調査区西側は表土が厚く堆積し、磁気探査（経層探査）を行いながらの掘削のため時間を要し、地表下３メートルまで達した。重機掘削が完了した箇所から壁面成形・遺構検出作業を実施。22 日には埋没した古墓（26 号墓）を新規確認。27 日には表土掘削が完了。26 号墓の検出写真を撮影し、年内の作業を終了した。

平成 30 年

１月：９日より調査再開する。４区の精査を行い、調査区中央にグスク時代の堆積層（Ⅲ層）の広がりと、グスク時代および近世～近代の遺構を確認。18 日に４区の遺構検出状況（１面目）を空撮。その後遺構の半截・記録作業を進めた。24 日に 26 号墓北西側より新規古墓（31 号墓）を確認。墓室内の厨子甕内に人骨を確認したため作業中断。

２月：２日に４区の遺構完掘状況（１面目）を空撮。埋没谷部に堆積するⅢ層を重機掘削後、Ⅳ層上面でグスク時代の遺構を確認。13 日にはⅣ層上面及び地山面の遺構検出状況の撮影。16 日には完掘状況の写真撮影。19 日からは埋没谷部の人力掘削作業を行い、谷底部（SX4001）の上面よりくびれ平底土器、下部からは貝塚時代の土器と石器が出土。23 日に東壁の写真撮影。

３月：１日に４区埋没谷部（SX4001）を完掘し、完掘状況の写真撮影。５日には地山確認の掘削作業を行い、岩盤を検出。６日に４区の記録作業を終え、すべての調査完了。９日には現場撤収をもって調査完了となった。

２区・古墓群

平成 29 年

８月：21 日より古墓群南地区（１～３号墓）から伐採作業開始。23 日に磁気探査を実施。24 日から重機による表土掘削着手。29 日に１・２号墓の墓口を検出し表土掘削完了。

９月：11 日に１・２号墓の墓口閉塞石の一部と石積み

検出。石積みの記録後、墓室内の掘削に着手する。21 日に１号墓墓室内より人骨の破片が出土。北地区は６日から伐採及び除草作業に着手。台風 18 号接近（9 月 13 日～ 15 日）に伴い台風対策を実施。

10 月：４日に１～３号墓の完掘状況写真撮影。５日から３号墓の重機による断割及び確認トレンチ掘削。10 日に３号墓南西側に新規古墓（後に 32・33 号墓とする）を検出。32 号墓の厨子甕内に人骨を確認したため作業を中止。19 日で南地区の古墓調査完了。北地区の古墓は伐採作業と並行して磁気探査、重機掘削、検出作業を実施。26 日に 16 号墓の検出写真撮影。台風 22 号接近（10 月 27 日）に伴い台風対策を実施。

11 月：検出作業を完了した古墓から写真撮影・記録作業を進める。６日に 19 号墓、16 日に５号墓、30 日に４号墓の検出写真撮影。

12 月：５日に５号墓の墓庭入口から４号墓付近まで延びる石積みを新規確認。７日に 16 号墓南側で新規古墓（24 号墓）、20 日に新規古墓（25 号墓）を確認、25 号墓からは銭貨が６枚出土。21 ～ 22・25 日に７～９号墓の検出写真撮影。26 日には北地区全体の古墓検出状況の空撮。２区は１日に磁気探査着手。11 日から表土掘削に着手しグスク時代の包含層（Ⅲ層）の堆積を確認。27 日に環境整備等を行い、年内の作業を終了した。

平成 30 年

１月：９日より調査再開する。古墓はトレンチ掘削を行う。正面の漆喰・モルタル剥がしを行い、石積みの構造を記録する。11 日に２区南壁で新規古墓（27 号墓）の厨子甕内より人骨を確認し調査を中止する。９号墓北隣の新規確認古墓を 28 号墓とする。15 日に 28 号墓の検出写真撮影。７号墓南東側に新規古墓（29・30 号墓）を確認。16 日には 19 号墓の墓庭トレンチより戦没者とみられる人骨を検出。29 日に土肥直美氏に出土人骨の現場指導。

２区は 11 日からⅢ層上面の遺構検出作業を行うも遺構は確認できず。18 日にⅢ層上面検出状況の写真撮影。その後Ⅲ層の掘削作業を行い、Ⅳ層上面でグスク時代の遺構を確認する。24 日に重機掘削が完了し、25 日に遺構検出状況（１面目）を空撮。地山面で近世～近代の溝状遺構と石積み、Ⅳ層上面でグスク時代の溝状遺構、鍬跡を確認。

２月：古墓は重機による断割と確認トレンチ掘削・記録作業を進める。23 日には 19 号墓墓庭の壕跡を完掘。26 日には新規古墓（29・30 号墓）完掘。

２区は１面目の遺構掘削を進め、グスク時代の溝状遺構（SD2001）より青磁や土器、獣骨などの遺物が多く出土。９日に遺構完掘状況（１面目）を空撮。その後にⅣ層掘削を行い、Ⅳ－２層より貝塚時代の土器とともに集石遺構（SS2002・2003）を確認する。22 日に遺構完掘状況（２面目）の空撮。28 日より下層確認のトレンチ掘削を実施。

３月：14 日に２区の記録作業を終え、すべての調査完了。15 日には現場撤収をもって調査完了となった。20 日付で沖縄防衛局へ調査完了報告。

２　平成 30 年度
（５区北側、追加古墓・官報公告古墓の調査）

県教委と防衛局はキャンプ瑞慶覧（H30）東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査業務委託（沖縄県）の契約を平成 30 年５月７日付で締結した。

埋蔵文化財センターは、当初は調査区５～７区 (合計 5,700 ㎡) の調査予定であったが、沖縄防衛局による造成工事範囲の拡大に伴い、範囲内にある古墓群の追加調査が必要となった。そのため、計画を変更して平成 30 年度は調査区５区北側（１・２地点）と古墓の追加調査を優先的に行い、５区南側（３地点）と６・７区は翌年度に調査を行うこととなった。また、平成 29 年度に実施した官報公告が終了した古墓群の調査も行った。最終的に、平成 30 年度は普天間石川原第一遺跡５区北側と普天間グスクンニー遺跡の範囲（合計 2970 ㎡）、造成拡張に伴う追加古墓・官報公告の古墓（12 基合計：1,593 ㎡）の調査となった。文化財調査が完了した箇所から部分現場引き渡しを行った。

沖縄県赤土等流出防止条例や土壌汚染対策法に基づく届出は、沖縄防衛局により文化財調査範囲を含む工事範囲での届出がなされたため、平成 30 年度以降は、文化財調査に伴う届出は行っていない。

調査は平成 30 年７月 17 日から平成 31 年３月４日まで実施した。着手後は、文化財保護法第 99 条第１項の規定による着手報告（平成 30 年７月 19 日付埋文第 298 号）、終了報告（平成 31 年３月８日付埋文第 885 号）を行った。出土遺物は遺物収納コンテナ 26 箱に及び、平成 31 年３月８日付埋文第 886 号にて、文化財課長を経由し、平成 31 年３月 15 日付教文第 1839 号で県教育長より宜野湾警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行った。

なお、現地作業は発掘調査支援業務として当センターの監理のもと株式会社埋蔵文化財サポートシステムが実施した。以下、調査の進捗について調査日誌をもとに記す。

平成 30 年

６月：造成工事による磁気探査業務に文化財調査予定箇所も含まれていたため、29 日より磁気探査に伴う掘削の立ち合いを行った。

７月：９日で磁気探査の立ち合いは終了。13 日に工事側の伐採工事により 10・11 号墓が一部毀損。17 日より５区１地点から表土掘削着手。重機二台で行うが２地点西側谷部の表土層は厚く、経層探査を行ながらの掘削のためかなりの時間を要する。

８月：５区１地点の表土掘削が完了したところから遺構検出作業を進める。グスク時代の溝状遺構や近世～近代の溝状遺構・窯跡を確認する。31 日にはⅣ層より上半部が残る縄文土器が出土。台風 14 号接近（８月 10 日）に伴い、台風対策を実施。

９月：７日に官報公告中の 31 号墓内の厨子甕毀損を確認。27 日で表土掘削完了。５区２地点西側の谷底部分は表土が深く堆積し、5.5 メートル（経層探査 10 回実施）に達した。台風 24 号接近（９月 28 日）に伴い、台風対策を実施。

10 月：９～ 11 日に５区２地点西側谷部にて新規古墓（34・35 号墓）を確認。26 日に５区１・２地点の遺構検出状況（１面目）を空撮。29 日から造成拡張範囲内古墓の検出作業着手。台風 25 号接近（10 月４日）に伴い、台風対策を実施。

11 月：５区１地点は９日に遺構完掘写真撮影、16 日に１地点の大半（342 ㎡）を先行して現場引き渡し。27 日に５区２地点の遺構完掘状況（１面目の空撮。28 日より５区２地点Ⅲ層サブトレンチの掘削を行い、Ⅲ・Ⅳ層の堆積状況を把握。造成拡張範囲内古墓は検出作業を進め、12 日に 21 号墓、14 日に 10 号墓、22 日に 11 号墓を検出写真撮影。29 日に 21 号墓現場引き渡し。官報公告古墓は、32・33 号墓が 11 月 29 日官報公告期間終了。

12 月：５区２地点のⅢ層を掘削し、グスク時代の石列（SS5002・5003）や植栽痕とみられるピット群、炉跡（SL5003 ～ 5005）等をⅣ層上面で検出。21 日に５区２地点の遺構検出状況（２面目）の空撮。官報公告古墓は、３日より 32・33 号墓の調査着手。台風や大雨により墓室内に土砂が入りこみ厨子甕が倒れている。27 日に現場の環境整備等を行い、年内の作業を終了した。

平成 31 年

１月：18 日に５区２地点の遺構完掘状況（２面目）の空撮。その後ベルトの記録作業を行い、ベルトにかかるピット群の調査にかかる。30 日にベルト下のピット群完掘。造成拡張範囲内古墓はすべての記録作業を終え、18 日付で現場引き渡し。官報公告古墓は、32・33 号墓は 21 日に完掘写真撮影、29 日に現場引き渡し。18 日に土肥直美先生により出土人骨の現場指導。

２月：Ⅳ層の掘削を行う。Ⅳ－２層中より集石遺構（SS5004）を確認する。７日に５区２地点の遺構検出状況（３面目）の空撮。谷部のⅣ層を人力掘削し、貝塚時代の土器が出土。26 日に５区２地点の遺構完掘状況（３面目）の空撮。28 日に５区北側の現場引き渡し。官報公告古墓は、27 号墓が２月１日官報公告期間終了し４日より調査着手。墓室内に厨子甕４基確認。19 日に完掘状況写真撮影、28 日に現場引き渡し。31 号墓は２月 19 日官報公告期間終了。20 日より調査着手。31 号墓東隣に新規古墓（36 号墓）を確認。27 日に完掘写真撮影。26 日に土肥直美先生により出土人骨の現場指導。

３月：４日に 31・36 号墓の記録作業を終え、すべての調査完了。４日付で沖縄防衛局へ調査完了報告。８日には現場撤収をもって調査完了となった。

３　令和元（平成 31）年度
（５区南側、６・７区の調査）

県教委と防衛局はキャンプ瑞慶覧（H31）東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査業務委託（沖縄県）の契約を平成 31 年４月 25 日付で締結した。

埋蔵文化財センターは、調査区５区南側と６・７区 (合計 2,822 ㎡) の発掘調査を令和元年７月１日から令和元年 12 月 13 日まで実施した。着手後は、文化財保護法第 99 条第１項の規定による着手報告（令和元年７月 10 日付埋文第 342 号）、終了報告（令和元年 12 月 13 日付埋文第 715 号）を行った。出土遺物は遺物収納コンテナ 10 箱に及び、令和元年 12 月 17 日付埋文第 721 号にて、文化財課長を経由し、令和元年 12 月 24 日付教文第 1325 号で県教育長より宜野湾警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行った。

なお、現地作業は発掘調査支援業務として当センターの監理のもと株式会社埋蔵文化財サポートシステムが実施した。以下、調査の進捗について調査日誌をもとに記す。

令和元年

７月：１日より測量作業開始。10 日から７区の表土掘削に着手し、５区の表土掘削も並行して行った。22 日には７区の表土掘削完了。26 日に７区の遺構検出状況の空撮。グスク時代の柱穴を確認。台風５号接近（７月 18 ～ 19 日）に伴い、台風対策を実施。

８月：５区南側の表土掘削が完了した箇所から遺構検出作業を行う。５区南側の表土掘削は 28 日に完了し、29 日に５区南側の遺構検出状況（１面目）及び７区の遺構完掘状況の空撮。６区は 28 日に表土掘削着手。台風８号接近（８月２日）・台風 10 号接近（８月９日）に伴い、台風対策を実施。

９月：２日で７区の調査完了。11 日に６区の表土掘削完了。12 日に５区近世～近代の道跡（SF5001）の検出写真撮影。25 日に５区の南側遺構完掘状況（１面目）の空撮。台風 13 号接近（９月５～６日）・台風 17 号接近（９月 20 日）に伴い、台風対策を実施。

10 月：５区南側はⅢ層を掘削し、Ⅳ層上面でグスク時代の植栽痕とみられるピット列を検出する。６区は近世～近代の溝状遺構と調査区中央でⅢ層の堆積を確認する。９日に５区南側の遺構検出状況（２面目）、６区の遺構検出状況（１面目）の空撮。25 日に６区遺構完掘状況（１面目）の空撮。28 日から６区のⅢ層サブトレンチを掘削し、下層確認を行った後に重機によりⅢ層を掘り下げ、Ⅳ層上面でピットを検出。

11 月：６日に５区南側の遺構完掘状況（２面目）、６区の遺構検出状況（２面目）の空撮。７日より５区南側のⅣ層を掘削する。15 日に６区の遺構完掘状況（２面目）の空撮。20 日に６区谷部Ⅳ層の掘削を行い、貝塚時代の土器や石器などの遺物が集中して出土する。27 日に５区南側のⅣ層を完掘し、完掘状況（３面目）を空撮。

12 月：６区はⅣ層を完掘し、谷地形を検出する。４日に６区の完掘状況（３面目）の空撮。13 日に記録作業を終え、すべての調査完了。13 日付で沖縄防衛局へ調査完了報告。19 日には現場撤収をもって調査完了となった。

第２項　資料整理経過

発掘調査終了後、遺構図面や写真・台帳の整理は調査終了後速やかに実施した。

出土遺物の整理作業は、平成 30 年度より洗浄から始め、注記等を中心に進めた。続いて遺物の分類、接合作業、実測用遺物の抜き出しを行い、実測図の作成、トレース、写真撮影等を行った。また、出土遺物及びサンプリングした土壌の自然科学分析を委託した。

これらの作業と並行して、原稿執筆や遺構図等のトレースを進め、発掘現場で撮影した写真と併せて報告書全体のレイアウトを完成させた。その後、印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行した。

以下、資料整理作業の進捗について下記に記す。

平成 30 年度：平成 29 年度調査遺物の洗浄、注記など基礎的な整理作業を実施した。

令和元年度：平成 29 年度調査の遺構図のトレース、平成 29 年度調査古墓出土遺物の分類、実測用遺物の抜き出し、実測図の作成などを進めた。また、厨子甕内納骨状況の図化業務委託を実施した。

令和２年度：県教委と防衛局はキャンプ瑞慶覧（R2）東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査業務委託（沖縄県）の契約を令和２年４月 24 日付で締結した。

遺構図のトレースは表現等の調整を行った。出土遺物は分類・実測・トレース・写真撮影などを進めた。厨子甕の実測に際しては遺物実測支援システム (Cubic 社製遺物くん) を賃借し、３Ｄモデルから展開画像を利用して実測・作成しトレースを行った。また近代磁器、ガラス製品など正射投影画像を作成して実測図へのはめ込みを行ったものもある。

また、出土人骨の分析や土壌の自然科学分析の委託を実施した。

令和３年度：県教委と防衛局はキャンプ瑞慶覧（R3）東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査業務委託（沖縄県）の契約を令和３年３月 31 日付で締結した。

出土遺物の実測・トレース・写真撮影を進めた。遺構・遺物実測図や写真・文字原稿は DTP ソフト (インデザイン) により報告書のレイアウトを行った。

第３項　包蔵地範囲及び名称の変更

平成 29 年度から令和元年度に東普天間住宅地区の記録保存調査を実施した結果、普天間石川原第一遺跡（旧名称：普天間石川原遺跡）・普天間下原古墓群の包蔵地範囲について、調査前に把握されていた範囲より拡がることが判明した。

また普天間石川原第一遺跡の南側については、既に海軍病院地区で記録保存調査が行われ調査報告されているが（沖縄県埋文 2015b）、包蔵地範囲の変更に関する調整は行われなかったため、令和元年度に宜野湾市教育委員会が刊行した「宜野湾市文化財情報図〔令和元年度版〕（宜野湾市教委 2020）」に海軍病院地区の調査成果が反映されなかった。

上記のような経緯があったため、令和２年度に県文化財課と宜野湾市教委によって東普天間住宅地区と海軍病院地区の調査成果を踏まえた包蔵地範囲の変更に関する調整が行われた。

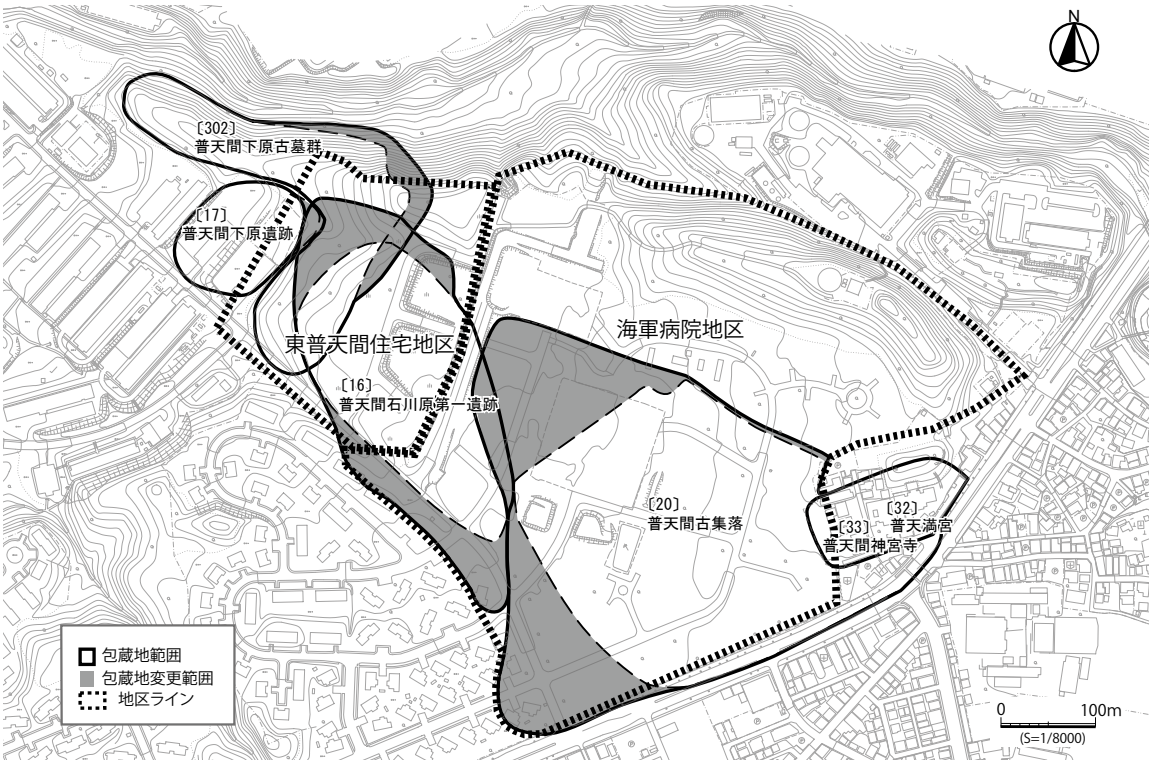
遺跡範囲の変更に合わせて、遺跡名称の変更についても調整が行われた。東普天間住宅地区および海軍病院地区の発掘調査では普天間石川原遺跡（旧名称）として調査を行ったが、隣接する西普天間住宅地区で普天間石川原第二遺跡が確認されたことに伴い、普天間石川原第一遺跡（新名称）として変更することとなった。

さらに、普天間古集落遺跡（旧名称）も宜野湾市内における古集落の名称にあわせて、普天間古集落（新名称）に変更されることとなった。そのため、海軍病院地区の調査報告（沖縄県埋文 2015a・b、2016、2017、宜野湾市教委 2016、2017）における遺跡名称は旧名称であることを留意されたい。

変更された包蔵地範囲および遺跡名称については第 1 図・第 5 表に示す。普天間石川原第一遺跡は、今回の調査で北側部分は埋没谷地形が連なり遺構や包含層が広がることが判明し、南側の海軍病院地区調査の範囲を含めると、遺跡範囲は南北に広がる。これに伴い、隣接する普天間下原遺跡の東側は縮小する。普天間下原古墓群は新規古墓の発見に伴い、範囲は東側に広がることが判明した。なお、今回の調査対象ではないが、普天間古集落は、範囲外で集落に関連する遺構が確認されたことから、当時の集落と考えられる範囲に変更された。

第 5 表　包蔵地範囲及び遺跡名称変更一覧

遺跡名称	変更後名称	範囲
普天間石川原遺跡	**普天間石川原第一遺跡**	16,645㎡増
普天間下原古墓群	―	4,847㎡増
普天間下原遺跡	―	739㎡減
普天間古集落遺跡	**普天間古集落**	39,628㎡増



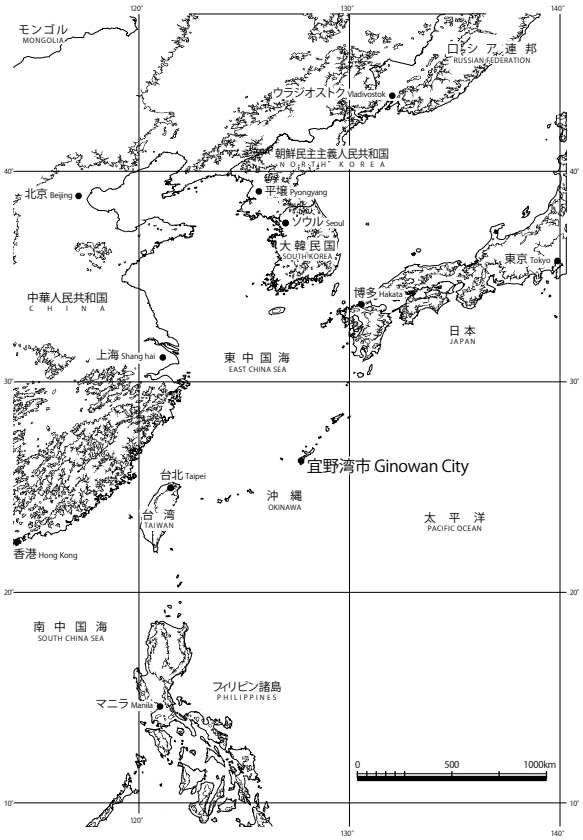
第１図　包蔵地変更範囲図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島那覇市から北に 12km の地点にあり、北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南は西原町、南は浦添市に隣接し、西は東シナ海に面している。総面積は 19.80 ㎢で、東西に約 6.1 ㎞、南北に約 5.3 ㎞とやや長方形をなしている。宜野湾市内にはキャンプ瑞慶覧（1.0 ㎢）、普天間飛行場（4.7 ㎢）が所在し、市域の総面積のうち約 29.4％を占める（令和２年度宜野湾市統計）。

宜野湾市の地形環境　宜野湾市の地形は、海岸から内陸部に向かって、ひな壇状に大きく４つの石灰岩による海岸段丘が形成されている。宜野湾市域の海岸段丘地形は、第１面は標高 10 m 以下の海岸低地と標高 10 ～ 30m の石灰岩段丘（低位段丘下位面）からなり、第２面は標高 30 ～ 40m の低位段丘上位面、第３面は標高 50 ～ 90m の中位段丘下位面、第４面は標高 90m 以上の中位段丘上位面となる（宜野湾市教委 2000・2005）。このうち、第３面とした中位段丘下位面（以下、第３面段丘）は、宜野湾市で最も広い地形面であり、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場が位置する一帯である。



第２図　沖縄県宜野湾市の位置図

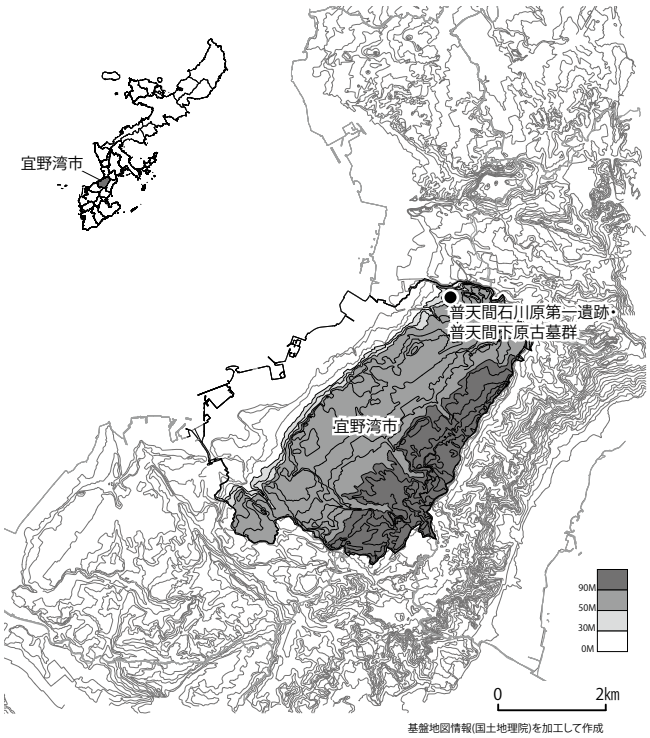
東普天間住宅地区はキャンプ瑞慶覧の南側に位置し、宜野湾市字普天間に所在する。普天間は宜野湾市の北東側にあり、地形的には第３面段丘に位置する。北側にはフィールーやグスクンニーと呼ばれる丘陵があり、その後背には普天間川が流れている。

遺跡の位置　東普天間住宅地区内に所在する遺跡は、北側に標高約 57 m のグスクンニーとよばれる石灰岩丘陵があり、普天間グスクンニー遺跡が広がる。その南側の標高約 46 ～ 53 m の台地上には、普天間石川原第一遺跡が所在する。西側は標高 28 ～ 57m の丘陵斜面地と谷地形となっており、この地形を利用した普天間下原古墓群が所在している。

遺跡周辺の地形環境　第３面段丘を構成する琉球石灰岩の下位は、泥岩などから成る島尻層群が基盤となっている。土壌は島尻マージが琉球石灰岩台地を覆っている。

琉球石灰岩は透水性が高いため雨水や地下水は地中へ浸透し、下層の不透水層である島尻層との境界から湧水として湧き出すとともに、雨水や地下水は琉球石灰岩を溶かすことにより鍾乳洞やくぼ地が形成され、カルスト地形が発達している。第３面段丘には洞穴が点在し、普天間には普天満宮洞穴や下原洞穴などがある。また段丘崖には、普天間シチャヌカー古湧泉が存在している。

第３面段丘の旧地形は、普天間飛行場やキャンプ瑞慶覧の文化財調査によって、平坦面やくぼ地が分布する起伏に富んだ地形であったことが確認されている。遺跡形成にともなう土地改変や戦後の開発行為により改変され旧地形は変容している（宜野湾市教委 2005）。



第３図　宜野湾市の地形と遺跡の位置

第２節　歴史的環境

周辺の遺跡　字普天間における遺跡の様相として、隣接する海軍病院建設に伴う発掘調査では、貝塚時代以降の遺跡形成・土地利用の変遷が伺える（沖縄県埋文 2015a・b、2016、2017、宜野湾市教委 2016、2017）。

貝塚時代の様相として、普天間グスクンニー遺跡や普天間下原第二遺跡、普天間後原第二遺跡が広がる範囲を中心に貝塚時代前期相当の竪穴住居跡や落とし穴の可能性がある大型土坑、溝状落ち込み遺構が検出されている。

グスク時代になると、フィールー丘陵南側の普天間後原第二遺跡の範囲を中心に、掘立柱建物跡群が多数検出され、喜界島城久遺跡群にみられる大型建物や母屋、倉庫といった建物の向きが地形に沿うかたちで揃っている。建物周辺には植栽痕とみられるピット群や耕作との関連が窺える遺構が確認され、グスク時代の集落における建物配置とその様相が窺える。

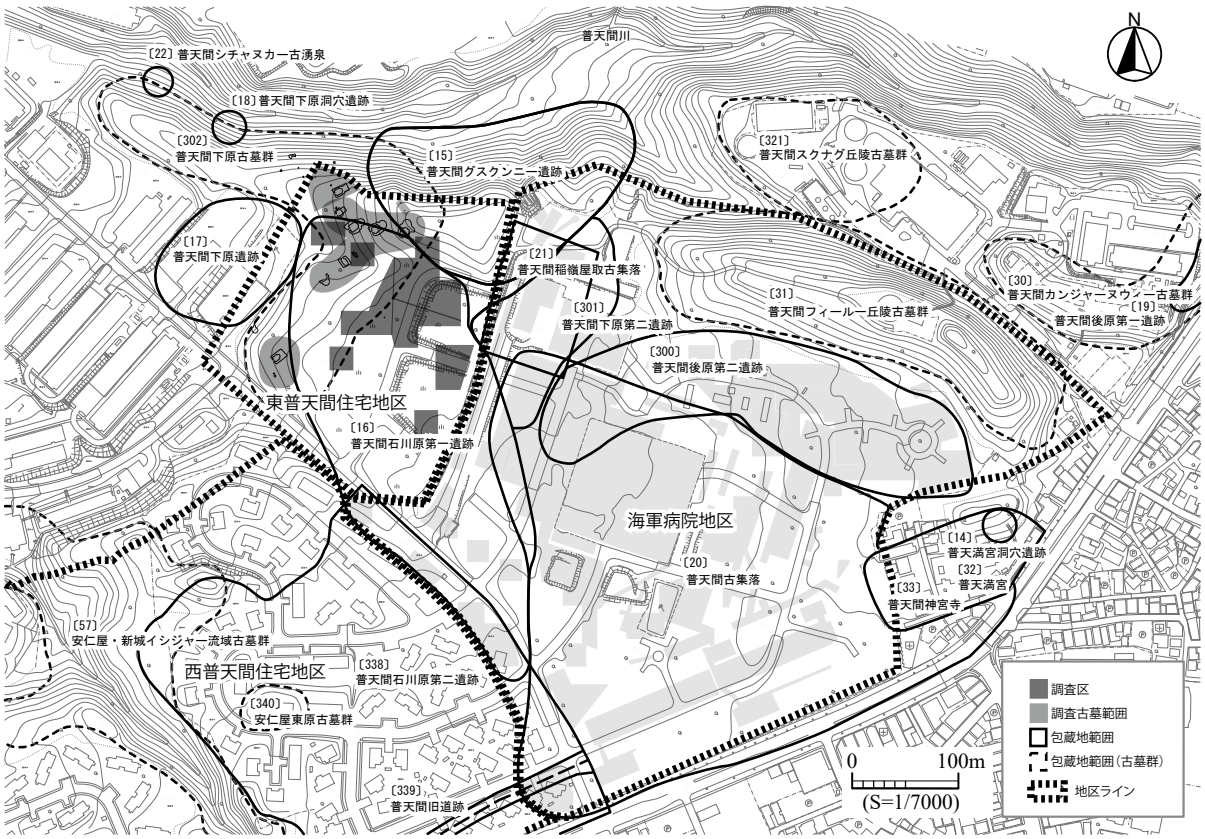
近世～近代では、普天間の集落に関連する遺構が普天間古集落の範囲全体で検出された。集落の屋敷地や耕作地を碁盤目状に区画する溝・道が連結するかたちで検出されており、1945 年に撮影された航空写真・戦前の屋号図と概ね一致する。道跡は、普天間旧道（ティラヌメー）とよばれる集落の中心部・普天満宮前を通る主要な幹線道路を中心に集落内の支道、農道が確認されている。

普天間古集落の大きな調査成果として、屋敷地はすべて石垣や盛土をめぐらしたわけではなく、溝により区画されていたことが挙げられる。また溝付近は遺構が少なく、戦前の空中写真で見るような屋敷林の存在が指摘できる（沖縄県埋文 2019）。

普天間古集落の北側にはフィールー丘陵があり、集落の墓域と考えられる普天間フィールー丘陵古墓群が所在し、旧集落の根屋の神墓があるとされる（宜野湾市教委 2011）。普天間古集落の北西側には普天間稲嶺屋取古集落跡がある。集落東側には普天満宮および普天間神宮寺、普天満宮洞穴遺跡が所在している。

また、東普天間住宅地区の南西側には返還跡地である西普天間住宅地区が所在する。跡地利用計画に係る開発工事に対応するために文化財調査が実施され、普天間石川原第二遺跡や普天間旧道跡をはじめ、台地上や丘陵斜面において貝塚時代やグスク時代の遺跡、近世～近代の集落に係る遺構や古墓などが確認されている（沖縄県埋文 2018、宜野湾市教委 2019）。

西普天間住宅地区の南側から県道 81 号線にかかる範囲には喜友名貝塚や喜友名グスクが広がる。さらに周辺に目を配ると、下位の石灰岩段丘や海岸低地には、伊佐前原第一遺跡、安仁屋トゥンヤマ遺跡、新城下原第二遺跡などの遺跡が所在している。



第４図　キャンプ瑞慶覧内の包蔵地範囲図

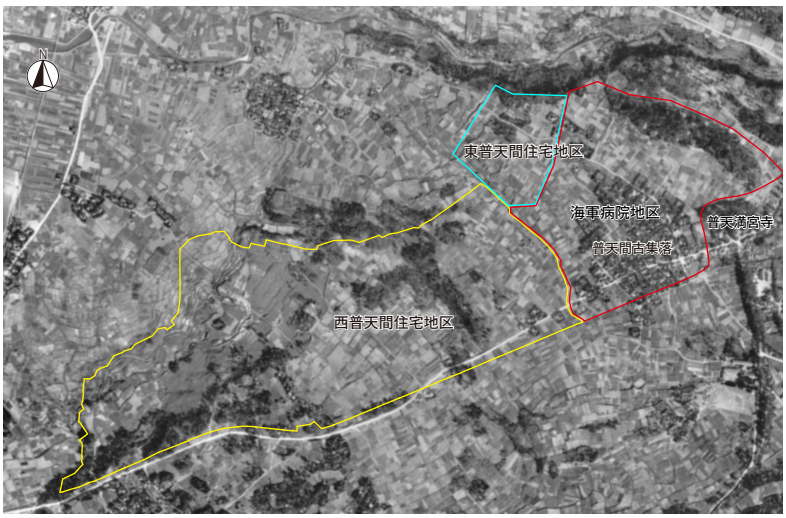
歴史事象　普天間は、当初は中城間切であったが、1671 年（康熙 10 年）に宜野湾間切を新設する際に宜野湾間切に編入された。文献『絵図郷村帳』には「寺ふてま村」の名があり、普天間には琉球八社の一つである普天満宮及び神宮寺が所在し、古くから集落の中心であった。琉球王国時代には国王も普天満宮を参詣する行事があり、参道の松並木（宜野湾並松）は 1932 年に国の天然記念物に指定された。古い集落は現在の普天間小学校付近と普天満宮西側にあったとされている。

戦前の普天間には、中頭地方事務所、中頭教育会館、農事試験場、郵便局等の官公庁が多くあった。そして首里・那覇方面と中北部を結ぶ普天間街道（宜野湾並松街道）や中城村瑞慶覧方面から普天間を通り、伊佐・大山までおりていく県道など、主要地方道路が交差する交通の要所地でもあった。集落内には、サトウキビ運搬のためのトロッコ軌道が敷かれ、沖縄軽便鉄道大山駅への客馬車が往来していた。街道沿いには、客馬車や荷馬車を休ませる馬車宿のほかに商店、旅館、飲食店、写真店等が並び、中部における政治経済の中心地となっていた。

昭和 19 年には普天間部落に賀谷與吉率いる賀谷支隊（独立歩兵第 12 大隊）・球 12909 独立有線 107 中隊・石部隊等が国民学校の校舎や普天間北側のフィール―丘陵に兵舎を作り駐屯した。

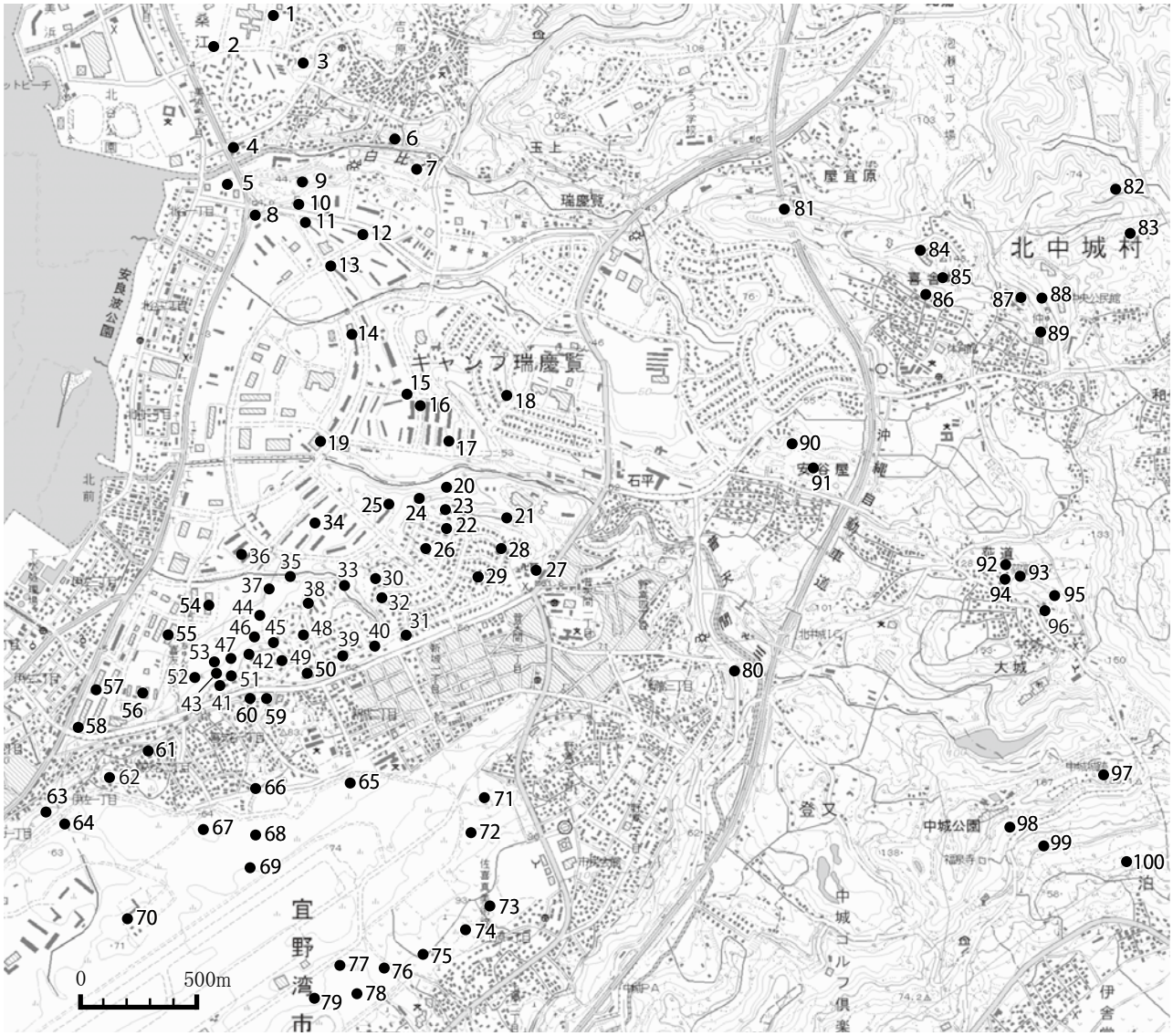
昭和 20 年 4 月 1 日に米軍は上陸するとその日の内に普天間の下原近くまで進撃し、部落民は避難していた普天満宮洞穴（第 1 壕）・普天間第 2 壕、フィール―丘陵の壕・家庭防空壕・墓等から南部方面へ逃げたとされる（宜野湾市 1982）。戦史叢書「沖縄方面陸軍作戦」によると、賀谷支隊の第一中隊は昭和 20 年 4 月 2 日に普天間北側台地で南下する米軍と戦闘したと記録がある（防衛庁 1968）。

戦後はキャンプ瑞慶覧の建設に伴い、集落の北側半分は強制接収された。宜野湾並松も沖縄戦や松食い虫の被害により失われ、旧集落の面影は僅かに普天満宮と神宮寺が残っているだけである。基地接収に伴い、普天間集落は南東側に移動し、戦後復興とともに学校や商店街が建設された。現在の普天間は、那覇と沖縄市を結ぶ国道 330 号と宜野湾市伊佐と北中城村渡口を結ぶ県道 81 号の三叉路を中心として市街地が形成されている。



第 5 図　昭和 20 年の普天間周辺　写真：宜野湾市教育委員会提供

第 6 図　キャンプ瑞慶覧の地区名（平成 24 年撮影）　写真：宜野湾市教育委員会提供



この背景地図データは、国土地理院の電子国土 Web システムから配信されたものである。

1. 伊地差久原古墓
2. 前原古島 B 遺跡
3. 前原古墓群
4. 池グスク
5. 白比川河口遺物散布地
6. 吉原東角双原遺物散布地
7. 山川原古墓群
8. 北谷番所址
9. 北谷城遺跡群
10. 北谷城第７遺跡
11. 塩川原遺跡
12. 玉代勢原遺跡
13. 長老山遺物散布地
14. 東表原遺跡
15. 大道原 A 遺跡
16. 大道原 B 遺跡
17. 大道原 C 遺跡
18. 横嵩原遺跡
19. 稲千原遺跡
20. 普天間グスクンニー遺跡
21. 普天間フィールー丘陵古墓群
22. 普天間下原第二遺跡
23. 普天間稲嶺屋取古集落
24. 普天間下原古墓群
25. 普天間下原遺跡
26. 普天間石川原第一遺跡
27. 普天満宮洞穴遺跡
28. 普天間後原第二遺跡
29. 普天間古集落
30. 普天間石川原第二遺跡
31. 普天間旧道跡
32. 安谷屋東原古墓群
33. イシジャー流域古墓群
34. 安谷屋トゥンヤマ遺跡
35. 新城下原第一遺跡
36. 新城下原第二遺跡
37. 新城上殿遺跡
38. 新城大道原第一遺跡
39. 新城大道原第二遺跡
40. 新城大道原第三遺跡
41. 喜友名山川原第一遺跡
42. 喜友名山川原丘陵古墓群
43. 喜友名山川原第三遺跡
44. 喜友名山川原第四遺跡
45. 喜友名山川原第五遺跡
46. 喜友名山川原第六原遺跡
47. 喜友名山川原第七遺跡
48. 喜友名山川原第八遺跡
49. 喜友名山川原第九遺跡
50. 喜友名山川原第十遺跡
51. 喜友名山川原第二遺跡
52. 喜友名下原第一遺跡
53. 喜友名下原第二遺跡
54. 喜友名下原第三遺跡
55. 伊佐後原第二遺跡
56. 伊佐後原第一遺跡
57. 伊佐前原第二遺跡
58. 伊佐前原第一遺跡
59. 喜友名グスク遺跡
60. 喜友名貝塚
61. 喜友名前原第一遺跡
62. 伊佐上原遺跡Ｅ地点
63. 大山岳之佐久原第三遺跡
64. 大山岳之佐久原第一遺跡
65. 上原濡原遺跡
66. 喜友名東原ヌバタキ遺跡
67. 喜友名前原第三遺跡
68. 喜友名東原第三遺跡
69. 喜友名東原第二遺跡
70. 神山黒数原古墓群
71. 野嵩タマタ原遺跡
72. 新城東原遺跡
73. 上原同原遺跡
74. 上原仲毛遺跡
75. 中原同原遺跡
76. 赤道シキロー流域古墓群
77. 赤道渡呂寒原古墓群
78. 赤道渡呂寒原屋取古集落
79. 赤道渡呂寒原洞穴遺跡
80. 野嵩ウガンヌカタ遺跡
81. ヒニグスク
82. 前田原 B 遺跡
83. 前田原 A 遺跡
84. 甲斐川原遺跡
85. 喜舎場上原遺物散布地
86. 喜舎場御嶽遺物散布地
87. 仲順原貝塚
88. 仲順原遺跡
89. 仲順原遺物散布地
90. 若松遺跡
91. 安谷屋グスク
92. 荻堂貝塚
93. 大城グスク
94. 荻道遺跡
95. ミーグスク
96. 大城遺跡
97. 中城遺跡
98. 泊古島原遺跡
99. 泊古島原散布地
100. 泊原散布地

第７図　周辺の遺跡

第３章　普天間石川原第一遺跡の調査成果

第１節　調査の方法

グリッド設定　グリッドは、キャンプ瑞慶覧海軍病院地区の発掘調査に用いたものを使用した。普天間飛行場内の調査で設定されているグリッドを延長して設定しており、基本座標（X：31,000、Y：26,500　日本測地系）を起点に第Ⅰ区画、第Ⅱ区画、第Ⅲ区画の３段階に分け、第Ⅰ区画を 300 mメッシュ、第Ⅱ区画を 20 mメッシュで区切っている。第Ⅰ区画はキャンプ瑞慶覧の宜野湾市区域をズケ１～ 33 と 33 分割し、第Ⅱ区画は細かく 225 分割し、東から西へＡ１～ A15、北から南へＡ１～ O1 とした。グリッドの名称は、第Ⅰ区画、第Ⅱ区画を組合せ、「ズケ９- Ａ1」等としている。今回調査を実施した範囲の第Ⅰ区画はズケ９・16 である。一方、座標は世界測地系を用いたため、グリッドラインとは別に座標線を併記している。

調査の工程　まず伐採作業を行い、現況測量・調査区の設定後、磁気探査を行った。表層及び掘削深度 50cm 毎に経層探査を実施した。表土掘削は重機により行い、表土及び近世～近代の遺物包含層まで掘削した。

表土掘削後は、作業員の手作業による包含層掘削と遺構検出を行った。なお、グスク時代およびそれ以前の遺物包含層とその下部にある遺構については、適時サブトレンチの壁面により遺構面を確認・把握し、畦を可能な限り残しながら重機と人力掘削により遺構面まで掘り進め、検出面毎に調査を行った。

検出状況の記録後、遺構掘削は人手による半截あるいは畦を残しながら掘削し、土層堆積状況の記録を行った後に完掘を行った。遺構調査に合わせて、下層確認のためのトレンチを調査区中央や壁面沿いに設定し、堆積層の確認を行った。

遺構番号　調査区における遺構番号は、記号は『発掘調査のてびき』のものを便宜的に当てはめ、番号は調査区毎に 1000 番単位で分け、SP1001・SP1002…（調査区１区）、SP2001・SP2002…（調査区２区）等とした。

基本的に遺構と認定したものに番号を付しているが、後の検討により欠番となったものもある。遺跡範囲がまたがる５区では調査の便宜上、普天間グスクンニー遺跡と連続して番号を付した。なお、調査の進捗状況や遺構の情報を把握・共有するために、調査区ごとに遺構台帳を作成し、遺構検出や半截を行った日付や土層の所見、出土遺物などを記載した。

写真撮影　写真撮影はデジタルカメラと 35mm フィルムカメラにより白黒フィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影した。曇天時やピットの撮影時にはストロボを用いた。高所作業車による調査区全景や主要な遺構の写真撮影時には中判フィルムカメラも用いた。令和元年度からは、デジタルカメラの撮影時にグレーカードを写し込み RAW 現像処理による補正を施している。

撮影後のデジタル写真は、必要な写真を選別し、年度・調査区・遺構・撮影内容ごとにフォルダ整理を行い、当センターのデータ保管用ＮＡＳへ保存した。フィルム写真は、現像・焼付けは業者へ依頼し、アルバム整理と台帳作成を行った。なお、本報告書ではデジタルカメラによる写真を使用している。

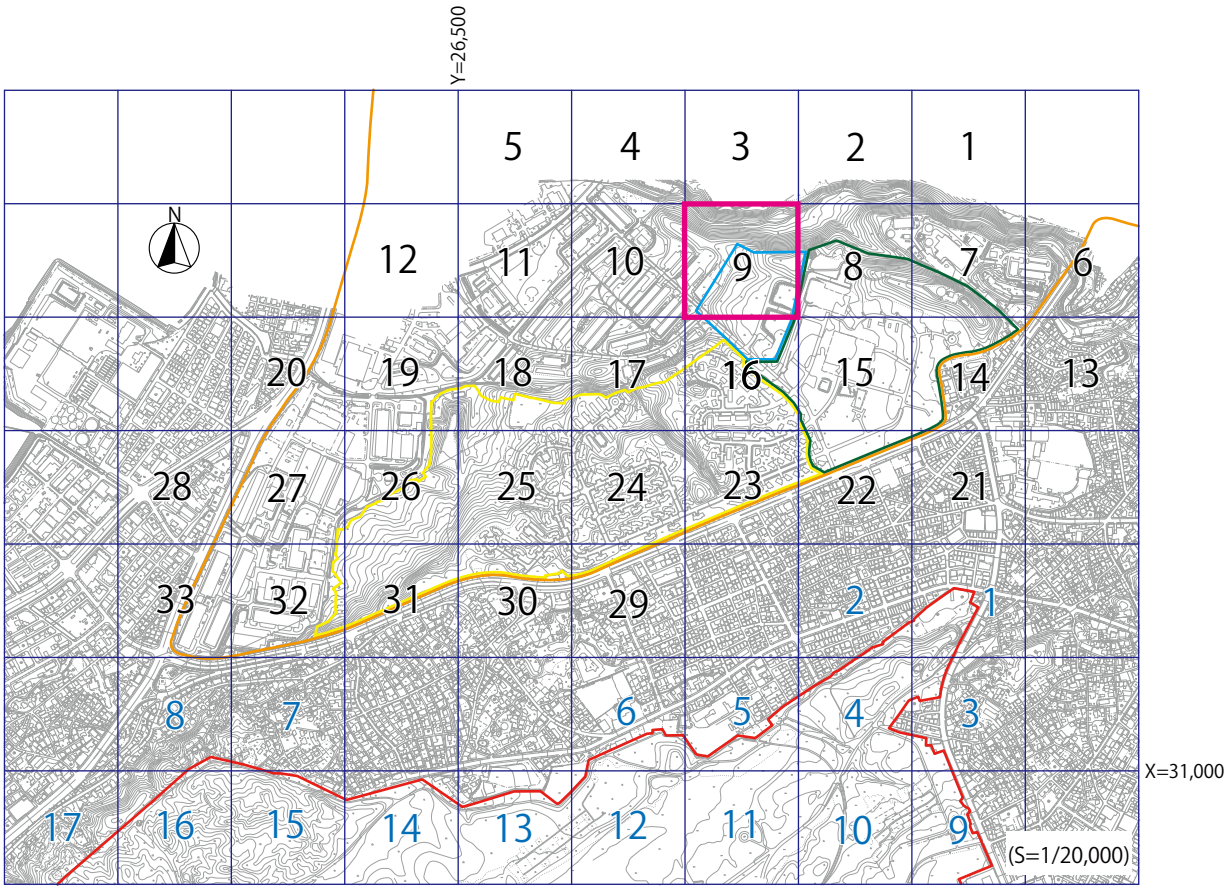
実測　現場での実測作業については、当センター職員の監理のもと、支援業者である株式会社埋蔵文化財サポートシステム・株式会社イビソクが行い、現地で確認・指示を行った。平面図作成は測量機器を用いて行い、断面図作成は人手により行った。効率が良いと考えられる場合は写真測量も実施した。現場で人手により実測した断面図や壁面図等は、確認・修正後にイラストレーターによりトレースを行った。

遺物注記　遺物の注記は､「東フテ･○区･グリッド･遺構･層名」とした。普天間グスクンニー遺跡とは区別している。

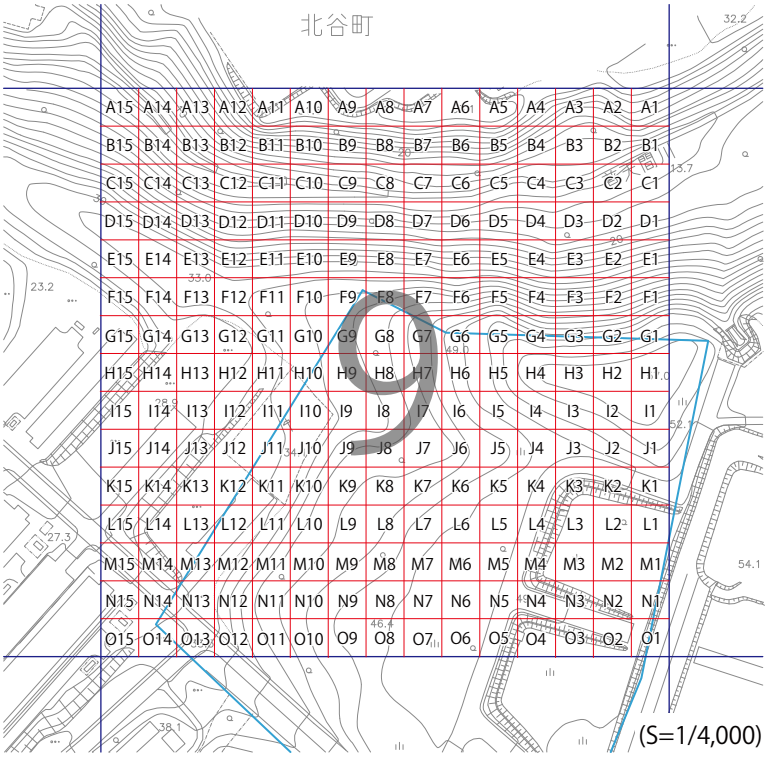
自然科学分析　考古学的手法では得られない科学的なデータを得ることを目的として自然科学分析を行った。

遺構や包含層の年代について検討するため、代表的な遺構や包含層を現地でサンプリングし、放射性炭素年代測定を実施した。

また､遺構や包含層の埋土に含まれる微細物について、細かい同定・分析作業を行い、遺構の性格や当時の植生など古環境についても検討した。



第Ⅰ区画（300mグリッド）



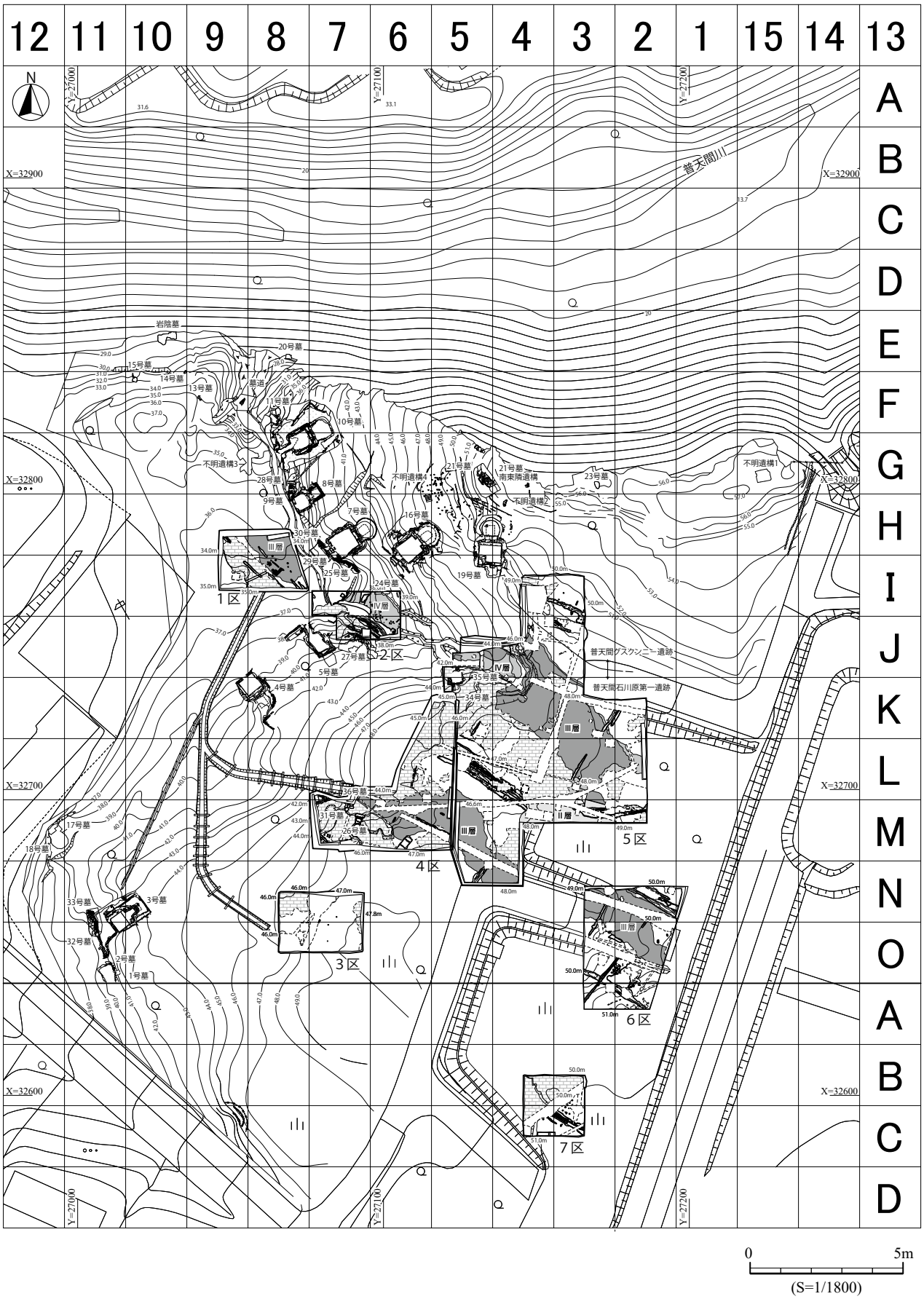
凡　例

- 海軍病院地区
- 西普天間住宅地区
- 東普天間住宅地区
- キャンプ瑞慶覧
- 普天間飛行場

黒字：キャンプ瑞慶覧グリッド番号
青字：普天間飛行場グリッド番号

第Ⅱ区画（20mグリッド）

第８図　グリッド設定図



第９図　調査区位置・グリッド配置図

第２節　基本層序

基本層序は、隣接するキャンプ瑞慶覧内の海軍病院地区と西普天間住宅地区の基本層序（沖縄県埋文 2015、2017、2018）に基づくものでⅠ～Ⅵ層に分けられる。

本調査では、調査区をまたがって広がる埋没した谷地形を２つ確認している。それぞれ埋没谷１と埋没谷２とする。埋没谷１・２には遺物包含層（Ⅱ～Ⅳ層）が堆積し、貝塚時代からグスク時代、近世～近代に到る一帯の遺跡形成・土地利用の過程で埋没していったと考えられる。

埋没谷１は５区北側から２区、１区へ北西方向に伸びるもので、最終的には北側の古墓群が所在する谷地形に合流する。埋没谷２は、６区から５区南側、４区へ西側に伸びる。埋没谷１が規模は大きく、遺物包含層の堆積も厚く、遺物の出土も多い傾向にある。

なお、各調査区の基本層序対応関係は第６表に示す。

層序

Ⅰ層　表土。米軍接収以後の造成層も含まれる。

Ⅱ層　褐色（10YR 4/6）主体のシルト～極細砂層。近世～近代の耕作土及び米軍接収以前の地表面と思われる。近世～近代の遺物を包含し、沖縄産陶器を中心として、本土産陶磁器、中国産陶磁器等を含む。この層中、又はⅤ層（島尻マージ）及びⅢ層との境に近世～近代の遺構が確認できる。

Ⅲ層　暗褐色（10YR 3/4）主体のシルト～極細砂層。グスク時代相当の堆積層であり、耕作土と考えられる。グスク土器や青磁、白磁などグスク時代の遺物を包含し、３～５㎜の炭化物、焼土、黄褐色土粒、マンガンを含む。多くは谷地形に分布する。Ⅲ層は数層に細分可能であり、褐色（10YR 4/6）に近い明るめの土層と互層になっている。この層中、又はⅤ層（島尻マージ）及びⅣ層との境にグスク時代の遺構が確認できる。

Ⅳ層　褐色（10YR 4/4）主体のシルト～極細砂層。貝塚時代相当の堆積層。貝塚時代の土器や石器などの遺物を包含し、３～５㎜の炭化物、焼土、マンガンを含む。砂質が強い層と粘質が強い層に分けられる。土の色調や質感からⅣ－１～４層に細分した。Ⅳ－１・２は貝塚時代後期からグスク時代初頭の堆積層と見られ、この層中に集石遺構が確認されている。Ⅳ-３・４は貝塚時代前期～後期の堆積層と思われる。Ⅳ-１～３層は埋没谷１でのみ確認されている。

Ⅳ-１層　褐色（10YR 4/4）のシルト～極細砂層で、砂質が強い。貝塚時代の遺物を含む。埋没谷１（２区および５区北側）に見られる。

Ⅳ-２層　暗褐色（10YR 3/4）シルト～極細砂層で、砂質が強い。貝塚時代の土器や石器とともに、集石遺構が検出された。遺物の出土量も多い傾向にある。埋没谷１（２区および５区北側）に見られる。

Ⅳ-３層　褐色（10YR 4/4）のシルト～極細砂層で、粘質が強く、色調はⅤ層に近いが、土器や石器を含む。埋没谷１（１区、２区、５区北側）にみられる。

Ⅳ-４層　褐色（10YR 4/4）のシルト～極細砂層で、粘質が強く、削った感触やしまりなどの質感はⅤ層にも近いが、Ⅳ-３層やⅤ層と比較すると黒い色調であり、土器や石器を含む。埋没谷１（１区、２区、５区北側）および埋没谷２（４区、５区南側、６区）にみられる。

Ⅴ層　島尻マージの地山。明褐色（7.5YR 5/6）～黄褐色（10YR 5/8）のシルト～極細砂層で、色調のほか粘質や砂質の強弱により数層に分けることができる。全体的にマンガンを含む。基盤の琉球石灰岩に接する箇所はより強粘性で黒味が強く、暗褐色を呈する。

Ⅵ層　琉球石灰岩岩盤。

第６表　普天間石川原第一遺跡（１～７区）　基本層序対応関係

	１区		２区		５区北側		３区	４区		５区南側		６区		７区
	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告		調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
Ⅱ層	Ⅱa～Ⅱb	Ⅱ	Ⅱ-1～4	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱa～b	Ⅱ	Ⅱ-1～2	Ⅱ	Ⅱ-1～2	Ⅱ	―
Ⅲ層	Ⅲa～c	Ⅲ	Ⅲ-1～5	Ⅲ	Ⅲ-1～6	Ⅲ	―	Ⅲa～d、Ⅳa	Ⅲ	Ⅲ-1～5	Ⅲ	Ⅲ-1～5	Ⅲ	―
Ⅳ層	―	―	Ⅳ-1	Ⅳ-1	Ⅳ-1	Ⅳ-1	―	―	―	―	―	―	―	―
	―	―	Ⅳ-2	Ⅳ-2	Ⅳ-2	Ⅳ-2	―	―	―	―	―	―	―	―
	Ⅳa～c	Ⅳ-3	Ⅳ-3	Ⅳ-3	Ⅳ-3	Ⅳ-3	―	―	―	―	―	―	―	―
	―	―	Ⅳ-4・5	Ⅳ-4	Ⅳ-4	Ⅳ-4	―	Ⅳb～d	Ⅳ-4	Ⅳ-1・2	Ⅳ-4	Ⅳ-1・2	Ⅳ-4	―
谷	埋没谷地形1（１区・２区・５区北側）						―	埋没谷地形2（４区・５区南側・６区）						―

※２区および５区北側のⅣ層を基準とし、埋没谷１・２におけるⅣ層の対応関係を示す。
※Ⅱ層およびⅢ層は細分可能であったが、区ごとの厳密な対応関係は把握出来なかった。
※４区Ⅳa層は、調査時はⅣ層として認識したが、Ⅲ層に修正。

第３節　遺構と出土遺物

本節では各調査区の遺構について、出土遺物とあわせて報告する。

（1）遺物の分類と概要

普天間石川原第一遺跡の調査では、貝塚時代からグスク時代、近世～近代の遺物が出土した。出土遺物の殆どが小破片であったが、従来の研究を踏まえて可能な限り分類を行った。以下、各遺物の分類概要について記載する。また、貝塚時代土器及びグスク時代の陶磁器類については、器形・分類毎に個体数を算出した。算出方法は首里城跡叔順門西地区（沖縄県埋文 2013）を参考にした。

１　貝塚時代の土器

貝塚時代の土器は、前期土器と後期土器に大きく分けられ、前期土器が最も多く出土している。

1－1　貝塚時代前期の土器

総数 4571 点、452 個体出土しており、型式判別可能なもので前４期の籠目文系 (面縄東洞式)、点刻線文系（伊波式･荻堂式･大山式）、前４～５期の肥厚口縁系（室川式･宇佐浜式）、前５期後半～後１期の無文尖底系（仲原式）がある。出土量からは、前４後半～５期前半（縄文時代後期から晩期相当）に位置付けられる肥厚口縁系の室川式・宇佐浜式が 372 個体で主体とみられる。

籠目文系　面縄東洞式 (１) が１点のみ出土しており、肥厚部に押引文を籠の網目状に施す。口唇部は欠損している。

点刻線文系　伊波・荻堂式と大山式がある。

伊波・荻堂式（２・３・18）　伊波式と考えられる（２）は、口唇部と口唇直下に連続刺突・押引文、その下に斜線文を施す。荻堂式（18）は、山形口縁で外面に叉状工具による縦位区画文と横線文、鋸歯文を施す。このほかに突起部（３）がある。

大山式（４～６・19）は、単篦工具による押引文を施す典型的なもの（４）や､突帯区画文を有する（５･６･19)がある。(19)は突帯文土器(伊平屋村教委1981)で、本報告では大山式に含めている。カヤウチバンタ式口縁に幅広の突帯区画文を１条貼り付けている。口縁から胴部にかけてほぼストレートとなる器形で、底部は平底となる。

肥厚口縁系　肥厚口縁の形態から大きく室川式と宇佐浜式に分けられる。口縁を方形・長方形状に肥厚させるいわゆるカヤウチバンタ式口縁系統のものもある。

室川式（７～17・20～32）　口唇の平坦面を意識して肥厚させるものを室川式とした。

深鉢 138 個体、壺 14 個体が得られている。深鉢は、外反口縁のものが多いが、直口するものもある（25)。口縁部の肥厚は、幅広い口唇を意識して肥厚させる典型的なもの（７～12)、貼付によって明瞭に肥厚するもの（13)、カヤウチバンタ式口縁系統（14・17・20・21・27)、肥厚が微弱なもの（22～24・26・28）がある。

壺は、口径が小さめで胴部が張る器形と考えられるもので、口縁の肥厚は深鉢と共通する。口唇が平坦なもの（30)、カヤウチバンタ式口縁（31・32)、肥厚が 微弱なもの（29）がある。

有文のものは深鉢に多く、口唇や外面に連続刺突・横捺刻文（７・８・10・28・29)、方向が不規則な押し引き文（24)､斜沈線（12･23)､ステップ状文様（9）がある。

宇佐浜式（33～59）　口縁の稜を意識して肥厚させるものを宇佐浜式とした。深鉢 183 個体、壺 36 個体で室川式より壺の割合が多い。深鉢は、典型的な三角形状（33～37）もしくはカマボコ形（38～41)、肥厚が大きく厚手のもの（42～46)、三角形が間延びしたカヤウチバンタ式口縁系統のもの(47～50)がある。口縁部に突起を持つもの（38・40・48）もある。(42）は胎土に雲母を多く含んでいる。

壺は、深鉢と同様に三角形状（51・52・56・58)、カマボコ形（57)、厚手のもの（54・55)、カヤウチバンタ式口縁系統のもの（53・59）がある。

有文資料は単篦工具もしくは叉状工具による連続刺突・横捺刻文（33・34・36・58)、押引文（46・47・57）がある。

型式不明（60～62）　型式は不明であるが奄美群島の土器群と影響関係にあると考えられるものとして、犬田布式にも類似する胴部片（60）がある。(61・62）は凸帯と刺突文を組み合わせた文様で、喜念Ⅰ式にも類似する。

無文尖底系　仲原式（63～70）　深鉢 30 個体、壺３個体が得られている。深鉢は、カヤウチバンタ式口縁系統のもの（63～66）のうち、(63・64）は山形口縁で有段部に刺突文を列状に施す。他には直口するもの(67)､注口状口縁（68）がある。壺は有頸のもの（69）がある。(70）は小型の壺か。

把手　方形状（71)、水平状にのびるもの（72）がある。胎土の特徴から、これらは肥厚口縁系の土器グループに属するものとみられる。

底部　(73～75）は平底で、(75）は厚底である。(76～78）は尖底で、(78）は丸底にも近い。(78～80）は丸底である。平底は点刻線文・肥厚口縁系、尖底と丸底は肥厚口縁・無文尖底系に属する。

1－2　貝塚時代後期の土器

総数 625 点、28 個体出土している。概ね後２期くびれ平底系のフェンサ下層式段階に位置付けられる。甕形のプロポーションは、頸部で緩やかに屈曲するもの（81）、外傾して口が開き口縁部に最大径を持つもの（82 ～ 84）、胴部に最大径を持つもの（85 ～ 87）がある。口唇部は舌状となるものが多いが、平坦を意識して成形するもの（86）もある。有文資料は、突帯貼付けによる横位区画文（88･89）がある。（81）は穿孔されている。

底部は、（90・93・97）は典型的なくびれ平底であり、（97）は胴部下半部まで残存し、刷毛目状調整痕が明瞭である。（91・92）はくびれ平底終末期に位置付けられる小径厚底の底部で、胎土はグスク土器にも近い。（94･95）は平底である。（96）は底が残存せず形態不明である。

3　グスク時代の土器

総数 758 点、35 個体出土しており、宮城弘樹・具志堅亮によるグスク土器編年（宮城・具志堅 2007、具志堅 2014）の第２・３様式がある。全体的な様相として、小片が殆どで器形が窺えるものは少ない。胴部片では第２・３様式の区別は明確にはできないものの、仕上げが粗造な第３様式段階が主体と考えられる。

壺（98・99）は口縁が直立する器形で、（98）は比較的丁寧なナデ調整が施された均整のとれた資料である。（99）は貼り付けにより肥厚している。（98・99）はともに第２様式相当。（100）の壺は、口縁端部で外反し口唇部は舌状となり、器面調整も徹底されず粗雑で第３様式相当。

甕（101）は頸部屈曲し口唇部は舌状、器面は粗雑で指頭痕が明瞭に残る。第３様式相当。（102）は口唇部が平坦で口縁端部で肥厚し断面三角形状となる。直口もしくは内湾する鍋と想定され第２様式相当と思われる。

碗（103）は口縁が玉縁状で白磁玉縁碗を模倣している。羽釜の鍔（104）も得られている。

底部は複数得られ、壺や甕、鍋などと考えられたが壺甕類と一括している（105 ～ 109）。（105 ～ 107）は器面調整が粗雑のため第３様式に相当する。（110）は碗の底部と思われる。

4　カムィヤキ

総数 51 点、９個体出土した。分類は新里亮人による分類記号（新里 2003ab・2018、伊仙町教委 2005）を用いた。A 群と B 群があり、殆どが小片である。

A 群　外面に綾杉状・平行線状、内面に格子目状の当て具痕が残るもの。薄手・硬質で胎土に白色粒を多く含むものが多い。（111・112）は内面に格子目状の当て具痕が残る。壺の口縁部で新里分類の A 群古層期壺２式相当のものがあるが小片のため図化していない。

B 群　外面はナデ調整、内面に綾杉状・平行線状の当て具痕が残るもの。A 群より厚手で軟質なものが多い印象を受ける。壺の口縁部（113）は新里分類の B 群新層期壺６式相当。（114）の内面には平行線状、（115・116）の内面には綾杉状の当て具痕がみられる。（117）は当て具痕が不明瞭であるが胎土から B 群とした。

5　朝鮮系無釉陶器

カムィヤキに類似するが胎土に白い線状の帯がみられるものを朝鮮系無釉陶器として報告する。総数９点、３個体出土している。いわゆる朝鮮半島産陶器（高麗陶器）で、カムィヤキ窯の成立に影響を与えたとされる（吉岡 2002、新里 2004・2018）。青灰色・硬質の須恵器系統と灰褐色・軟質の瓦質土器系統に大別できるとされ（赤司 1991）、本報告では A 群・B 群として報告する。

第７表　出土点数・個体数１

貝塚時代土器

分類	器形	部位	計	個体数 器形	個体数 型式
面縄東洞式	深鉢	胴	1	1	1
伊波式	深鉢	胴	1	1	1
荻堂式	深鉢	口	3	3	3
伊波･荻堂式	深鉢	口	3	3	3
		胴	5		
	不明	胴	2	1	
大山式	深鉢	口～底	1	5	5
		口	4		
		胴	5		
	不明	胴	1	1	
室川式	深鉢(有文)	口	17	17	152
	深鉢(無文)	口	121	121	
		胴	1		
	壺(有文)	口	1	1	
	壺(無文)	口	13	13	
宇佐浜式	深鉢(有文)	口	9	9	220
	深鉢(無文)	口	174	174	
		胴	5		
	鉢	口	1	1	
	壺(有文)	口	4	4	
	壺(無文)	口	32	32	
犬田布？	深鉢	胴	1	1	1
仲原式	深鉢(有文)	口	2	2	33
	深鉢(無文)	口	28	28	
	壺	口	3	3	
貝塚前期土器 型式不明	深鉢(有文)	胴	3	1	33
	深鉢(無文)	把手	4	1	
		胴	112		
	壺(有文)	胴	1	1	
	不明(有文)	胴	4	1	
	不明(無文)	把手	1	1	
		胴	3978		
	底部	平底	12	12	
		尖底	12	12	
		尖底か	1	1	
		丸底	5	5	
貝塚後期土器（フェンサ下層式）	甕(有文)	口	1	2	28
		胴	1		
	甕(無文)	口	26	26	
	鉢	胴	16	1	
	不明	胴	567	1	
	くびれ平底		5	5	
	くびれ平底?		1	1	
	小径厚底		3	3	
	平底		4	4	
	不明底部		1	1	

グスク土器・カムィヤキ・朝鮮系無釉陶器

分類	器形	部位	計	個体数 器形	個体数 型式
グスク土器	壺(第2)	口	4	4	35
		胴	1		
	壺甕(第2)	底	1	1	
	不明(第2)	胴	2	1	
	壺(第3)	口	1	1	
		胴	1		
	甕(第3)	口	1	1	
	壺甕(第3)	底	9	9	
	不明(第3)	胴	4	1	
	碗	口	1	3	
		底	3		
	壺	胴	1	1	
	壺甕類	底	13	13	
	鍋	口	1	1	
	羽釜	鍔	2	1	
	不明	胴	708	5	
		底	5		
カムィヤキ	A群壺	口	1	5	9
		胴	8		
		底	5		
	A群不明	胴	10		
	B群壺	口	2	3	
		胴	16		
		底	3		
	B群不明	胴	5		
	不明	胴	1	1	
朝鮮系無釉陶器	A群壺	胴	1	2	3
		底	1		
	A群不明	胴	2		
		底	1		
	B群壺	胴	1	1	
		底	1		
	B群不明	胴	2		

A 群　胎土は青味を帯びた灰色で芯部が赤褐色となる。（118）は壺の肩部とみられ、隆帯の一部が残る。内面に格子目状の当て具痕がある。（120）は大型壺の底部と思われる。

B 群　灰色で堆積状の胎土となる。（121）は壺の胴部と想定され、外面に格子目状の当て具痕が残り、内面はナデにより断面が波状に隆起している。

６　中国産青磁

中国産青磁の分類は、大宰府分類（太宰府市教委 2000）及び沖縄分類（瀬戸ほか 2007、瀬戸 2010・2013・2014・2015）の分類記号を用いた。総数 366 点、131 個体出土し、龍泉窯系青磁はⅠ～Ⅶ類が確認されたが、Ⅳ～Ⅴ類が主体と考えられる。Ⅰ・Ⅱ類も一定量得られている。また、同安窯系青磁及び磁竈窯系青磁も若干出土している。以下、産地ごとに分けて説明する。

龍泉窯系

Ⅰ類　劃花文に代表される一群で口縁端部は丸く直口する碗形、釉は薄く緑色～黄色味が強いものがある。（122・123）は内面に圏線を有する。大宰府分類の龍泉窯系青磁Ⅰ－１類に相当。（124）は皿に近い器形で大宰府分類の龍泉窯系青磁浅形椀Ⅰ－１類に相当。内面に劃花文を描く（125・126）のうち、（126）は内面に片彫りによる草文。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－２類相当。（125）は内面に櫛描きによる区画文。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－４類相当。底部（127）は高台刳りが浅く断面四角形状で外底露胎となる。Ⅱ類との形態的違いは明瞭ではないが、釉調からⅠ類相当と考えた。

Ⅱ類　鎬蓮弁文に代表される一群で、釉調・器形はⅠ類と類似するが胴部の張りが弱い。（128）は外面に片彫りによる蓮弁文を描く。鎬の削り出しは見られない。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅱ－ａ類相当。（129 ～ 133）は、外面に鎬蓮弁を施す。（129・130・133）は鎬の削り痕が明瞭である。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅱ－ｂ類相当。

Ⅲ類　Ⅰ・Ⅱ類より釉が厚く精良で優品とされる。（134）は口折皿で端部は上方に摘み上げ、内面は蓮弁状に凹む。大宰府分類の龍泉窯系青磁坏Ⅲ－３ｂ類相当。釉は濃い緑色でⅡ類に近い。（135）は直口皿で、釉は青味が強い緑色である。外面に鎬蓮弁文を施す。大宰府分類の龍泉窯系青磁坏Ⅲ－５ｂ類相当。この他にⅢ’－３類口折皿が出土している。

Ⅳ類　釉が薄く外反する器形で外底露胎となる一群である。釉は淡い緑色や黄色味を帯び、胎土は灰白色で薄手となるものが多く、碗と皿がある。大宰府分類及び沖縄分類の龍泉窯系青磁Ⅳ類相当。

碗は全て無文の外反口縁（Ⅳ－０類）で、いわゆる無文外反碗（金武 1990）に相当する。（136 ～ 139）は外反口縁で、（138）は内面に圏線を有する。口縁部は、端部で外に折れるものが多い（136）。（139）はやや外反が緩やかで、口唇部がやや厚く後述するⅣ’類にも近い。碗底部（142・143）は、外底露胎で高が台形状である。（143）は外底中央がやや突出している。

皿は外反皿（140）や腰折皿の底部（144）がある。（141）は外面２段の線刻蓮弁文、内面が蓮弁状に凹むもので碁笥底の皿と思われる。

Ⅳ’類　金武正紀が佐敷タイプ碗（金武 1990）とした玉縁外反碗の一群。口縁部が玉縁状で外反し、外底露胎で見込みを釉剥ぎするものが多い。碗と皿があり、後述する碗Ⅴ類との中間的なタイプも含まれる。沖縄分類の龍泉窯系青磁Ⅳ’類相当。

碗は全て無文で、外面を玉縁状に大きく肥厚させるもの（145）、端部を丸くし小さめのもの（146 ～ 148）、端部がやや平たく方形状のもの（149）、全体的に厚いもの（150・151）がある。碗底部（153）は外底露胎で見込みを釉剥ぎする。

皿（152）は口縁端部がやや玉縁に近い。腰折皿の底部（154）は見込みを釉剥ぎするもので、双魚文が型押しされる。

Ⅴ類　釉が厚くなり外底の釉剥ぎを行う一群で、釉は緑色が強く胎土は白色のものも多い。沖縄分類の龍泉窯系青磁Ⅴ類相当。

碗は無文（Ⅴ－０類）で無文外反碗（金武 1990）に相当するものが殆どである。外反碗は端部で強く外反するもの（155・156）、緩やかに外反するもの（157・158）がある。直口碗（159）もある。碗底部（161 ～ 163）は、外底を蛇の目状に釉剥ぎを行う。（163）は外面に幅広の蓮弁文（Ⅴ－１類）を描く。（162）は、見込みが平坦で広く、瀬戸のⅤ類古相（瀬戸 2015）に相当。

皿のうち、（160）は腰折皿と思われる。（164）の底部は外底を蛇の目状に釉剥ぎする。他に小片のため図化していないが口折皿や稜花皿がある。

Ⅵ類　いわゆる線刻細蓮弁文碗（金武 1990）に代表される一群で、底径が小型化し底部が厚く、高台刳りが深いものである。沖縄分類の龍泉窯系青磁Ⅵ類相当。

碗の底部（165）は見込みに印花文がある。高台刳りが雑で中央が突出している。また、線刻細蓮弁文碗（Ⅵ－１類）の胴部片が出土している。

皿は菊花皿の底部（166）がある。

Ⅶ類　釉調は白磁に近いガラス質で沖縄分類の龍泉窯系青磁Ⅶ類相当。碗が出土している。

盤　釉調･胎土からⅣ～Ⅴ類の範疇と考えられる。（167･168）は鍔縁口縁で端部が上方に伸びる器形で、内面には蓮弁状の櫛描文が施される。（169・170）は盤底部である。

幅広高台タイプ　金武が幅広高台碗と呼称した碗である（那覇市教委 1997）。（171）は畳付けが幅広く端部が面取りされ、見込みが蛇の目状に釉剥ぎされる。典型的な龍泉窯ではないとされ、福建地域で生産された可能性が指摘されている（瀬戸 2014）。

同安窯系　（172・173）は櫛描文皿と呼ばれる平底の皿である。大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ類相当。（172）は見込みに櫛描きによるジグザグ文と弧状文を施す。

磁竈窯系　泉州窯系磁器とも呼ばれ、胎土に黒色・白色粒を多く含む。（174）は外反碗である。（175）は碗の胴部片と思われる。

7　中国産白磁

中国産白磁の分類も大宰府分類及び沖縄分類記号を用いた。総数 84 点、42 個体出土で、C－3 群が多い。

大宰府分類Ⅳ類　いわゆる玉縁碗である。口縁部が玉縁状となる一群である。釉調は灰白色のものから黄色味が強いものがある。大宰府分類白磁椀Ⅳ類に相当する。玉縁口縁が小さめのもの（176・177）と大きめのもの（178）がある。底部（179・180）は高台刳りが浅く厚手である。

A 群　一般に口禿と称される、口唇部～口縁内面が釉剥ぎされる一群で、碗と皿がある。釉調は白色のものが多い。森田分類（森田 1982）および沖縄分類の A 群、大宰府分類白磁Ⅸ類相当。

碗は､直口口縁のもの（181）がある。底部（182）は、高台が断面方形状で外底全面施釉後に畳付が釉剥ぎされる。小片のため図化していないが、外底露胎となるものもある。皿は底部（183）が出土しており、見込みに圏線がある。

C 群　金武正紀によりビロースクタイプと呼称された一群である｡金武は厚手の内湾碗をビロースクタイプⅠ・Ⅱとし、これに類似するものとして白磁外反碗を挙げ（金武 1988）、後に白磁外反碗をビロースクタイプⅢとした（金武 2009）。森田分類 C 群、沖縄分類 C－1～3 群に相当。碗と皿があるが碗のみの出土であり、C－3 群が殆どである。C－2 群は出土していない。

C－1 群は口縁部が 2 点出土し、（184）は口唇部外端が尖る。ビロースクタイプⅠ。C－3 群は外反口縁（185 ～ 187）で、底部（189 ～ 191）の見込みは平坦で圏線と印花文が施される。見込みが無文のもの（188）もある。ビロースクタイプⅢ。

D・D’群　軟質の胎土で釉は白色のものや黄色味が強いものがある。碗と小皿があり、（192）は刳りがない方形高台で、やや黄色味を帯びる。森田分類・沖縄分類 D 群相当。（193）は内湾皿の口縁部で、釉はやや緑味を帯びる。沖縄分類 D’群相当。

その他　（194）は高台幅広で見込みが蛇の目状に釉剥ぎされる。青磁幅広高台タイプにも類似するが、高台端部の面取りが不明瞭である。釉調・胎土から福建産と思われる。この他に、清代徳化窯産の型造り成形の小碗が出土している。

第 8 表　出土点数・個体数 2

青磁

分類	器形	部位	計	個体数 器形	個体数 型式
Ⅰ類	碗	口	11	11	11
		胴	11		
		底	2		
Ⅱ類	碗	口	12	12	12
		胴	13		
		底	1		
Ⅲ類	皿	口	2	2	2
Ⅲ’類	皿	口	1	1	1
Ⅳ類	碗	口	27	27	30
		胴	12		
		底	4		
	皿	口	3	3	
		底	3		
	碗or皿	胴	7	1	
Ⅳ'類	碗	口	18	18	21
		胴	1		
		底	7		
	皿	口	2	2	
		底	1		
	碗or皿	口	1	1	
Ⅳ～Ⅴ類	碗	胴	22	1	1
Ⅴ類	碗	口	30	30	37
		胴	12		
		底	4		
	皿	口	5	7	
		胴	1		
		底	7		
	碗or皿	胴	1	1	
	不明	胴	1	1	
Ⅵ類	碗	底	2	2	3
	皿	口	1	1	
Ⅶ類	碗	口	2	2	2
		胴	1		
龍泉不明	碗	胴	1	1	6
	皿	胴	1	1	
	盤	口	4	4	
		胴	2		
		底	3		
	不明	胴	112	1	
		底	1		
同安窯系	皿	口	2	2	2
		底	2		
磁竈窯系	碗	口	2	2	2
		胴	5		
	不明	胴	2	1	
幅広高台	碗	底	1	1	1

白磁

分類	器形	部位	計	個体数 器形	個体数 型式
Ⅳ類	碗	口	5	5	5
		底	3		
A群	碗	口	1	2	7
		底	2		
	皿	底	3	3	
	碗or皿	口	2	2	
	不明	胴	3	1	
C群	碗	胴	15	1	1
C1群	碗	口	2	2	2
C3群	碗	口	10	10	10
		胴	11		
		底	4		
D群	碗	口	1	1	3
	皿	胴	2	1	
	小皿	底	1	1	
	不明	胴	2	1	
D'群	碗	口	1	1	3
		胴	1		
	皿	口	2	2	
福建産	碗	底	3	3	3
清代徳化窯	碗	口	1	1	7
	小碗	口	6	6	
		底	2		
不明	碗	底	1	1	1

青花・その他中国産

種類	分類	器形	部位	計	個体数 器形	個体数 型式
明代青花	景徳鎮B群	皿	口	1	1	7
	景徳鎮D群	碗	口	1	1	
	景徳鎮	碗	胴	1	1	
		小碗	口	1	1	
			胴	1		
		小杯	口	1	1	
	漳州窯	碗	口	1	1	
		蓋	袴～底	1	1	
清代青花	徳化窯産	碗	口	9	9	19
			胴	18		
			底	7		
		小碗	口	1	1	
		皿	口	1	3	
			胴	1		
			底	3		
		小杯	口	1	1	
			胴	1		
		不明	胴	2	1	
	福建･広東系	碗	口	4	5	
			胴	1		
			底	5		
天目		碗	底	1	1	1
		不明	胴	1	1	
瑠璃釉		小碗	底	1	1	1
青磁染付		碗	口	3	3	5
		小碗	底	2	2	
褐釉陶器	5類	壺	胴	1	1	3
		壺	口	1	1	
			胴	1		
			底	1		
		不明	胴	46	1	
			底	1		

８　中国産青花

中国産青花の分類は小野分類（小野 1982）及び沖縄分類、新垣力による清代陶磁分類（新垣 2003・2014・2018）を参考にした。総数 62 点、26 個体出土で、明代の青花は少なく、清代の徳化窯産が多く得られている。

明代　景徳鎮窯産は、明代の D 群碗（195）と B 群皿、明～清代の小碗や杯がある。他に漳州窯産と考えられる軟質で釉や呉須が鈍いものがあり、碗や蓋（196）が出土している。

清代　徳化窯産のものが多く出土しており、碗は端反口縁で寿字文を描くもの（197・198）や丸文を描くものなどが得られている。このほか、小碗（199）や皿がある。また福建・広東産の粗製碗も一定量確認されている。

９　その他中国産陶磁器

その他の中国産陶磁器として、褐釉陶器が総数 51 点出土している。殆どが胴部片で、沖縄分類の大形壺５類相当と考えられる胴部片も得られている。（200）は口縁断面三角形状の短頸壺で肩部に叩痕を有する。類例は少ないが釉調や胎土から中国産と考えた。（201）は壺の底部と想定され、薄手で内外底露胎となる。

上記のほか、黒釉陶器（天目）、瑠璃釉の小碗、清代の青磁染付も出土している。

10　本土産陶磁器

本報告では、近世の本土産陶磁器、近代磁器を一括して本土産陶磁器として扱う。

本土産近世陶磁器　本土産陶器は 4 点出土、薩摩焼と思われる鮫肌釉の袋物（202）と産地不明の鍋が出土している。本土産磁器は 9 点出土、本土産磁器は産地不明の染付と青磁が出土している。

本土産近代磁器　明治～戦中に使用された磁器類で 303 点出土している。技法により下記の A ～ F 類に分類しており、以下その特徴を記す。戦時中の陶磁器生産の管理を示す統制番号は今回確認できなかった。

A 類　型紙摺りによる絵付け大半が砥部産と考えられ碗が多い。（203）はいわゆる「スンカンマカイ」である。（204）は肥前産の皿で、底面部に「スマ」の墨書がみられる。

B 類　銅板転写やゴム判、吹き絵等による絵付けゴム判で松竹梅文を描くもの（205）。緑と紫の吹き絵（206）があり、他に銅板転写で風景、花文、吉祥文字などを描く碗や皿等がある。

C 類　染付のもので、多くは瀬戸･美濃系で竹文（207）、葡萄文（208）を描くものが出土している。

D 類　クロム青磁瀬戸・美濃系で飛び鉋（209）や、ゴム判の亀甲文・鶴文（210）を描くものがある。他に銅板転写や染付を施すものが出土している。

E 類　色絵 型紙を使った上で色絵付けをしているものが多い。（211）は軍杯で内面に交差した日章旗と旭日旗を描く。（212）は角皿で赤の花文を描く。

F 類　上記以外のもの二重の圏線を巡らした碗や全体に緑釉を施した国民食器等が出土している。

11　沖縄産施釉陶器

方言で「上焼（ジョウヤチ）」と称される一群で、器面に白化粧や釉薬を施すものである。碗や小碗を中心に水鉢、皿、鍋、瓶、壷、蓋、袋物、急須、香炉、火入など総数 873 点が出土している。出土数の多い碗および小碗については、釉薬の種類や施釉方法、文様の有無などから、以下のように分類している。その他器種については、報告するものについて述べる。

碗

A 類　灰釉単掛けで胴部以下が露胎（213）。

B 類　黒釉施釉。施釉方法から､以下のように細分した。

B－１ 黒釉単掛けで胴部以下が露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。

B－２ 外面黒釉、内面白釉で掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。

C 類　白釉単掛け。文様の有無から、以下のように細分した。C－１無文（217）。C－２有文。

小碗

A 類　外面黒釉、内面白釉で掛け分け。

B 類　白釉単掛け。文様の有無などから、以下のように細分した。

B－１ 無文で胴部を面取りするもの。**B－２** 無文（215・216）。**B－３** 有文。

C 類　緑釉を単掛け。外面花文を描く（214）。

水鉢　内湾口縁で胴部には沈線によって、格子状に施文（220）。

瓶子　削りによって外底に浅い段を有する（223）。

蓋　（221）は壷の蓋。（222）は急須の蓋。

急須　外底に円錐状の突起を３つ貼付（218）。

火入　外面に数条の凹線を施す（219）。

12　沖縄産無釉陶器

方言で「荒焼（アラヤチ）」と称される一群で、比較的高温で焼成された焼き締め陶器である。器面に泥釉やマンガン釉を施すものもある。総数 852 点が出土しており、碗、鉢、擂鉢、鍋、瓶、壷、甕、袋物、急須などがみられる。壷については口縁部形態から、以下のように分類している。その他器種については、報告するもの

について述べる。

壷　**A 類**玉縁状（224）。**B 類**方形状。

擂鉢　内面全体に擂り目を施す（225）。

瓶　腰部が張り、肩部には４条の凹線がある（226）。

13　厨子甕

身が３基出土している。厨子甕の分類記号は第５章に対応する。いずれもマンガン釉甕形厨子で、（227）はⅢｂまたはⅢｃ類、（228･229）はⅢｄ類となっている。出土地周辺には普天間下原古墓群が広がることから、古墓に関連する遺物と考えられる。

14　陶質土器・瓦質土器

総数 176 点出土し、火炉（230・231）のほかに鍋や鍋の蓋、急須、鉢、皿が出土している。瓦質土器は沖縄産で器種不明の胴部が出土している。

15　円盤状製品

総数 19 点出土した。素材は青磁（232）、中国産褐釉陶器、本土産磁器（233）、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器（234・235・236）、瓦（237）を利用している。内外面から剥離加工するものが多い。

16　ガラス製品

ガラス製品は、ガラス瓶を中心に総数 52 点出土した。ガラス瓶は、清涼飲料瓶、薬瓶、化粧瓶、染料瓶、インク瓶に種類が分けられる。時代は近代から戦後にかけての製品が出土している。

清涼飲料瓶　（238）はバヤリース瓶で胴部にロゴがエンボスされる。バヤリース・カリフォルニアオレンジ（オキナワ）社で 1950 年頃製造（河西 2018）。他に、コカ・コーラ瓶（桜井分類のコカ・コーラⅢａ式Ⅰ類Ａタイプ）が出土している。コーラ瓶の分類は第５章で記載する。

薬瓶　（239）は家庭用の殺菌消毒・防腐剤の瓶。底部に「Zonite」のエンボスが入り、蓋にも同様のロゴが描かれる。

組合目薬瓶（242）は点眼部分がネジ状で、破損した樹脂製の蓋が残存している。胴部には「組合目薬」「ZENKOREN」のエンボスが入る。胴部全体に縦ラインが施されるのは、滑り止めが目的と考えられる。市村分類の両口式点眼瓶タイプで 1931 ～ 1960 年頃製造（市村 2010）。今回図化していないが「東京鈴木□ルツ目薬」のエンボスが入った市村分類の縦溝付一口式目薬瓶タイプ（市村 2010）も出土している。

他にも薬瓶と考えられるもの（240・243）が出土したが、内容物やメーカーは特定できなかった。

化粧瓶　化粧クリーム瓶・ポマード瓶と考えられるものは基本的に内容物の変質や劣化を防ぐため白色不透明の色調となる。

メヌマポマード瓶（245）は底部に右横書きで「メヌマ」のエンボスが入る。井田京営堂販売。柳屋のポマード瓶（246）は底部に柳屋の商標登録マーク（桜井 2019）のエンボスが入る。柳屋本店販売。バニシングクリーム瓶（247・248）は底部にウテナの商標登録マーク（桜井 2019）のエンボスが入る。久保政吉商店（現ウテナ）1927 年頃製造。

染料瓶　るり羽瓶（241）は白髪染め用染料瓶である。胴部に「るり羽」と目盛りの下に「定量」のエンボスが入る小瓶。口唇部と側面に栓を金具で固定するための抉りがある。山発産業 1911 年頃製造。

その他の瓶　その他の瓶として SHEAFFER 社製の「Skrip」インク瓶がある。他に、瓶全体が梨地状に加工され胴部に「NOT TO BE REFILLED」「NO DEPOSIT NO RETURN」（再利用不可）とエンボスされた内容物不明の瓶が出土した。

その他のガラス製品　瓶以外のガラス製品ではガラス栓、ランプ笠が出土した。ガラス栓（244）は瓶本体との接触部分に気密性を高めるための研磨調整の跡があり薬瓶用の共栓と考えられる。

17　石器・石製品・石造物

石器は、石斧や敲磨石類、石鏃など総数 129 点が出土し、最も多いのは敲磨石類となっている。石材は 790 点出土しており、石器には主に輝緑岩や緑色岩系を使用している。石製品は有孔石製品と硯の２点出土している。

石鏃　３点出土しており、いずれもチャート製である。剥離調整によって三角翼状に成形する（249・250）。（251）は未製品である。

ユーズドフレイク　１点出土している（252）。チャート製で明確な刃部成形はみられないが、使用による刃こぼれが確認されるものである。

石斧　輝緑岩や緑色岩系の石材を打割調整によって成形後、研磨により、仕上げるものである。特に刃部は丁寧な研磨を施す（254・255・257・258）。一方で、打割調整のみの石斧も出土している（256）。これら石斧は刃部のみや基部のみ（253）の破損品である。

敲磨石類　輝緑岩や砂岩などを使用し、敲打痕および磨り面が認められるものである（261・264 ～ 267）。また、使用後の石斧を敲石として転用したと考えられるものが１点出土している（263）。

石皿・台石類　大型の板状または台石状で、磨り面に凹みなどが認められるものである。（269）は輝緑岩、（270）は砂岩製である。（271）はニービ製で磨り面

が２箇所確認できる。

砥石　中粒砂岩製で表面の一部に磨り面が残るものである（268）。（273）は、研磨や磨り面によって、断面は方形状をなす。上部は欠損により不明だが、グスク時代にみられる小型で首から提げるタイプの砥石と考えられる。

刃器　輝緑岩や緑色千枚岩製で薄く、刃部は丁寧な研磨によって仕上げている（260・262）。特徴的なものとして、緑色片岩製で周縁２箇所に附刃するものも出土している（259）。

有孔石製品　１点出土している（272）。緑色千枚岩製で全体を丁寧な研磨によって薄く成形。周縁に向かい斜位に研磨するが附刃にまで至っていない。円孔を２つ有する。破損により全形不明だが、古我地原貝塚や西長浜原遺跡などで類例がある。

硯　１点出土している（274）。凝灰岩製で研磨によって、表面には墨を磨る傾斜面、裏面には脚部を成形する。上質な硯に見せるためか表裏面が黒く塗装される。

石造物　琉球石灰岩製で重量 2050g にもなる大型の石造物である（275）。中央に敲打による大きな凹みを有する。用途不明。

18　骨製品

１点出土している（276）。破損により全形不明だが、全面を丁寧に研磨し、端部には擦り切り加工を施す。用途不明。

19　貝製品

２点出土しており、いずれも貝製のボタンである（277・278）。真珠層が露出することから、素材貝はサラサバテイラなどと考えられる。また、２点とも形態や加工が同じことから、同一製品に使用されたものの可能性がある。

20　鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物には、羽口および鉄滓が出土している。

羽口　土製の羽口が総数９点出土している。（279）は鉄滓が付着しており、窯側に近い破片と考えられる。

鉄滓　いずれも不定形の鉄滓で、総数 10 点出土しており、総重量は 147.2g である。状態や点数などから、鉄製品などを製作する小鍛冶によって生じたものと考えられる。

21　銭貨

総数 10 点出土。銭種は乾隆通寶（280）、鉄銭（281）、一銭（282）、米国の１セント、５セント、10 セント、25 セントコインが出土している。

22　瓦

明朝系瓦が総数 319 点出土しているが、いずれも破片のため、図化は行っていない。

23　金属製品

金属製品は総数 32 点出土している。鉄製品と青銅製品、その他金属製品の３つに分けて報告する。

青銅製品　留め金具や簪など総数 12 点出土している。（283）は留め金具と考えられる製品である。一部に鍍金が残っており、本来は全体に鍍金を施していた可能性がある。類似資料が勝連城跡などのグスク時代の遺跡より出土している。青銅製品の中でも、最も出土が多かったのは簪である。いずれもカブが耳かき状（284）や匙状（285）となるもので女性用である。煙管は「瀬髙」と陰刻された延べ煙管が１点出土している（286）。

また、バックル（290・291）や米軍無線機の部品と考えられる製品も出土している（292 ～ 294）。これらは一部鉄製品とともに SD4006 内からまとまって出土しており、戦後の基地造成時に廃棄されたものと考えられる。

鉄製品　総数 16 点出土しており、そのうち 12 点は錆膨れなどにより、判然としない（295 ～ 297）。特徴的なものとしては、タカラガイ科の貝 15 点が入った缶が出土している（298）。いずれも長軸２cm 程度の小型タカラガイで、ハナビラダカラ 14 点、風化のため判然としないが、タカラガイ科の中でも細長い種が１点となっている。タカラガイは食べる際に殻を割る必要があるが、入っていたタカラガイは全て完形であることから、食料残滓などではなく、採集した貝殻を空き缶に納めたものと考えられる。

その他金属製品　総数４点出土している。（287）はステンレス製のスプーンで、持ち手に「U.S.N.」と刻印される。米軍関連の製品と考えられる。

24　プラスチック製品・その他製品

プラスチック製品は歯ブラシ（288）、ボタン、櫛の３点が出土した。歯ブラシ（288）は柄に「竹芯久美愛消毒歯刷子①」の銘がある。価格等統制令以降（1939 ～ 1945）の製品とみられる。

その他の製品として軍靴（289）が出土した。米国製軍靴で靴底のみ残存する。右足用で底面には靴鋲と米国の EDICOTT JOHNSON 社製を示す「EJ」の陽刻がある。

（２）１区

１区は標高 36m 前後の平坦地に設定し、グリッドはズケ９−Ｈ８･Ｈ９･Ｉ８･Ｉ９、調査面積は 540 ㎡である。

層序と地形

調査区東側は北西方向に傾斜する谷地形（埋没谷１）でⅡ〜Ⅳ層が堆積している。また、調査区西側は石灰岩岩盤（Ⅵ層）が露出している。

遺構と遺物

調査は、Ⅰ層とⅡ層掘削後にⅢ層上面および地山面で検出されたⅡ層（近世〜近代の耕作土）由来の遺構面を第１遺構面とした（第 13 図）。

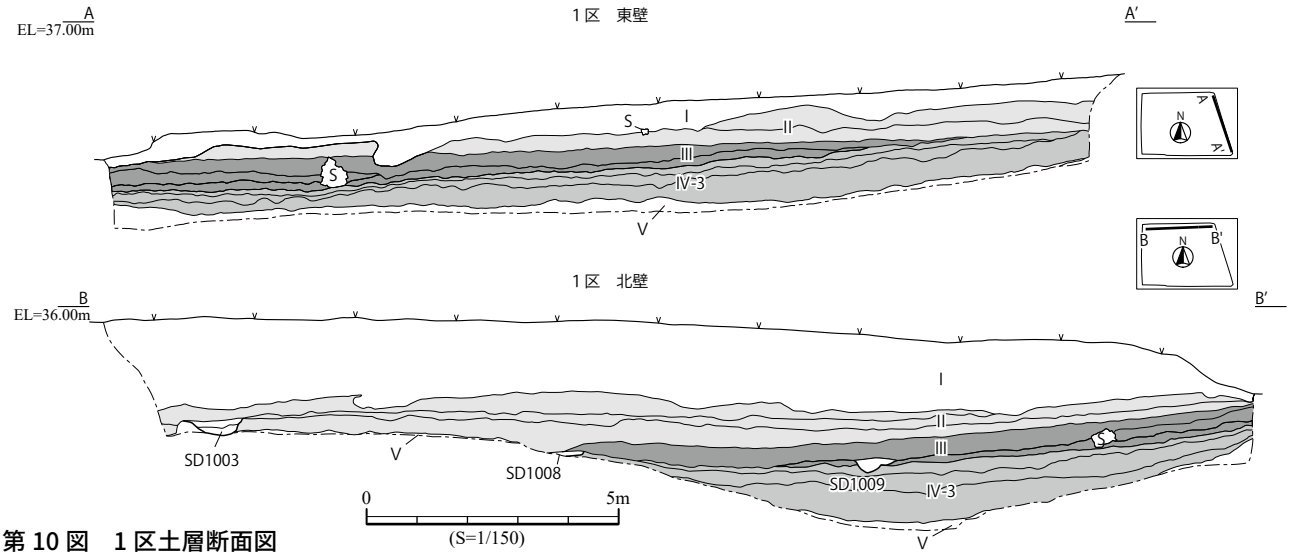
第１遺構面の調査完了後、Ⅲ層中またはその下のⅣ層上面や地山面で検出されたⅢ層（グスク時代の耕作土）由来の遺構面を第２遺構面とした（第 15 図）。

その後、貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）を掘削し谷地形の地山面（第３面）を検出した（第 18 図）。

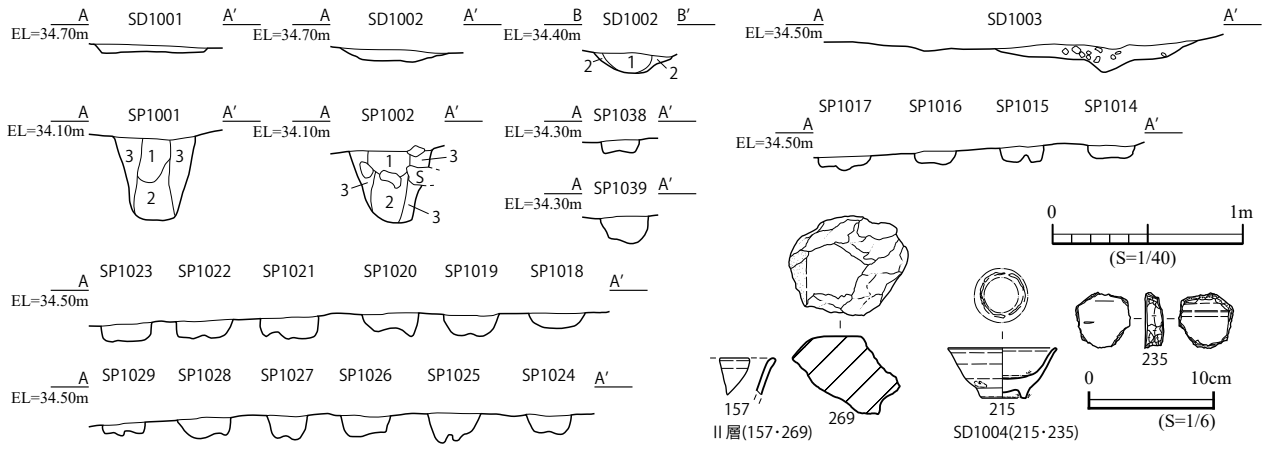
第１遺構面

近世〜近代の溝状遺構やピットが確認された（第 13 図）。溝状遺構（SD1001 〜 1006）は、向きはいずれも北西−南東方向、深さは３〜 28 ㎝である。位置や方向から一連と考えられるものもある。昭和 20 年撮影の航空写真における耕作地の区画と向きが揃うことから、戦前の耕作関連の遺構と考えられる。SD1004 からは、沖縄産施釉陶器(215)などが出土している(第 12 図)。ピット（SP1002）からは根固め石が検出されている。

列状ピット群１は、平面形 20 〜 30 ㎝の多角形状を呈するピットが列状に並ぶ形で検出された。深さは平均 9.7 ㎝である。調査時、埋土がⅡ層に近いことから近世の植栽痕と考えた。しかし、SP1014・1024 の年代測定を行った結果、SP1014 埋土が 1,040 ± 20BP、SP1024 埋土が 860 ± 20BP（10 世紀後半〜 13 世紀中頃）でグスク時代の年代が得られた。列状ピット群１は、谷地形の際で検出されたことから、検出面を誤認した可能性がある。なお、SP1019・1027 からはグスク土器が出土しており、グスク時代の列状ピット群の可能性がある。

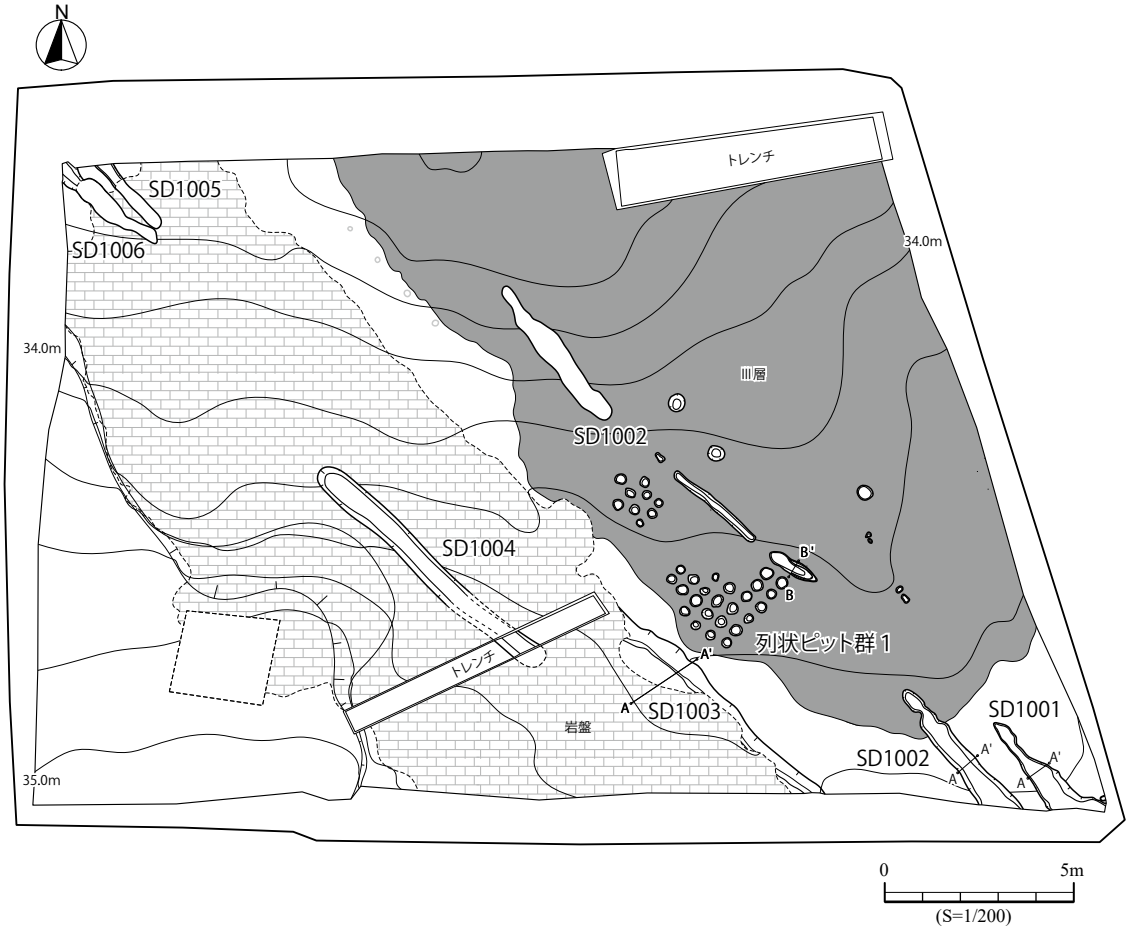


第 10 図　１区土層断面図



第 11 図　１区第１遺構面の遺構

第 12 図　１区第１遺構面出土遺物



第 13 図　１区第１遺構面

第２遺構面

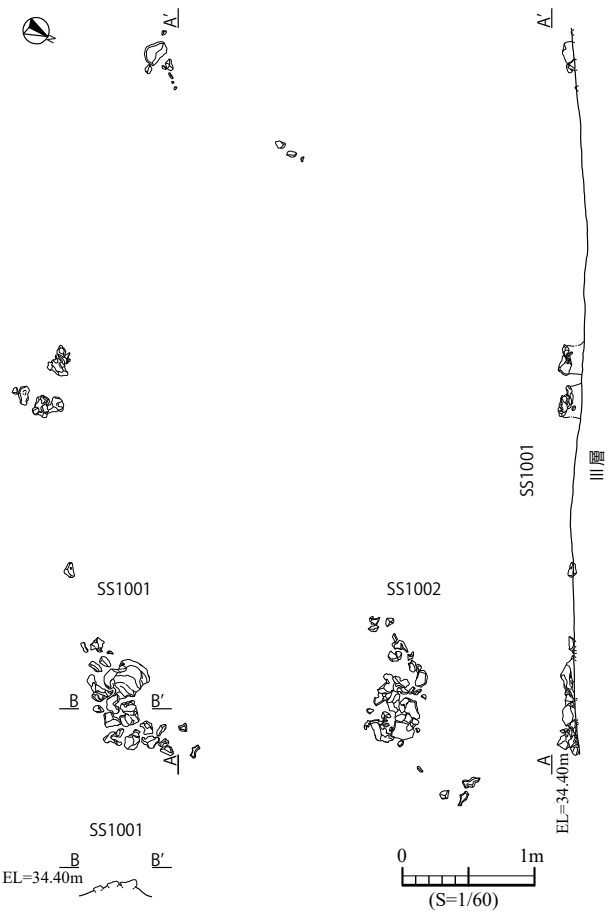
グスク時代の溝状遺構やピット、土坑、石列、炉跡、円弧状遺構が確認されている（第 15 図）。

溝状遺構（SD1007 ～ 1010）は、いずれも北西−南東方向にのびている。SD1007 は SD1008 を切る形で、SD1008 の上位で検出された。SD1007・1008 の東側には、ピットが並行して列状に検出されているが（SP1051 ～ 1054）、溝状遺構との関連は不明である。SD1009・1010 は浅く底部のみが残存している。SD1010 からは、グスク土器（108）が出土している。

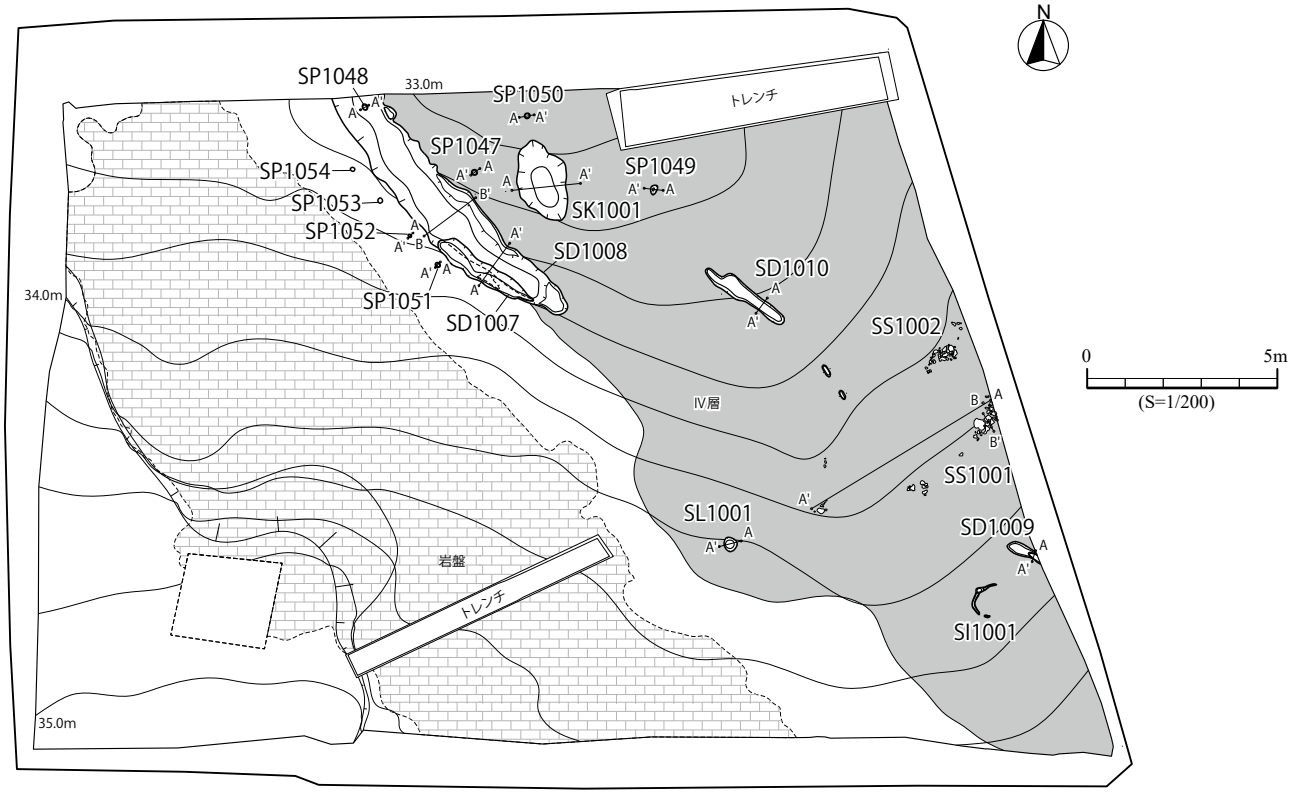
石列とした SS1001・1002 は、自然礫を列状に配するもので、Ⅲ層中で検出された。溝状遺構の向きや地形の傾斜に直交するように、北東−南西の向きに礫を配しているが、残りが悪く判然としない。

炉跡（SL1001）は、焼土域を伴う遺構で、壁面が熱により赤色化している。大きさは約 40 ㎝、深さ 17.9 ㎝で、埋土下部は炭粒を多く含む。年代測定を行った結果、625 ± 20BP（13 世紀末～ 14 世紀末頃）の年代が得られた。土坑（SK1001）は、楕円形で埋土に石灰岩礫を含む。円弧状遺構（SI1001）は円形状の周溝で規模は小さく判然としない。

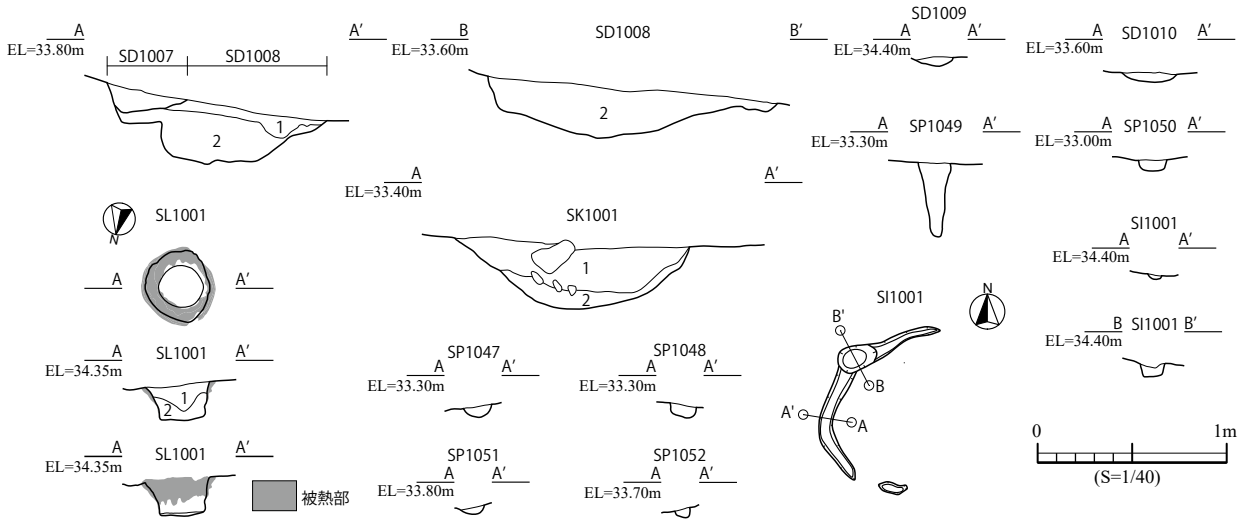
なお、１区Ⅲ層からは、青磁Ⅱ類（129）Ⅳ類（143）・Ⅳ’類（148）、白磁Ｃ３群（188）、グスク土器第２様式壺（98）などグスク時代の遺物が得られている。石造物（275）は第２遺構面に関連するものと思われる（第 17 図）。



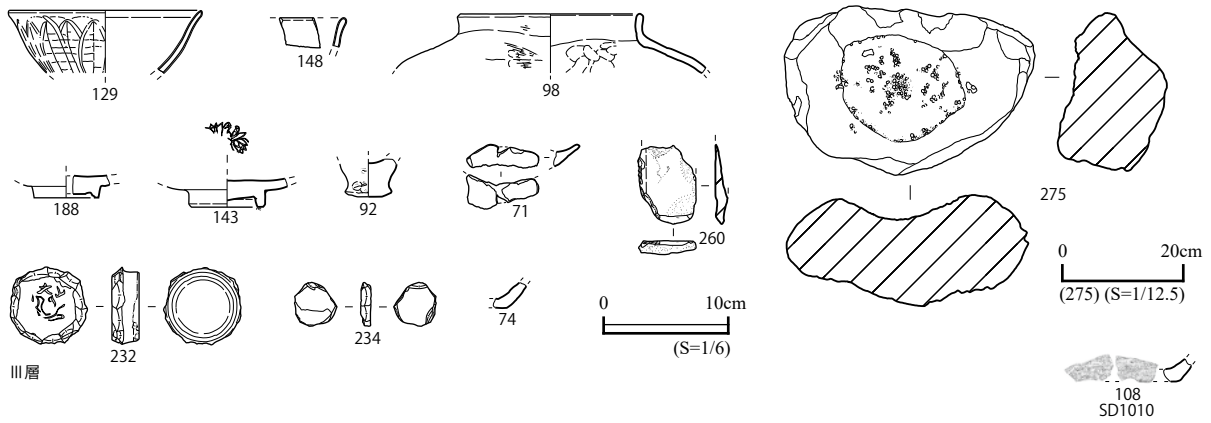
第 14 図　１区 SS1001・1002(第２遺構面)



第 15 図　１区第２遺構面



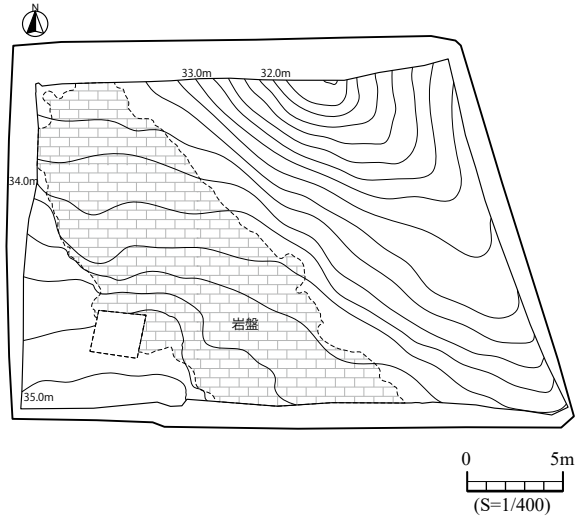
第 16 図　1 区第 2 遺構面の遺構



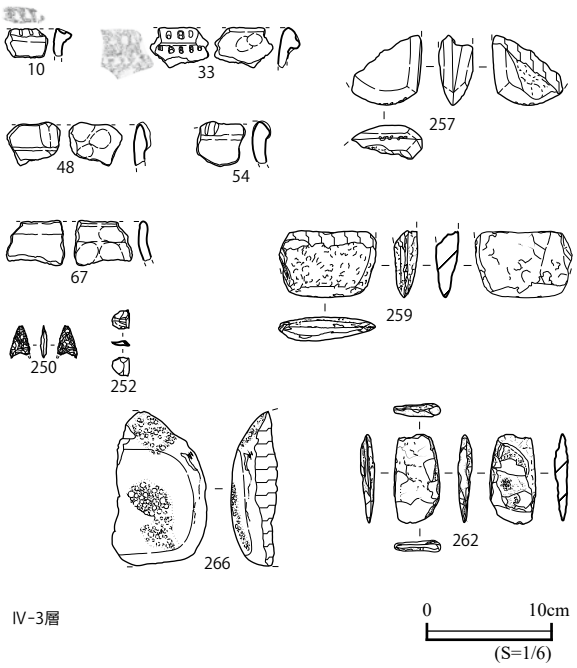
第 17 図　1 区第 2 遺構面出土遺物

第３面（地山面）

Ⅳ層を掘削し、谷地形となるⅤ層の地山面を検出したが、遺構は確認できなかった（第 18 図）。1 区Ⅳ層からは、室川式（10）・宇佐浜式（33・48・54）や石鏃（250）・石斧（257）など貝塚時代の遺物が出土した（第 19 図）。



第 18 図　1 区第 3 面 (地山面)



第 19 図　1 区第 3 面出土遺物

（３）２区

２区は、１区南東隣の標高 37 ～ 41m の谷底地に設定し、グリッドはズケ９−Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７、調査面積は 400 ㎡である。

層序と地形

調査区東側は北西方向に落ち込む谷底の地形（埋没谷１）となっており、そこにⅡ～Ⅳ層が堆積している。

調査区北西側は、古墓群に伴う石積み遺構（石積み８）を境目に、Ⅲ・Ⅳ層はみられず、Ⅰ・Ⅱ層直下のⅤ層地山面に近世～近代の遺構が検出されている。このことから、近世～近代の墓構築および耕作等によって地形の改変が行われたと考えられる。

遺構と遺物

調査は、Ⅰ・Ⅱ層掘削後にⅢ層上面で遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。Ⅲ層（グスク時代の耕作土）を掘削し、Ⅳ層上面でⅢ層由来の遺構を検出した。

また、調査区北西側の地山面ではⅡ層（近世～近代）由来の遺構を検出し、調査の工程上これらをまとめて第１遺構面とした（第 21 図）。

その後、貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）を掘削しⅣ層中より集石遺構を検出し、第２遺構面とした（第 25 図）。

なお、調査中に南壁より埋没古墓（27 号墓）が確認された。古墓の詳細は第５章に記載する。

第１遺構面

グスク時代と近世～近代の遺構が確認されている（第 21 図）。

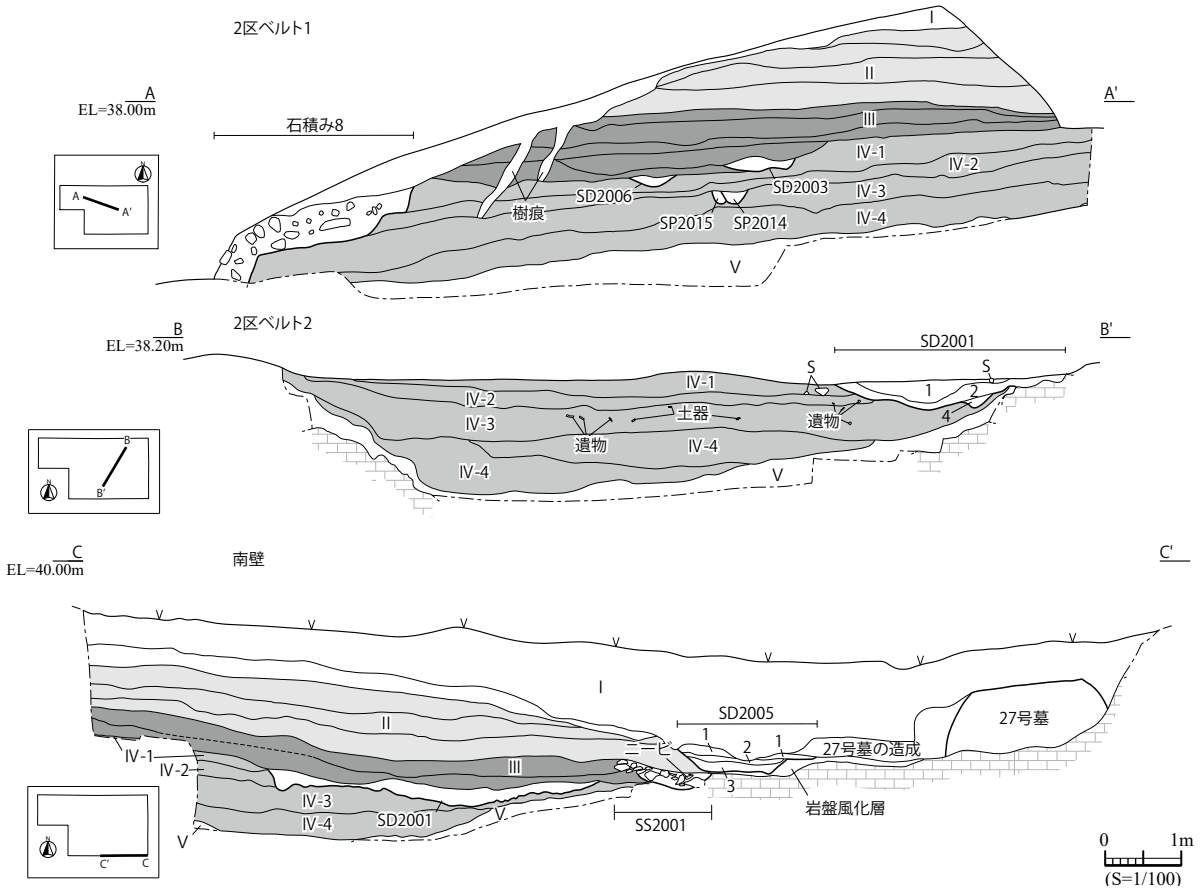
近世～近代　古墓群に伴う石積み８や溝状遺構、土坑が確認されている。

溝状遺構のうち、SD2002 は北西−南東方向にのびており、１区の溝状遺構（SD1001）につながる。

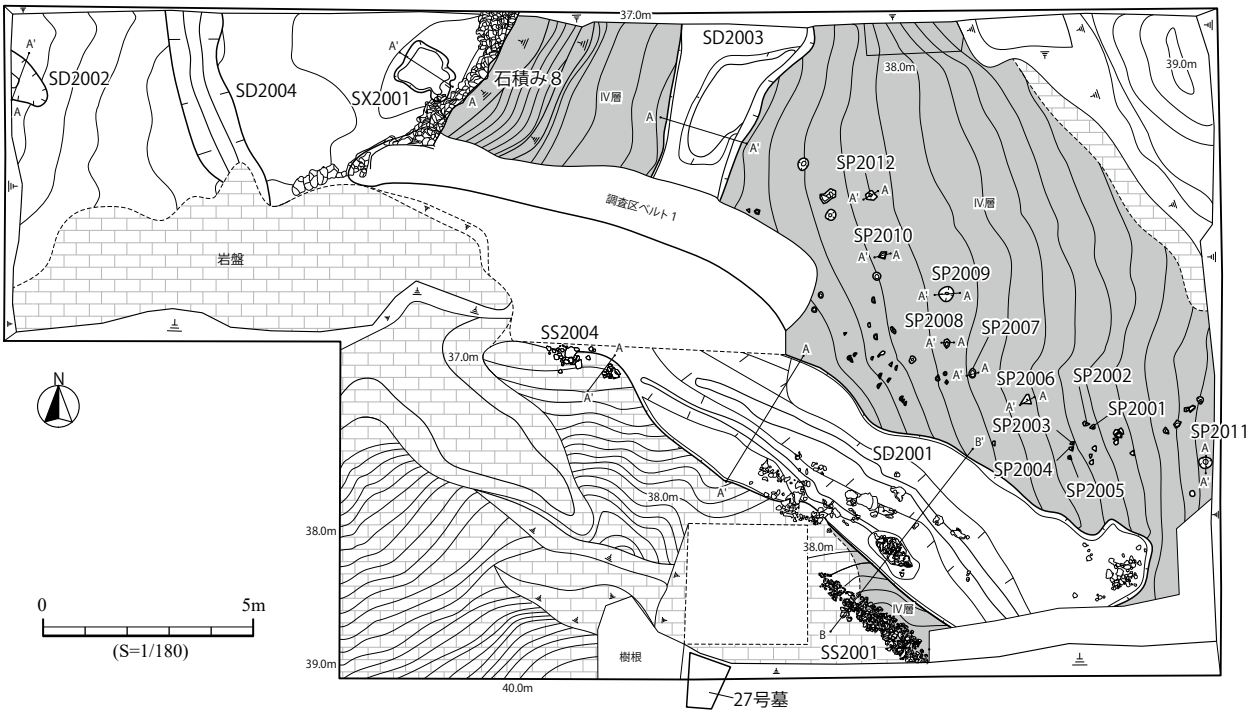
SD2004 は南北にのびるもので、他の溝状遺構とは方向が異なる。また、戦後のものとみられる鉄屑やガラス片などを含む。このほかに、不定形な土坑（SX2001）が確認されている。

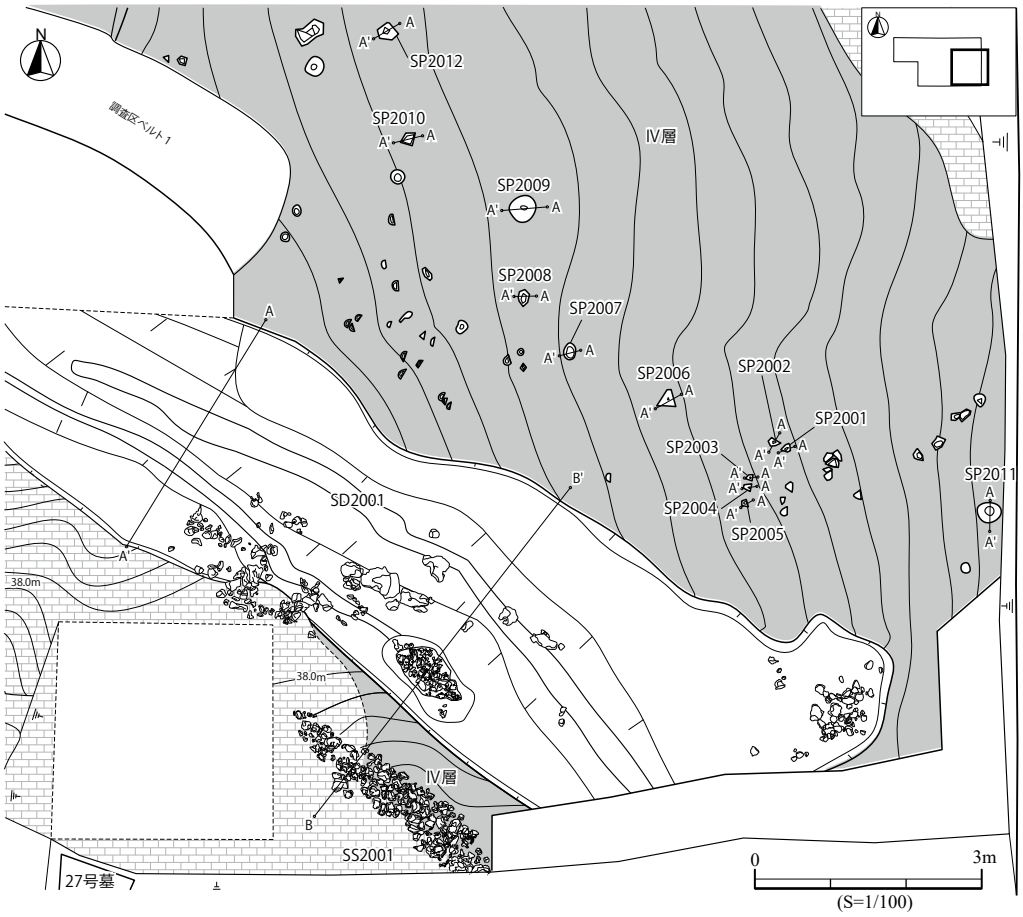
グスク時代　Ⅳ層上面で溝状遺構と石列、鍬跡の可能性があるピットが確認されている。

溝状遺構（SD2001・SD2003）は二つが直交するかたちで検出されている。SD2001 は谷地形を利用したもので、北西−南東方向にのび北西側に傾斜する。

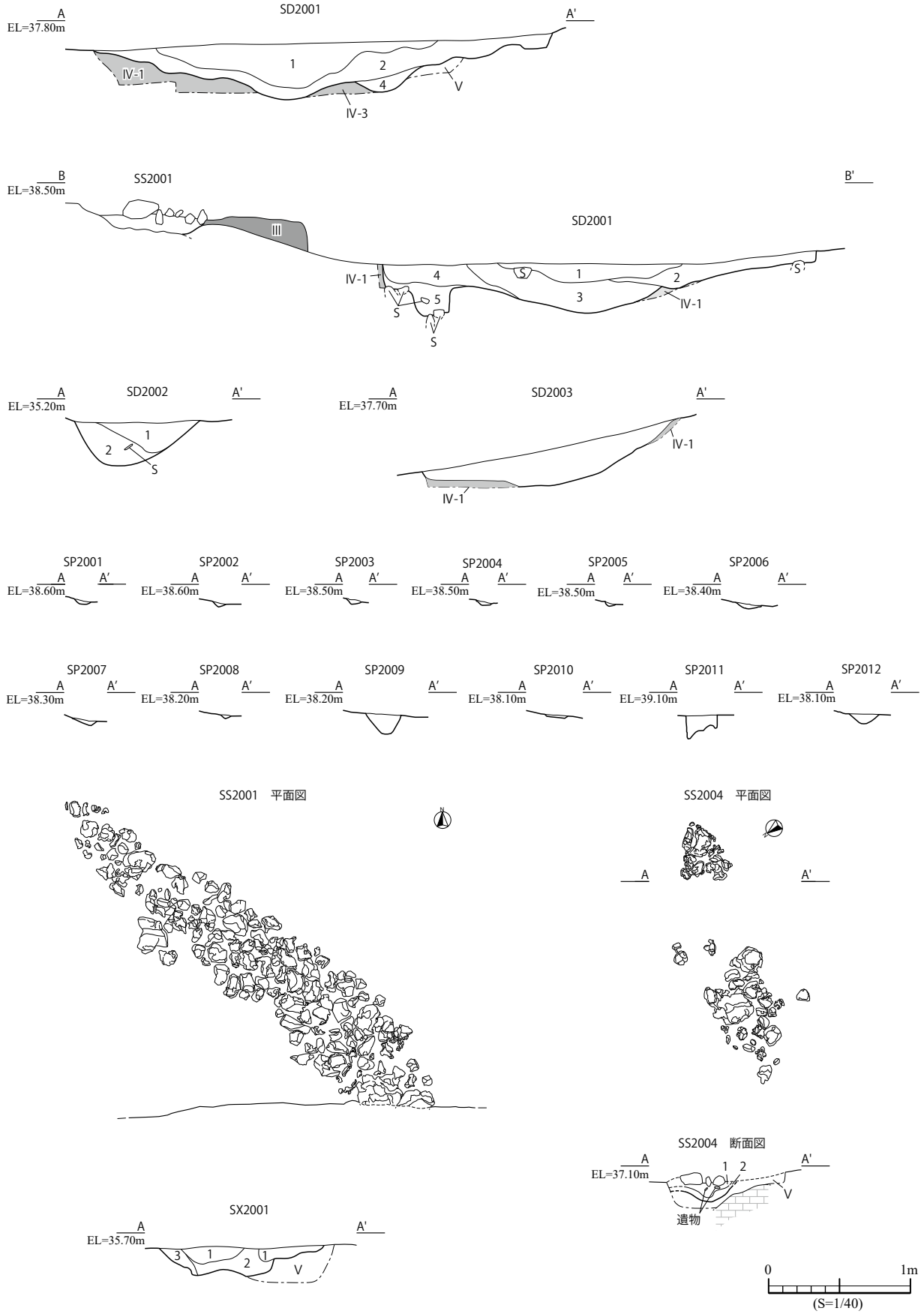


第 20 図　２区土層断面図





第 21 図　2 区第 1 遺構面



第 22 図　2 区第 1 遺構面の遺構

当該遺構は何度か再構築されたとみられ、土層観察用畦（A-A'）から北東側の堀方が新しいことが確認された。一部で土坑状に掘り込み石灰岩礫を充填している箇所があり、礫とともにシャコガイが出土している。埋土には、地山の島尻マージ（Ⅴ層）由来の橙色粒を多く含む。SD2001 の南隣には石列（SS2001）が平行しており一連の遺構と考えられる。

SD2001 からは青磁Ⅰ類（124）・Ⅱ類・Ⅲ類（134）・Ⅳ類（139･140）・Ⅴ類（159･163）､磁竈窯系青磁（175）､白磁Ｃ・Ｄ群、グスク土器第２様式壺（99）、カムィヤキ（117）などグスク時代の遺物が出土しており、古手のものも含まれるが 14 世紀後半～ 15 世紀初頭の遺構と考えられる。このほかに貝塚前期土器（63・68）や石器（261・264）も出土している。

SD2001 の年代測定の結果、２層 660 ± 20BP、３層 2920 ± 20BP・530 ± 20BP、５層 2165 ± 20BP で、貝塚時代前期に該当する古い値も得られているが、２層は 13 世紀後半～ 14 世紀後半、３層は 14 世紀前半から 15 世紀前半で出土遺物の年代観とも整合的な値を示す。

また、SD2001 の土層観察用畦（B-B'）から回収した土壌 213.5kg をフローテーション処理した結果、イネ籾１個、キビ２個、アワ９個、オオムギ 16 個、オオムギ - コムギ 30 個、コムギ 131 個、豆類のアズキ亜属１個など栽培植物の炭化種実が確認された。最も多いのがコムギであり、14 ～ 15 世紀にはこの周辺でコムギなどが栽培されていた可能性が高い。

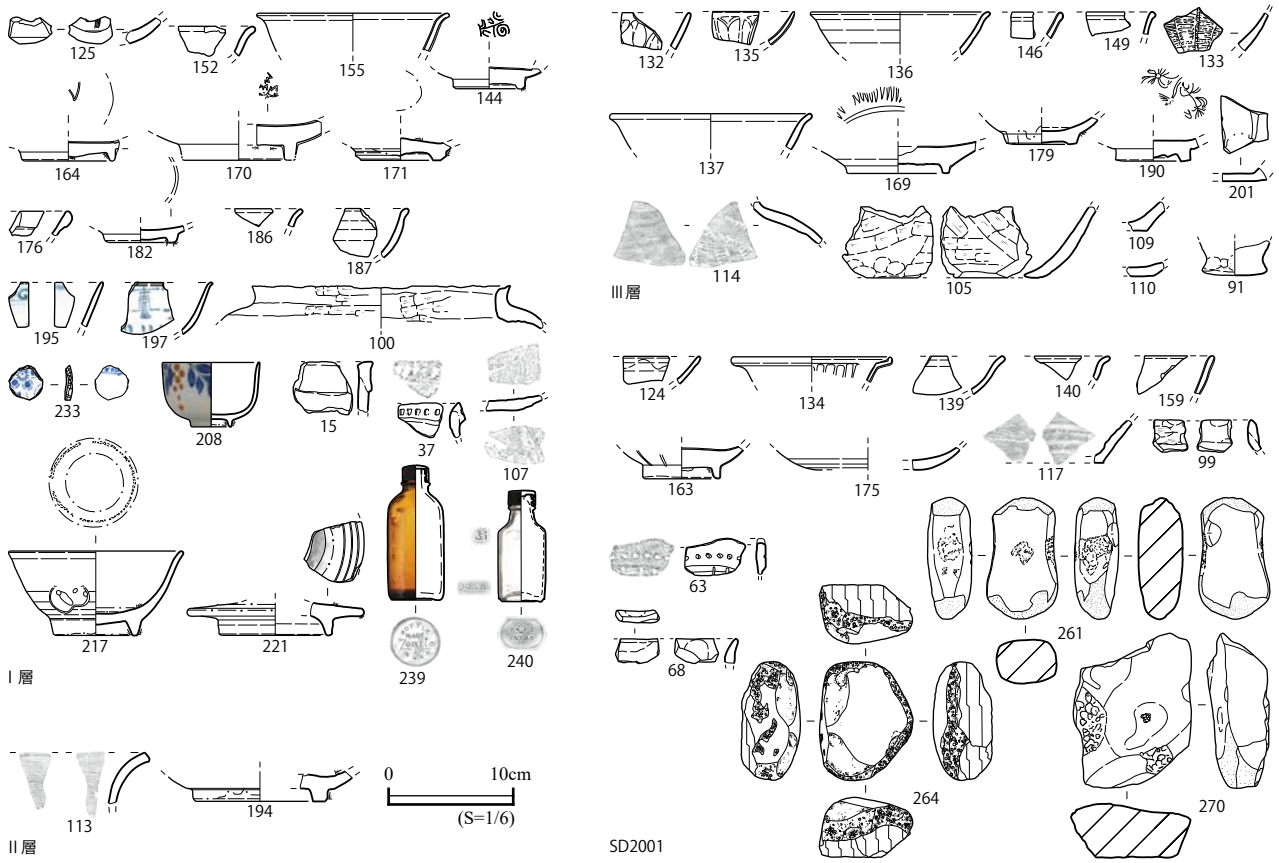
SD2003 は、SD2001 に直交する形で北東−南西方向にのびている。これら二つの溝状遺構により区画された範囲には、鍬跡とみられるピット群が検出されている。

鍬跡とみられるピットの多くは、平面が三角形状で、断面も三角形状で浅いものが多い。深さは平均 4.3 ㎝である。平面や断面が不定形なものがあり、樹根などの可能性がある（SP2011）。

石列（SS2001）は､溝状遺構（SD2001）の南隣で並行し、10 ～ 20 ㎝前後の石灰岩小礫を北西−南東方向に配している。斜面地下部には､礫集積遺構（SS2004）があるが、これは残りが悪く判然としないものの、本来は石列として SS2001 と一連であった可能性もある。これらは、ともにⅢ層に帰属する遺構である。

溝状遺構（SD2001･2003）と石列（SS2001･2004）は、グスク時代の耕作関連の遺構と考えられ、谷地形を溝や畦により区画していたと考えられる。

なお､２区Ⅲ層からは青磁Ⅱ類（132･133）･Ⅲ類（135）･Ⅳ類（136･137）･Ⅳ’類（146･149）･Ⅴ類（164）･盤（169）、グスク土器第３様式（105）、カムィヤキＢ群（114）などグスク時代の遺物が出土している。



第 23 図　２区第１遺構面出土遺物

第２遺構面

貝塚時代と考えられる遺構として、集石遺構（SS2002・SS2003）が２基確認されている（第 25・26 図）。

SS2002 は、２区東側（ズケ９−Ｉ６・Ｊ６）で、約５〜 30 ㎝の石灰岩礫を列状に集積している。方位は東西方向である。残存する長さは約４m、幅１m である。

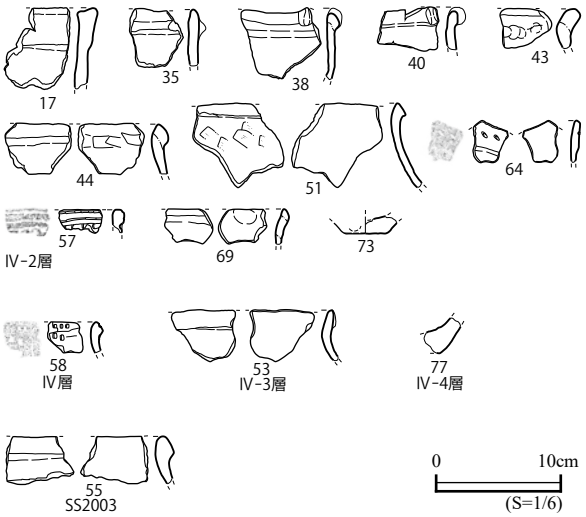
SS2003 は、SS2002 北西の斜面下に位置し、約５〜 20 ㎝の石灰岩礫を列状に集積している。方位は北東 − 南西方向である。残存長約４m、幅 0.5 〜 0.8m である。

当初、SS2002 はⅢ層に伴う遺構として検出されたが、精査を行った結果、Ⅳ層に帰属する遺構であることを確認した。SS2003 はⅣ層掘削中にⅣ−２層中より検出された。精査を行ったが明確な掘方は確認することが出来なかった。礫集積によって緩斜面地を区画した遺構と考えられ、本来は畦のような構造であったと思われる。

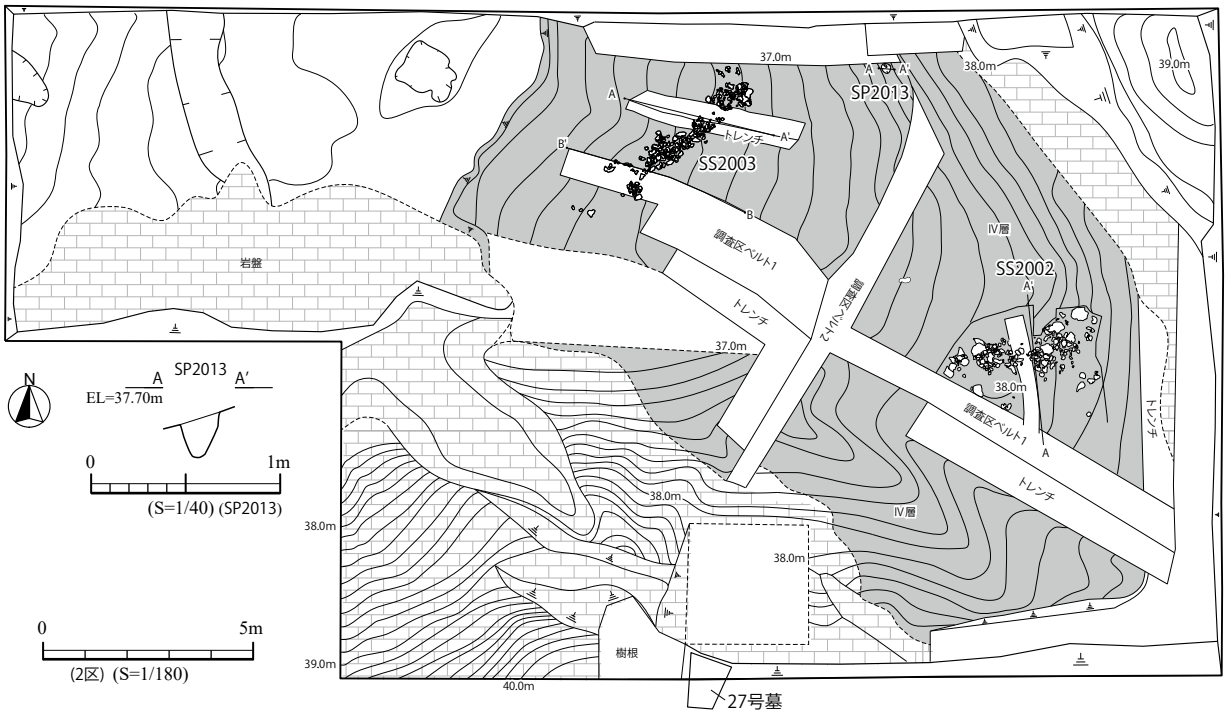
なお、集石遺構が帰属するⅣ − ２層からは、宇佐浜式 (38・51) を中心に貝塚前期土器が多く出土したことから、調査時は貝塚時代前期の遺構と考えていた。

しかし、集石遺構の年代測定を行った結果、SS2002 は３層 3950 ± 20 BP・４層 1130 ± 20BP、５層 1255 ± 20BP、６層 1420 ± 20 BP で、SS2003 は３層 1125 ± 20BP・1095 ± 20BP、４層 1460 ± 20BP の年代が得られた。SS2002 の３層が貝塚時代前期の年代を示すものの、他は貝塚時代後期後半の６世紀後半〜 10 世紀後半の値でまとまっている。また、２区Ⅳ − １・２層の年代測定結果は、Ⅳ − １層 1265 ± 20BP、Ⅳ − ２層 1220 ± 20BP で７世紀後半〜９世紀後半の値で集石遺構の測定年代値に近い値を示す。なお、Ⅳ−１・２層測定年代値の逆転は誤差の範囲とされる。Ⅳ−２層出土遺物は貝塚前期土器が主体であるが（第 24 図）、貝塚後期土器も胴部片ではあるが一定量出土しており、全体の約 35%を占める（第６章 161 図）。

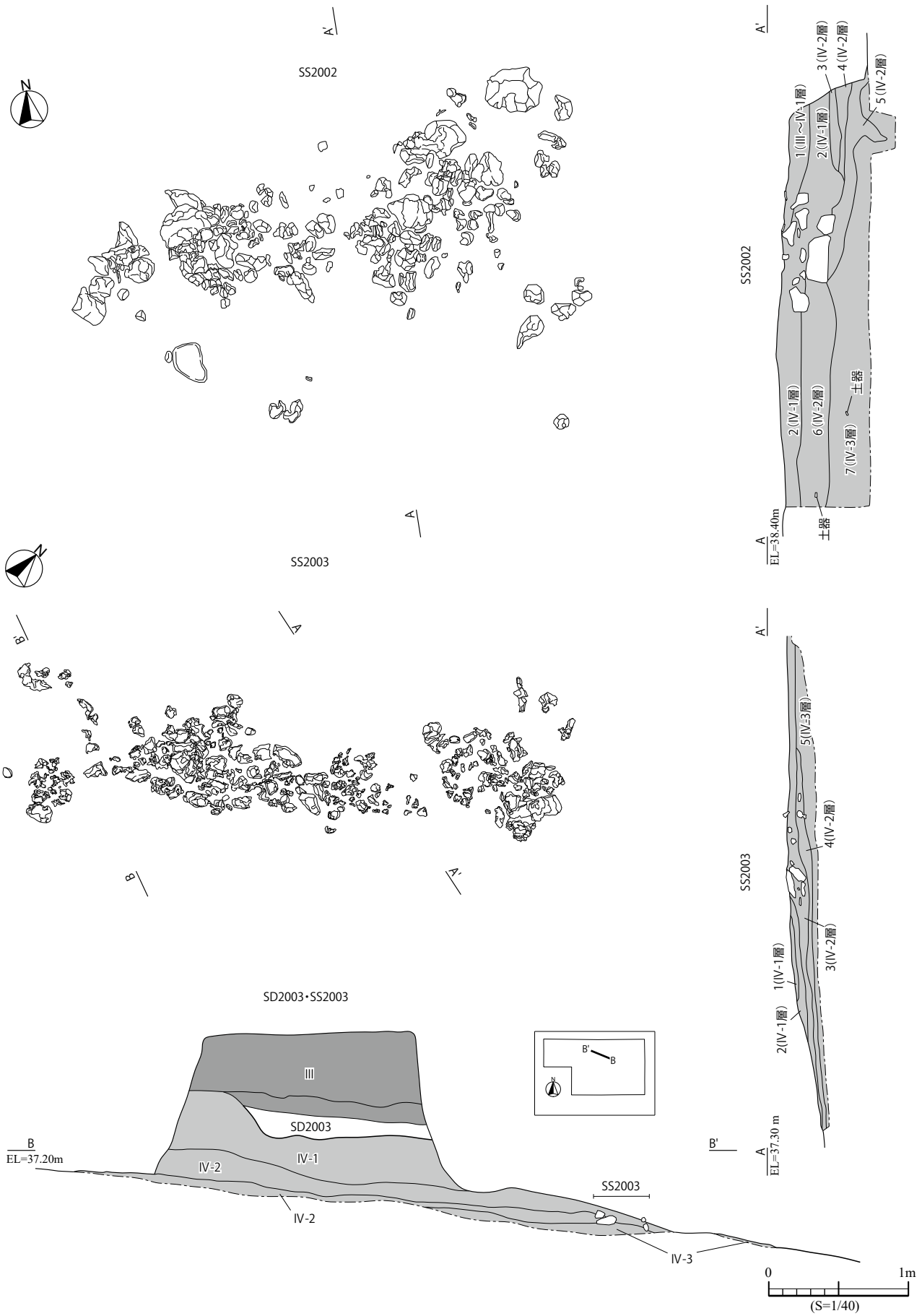
上記の年代測定結果と出土遺物から、当該遺構は貝塚時代後期後半の遺構となる可能性が高い。上位のⅢ層からはくびれ平底土器（91）が出土している（第 23 図）。なお、Ⅳ−２層からは青磁とグスク土器が１点出土している。このほか、ピット (SP2013) が確認されており、埋土はⅣ層に類似している。



第 24 図　２区第２遺構面出土遺物



第 25 図　２区第２遺構面



第 26 図　2 区第 2 遺構面の遺構

（４）３区

３区は普天間石川原第一遺跡南西側の標高 48m 前後の丘陵斜面地に設定し、グリッドはズケ９－N7・N8・O7・O8、調査面積は 550 ㎡である。

層序と地形

調査区は西側に傾斜する地形で、一部石灰岩岩盤（VI 層）が露出している。西側半分は撹乱を受けている。

遺構と遺物

調査は、Ⅰ層とⅡ層掘削後にⅡ・Ⅲ層由来の遺構を地山面で検出した（第 27 図）。遺構は少なかった。

近世～近代の土坑（SK3001）は半分のみ残存し、内部に礫を含む。ピットは近世～近代（SP3001・3003）とグスク時代（SP3002）が確認された。

遺物は、青花（198）や骨製品（276）、金属製品（287）が出土している。

（５）４区

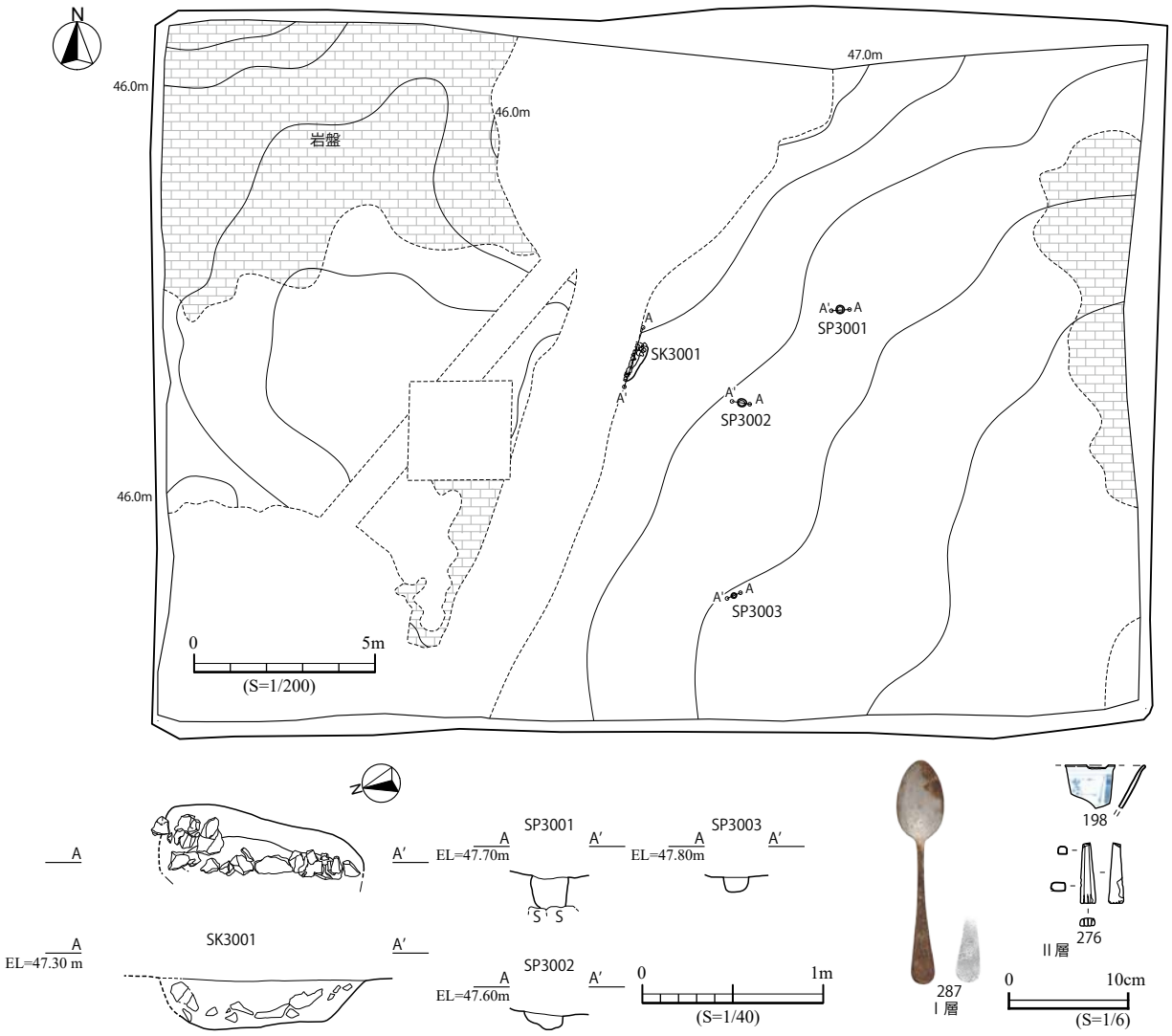
４区は３区北側の標高 48m 前後の丘陵斜面地に設定し、グリッドはズケ９－Ｋ５～６・Ｌ５～Ｌ７・Ｍ５～Ｍ７、調査面積は 1410 ㎡である。

層序と地形

Ｌ字状となる調査区の中央は西方向に傾斜する谷地形（埋没谷２）となっており、そこにⅡ～Ⅳ層が堆積している。また、調査区北側は北西方向へ緩やかに傾斜して石灰岩岩盤が露出している。

遺構と遺物

はじめに、Ⅰ層とⅡ層を掘削し調査区中央谷部にⅢ層の堆積と広がりを確認した。Ⅱ層中もしくはⅢ層上面およびⅤ層地山面で検出されたⅡ層由来の遺構、西側の地山面で検出されたⅢ層由来の遺構をまとめて第１遺構面とした（第 30 図）。



第 27 図　３区の遺構

第 28 図　３区出土遺物

続いて、Ⅲ層の掘削中にⅢ層中でピットが検出されたため、これを第２遺構面とした（第 33 図）。

その後、Ⅲ層を掘削し、Ⅴ層上面でⅢ層由来の遺構を検出した。谷地形を利用した溝状遺構の底面には貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）が一部残存していた。最終的にⅣ層を完掘して谷状地形の地山面を検出し、これらをまとめて第３遺構面とした（第 35 図）。

なお、調査区内より埋没古墓（26・31・36 号墓）が確認された。古墓の詳細は第５章に記載する。

第１遺構面

近世〜近代　石列や溝状遺構などが確認されている（第 30 図）。

石列（SS4001）は、Ⅱ層中で検出されたもので、石灰岩礫をほぼ南北方向に配している。

溝状遺構は、Ⅲ層上面やⅤ層上面で検出されている。SD4001 は、４区北側（ズケ９−Ｌ５）に位置し、Ⅴ層上面で検出された。北西−南東方向にのびており、隣接する５区の溝状遺構（SD5012）につながる。

SD4002 は４区中央のⅢ層上面で検出され、北西−南東方向にのび、底部のみが残存している。SD4006 は４区南側のⅤ層上面で検出され、南壁から北東方向にのびている。SD4006 からは、軍靴（289）やバックル（290・291）など米軍関連の製品がまとまって出土している。

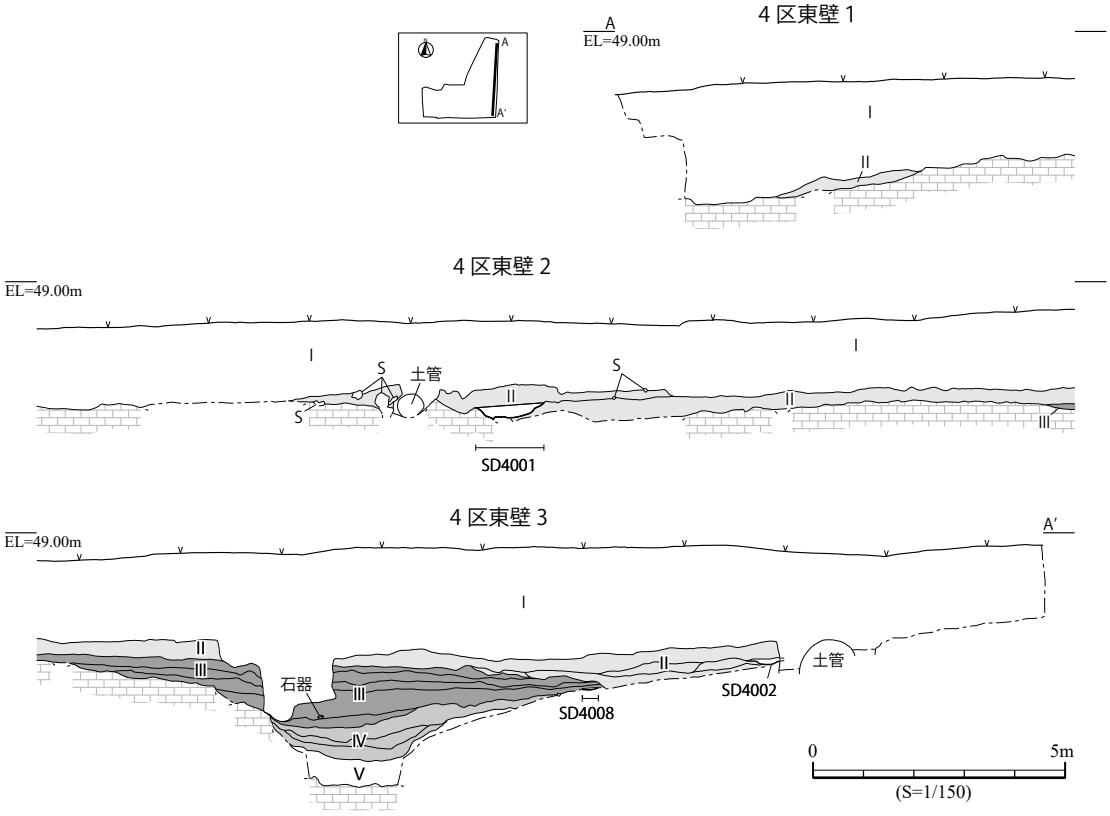
土坑（SK4001・4002）は溝状の遺構であった可能性がある。

石列や溝状遺構は、昭和 20 年の航空写真における耕作地の区画と向きが揃うことから、戦前の耕作に伴う遺構と考えられる。また、Ⅱ層からは近代磁器類とともに厨子甕（227・228）が出土しており、埋没古墓（26・31・36 号墓）に関連するものとみられる。

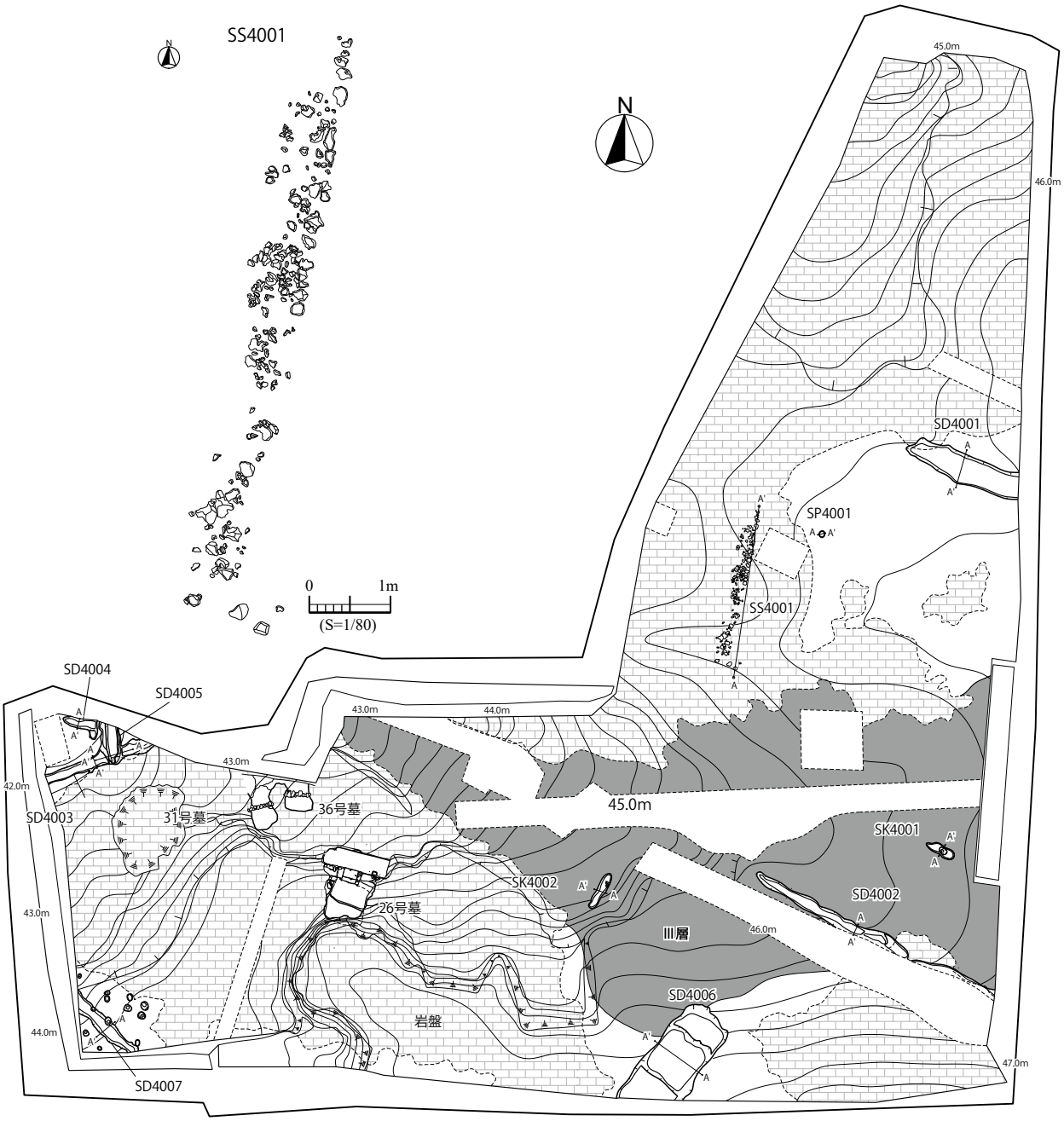
グスク時代　Ⅴ層地山面で溝状遺構やピットが確認されている（第 30・31 図）。

溝状遺構（SD4003 〜 4005）は４区西側の斜面下側において、相互に連結するかたちで検出された。SD4003 は北東−南西方向、SD4004 は東西方向、SD4005 は南北方向にそれぞれのびている。SD4007 は、４区西壁付近において、北西−南東方向にのびる。SD4007 周辺には、ピットが検出されている（SP4002 〜 4013）。ピットのうち、鍋底状のもの（SP4006 〜 4009・4011）や、不定形なもの（SP4005・4012）がある。植栽痕など耕作に関連するものであろう。

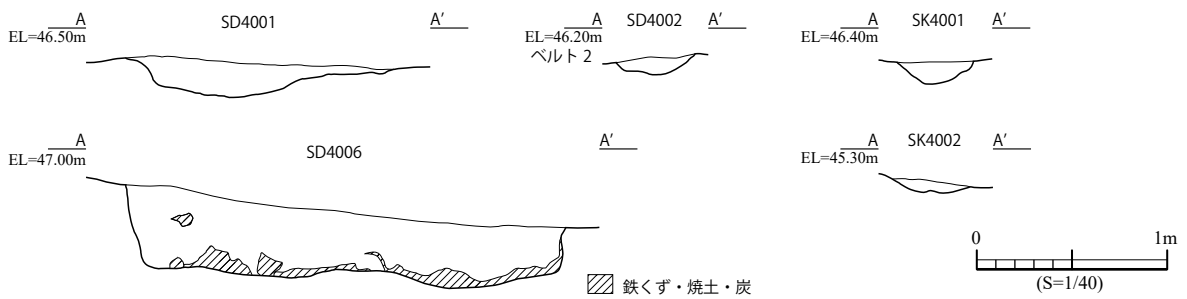
また、調査区北側に柱穴と思われるピット（SP4001）が１基のみ確認されている。



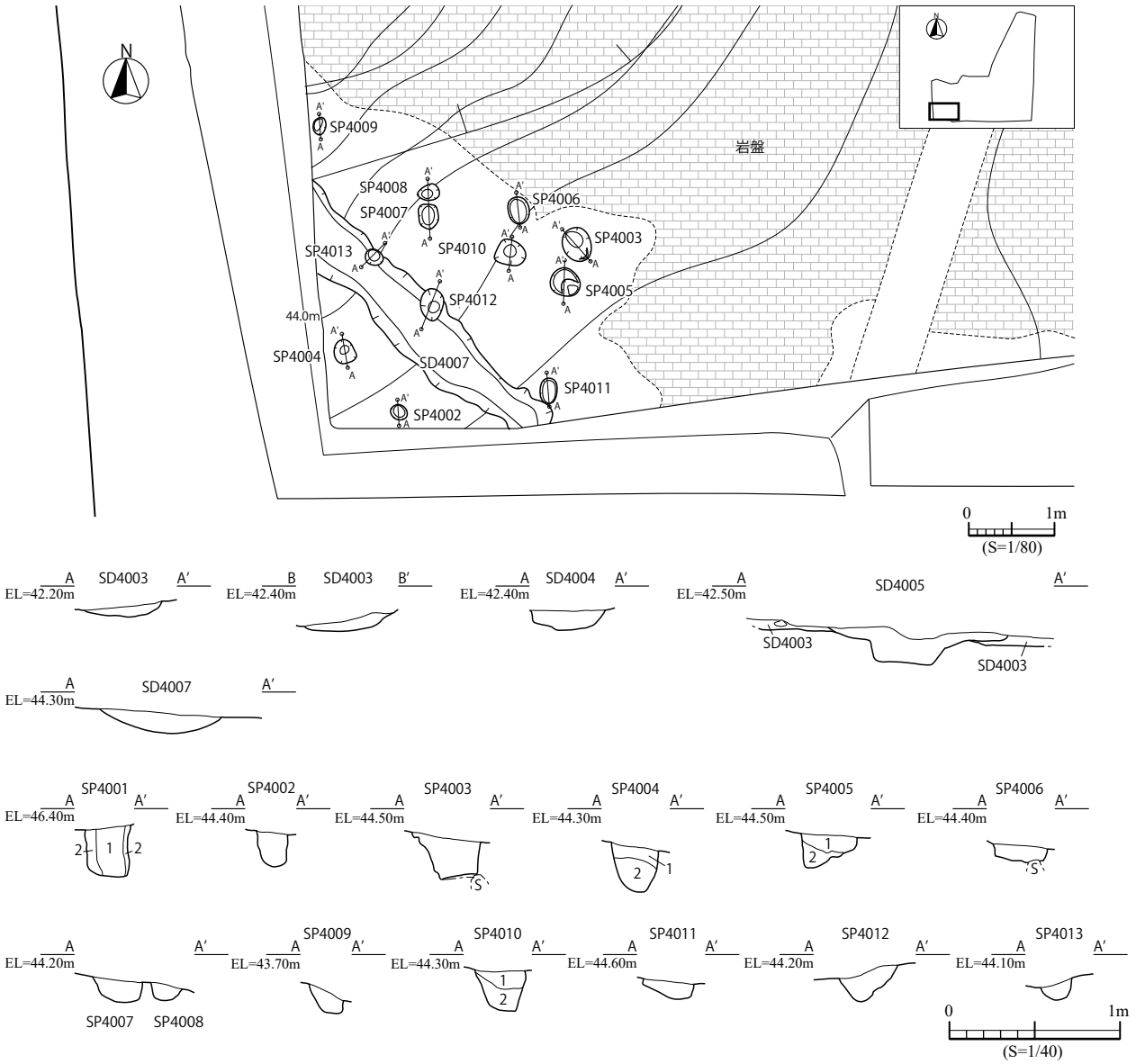
第 29 図　４区土層断面図



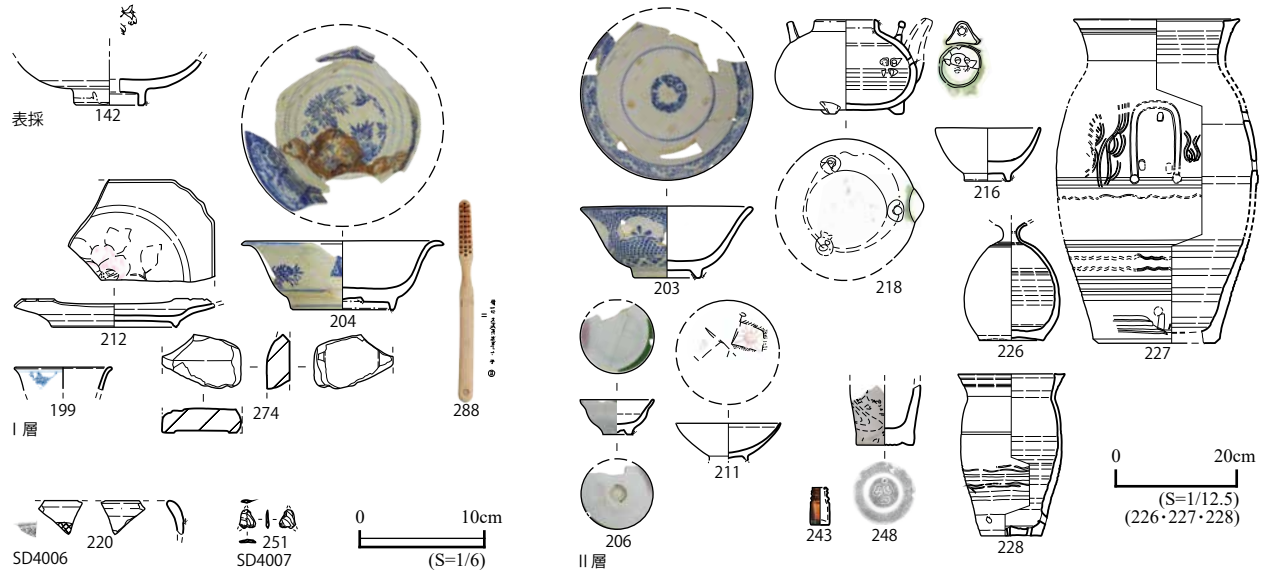
4区　第一遺構面



第 30 図　4 区第 1 遺構面の遺構 1



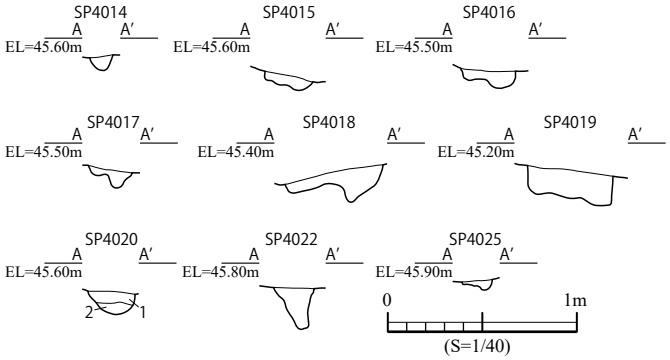
第 31 図　4 区第 1 遺構面の遺構 2

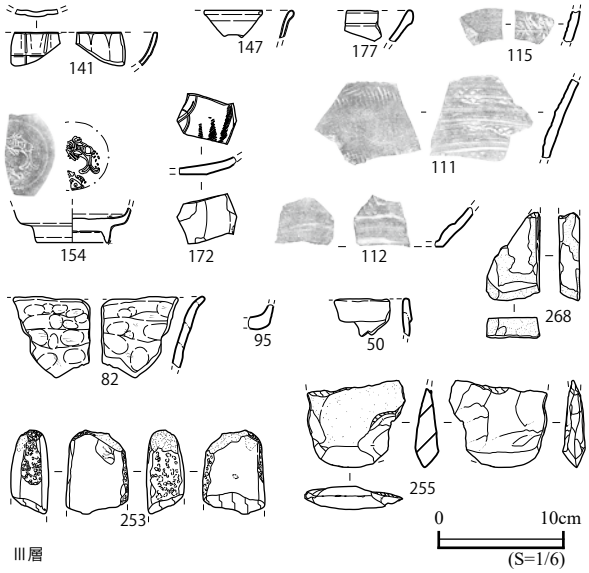


第 32 図　4 区第 1 遺構面出土遺物

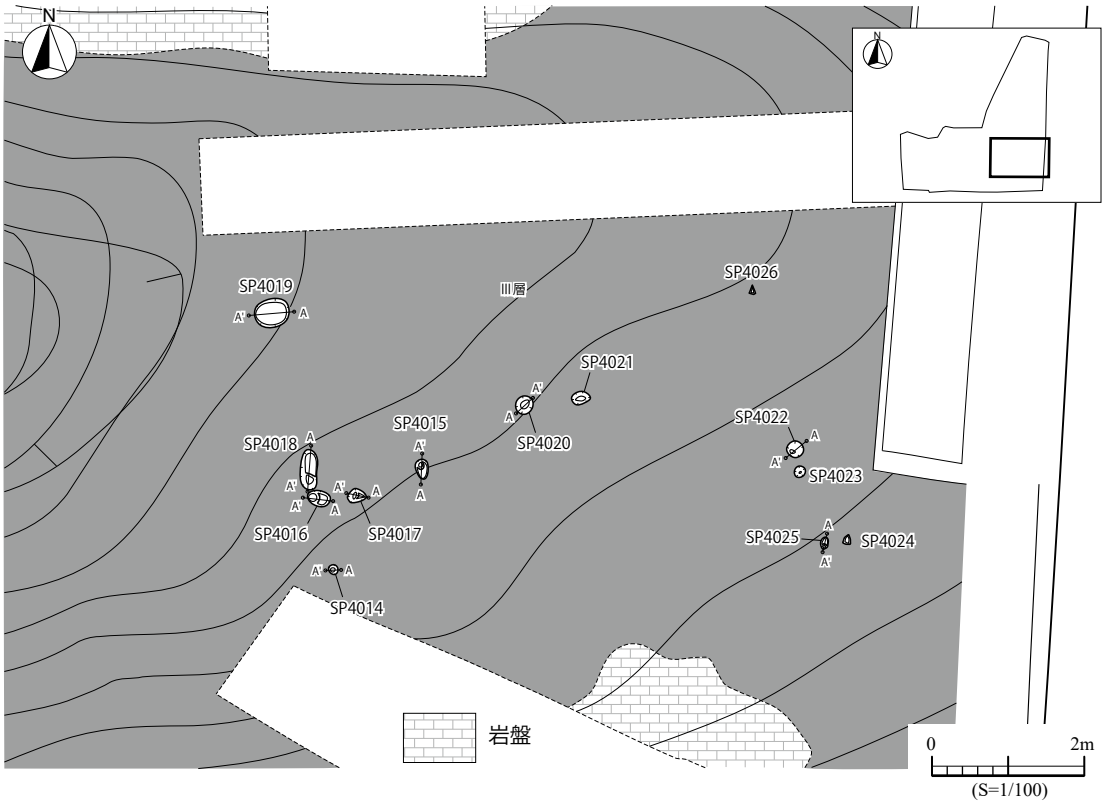
第２遺構面

Ⅲ層中において、グスク時代のピットが検出されている（第 33 図）。ピットのうち、浅く鍋底状を呈し植栽痕と考えられるもの（SP4020）、平面・断面形が三角形に近いものは、鍬跡の可能性がある（SP4024 ～ 4026）。断面が不定形なものは樹根などの可能性がある（SP4022）。なお、４区Ⅲ層からは、青磁Ⅳ’類（147・154）や同安窯系青磁（172）、白磁Ⅳ類（177）、カムィヤキ（111・112・115）などグスク時代の遺物とともに、貝塚時代の土器（82・50・95）や石器（253・255・268）が出土している。





第 34 図　４区第２遺構面出土遺物



第 33 図　４区第２遺構面の遺構

第３遺構面

谷地形のⅢ層掘削後、Ⅴ層地山面で溝状遺構やピットが確認された（第 35 図）。遺構の時期としては、貝塚時代後期後半からグスク時代と考えられる。

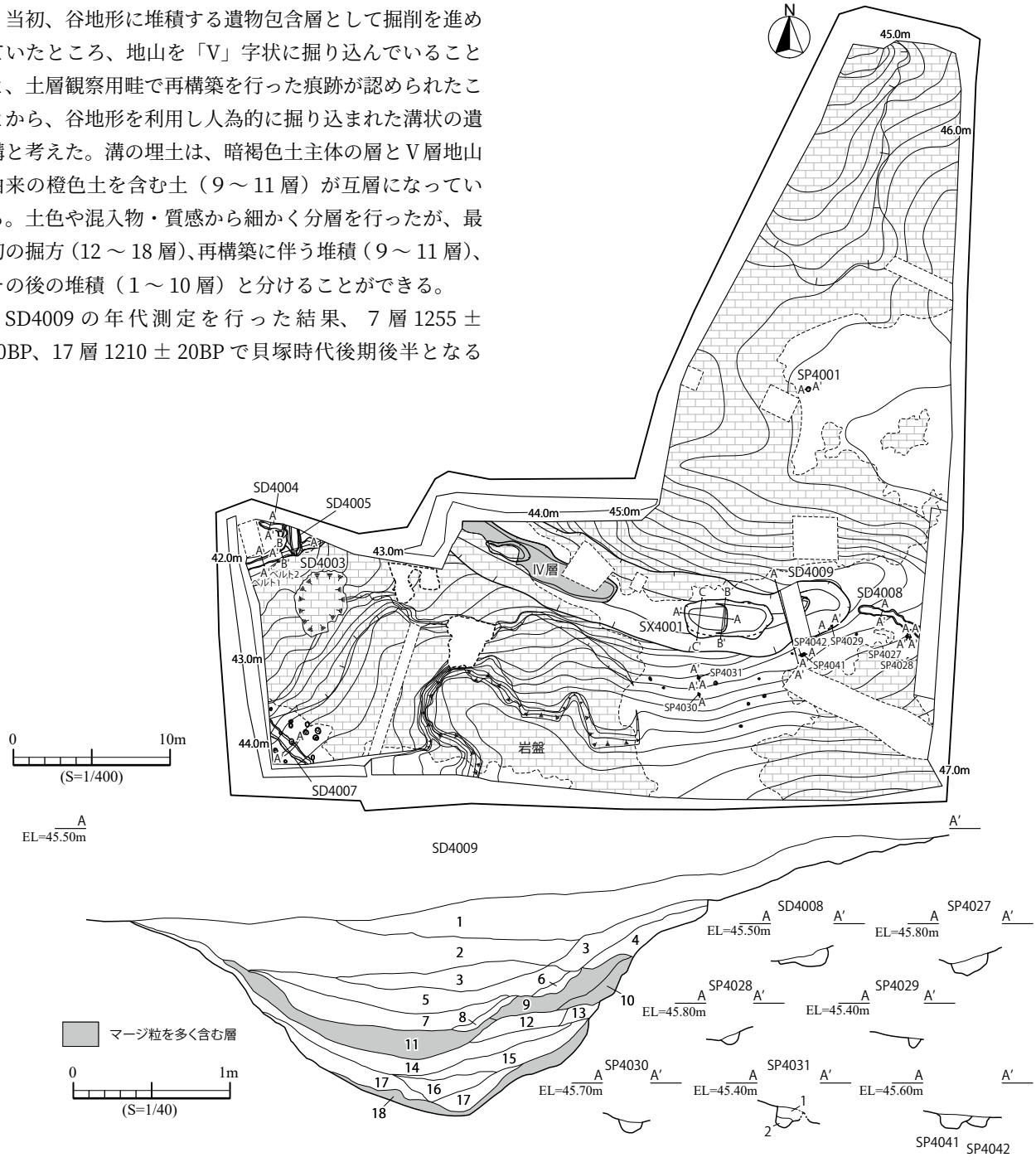
SD4008 は４区東壁から西にのびる溝状遺構で、Ⅴ層上面で検出された。深さは 10 ㎝で浅く、耕作などによって底部のみが残存していると考えられる。

SD4009 は、谷地形を利用した大きな溝状遺構である。地山を「V」字状に掘り込み、幅約４m、深さ約 1.3m と規模は大きく、北西方向に蛇行して傾斜する。

当初、谷地形に堆積する遺物包含層として掘削を進めていたところ、地山を「V」字状に掘り込んでいることと、土層観察用畦で再構築を行った痕跡が認められたことから、谷地形を利用し人為的に掘り込まれた溝状の遺構と考えた。溝の埋土は、暗褐色土主体の層とⅤ層地山由来の橙色土を含む土（９～ 11 層）が互層になっている。土色や混入物・質感から細かく分層を行ったが、最初の掘方（12 ～ 18 層）、再構築に伴う堆積（９～ 11 層）、その後の堆積（１～ 10 層）と分けることができる。

SD4009 の年代測定を行った結果、７層 1255 ± 20BP、17 層 1210 ± 20BP で貝塚時代後期後半となる７世紀後半～９世紀後半の年代が得られた。

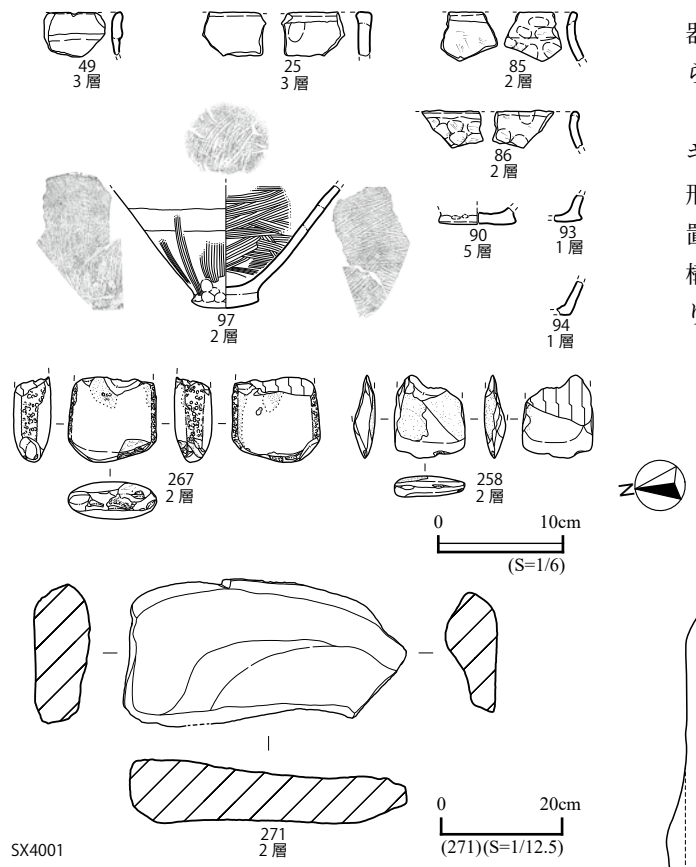
SD4009 からは遺構年代を検討できる遺物は出土していないが、SD4009 の底面で検出された土坑（SX4001）からは貝塚後期のくびれ平底土器（90・97）や貝塚前期土器（25・49）が出土している（第 36・37 図）。Ⅴ層の地山に近い土色や質感で、谷底の窪みに堆積したⅣ層の一部とも考えられる。くびれ平底土器（90･97）は、SD4009 に伴う遺物の可能性がある。



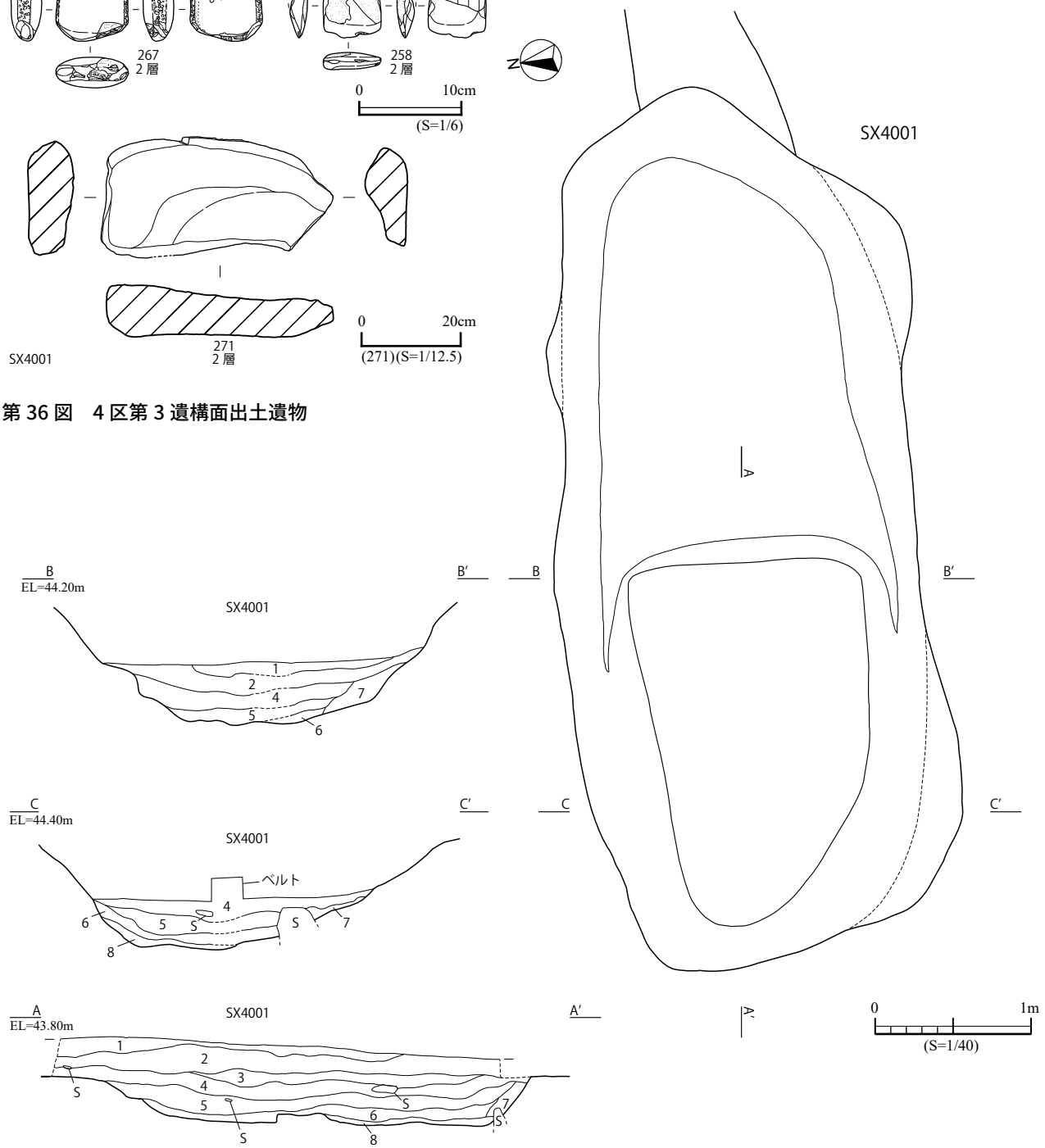
第 35 図　４区第３遺構面の遺構１

上記の年代測定結果や、溝の底部分からくびれ平底土器が出土したことから、SD4009 は貝塚時代後期後半からグスク時代にかけての溝状遺構と考えられる。

なお SD4009 からは、栽培植物であるイネ籾やオオムギ、コムギの炭化種実が僅かに得られている。埋没谷地形において溝状遺構や鍬跡が検出された斜面の下位に位置することから、耕作における排水などを目的とした遺構であろう。SD4009 南側斜面にはピットが点在しており、殆どが浅く鍬跡など耕作関連の遺構とみられる。



第 36 図　4 区第 3 遺構面出土遺物



第 37 図　4 区第 3 遺構面の遺構 2

（６）５区

５区は標高 50m の平坦地に設定し、４区の東側に隣接する。５区は北側（１・２地点）と南側（３地点）に地区分けを行っており、５区北側を平成 30 年度、５区南側を令和元（平成 31）年度に調査した。

５区の総面積は 4292 ㎡であり、このうち５区北側（１地点）は、普天間グスクンニー遺跡範囲である（400 ㎡）。

５区北側（２地点）・南側（３地点）は普天間石川原第一遺跡の範囲であり、北側（２地点）のグリッドはズケ９−Ｊ３〜４・Ｋ２〜５・Ｌ２〜５で調査面積 2570 ㎡、南側（３地点）のグリッドはズケ９−Ｌ２〜５・Ｍ２〜５・Ｎ４〜５、調査面積 1322 ㎡である。

普天間グスクンニー遺跡範囲は、第４章に記載する。

層序と地形

５区北側（２地点）は北西方向に傾斜する谷地形（埋没谷１）が広がり、そこにⅡ〜Ⅳ層が堆積している。北西側（ズケ９−Ｊ４・Ｊ５）ではⅠ層が４m 以上堆積し、掘削深度は最終的に地表面から５m を超えた（第 38 図）。

埋没谷１のⅢ層は厚く、数層に細分可能である。５区の調査区ベルト１〜３では、暗褐色（10YR 3/4）主体のⅢ−２・４・６層と褐色（10YR 4/6）に近い明るめのⅢ−１・３・５層が互層となり、谷地形に沿って水平に堆積する（第 39 図）。ベルト１中央部で層厚最大 1.5m を測り、東側は浅くなる。

東壁ではⅣ層が堆積しており、東壁周辺はⅠ層直下でⅣ層や地山（Ⅴ層）・石灰岩岩盤（Ⅵ層）が検出され、本来は緩やかな谷地形が続いていた可能性がある。また、埋没谷１の南西側斜面は石灰岩岩盤が露出している。

５区南側（３地点）は「L」字状の調査区となっており、調査区西側（ズケ９−Ｍ５・Ｎ４〜５）において、６区と４区をつなぐかたちで、北西方向に蛇行しながらのびる谷地形（埋没谷２）が広がっており、そこにⅢ・Ⅳ層が厚く堆積している。なお、３地点東側（ズケ９−Ｌ３・Ｍ３）は埋没谷１の南側範囲となる。

Ⅱ層は調査区全体に広がり、溝状遺構周辺ではⅡ層直下で平坦な地山（Ⅴ層）と石灰岩岩盤（Ⅵ層）が露出しており、耕作等により切土された可能性がある。

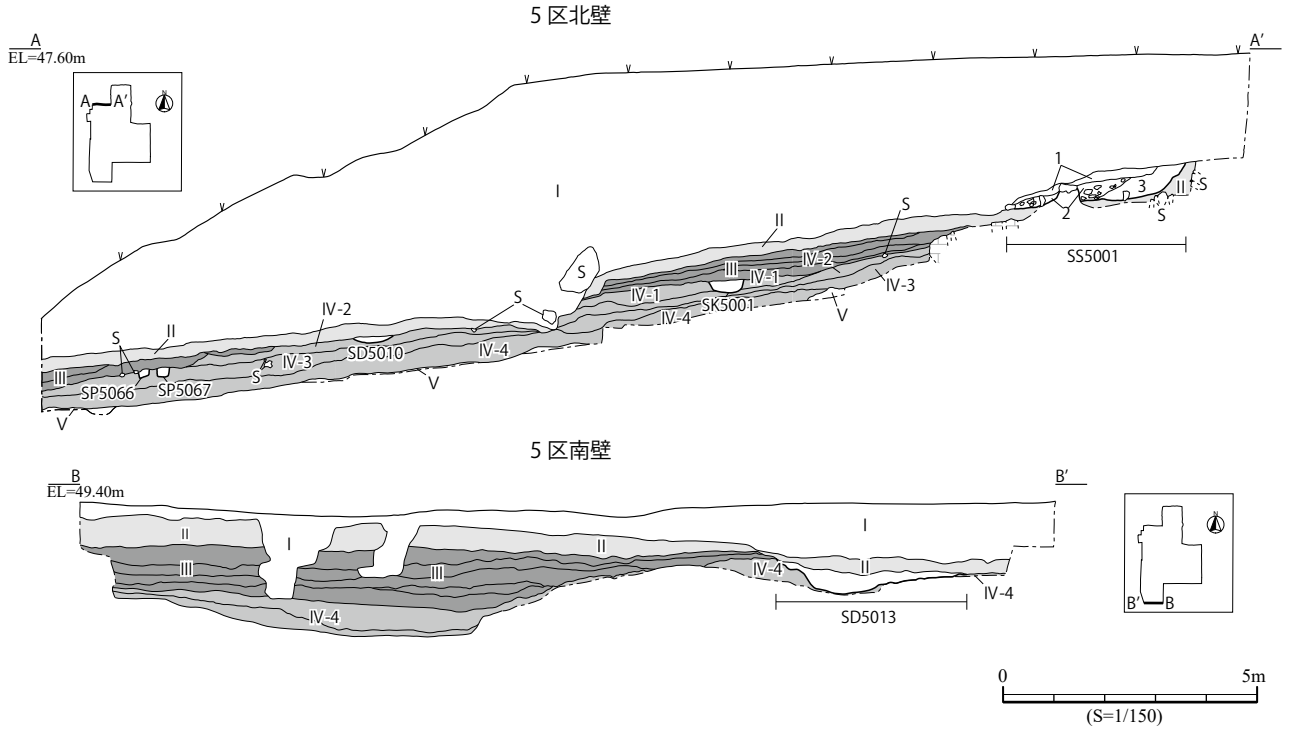
遺構と遺物

調査は、Ⅰ・Ⅱ層掘削後にⅢ層上面や地山面で検出されたⅡ層由来の遺構面を第１遺構面とした（第 40 図）。

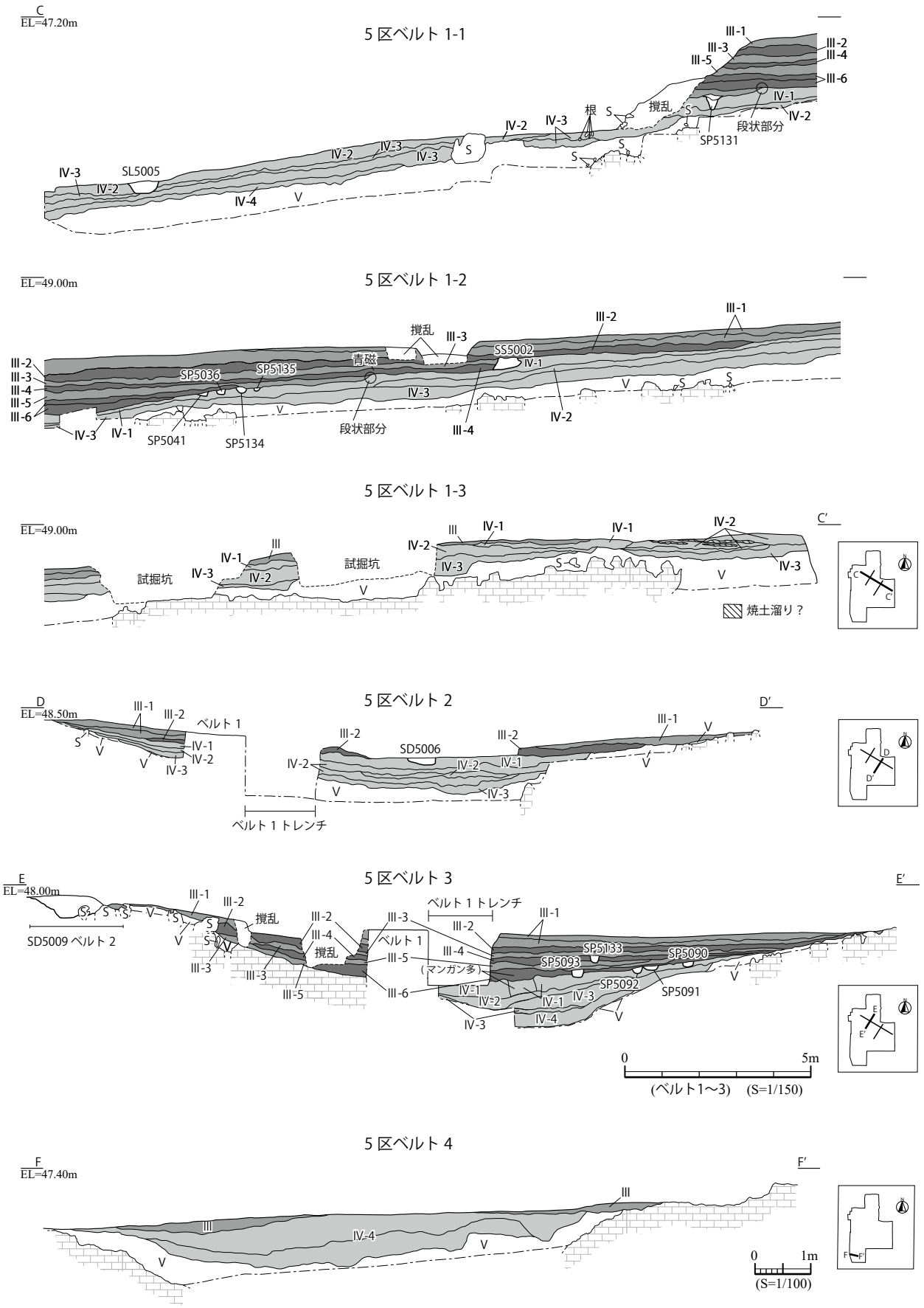
続いて、グスク時代の耕作土（Ⅲ層）を掘削し、Ⅳ層上面や地山面でⅢ層由来の遺構を検出し、第２遺構面とした（第 45・55 図）。

その後、貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）を掘削し、Ⅳ層中より集石遺構を検出し第３遺構面とした。最終的に谷地形の地山面を検出した（第 58 図）。

なお、調査区内より埋没古墓（34・35 号墓）が確認された。古墓の詳細は第５章に記載する。



第 38 図　５区土層断面図１



第 39 図　5 区土層断面図 2

第 40 図　5 区第 1 遺構面

第１遺構面

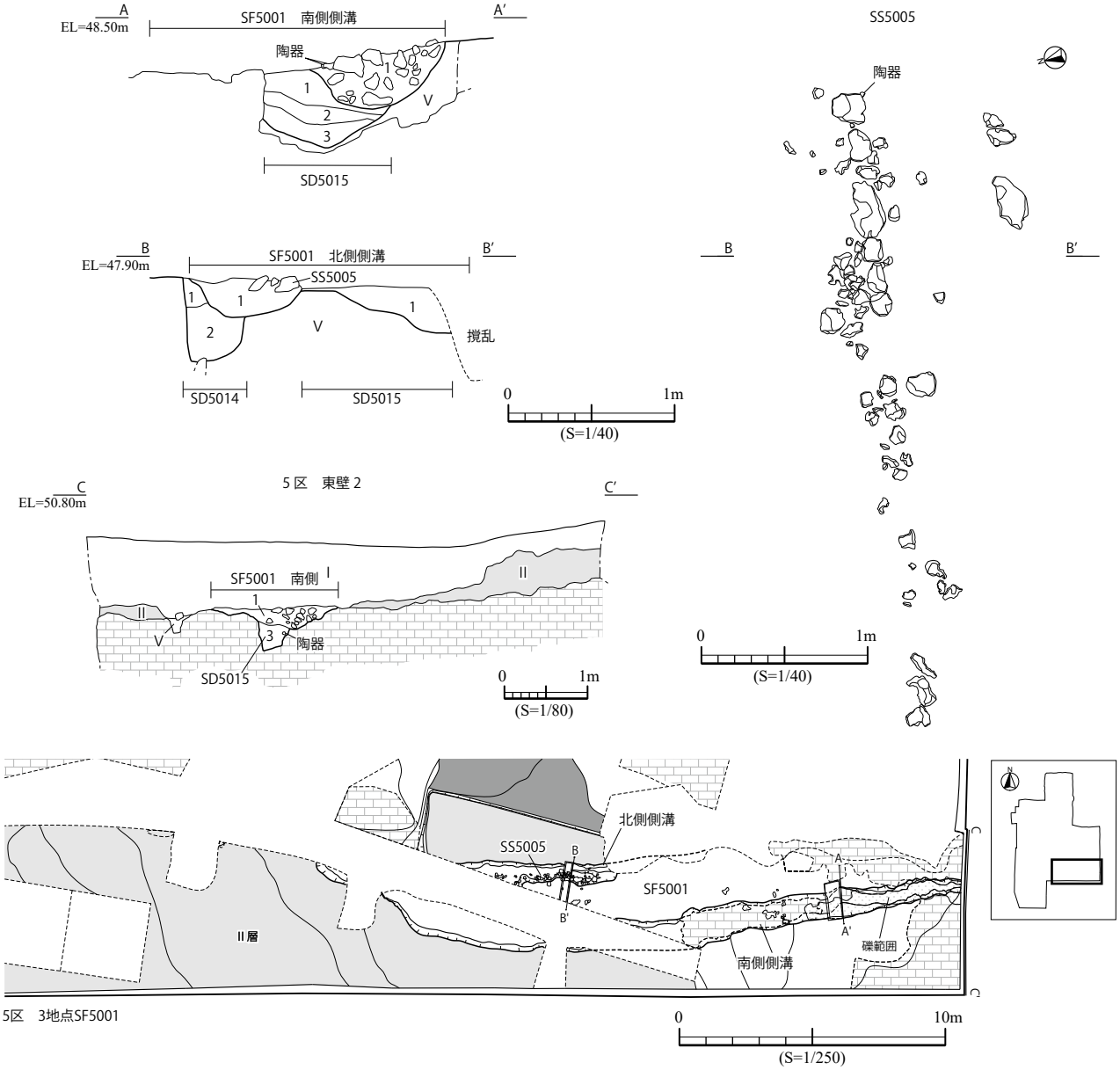
近世～近代の道跡と溝状遺構、石列、炉跡、ピットが確認されている。

道跡（SF5001）は、昭和 20 年の航空写真における道の区画と合致する溝状遺構である。調査では５区２地点と３地点で検出され、一連の道跡として SF5001 とした。

５区２地点南西側（ズケ９－Ｌ５）で確認された道跡 SF5001 は、全体的に浅い溝状の遺構として検出された。地山と岩盤による凹凸を埋めるように、Ⅱ層由来の埋土が浅く堆積している。この層の上面が路面と考えられる。

５区３地点東側（ズケ９－Ｍ２～３）で確認された道跡 SF5001 は、南北に側溝を伴う遺構で、東壁から北西へ蛇行しながらのびている。道跡の北側側溝は幅 72 ㎝、深さ 23 ㎝で、石列とともに検出された。石列（SS5005）は、石灰岩礫を東西方向に配するもので、道の縁石であった可能性がある。道跡の南側側溝は幅 80 ㎝、深さ 32 ㎝で、溝内には石灰岩礫が充填された状況で検出されており、排水を目的とした可能性がある。SF5001 南側はⅡ層が堆積して緩やかな斜面地になっていた。このことは調査区東壁で確認できる。また、SF5001 の下層には溝状遺構（SD5014・5015）が存在し、従来あった溝を利用して道跡を構築している。西側は埋設管などの撹乱を受けており、道跡の続きは確認できなかった。

調査で得られた情報から、当時の道跡の状況について推定すると、道の南側は緩やかな斜面となっており、雨水など排水対策のための側溝と縁石が用いられていたとみられる。道跡の幅は 3.3m で、さらに側溝間を路面と仮定すると、その幅は推定 1.4m である。



第 41 図　５区第１遺構面の遺構１

この道跡はアヒラービラと呼称され、普天間古集落から古墓を通り安仁屋へ至る道跡である。普天間古集落の調査でも確認されており、報告では「道３」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2017）。

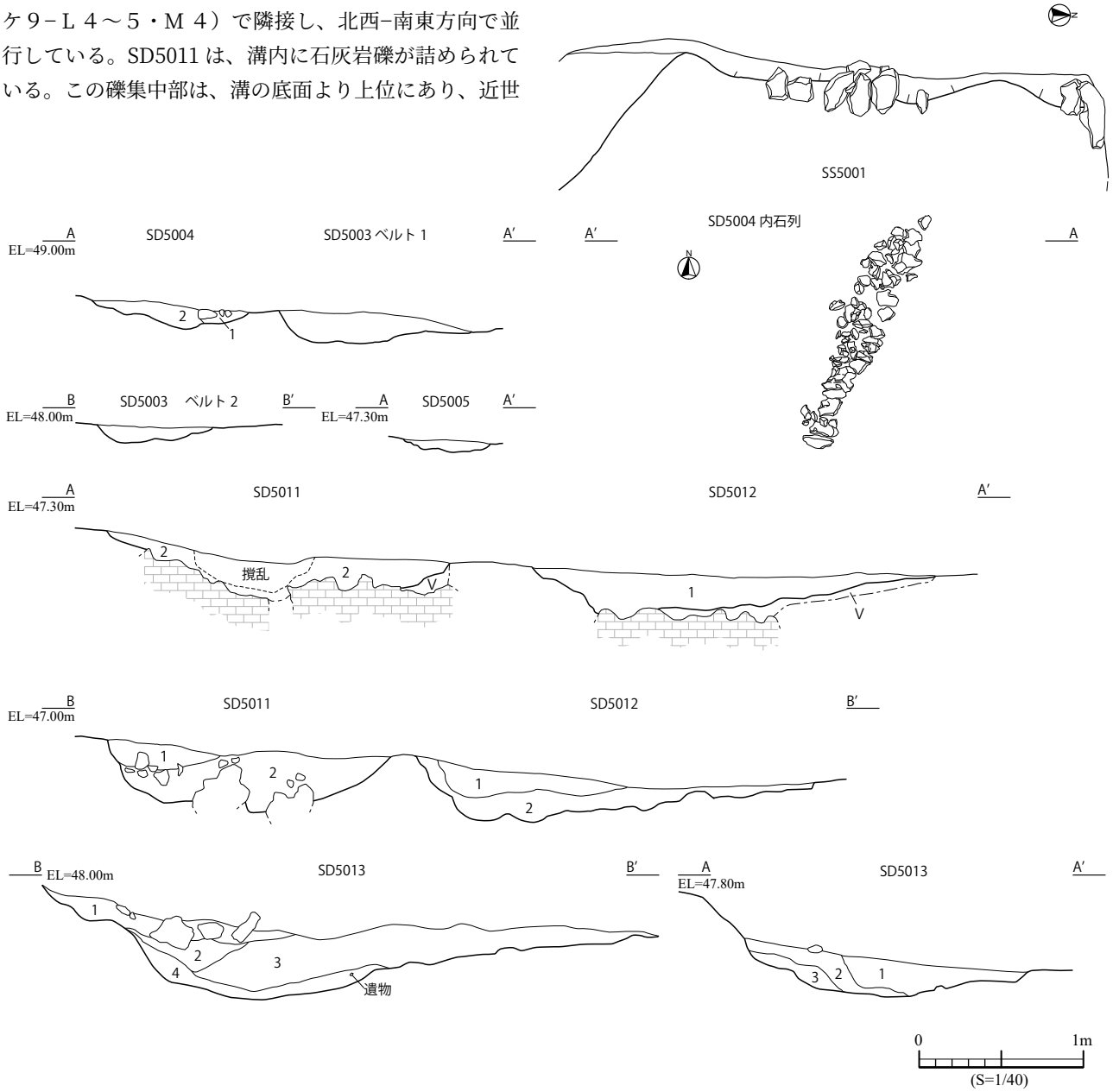
溝状遺構（SD5003・SD5004）は、２地点東側（ズケ９−Ｋ２・Ｋ３）で隣接し北東−南西方向に並行している。SD5003 は、２地点中央で途切れ、２地点の南壁（ズケ９−Ｌ３）までのびている。SD5004 は石列を伴う溝状遺構で、南側は浅く途切れている。溝内に、石灰岩礫を石列状に配しており、石列は溝の上面で検出されていることから、溝機能時に配されたものと考えられる。SD5005 は、２地点西側（ズケ９−Ｋ５）において、北東−南西方向に延びている。

溝状遺構 SD5011・5012 は、５区３地点北西側（ズケ９−Ｌ４〜５・Ｍ４）で隣接し、北西−南東方向で並行している。SD5011 は、溝内に石灰岩礫が詰められている。この礫集中部は、溝の底面より上位にあり、近世〜近代の陶磁器などの遺物が出土している。

SD5012 は、溝の底面に平面形が三角形状のピットが多数検出されており、溝構築に伴う鍬跡とみられる。断面は、北側は深く掘り下げられ、南側が緩やかに立ち上がる。底面は前述した鍬跡により凹凸し、床面直上の埋め土には地山由来のブロック土を含む。撹乱によって途切れているが、４区の SD4001 と繋がるものとみられる。

SD5013 は、５区３地点南西側（ズケ９−Ｎ５）で北東−南西方向にのびる。谷地形を利用した溝で、底面近くで検出したため、本来の溝幅はより広いと思われる。

石列（SS5001）は、５区２地点西側（ズケ９−Ｊ４）の谷地形の斜面において、Ⅱ層上面で検出されている。石灰岩礫を石列状に配しており、南北方向にのびている。



第 42 図　５区第１遺構面の遺構２

窯跡（SL5001）は５区２地点ズケ９－Ｊ４で検出され、燃焼部と前庭部が連結する形で、地山（Ｖ層）を掘り込み構築されている。燃焼部は埋設管によって撹乱を受け、半分のみが残存している。燃焼部の規模は残存幅 188 ㎝で方形状、深さ 42 ㎝で、焚口から壁面・床面にかけて熱を受けて赤く赤色化しており、この面が操業時の床面と考えられる。床面直上には炭を多く含む層が堆積している（５層）。その上には、壁面の一部の崩落土とともに、多量のサンゴ礫が堆積している（３・４層）。

前庭部は、窯の操業に伴う作業場と考えられ、燃焼部の焚口に連結している。規模は残存長 108 ㎝、残存幅 94 ㎝で楕円形状、床面の深さは４㎝で浅く、燃焼部の床面と高低差がある。内部の層は炭粒を含む。

なお、燃焼部床面直上の炭層（５層）に含まれる炭化材はマツ属複維管亜属に同定され、リュウキュウマツを燃料材として用いた可能性が示された。

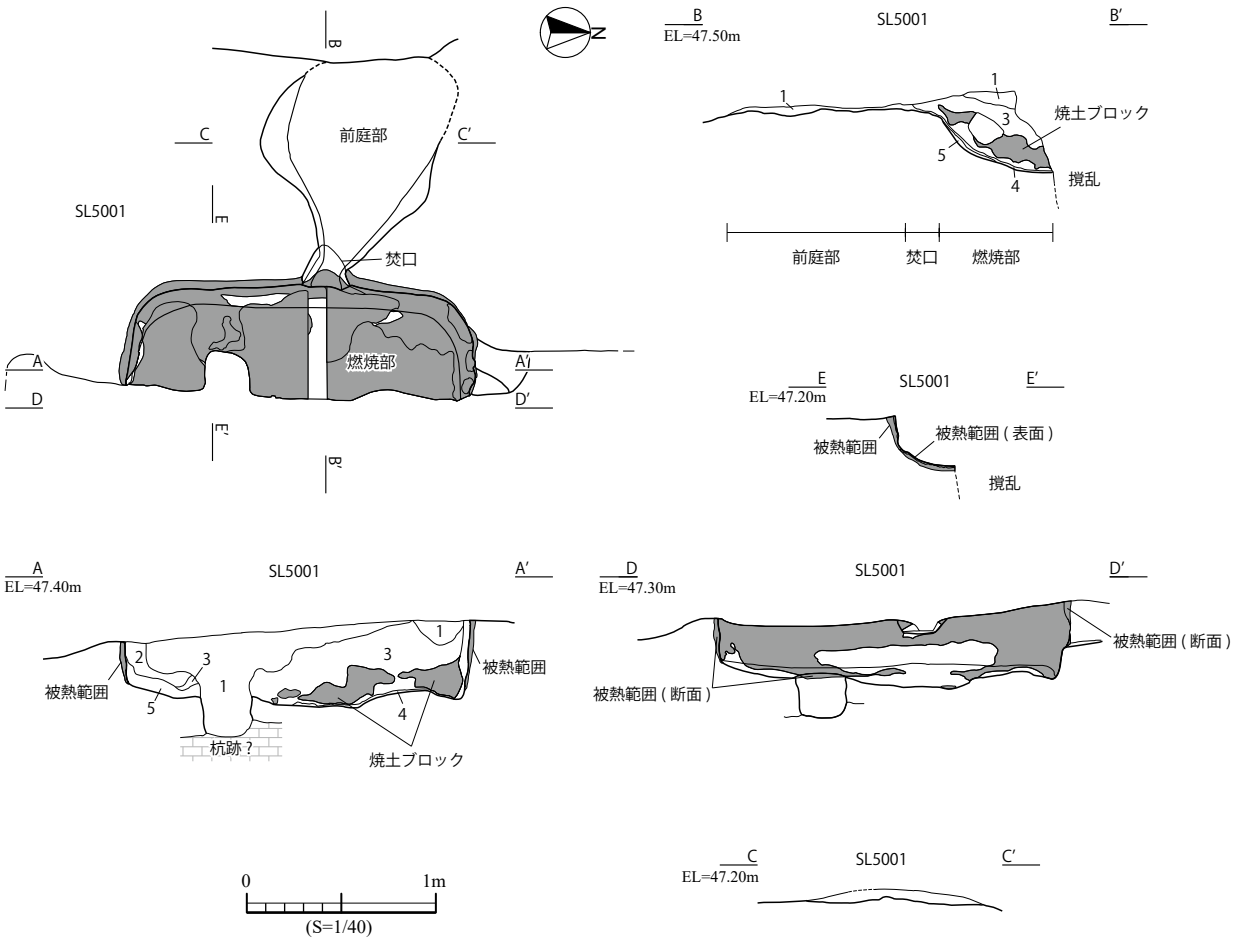
海軍病院地区では、形態が類似する窯跡が確認され、普天間古集落における製糖に関連する遺構と考えられている（県埋文 2015）。燃焼部と前庭部の床面の高さがほぼ同じものがほとんどであり、燃焼部から前庭部へ燃焼部内の不要物を焚口から掻き出す窯の構造を想定している。一方で、今回検出された SL5001 は、燃焼部の床面が前庭部より低く、燃焼部内の不要物を掻き上げる必要があり、窯の構造に違いがある。

また、燃焼部内の多量のサンゴ礫は、生石灰の材料ではないかと推定される。漆喰の原材料である生石灰は、サンゴ起源の土砂や礫を熱することによって生成され、生石灰に水や藁を加えて漆喰がつくられる。出土したサンゴ礫は、熱を受けているものもあり、生石灰の材料の可能性がある。

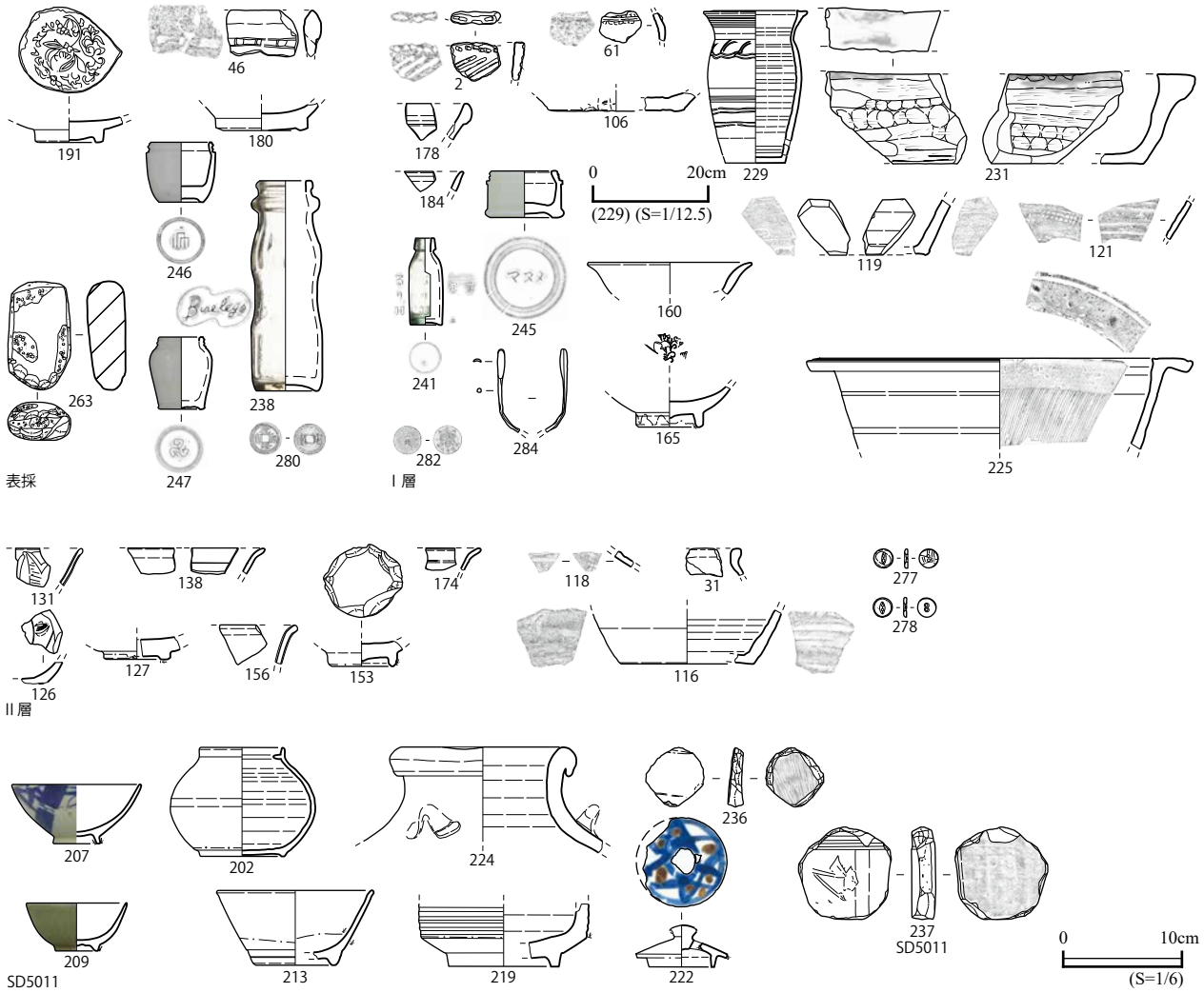
さらに、SL5001 周辺には、漆喰を施した墓（16・19 号墓）が点在することから、SL5001 は古墓構築に伴い生石灰を製造した窯跡であった可能性がある。

第２遺構面

５区２地点埋没谷１のⅢ層を掘削し、Ⅳ層上面において、グスク時代の溝状遺構や石列、列状ピット群２・３、土坑、炉跡を検出した。２地点南東側のＶ層上面でもグスク時代のピットが確認されている。３地点埋没谷２では列状ピット群４が検出された。



第 43 図　5 区第 1 遺構面の遺構 3



第 44 図　5 区第 1 遺構面出土遺物

溝状遺構（SD5006・5007）は、５区２地点東側（ズケ９−Ｌ２〜３）において北西−南東方向に蛇行しながら並行している（第 46 図）。浅く底部が残存している。

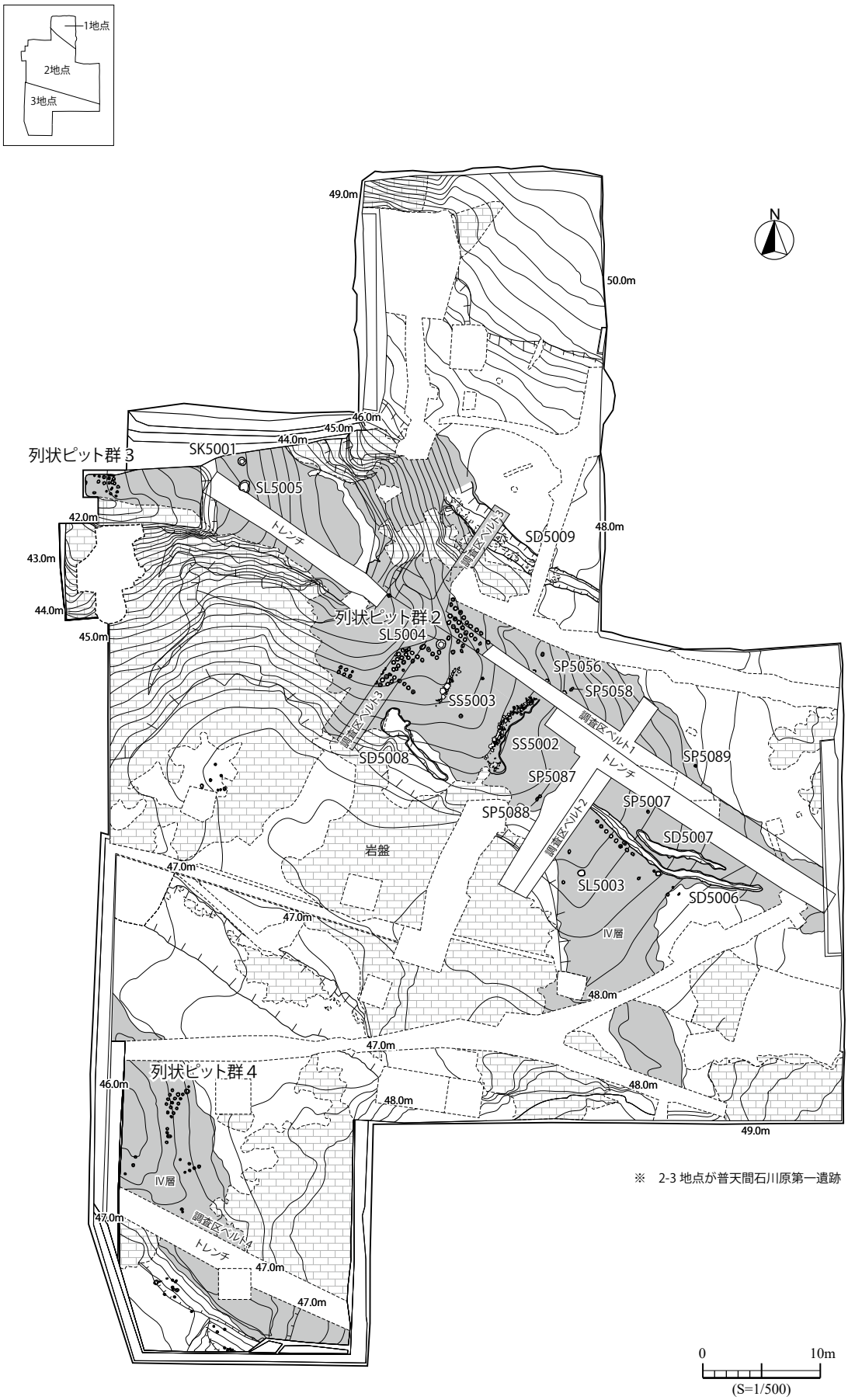
また、SD5007 の南側に並行してピットが列状に検出されている（SP5009 〜 5017・5019）。SD5007 に関連する遺構と考えられる。なお、１区でも溝状遺構に並行するピット列が検出されている。その南側に炉跡（SL5003）が検出されている。

５区２地点中央部（ズケ９−Ｊ３〜４・Ｋ３〜４）では、溝状遺構（SD5008・SD5009）と石列（SS5002・SS5003）によって谷地形を区画している。区画内の下位には、植栽痕と考えられる列状ピット群と炉跡（SL5004）が検出されている（第 47 図）。

溝状遺構（SD5008・SD5009）は、ともに２地点中央の谷地形両上端にあり、谷の向きに沿ってのびている。溝の向きは北西−南東方向である。いずれも地山（Ⅴ層）を掘り込んで構築されている。SD5008 は谷地形南側斜面（ズケ９−Ｋ４）にあり、北西側で不定形に広がる。

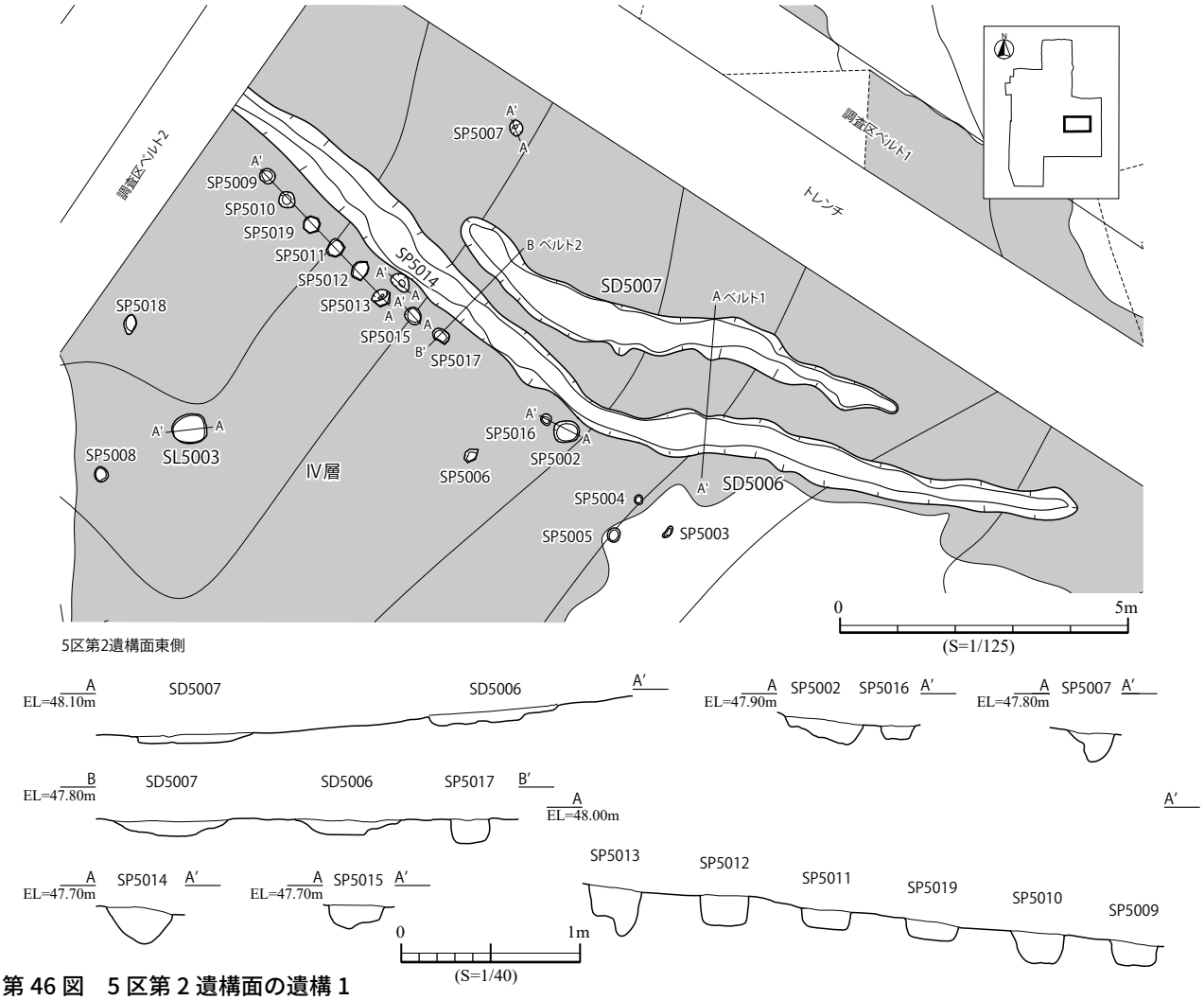
SD5009 は谷地形北側（ズケ９−Ｊ３〜４・Ｋ３）にあり、東壁から北西側へのびている。東壁側は、撹乱により溝の底部分が残っている。SD5008・5009 の底面は、後述する列状ピット群２や石列が検出された埋没谷の底面と比べると標高的に高い位置にあり、調査区ベルトにおけるⅢ層の堆積状況からは、埋没谷１にⅢ層がある程度堆積した段階で構築されたと考えられる。SD5009 からは、青磁Ⅰ・Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅳ’類 (151)・Ⅴ類 (158)、白磁 A 群 (181)・C3 群 (185・189)・D 群 (192)、グスク土器 (102・103)、カムィヤキ、朝鮮系無釉陶器が出土している。

石列（SS5002・SS5003）は、Ⅲ層中で北東−南西方向に並行して検出された。SS5002 は全長 8.3m、SS5003 は全長４m を測る。SS5002・SS5003 は、標高が高い東側は下層のⅣ−１層を掘込み、標高が低い西側ではⅢ層が水平に堆積している。石列を境目に斜面地を切土し、地形を段状に構築している状況が認められる（第 39 図ベルト１−２、第 48 図）。谷地形を段状に区切るとともに、平坦な面を区画している。



※　2-3 地点が普天間石川原第一遺跡

第 45 図　5 区第 2 遺構面



第 46 図　5 区第 2 遺構面の遺構 1

SS5002・SS5003 間は、畦を残すことが出来なかったが、平坦な地形にⅢ層が水平に堆積していた。

石列に伴う埋土はマウンド状になっていることから、本来は畦のような構造であった可能性がある。SS5002・SS5003 の周辺からは青磁Ⅱ類（130）・Ⅳ’類（145）・Ⅴ類（161）、同安窯系青磁（173）、グスク土器第３様式などが出土している。

５区埋没谷１・２では列状ピット群２～４が確認されている。グスク時代の植栽痕と考えられている。

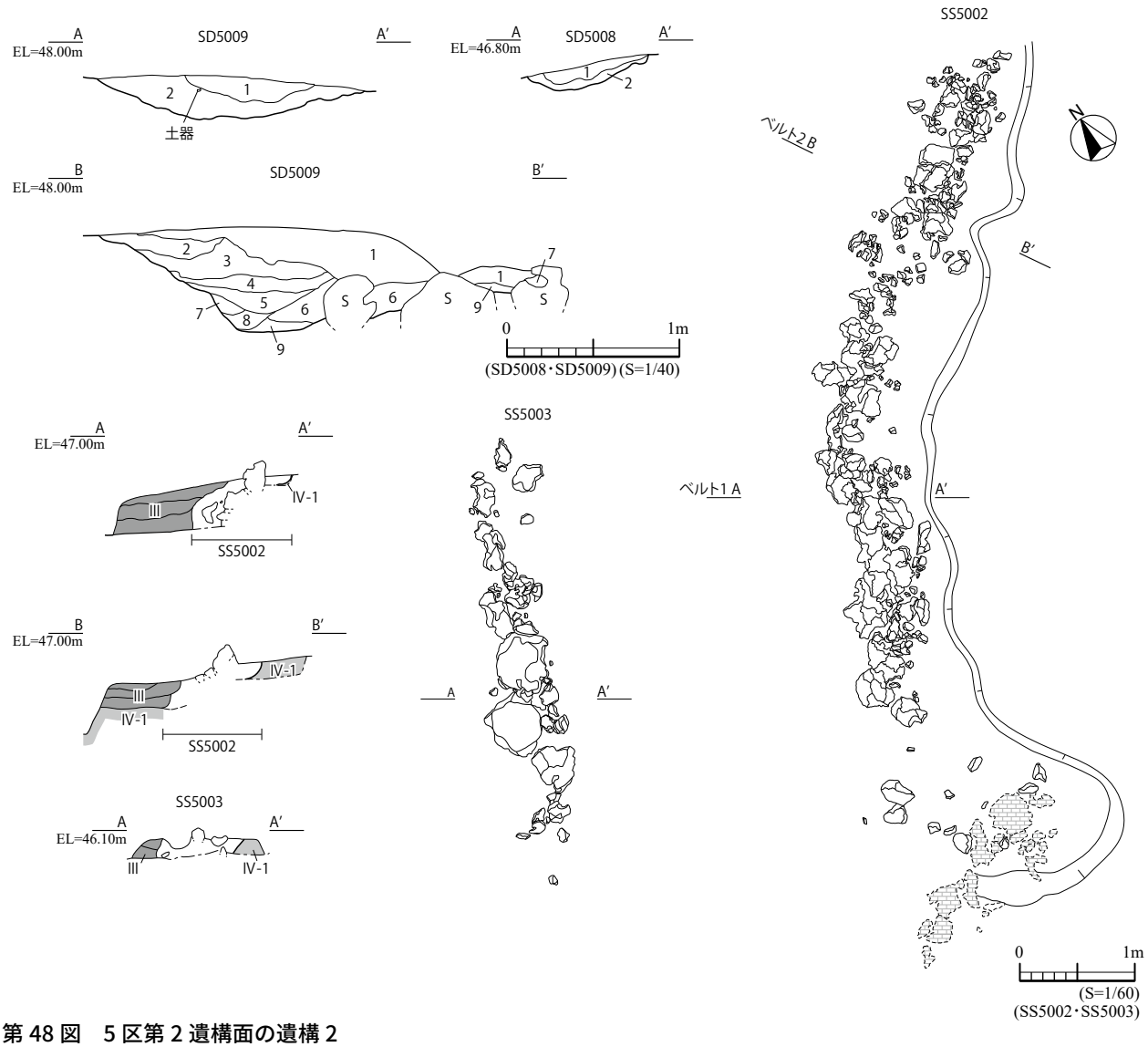
列状ピット群２は、５区２地点中央部（ズケ９－Ｋ４）では、SS5003 東側で検出されている（第 47 図）。一部のピットは、サブトレンチ掘削時に検出できなかったものもあるが、ピット群は４～６列程度で北東−南西方向に広がっている。多くのピットは、多角形状の平面形をなし、断面は鍋底状で浅く、地山を掻き上げ撹拌された痕跡が認められる（巻末図版 19）。Ⅲ層由来の埋土で単層のものが殆どである。深さは平均 8.5 ㎝である。Ⅲ層中から掘り込まれているものもあるが、調査ではⅣ層上面での検出を行ったため、ピットの底部分で非常に浅いものもある。SS5002 周辺にもピットは点在している。

なお、列状ピット群２の年代測定を行った結果、SP5046 は 1160 ± 20BP（8 世紀後半～ 10 世紀後半）、SP5047 は 655 ± 20BP（13 世紀後半～ 14 世紀後半）、SP5049 は 960 ± 30BP（11 世紀前半～ 12 世紀中頃）で、貝塚時代後期後半からグスク時代と幅のある年代値が得られている。

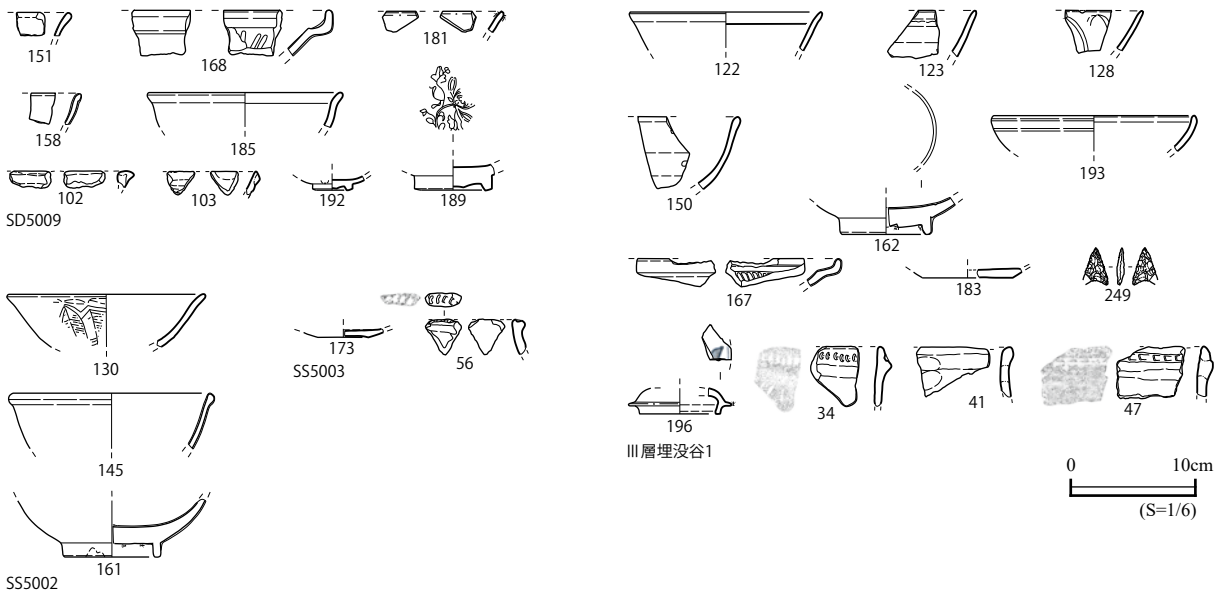
列状ピット群２からは、貝塚前期土器や後期土器の小片が僅かに出土するのみで、グスク時代の遺物は出土していない。なお、SP5046 からはオオムギの炭化種実が同定されている。

列状ピット群２・３が所在する５区２地点Ⅲ層（埋没谷１）からは、青磁Ⅰ類（122･123）･Ⅱ類（128）･Ⅳ類･Ⅳ’類（150）･Ⅴ類（162）、同安窯系青磁、磁竈窯系青磁、白磁Ａ群 (183)・Ｃ３群・Ｄ群・Ｄ’群 (193)、漳州窯青花（196）、褐釉陶器、グスク土器第２・３様式、カムィヤキＡ・Ｂ群などのグスク時代の遺物とともに、貝塚前期土器（34･47）や後期土器、石鏃（249）、石斧といった貝塚時代の遺物も出土している。

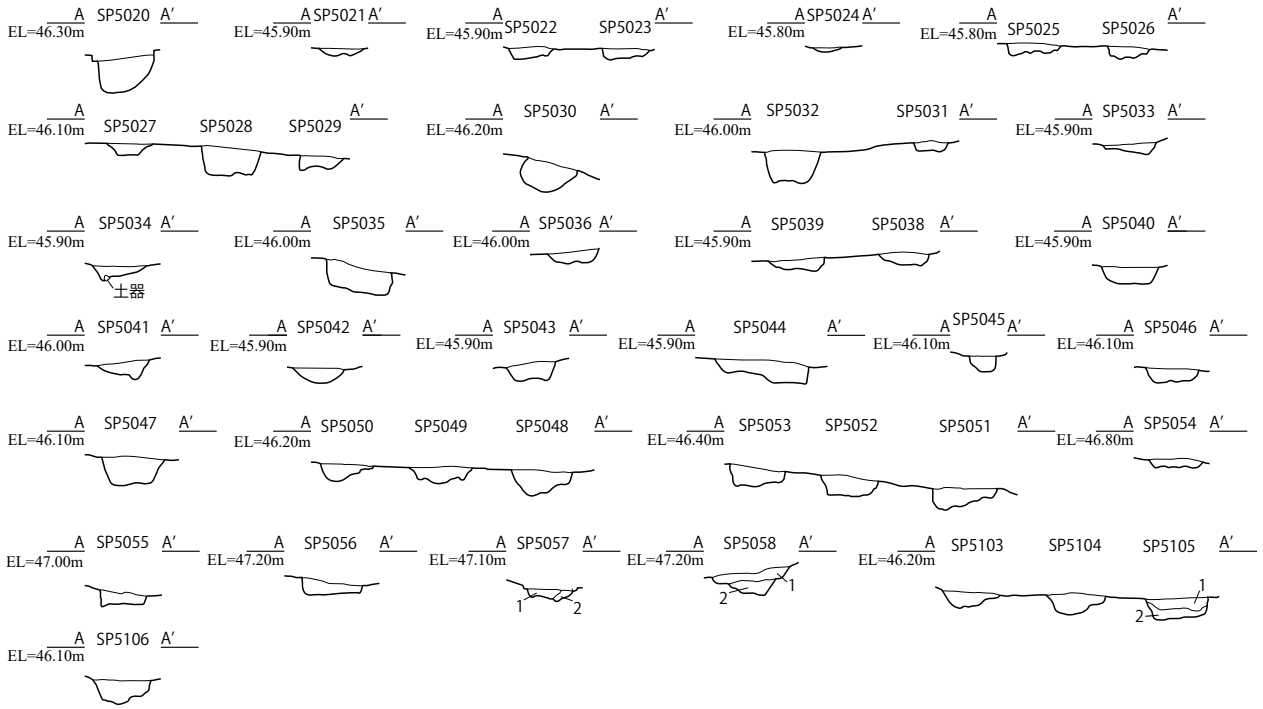
第 47 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 2



第 48 図　5 区第 2 遺構面の遺構 2



第 49 図　5 区第 2 遺構面出土遺物 1

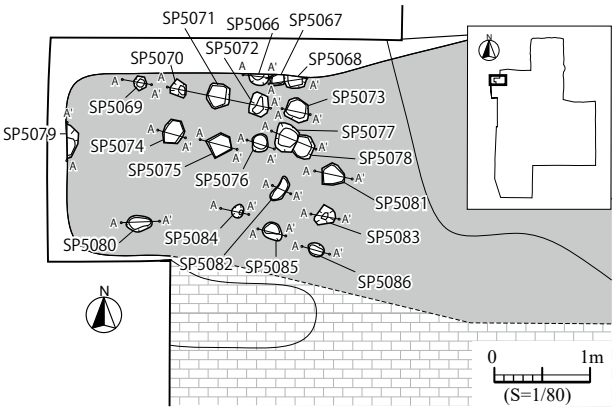


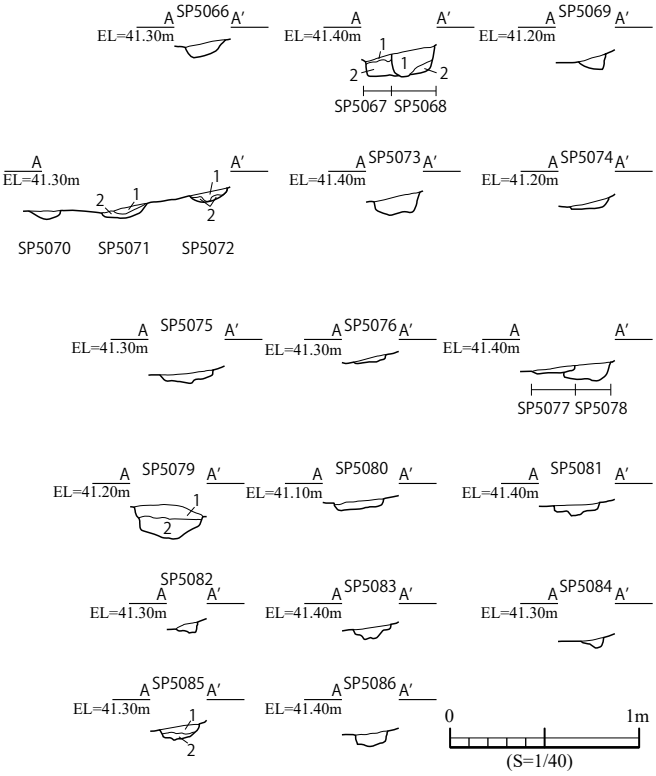
第 50 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 2

列状ピット群３は、５区２地点北西側（ズケ９−Ｊ５）の谷底部Ⅳ層上面で検出されている（第51図）。このピット群も平面や断面から植栽痕と考えられる。深さの平均は 6.3 ㎝である。

ピット群の南側は撹乱により切土されている状況で、北側は谷地形の深さ５m を超える北壁にかかっているため調査区を拡張することは安全上困難であった。そのため、ピット群の広がりを把握することは出来なかった。周辺の谷地形の状況からは、ピット群は４～５列程度で北西方向に広がっていたものと想定される。

列状ピット群３の SP5067 からはグスク土器、SP5068 からはグスク土器第３様式が出土している。



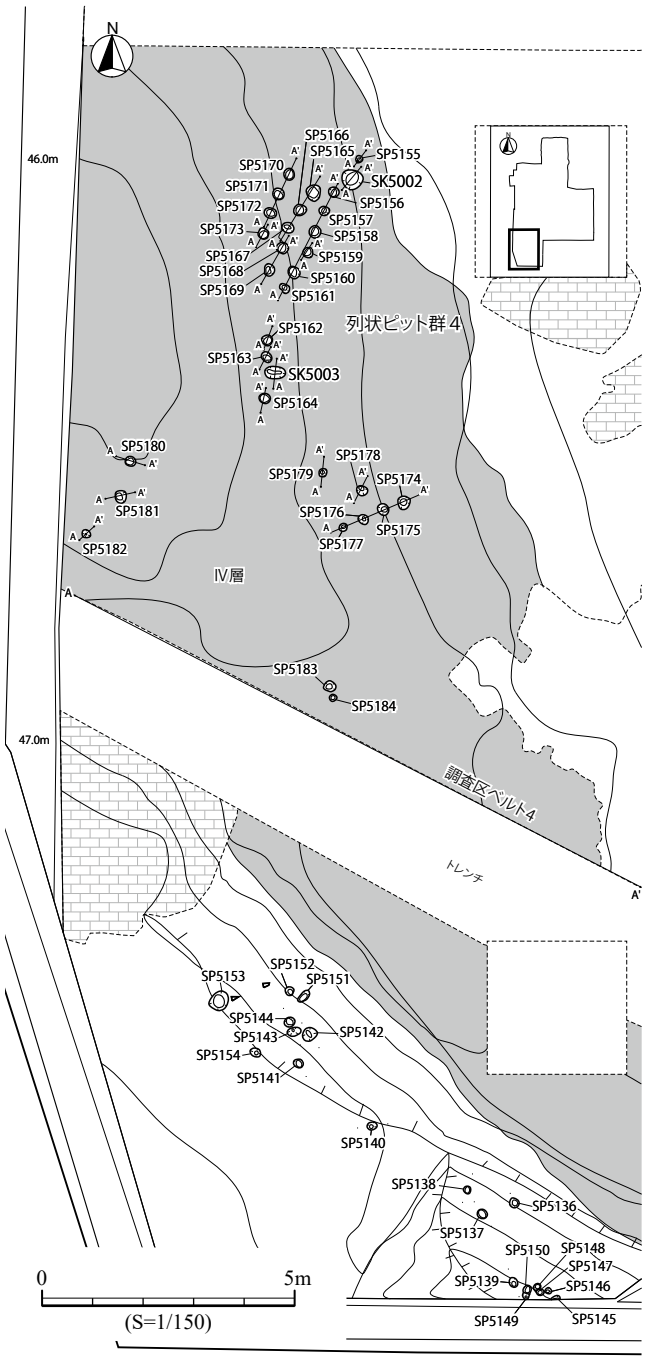


第 51 図　5 区第 2 遺構面列状ピット群 3

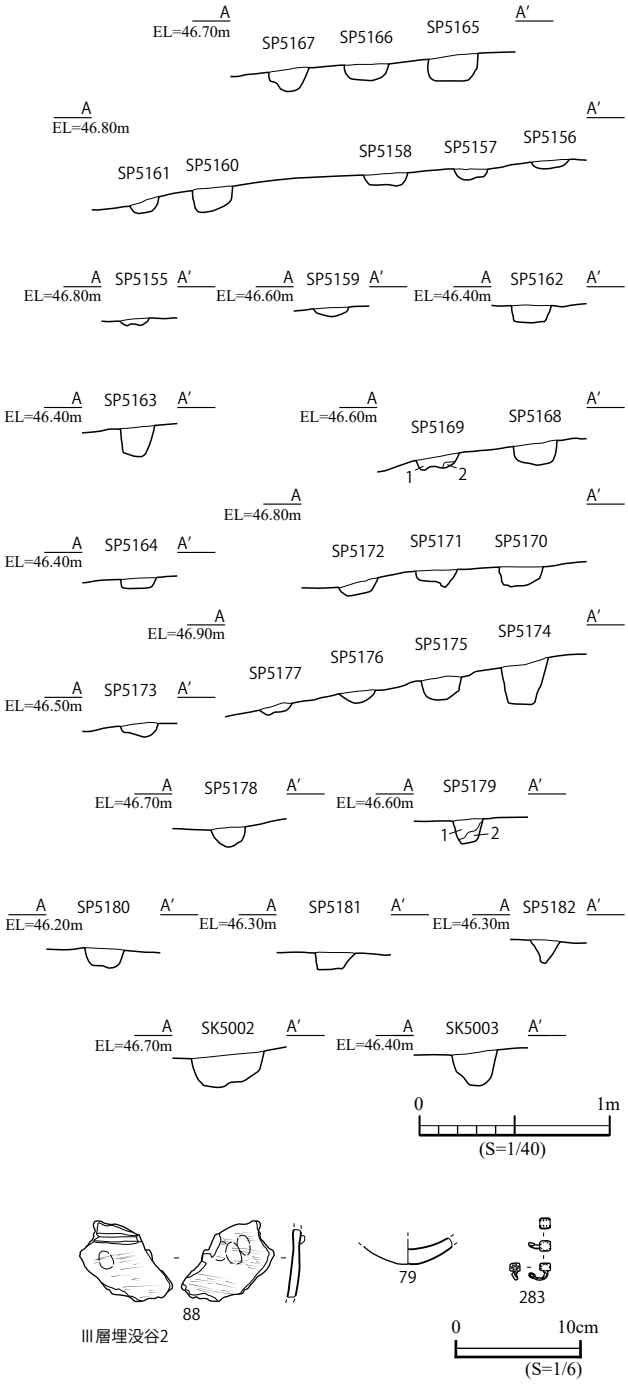
列状ピット群４は、５区３地点（ズケ９－Ｍ５）の埋没谷２のⅣ層上面で検出された（第52図）。ピット群は３列程度で北東−南西方向に広がっている。深さの平均は9.0㎝である。なお、列状ピット群のうち、規模が大きなものは土坑（SK5002・SK5003）とした。

また、埋没谷２南側の斜面（ズケ９－Ｍ５）でもピットが検出されている。深さの平均は9.2㎝である。鍬跡のような三角形状のものもみられる。

列状ピット群４からは、貝塚前期土器が僅かに出土するのみで、グスク時代の遺物は出土していない。列状ピット群４が所在する５区３地点Ⅲ層（埋没谷２）からは、青銅製品（283）のほか白磁Ｃ３群やグスク土器が出土しているが極僅かである。ほかに貝塚後期土器(88)や貝塚前期土器(79)が出土している。



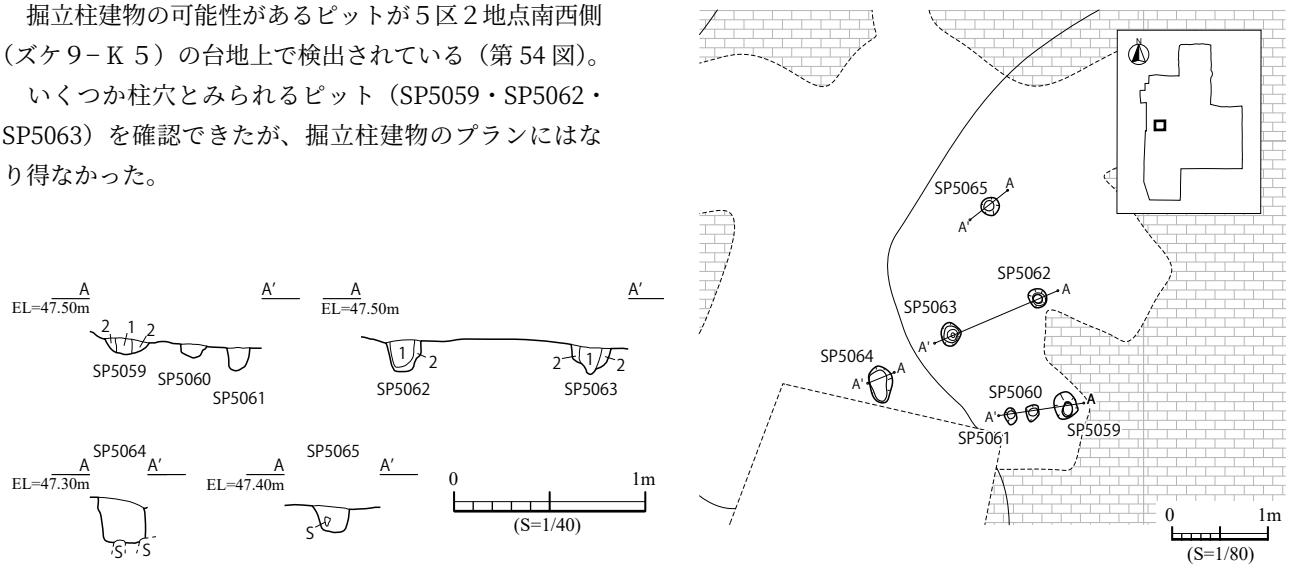
第52図　５区第２遺構面列状ピット群４



第53図　５区第２遺構面出土遺物２

掘立柱建物の可能性があるピットが５区２地点南西側（ズケ９－Ｋ５）の台地上で検出されている（第 54 図）。

いくつか柱穴とみられるピット（SP5059・SP5062・SP5063）を確認できたが、掘立柱建物のプランにはなり得なかった。



第 54 図　５区第２遺構面の遺構３

炉跡は５区２地点（埋没谷２）において、３基が点在して確認されている（第 56 図）。

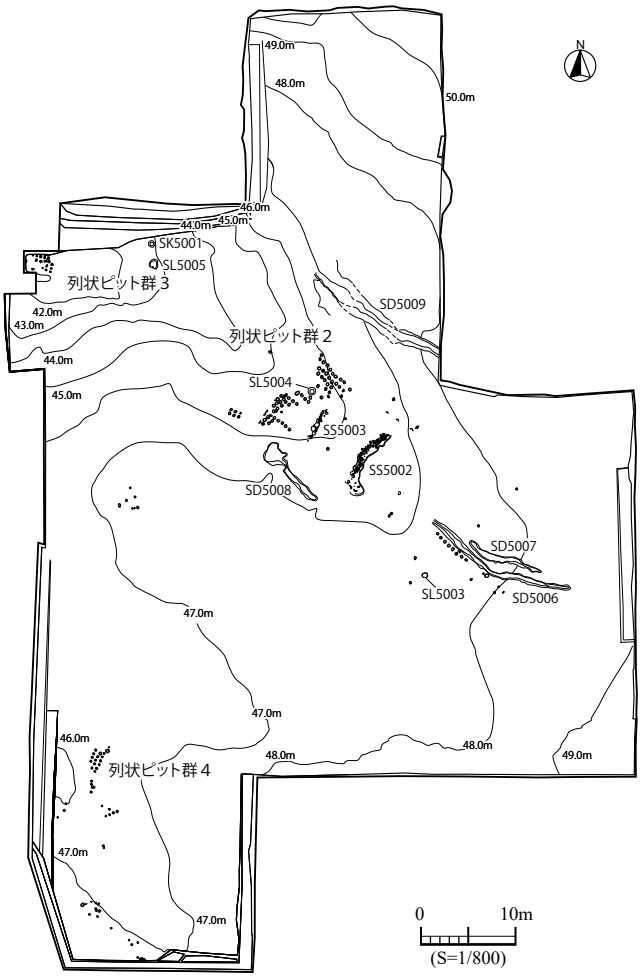
SL5003 は、５区２地点東側（ズケ９－Ｌ３）のⅣ層上面で検出されている。壁面が熱により赤色化している。大きさは 62 ㎝、深さ 10 ㎝で、底部には炭層が堆積している。本来は１区 SL1001 や後述する SL5004 や SL5005 のように深いものであったが、耕作等によって削られ、底部が残っているものと思われる。

SL5004 は、５区２地点中央（ズケ９－Ｋ４）の列状ピット群とともにⅣ層上面で検出されている。壁面が熱により赤色化している。大きさは 80 ㎝、深さ 50 ㎝で、底部には炭層が堆積している。埋土からは石灰岩礫が多量に出土しており、炉の廃業に伴い廃棄されたものと考えられる。断定はできないが、出土した石灰岩礫は周辺の石列（SS5002・SS5003）などに使用されていたものの可能性がある。

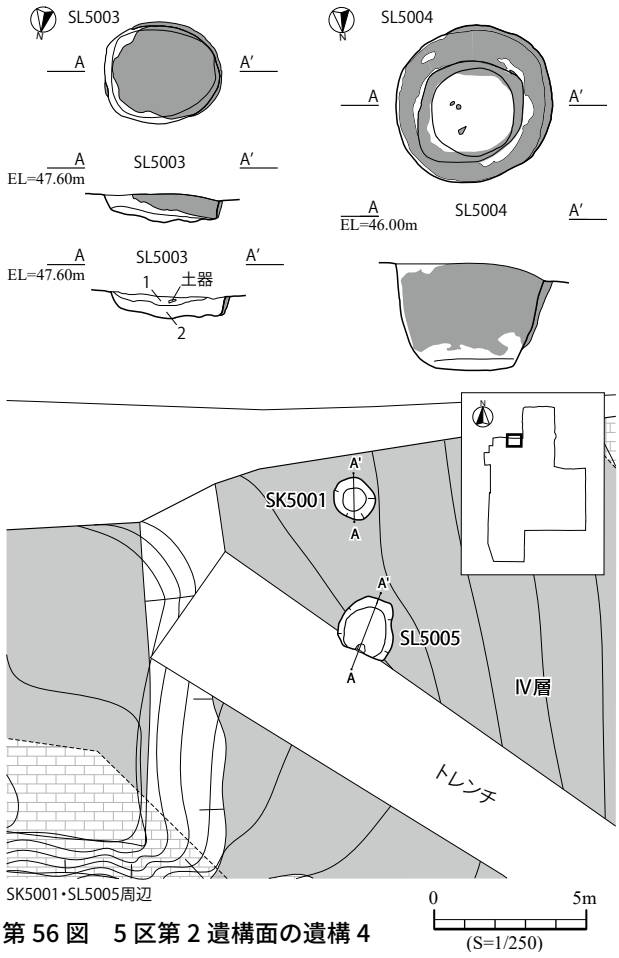
SL5005 は、５区２地点北西側（ズケ９－Ｊ５）の斜面地においてⅣ層上面で検出されている。壁面は熱により赤色化するとともに、床面も部分的に赤色化している。大きさは残存箇所で 102 ㎝、深さ 46 ㎝で、底部には炭層が堆積している。SL5005 からはグスク土器第３様式甕（101）とともに貝塚前期土器が出土している。

なお、SL5005 の北側では土坑（SK5001）が検出されているが、炉跡との関連は不明である。

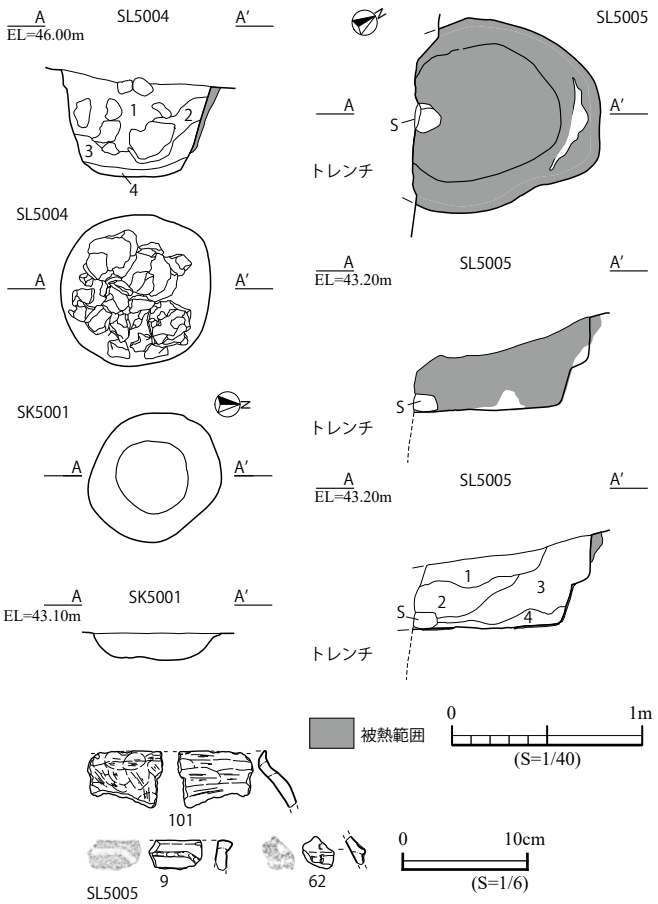
SL5003・SL5004・SL5005 の底部に堆積していた炭層の年代測定を行った結果、SL5003 は 710 ± 20BP（13 世紀後半～ 14 世紀後半）、SL5004 は 605 ± 20BP（14 世紀初頭～ 15 世紀初頭）、SL5005 は 660 ± 20BP（13 世紀後半～ 14 世紀後半）で 13 ～ 14 世紀代の近い値でまとまっている。



第 55 図　５区第２遺構面の遺構分布図



第 56 図　５区第２遺構面の遺構４



第 57 図　５区第２遺構面出土遺物

第３遺構面

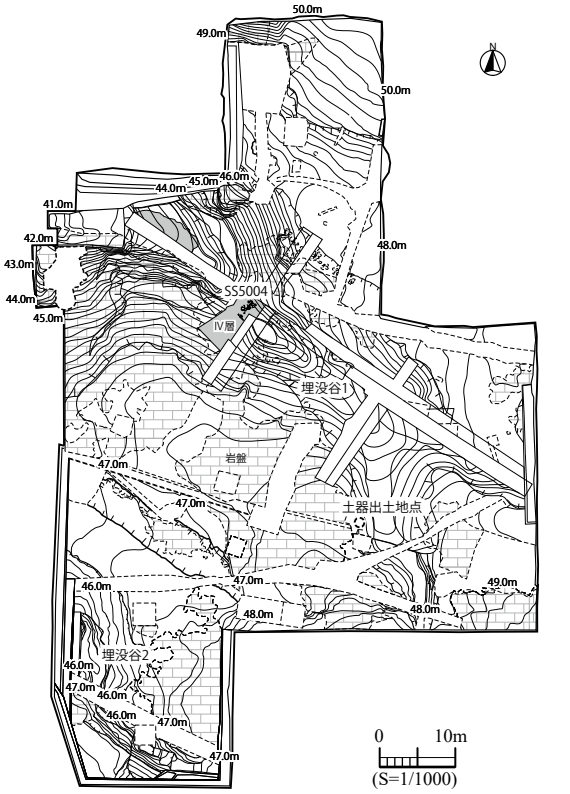
貝塚時代と考えられる遺構として、集石遺構（SS5004）が確認されている（第 60・61 図）。

SS5004 は、５区２地点中央部（ズケ９－Ｋ４）の埋没谷１のⅣ－２層中で検出され、集石遺構とした。谷地形の段状に落ち込む範囲で石灰岩礫が集積されているが、そのプランは明瞭ではない。

なお、集石遺構が帰属するⅣ－２層は、貝塚時代の遺物が主体で貝塚前期土器が多く貝塚後期土器も一定量みられる。グスク時代の遺物は白磁が一点のみ出土している。SS5004 と５区Ⅳ－２層の年代測定を行った結果、SS5004 は① 1010 ± 30BP(10 世紀後半～ 12 世紀中頃)、② 2340 ± 30BP、③ 1270 ± 20BP（７世紀後半～８世紀後半）と離れた年代を示している。５区Ⅳ－２層は 1120 ± 30BP（8 世紀後半～ 10 世紀後半）とされた。

上記の年代測定結果や出土遺物からは、層位的に同じ埋没谷１のⅣ－２層に伴う２区集石遺構（SS2002・SS2003）と時期的に近い可能性は高い。

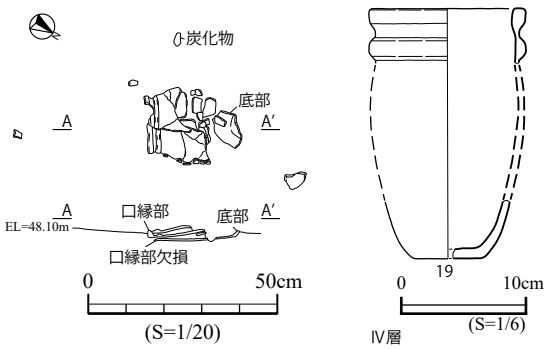
その後、Ⅳ層を掘削し、谷状地形となるＶ層の地山面を検出した。埋没谷２の地山面ではピットを検出したが、全てが平面形や断面が不定形で樹根などと考えられるもので明確な遺構は確認できなかった。



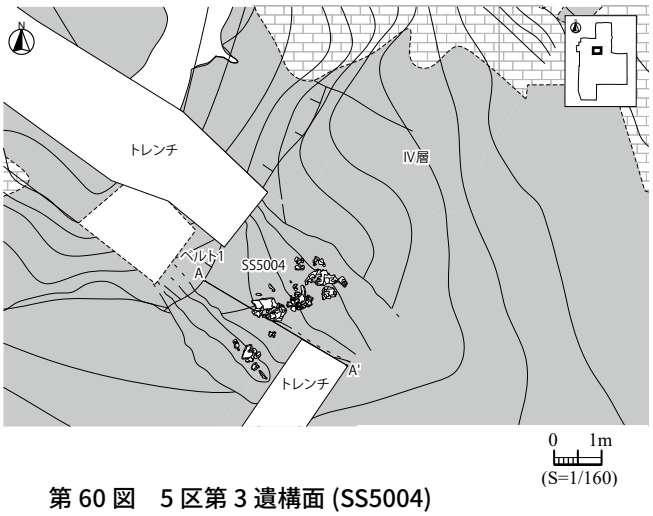
第 58 図　５区第３遺構面

埋没谷１のⅣ層からは貝塚前期土器は室川式 (14・16・20 など) が多く出土しており、ほかに面縄東洞式 (１)・荻堂式 (３)・宇佐浜式 (45) がある。石器 (254・265・273) も出土している。埋没谷２のⅣ層からは、貝塚後期土器 (87) や貝塚前期土器 (4・7) が出土している。

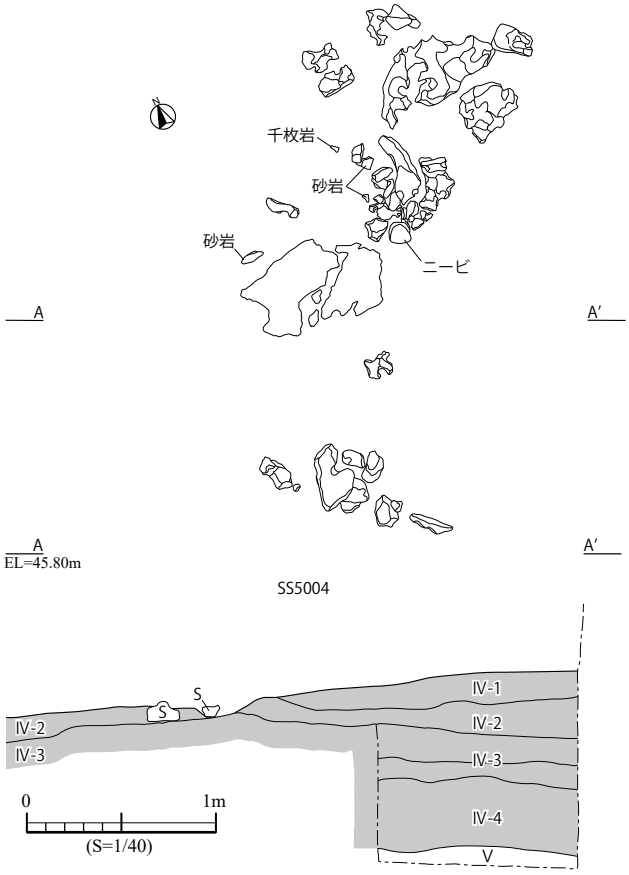
特筆すべきものとして、５区２地点南東部（ズケ９−Ｌ３）埋没谷１のⅣ層中より、ほぼ１個体の貝塚前期の突帯文土器 (19) がつぶれて割れた状態で出土している（第 59 図)。



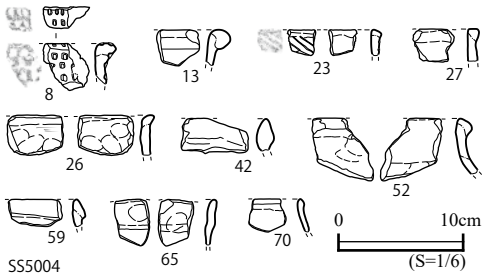
第 59 図　５区貝塚前期土器出土状況



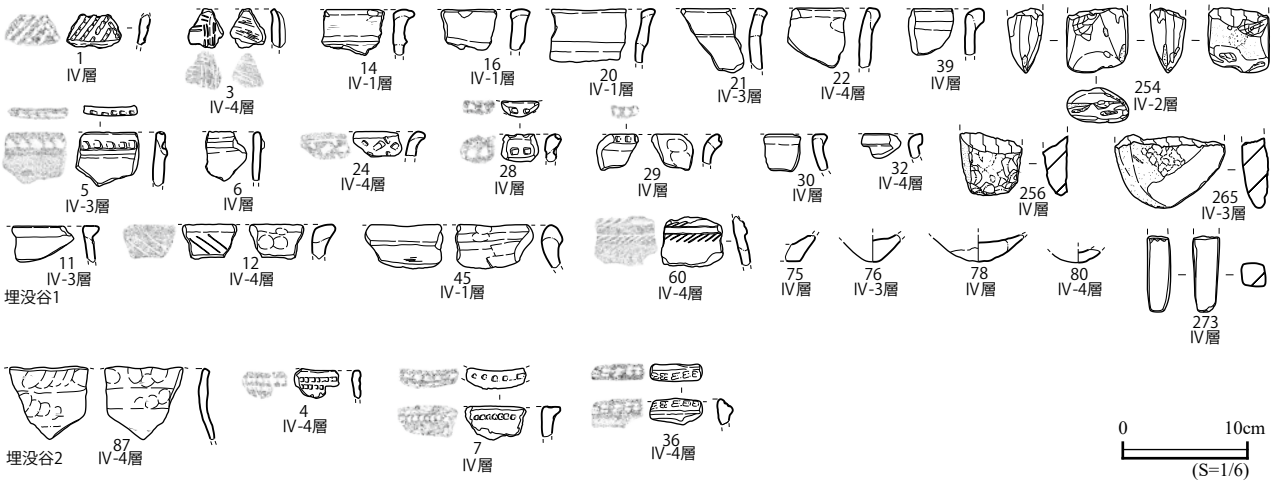
第 60 図　５区第３遺構面 (SS5004)



第 61 図　５区 SS5004



第 62 図　５区 SS5004 出土遺物 (埋没谷 2)



第 63 図　５区第３遺構面出土遺物

（７）６区

６区は５区の南側、標高 50m の平坦地に設定し、グリッドはズケ９−Ｎ１〜３･Ｏ２〜３、ズケ16−Ａ２〜３、調査面積は 1100 ㎡である。

層序と地形

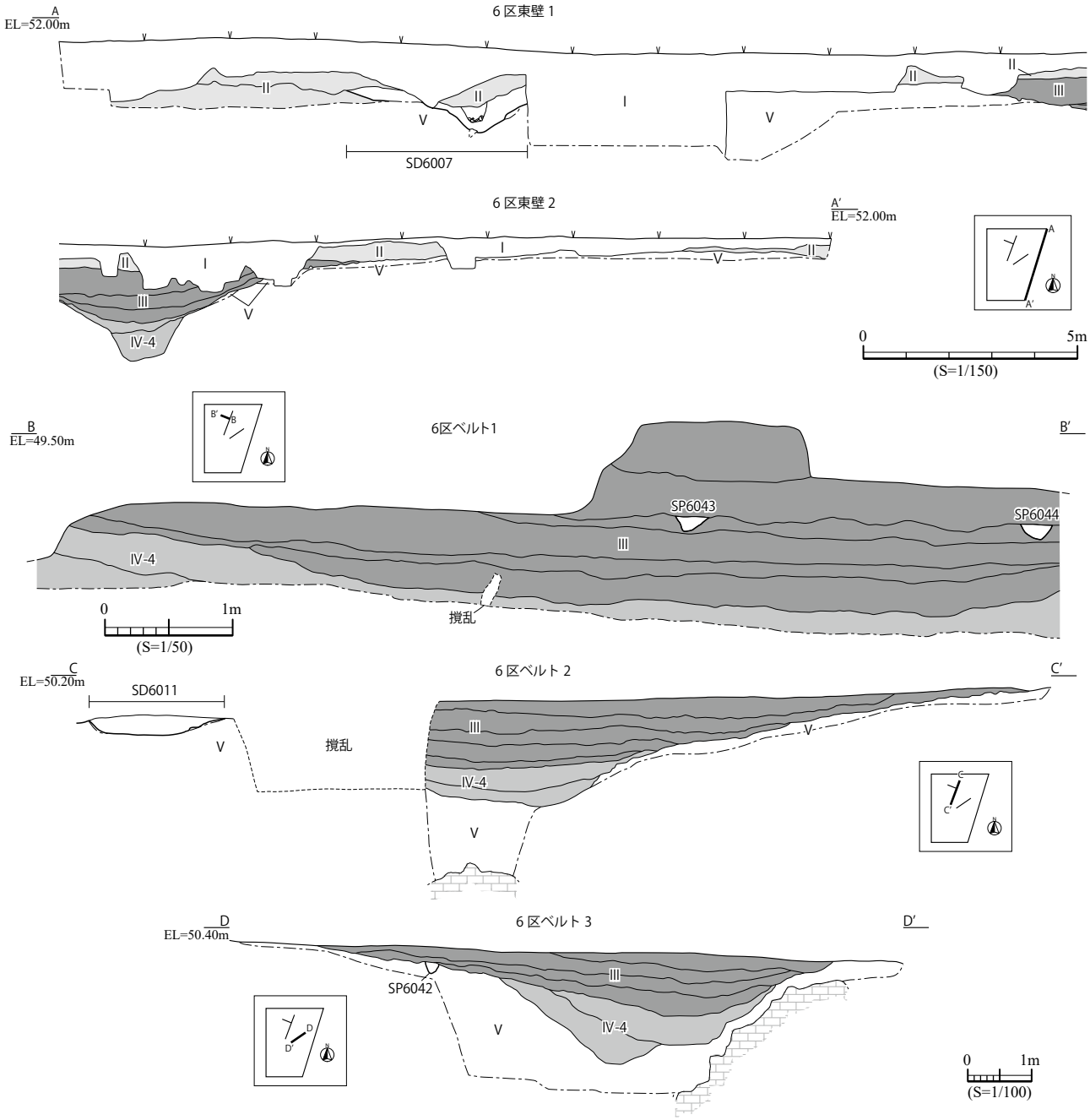
６区は、調査区北側で北西方向に蛇行する谷地形（埋没谷２）が広がっており、そこにⅢ・Ⅳ層が厚く堆積している。この谷地形（埋没谷２）は、６区から５区南側に至る。調査区東壁でもⅢ・Ⅳ層が厚く堆積していることから、谷地形は調査区外にも続くとみられる。

遺構と遺物

調査は、はじめにⅠ層とⅡ層を掘削し、Ⅲ層上面および地山面で検出されたⅡ層由来の遺構面を第１遺構面とした（第 65 図）。

続いて、Ⅲ層を掘削し、Ⅲ層中またはその下のⅣ層上面や地山面で検出されたⅢ層由来の遺構面を第２遺構面とした（第 68 図）。

その後、貝塚時代の堆積層（Ⅳ層）を掘削し、谷地形の地山面（第３面）を検出した（第 71 図）。



第 64 図　６区土層断面図

第１遺構面

近世～近代の道跡と溝状遺構、石列、ピット、土坑などが確認されている（第 65・66 図）。

道跡（SD6007・SD6008）は、６区北東側で検出された溝状遺構で、調査時には道跡としての番号は付していなかったが、昭和 20 年の空中写真における道の区画と合致する。SD6007・SD6008 は北東−南西方向に並行していることから、両端に側溝を伴う道跡と考えられる。

SD6007・SD6008 間は、道の路面と推定され、南側へやや傾斜している。この範囲からは、石灰岩礫の集中部（SU6001 ～ 6003）やピットが検出されている。道跡の南側側溝と考えられる SD6007 は、石列（SS6001）を伴う溝状の掘込で幅 1.1m、深さ 53 ㎝である。石列（SS6001）は側溝縁石の一部と思われる。SD6008 は北側の側溝になると考えられ幅 0.6m、深さ 9 ㎝である。

路面は南側へやや傾斜しているとともに、南側側溝（SD6007）が深いことから、南側へ排水するように構築されたとみられる。また、石灰岩礫の集中部（SU6001 ～ 6003）がみられることから、本来は石敷きの道であった可能性もある。なお、両端の側溝を含めた道跡の幅は 4.5m を測る。さらに側溝の間の平坦面を路面と仮定すると、その幅は推定 1.5m である。

この道跡は、５区３地点で確認された道跡に合流する。普天間古集落の調査でも確認されており、報告では「道

第 65 図　6 区第 1 遺構面の遺構 1

１」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015）。

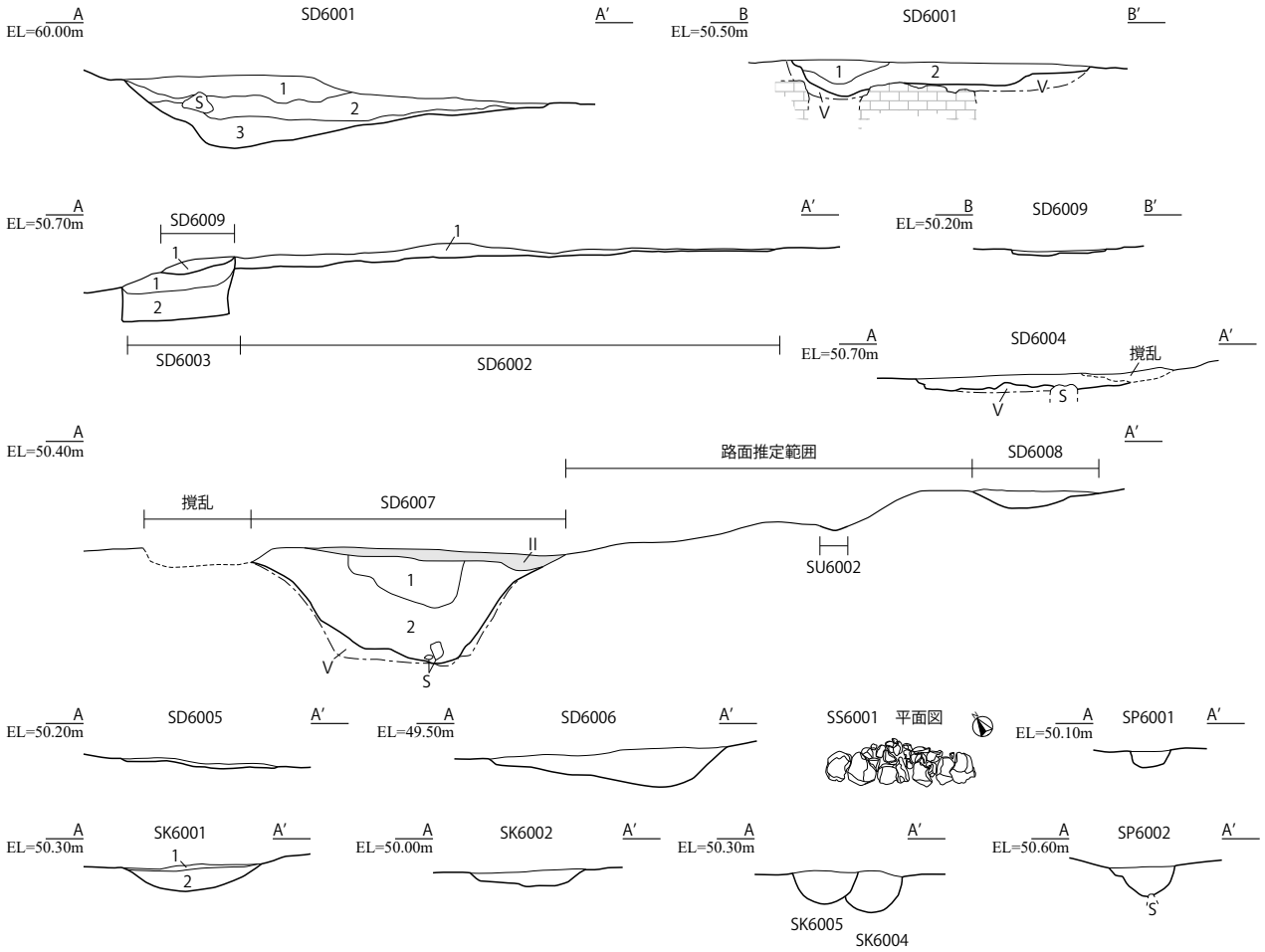
SD6007 からは、近代磁器やキセルなどの遺物が出土している（第 67 図）。

溝状遺構は、Ⅲ層上面および地山面で検出され、北東−南西方向あるいは北西−南東方向にのび区画しているもので、耕作に伴う遺構とみられる。

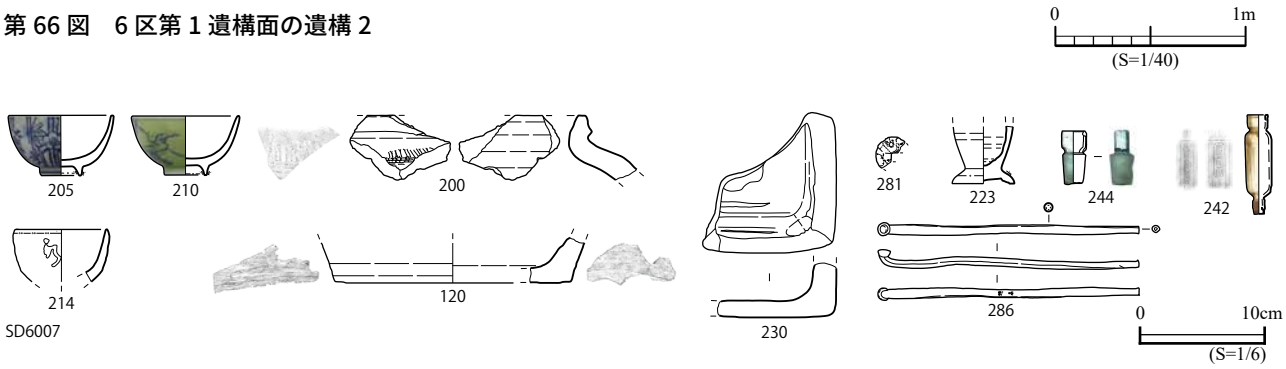
SD6002 ～ 6004・6006・6009 は北東−南西方向にのびるもので、SD6009 は SD6003 の上位にあり重複しており、北側で続きとみられる溝が検出されている。SD6002 は、SD6003 の東側で浅く広がる溝で、底面に平面形が三角形状で鍬跡とみられるピットが検出されている。ピットは、溝状遺構と同様にⅡ層由来の埋土である。SD6004 は浅く広がる溝で、底面にピット（SP6002）が検出されている。

SD6001・6005 は北西−南東方向にのびる。SD6001 は一部岩盤を掘り込んで構築しており、底面で礫が出土している。

土坑は、方形状（SK6002）や細長の形状（SK6001・6004・6005）のものがある。



第 66 図　6 区第 1 遺構面の遺構 2



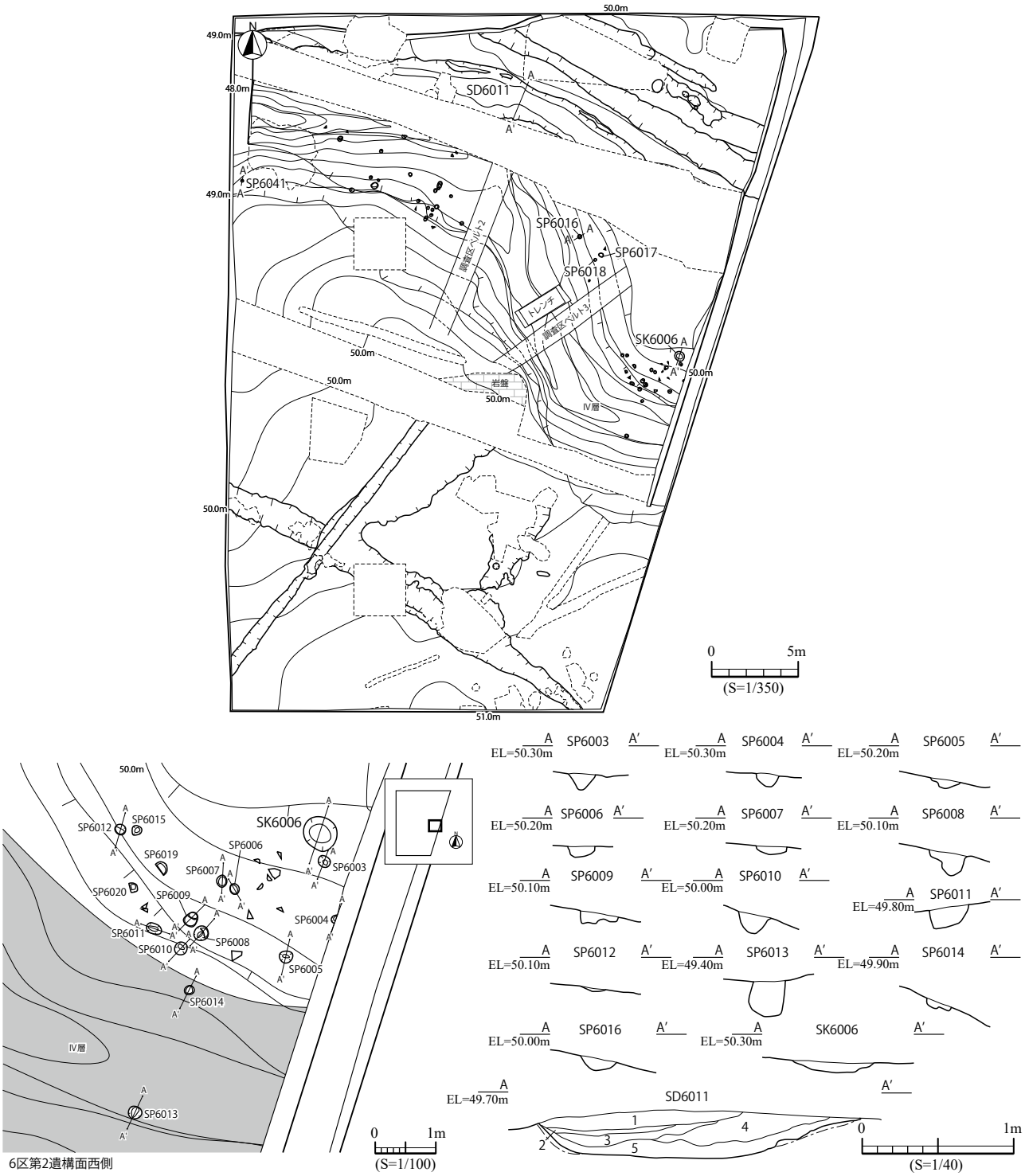
第 67 図　6 区第 1 遺構面出土遺物

第２遺構面

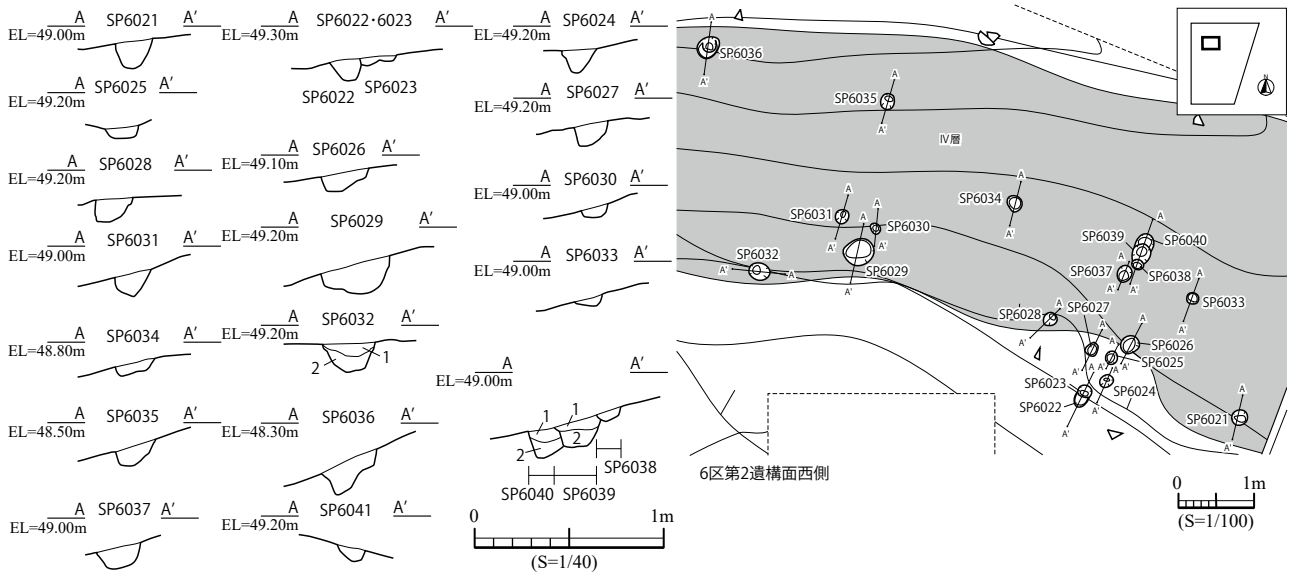
６区北側の埋没谷２に堆積するグスク時代のⅢ層を掘削し、溝状遺構とピットを検出した（第 68・69 図）。

溝状遺構（SD6011）は、埋没谷２北側（ズケ９－Ｎ２・３）で谷の向きにそって、北西－南東方向にのびている。当該遺構は地形を利用して構築されている。溝の底面は、埋没谷の底面と比べると標高的に高い位置にある。SD6011 は埋没谷２でⅢ層がある程度堆積した段階で構築された遺構と考えられる。SD6011 からは青磁Ｖ類やグスク土器、カムィヤキＡ群が僅かに出土している。

ピットは、埋没谷２の斜面や底面で検出されている。ズケ９－Ｏ２やズケ９－Ｎ２・３グリッドの斜面でまとまって検出された箇所がある。ピットは、Ⅲ層を由来とするもので浅いものが多く、鍬跡のような三角形状のものもみられる。４区 SD4009 のように谷地形を利用した痕跡と考えられる。



第 68 図　６区第２遺構面の遺構１

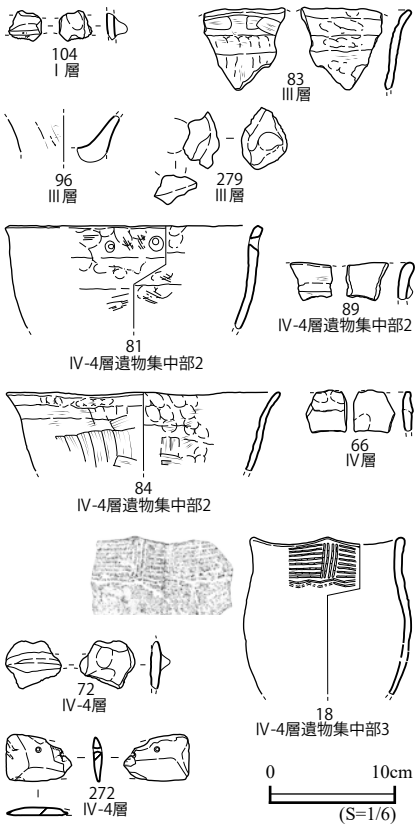


第 69 図　6 区第 2 遺構面の遺構 2

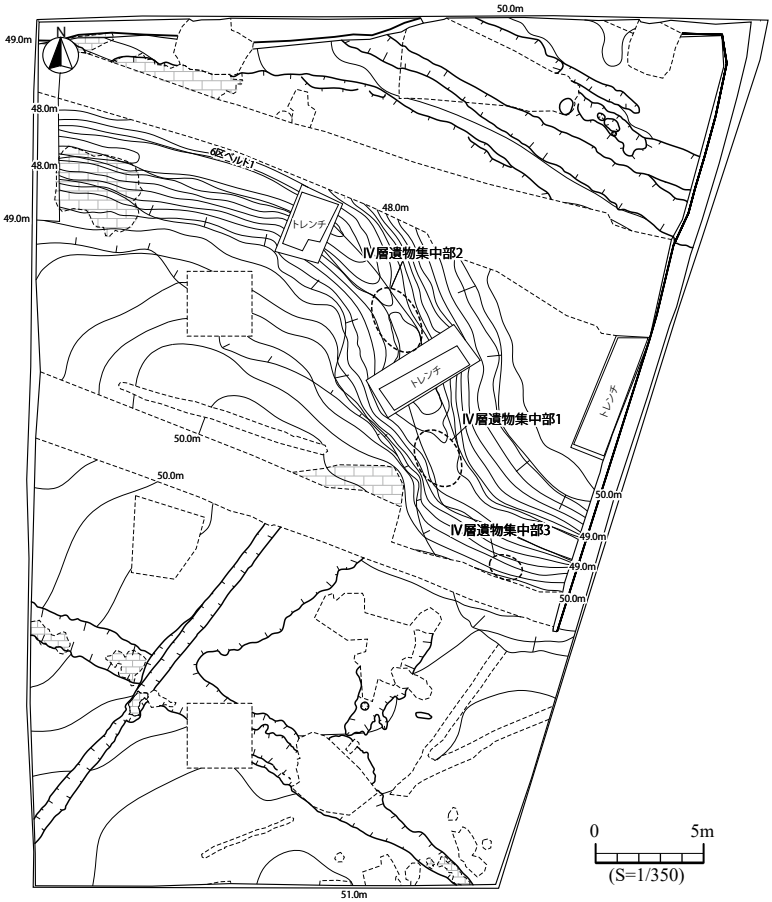
第３面

６区埋没谷２のⅣ−４層を掘削し、谷地形となるⅤ層の地山面を検出した（第 71 図）。明確な遺構は確認できなかった。Ⅳ−４層からは貝塚時代の遺物が出土し、遺物が集中する箇所を遺物集中部１～３として取り上げた。このうち遺物集中部２は貝塚後期のフェンサ下層式土器 (81・84・89)、遺物集中部３からは貝塚前期の荻堂式 (18) が出土し、貝塚時代後期後半の堆積過程で古い前期土器が混入したものと考えられる。

なお、遺物集中部２でフェンサ下層式とともに出土した炭化物の年代測定では、1310 ± 20BP（７世紀後半～８世紀後半）で貝塚時代後期後半の年代値が得られた。



第 70 図　6 区第 3 面出土遺物



第 71 図　6 区第 3 面（地山面）

（８）７区

７区は６区南側の標高 50m 前後の平坦地に設定し、グリッドはズケ 16－Ｂ３～４・Ｃ３～４、調査面積は 400 ㎡である。

層序と地形

Ⅰ層の直下でⅤ・Ⅵ層が検出され、Ⅱ・Ⅲ層はみられない。調査区北西側は撹乱により地形が改変され、岩盤が露出している。

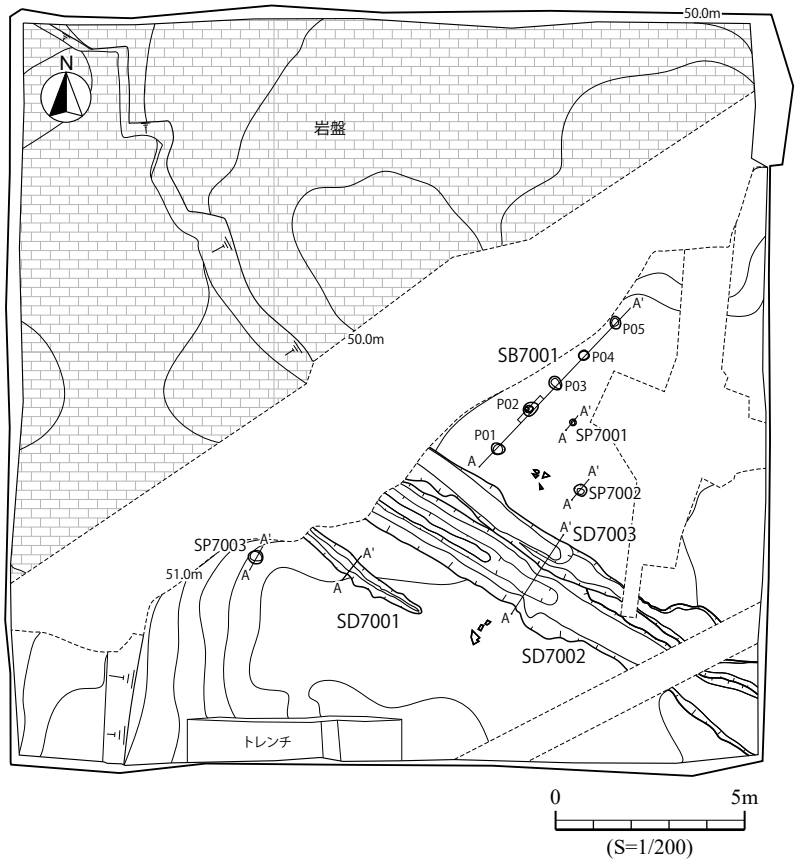
遺構と遺物

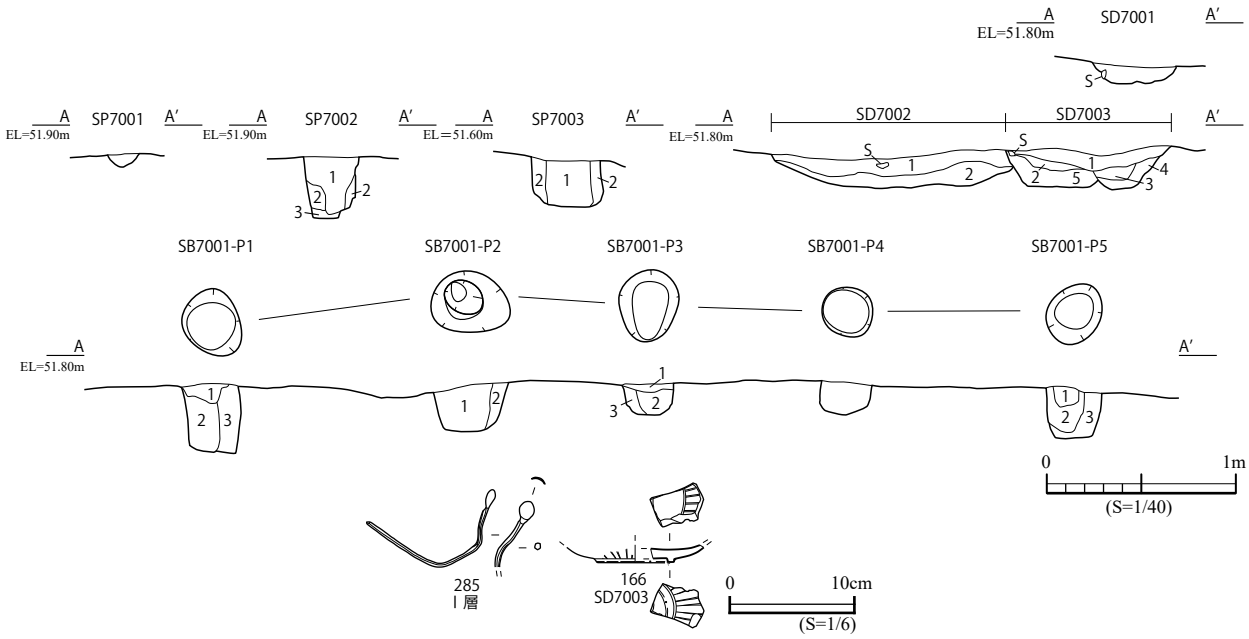
調査は、Ⅰ層掘削後にⅡ・Ⅲ層由来の遺構をⅤ層地山面で検出した（第 72 図）。

近世～近代の遺構は、溝状遺構（SD7001 ～ 7003）とピット（SP7001・7002）が検出されている。ともにⅡ層由来の埋土である。溝状遺構（SD7001 ～ 7003）は、北東−南西方向にのびる。調査時には道跡としての番号は付していなかったが、昭和 20 年の空中写真における道の区画と合致している。普天間古集落から古墓群に至る「道５」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015b）

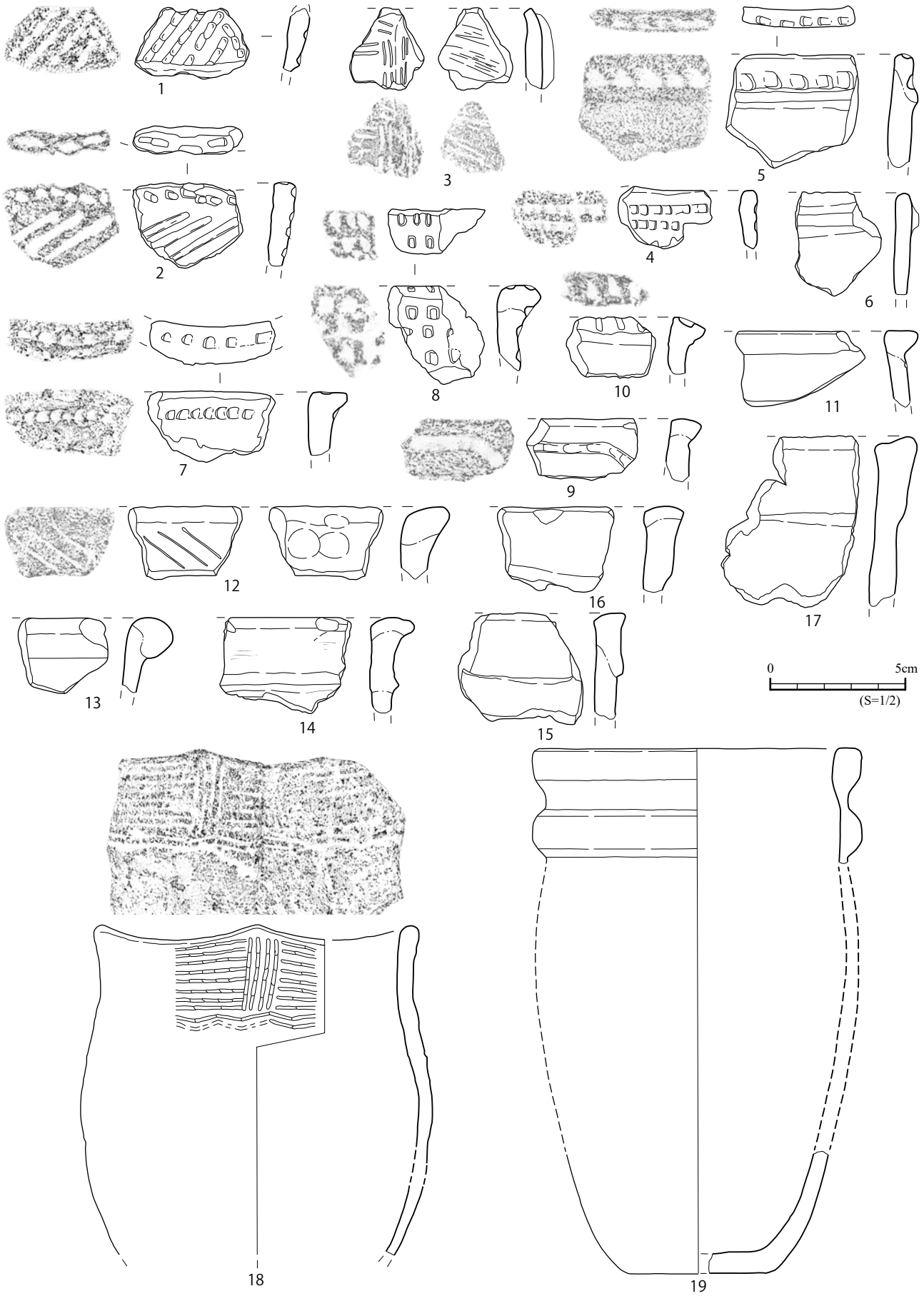
グスク時代の遺構は、ピットが検出されている。ピットは、Ⅲ層を由来とする埋土で、柱痕を有するものもある（SP7003）。

掘立柱建物跡（SB7001）は、柱痕を有するピットが列状に並ぶもので、掘立柱建物跡の一部と考えられる。建物の軸は北東−南西（北 44 度東）である。中柱と側柱からなる母屋のような建物であったと想定される。なお、SB7001 の年代測定を実施した結果、Ｐ１が 1095 ± 20BP、Ｐ５が 1040 ± 20BP で９世紀後半～ 11 世紀前半の年代値が得られた。

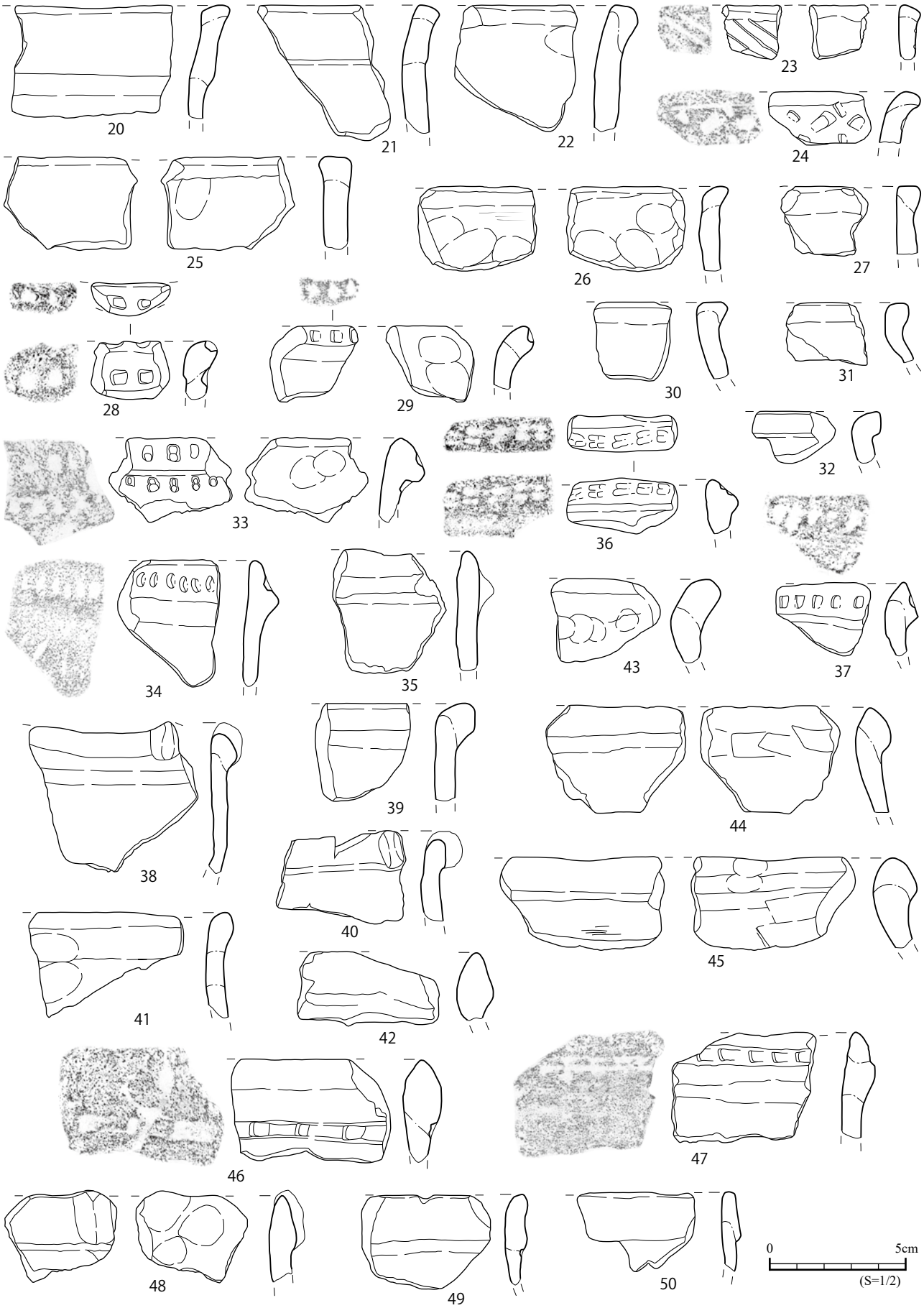




第 72 図　７区の遺構と出土遺物

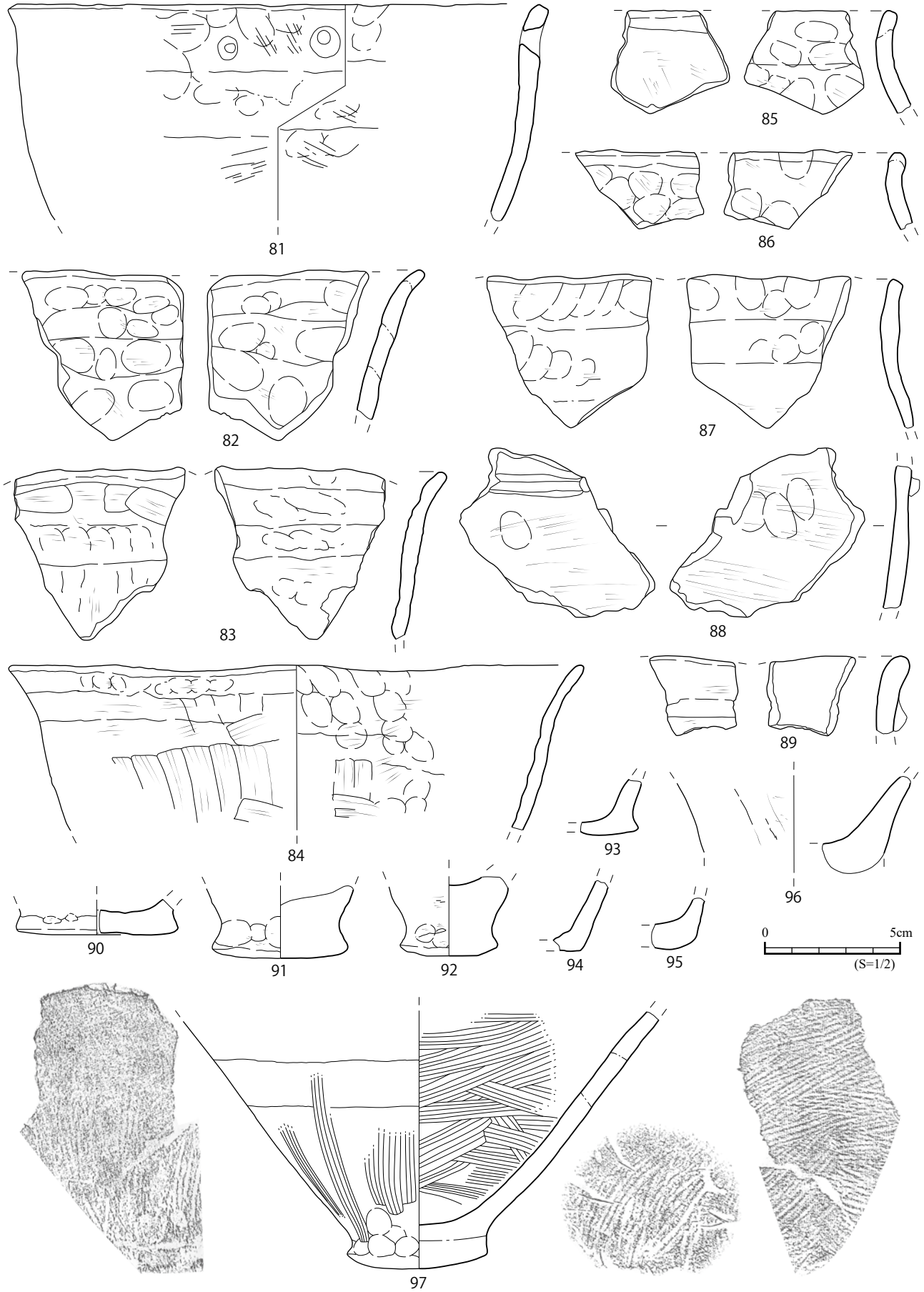


第 73 図　出土遺物 1（貝塚前期土器）

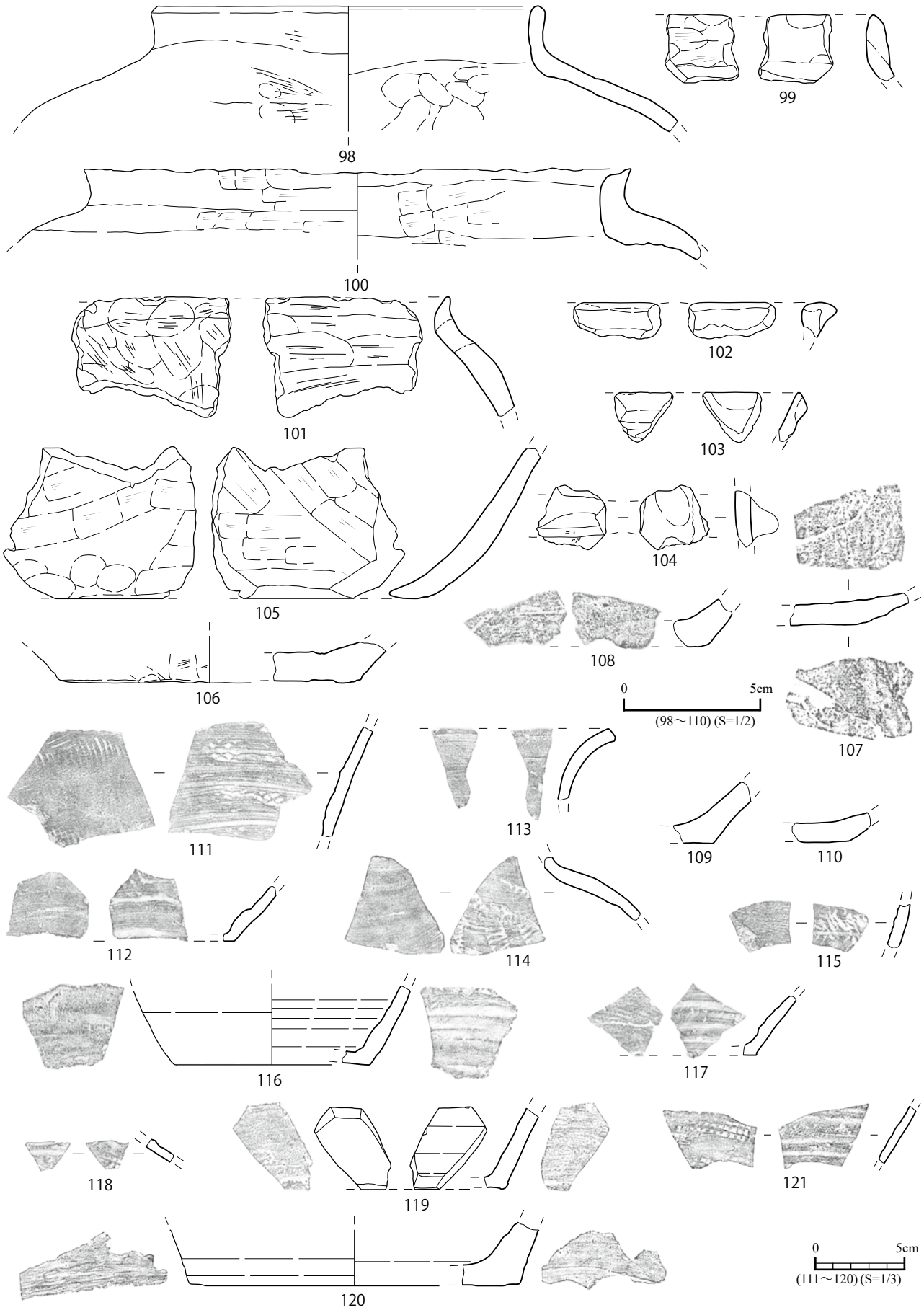


第 74 図　出土遺物 2（貝塚前期土器）

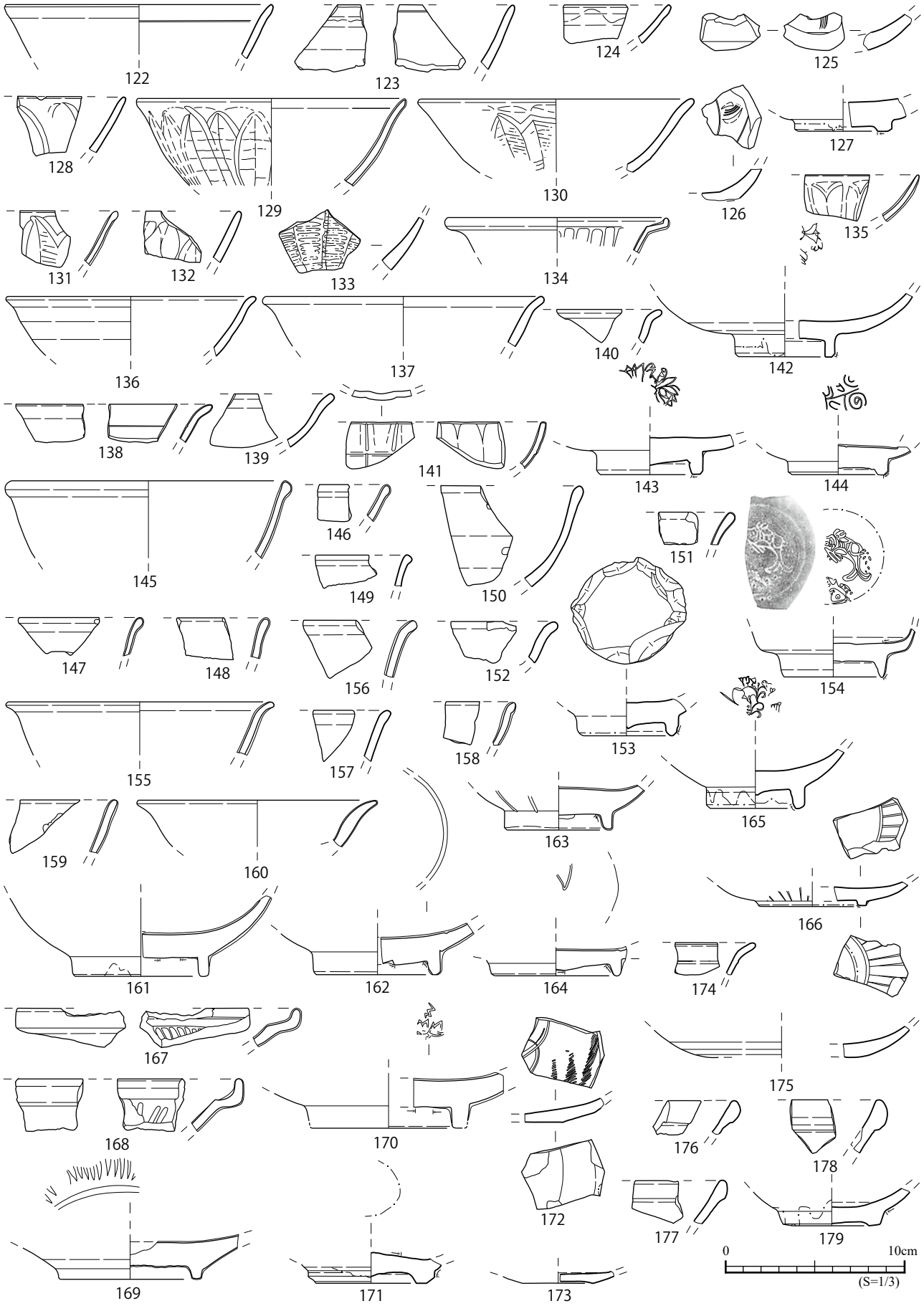
第 75 図　出土遺物 3（貝塚前期土器）



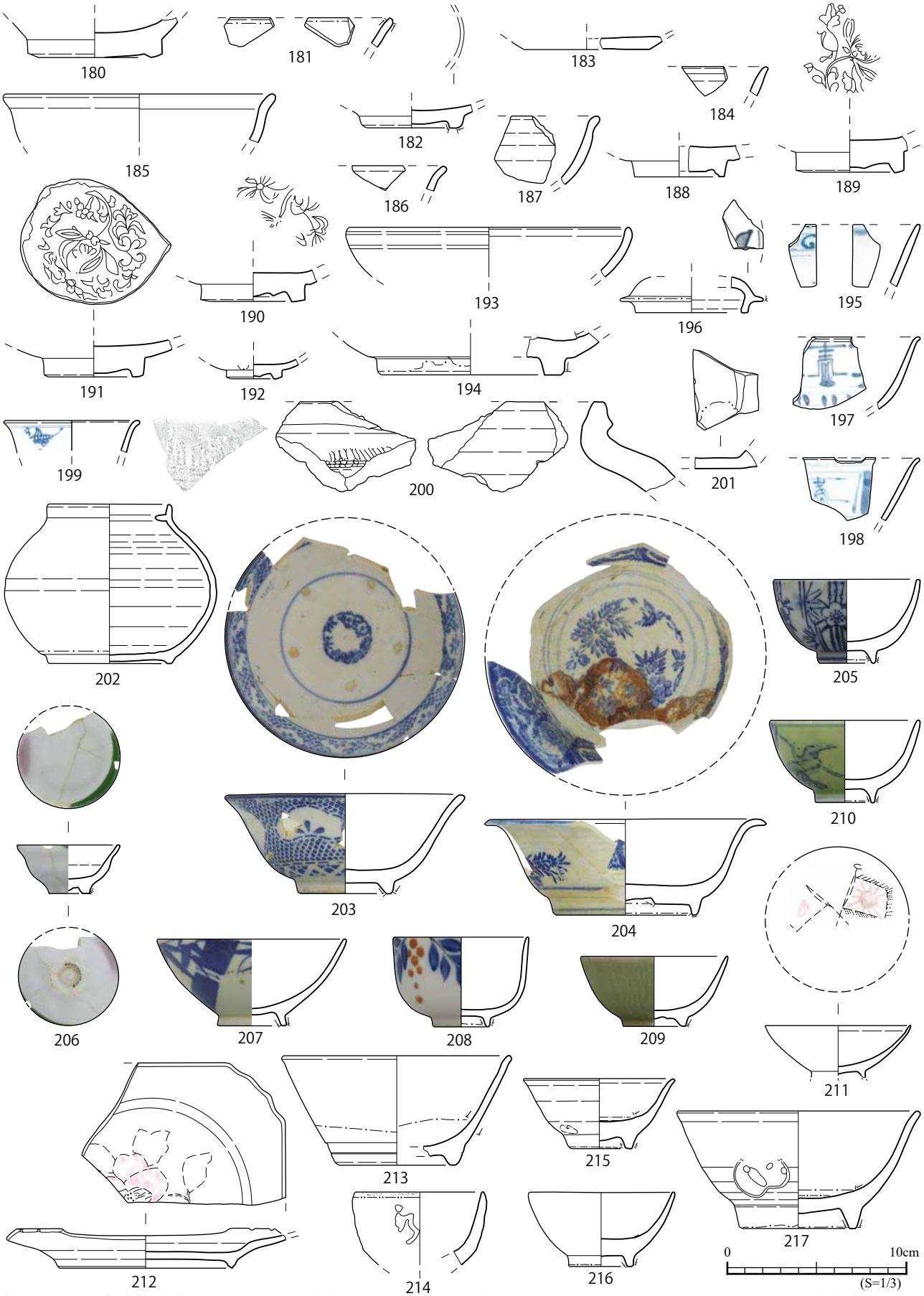
第 76 図　出土遺物 4（貝塚後期土器）



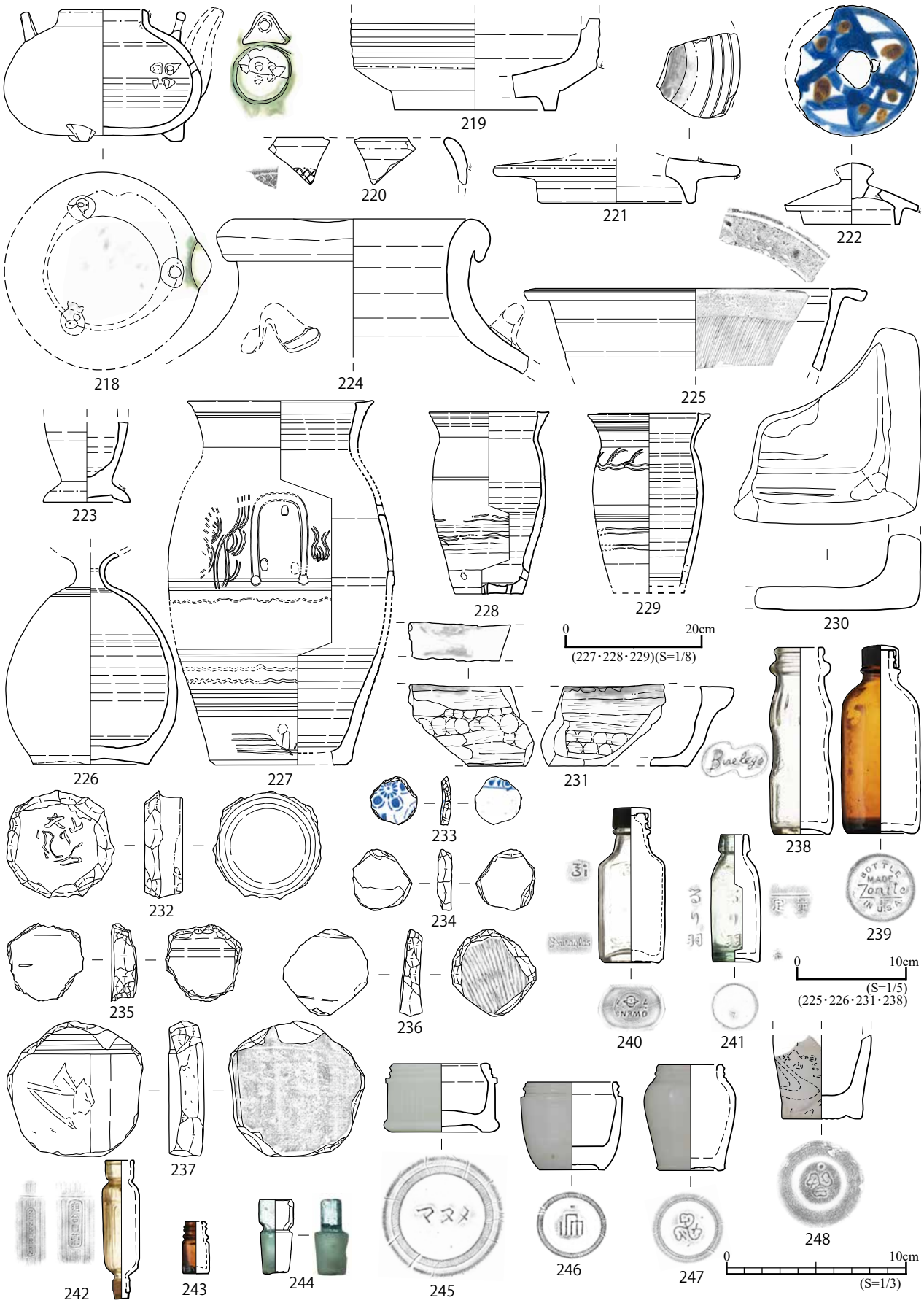
第 77 図　出土遺物 5（グスク土器 98~110・カムィヤキ 111~117・朝鮮系無釉陶器 118~121）



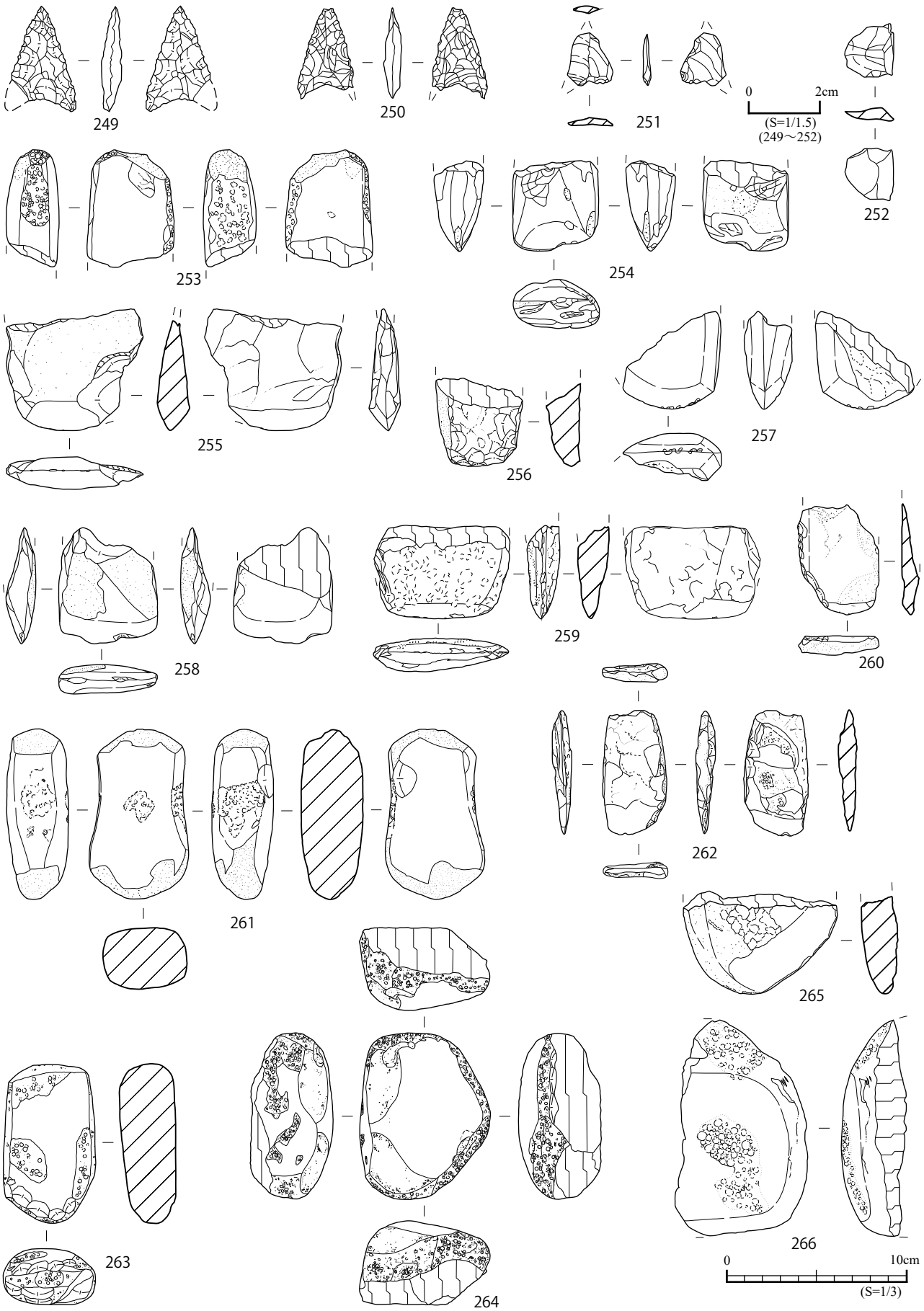
第 78 図　出土遺物 6（青磁 122~175・白磁 176~179）



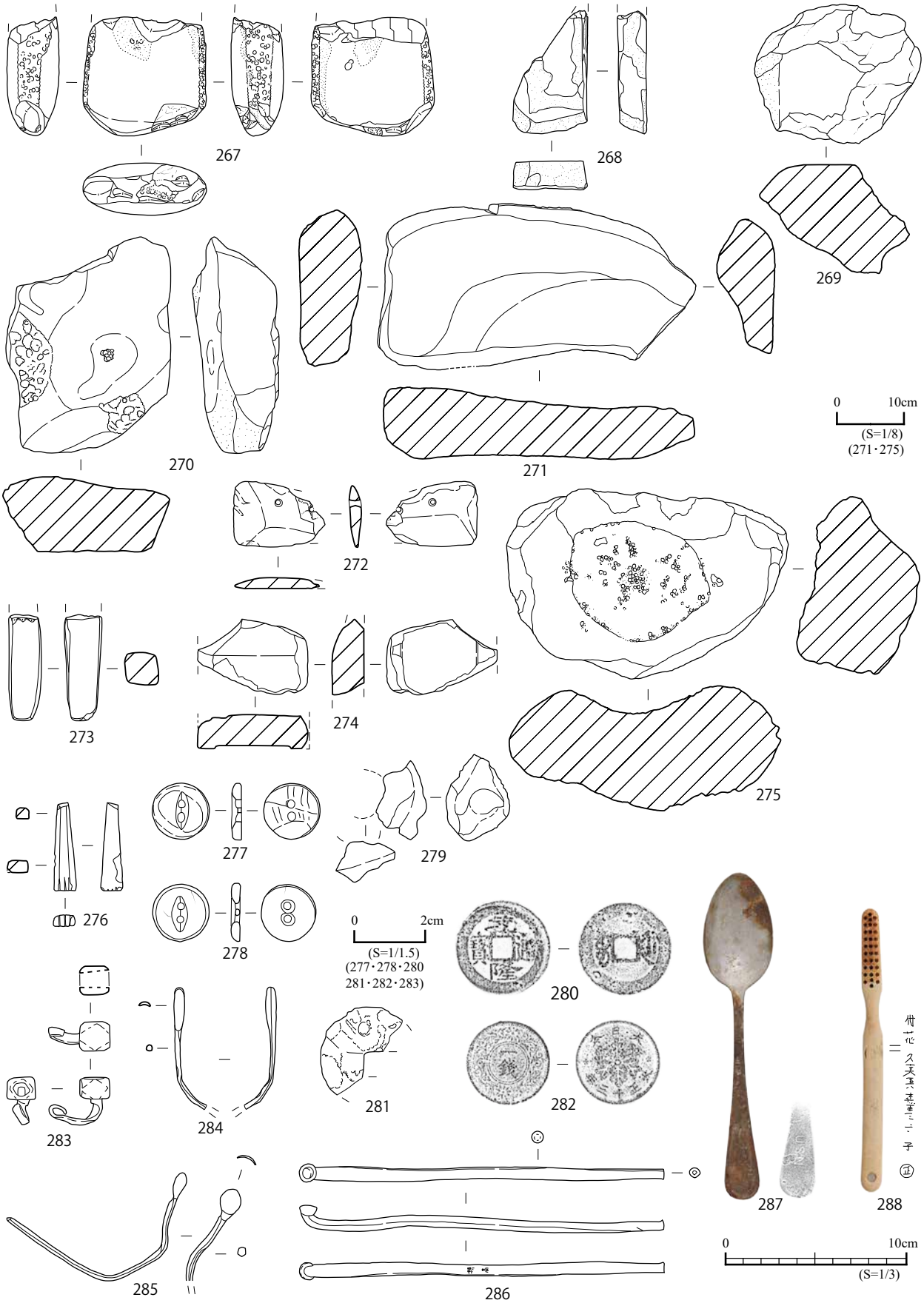
第 79 図　出土遺物 7（白磁 180~194・青花 195~199・中国産褐釉陶器 200・201・本土産近世陶器 202・本土産近代磁器 203~212・沖縄産施釉陶器 213~217）



第 80 図　出土遺物 8（沖縄産施釉陶器 218~223・沖縄産無釉陶器 224~226・厨子甕 227~229・陶質土器 230~231・円盤状製品 232~237・ガラス製品 238~248）



第 81 図　出土遺物 9（石器）



第 82 図　出土遺物 10（石器・石製品 267~275・骨製品 276・貝製品 277~278・羽口 279・銭貨 280~282・金属製品・283~287・プラスチック製品 288）

第９表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧１

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP1001	1区	9I-8	1	Ⅱ	44	近世～近代。1:10YR5/8黄褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性強、褐色土混じり。2:10YR 4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性強、石灰岩礫含。3:10YR5/8黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱に暗褐色土混入。	
SP1002	1区	9I-8	1	Ⅱ	35.2	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性強、褐色土混入。2:10YR 4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性強。3:10YR4/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱、赤褐色土混入。2･3に根固め礫。	
SP1003	―	―	―	―	―	欠番	
SP1004	―	―	―	―	―	欠番	
SP1005	―	―	―	―	―	欠番	
SP1006	―	―	―	―	―	欠番	
SP1007	―	―	―	―	―	欠番	
SP1008	―	―	―	―	―	欠番	
SP1009	―	―	―	―	―	欠番	
SP1010	―	―	―	―	―	欠番	
SP1011	―	―	―	―	―	欠番	
SP1012	―	―	―	―	―	欠番	
SP1013	―	―	―	―	―	欠番	
SP1014	1区	9-I8	1	Ⅱ	6.4	グスク時代～近世の植栽痕か。列状ピット群1。単層。10YR4/6褐色、しまり強、粘性弱。	
SP1015	1区	9-I8	1	Ⅱ	8.6	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1016	1区	9-I8	1	Ⅱ	8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1017	1区	9-I8	1	Ⅱ	7.7	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1018	1区	9-I8	1	Ⅱ	8.4	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1019	1区	9-I8	1	Ⅱ	12.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	土器グスク器種不明(胴1)
SP1020	1区	9-I8	1	Ⅱ	12.1	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1021	1区	9-I8	1	Ⅱ	11.6	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1022	1区	9-I8	1	Ⅱ	9.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1023	1区	9-I8	1	Ⅱ	9.7	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1024	1区	9-I8	1	Ⅱ	8.8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1025	1区	9-I8	1	Ⅱ	14.9	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1026	1区	9-I8	1	Ⅱ	10	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1027	1区	9-I8	1	Ⅱ	13.1	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	土器グスク器種不明(胴1)
SP1028	1区	9-I8	1	Ⅱ	9.6	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1029	1区	9-I8	1	Ⅱ	5.8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1030	1区	9-I8	1	Ⅱ	11.2	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1031	1区	9-I8	1	Ⅱ	5.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1032	1区	9-I8	1	Ⅱ	14.7	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1033	1区	9-I8	1	Ⅱ	4.9	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1034	1区	9-I8	1	Ⅱ	9.2	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1035	1区	9-I8	1	Ⅱ	13	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1036	1区	9-I8	1	Ⅱ	4.5	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1037	1区	9-I8	1	Ⅱ	6.8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1038	1区	9-I8	1	Ⅱ	6.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1039	1区	9-I8	1	Ⅱ	13.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1040	1区	9-I8	1	Ⅱ	4.5	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1041	1区	9-I8	1	Ⅱ	10.3	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1042	1区	9-I8	1	Ⅱ	23.8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1043	1区	9-I8	1	Ⅱ	9.4	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1044	1区	9-I8	1	Ⅱ	4.6	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1045	1区	9-I8	1	Ⅱ	10.2	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	
SP1046	1区	9-I8	1	Ⅱ	12.8	グスク時代～近世の植栽痕。列状ピット群1。SP1014と同じ埋土	土器貝塚後期器種不明(胴1)
SP1047	1区	9-H8	2	Ⅲ	4.5	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、黄褐色土混入、SD1008と類似。	
SP1048	1区	9-H8	2	Ⅲ	6.4	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱、マージ混入、SD1008上面検出。	
SP1049	1区	9-H8	2	Ⅲ	38.1	グスク時代。単層。10YR4/6暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、炭粒・焼土粒・ニービ・黄褐色土混入。	土器貝塚前期器種不明(胴2)
SP1050	1区	9-H8	2	Ⅲ	4.4	グスク時代。単層。10YR5/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、黄褐色土・炭粒・焼土粒混入。	
SP1051	1区	9-H8	2	Ⅲ	4.7	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、黄褐色土混入。	
SP1052	1区	9-H8	2	Ⅲ	3.1	グスク時代。SP1051よりも黄褐色土が多く混入。	
SP1053	1区	9-H8	2	Ⅲ	―	グスク時代。	
SP1054	1区	9-H9	2	Ⅲ	―	グスク時代。	
SK1001	1区	9-H8	2	Ⅲ	32.1	グスク時代。1:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、炭粒・焼土粒・ニービ混入。2:10YR3/4暗褐色。南北方向（N 22°W）。	
SD1001	1区	9-I8	1	Ⅱ	3.4	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。北西-南東方向（N 40°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SD1002	1区	9-I8･H8	1	Ⅱ	3～9.4	近世～近代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱、マージ粒混入。2:10YR3/4暗褐色。しまり強、粘性弱。北西-南東方向（N 41°W）。	沖施B-1類小碗(口1)
SD1003	1区	9-I8	1	Ⅱ	12.4	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。北西-南東方向（N 49°W）。	土器貝塚前期深鉢(胴1)、カムィヤキA群壺(胴1)、中褐壺(胴1)、沖施B-1類碗(胴1)、沖無壺or甕(胴1)

第 10 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 2

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SD1004	1区	9-I8～I9	1	Ⅱ	26.6	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性弱。北西-南東方向（N 48°W）。	土器貝塚前期器種不明(底1)、沖施B類小碗(底1)・B-1類小碗(口1)・B-2類小碗(口～底1)、沖無擂鉢(胴1)・壺or甕(胴2)、陶質土器器種不明(底1)、円盤状製品(1)、石材(1)、瓦(平2)
SD1005	1区	9-H9	1	Ⅱ	15.8	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。北西-南東方向（N 43°W）。	
SD1006	1区	9-H9	1	Ⅱ	28.5	近世～近代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。北西-南東方向（N 47°W）。	
SD1007	1区	9-H8	2	Ⅲ	13.8	グスク時代。単層。10YR4/6 褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。SD1008を切る。北西-南東方向（N 55°W）。	
SD1008	1区	9-H8	2	Ⅲ	28～32	グスク時代。1:SP1047・SP1048と同じ。2:10YR5/8黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、暗褐色土・焼土粒・炭粒混入。SD1007に切られる。北西-南東方向（N 44°W）。	土器貝塚後期器種不明(胴1)、青磁Ⅳ類碗(胴2)
SD1009	1区	9-I8	2	Ⅲ	1.7～4.8	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性強、黄褐色土混入。北西-南東方向（N 65°W）。	
SD1010	1区	9-H8	2	Ⅲ	3.8～4.3	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱、炭粒・焼土粒混入。北西-南東方向（N 55°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)、グスク壺甕類(底1)
SS1001	1区	9-I8	2	Ⅲ		グスク時代の石列。Ⅲ層中より検出。石灰岩礫を北東-南西方向（N 47°E）に配する。	
SS1002	1区	9-H8	2	Ⅲ		グスク時代の石列。Ⅲ層中より検出。石灰岩礫を北東-南西方向（N 51°E）に配する。	
SL1001	1区	9-I8	2	Ⅲ	17.9	グスク時代の炉跡。1:10YR3/2黒褐色シルト～極細粒砂に10YR3/4暗褐色が混入。しまり強、粘性なし、炭粒・焼土粒混入。2:2.5YR暗オリーブ褐色シルト～極細粒砂に黄褐色が混入。しまり強、粘性なし。炭粒、焼土粒混入。焼土粒域:壁面が7.5YR5/6明褐色、5YR4/8～3/4明・暗赤褐色。厚み1～2cm。	
SI1001	1区	9-I8	2	Ⅲ	1.1～4	グスク時代の円弧状遺構。単層。10YR 4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性強、黄褐色土混入。	
1区　表採・Ⅰ層		土器貝塚前期器種不明(胴1)、陶質土器器種不明(胴1)、石器・石製品(スクレイパー1)、不明器種不明(1)					
1区　Ⅱ層		土器グスク器種不明(底1)・貝塚前期器種不明(胴3)、カムィヤキA群器種不明(胴1)・B群壺(底1)、青磁Ⅴ類碗(口1)・Ⅴ類皿(底1)・分類なし盤(口1)、青花碗(底1)、本磁A類碗(口1)、沖施C類碗(口1、胴3、底1)・A-2類小碗(底1)・B類小碗(口3、胴1)・分類なし鉢(胴1)・袋物(胴1)、沖無壺or甕(胴15)・壺(胴1)・甕(底1)・擂鉢(胴2)、陶質土器鉢(胴1)・鍋(口1)・器種不明(胴6、耳1)、円盤状製品擂鉢(胴1)、石器・石製品(砥石2、石皿・台石類1)、石材(3)、瓦(平7・丸・平不明2)					
1区(谷1)　Ⅲ層		土器宇佐浜式壺(口1)・宇佐浜式深鉢(口3)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(把手1、平底1)・貝塚前期器種不明(胴84)・貝塚後期甕(小径厚底1)・グスク壺甕類(底1)・グスク器種不明(胴28)・グスク第2様式壺(口1)、カムィヤキB群壺(肩1、胴3)、青磁Ⅱ類碗(口1)・Ⅳ類碗(口1、底1)、白磁C3群碗(底1)、陶質土器器種不明(胴2)、円盤状製品(2)、石器・石製品(刃器1、磨石のある石器1、石造物1)、石材(3)					
1区(谷1) Ⅳ-3層		土器室川式深鉢(口17)・室川式有文深鉢(口3)・宇佐浜式深鉢(口9)・宇佐浜式壺(口3)・宇佐浜式有文深鉢(口2)・仲原式深鉢(口2)・貝塚前期深鉢(平底1)・貝塚前期器種不明(胴342)・貝塚前期有文器種不明(胴1)・貝塚後期甕(口1)・グスク器種不明(胴19)、沖施B類小碗(口1)、石器・石製品(石皿か台石1、石鏃1、敲磨石3、砥石1、刃器2、石斧1、ユーズドフレイク1)、石材(42)、焼土(2)					
SP2001	2区	9-J6	1	Ⅲ	3	グスク時代の鍬跡か。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱、炭粒・焼土粒(1mm)少量混入。	
SP2002	2区	9-J6	1	Ⅲ	2.8	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2003	2区	9-J6	1	Ⅲ	2.6	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2004	2区	9-J6	1	Ⅲ	2.4	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2005	2区	9-J6	1	Ⅲ	2.2	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2006	2区	9-J6	1	Ⅲ	4.8	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2007	2区	9-J6	1	Ⅲ	3	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2008	2区	9-I6	1	Ⅲ	2.7	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2009	2区	9-I6	1	Ⅲ	13.5	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2010	2区	9-I6	1	Ⅲ	2	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2011	2区	9-J6	1	Ⅲ	14	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱、炭粒・焼土粒混入。	
SP2012	2区	9-I6	1	Ⅲ	9	グスク時代の鍬跡か。SP2001と同じ埋土。	
SP2013	2区	9-I6	2	Ⅳ	30	貝塚時代か。単層。 10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。マージ粒混入。埋土は2区中央アゼのⅣ-2層に類似。	
SP2014	2区	9-I7	2	Ⅳ	15	貝塚時代か。2区調査区ベルト1西側Ⅳ-2層下部で確認。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。	
SP2015	2区	9-I7	2	Ⅳ	17	貝塚時代か。2区調査区ベルト1西側Ⅳ-2層下部で確認。単層。SP2014と同じ埋土。	
SD2001	2区	9-J 6～J7	1	Ⅲ	40	グスク時代。谷地形を利用した溝状遺構。1・2は溝再構築後の堆積。3・4は溝下層。5は溝床面の土坑状堀込。 1・2:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強、粘性弱、炭化粒混入。1は多量のマージ粒を混入。3・4:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性やや強、マージ粒・炭化粒混入。5:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性強、マージ粒・炭化粒僅かに混入。北西-南東方向（N 38～61°W）。	
						土器大山式深鉢(胴1)・室川式深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口3)・宇佐浜式壺(口1)・仲原式深鉢(口1)・仲原式有文深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(胴40、尖底1)・貝塚前期器種不明(胴26)・貝塚後期器種不明(胴21)・グスク壺甕類(底3)・グスク器種不明(胴50)・グスク第2様式壺(口1)、カムィヤキA群壺(頸1)・B群壺(底1)、青磁Ⅰ類碗(口1)・Ⅱ類碗(胴1)・Ⅲ類皿(口1)・Ⅳ類碗or皿(胴1)・皿(口2)・Ⅳ'類碗(口1)・Ⅴ類碗(口1、胴2、底2)・磁竈窯系碗(胴1)・器種不明(胴2)、白磁C群碗(胴3)・D群器種不明(胴1)、中褐器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石5、敲磨石類1、チップ1、磨斧1、磨面のある石器1)、石材(32)、焼土(3)	

第 11 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 3

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SD2002	2区	9-I7	1	II	34	近世～近代。1:10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱、炭化粒・焼土粒混入。2:1にマージ粒が多く混入。北西-南東方向（N 53°W）。	土器貝塚後期鉢(胴4)・貝塚後期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴3)、石材(2)
SD2003	2区	9-I7	1	III	25	グスク時代。単層。10YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂。しまりやや弱、焼土粒、炭化粒が僅かに混入。南北方向（N 18°E）。	土器貝塚前期器種不明(胴3)・グスク器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石1)
SD2004	2区	9-I7	1	II	20	近世～近代。南北方向（N 13°W）。	
SD2005	2区	9-J7	―	II	33	近世～近代。南壁で確認。27号墓造成土の下に位置することから27号墓構築以前の遺構と思われる。1:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、焼土粒・炭化粒・マージ粒混入。2:10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、黄褐色粗砂を多く含み、マージ粒・焼土粒・炭化粒を少量混入。3:10YR5/4にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。マージ粒を多く含み、焼土粒・炭化粒を少量混入。	
SD2006	2区	9-I7	―	III	12	グスク時代。2区調査区ベルト1西側III層下部で確認。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまりはやや弱。焼土粒・炭化粒がわずかに混入。	
SS2001	2区	9-J6	1	III	30	グスク時代の石列。III層中より検出。岩盤を溝状に掘り込み上面に10～20cmの自然礫を北西-南東方向（N 53°W）に配する。礫に伴う埋土は10YR4/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性強、炭化粒が僅かに混入。	土器貝塚前期深鉢(胴24)・貝塚前期器種不明(胴9)、石器・石製品(石皿・台石類1、敲磨石1、台石1)
SS2002	2区	9-I6～J6	2	IV-2	―	貝塚時代の集石遺構か。IV-1～2層中(2～6)より検出。5～30cmの石灰岩礫を東西方向（N 74°E）に集積。 1:III～IV-1層。2:IV-1層。3:IV-1層。しまりやや強。マージ粒多量、焼土粒少量混入。4:IV-2層。10YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強。黒褐色土粒少量混入。5:IV-2層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強。黒褐色粒・マージ粒多く焼土粒・炭化粒少量混入。6:IV-2層。7:IV-3層。	土器貝塚前期器種不明(胴3)・グスク器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石1)、石材(2)、焼土(1)
SS2003	2区	9-I7	2	IV-2	―	貝塚時代の集石遺構か。IV-2層中(3)より検出。約5～30cmの石灰岩礫を北東-南西（N 47°E）に集積。 1:IV-1層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性やや弱、マージ粒混入。2:IV-1層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性やや強。炭化粒・焼土粒少量混入。3:IV-2層で集石層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。2よりやや暗、しまりやや強、粘性やや弱。炭化粒・焼土粒混入。4:IV-2層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。炭化粒・焼土粒少量混入。5:IV-3層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性強。炭化粒・焼土粒少量混入。	土器宇佐浜式壺(口1)・貝塚前期器種不明(胴10)、石材(2)
SS2004	2区	9-I7	1	III	14	グスク時代の石列。III層中より検出。SS2001の続きか。北西-南東方向（N 65°W）1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。炭化粒少量混入。2:1よりマージ粒多く混入。	土器宇佐浜式壺(口1)・貝塚前期器種不明(胴1)・貝塚後期器種不明(胴1)
SX2001	2区	9-I7	1	II	20	近世～近代。1:10YR3/2黒褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒混入。 2:10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。しまりやや弱、マージ粒混入。 3:10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまりやや弱、僅かに10YR2/2黒褐色土混入。	
27号墓	2区	9-J7	―	―	―	埋没古墓。第5章で記載。	
2区　表採・Ⅰ層						土器室川式深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口2)・宇佐浜式有文壺(口1)・貝塚前期深鉢(胴4)・貝塚前期器種不明(胴20)・フェンサ下層式甕(不明1)・貝塚後期器種不明(胴25)・グスク碗(底1)・グスク器種不明(胴40)・グスク第2様式器種不明(胴2)・グスク第3様式壺(口1)・グスク第3様式壺甕類(底1)、カムィヤキA群壺(底1)、青磁Ⅰ類碗(胴1)・Ⅱ類碗(胴1)・Ⅲ'類皿(口1)・IV類碗(口2、底1)・IV類皿(底1)・IV'類皿(口1)・Ⅴ類碗(口2)・Ⅴ類皿(底2)・幅広高台タイプ碗(底1)・分類なし盤(底1)・器種不明(胴7)、白磁A群碗(底1)・C群碗(胴2)・C3群碗(口2)・IV類碗(口1)、青花D群碗(口1)・分類なし碗(口2、胴1)、中褐器種不明(胴1)、本磁A類碗(底1)・A類小碗(口1)・B類碗(胴1)・B類小碗(口1)・B類湯呑(底1)・C類小碗(口～底1)、沖施A類碗(口2)・B類小碗(底1)・B-1類碗(胴1)・B-1類小碗(底1)・B-2類碗(底2)・C類碗(底4)・C-1類碗(口～底1)・C-2類碗(口1)・分類なし皿(胴1)・瓶(口1)・香炉(類1)・蓋(庇1)・器種不明(胴3)、沖無擂鉢(口1)・壺or甕(底1)・甕(胴1)・器種不明(胴4)、厨子甕蓋III類(体部2)、陶質土器器種不明(底1)、円盤状製品(2)、石器・石製品(敲磨石2、砥石1、フレイク1)、石材(5)、瓦(丸1)、ガラス製品薬瓶(口～底3)、焼土(4)、不明器種不明(胴1)	
2区　Ⅱ層						土器室川式深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴2)・貝塚後期器種不明(胴7)・グスク器種不明(胴5)、カムィヤキB群壺(口1)、青磁Ⅴ類碗(口2)・分類なし器種不明(胴2)、白磁C3群碗(胴1)・福建産碗(底1)、中褐器種不明(胴1)、沖施器種不明(胴2)、沖無器種不明(胴1)、陶質土器器種不明(胴2)、石器・石製品(敲磨石2)、石材(2)、鉄製品(器種不明1)、鉄滓(1)、焼土(2)、不明器種不明(胴1)	
2区(谷1)　Ⅲ層						土器宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴32)・フェンサ下層式甕(小径厚底1)・貝塚後期器種不明(胴56、小径厚底1)・グスク碗(底2)・グスク壺甕類(胴2、底3)・グスク器種不明(胴116)・グスク第2様式壺甕類(底1)・グスク第3様式壺甕類(底1)・グスク第3様式壺(胴1)、カムィヤキA群壺(底2)・B群壺(肩2、胴5)、青磁Ⅱ類碗(口2、胴2、底1)・Ⅲ類皿(口1)・IV類碗(口5、胴6)・IV'類碗(口2、底1)・IV'類皿(口1)・Ⅴ類皿(底1)・分類なし皿(胴1)・盤(胴2、底2)・器種不明(胴4)、白磁C群碗(胴1)・C3群碗(口2、胴2、底1)・D群皿(胴2)・IV類碗(底1)・分類不明碗(底1)、中褐壺(底1)・器種不明(胴1)、沖施B-1類碗(胴1)・C-2類碗(胴1)・分類なし袋物(胴1)・器種不明(胴7)、沖無器種不明(胴5)、石器・石製品(磨斧1、台石1、チップ1)、石材(20)、鉄製品(器種不明1)、焼土(19)、不明器種不明(胴1)	
2区(谷1)　IV層						土器室川式深鉢(口1)・宇佐浜式有文壺(口1)・貝塚前期器種不明(胴12)・貝塚後期器種不明(胴3)、石材(1)、焼土(1)	
2区(谷1) IV-2層						土器伊波・荻堂式深鉢(胴1)・大山式深鉢(胴1)・室川式深鉢(口11)・宇佐浜式壺(口3)・宇佐浜式深鉢(口23、胴2)・宇佐浜式有文壺(口1)・仲原式深鉢(口4)・仲原式壺(口1)・仲原式有文深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(尖底2、平底2)・貝塚前期器種不明(胴240)・貝塚後期器種不明(胴159)・グスク器種不明(胴1)、青磁器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石1、磨面のある石器3)、石材(27)、焼土(24)、炭(1)、木片(2)、不明器種不明(胴1)	
2区(谷1) IV-3層						土器宇佐浜式壺(口1)・宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴13)・貝塚後期器種不明(胴2)、石器・石製品(磨面のある石器1)	

第 12 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 4

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
2区(谷1) Ⅳ-4層	土器貝塚前期深鉢(尖底か1)・貝塚前期器種不明(胴5)						
SP3001	3区	9-N7	1	Ⅱ	17.4	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性共に弱い。炭粒・焼土粒混入。	
SP3002	3区	9-O7	1	Ⅲ	9.7	グスク時代か。単層。10YR3/4暗褐シルト～極細粒砂。しまり強・粘性弱。炭粒・焼土粒混入。	
SP3003	3区	9-O7	1	Ⅱ	8.5	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。黄褐色土少量混入。	
SK3001	3区	9-N7	1	Ⅱ	27	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。石灰岩礫、炭粒、赤色粒を混入。南北方向（N 17°E）。	
3区　Ⅰ層	青磁Ⅶ類碗(口1)、本磁B類小碗(口1)、F類器種不明(胴1)、沖施A類碗(胴1)・B-1類碗(胴1、底1)・B-2類碗(胴2)・C類碗(口2、底1)・C-2類碗(胴1)・分類なし鉢(底1)・鍋(口1)・急須(胴1)・器種不明(胴1)、沖無壺(胴1)・壺or甕(胴5)・鍋(口1)・器種不明(胴2)、陶質土器水鉢(胴1)・器種不明(胴6)、鉄製品(釘1)、金属製品(スプーン1)、瓦(丸・平不明1)						
3区　Ⅱ層	白磁D'群碗(胴1)、青花碗(口1)、中褐器種不明(胴2)、本磁C類小碗(胴1)・D類小碗(胴1)・F類器種不明(胴1)、沖施A類碗(口1、胴3、底2)・B類小碗(底1)・B-1類碗(胴3)・B-1類小碗(胴1)・C類碗(口1、胴2)・C-2類碗(胴2)・分類なし鉢(胴1)・鍋蓋(庇1)・瓶(頸1、底2)・急須(把手1)・器種不明(胴1)、沖無擂鉢(胴2)・器種不明(胴4)・初期碗(底1)、瓦質土器器種不明(胴1)、陶質土器器種不明(胴6)、石器・石製品(粗割片1)、石材(1)、骨製品(器種不明1)、瓦(平5)						
SP4001	4区	9-L6	1	Ⅲ	30.3	グスク時代の柱穴痕か。1（柱痕）:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。炭粒・焼土粒混入。2:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強・粘性弱。炭粒混入。	
SP4002	4区	9-M7	1	Ⅲ	18.6	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性強。炭粒・焼土粒・黄褐色土少量混入。	
SP4003	4区	9-M7	1	Ⅲ	23.7	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱。炭粒・焼土粒・黄褐色土を多く混入。	
SP4004	4区	9-M7	1	Ⅲ	27	グスク時代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり・粘性強。炭粒・焼土粒・黄褐色土を少量混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。黄褐色土を多く混入。Ⅲ.地山。	土器グスク器種不明(胴2)
SP4005	4区	9-M7	1	Ⅲ	19.3	グスク時代。1:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂に10YR5/6黄褐色土が少量混入。炭粒・焼土粒混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に10YR5/6黄褐色土が多く混入。しまり強、粘性やや弱。炭粒混入。	
SP4006	4区	9-M7	1	Ⅲ	7.9	グスク時代の植栽痕か。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強、粘性やや弱。炭粒・黄褐色土（10YR5/8）混入。	
SP4007	4区	9-M7	1	Ⅲ	12.4	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4008	4区	9-M7	1	Ⅲ	8.4	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4009	4区	9-M7	1	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4010	4区	9-M7	1	Ⅲ	25	グスク時代の植栽痕か。Ⅰ:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。炭粒・焼土粒・黄褐色土（10YR5/6）混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。炭粒・黄褐色土（10YR5/6）混入。	
SP4011	4区	9-M7	1	Ⅲ	9.4	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4012	4区	9-M7	1	Ⅲ	14.4	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4013	4区	9-M7	1	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕か。SP4006と同じ埋土。	
SP4014	4区	9-M6	2	Ⅲ	7.5	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性強。黄褐色土（10YR5/8）混入。	
SP4015	4区	9-M6	2	Ⅲ	7.5	グスク時代。SP4014と同じ埋土。	
SP4016	4区	9-M6	2	Ⅲ	9	グスク時代。SP4014と同じ埋土。	
SP4017	4区	9-M6	2	Ⅲ	9	グスク時代。SP4014と同じ埋土。	
SP4018	4区	9-M6	2	Ⅲ	17.5	グスク時代。SP4014と同じ埋土。	
SP4019	4区	9-M6	2	Ⅲ	16	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に10YR5/8黄褐色が混入。しまり強・粘性弱。炭粒・焼土粒混入。	
SP4020	4区	9-M5	2	Ⅲ	12.1	グスク時代の植栽痕か。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱、炭粒・焼土粒混入。2:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂に10YR5/8黄褐色土混入。炭粒・焼土粒少量混入。	
SP4021	4区	9-M5	2	Ⅲ	11.9	グスク時代。SP4022と同じ埋土。	
SP4022	4区	9-M5	2	Ⅲ	21.4	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に10YR5/8黄褐色土混入。しまり強、粘性強。炭粒・ニービ少量混入。	
SP4023	4区	9-M5	2	Ⅲ	8.3	グスク時代。SP4022と同じ埋土。	
SP4024	4区	9-M5	2	Ⅲ	1.9	グスク時代の鍬跡か。SP4022と同じ埋土。	
SP4025	4区	9-M5	2	Ⅲ	5.3	グスク時代の鍬跡か。SP4022と同じ埋土。	
SP4026	4区	9-M5	2	Ⅲ	1.8	グスク時代の鍬跡か。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強、粘性弱。炭粒・焼土粒混入。	
SP4027	4区	9-M5	3	Ⅲ	9	グスク時代。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂に10YR5/6黄褐色が混入。しまり強、粘性弱。炭粒・焼土粒混入。	
SP4028	4区	9-M5	3	Ⅲ	5.5	グスク時代。SP4027と同じ埋土。	
SP4029	4区	9-M6	3	Ⅲ	6	グスク時代。SP4027と同じ埋土。	

第 13 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 5

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP4030	4区	9-M6	3	Ⅲ	6.4	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性強、炭粒・焼土粒混入。	
SP4031	4区	9-M6	3	Ⅲ	11.4	グスク時代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。2:10YR4/6シルト～極細粒砂に10Y5/6黄褐色が混入。しまり・粘性あり。焼土粒混入。	
SP4032	4区	9-M6	3	Ⅲ	11.6	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に10YR5/6黄褐色が混入。しまり強、粘性弱。炭粒混入。	
SP4033	4区	9-M6	3	Ⅲ	10.5	グスク時代。SP4027と同じ埋土。	
SP4034	4区	9-M6	3	Ⅲ	7.8	グスク時代。SP4027と同じ埋土。	
SP4035	4区	9-M6	3	Ⅲ	7.5	グスク時代。単層。10YR4/6シルト～極細粒砂に10YR5/6が混入。しまり強、粘性弱。炭粒・焼土粒混入。	
SP4036	4区	9-M6	3	Ⅲ	5.4	グスク時代。SP4035と同じだが炭粒・焼土粒なし	
SP4037	4区	9-M6	3	Ⅲ	2.9	グスク時代。単層。10YR3/4シルト～極細粒砂に10YR4/6が少量混入。しまり強、粘性弱。炭粒混入。	
SP4038	4区	9-M6	3	Ⅲ	14.9	グスク時代。SP4035と同じだがニービ粒混入。	
SP4039	4区	9-M6	3	Ⅲ	8.9	グスク時代。SP4035と同じだがニービ粒混入。	
SP4040	4区	9-M5	3	Ⅲ	6.9	グスク時代。SP4027と同じ埋土。	
SP4041	4区	9-M6	3	Ⅲ	9	グスク時代。単層。10YR4/4シルト～極細粒砂にマージが多く混入。しまり強、粘性やや強。炭粒・焼土粒混入。SP4042を切る。	
SP4042	4区	9-M6	3	Ⅲ	6	グスク時代。単層。10YR4/4シルト～極細粒砂にマージが多く混入。しまり強、粘性やや弱。炭粒・焼土粒混入。SP4041に切られる。	
SK4001	4区	9-M5	1	Ⅱ	10.9	近世～近代。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまりやや強、粘性強、炭粒・焼土粒混入。北西-南東方向（N 65°W）。	
SK4002	4区	9-M6	1	Ⅱ	5.7	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。焼土粒・炭粒・黄褐色土(10YR5/8)混入。北東-南西方向（N 30°E）。	
SD4001	4区	9-L5	1	Ⅱ	15.7	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱、炭粒・焼土粒混入。5区SD5012に繋がる。東西方向（N 68°W）。	
SD4002	4区	9-M5～M6	1	Ⅱ	3.9～9.3	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強、炭粒・焼土粒・ニービ粒・暗褐色土(10YR3/4)混入。北西-南東方向（N 63°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴2)
SD4003	4区	9-L7・M7	1	Ⅲ	5.2～6.8	グスク時代。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。粘性弱、しまり強。炭粒・焼土粒混入。北東-南西方向（N 69°E）。	
SD4004	4区	9-L7	1	Ⅲ	10	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。粘性やや弱、しまり強。炭粒・黄褐色土(10YR5/8)が混入。東西方向（N 82°W）。	
SD4005	4区	9-L7・M7	1	Ⅲ	20.8	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性弱。焼土粒・礫・黄褐色土(10YR5/8）混入。SD4003を切る。南北方向（N 2°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)、沖施火炉(口1)、沖無擂鉢(胴1)
SD4006	4区	9-M6	1	Ⅱ	43.4	近世～近代。単層。10YR4/3鈍い黄褐色シルト～極細粒砂。粘性弱、しまり弱。炭粒・焼土粒・黄褐色土(10YR5/6）混入。北東-南西方向（N 38°E）。	
						土器貝塚後期器種不明(胴1)、中褐器種不明(底1)、本陶瓶(胴1)・器種不明(胴1)、本磁F類蓋(口～底1)、沖施A類碗(口1、胴1、底1)・A類小碗(口1)・B類小碗(口1)・B-2類碗(胴1)・C類碗(口1、胴5)・分類なし水鉢(口1)・急須(口1)・急須?(胴1)・火入れ(口1)・器種不明(胴6)、沖無壺or甕(胴8)・水鉢(口1)、陶質土器器種不明(胴1)、鉄製品(器種不明5)、青銅製品(無線機1、バックル3、器種不明3)、焼土(1)、瓦(平1)、ガラス製品瓶(口～底1、胴部6)・清涼飲料瓶(口～底2)・軍靴(1)、布製品(器種不明1)、不明陶器壺(頸1)	
SD4007	4区	9-M7	1	Ⅲ	11.3	グスク時代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。粘性弱、しまり強、炭粒・焼土粒・黄褐色土(10YR5/6）混入。北西-南東方向（N 48°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)、石器・石製品(石鏃未成品1)
SD4008	4区	9-M5～M6	3	Ⅲ	10.3	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐シルト～極細粒砂。粘性弱、しまり強。炭粒・焼土粒・黄褐色土(10YR5/6）混入。東西方向（N 69°W）。	
SD4009	4区	9-M5～M7・L6～L7	3	Ⅲ	135.8	貝塚時代～グスク時代。谷地形を利用した溝状遺構。埋土は18枚に分層。暗褐色～褐色土層と明るめでマージ粒を多く混入する層(9～11、18)が互層となる。1・2の段階で溝は完全に埋没。1～6:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂主体。7～8:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂主体。9～11:7.5YR4/6褐色～7.5YR5/6明褐色シルト～極細粒砂主体。12～17:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂主体。18:10YR5/8黄褐色シルト～極細粒砂。全体的にしまり強、粘性弱、炭粒・焼土粒・マージ粒混入。東西方向（N 88°W）・北西-南東方向（N 63°W）。	石材(1)
SS4001	4区	9-L6	1	Ⅰ		近世～近代の石列。Ⅱ層中で検出。約5～20cmの石灰岩礫を南北方向（N 13°E）に配する。	
SX4001	4区	9-M6	3	Ⅳ	約50	貝塚時代。SD4009 床面より検出。谷底のⅣ層の一部か。	
						土器伊波・荻堂式深鉢(胴1)・室川式深鉢(口5)・宇佐浜式壺(口1)・宇佐浜式深鉢(口3)・貝塚前期深鉢(胴43)・貝塚前期器種不明(胴63)・フェンサ下層式甕(口2)・貝塚後期甕(くびれ平底3、平底1)・貝塚後期鉢(胴10)・貝塚後期器種不明(胴36)、石器・石製品(石皿・台石類1、敲石1、敲磨石2、砥石1、石斧1，磨面のある石器2)、石材(52)、焼土(9)	

第 14 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 6

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
26・31・36号墓	4区	9-M7	1	―	―	埋没古墓。第5章で記載。	土器貝塚後期器種不明(胴1)、沖施A類碗(底1)、瓦(丸・平不明1)
4区　表採・Ⅰ層						土器室川式深鉢(胴1)・貝塚前期器種不明(胴7)・貝塚後期甕(口1)・グスク羽釜(鍔1)、カムィヤキA群壺(胴1)・A群器種不明(胴1)、青磁Ⅳ類碗(底1)・分類なし器種不明(底1)、白磁清代徳化窯小碗(口1)、青花小碗(口1)・皿(底1)、本磁A類碗(口～底1、口2、底1)・A類皿(口～底1、底1)・B類小碗(口～底1、口2、胴1)・B類皿(口3、胴1、底3)・E類皿(口～底1、口1)・F類碗(胴3、底1)・F類小碗(口2、胴2、底1)・F類皿(底1)・F類小杯(口3)・F類器種不明(頚1)、沖施A類碗(口1、胴1)・B類小碗(口1、胴2)・B-2類碗(胴1、底1)・B-2類小碗(口～底1)・B-3類小碗(底1)・C類碗(口3、胴3、底2)・C-2類碗(口1)・分類なし皿?(口1)・鉢(口1、胴1、底1)・鍋(口1)・急須(把手1)・瓶(頚1)・器種不明(胴2)、沖無壺(胴2)・甕(口1)・壺or甕(胴20)・擂鉢(胴3)・擂鉢?(胴1)・急須(胴1)・火炉(口1)・器種不明(胴15、底2)、陶質土器急須(注口1)・蓋(体部1)・器種不明(胴1)、石器・石製品(硯1)、石材(3)、金属製品(器種不明1)、瓦(丸11、平36、丸・平不明105)、磚(1)、ガラス製品化粧瓶(胴1)・器種不明(胴2、底1)、プラスチック(歯ブラシ1)	
4区　Ⅱ層						土器貝塚前期器種不明(胴3)・貝塚後期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴1)、青磁Ⅳ類碗(口1)・Ⅴ類碗(口2)・分類なし碗(胴1)・器種不明(胴1)、青花碗(口2)・皿(口1)、天目碗(底1)、本磁A類碗(口～底4、口8、胴6、底3)・皿(底2)・B類碗(口～底1)・B類小碗(口～底10、口5、底2)・B類皿(口～底5、口2、底2)・B類小杯(口～底2)・C類急須(胴1)・D類碗(口～底1)・D類小杯(口～底1、底1)・E類皿(口～底1)・E類杯(口～底1)・E類小杯(底1)・E類急須(口～底1)・E類器種不明(胴2)・F類碗(胴1)・F類小碗(口6)・F類皿(胴1、底1)・F類小杯(口2)・F類急須(口～底1、口1、底1)・F類袋物(胴1)・F類器種不明(胴5、底1)、沖施A碗(胴5、底1)・A-2類小碗(口2)・B類小碗(口4)・B-1類碗(胴1)・B-1類小碗(口1)・B-2類碗(胴2、底1)・B-2類小碗(口～底2)・B-3類小碗(底1)・C類碗(口12、胴7、底8)・C類小碗(胴1)・C-2類碗(口～底2、口4、胴4、底2)・分類なし皿(口1・底1)・壺(胴2)・鉢(口2、胴1)・瓶(胴1、底1)・急須(口～底2、胴7、底1、耳1)・急須?(胴1)・火入れ(胴1、底1)・器種不明(胴8)、沖無A類壺(口2)・壺(胴3、底3)・壺or甕(胴65、把手1、底部2)・甕(口2、胴2)・瓶(胴～底1、胴2)・擂鉢(胴3)・水鉢(口1)・蓋(庇2)・蓋?(胴1)・器種不明(口1、胴14、底1、不明1)、厨子甕身Ⅲb又はⅢc類壺型(口～底1、胴1)・ⅢD類壺型(口～底1)、陶質土器水鉢(口1)・器種不明(胴5、底1)、瓦(丸9、平16、丸・平不明46)、ガラス製品化粧瓶(口～底1、胴3、底2)・薬瓶(口～底2)・瓶(口～底2、口3、底1)・瓶不明(口～底1)・栓(1)・器種不明(口2)	
4区(谷1)　Ⅲ層						土器室川式深鉢(口2)・室川式有文深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口6)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴97)・貝塚前期有文器種不明(胴1)・フェンサ下層式甕(口3、平底2)・貝塚後期鉢(胴2)・貝塚後期器種不明(胴28)・グスク壺甕類(底1)・グスク器種不明(胴10)・グスク第3様式器種不明(胴2)、カムィヤキA群壺(胴2、底1)・B群壺(胴2)、青磁Ⅰ類碗(胴1)・Ⅳ類碗(口1)・Ⅳ類皿(口1)・Ⅳ'類碗(口1)・Ⅳ'類皿(底1)・Ⅴ類碗(口2)・同安窯系Ⅰ類皿(底1)、白磁Ⅳ類碗(口1)・C群碗(胴1)、沖無器種不明(胴1)、陶質土器器種不明(胴1)、石器・石製品(石斧2、砥石1、敲磨石4)、石材(26)、瓦(丸1)、不明陶器器種不明(底1)	
4区(谷1)　Ⅳ層							
SP5001	5区-1	9-I3	―	―	―	普天間グスクンニー遺跡の遺構。第4章で記載。	
SP5002	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5003	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	8	グスク時代。	
SP5004	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	8	グスク時代。	
SP5005	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	10	グスク時代。	
SP5006	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	18	グスク時代。	
SP5007	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	17	グスク時代。単層。10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂で炭化粒が混入。	
SP5008	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	16	グスク時代。	土器貝塚前期器種不明(胴3)
SP5009	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	12.5	グスク時代。単層。10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂で明褐色土（7.5YR 5/6 ）、焼土粒、炭粒が混入。	
SP5010	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	16	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5011	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5012	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	14	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	青花碗(口1)
SP5013	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	26	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴3)
SP5014	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	21	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5015	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5016	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	6	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5017	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴5)
SP5018	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	―	グスク時代。遺物有り。	土器貝塚前期器種不明(胴1)、石材(1)
SP5019	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	10	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5020	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	19	グスク時代。SP5009と同じ埋土。	
SP5021	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕　列状ピット群2　単層。10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒・焼土粒・明褐色土（7.5YR 5/6 ）混入。	
SP5022	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5023	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5024	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	2	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	土器貝塚後期器種不明(胴1)
SP5025	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5026	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5027	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5028	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	15	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。土器出土。	
SP5029	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5030	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	16	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5031	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5032	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	17	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	土器貝塚後期器種不明(胴1)、石器・石製品(フレイク1)
SP5033	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5034	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。土器出土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5035	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5036	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5037						欠番	
SP5038	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴3)
SP5039	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5040	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5041	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	

第 15 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 7

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP5042	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5043	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5044	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴6)
SP5045	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5046	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5047	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	16	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5048	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	13	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴2)
SP5049	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5050	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5051	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5052	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5053	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5054	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。SP5021と同じ埋土。	
SP5055	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。SP5021と同じ埋土。	
SP5056	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。SP5021と同じ埋土。	
SP5057	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。1:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂で、しまり強。焼土粒混入。2:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂に7.5YR 5/6 明褐色土が混入。	
SP5058	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。1:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂で、しまり強。焼土粒混入。2:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒・焼土粒・7.5YR 5/6 明褐色土を混入。2基切りあいか。	
SP5059	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	8	グスク時代の柱穴痕か。1（柱痕）:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒・焼土粒混入。2:10YR 4/6 褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒・焼土粒を混入。	
SP5060	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	7.5	グスク時代。SP5059の1と同じ埋土。	
SP5061	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP5059の1と同じ埋土。	
SP5062	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	15	グスク時代の柱穴痕か。SP5059と同じ埋土。	
SP5063	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	14	グスク時代の柱穴痕か。SP5059と同じ埋土。	
SP5064	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	22	グスク時代。SP5059の1と同じ埋土。	
SP5065	5区-2	9-K5	2	Ⅲ	13	グスク時代。単層。10YR 4/6 褐色シルト～極細粒砂。しまり強。礫・焼土粒・炭粒混入。	
SP5066	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。単層。10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。マージ粒・炭・焼土粒混入。	
SP5067	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。1:10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。マージ粒・炭・焼土粒混入。2:10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。SP5068に切られる。	土器貝塚前期器種不明(胴3)･グスク器種不明(胴1)
SP5068	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	13	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5067と同じ埋土。SP5067を切る。	土器グスク第3様式器種不明(胴1)
SP5069	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5070	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5071	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5067と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5072	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5067と同じ埋土。	
SP5073	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5074	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5075	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5076	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	3	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5077	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	2	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。SP5078を切る	
SP5078	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。SP5077に切られる。	
SP5079	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	17	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。1:10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。炭粒・焼土粒混入。2:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂で炭粒・焼土粒混入。1・2共に黄橙砂質土混入。	
SP5080	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。単層。10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。	
SP5081	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5082	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5083	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5084	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5085	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5067と同じ埋土。	
SP5086	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群3。SP5066と同じ埋土。	
SP5087	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	15.5	グスク時代。平面のみ。	
SP5088	5区-2	9-K3･L3	2	Ⅲ	9	グスク時代。平面のみ。	
SP5089	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	―	グスク時代。平面のみ。	
SP5090	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3に断面あり。	
SP5091	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3に断面あり。	
SP5092	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3に断面あり。	
SP5093	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3に断面あり。	
SP5094	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5095	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5096	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5097	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	

第 16 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 8

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP5098	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5099	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5100	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5101	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5102	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5103	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5104	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5105	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5106	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5107	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5108	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。	
SP5109	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	14	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5110	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	土器貝塚後期器種不明(胴1)
SP5111	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5112	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	11	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5113	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5114	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	10	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5115	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	7	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5116	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	3	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5117	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5118	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5119	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	12	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5120	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5121	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5122	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	17	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5123	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5124	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5125	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5126	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5127	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5128	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	5	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5129	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	4	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5130	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	6	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト3除去後検出。	
SP5131	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	42	グスク時代。SP5021と同じ埋土。ベルト1に断面あり。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP5132	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	8	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2　SP5021と同じ埋土。ベルト1除去後検出。	
SP5133	5区-2	9-K4	―	Ⅲ	19	グスク時代の植栽痕か。調査区ベルト3断面でのみ確認	
SP5134	5区-2	9-K4	―	Ⅲ	15	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1断面のみ。	
SP5135	5区-2	9-K4	―	Ⅲ	9	グスク時代の植栽痕。列状ピット群2。SP5021と同じ埋土。ベルト1断面のみ。	
SP5136	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	13	グスク時代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、マージ粒・炭粒が少し混入。2:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性あり。	
SP5137	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	9	グスク時代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、マージ粒・炭粒が少し混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。焼土粒・炭粒が僅かに混入。	
SP5138	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	8	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、マージ粒・炭粒・焼土粒が少量混入。	
SP5139	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	17	グスク時代。SP5138と同じ。焼土粒・炭粒が混入。	
SP5140	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	7	グスク時代。SP5138と同じ埋土。	
SP5141	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP5138と同じ埋土。	
SP5142	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	10	グスク時代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。炭粒が混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性強。	
SP5143	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	6	グスク時代。SP5138と同じ埋土。	
SP5144	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	2	グスク時代。SP5138と同じ埋土。	
SP5145	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5146	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5147	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5148	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5149	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5150	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5151	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5152	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5153	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5154	5区-3	9-N5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5138と同じ埋土。平面図のみ	
SP5155	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	3	グスク時代。列状ピット群4。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒少量混入。	
SP5156	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	5	グスク時代。列状ピット群4。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。マージ粒・焼土粒・炭粒少量混入。	
SP5157	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	5	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5158	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	7	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5159	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	4	グスク時代。列状ピット群4。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、黄褐色土が多く含まれる。	
SP5160	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	12	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	

第 17 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 9

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP5161	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	7	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5162	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	9	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5163	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	16	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5164	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	5	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5165	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	13	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5166	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	9	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5167	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	12	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5168	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	11	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5169	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	6	グスク時代。列状ピット群4。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。砂粒、マージ粒、炭粒、焼土粒混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。マージ粒・炭粒混入。	
SP5170	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	10	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5171	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	9	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5172	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	6	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5173	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	7	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5174	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	21	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5175	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	12	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5176	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	6	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5177	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	5	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5178	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	10	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5179	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	12	グスク時代。列状ピット群4。SP5169と同じ埋土。	
SP5180	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	10	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5181	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	9	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	
SP5182	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	12	グスク時代。列状ピット群4。SP5156と同じ埋土。	土器貝塚前期器種不明(胴2)
SP5183	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5156と同じ埋土。平面図のみ	
SP5184	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	―	グスク時代。SP5156と同じ埋土。平面図のみ	
SK5001	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	15	グスク時代。単層。2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色シルト～極細粒砂。焼土粒・炭粒多く混入。	土器宇佐浜式深鉢(口1)・グスク器種不明(胴2)、青磁Ⅳ'類碗or皿(口1)、焼土(2)
SK5002	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	17	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒、炭粒、焼土粒混入。	
SK5003	5区-3	9-M5	2	Ⅲ	18	グスク時代。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや弱、マージ粒・炭粒混入。東西方向（N 84°W）。	
SF5001	5区-2	9-L5	1	Ⅱ	2～4	近世～近代の道跡。南側溝は道跡の側溝部か。単層。7.5YR5/6明褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。北西-南東方向（N 59°W）。	
SF5001	5区-3	9-M2～M3	1	Ⅱ	32	近世～近代の道跡。溝状遺構で道跡の側溝部か。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。礫混入。SD5015を切る。東西方向（N 84°E）・北西-南東方向（N 67°W）。 青磁Ⅴ類皿(口1)、沖施A類碗(底2)・B類碗(口1)・B類小碗(口～底1、口2)・C類碗(口1)・分類なし蓋(撮1)・器種不明(胴5、底1)、沖無B類壺(口1)・分類なし壺(底1)・壺or甕(胴1)・擂鉢(胴1、底1)・器種不明(胴4)、陶質土器器種不明(胴2)	
SD5001	5区-1	9-I3～I4	―	―	―	普天間グスクンニー遺跡の遺構。第4章で記載。	
SD5002	5区-1	9-J3	―	―	―	普天間グスクンニー遺跡の遺構。第4章で記載。	
SD5003	5区-2	9-K2～K3・L3	1	Ⅱ	9～18	近世～近代。単層。10YR 4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。炭粒混入。北東-南西方向（N 32°E）。 土器伊波・荻堂式器種不明(胴2)・室川式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴33)・グスク器種不明(胴7)、青磁Ⅰ類碗(口2)、白磁C3群碗(胴1)、本磁B類小碗(口1)・F類器種不明(胴1)、沖施A類碗(口1、底1)・分類なし袋物(底1)・器種不明(胴3)、沖無B類壺(口1)・分類なし壺or甕(胴5)・鉢(口2)・擂鉢(胴7)・蓋(胴1)・器種不明(胴4)、陶質土器皿(口1)・急須(口1)・火炉(口1)・器種不明(胴5)	
SD5004	5区-2	9-K2～K3	1	Ⅱ	14	近世～近代。1:石列に伴う埋土。10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。粘質。2:SD5003－1に同じ。北東-南西方向（N 29°E）。	本磁F類皿(底1)、沖施B類又はC類碗(底1)・分類なし壺(胴1)、沖無器種不明(胴2)、陶質土器鉢(底1)
SD5005	5区-2	9-K5	1	Ⅱ	7	近世～近代。SD5003と同じ埋土。北東-南西方向（N 34°E）。	白磁A群碗or皿(口1)、沖施器種不明(胴1)
SD5006	5区-2	9-L2～L3	2	Ⅲ	3～7	グスク時代。単層。10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂で明褐色土（7.5YR 5/6 ）や焼土粒・炭粒混入。東西方向（N 80°W）～北西-南東方向（N 47°W）。	青磁Ⅰ類碗(口1)、石材(3)
SD5007	5区-2	9-L2～L3	2	Ⅲ	5～7	グスク時代。SD5006と同じ埋土。東西方向（N 73°W）～北西-南東方向（N 46°W）。	土器宇佐浜式深鉢(口3)・貝塚前期器種不明(胴44)、石材(6)
SD5008	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	13	グスク時代。1:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。マージ粒混入。2:1よりマージ粒が多く混入。北西-南東方向（N 46°W）。	
SD5009	5区-2	9-K3・J3～J4	2	Ⅲ	60	グスク時代。谷地形を利用した溝状遺構。1～2:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。3～5:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂主体。6:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。7:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。8:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。9:10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、焼土粒・炭粒・明褐色土混入。北西-南東方向（N 62°W）。	
SD5009	土器宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴31)・貝塚後期器種不明(胴3)・グスク碗(口1)・グスク鍋(口1)・グスク器種不明(胴73)、カムィヤキB群壺(胴3)・B群器種不明(胴1)、朝鮮系無釉陶器A群器種不明(胴1)・B群壺(底1)、青磁Ⅰ類碗(胴5)・Ⅱ類碗(口2、胴5)・Ⅳ類碗(口3)・Ⅳ類碗or皿(胴6)・Ⅳ'類碗(口1)・Ⅴ類碗(口1、胴2)・Ⅴ類皿(底1)・Ⅳ～Ⅴ類碗(胴20)・分類なし盤(口1)、白磁A群碗(口1)・C群碗(胴2)・C3群碗((口1、胴4、底1)・D群小皿(底1)・D群器種不明(胴1)、中褐器種不明(胴6)、天目器種不明(胴1)、石器・石製品(磨面のある石器2)、石材(11)、鉄滓?(6)、焼土(4)						
SD5010	5区-2	9-J5	―	Ⅱ	14	近世～近代。単層。10YR 4/6 褐色シルト～極細粒砂。調査区北壁でのみ確認	

第 18 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 10

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SD5011	5区-3	9-L4～L5	1	Ⅱ	22～38	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、マージ粒を一部含み、炭粒や小礫片が混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、石灰岩礫集中部を混入。北西-南東方向（N 52°W）。	
						土器貝塚前期器種不明(胴1)、白磁清代徳化窯小碗(口1、底1)、青花碗(胴6)、中褐器種不明(胴1)、青磁染付碗(口1)、染付碗(口1)、本陶袋物(口～底1)、本磁Ａ類碗(口3、胴1)・B類皿(胴2、底1)・B類小碗(口～底2、口2、底1)・B類小皿(口～底1)・B類器種不明(胴2、底1)・C類碗(口～底1)・D類小碗(口～底1、口2、底3)・D類皿(胴1)・F類小碗(口3、胴1、底2)・F類湯呑?(底1)・F類器種不明(胴3)、沖施A類碗(口～底1、口3、胴4、底10)・A-1類小碗(底1)・B類碗(胴1)・B類小碗(口～底1、底5)・B-1類碗(胴2、底1)・B-2類碗(胴1、底2)・B-2類小碗(口～底1)・B-3類碗(口1)・B-3類小碗(底3)・C類碗(口11、胴10、底14)・C-2類碗(口～底3、口1、底3)・分類なし皿(底1)・壺(胴2)・鉢(口3、胴2、底2)・急須(口1)・瓶(口1、底1)・酒器(胴2)・火入(底1)・袋物(口1、胴4、底1)・蓋(袴～庇2、庇～撮み1)・器種不明(胴17)、沖無A類壺(口2)・B類壺(口3)・分類なし壺(胴3、底2)・甕(胴1)・壺or甕(胴32)・擂鉢(口7、胴5、底1)・鉢(口5)・水鉢(口1)・瓶(口1)・器種不明(胴56、底2)、陶質土器鉢(口1)・鍋(把手1)・急須(口1、胴1)・蓋(撮み2)・器種不明(口1・胴4・底1)、円盤状製品(7)、瓦(丸3、平8、丸・平不明1)	
SD5012	3	9-L4～L5・M4	1	Ⅱ	26～30	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性やや強。炭粒マージ粒・礫混入。2:1よりマージ粒・礫多く混入。4区SD4001に繋がる。北西-南東方向（N 55°W）。	
						土器室川式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴1)、カムィヤキA群器種不明(胴1)・B群器種不明(胴1)、青磁Ⅳ'類碗(底1)、白磁清代徳化窯小碗(口1)、青花碗(胴2)、青磁染付碗(口2)、瑠璃釉小碗(底1)、本磁A類碗(口1)・D類小碗(口1)、沖施A類碗(口5、胴8)・A-2類小碗(胴1)・B類小碗(口2)・B-1類碗(口～底1、口2)・B-2類碗(口1、胴1)・B-3類碗(胴1)・C類碗(口4、胴9、底3)・分類なし皿(胴1)・鉢(口3)・蓋(撮1)・把手(1)・器種不明(胴23)、沖無壺(底1)・甕(胴1)・壺or甕(胴9)・鍋(口1)・鉢(口2)・擂鉢(胴8)・器種不明(胴32)、陶質土器鍋(口1)・器種不明(胴18)、青銅製品(簪1)、瓦(平1)	
SD5013	3	9-N5	1	Ⅱ	22～40	近世～近代。1:10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強。10-20cmの石灰岩礫混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強。小礫・マージ粒・炭粒混入。3:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、マージ粒・焼土粒混入。4:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強。マージ粒・炭粒混入。北東-南西方向（N 38°E）。	本磁F類袋物(底1)、沖施A類碗(底1)・分類なし袋物(底1)・器種不明(胴6)、沖無甕(口1)・器種不明(胴2)、陶質土器蓋(撮1)
SD5014	5区-3	9-M3	1	Ⅱ	56	近世～近代。SF5001構築以前の溝状遺構。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に炭粒多く混入。2:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。小礫・焼土粒・炭粒混入。SS5005に切られる。	
SD5015	5区-3	9-M2～M3	1	Ⅱ	26～51	近世～近代。SF5001構築以前の溝状遺構。1:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂に黄褐色土（10YR5/8）混入。しまり強。2:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。2に比べしまり強く炭粒少ない。3:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に黄褐色土（10YR5/8）混入。SF5001に切られる。	
						青磁Ⅱ類碗(胴1)・Ⅴ類皿(胴1)、白磁C群碗(胴1)・清代徳化窯碗(口1)、青花碗(口4、底1)、中褐5類壺(胴1)、本磁F類器種不明(胴1)、沖施A類碗(口3、胴4、底2)・A-2類小碗(口1)・A-3小碗(胴1)・B類小碗(口～底1、口3、胴6)・B-1類碗(口1、底1)・B-2類碗(胴1)・B-3類碗(口～底1)・C類碗(口3、胴8)・分類なし急須(底1)・袋物(胴2)・火取(口1、底1)・蓋(撮み1)・器種不明(口1、胴3)、沖無A類壺(口1)・分類なし壺(胴1)・甕(口1)・壺or甕(胴12、底5)・鉢(口1)・擂鉢(胴3)・瓶(口2)・器種不明(胴8)、陶質土器鍋(口1、把手1)・鉢(底1)・器種不明(胴2)、石器・石製品(磨斧1)、石材(1)、銭貨(1)、煙管(吸口1)、瓦(平1、丸・平不明1)	
SS5001	5区-2	9-J4	2	Ⅱ	―	近世～近代の石列。Ⅱ層上面で検出。溝状の掘込みを伴う。1:10YR 5/6 黄褐色シルト～極細粒砂。2:10YR 4/6 褐色シルト～極細粒砂に礫（10～20cm）混入。3:2と同様だが礫含まない。南北方向（N 2°W）。	
SS5002	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	―	グスク時代の石列。溝状に掘込み、礫を北東-南西方向（N 41°E）に配する。マウンド状に礫が堆積。埋土は10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。焼土粒・炭粒・黄褐色土（10YR 5/8）混入。	
						土器宇佐浜式深鉢(口2)・宇佐浜式有文壺(口1)・貝塚前期深鉢(把手1)・貝塚前期器種不明(33)・グスク器種不明(胴14)・グスク第3様式壺甕類(底1)、青磁Ⅱ類碗(口1)・Ⅳ'類碗(口1)・Ⅴ類碗(胴1、底1)、白磁A群器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石2)、石材(20)、焼土(1)	
SS5003	5区-2	9-K4	2	Ⅲ	―	グスク時代の石列。SS5002と同様な遺構。礫を北東-南西方向（N 28°E）に配する。埋土は10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。焼土粒・炭粒・明褐色土（7.5YR 5/8）混入。	土器貝塚前期器種不明(胴5)、青磁同安窯系Ⅰ類皿(底1)
SS5004	5区-2	9-K4	2	Ⅳ	―	貝塚時代の集石遺構か。Ⅳ-2層中より検出。石灰岩礫（4～30cm）を北東-南西方向（N 67°E）に集積。ニービや砂岩、千枚岩もみられる。自然堆積の可能性もあり。	
						土器室川式深鉢(口7)・室川式有文深鉢(口2)・宇佐浜式壺(口6)・宇佐浜式深鉢(口15)・仲原式深鉢(口6)・仲原式壺(口1)・貝塚前期深鉢(尖底4)・貝塚前期器種不明(胴321)・貝塚後期器種不明(胴15)、石器・石製品(敲磨石2、磨面のある石器3)、石材(91)、焼土(7)	
SS5005	5区-3	9-M3	1	Ⅱ	22	近世～近代の石列。石列を伴う溝状遺構で道跡の縁石か　単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、少量の赤褐色粒、炭粒混入。SD5014を切る。東西方向（N 89°W）。	土器仲原式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(口3)、沖施皿(口1)、沖無擂鉢(胴1)・器種不明(胴1、底1)
SL5001	5区-2	9-J4	1	Ⅱ	燃焼部42、前庭部4	近世～近代の窯跡。燃焼部と前庭部からなる。東西方向（N 85°E）。 燃焼部（1～5）1:攪乱層。2:7.5YR 5/8 明褐色シルト～極細粒砂でしまり強。壁や天井の崩落土か。3:サンゴ石層。10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。サンゴ石(2～5cm)が多量混入。4:細サンゴ石層。10YR 4/6 褐色シルト～極細粒砂。サンゴ石粒・焼土粒・炭粒混入。5:炭層。10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒・焼土粒・サンゴ石粒混入。 焼土域:2.5YR4/8赤褐色で壁面～床面にかけてマージ変色。厚み2～4cm。 前庭部:単層。10YR 4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒混入。	サンゴ(1)

第 19 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 11

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SL5002	―	―	―	―	―	欠番	
SL5003	5区-2	9-L3	2	Ⅲ	10	グスク時代の炉跡。1:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。炭や焼土粒混入。2:炭層。10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂に多量の炭粒・焼土粒混入。	土器貝塚前期器種不明(胴2)・グスク器種不明(胴1)
SL5004	5区-2	9-K3	2	Ⅲ	50	グスク時代の炉跡。1:10YR 3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。炭・焼土粒混入。石灰岩礫（8～26cm）混入。2:1より炭粒多く混入。3:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。焼土粒・炭粒混入。4:炭層。10YR2/1 黒色。	土器貝塚後期器種不明(胴1)
SL5005	5区-2	9-J5	2	Ⅲ	46	グスク時代の炉跡。1:10YR 3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。炭粒・黄褐色土（10YR 5/6）混入。2:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂。炭粒や黄褐色土が混入。3:10YR 4/4 褐色シルト～極細粒砂に多量の黄褐色土が混入。2に比べ、炭粒・焼土粒多い。4:炭層。10YR 1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。焼土粒も混入。南北方向（N 21°E）。	土器室川式有文深鉢(口1)・宇佐浜式壺(口2)・宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴24)・貝塚前期有文壺(胴1)・グスク器種不明(胴1)・グスク第3様式甕(口1)、焼土(4)
SX5001	5区-1	9-I3	―	―	―	普天間グスクンニー遺跡の遺構。第4章で記載。	
SX5002	5区-1	9-J3	―	―	―	普天間グスクンニー遺跡の遺構。第4章で記載。	
5区-2 表採・Ⅰ層	土器伊波式深鉢(胴1)・大山式深鉢(口1)・室川式深鉢(口1)・宇佐浜式有文深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴70、尖底1)・貝塚前期有文深鉢(胴1)・フェンサ下層式甕(くびれ平底1)・貝塚後期器種不明(胴13)・グスク壺甕類(底1)・グスク器種不明(胴52)・グスク第3様式壺甕類(底1)、朝鮮系無釉陶器A群壺(底1)・A群器種不明(胴1)・B群壺(胴1)、青磁Ⅰ類碗(口1)・Ⅱ類碗(口1、胴1)・Ⅳ類碗(口3、胴2)・Ⅳ'類碗(口2、胴1、底1)・Ⅳ～Ⅴ類碗(胴2)・Ⅴ類碗(口4、胴1)・Ⅴ類皿(口2、底1)・Ⅵ類碗(底2)・Ⅶ類碗(胴1)・器種不明(胴23)・磁竈窯系碗(口1、胴2)、白磁Ⅳ類碗(口1、底1)・C群碗(胴3)・C3群碗(口1、胴1、底1)・D'群皿(口1)・清代徳化窯小碗(口1)、青花碗(胴3)、中褐器種不明(胴1)、本磁A類碗(口～底1、口3、胴3、底1)・B類碗(口2、底1)・B類小碗(口～底1、口2、底1)・B類皿(口～底1、底2)・D類小碗(口～底1、胴1)・E類小碗(口2)・E類皿(口1)・F類碗(口～底1、底1)・F類小碗(口2、胴1)・F類皿(底2)・F類軍杯(底1)・F類湯呑(口～底1)・F類碍子(1)・器種不明(胴1)、沖施Ａ類碗(口3、胴2、底1)・A-1類小碗(胴1)・A-3類小碗(口1、底1)・B類碗(胴1)・B類小碗(口～底1、口1、底1)・C類碗(口2、胴5、底4)・C-2類碗(口2、底1)・分類なし皿(口1)・瓶(底2)・鉢(底1)・蓋(庇1)・酒器(胴4)・袋物(口1、胴1)・器種不明(口1、胴3、底1)、沖無A類壺(口1)・B類壺(口1)・鉢(口1)・擂鉢(口1、胴6)・甕(口1、胴2)・壺or甕(胴9、底1)・器種不明(胴33)、厨子甕甕身Ⅲd類壺形(口1)、陶質土器皿(口1)・鉢(口1)・火炉(口～底1)・急須(撮1)・器種不明(胴15、底1)、石器・石製品(敲磨石5、磨斧1、スクレイパー1)、石材(6)、銭貨(乾隆通寶1、一銭1、25セント1、1セント1、5セント1)、金属製品(バッチ1)、青銅製品(簪1)、羽口?(2)、瓦(丸1、平5、丸・平不明10)、ガラス製品化粧瓶(口～底2、胴1、底1)・染料瓶(口～底1)・清涼飲料瓶(口～底1)・瓶(口～底1)・瓶不明(口～底1)、プラスチック製品(ボタン1)、産地不明陶器器種不明(胴2)	
5区-3 表採・Ⅰ層	土器室川式深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(胴1)・貝塚前期器種不明(胴11)・グスク器種不明(胴1)、青磁Ⅳ類碗(口1)・Ⅳ'類碗(口1)・分類なし器種不明(胴1)、白磁C1群碗(口1)・清代徳化窯小碗(口1、底1)、青花B群皿(口1)・分類なし碗(底1)、本磁A類碗(口1、胴2、底2)・A類皿(底1)・B類碗(底1)・B類小碗(口2)・B類皿(底2)・B類小皿(底2)・B類蓋(袴2)・B類器種不明(胴1)・D類小碗(口3)・F類碗(口～底1)・F類小碗(口1)・F類急須(胴1)・F類湯呑?(1)、沖施A類碗(口1、底2)・B類碗(底2)・B類小碗(胴1、底1)・B-2類碗(底1)・B-3類碗(口1)・C類碗(口2、胴2、底1)・C-2類碗(口2、胴2、底1)・分類なし壺(胴1)・鉢(口1、胴1)・蓋(袴～庇1)・袋物(胴2、底1)・器種不明(口2、胴13、底2)、沖無壺(胴3)・壺or甕(胴17、底2)・鉢(口4)・擂鉢(胴3、底1)・深鉢(胴1)・瓶(底1)・袋物(底1)・器種不明(胴29)、陶質土器鍋(口1)・器種不明(胴1、底1)、石器・石製品(敲磨石2)、石材(2)、瓦(丸1、平2、丸・平不明4)	
5区-2　Ⅱ層	土器室川式壺(口3)・室川式深鉢(口2)・宇佐浜式深鉢(口8、胴1)・貝塚前期器種不明(胴255)・貝塚前期有文深鉢(胴1)・貝塚後期器種不明(胴16)・グスク器種不明(胴101、底1)・グスク第3様式壺甕類(底1)・器種不明(胴1)、カムィヤキA群壺(底1)・A群器種不明(胴5)・B群壺(底1)・B群器種不明(胴1)・分類なし器種不明(胴1)、朝鮮系無釉陶器A群壺(胴1)・B群器種不明(胴2)、青磁Ⅰ類碗(胴2、底1)・Ⅱ類碗(口2、胴2)・Ⅳ類碗(口10)・Ⅳ類皿(底1)・Ⅳ'類碗(口5、底1)・Ⅴ類碗(口9、胴6)・Ⅴ類皿(口2)・Ⅵ類菊花皿(口1)・盤(口1)・器種不明(胴31)・同安窯系Ⅰ類皿(口1)・磁竈窯系碗(口1、胴1)、白磁Ⅳ類碗(口1)・A群碗or皿(口1)・C群碗(胴2)・C1群碗(口1)・C3群碗(口3)、青花碗(口1、胴1)、中褐器種不明(胴11)、本磁A類碗(胴1)・B類小碗(胴7)・B類皿(口1、底1)・B類器種不明(口1)・F類碗(胴1)・F類小碗(胴1)、沖施A類碗(口3)・B類小碗(胴1、底2)・B-1類碗(胴1)・C類碗(口3)・C-2類碗(胴3)・分類なし壺(胴1)・鉢(胴1)・酒器(底1)・袋物(胴1、底1)・蓋(胴1)・器種不明(口2、胴10、底1)、沖無壺or甕(胴11)・鉢(口1)・擂鉢(口1、胴1)・器種不明(口1、胴15、底1)、陶質土器器種不明(胴9)、石器・石製品(敲磨石1、磨斧2、刃器1、磨面のある石器1)、石材(27)、貝製品(ボタン2)、銭貨(1セント1)、羽口?(2)、焼土(10)、瓦(平1、丸・平不明2)、産地不明陶器器種不明(胴1)	
5区-3　Ⅱ層	土器貝塚前期器種不明(胴2)、沖施B類小碗(底1)・B-1類碗(口2)・C類碗(口1)・分類なし壺(口1)、沖無壺(底1)・甕(口1)・壺or甕(胴2、底1)・鉢(口1)・擂鉢(口1)、陶質土器器種不明(胴2)、瓦(丸・平不明2)	
5区-2(谷1) Ⅲ層	土器伊波・荻堂式深鉢(口2)・荻堂式深鉢(口1)・大山式深鉢(胴1)・大山式器種不明(胴1)・室川式壺(口3)・室川式深鉢(口18)・宇佐浜式壺(口5)・宇佐浜式深鉢(口11)・宇佐浜式有文深鉢(口2)・仲原式壺(口1)・仲原式深鉢(口3)・貝塚前期深鉢(把手1)・貝塚前期器種不明(胴482、平底3)、貝塚前期有文器種不明(胴1)・貝塚後期器種不明(胴34)・グスク壺(胴1)・グスク器種不明(胴130)・グスク第2様式壺(口2、胴1)・グスク第3様式壺甕類(底4)、カムィヤキA群壺(口1、胴1)・B群器種不明(胴1)、青磁Ⅰ類碗(口6、胴1、底1)・Ⅱ類碗(口3)・Ⅳ類碗(口1、胴2、底1)・Ⅳ'類碗(口3、底2)・Ⅴ類碗(口5、底1)・Ⅴ類皿(底1)・Ⅴ類碗or皿(胴1)・盤(口1)・器種不明(胴38)・同安窯系Ⅰ類皿(口1)・磁竈窯系碗(胴1)・磁竈窯系器種不明(胴2)、白磁A群皿(底3)・A群器種不明(胴2)・C3群碗(口1、胴1)・D群碗(口1)・D'群碗(口1)・D'群皿(口1)・青花小碗(口1)・蓋(袴～庇1)、中褐器種不明(胴14)、石器・石製品(石鏃1、磨斧1、石核1)、石材(47)、鉄滓(2)、羽口(2)、焼土(11)、木片(1)、産地不明陶器器種不明(胴1)	
5区-2(谷1) Ⅳ層	土器面縄東洞式深鉢(胴1)・伊波・荻堂式深鉢(口1)・大山式深鉢(口～底1、口2)・室川式壺(口2)・室川式深鉢(口13)・室川式有文壺(口1)・室川式深鉢(口3)・宇佐浜式(口45、胴1)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(尖底1、平底3)・貝塚前期器種不明(胴480、尖底1、平底1)・貝塚後期甕(口3)・貝塚後期器種不明(胴8)・グスク器種不明(胴23)・分類不明器種不明(胴1)、青磁Ⅰ類碗(胴1)、石器・石製品(敲磨石3、石斧1、砥石2、磨面のある石器5、チップ1)、石材(78)、鉄滓?(1)、焼土(4)	
5区-3(谷1) Ⅳ層	土器室川式有文深鉢(口1)	
5区-2(谷1) Ⅳ－1層	土器室川式深鉢(口4)・宇佐浜式深鉢(口13)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴84)・貝塚後期器種不明(胴6)、沖無器種不明(胴1)、石器・石製品(敲磨石1、スクレイパー1)、石材(36)	
5区-2(谷1) Ⅳ－2層	土器室川式壺(口2)・深鉢(口2)・有文深鉢(口2)・宇佐浜式深鉢(口1)・仲原式深鉢(口3)・貝塚前期深鉢(丸底1)・貝塚前期有文深鉢(胴1)・貝塚前期器種不明(胴193、丸底2)・フェンサ下層式甕(口4)・貝塚後期器種不明(胴11)、白磁A群碗(底1)、石器・石製品(石斧1、敲磨石1)、石材(20)、羽口?(1)、焼土(2)	
5区-2(谷1) Ⅳ－3層	土器大山式深鉢(胴2)・室川式壺(口2)・室川式深鉢(口17)・宇佐浜式壺(口5)・宇佐浜式深鉢(口11)・仲原式深鉢(口2)・貝塚前期深鉢(尖底1)・貝塚前期器種不明(胴416)・貝塚後期器種不明(胴3)・グスク器種不明(胴6、底1)、石器・石製品(敲磨石1、磨面のある石器1)、石材(55)、焼土(3)	

第 20 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 12

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
5区-2(谷1) Ⅳ－4層	土器伊波・荻堂式深鉢(胴1)・荻堂式深鉢(口1)・室川式壺(口1)・室川式深鉢(口6)・室川式有文深鉢(口3)・宇佐浜式壺(口2)・宇佐浜式深鉢(口2)・宇佐浜式有文深鉢(口1)・犬田布式深鉢(胴1)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(丸底1、尖底1)・貝塚前期器種不明(把手1、胴91)・貝塚前期有文器種不明(胴1)、石材(16)						
5区-3(谷1) Ⅳ－4層	土器室川式深鉢(口3)・室川式有文深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴30)、石器・石製品(磨斧1、砥石1)、石材(7)、焼土(1)						
5区-3(谷2) Ⅲ層	土器宇佐浜式深鉢(口2)・貝塚前期深鉢(丸底1)・貝塚前期器種不明(胴66)・フェンサ下層式有文甕(胴1)・貝塚後期器種不明(胴6)・グスク壺甕類(底1)・グスク器種不明(胴8)、白磁C3群碗(胴1)、石器・石製品(敲磨石2、チップ1)、石材(16)、青銅製品(留め金具1)、焼土(3)						
5区-3(谷2) Ⅳ－1層	石材(1)						
5区-3(谷2) Ⅳ－3層	土器貝塚前期深鉢(平底1)						
5区-3(谷2) Ⅳ－4層	土器大山式深鉢(口1)・室川式深鉢(口2)・宇佐浜式深鉢(口1)・宇佐浜式有文深鉢(口2)・貝塚前期器種不明(胴127)・フェンサ下層式甕(口1)・貝塚後期器種不明(胴3)、石器・石製品(敲磨石8、磨斧1、砥石1、磨面のある石器1)、石材(47)、羽口(1)、焼土(5)、木片(1)、不明(1)						
SP6001	6区	9-N2	1	Ⅱ	8	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、細礫・炭・マージ粒・焼土粒が混入。SD6007内より検出。	
SP6002	6区	16-A2	1	Ⅱ	15	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、細礫、炭粒・焼土粒・マージ粒少量混入。SD6004内より検出。	
SP6003	6区	9-O2	2	Ⅲ	12	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強、炭粒・焼土粒・マージ粒混入。	
SP6004	6区	9-O2	2	Ⅲ	9	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強、炭粒、焼土粒・マージ粒混入。	
SP6005	6区	9-O2	2	Ⅲ	6	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6006	6区	9-O2	2	Ⅲ	7	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6007	6区	9-O2	2	Ⅲ	5	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6008	6区	9-O2	2	Ⅲ	14	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6009	6区	9-O2	2	Ⅲ	8	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6010	6区	9-O2	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6011	6区	9-O2	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6012	6区	9-O2	2	Ⅲ	2	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6013	6区	9-O2	2	Ⅲ	22	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘質弱。マージ粒・炭粒が混入。土器出土。	土器貝塚前期器種不明(胴1)
SP6014	6区	9-O2	2	Ⅲ	5	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6015	6区	9-O2	2	Ⅲ	－	グスク時代。SP6004と同じ埋土。平面図のみ	
SP6016	6区	9-O2	2	Ⅲ	8	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6017	6区	9-O2	2	Ⅲ	－	グスク時代。SP6004と同じ埋土。平面図のみ	
SP6018	6区	9-O2	2	Ⅲ	－	グスク時代。SP6004と同じ埋土。平面図のみ	
SP6019	6区	9-O2	2	Ⅲ	－	グスク時代。SP6004と同じ埋土。平面図のみ	
SP6020	6区	9-O2	2	Ⅲ	－	グスク時代。SP6004と同じ埋土。平面図のみ	
SP6021	6区	9-O2	2	Ⅲ	14	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、焼土粒・炭粒・マージ粒が混入。	
SP6022	6区	9-O2	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6023	6区	9-N2	2	Ⅲ	4	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6024	6区	9-N2	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6025	6区	9-N2	2	Ⅲ	5	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6026	6区	9-N2	2	Ⅲ	9	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6027	6区	9-N2	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6028	6区	9-N2	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6029	6区	9-N3	2	Ⅲ	16	グスク時代。SP6021と同じ埋土。	
SP6030	6区	9-N3	2	Ⅲ	5	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6031	6区	9-N3	2	Ⅲ	12	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6032	6区	9-N3	2	Ⅲ	14	グスク時代。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強、炭粒・焼土粒混入。2:1よりマージ粒が多い。	
SP6033	6区	9-N2	2	Ⅲ	4	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6034	6区	9-N2	2	Ⅲ	5	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、マージ粒・炭粒が少量混入。	
SP6035	6区	9-N3	2	Ⅲ	9	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6036	6区	9-N3	2	Ⅲ	16	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性強、マージ粒多く、炭粒、焼土粒が混入する。	
SP6037	6区	9-N2	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6038	6区	9-N2	2	Ⅲ	5	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6039	6区	9-N2	2	Ⅲ	14	グスク時代。SP6032と同じ埋土。SP6040を切る。	
SP6040	6区	9-N2	2	Ⅲ	15	グスク時代。SP6032と同じ埋土。SP6039に切られる。	
SP6041	6区	9-N3	2	Ⅲ	7	グスク時代。SP6004と同じ埋土。	
SP6042	6区	9-O2	2	Ⅲ	17	グスク時代。SP6004と同じ埋土。ベルト3断面のみ。	
SP6043	6区	9-N3	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP6021と同じ埋土。ベルト1断面のみ。	
SP6044	6区	9-N3	2	Ⅲ	11	グスク時代。SP6021と同じ埋土。ベルト1断面のみ。	
SK6001	6区	9-O2	1	Ⅱ	14	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。礫・マージ粒混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に暗褐色土（10YR3/3）混入。しまり弱。礫・マージ粒混入。	

第 21 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 13

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SK6002	6区	9-O3	1	Ⅱ	8	近世～近代。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。細礫・炭粒・焼土粒・マージ粒少量混入。	
SK6003	―	―	―	―	―	欠番	
SK6004	6区	9-O2	1	Ⅱ	21	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒・炭粒・焼土粒混入。SK6005に切られる。	沖無器種不明(胴1)
SK6005	6区	9-O2	1	Ⅱ	17	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。マージ粒が多く、炭粒・焼土粒混入。SK6004を切る。	沖施袋物(胴1)
SK6006	6区	9-O2	2	Ⅲ	7	グスク時代。単層。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。炭粒・焼土粒・マージ粒混入。	
SD6001	6区	9-O3・16-A2～A3	1	Ⅱ	20～38	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。炭粒・マージ粒・焼土粒混入。2:1よりマージ粒が多く、炭粒混入。3:2よりマージ粒、炭粒が少量。SD6003に切られる。北西-南東方向（N 59°W）。 カムィヤキA群器種不明(胴1)・B群壺(口1)、白磁福建産碗(底1)、青花碗(胴1)・小碗(胴1)、中褐器種不明(胴1)、本陶器種不明(胴1)、本磁A類蓋(撮み1)・F類器種不明(胴2)、沖施A類碗(口2)・A-1類小碗(口1)・分類なし皿(胴2)・蓋(口1)・器種不明(撮み1、胴2)、沖無壺or甕(胴1)・擂鉢(胴1、底1)・器種不明(胴13)、陶質土器器種不明(胴3)、金属製品(不明1)、焼土(1)	
SD6002	6区	9-O2～O3	1	Ⅱ	7	近世～近代。単層。1層:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒・炭粒・焼土粒混入。床面に鍬跡。SD6003に切られる。北東-南西方向（N 54°E）。 カムィヤキB群器種不明(胴1)、青花小杯(口2、胴1)、中褐器種不明(胴1)、本磁E類器種不明(胴1)・F類器種不明(胴1)、沖施A類碗(口3、胴1、底2)・A-2小碗(底1)・B-2碗(口1)・分類なし蓋(底2)・器種不明(胴1)、沖無擂鉢(胴1)・器種不明(胴5、底1)、陶質土器器種不明(胴8)、鉄製品(器種不明2)	
SD6003	6区	9-O2～O3	1	Ⅱ	26	近世～近代　1:10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質強。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。1・2にぶい黄褐色土（10YR5/4）が帯状堆積。SD6001を切る。SD6009に切られる。北東-南西方向（N 39°E）。	沖無器種不明(口1、胴1)、陶質土器蓋(袴1)、碍子(2)、プラスチック製品(櫛1)
SD6004	6区	9-O2 16-A2	1	Ⅱ	10	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。礫・焼土粒・マージ粒・炭粒混入。北東-南西方向（N 36°E）。	青磁器種不明(胴1)、白磁清代徳化窯小碗(口1)、沖施A類碗(口1、胴1)・B-1類碗(底1)・沖無器種不明(胴1)、陶質土器器種不明(胴1)
SD6005	6区	9-O2 9-O3	1	Ⅱ	2	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。礫・炭粒・焼土粒・マージ粒混入。北西-南東方向（N 64°W）。	沖施A類碗(口1)・C類碗(胴1)
SD6006	6区	9-O3 9-N3	1	Ⅱ	20	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。炭粒が多く、マージ粒が少量混入。北東-南西方向（N 29°E）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴1)、白磁福建産碗(底1)、本磁D類小碗(口1)、沖施A類碗(口1)・B-2類碗(胴1)・C類碗(胴2、底2)・分類なし瓶(底1)・器種不明(胴1)、沖無擂鉢(胴1)、焼土(1)
SD6007	6区	9-N2 9-N1	1	Ⅱ	53	近世～近代の道跡。石列（SS6001）を伴う溝状遺構。道跡の南側側溝か。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。礫・炭粒・焼土粒混入。2:1より炭粒多く、マージ粒・礫・焼土粒混入。北西-南東方向（N 60°W）。 青磁Ⅳ'類碗(底1)・Ⅴ類碗(口1)、青花碗(口2、胴3、底3)・皿(胴1、底1)、朝鮮系無釉陶器A群器種不明(底1)、中褐壺(口1)・器種不明(胴1)、本磁A類碗(口～底1、口3、底1)・A類皿(底1)・B類碗(口1)・B類小碗(口～底1、口5、底3)・B類皿(底1)・B類器種不明(胴1)・D類小碗(口～底3、底3)・E類小杯(底1)・F類小碗(口～底1、口1、胴1)・F類急須(注口1、口1)・器種不明(胴3)、沖施A類碗(口2、胴1、底4)・B類小碗(口1、底3)・B-1類碗(口1)・B-2類碗(口1、底2)・B-3類小碗(底2)・C類碗(口～底1、口8、胴10、底11)・C類小碗(口1)・C-2類碗(口4、胴1、底7)・分類なし皿(口4)・壺(口2、胴3)・鉢(口1、胴4、底1)・瓶子(底1)・瓶(胴4)・急須(底2)・袋物(口1、胴6)・酒器(底1)・蓋(庇～袴2)・器種不明(胴10、底1)、沖無壺(胴2)・甕(口1)・壺or甕(胴22、底4)・鉢(口5)・擂鉢(胴6)・瓶(口1、胴1)・袋物(底4)・器種不明(胴27)、陶質土器鉢(底1)・火炉(底1)・器種不明(胴7)、石材(4)、銭貨(鉄銭1)、鉄製品(鍋か?3)、青銅製品(煙管1)、瓦(丸4、平5、丸・平不明9)、ガラス製品薬瓶(口～底1)・ガラス栓(1)・栓不明(底1)・調味料瓶(底1)	
SD6008	6区	9-N2	1	Ⅱ	9	近世～近代の道跡。溝状遺構で道跡の北側側溝か　単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒を多く混入。細礫、炭粒も少量混入。北西-南東方向（N 62°W）。	沖施B-2類碗(口2)・B-3類碗(底1)
SD6009	6区	9-N2・O3～O2	1	Ⅱ	4～6	近世～近代。単層。10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強。焼土粒・炭粒・明褐色土（7.5YR5/8）混入。SD6003の上面で検出。北東-南西方向（N 39°E）。	沖施B類小碗(口1)・C類碗(胴1)・分類なし器種不明(胴1)、瓦(丸1)
SD6010	6区	16-A2	1	Ⅱ	―	近世～近代。東西方向（N 82°W）。平面図のみ。	
SD6011	6区	9-N2～N3	2	Ⅲ	29	グスク時代。谷地形を利用した溝状遺構1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。焼土粒、明褐色土粒（7.5YR5/8）混入。2:1より明褐色土粒多く含む。3:黄褐色土（10YR5/6）が帯状堆積。炭粒少量。4:明褐色土粒多く、炭粒・焼土粒少量。5:4より暗めで明褐色土粒多い。北西-南東方向（N 58°W）～東西方向（N 87°W）。	土器貝塚前期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴5)、青磁Ⅴ類器種不明(胴1)、カムィヤキA群壺(胴2)、中褐器種不明(胴1)、石材(7)、焼土(2)、瓦(平1、丸・平不明1)
SS6001	6区	9-N2	1	Ⅱ	―	近世～近代。SD6007に伴う石列で、道跡側溝の縁石か。10～15cmの石灰岩礫を北西-南東方向（N 57°W）に配する。	
SU6001	6区	9-N2	1	Ⅱ	―	近代～近代の遺物と礫の集中部。道跡の路面範囲で検出。	本磁B類小碗(口1)・F類小碗(底1)、沖施C-2類碗(底1)、沖無器種不明(胴1)、石材(1)、ガラス製品化粧瓶?(底1)
SU6002	6区	9-N2	1	Ⅱ	―	近代～近代の礫集中部。道跡の路面範囲で検出。	
SU6003	6区	9-N2	1	Ⅱ	―	近代～近代の礫集中部。道跡の路面範囲で検出。	

第 22 表　普天間石川原第一遺跡遺構・出土遺物一覧 14

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
6区	Ⅰ層	土器貝塚前期器種不明(胴9)・グスク羽釜(鍔1)、青磁Ⅶ類碗(口1)・分類なし器種不明(胴1)、白磁Ⅳ類碗(口1、底1)、青花碗(口1、胴3、底2)・皿(底1)・器種不明(胴2)、青磁染付小碗(底2)、本土産青磁袋物(底1)、染付器種不明(胴1)、本磁A類碗(口3、底1)・B類小碗(口2)・B類皿(口1)・B類器種不明(胴3)・C類蓋(袴～庇1)・E類器種不明(胴1)・F類小碗(口2、胴1)・F類器種不明(胴2)、沖施A類碗(口3、胴4)・A-2類小碗(底1)・A-3類小碗(胴1)・B-1類碗(胴1)・C類碗(口3、胴4、底2)・C-2類碗(口2、胴1)・分類なし皿(底1)・小皿(胴1)・火炉(底1)・袋物(胴2、底1)・器種不明(胴18)、沖無A類壺(口1)・分類なし壺(胴18)・甕(口1)・壺or甕(胴1)・鉢(口2)・擂鉢(口2、胴1、底1)・蓋(口1)・器種不明(胴28)、陶質土器鉢(口1)・蓋(撮み1)・器種不明(胴4)、円盤状製品(1)、銭貨(1セント1、10セント1)、瓦(平8)、ガラス製品化粧瓶(胴2)・不明(胴1)	
6区	Ⅱ層	土器室川式深鉢(口1)、沖無甕(口1)					
6区(谷2)	Ⅲ層	土器室川式深鉢(口2)・宇佐浜式深鉢(口2)・宇佐浜式有文深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴8)・フェンサ下層式甕(口2、くびれ平底1)・貝塚後期甕(くびれ平底?1)・貝塚後期器種不明(胴52)・グスク器種不明(胴4)、沖無器種不明(胴1)、瓦質土器器種不明(胴1)、石器・石製品(多面体敲石1、フレイク1)、石材(8)、羽口(1)、焼土(6)、不明(10)					
6区(谷2) Ⅳ-4層		土器伊波・荻堂式深鉢(胴2)・室川式深鉢(口1)・宇佐浜式深鉢(口2)・仲原式深鉢(口1)・貝塚前期深鉢(把手1)・貝塚前期器種不明(胴136)・フェンサ下層式甕(口3)・貝塚後期器種不明(胴36)、石器・石製品(磨斧2、有孔石製品1、磨面のある石器1)、石材(50)、焼土(15)、炭(6)、不明(20)、遺物集中2：土器フェンサ下層式甕(口3)・フェンサ下層式有文甕(口1)・貝塚後期甕(口3)・貝塚後期器種不明(胴8)、遺物集中3：土器荻堂式深鉢(口1)・貝塚前期器種不明(胴2)					
SB7001 -P01	7区	16-C3	1	Ⅲ	36	グスク時代の掘立柱建物跡。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒・マージ粒少量混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒多く、炭粒は少量。3:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質やや強。マージ粒多く、炭は少量。1・2は柱痕、3は柱掘方か	
SB7001 -P02	7区	16-C3	1	Ⅲ	63	グスク時代の掘立柱建物跡。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒、マージ粒を多く混入。SB7001-P1の1に類似。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱。マージ粒多い。1は柱痕、2は柱掘方か	
SB7001 -P03	7区	16-B3	1	Ⅲ	16	グスク時代の掘立柱建物跡。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒を多く含み、炭粒が少量混入。SB7001-P1に類似。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質やや強。マージを多く混入。3:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質やや強。マージ粒多く、炭粒少量混入。	
SB7001 -P04	7区	16-B3	1	Ⅲ	17	グスク時代の掘立柱建物跡。単層。10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒を多く含み、炭粒が少量混入する。	
SB7001 -P05	7区	16-B3	1	Ⅲ	28	グスク時代の掘立柱建物跡。1:10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂。しまり強。マージ粒を多く含み、炭粒が少量混入。SB7001-P1に類似。2:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘性やや強。炭粒・マージ粒混入。3:7.5YR6/8橙シルト～極細粒砂。粘性強。褐色土（10YR4/4）混入。1・2は柱痕、3は柱掘方か	土器グスク器種不明(胴1)
SP7001	7区	16-C3	1	Ⅱ	6	近世～近代。単層。10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒・マージ混入。	
SP7002	7区	16-C3	1	Ⅱ	32	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、炭粒・礫・マージ粒を少量混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、炭粒・焼土粒・マージ粒を混入。3:7.5YR明褐色5/6シルト～極細粒砂。粘性強。	
SP7003	7区	16-C4	1	Ⅲ	24	グスク時代。1:10YR4/4褐色シルト～極細粒砂。しまり弱、粘性やや強。マージ粒と炭粒を混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強、粘質やや強、マージ多く、炭粒混入。	
SD7001	7区	16-C3 ～C4	1	Ⅱ	10	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。礫を多く混入。北西-南東方向（N 53°W）。	本磁D類小碗(口1)、沖施A類碗(口2)、沖無壺(胴1)・器種不明(胴1)
SD7002	7区	16-C3 16-C4	1	Ⅱ	16	近世～近代。1:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭片少量、礫混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。炭粒混入。北西-南東方向（N 59°W）。	
						カムィヤキA群器種不明(胴1)、青花碗(底4)、中褐器種不明(胴2)、染付器種不明(胴1)、沖施A類碗(口2、底6)・A-2類小碗(口1)・B類小碗(底1)・B-1類碗(胴2、底2)・B-2類碗(口1、底2)・B-3類碗(胴2、底1)・C類碗(口2、胴1)・C-2類碗(底1)・分類なし皿(底2)・壺(底1)・鉢(口1)・瓶(胴1)・急須(注口1、胴1)・火炉(口1)・酒器(底1)・袋物(口1)・器種不明(胴9)、沖無A類壺(口1)・B類壺(口1)・分類なし壺(胴6)・壺or甕(胴23、底8)・鉢(口3)・擂鉢(口1、胴4、底2)・器種不明(胴8)、陶質土器鍋(把手3)・鉢(口1、底1)・火炉(把手1)・器種不明(胴14)、円盤状製品(4)、石材(2)、瓦(平1)	
SD7003	7区	16-C3	1	Ⅱ	18	近世～近代。1:10YR6/6明黄色シルト～極細粒砂。しまり強。小礫・炭粒・マージ粒混入。2:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強・小礫・炭粒混入。3:10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂。しまり強。礫・炭粒混入。4:1に類似。5:10YR4/6褐色シルト～極細粒砂。しまり強。礫・炭粒混入。北西-南東方向（N 57°W）。	青磁Ⅳ類皿(底1)、中褐器種不明(胴1)、沖施A類碗(口1、底1)・B-1類碗(底1)・分類不明碗(底1)・分類なし器種不明(胴8)、沖無鉢(口1)・瓶(口1)・器種不明(胴5)、陶質土器器種不明(胴1)、鉄製品(缶1)、瓦(平1)、ガラス製品インク瓶(口～底1)
7区	Ⅰ層	本磁B類小碗(口1)・B類皿(口1)・F類器種不明(胴1、底1)・沖施A類碗(底1)・A-2類小碗(口1)・B類小碗(底1)・C類碗(口1)・分類なし急須(耳1)・器種不明(胴4)、沖無壺or甕(胴2)・擂鉢(胴1)・器種不明(胴3)、陶質土器器種不明(胴2)、円盤状製品(1)、鉄製品(器種不明2)、青銅製品(簪1)、瓦(丸・平不明1)					
7区	Ⅱ層						

・出土遺物は中国産褐釉陶器：中褐、本土産陶器：本陶、本土産近代磁器：本磁、沖縄産施釉陶器：沖施、沖縄産無釉陶器：沖無と略称した。

第 23 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 1

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
1	貝塚前期土器	深鉢	面縄東洞式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。外面に押し引きによる籠目文。器面脆い。	5区 9−L3 IV層
2	貝塚前期土器	深鉢	伊波式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。口唇と外面に連続刺突と押し引き文（右から）。その下に斜沈線。	5区 9−L2 Ⅰ層
3	貝塚前期土器	深鉢	荻堂式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や赤色粒などを含む。突起部で外面に沈線。内面に刷毛目状調整痕。	5区 9−K4 IV-4層
4	貝塚前期土器	深鉢	大山式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。外面に押し引き文（左から）。薄手。	5区 9−M5 IV-4層
5	貝塚前期土器	深鉢	大山式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒・赤色粒を含む。口唇と外面に連続刺突（口唇は右から、外面は左から）	5区 9−L3 IV-3層
6	貝塚前期土器	深鉢	大山式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や石英などを多く含む。外面に突帯。脆い。	5区 9−L2 IV層
7	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。幅広口唇。口唇と外面に連続刺突（右から）。	5区 9−M3 IV層
8	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	泥質。幅広口唇。口唇と外面に連続刺突。	5区 9−K4 SS5004 集石内
9	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や赤色粒などを含む。幅広口唇。外面にステップ状文様。	5区 9−J5 SL5005 埋土
10	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒などを多く含む。幅広口唇。口唇に連続刺突（右から）。	1区 9−I8 IV-3層
11	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	泥質で石灰質砂粒・赤色粒を含む。幅広口唇。	5区 9−J5 IV-3層
12	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒・石英などを含む。幅広口唇。外面に斜沈線。	5区 9−K4 IV-4層
13	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や赤色粒などを多量含む。貼付により肥厚。	5区 9−K4 SS5004 集石内
14	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や石英、赤色粒などを含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K4 IV-1層
15	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や石英などを多く含む。カヤウチバンタ式口縁。	2区 Ⅰ層
16	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒などを多く含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K3 IV-1層
17	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒などを多く含む。厚手。カヤウチバンタ式口縁。	2区 9−J6 IV-2層
18	貝塚前期土器	深鉢	荻堂式	12.0	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。山形口縁で叉状工具による縦位区画文・横線文・鋸歯文。脆い。	6区 9-O2 IV-4層 遺物集中3
19	貝塚前期土器	深鉢	大山式	12.2	5.0	(19.5)	砂質で石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁で幅広突帯貼付。平底。器高は推定。脆い。	5区 9−L3 IV層
20	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	泥質で褐色粒や石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K4 IV-1層
21	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K3 IV-3層
22	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。肥厚微弱。	5区 9−J4 IV-4層
23	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や石英・チャートを含む。肥厚微弱。外面に斜沈線。	5区 9−K4 SS5004 集石内
24	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。肥厚微弱。外面に不規則な押し引き文（左右）。	5区 9−J4 IV-4層
25	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒などを多く含む。直口口縁で肥厚微弱。	4区 9−M6 SX4001 3層
26	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質でチャートや石灰質砂粒、黒色粒などを多く含む。肥厚微弱。	5区 9−K4 SS5004 集石内
27	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K4 SS5004 集石内
28	貝塚前期土器	深鉢	室川式	―	―	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒を多く含む。肥厚微弱。口唇と外面に連続刺突（右から）。	5区 9−K3 IV層
29	貝塚前期土器	壺	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を多く含む。肥厚微弱。口唇部に連続刺突（右から）。	5区 9−K3 IV層
30	貝塚前期土器	壺	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。口唇平坦。器面脆い。	5区 9−L3 IV層
31	貝塚前期土器	壺	室川式	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−L3 Ⅱ層
32	貝塚前期土器	壺	室川式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−J5 IV-4層
33	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。三角形状。外面に叉状工具による連続刺突。	1区 IV-3層
34	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒などを含む。三角形状。外面に連続刺突（右から）。	5区 9−K3 Ⅲ層
35	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。三角形状。	2区 9−I7 IV-2層
36	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。三角形状。外面に叉状工具による連続刺突（右から）。	5区 9−N5 IV-4層
37	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒などを多く含む。三角形状。外面に単箆工具による連続刺突（右から）。	2区 Ⅰ層
38	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。カマボコ形。突起が付く。	2区 9−J6 IV-2層
39	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。カマボコ形。貼付で肥厚させる。	5区 9−K3 IV層
40	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒などを含む。カマボコ形。突起が付く。	2区 9−I 7 IV-2層
41	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒などを多く含む。カマボコ形。指頭痕残る。	5区 9−J4 Ⅲ層
42	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で雲母を多量に含む。厚手。	5区 9−K4 SS5004 集石内
43	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。厚手。外面に指頭痕。	2区 9−J6 IV-2層
44	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。厚手。	2区 9−I7 IV-2層
45	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒などを多く含む。厚手。	5区 9−K3 IV-1層
46	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒、片岩類を多量に含む。厚手。外面に押し引き文（右から）。	5区 9−J5 表採
47	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。カヤウチバンタ式口縁。外面に押し引き文（右から）。	5区 9−K3 Ⅲ層
48	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒などを含む。カヤウチバンタ式口縁。突起が付く。	1区 IV-3層
49	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英などを多く含む。カヤウチバンタ式口縁。	4区 9−M6 SX4001 3層
50	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を含む。薄手。カヤウチバンタ式口縁。	4区 9-L7 Ⅲ層

第 24 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 2

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
51	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英などを多く含む。三角形状。薄手。	2区 9−J6 IV-2層
52	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や褐色粒などを多く含む。三角形状。	5区 9−K4 SS5004 集石内
53	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒などを多く含む。カヤウチバンタ式口縁。	2区 9−J7 IV-3層
54	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や石英などを多く含む。厚手。突起が付く。	1区 9−I8 IV-3層
55	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。厚手。	2区 9−I 7 SS2003 集石内
56	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質でチャート・石英などを含む。三角形状。口唇に連続刺突（右から）。	5区 9−K3 SS5002 集石内
57	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	泥質。カマボコ形。外面に沈線と単篦工具による押し引き文（右から）。	2区 9−J7 IV-2層
58	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒などを多く含む。三角形状。外面に単篦工具による連続刺突。	2区 9−I6 IV層
59	貝塚前期土器	壺	宇佐浜式	―	―	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒などを多く含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K4 SS5004 集石内
60	貝塚前期土器	深鉢	―	―	―	―	砂質で石灰質砂粒や赤色粒を多く含む。外面に突帯と斜沈線。	5区 9−J4 IV-4層
61	貝塚前期土器	深鉢	―	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を含む。外面にミミズばれ状細突帯と刺突文。脆い。	5区 9−K3 Ⅰ層
62	貝塚前期土器	深鉢	―	―	―	―	砂質で石英・チャートなどを多く含む。外面に突帯と刺突文（右から）。	5区 9−J5 SL5005 埋土
63	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を僅かに含む。山形口縁。外面に刺突文と縦位沈線。	2区 9−J6 SD2001 埋土
64	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。山形口縁。外面に刺突文。	2区 9−J6 IV-2層
65	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒やチャートなどを含む。カヤウチバンタ式口縁。	5区 9−K4 SS5004 集石内
66	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。カヤウチバンタ式口縁。口唇舌状。	6区 9-O2 IV-4層
67	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を少量含む。直口口縁。	1区 IV-3層
68	貝塚前期土器	深鉢	仲原式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。注口状の口縁。	2区 9−J6 SD2001 埋土
69	貝塚前期土器	壺	仲原式	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。薄手。	2区 9−I7 IV-2層
70	貝塚前期土器	壺	仲原式	―	―	―	砂質で石英・チャートなどを多く含む。薄手。	5区 9−K4 SS5004 集石内
71	貝塚前期土器	深鉢	把手	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。上向きに付く方形状の把手。	1区 9−I8 Ⅲ層
72	貝塚前期土器	深鉢	把手	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。水平状の把手。	6区 9-O2 IV-4層
73	貝塚前期土器	深鉢	平底	―	3.4	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。	2区 9−I7 IV-2層
74	貝塚前期土器	深鉢	平底	―	―	―	砂質で褐色・白色粒などを多く含む。	1区 9−I8 Ⅲ層
75	貝塚前期土器	深鉢	平底	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。厚底。脆い。	5区 9−K2 IV層
76	貝塚前期土器	深鉢	尖底	―	0.8	―	砂質で石灰質砂粒・石英などを含む。	5区 9−J5 IV-3層
77	貝塚前期土器	深鉢	尖底か	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を僅かに含む。	2区 9−J7 IV-4層
78	貝塚前期土器	深鉢	尖底	―	1.4	―	砂質で石英・チャートや石灰質砂粒などを多く含む。	5区 9−K3 IV層
79	貝塚前期土器	深鉢	丸底	―	1.8	―	砂質で石英や石灰質砂粒を多く含む。内底に煤？付着。	5区 9−N4 Ⅲ層
80	貝塚前期土器	深鉢	丸底	―	0.8	―	砂質で石英や石灰質砂粒を含む。	5区 9−J5 IV-4層
81	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	20.0	―	―	泥質で赤色・褐色粒を少量含む。口唇はやや平坦。穿孔。	6区 9-O2 IV-4層 遺物集中2
82	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で赤色・褐色粒を少量含む。口唇は舌状。	4区 9-L7 Ⅲ層
83	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で赤色粒を含む。口唇は舌状。内外面刷毛目状・指頭痕残る。	5区 9−N3 Ⅲ層
84	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	21.2	―	―	泥質で褐色粒を含む。口唇は舌状。内外面刷毛目状・指頭痕残る。	6区 9-O2 IV-4層 遺物集中2
85	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で黒色粒・褐色粒などを多く含む。貝塚前期土器の可能性もある。	4区 9−M6 SX4001 5層
86	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で黒色粒を僅かに含む。口唇平坦を意識。外面に煤？付着。	4区 9−M6 SX4001 2層
87	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で石灰質砂粒や褐色粒を含む。口唇は舌状。	5区 9−M5 IV-4層
88	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	泥質で黒色粒を僅かに含む。内外面刷毛目状痕。外面に突帯貼り付け。	5区 9−M5 Ⅲ層
89	貝塚後期土器	甕	フェンサ下層式	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。外面に突帯貼り付け。	6区 9-O2 IV-4層 遺物集中2
90	貝塚後期土器	甕	くびれ平底	―	6.0	―	泥質で黒色粒を僅かに含む。外底に煤？付着。	4区 9−M6 SX4001 5層
91	貝塚後期土器	甕	小径厚底	―	5.0	―	泥質で赤色・褐色粒を少量含む。	2区 Ⅲ層
92	貝塚後期土器	甕	小径厚底	―	3.6	―	泥質で赤色粒を少量含む。	1区 9−H8 Ⅲ層
93	貝塚後期土器	甕	くびれ平底	―	―	―	泥質で褐色粒を少量含む。	4区 9−M6 SX4001 1層
94	貝塚後期土器	甕	平底	―	―	―	泥質で赤色・褐色粒を少量含む。	4区 9−M6 SX4001 1層
95	貝塚後期土器	甕	平底	―	―	―	泥質で赤色・褐色粒を少量含む。	4区 9-L7 Ⅲ層
96	貝塚後期土器	甕	底部	―	―	―	砂質で石灰質砂粒を含む。くびれ平底？	6区 9-O2 Ⅲ層
97	貝塚後期土器	甕	くびれ平底	―	5.1	―	泥質で黒色粒・褐色粒を含む。外面縦、内面斜方向の刷毛目状調整痕明瞭。工具幅約8〜9㎜。	4区 9−M6 SX4001 1･2層
98	グスク土器	壺	第２様式	14.0	―	―	砂質で石灰質砂粒・黒色粒などを含む。外面は丁寧なナデ調整、内面胴部は指頭痕残る。	1区 9−I8 Ⅲ層
99	グスク土器	壺	第２様式	―	―	―	泥質で黒色粒を僅かに含む。外面貼付により肥厚。	2区 9−J7 SD2001 埋土
100	グスク土器	壺	第３様式	21.0	―	―	泥質で白色粒、赤色粒を僅かに含む。内外面雑なナデ調整。	2区 Ⅰ層
101	グスク土器	甕	第３様式	―	―	―	泥質で器面あばた状。外面に指頭痕が明瞭に残る。内面はナデ調整。	5区 9−J5 SL5005 埋土
102	グスク土器	鍋か	第２様式か	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を僅かに含む。口縁断面三角形状。	5区 9−J4 SD5009 埋土
103	グスク土器	碗	―	―	―	―	泥質で器面あばた状。口縁玉縁状。	5区 9−J4 SD5009 埋土
104	グスク土器	羽釜	鍔	―	―	―	泥質で石灰質砂粒を僅かに含む。	6区 9-O3 Ⅰ層
105	グスク土器	壺甕類	第３様式	―	―	―	泥質。器面あばた状で、雑なナデ調整で器面凹凸。	2区 9−I6 Ⅲ層
106	グスク土器	壺甕類	第３様式	―	11.0	―	泥質で石灰質砂粒を含む。器面あばた状。	5区 9−J4 Ⅰ層
107	グスク土器	壺甕類	第３様式	―	―	―	泥質。器面あばた状で、雑なナデ調整で器面凹凸。	2区 Ⅰ層

第 25 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 3

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
108	グスク土器	壺甕類	―	―	―	―	泥質で黒色鉱物含む。外面に刷毛目状調整痕。	1区 9−H8 SD1010 埋土
109	グスク土器	壺甕類	―	―	―	―	泥質で黒色鉱物や赤色粒含む。	2区 9−I6 Ⅲ層
110	グスク土器	碗	―	―	―	―	泥質で黒色鉱物や赤色粒を含む。	2区 Ⅲ層
111	カムィヤキ	壺	A群	―	―	―	胎土灰色で硬質。外面綾杉状、内面に格子目状当て具痕。	4区 9−M5 Ⅲ層
112	カムィヤキ	壺	A群	―	―	―	胎土灰色で軟質。内面に格子目状当て具痕。	4区 9−M6 Ⅲ層
113	カムィヤキ	壺	B群	―	―	―	胎土芯部赤褐色で軟質。内外面ナデ。方形状の口縁。	2区 9−J6 Ⅱ層
114	カムィヤキ	壺	B群	―	―	―	胎土芯部赤褐色で軟質。外面ナデ。内面に平行線状の当て具痕。	2区 Ⅲ層
115	カムィヤキ	壺か	B群	―	―	―	胎土芯部赤褐色で硬質。外面ナデ、内面に綾杉状当て具痕。	4区 9−M6 Ⅲ層
116	カムィヤキ	壺	B群	―	10.8	―	胎土芯部赤褐色で軟質。外面ナデ、内面綾杉状当て具痕か。	5区 9−J4 Ⅱ層
117	カムィヤキ	壺	B群?	―	―	―	胎土芯部赤褐色で硬質。外面ナデ、内面当て具痕不明瞭。	2区 9−J6 SD2001 埋土
118	朝鮮系無釉陶器	壺	A群	―	―	―	胎土芯部紫色で白い線状帯あり。白色粒を含む。内面に格子目状当て具痕。外面に隆帯か。	5区 9−J4 Ⅱ層
119	朝鮮系無釉陶器	壺か	A群	―	―	―	胎土芯部紫色で白い線状帯あり。白色・赤色粒を含む。内外面ナデ。	5区 9−J4 Ⅰ層
120	朝鮮系無釉陶器	壺か	A群	―	18.4	―	胎土芯部赤褐色で白い線状帯あり。白色・赤色粒を含む。内外面ナデ。	6区 9-N2 SD6007 埋土
121	朝鮮系無釉陶器	壺か	B群	―	―	―	胎土灰色の堆積状。白色粒を含む。外面に格子目状当て具痕。内面ナデにより隆起。	5区 9−J4 Ⅰ層
122	中国産青磁	碗	Ⅰ類	15.0	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土灰黄色。内面に圏線。	5区 9−K4 Ⅲ層
123	中国産青磁	碗	Ⅰ類	―	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土灰黄色。内面に圏線。	5区 9-J4 Ⅲ層
124	中国産青磁	碗	Ⅰ類	―	―	―	釉は淡い緑色で薄く外面に釉垂れあり。胎土灰黄色。皿に近い。	2区 9−J7 SD2001 埋土
125	中国産青磁	碗	Ⅰ類	―	―	―	釉はやや黄色味を帯び薄い。胎土灰黄色。内面に櫛描きによる区画文。	2区 Ⅰ層
126	中国産青磁	碗	Ⅰ類	―	―	―	釉は濃い緑色で薄い。胎土灰黄色。内面に片彫りによる草文。	5区 9−K3 Ⅱ層
127	中国産青磁	碗	Ⅰ類	―	5.4	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土淡黄色。外底露胎。見込みに圏線か。	5区 9−J4 Ⅱ層
128	中国産青磁	碗	Ⅱ類	―	―	―	釉は濃いい緑色で薄い。胎土灰白色。外面に片彫りによる蓮弁文。	5区 9−J4 Ⅲ層
129	中国産青磁	碗	Ⅱ類	15.0	―	―	釉は淡い緑色。胎土灰黄色。外面に鎬蓮弁文。鎬の削り痕明瞭。	1区 9−I8 Ⅲ層
130	中国産青磁	碗	Ⅱ類	15.4	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土灰黄色。外面に鎬蓮弁文。鎬の削り痕明瞭。	5区 9−K3 SS5002 集石内
131	中国産青磁	碗	Ⅱ類	―	―	―	釉は淡い水色。胎土灰白色。外面に鎬蓮弁文。	5区 9−K3 Ⅱ層
132	中国産青磁	碗	Ⅱ類	―	―	―	釉は灰色味を帯び薄い。胎土灰色。外面に鎬蓮弁文。	2区 Ⅲ層
133	中国産青磁	碗	Ⅱ類	―	―	―	釉は濃い緑色。胎土灰黄色。外面に鎬蓮弁文。鎬の削り痕明瞭。	2区 Ⅲ層
134	中国産青磁	皿	Ⅲ類	12.6	―	―	釉は濃い緑色。胎土は灰白色。口折皿で端部摘上げ。内面6㎜幅の蓮弁状に凹む。	2区 9−J6 SD2001 埋土
135	中国産青磁	皿	Ⅲ類	―	―	―	釉は青味が強い緑色。胎土灰白色。外面に鎬蓮弁文。	2区 Ⅲ層
136	中国産青磁	碗	Ⅳ類	14.0	―	―	釉は淡い緑色で薄い。胎土灰白色。口縁端部で外反。	2区 Ⅲ層
137	中国産青磁	碗	Ⅳ類	15.4	―	―	釉は気泡目立つ。胎土灰白色。	2区 Ⅲ層
138	中国産青磁	碗	Ⅳ類	―	―	―	釉は淡い緑色で貫入多い。胎土灰白色。内面に圏線。	5区 9−K4 Ⅱ層
139	中国産青磁	碗	Ⅳ類	―	―	―	釉は淡い緑色で薄い。胎土灰白色。口唇厚め。	2区 9−J6 SD2001埋土
140	中国産青磁	皿	Ⅳ類	―	―	―	釉は淡い緑色で薄い。胎土灰白色。	2区 9−J7 SD2001埋土
141	中国産青磁	皿	Ⅳ類	―	―	―	釉は濃い緑色で厚い。胎土灰白色。外面2段蓮弁文。内面1.2㎝幅の蓮弁状に凹む。	4区 9−L5 Ⅲ層
142	中国産青磁	碗	Ⅳ類	―	6.6	―	釉は淡い緑色で薄い。胎土灰白色。見込み印花文。	4区 表採
143	中国産青磁	碗	Ⅳ類	―	6.0	―	釉は淡い緑色で薄い。胎土灰白色。見込み印花文。外底露胎で中央突出。	1区 Ⅲ層
144	中国産青磁	皿	Ⅳ類	―	5.6	―	釉は淡い水色。胎土白色。見込み線刻文。外底露胎。腰折皿か。	2区 Ⅰ層
145	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	15.2	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土赤褐色。大きめの玉縁口縁。	5区 9−K3 SS5002 集石内
146	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は淡い緑色。胎土灰白色。端部が丸い玉縁口縁。	2区 9−J7 Ⅲ層
147	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土赤褐色。端部が丸い玉縁口縁。	4区 9−M6 Ⅲ層
148	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土灰白色。端部が丸い玉縁口縁。	1区 9−H8 Ⅲ層
149	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土灰黄色。やや方形状の玉縁口縁。	2区 Ⅲ層
150	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は淡い緑色。胎土灰白色。厚めの玉縁口縁。	5区 9−J5 Ⅲ層
151	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土赤褐色。厚めの玉縁口縁。	5区 9−J4 SD5009 埋土
152	中国産青磁	皿	Ⅳ'類	―	―	―	釉は黄色味を帯びる。胎土灰黄色。やや玉縁に近い口縁。	2区 Ⅰ層
153	中国産青磁	碗	Ⅳ'類	―	5.7	―	釉は風化。胎土明褐色。見込み釉剥ぎ。外底露胎。円盤状製品。	5区 9−J4 Ⅱ層
154	中国産青磁	皿	Ⅳ'類	―	5.5	―	釉は淡い緑色で貫入多い。胎土灰白色。外底露胎。見込み釉剥ぎ・型押し双魚文。腰折皿。	4区 9−M6 Ⅲ層
155	中国産青磁	碗	Ⅴ類	15.0	―	―	釉は濃い緑色で厚い。胎土白色。端部で外反する。	2区 Ⅰ層
156	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	―	―	釉は濃い緑色で厚い。胎土灰白色。端部で外反する。	5区 9−J5 Ⅱ層
157	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	―	―	釉は淡い緑色で厚い。胎土白色。緩く外反する。	1区 Ⅱ層
158	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	―	―	釉は淡い緑色で厚い。胎土白色。緩く外反する。	5区 9−J3 SD5009 埋土
159	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	―	―	釉は淡い緑色で厚い。胎土白色。直口口縁。	2区 9−I6 SD2001 埋土
160	中国産青磁	皿	Ⅴ類	13.4	―	―	釉は淡い緑色で厚く貫入多い。胎土白色。腰折皿か。	5区 9−J4 Ⅰ層
161	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	7.4	―	釉は黄色味を帯び気泡目立つ。胎土灰黄色。外底釉剥ぎする。	5区 9−K3 SS5002 集石内
162	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	7.2	―	釉は淡い緑色で厚い。胎土白色。外底中央刳り・外底釉剥ぎ。見込みに圏線。	5区 Ⅲ層
163	中国産青磁	碗	Ⅴ類	―	6.0	―	釉は淡い緑色で厚く貫入多い。胎土白色。外底釉剥ぎ、中央に砂胎土目付着。外面幅広蓮弁文。	2区 9−J6 SD2001 埋土

第 26 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 4

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
164	中国産青磁	皿	Ｖ類	―	7.2	―	釉は濃い緑色で厚い。胎土灰白色。見込みに印花文。外底釉剥ぎし砂目付着。	2区 Ⅲ層
165	中国産青磁	碗	Ⅵ類	―	5.5	―	釉は濃い緑色で薄い。胎土灰白色。見込み印花文。外底中央突出し露胎。高台内まで施釉。	5区 9−L3 Ⅰ層
166	中国産青磁	皿	Ⅵ類	―	6.0	―	釉はやや青味を帯びる。胎土灰白色。外底全面釉剥ぎ。外面に線刻蓮弁文。内面5㎜幅の蓮弁文。菊花皿。	7区 16−C3 SD7003 埋土
167	中国産青磁	盤	―	―	―	―	釉は淡い緑色で薄め。胎土灰白色。内面2～3㎜幅の蓮弁状の櫛描文。	5区 9−K4 Ⅲ層
168	中国産青磁	盤	―	―	―	―	釉は淡い緑色で厚く貫入多い。胎土白色。内面2～3㎜幅の蓮弁状の櫛描文。	5区 9−J3 SD5009 埋土
169	中国産青磁	盤	―	―	8.0	―	釉は淡い緑色。胎土灰白色。内面2～3㎜幅の蓮弁状の櫛描文。外底に胎土目付着。	2区 Ⅲ層
170	中国産青磁	盤	―	―	8.8	―	釉は濃い緑色で厚い。胎土白色。外底釉剥ぎ。見込みに印花文。	2区 Ⅰ層
171	中国産青磁	碗	幅広高台	―	6.2	―	釉は風化。胎土明褐色。見込み釉剥ぎ。高台端部面取り。	2区 表採
172	中国産青磁	皿	同安窯系Ⅰ類	―	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土灰白色。外底露胎。見込みにジグザグ文と弧状文。	4区 9−M6 Ⅲ層
173	中国産青磁	皿	同安窯系Ⅰ類	―	4.0	―	釉は薄い透明釉。胎土灰白色。外底露胎。無文。	5区 9−K4 SS5003 集石内
174	中国産青磁	碗	磁竈窯	―	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。器壁薄く胎土に黒色粒を多く含む。外反口縁。	5区 9−K4 Ⅱ層
175	中国産青磁	碗	磁竈窯	―	―	―	釉は黄色味を帯び薄い。胎土に黒色粒・白色粒を多く含む。	2区 9−J6 SD2001 埋土
176	中国産白磁	碗	Ⅳ類	―	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。玉縁小さめ。	2区 表採
177	中国産白磁	碗	Ⅳ類	―	―	―	釉は黄色味が強い。軟質。玉縁小さめ。	4区 9−M6 Ⅲ層
178	中国産白磁	碗	Ⅳ類	―	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。玉縁大きめ。	5区 9−J4 Ⅰ層
179	中国産白磁	碗	Ⅳ類	―	5.4	―	釉は灰色。胎土灰白色。外底露胎。見込みに砂目。	2区 9−I 7 Ⅲ層
180	中国産白磁	碗	Ⅳ類	―	7.5	―	釉は灰色で貫入多い。軟質。外底露胎。高台刳り浅い。	5区 表採
181	中国産白磁	碗	A群	―	―	―	釉は白色。胎土白色。口唇部釉剥ぎ。	5区 9−J3 SD5009 埋土
182	中国産白磁	碗	A群	―	5.0	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに圏線。畳付け釉剥ぎ。	2区 Ⅰ層
183	中国産白磁	皿	A群	―	7.0	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに圏線。外底の釉薄い。	5区 9−J4 Ⅲ層
184	中国産白磁	碗	C１群	―	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。口唇外端が尖る。	5区 9−M4 Ⅰ層
185	中国産白磁	碗	C３群	15.2	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。外反口縁。	5区 9−J4 SD5009 埋土
186	中国産白磁	碗	C３群	―	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。外反口縁。口縁部細め。	2区 Ⅰ層
187	中国産白磁	碗	C３群	―	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。外反口縁。	2区 Ⅰ層
188	中国産白磁	碗	C３群	―	5.0	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込み無文。外底露胎。	1区 9−I8 Ⅲ層
189	中国産白磁	碗	C３群	―	6.0	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに印花文。外底露胎。	5区 9−J4 SD5009 埋土
190	中国産白磁	碗	C３群	―	5.8	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに印花文。外底露胎。	2区 Ⅲ層
191	中国産白磁	碗	C３群	―	5.5	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに印花文。外底露胎。	5区 表採
192	中国産白磁	皿	D群	―	3.1	―	釉は白色で貫入細かい。胎土白色。軟質。外底露胎。	5区 9−J4 SD5009 埋土
193	中国産白磁	皿	D'群	15.6	―	―	釉は緑味を帯びる。胎土は黄色味を帯びる。内湾口縁。	5区 9−J4 Ⅲ層
194	中国産白磁	碗	―	―	10.0	―	釉は灰色。胎土は灰白色。見込み釉剥ぎ。外底露胎。	2区 9−I 7 Ⅱ層
195	中国産青花	碗	景徳鎮D群	―	―	―	外面に波濤文。直口口縁。	2区 Ⅰ層
196	中国産青花	蓋	漳州窯	8.0	―	―	外面に透明釉で貫入多い。呉須で葉文を描く。	5区 9−L2 Ⅲ層
197	中国産青花	碗	徳化窯	―	―	―	外面に寿字文と蓮弁文。端反口縁。	2区 Ⅰ層
198	中国産青花	碗	徳化窯	―	―	―	外面に寿字文と蓮弁文。端反口縁。	3区 9-O8 Ⅱ層
199	中国産青花	小碗	徳化窯	7.6	―	―	外面に唐草文か。端反口縁。	4区 9−M7 Ⅰ層
200	中国産褐釉陶器	壺	―	―	―	―	釉は褐色。胎土は赤灰色、赤色・白色粒を多く含む。肩部に叩痕。短頸壺。	6区 9-N2 SD6007 埋土
201	中国産褐釉陶器	壺	―	―	―	―	胎土は外面灰色、内面橙色で黒色・褐色粒を多く含む。内外底露胎。	2区 Ⅲ層
202	本土産近世陶器	袋物	―	7.0	6.8	8.9	畳付露胎で口縁内面は無釉。外面は鮫肌釉。蓋物の身。素地は茶褐色で細かい。薩摩焼か。	5区 9-L5 SD5011 埋土
203	本土産近代磁器	碗	A類	13.4	5.3	5.6	型作り成形。外面に水仙文、松文。見込み五弁文。内面に目痕。素地は白色で緻密。砥部焼。	4区 9-K5 Ⅱ層
204	本土産近代磁器	皿	A類	15.7	8.0	5.35	外面に草花文。内面に草花文、鳥文。見込みに五弁文。底面部に「スマ」の墨書。肥前系。	4区 9-K5 Ⅰ層
205	本土産近代磁器	小碗	B類	8.2	3.2	4.7	ゴム判で外面に松竹梅文。素地は緻密で白色。	6区 9-N2 SD6007 埋土
206	本土産近代磁器	小杯	B類	5.7	2.3	2.7	底部は桜型に成形。口縁部2カ所に緑色と紫色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	4区 9-K5 Ⅱ層
207	本土産近代磁器	碗	C類	10.6	3.9	4.85	畳付は釉剥ぎ。外面に竹文。素地は緻密で白色。	5区 9-L5 SD5011 埋土
208	本土産近代磁器	小碗	C類	7.6	3.2	5.0	外面に葡萄文、一部盛絵で描く。素地は緻密で白色。瀬戸・美濃系。	2区 Ⅰ層
209	本土産近代磁器	小碗	D類	8.2	3.5	3.9	畳付は釉剥ぎ。飛び鉋。素地は緻密で白色。クロム青磁。	5区 9-L5 SD5011 埋土
210	本土産近代磁器	小碗	D類	8.4	3.3	4.6	畳付は釉剥ぎ。ゴム判で亀甲文、鶴文。素地は緻密で白色。クロム青磁。	6区 9-N2 SD6007 埋土
211	本土産近代磁器	小杯	E類	8.1	―	―	軍杯。内面に色絵で日章旗と旭日旗を描く。素地は緻密で白色。瀬戸・美濃系	4区 9-K5 Ⅱ層
212	本土産近代磁器	皿	E類	16.0	9.8	2.2	角皿。染料の残存は不良。内面に赤の花文。素地は緻密で白色。	4区 9-M9 Ⅰ層
213	沖縄産施釉陶器	碗	A類	12.8	6.9	6.1	内外面ともに口縁部～腰部に灰釉。胎土浅黄褐色。風化。	5区 9-L5 SD5011 埋土
214	沖縄産施釉陶器	小碗	C類	7.2	―	―	白化粧後、内面透明釉。外面は口縁部褐釉、胴部には釉を厚く施釉。胎土浅黄色。	6区 9-N2 SD6007 埋土
215	沖縄産施釉陶器	小碗	B-2類	8.4	3.4	3.9	白化粧後、透明釉。胎土灰白色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	1区 9-I8 SD1004 埋土

第 27 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 5

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
216	沖縄産施釉陶器	小碗	B-2類	8.1	3.6	4.1	白化粧後、透明釉。胎土灰黄褐色。内底蛇の目状に釉剝ぎ。	4区 9-K5 Ⅱ層
217	沖縄産施釉陶器	碗	C-1類	13.6	6.6	6.5	白化粧後、透明釉。外面に陽刻文あるが不鮮明。胎土浅黄色。	2区 Ⅰ層
218	沖縄産施釉陶器	急須	―	5.0	6.8	7.3	白化粧後、透明釉。口縁部露胎。胎土浅黄色。注口付け根を緑釉で色付け。	4区 9-K5 Ⅱ層
219	沖縄産施釉陶器	火入	―	―	9.0	―	白化粧後、外面のみ施釉。腰部釉剥ぎ。胎土黄褐色。	5区 9-L4 SD5011 埋土
220	沖縄産施釉陶器	水鉢	―	―	―	―	口縁部のみ黒釉。外面胴部を沈線により格子状に施文。胎土浅黄色。	4区 9-M6 SD4006 埋土
221	沖縄産施釉陶器	蓋	―	13.8	8.8	―	外面：黒釉で蛇の目状に釉剥ぎ。内面：露胎。胎土灰黄色。壷の蓋。	2区 Ⅰ層
222	沖縄産施釉陶器	蓋	―	7.4	5.3	3.4	白化粧後、外面のみ透明釉。胎土浅黄。外面呉須・施釉で施文。円孔径0.8cm。急須の蓋。	5区 9-L4 SD5011 埋土
223	沖縄産施釉陶器	瓶子	―	―	2.4	―	外面のみ白化粧後、透明釉。内面露胎。胎土灰色。	6区 9-N2 SD6007 埋土
224	沖縄産無釉陶器	壷	A類	15.3	―	―	外面：暗褐色、内面：赤褐色。口縁部は折り曲げて、玉縁状に成形。耳欠。	5区 9-L5 SD5011 埋土
225	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	31.6	―	―	外面：黄褐色、一部明赤褐色。内面：暗赤褐色。鍔上面凹線1条。	5区 Ⅰ層
226	沖縄産無釉陶器	瓶	―	―	10.6	―	外面：灰黄色、内面：暗赤褐色。内外面に粗めの白粒や貝片混じる。	4区 9-K5 Ⅱ層
227	厨子甕	身	ⅢbかⅢc類	27.4	19.4	53.7	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。肩部および胴部一部欠。外面刷毛目残るが丁寧な施釉。	4区 9-L7･9-M7 Ⅱ層
228	厨子甕	身	Ⅲd類	17.6	10.0	26.8	外面：暗褐色、内面：明橙色。外面雑な波状文。底部方形状の孔。幼児用か。	4区 9-M7 Ⅱ層
229	厨子甕	身	Ⅲd類	18.0	(10.3)	(26.5)	内外面ともに灰黄褐色。マンガン釉薄く雑に施釉。外面沈線による施文。幼児用か。	5区 9-J5 Ⅰ層
230	陶質土器	火炉	―	―	―	―	胎土橙色で、雲母と赤色粒を含む。	6区 9-N2 SD6007 埋土
231	陶質土器	火炉	―	―	―	―	胎土橙色で、雲母と赤色粒を含む。口縁部に煤付着。	5区 9−K5 Ⅰ層
232	円盤状製品	―	―	6.0	5.9	2.1	龍泉窯系青磁Ⅳ類の碗底部を利用。両面を剥離加工。重量73.8g。	1区 9-H8 Ⅲ層
233	円盤状製品	―	―	2.7	2.6	0.5	本土産近代磁器の碗の胴部を利用。両面を剥離加工。重量3.5g。	2区 表採
234	円盤状製品	―	―	3.45	3.3	0.8	沖縄産無釉陶器の胴部を利用。両面を剥離加工。重量11.8g。	1区 9-H8　Ⅲ層
235	円盤状製品	―	―	4.3	4.25	1.5	沖縄産無釉陶器の胴部を利用。両面を剥離加工。重量29g。	1区 9-I8 SD1004 埋土
236	円盤状製品	―	―	4.8	4.7	0.95	沖縄産無釉陶器の擂鉢胴部を利用。両面を剥離加工。重量28.1g。	5区 9-L4 SD5011 埋土
237	円盤状製品	―	―	7.5	7.4	1.7	明朝系瓦の筒部を利用。赤色。両面を剥離加工。重量115g。	5区 9-L5 SD5011 埋土
238	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	4.6	5.0	17.2	バヤリース瓶。胴部にはバヤリースのロゴのエンボス。肩部と胴部下部に縦の凸線の装飾。広口で胴中央はくびれる。色調は透明。	5区 表採
239	ガラス製品	瓶	薬瓶	1.5	3.8	10.2	家庭用の殺菌・防腐剤。底部に「BOTTLE MADE Zonite 9 IN U.S.A」のエンボス。樹脂製の蓋が残存し径2.1㎝、「Zonite」のロゴが入る。色調は茶色。器高は蓋を除く。	2区 Ⅰ層
240	ガラス製品	瓶	薬瓶	1.5	3.0	8.35	胴部に「℥(オンス) i　Duraglas」、底部に「OWENS　7」「○と◇を組み合わせたマーク」「4」のエンボス。口は極細口で樹脂製の蓋が残存し径2.1㎝。色調は透明。器高は蓋を除く。	2区 Ⅰ層
241	ガラス製品	瓶	染料瓶	1.6	2.6	7.1	るり羽瓶。白髪染め用の染料。胴部に「るり羽」目盛りの下に「定量」「ヤマトの屋号？マーク」、底部に「L」のエンボス。口部に栓固定用の窪みがある。色調は緑色。	5区 9-L4 Ⅰ層
242	ガラス製品	瓶	薬瓶	4.0	1.6	7.35	目薬瓶。両口式点眼瓶で点眼部分に樹脂製の蓋が残存し径0.9㎝。胴部に「組合目薬」「ZENKOREN」のエンボス。全体に縦ラインが入る。色調は茶色。器高は蓋を除く。	6区 9-N2 SD6007 埋土
243	ガラス製品	瓶	薬瓶	1.1	1.4	2.9	胴が垂直な円筒形の瓶。色調は茶色。	4区 9-M6 Ⅱ層
244	ガラス製品	栓	ガラス栓	4.15	1.9	―	薬瓶用の共栓。色調は青色。接触部分径1.8㎝。	6区 9-N2 SD6007埋土
245	ガラス製品	瓶	化粧瓶	5.6	5.6	3.8	メヌマポマード瓶。底部に右横書きで「メヌマ」エンボス。円筒形でラベル貼る区画あり。色調白色。	5区 9-L5 Ⅰ層
246	ガラス製品	瓶	化粧瓶	5.0	3.6	4.9	ポマード瓶。底に柳屋の商標登録マークのエンボス。色調は白色。	5区 表採
247	ガラス製品	瓶	化粧瓶	3.6	3.4	5.9	バニシングクリーム瓶。底にウテナの商標登録マークエンボス。肩部が張る。色調白色。	5区 表採
248	ガラス製品	瓶	化粧瓶	―	―	4.4	バニシングクリーム瓶。底にウテナの商標登録マークエンボス。色調は白色。	4区 9-K5 Ⅱ層
249	石器	石鏃	―	2.9	(1.9)	0.5	チャート製。剥離調整により成形。一部欠。重量1.8g。	5区 9-J4 Ⅲ層
250	石器	石鏃	―	2.5	1.5	0.5	チャート製。剥離調整によって成形。重量1.4g。	1区 9-H8 Ⅳ-3層
251	石器	石鏃	―	1.4	1.2	0.2	チャート製。剥離調整残る。石鏃未製品。重量0.4g。	4区 9-M7 SD4007 埋土
252	石器	ユーズドフレイク	―	1.5	1.3	0.4	チャート製。一部側縁に使用による刃こぼれ。重量0.7g。	1区 Ⅳ-3層
253	石器	石斧	―	6.5	4.8	2.9	輝緑岩製。石斧の基部か。両面丁寧な研磨。側面は敲打成形後、粗めの研磨。重量157.2g。	4区 9-L7 Ⅲ層
254	石器	石斧	―	5.0	4.8	2.7	輝緑岩製。全体丁寧な研磨。側面紐ずれ。刃こぼれあり。基部欠。重量99g。	5区 9-K3 Ⅳ-2層
255	石器	石斧	―	7.6	6.7	1.8	緑色片岩製。両面剥離による欠損。刃部のみ研磨。刃こぼれあり。重量95.2g。	4区 9-L7 Ⅲ層
256	石器	石斧	―	4.9	4.8	1.9	輝緑岩製。打割により成形。重量64g。	5区 9-K3 Ⅳ層
257	石器	石斧	―	5.4	5.4	2.6	輝緑岩製。全面研磨。刃部わずかに刃こぼれ。重量71.5g。	1区 9-H8 Ⅳ-3層
258	石器	石斧	―	6.4	5.5	1.6	緑色岩製。基部粗めの研磨。刃こぼれあり。重量69g。	4区 9-M6 SX4001 2層

第 28 表　普天間石川原第一遺跡遺物観察一覧 6

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
259	石器	刃器	―	7.5	5.2	1.8	緑色片岩製。丁寧な研磨により、刃部を2箇所成形。刃こぼれあり。重量97.3g。	1区 IV-3層
260	石器	刃器	―	6.1	4.5	1.0	緑色千枚岩製。刃部丁寧な研磨。表面は敲打や粗めの研磨で成形。重量29.8g。	1区 III層
261	石器	敲磨石類	―	9.4	5.5	3.4	閃緑岩製。両面丁寧な研磨。周縁は敲打痕残る。重量304.8g。	2区 9-J6 SD2001 埋土
262	石器	刃器	―	6.9	3.5	1.1	輝緑岩製。刃部丁寧な研磨。刃こぼれあり。基部の一部研磨痕あり。重量33.4g。	1区 IV-3層
263	石器	敲磨石類	―	8.8	5.1	3.1	輝緑岩製。丁寧な研磨。周縁や一部表面に細かな敲打痕。刃部破損。石斧を転用。重量263.9g。	5区 表採
264	石器	敲磨石類	―	9.2	7.3	4.6	輝緑岩製。周縁細かな敲打痕。一部磨り面。重量455.2g。	2区 9-J6 SD2001 埋土
265	石器	敲磨石類	―	8.5	5.7	2.0	中粒砂岩製。裏面欠。一部研磨。表面中央には敲打痕。重量109.4g。	5区 9-J4 IV-3層
266	石器	敲磨石類	―	11.9	6.0	3.6	輝緑岩製。ほぼ欠損。一部敲打や研磨面残る。重量355.5g。	1区 9-I8 IV-3層
267	石器	敲磨石類	―	6.8	6.6	2.9	輝緑岩製。表面に敲打や研磨面あり。重量228g。	4区 9-M6 SX4001 2層
268	石器	砥石	―	6.9	4.1	1.6	中粒砂岩製。表面一部側面磨り面。重量63g。	4区 9-L7 III層
269	石器	石皿･台石類	―	9.3	7.2	6.0	輝緑岩製。ほぼ欠。一部に研磨面残る。重量504.4g。	1区 9-I8 II層
270	石器	石皿･台石類	―	12.1	9.2	4.7	砂岩製。表面中央は磨りによる凹み。一部に敲打痕。重量721.1g。	2区 9-J6 SS2001 集石内
271	石器	石皿･台石類	―	46.8	24.4	10.5	ニービ製。表面2箇所に磨り面。重量1130g。	4区 9-M6 SX4001 2層
272	石製品	有孔石製品	―	5.1	3.6	0.6	緑色千枚岩製。全体丁寧な研磨。表面に線状痕残る。中央付近に円孔2。重量13.3g。	6区 9-O2 IV-4層
273	石器	砥石	―	5.9	2.1	1.8	中粒砂岩製。上部欠。断面方形状。側面研磨による縦位の線状痕。提砥。重量44.3g。	5区 9-K3 IV層
274	石製品	硯	―	6.1	―	1.8	凝灰岩製。全体摩耗するが、表裏面は丁寧な研磨。重量43.6g。	4区 9-K6 Ⅰ層
275	石造物	不明	―	41.0	28.0	18.0	琉球石灰岩製。連続的な打割や敲打により中央凹み。重量2050g。	1区 III層
276	骨製品	不明	―	4.9	1.2	0.6	全体丁寧な研磨。端部幅広で3条の擦り切り痕。用途不明。重量4g。	3区 9-O7 II層
277	貝製品	ボタン	―	1.5	1.5	0.2	表裏面真珠層。孔部分に抉り加工。円孔2。278と同じ製品に使用か。	5区 9-J4 II層
278	貝製品	ボタン	―	1.5	1.5	0.2	表裏面真珠層。孔部分に抉り加工。円孔2。277と同じ製品に使用か。	5区 9-J4 II層
279	鍛冶関連	羽口	―	―	―	―	破損品。胎土明橙色で細かな白粒混じり。一部鉄滓付着。	6区 9-O2 III層
280	銭貨	乾隆通寶	―	2.5	2.5	0.1	初鋳造1736年。重量3.6g。	5区 表採
281	銭貨	鉄銭	―	―	―	―	半欠。全体錆膨れ。重量2.6g。	6区 9-O2 SD6007 埋土
282	銭貨	一銭	―	2.2	2.2	0.1	一銭銅貨。大正十三年。重量3.6g。	5区 9-J4 Ⅰ層
283	青銅製品	留め金具	―	―	0.8	―	頭部は角を面取り、中央に孔を有する。下部は断面長方形状。下部の一部に鍍金残る。頭厚0.6㎝。下部厚0.1㎝。重量2.7g。	5区 9-M5 III層
284	青銅製品	簪	―	―	0.6	―	カブは耳かき状。カブ厚0.1㎝。竿部厚0.3㎝。重量3.5g。	5区 9-J5 Ⅰ層
285	青銅製品	簪	―	―	1.2	―	カブは匙状、竿部断面は六角形状をなす。完形品。カブ厚0.1㎝、竿部厚0.4㎝。重量11g。	7区 16-C3 Ⅰ層
286	青銅製品	煙管	―	20.2	1.0	0.6	延べ煙管。胴背面に「瀬高」の文字あり。重量25.3g。	6区 9-N2 SD6007 埋土
287	その他金属製品	スプーン	―	18.1	3.8	0.2	ステンレス製のスプーン。持ち手に「U.S.N.」の文字あり。重量42.3g。	3区 Ⅰ層
288	プラスチック製品	歯ブラシ	―	15.6	1.1	5.6	3条31穴の植毛孔と柄下部に通し孔。柄に「竹芯久美愛消毒歯刷子　①」銘。クリーム色。	4区 9-M7 Ⅰ層
(289)	その他	軍靴	―	28	7.0	―	米国製のゴムと革製の右足用軍靴。腐食し靴底のみ残存。底部に「EJ」のロゴ陽刻。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(290)	青銅製品	バックル	―	3.8	3.3	0.3	バックル。一部青錆。革の一部が残る。291と同一。重量18.6g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(291)	青銅製品	バックル	―	3.9	3.5	0.3	バックル。全体青錆。革に「FL」の文字あり。290と同一。重量23.9g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(292)	青銅製品	無線機	―	24.1	12.2	0.1	大小の円孔を有する板状製品。一部ネジやスイッチ残る。「INTERPHONE RADIO」の文字あり。無線機の一部か。重量256.2g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(293)	青銅製品	不明	―	2.9	0.7	―	一部プラスチック製で無線機のスイッチか？重量2.2g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(294)	青銅製品	不明	―	7.6	―	―	完形品。棒状で両端に円孔。中央付近には凹線１条。重量11.2g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(295)	鉄製品	不明	―	16.0	15.1	1.6	環状製品。全体錆膨れするが、一部固定用のネジ？がみられる。重量825.1g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(296)	鉄製品	不明	―	7.6	―	―	錆膨れにより判然としないが一端は輪状をなすと考えられる。もう一端は尖る。重量20.4g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(297)	鉄製品	不明	―	10.9	―	―	直径約0.5cmの針金を片方は輪状、もう片方は螺旋状に巻く。全体錆膨れ。重量56.1g。	4区 9-M6 SD4006 埋土
(298)	鉄製品	缶	―	―	―	―	全体錆により劣化。円筒形の缶か。内部に完形のハナビラダカラ14点、タカラガイ科１点あり。	7区 16-C3 SD7003 埋土
(299)	サンゴ	―	―	―	―	―	珊瑚礫。重量7.36g。	5区 9-J4 SL5001 埋土

※法量の単位は㎝、（）内の数値は復元値とする。器物以外は長軸・短軸・厚さとする。

※(289)～(299)は巻末図版に掲載。

第 4 節　自然遺物

(1)　脊椎動物遺体

今回の発掘調査で得られた脊椎動物遺体については、当センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。

普天間石川原第一遺跡からは、魚類、哺乳類が確認された(第 29 表)。同定資料に関しては、同定標本数(NISP)で示しており、最小個体数は算出していない。

魚類（第 30 表）　５区のⅣ層からハリセンボン歯骨が１点、６区のⅠ層からサメ類の歯が１点出土している。

哺乳類（第 31 表）　ネコ、ウマ、ウシかウマのいずれかになるもの、イノシシかブタのいずれかになるもの、ヤギ、ウシが出土している。

２区

ウシ / ウマ　表採で骨幹部資料が出土。切断痕が見られる。

ウシ　Ⅲ層から遊離歯（上顎）、中手骨、脛骨が出土。表採で脛骨が得られており、切断痕が見られる。

３区　Ⅰ層からネコ大腿骨が１点出土し、骨端部は未癒合の状態。Ⅰ層からは他にも種不明上腕骨が１点出土している。

４区

ウマ　Ⅰ層から遊離歯（上顎）が出土。

ヤギ　Ⅰ層から脛骨が出土。

イノシシ / ブタ　SX4001 の５層から遊離歯（上顎）が出土。SX4001 は溝状遺構の底部で確認された遺構で、窪みに堆積したⅣ層とされているため、この遊離歯も自然に混入した可能性が高い。

第 29 表　脊椎動物遺体種類一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES
サメ類	Lamniformes
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ハリセンボン科	Diodontidae
鳥綱	AVES
哺乳綱	MAMMALIA
ウマ	Equus feres
ウシ／ウマ	Bos taurus ／ Equus feres
イノシシ／ブタ	Sus scrofa ／ S. s.domesticus
ヤギ	Capra hircus
ウシ	Bos taurus

Ⅱ層からは、肩甲骨や上腕骨が出土。上腕骨は螺旋状剥片が見られ、解体時のものと考えられる。

ウシ　Ⅰ層から遊離歯（上顎）、肩甲骨が出土。

５区

トリ　Ⅰ層から脛足根骨が出土。

ウマ　Ⅰ層から遊離歯（上顎）が出土。

ウシ / ウマ　SF5001 埋土から肋骨が出土しており、螺旋状剥片が見られる。SF5001 は道跡とされており、その造成時に混入した可能性が高い。

イノシシ / ブタ　SD5015 埋土から頭蓋骨（後頭骨）が出土。Ⅳ -4 層からは遊離歯（下顎）が出土。

ヤギ　Ⅰ層から遊離歯（下顎）、大腿骨が出土。大腿骨にはカットマーク及び螺旋状剥片が見られる。SD5011 埋土からは上腕骨が出土しており、螺旋状剥片が見られる。

ウシ　SD5015 Ⅰ層から下顎骨（下顎体）が出土。SD5011 埋土１から脛骨が出土。Ⅰ層から肩甲骨と上腕骨が出土。Ⅱ層から肩甲骨が出土。

６区

イノシシ / ブタ　SD6007 埋土から上腕骨が出土。

ヤギ　SD6007 埋土から遊離歯（下顎）が出土。

ウシ　SD6007 埋土から下顎骨（下顎体破片）と踵骨が出土している。

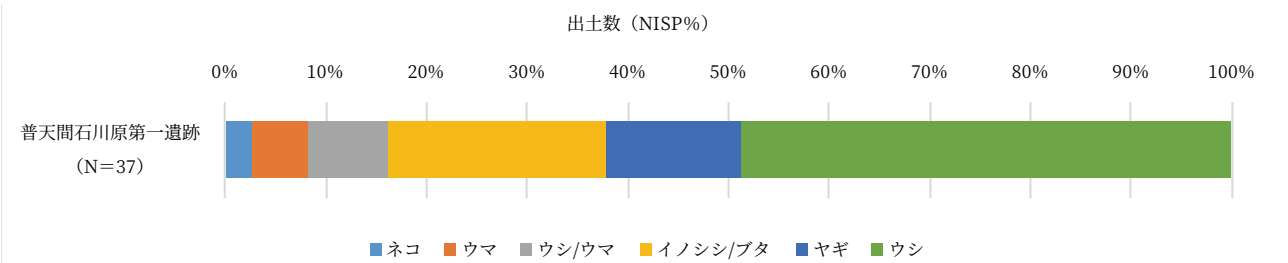
まとめ　普天間石川原第一遺跡では、魚類遺体が２点確認された。５区で出土したハリセンボン科の歯骨は食糧残滓の可能性が高い。６区から出土したサメ類の歯はⅠ層出土ということもあり、どのような経緯で出土したのか不明な状況である。

第 30 表　普天間石川原第一遺跡魚類集計表

出土区	層位	分類	部分 ＼ 左 / 右	左＋右	不明	計
５区	Ⅳ層	ハリセンボン科	歯骨	1		1
６区	Ⅰ層	サメ類	歯		1	1

第 31 表　哺乳類同定標本数（NISP）

種類 ＼ 地区	普天間石川原第一遺跡（N ＝ 113）
ネコ	1
ウマ	2
ウシ / ウマ	3
イノシシ / ブタ	8
ヤギ	5
ウシ	18
合計	37



第 83 図　哺乳類同定標本数（NISP%）

遺構に伴う哺乳類遺体は、５区の SD5011 及び SD5015 で少数確認された。溝として機能していた時期に一部混入、もしくは溝としての機能が終了した際の埋土に混入しているものと考えられる。

６区の道跡に伴う溝跡（SD6007）でも哺乳類遺体が出土している。上層にあたる層のⅠ層から１点のみの出土で少数ではあるが、道が利用されていた時期に廃棄された可能性がある。

第 32 表　普天間石川原第一遺跡哺乳類集計表

２区

層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
表採	ウシ / ウマ	部位不明	骨幹部	—	切断			2		2
Ⅲ層	ウシ	遊離歯（上顎）	dm^4	—	—	1				1
			M^1	—	—	1				1
			M^2	—	—	1				1
		中手骨	近位部 - 遠位部	—	—	1				1
		脛骨	骨幹部 - 遠位部	—	—		1			1
			遠位骨端のみ（破片）	—	—			1		1
表採			近位部 - 骨幹部	—	切断	1				1
SD2001 埋土	不明	部位不明	骨幹部	—	—			1		1
			破片	—	—				4	4
合計						5	1	4	4	14

３区

層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
Ⅰ層	ネコ	大腿骨	近位部 - 遠位部	未癒合 (遠位端)	—		1			1
	不明	上腕骨	遠位骨端のみ	—	—	1				1
合計						1	0	1	0	2

４区

層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
Ⅰ層	ウマ	遊離歯（上顎）	I^1	—	—	1				1
SX4001 5 層	イノシシ / ブタ	遊離歯（上顎）	M^1	—	—	1				1
Ⅱ層		肩甲骨	骨幹部 - 遠位端	—	—	1				1
		上腕骨	骨幹部 - 遠位部	—	螺旋状剝片	1	1			2
			遠位骨端のみ（破片）	—	—			1		1
Ⅰ層	ヤギ	脛骨	骨幹部	—	—		1			1
	ウシ	遊離歯（上顎）	M^1/M^2	—	—	1				1
		肩甲骨	骨幹部	—	—		1			1
Ⅱ層	不明	部位不明	破片	—	—				1	1
SD4006 不明									1	1
合計						5	3	1	2	11

５区

層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
Ⅰ層	トリ	脛足根骨	遠位部 - 遠位端	—	—	1				1
	ウマ	遊離歯（上顎）	P^2	—	—		1			1
SF5001 埋土	ウシ / ウマ	肋骨	近位部	—	螺旋状剝片			1		1
SD5015 埋土	イノシシ / ブタ	頭蓋骨	後頭骨	—	—		1			1
Ⅳ -4 層		遊離歯（下顎）	C↓	—	—	1				1
Ⅰ層	ヤギ	遊離歯（下顎）	M_1/M_2	—	—	1				1
SD5011 埋土		上腕骨	骨幹部	—	螺旋状剝片		1			1
Ⅰ層		大腿骨	骨幹部 - 遠位部	—	カットマーク, 螺旋状剝片		1			1
SD5015 Ⅰ層	ウシ	下顎骨	下顎体 $dm_3dm_4M_1M_2M_3$	—	—	1				1
			破片	—	—			2		2
Ⅰ層		肩甲骨	骨幹部	—	—	1				1
Ⅱ層			肩甲棘	—	—		1			1
Ⅰ層		上腕骨	遠位端（1/2 残存）	—	—	1				1
SD5011 埋土 1		脛骨	破片	—	—			1		1
		部位不明	破片	—	カットマーク				2	2
					—				3	3
Ⅱ層									1	1
Ⅲ層									3	3
SS5002 集石内									2	2
SD5012 埋土									1	1
SD5015 埋土									2	2
合計						6	5	4	14	29

６区

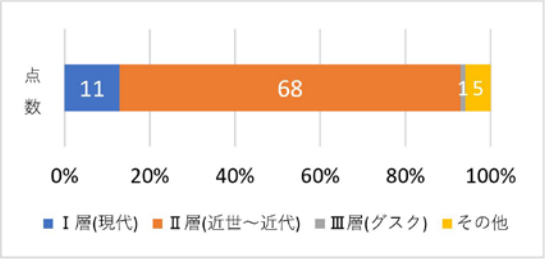
層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
SD6007 埋土	イノシシ / ブタ	上腕骨	遠位部	—	—		1			1
	ヤギ	遊離歯（下顎）	破片	—	—			1		1
	ウシ	下顎骨	下顎体（破片）	—	—		1			1
		踵骨	近位端 - 遠位部	—	—		1			1
SD6011 埋土	不明	部位不明	破片	—	—				1	1
合計						0	3	2	1	6

（2） 貝類遺体

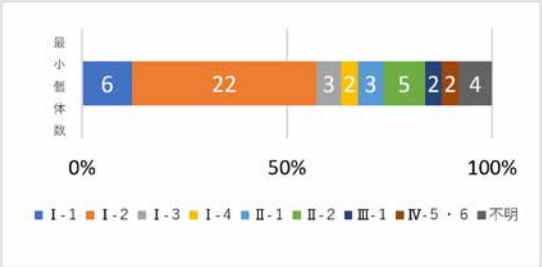
普天間石川原第一遺跡の報告対象サンプルは、平成 29 年度調査の 1 ～ 4 区、平成 30 年度調査の 5 区、平成 31 年度調査の 5 ～ 7 区よりピックアップ法によって得られたものである。18 科 31 種の総数 85 点出土しており、層序別ではⅠ層（現代）11 点、Ⅱ層（近世～近代）68 点、Ⅲ層（グスク時代）1 点、その他（不明や表採含む）5 点となっている（第 84 図）。半数以上がⅡ層（近世～近代）からの出土であり、貝塚時代の層序からは得られていない。

遺構内出土の自然貝は 46 点で全体の半数を占めている（第 33 表）。溝状遺構に伴うものが多くみられ、特に 5 区・6 区にまたがり、同じラインで検出された同時期の SD6007（18 点）、SD5011（11 点）に集中する。両遺構ともサンゴ礁域（Ⅰ類）に生息する貝種が多く、比較的肉量のあるサラサバテイラやクモガイを含んでいる。

遺跡全体の最小個体数は 49 個体で、生息域別ではサンゴ礁域（Ⅰ類）の貝が多く、なかでもⅠ－2 類が最多となっている（第 85 図）。また、全体の特徴として食用となる貝種が多くみられた。しかし、どの貝種も点数にほとんど差がみられないことから、本遺跡の近世～近代頃は、食用の貝種の中でも特定の貝種に絞ることなく、サンゴ礁域を中心に採集活動を行っていた可能性がある。



第 84 図　層序別貝類出土割合



第 85 図　生息域別貝類出土割合 (MINI)

第 33 表　遺構別貝類出土数

貝種	生息域	SD											SF	合計
		1004	5011	5012	5015	6001	6006	6007	6009	7001	7002	2001	5001	
		Ⅱ										Ⅲ	Ⅱ	
チョウセンサザェ	Ⅰ-3-a				1									1
チョウセンサザェの蓋	Ⅰ-3-a				1									1
ギンタカハマ	Ⅰ-4-a							2						2
サラサバテイラ	Ⅰ-4-a		1					1						2
オニノツノガイ	Ⅰ-2-c			1				2			1			4
トウガタカニモリ(幼貝)	Ⅰ-2-c		3											3
マガキガイ	Ⅰ-2-c		1											1
クモガイ	Ⅰ-2-c		1	1				5						7
タカラガイ科	-								1					1
ノシガイ	Ⅰ-1-a								1					1
ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a							1						1
カワニナ	Ⅳ-5・6		1											1
リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c		2											2
エガイ	Ⅰ-1-a							1						1
メンガイ類	Ⅰ-2-a							4						4
リュウキュウザルガイ	Ⅱ-2-c		1											1
シャコガイ科	-	1		1				1					1	4
シラナミ類	Ⅰ-2-a										1			1
ヒレジャコ	Ⅰ-2-c											1		1
イソハマグリ	Ⅰ-1-c									1				1
マルスダレガイ科	-		1											1
ヌノメガイ	Ⅱ-1-c							1						1
ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c					1								1
不明	-				1		1				1			3
合計		1	11	3	3	1	1	18	2	1	3	1	1	48

第 34 表　貝類の生息場所類型

大区分	底質等
Ⅰ　外洋 - サンゴ礁域	a　岩礁
Ⅱ　内湾 - 転石域	b　転石
Ⅲ　河口干潟 - マングローブ域	c　砂/泥
Ⅳ　淡水域	d　河川礫底
Ⅴ　陸域	f　植物上
Ⅵ　その他	

小区分	
0　潮間帯上部	5　止水
Ⅰ - 0ノッチ	6　流水
Ⅱ - 0マングローブ	7　林内
1　潮間帯中・下部	8　林内・林縁部
2　亜潮間帯上縁部	9　林縁部
Ⅰ - 2イノー内	10　海浜部
3　干瀬	11　打ち上げ物
4　礁斜面	12　化石

第５節　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、平成 29 年度～令和 2 年度のキャンプ瑞慶覧内の東普天間住宅地発掘調査において採取された土壌試料を対象に、平成 30 年度、令和 2 年度、令和 3 年度の 3 か年にわたる分析調査を実施した。

分析調査は、基本層序や遺構の年代観、植物利用、周辺植生などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、微細物分析、樹種同定を行った。

1. 試料

平成 30 年度分析調査分の試料は、5 区調査区ベルト①Ⅲ‐4 層、Ⅲ‐6 層、5 区調査区ベルト③Ⅳ‐1 層、Ⅳ‐2 層、Ⅳ‐3 層、Ⅳ‐4 層、5 区 9-K4SP5049、5 区 SS5004 から採取されたものを使用し放射性炭素年代測定 9 点を実施した。

令和 2 年度分析調査分の試料は、H29 年度調査 2 区 9-J6 グリッド、SD2001 ベルト 2 の 1 層より 5 点 (No.1,2,4 ～ 6)、2 層より 3 点 (No.3,7,8)、3 層より 6 点 (No.9 ～ 14)、4 層より 2 点 (No.15,16)、5 層より 2 点 (No.17,18) の、計 18 点 213.5kg である。

令和 3 年度分析調査分の試料は、平成 29 年度調査の 1 区植栽痕・列状ピット群 (SP)、焼土遺構 (SL)、2 区の東西アゼ、4 区の溝 (SD)、不明遺構 (SX)、平成 30 年度調査の 5 区植栽痕・列状ピット群、焼土遺構、集石遺構 (SS)、平成 31 年度調査の 6 区遺物集中部、7 区植栽痕・ピット、建物跡 (SB) などから採取された土壌、計 46 点が分析に供されている。

これらの土壌試料および土壌試料から抽出された炭化材を対象に、放射性炭素年代測定 42 点、微細物分析 39 点、樹種同定 24 点を実施した。分析試料の詳細および分析項目の一覧を第 35 表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理：AAA)。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

また、ごく微量 (数 mg を下回る) な試料は、年代測定に必要なグラファイト (1mg) が回収できない可能性があるため、AAA 処理を行わず、塩酸処理で留める。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度 (^{13}C/^{12}C)、^{14}C 濃度 (^{14}C/^{12}C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度 (^{13}C/^{12}C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20(Reimer et al.,2020) である。

(2) 微細物分析

試料を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料 (炭化物主体) と水に沈んだ試料 (砂礫主体) を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体の他、4mm 以上の炭化材、土器片などの遺物をピンセットで抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本や中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) 等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材と土器片は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体、植物片は重量を一覧表に併記する。

分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れて保管する。他抽出物と残渣も容器に入れて保管する。

第 35 表　分析試料および分析項目一覧

№	調査年度	地点	グリッド名	遺構名	層位	年代測定	微細物分析	樹種同定	備考
平成30年度分析調査									
1	H30	5区			III-4	1			ベルト1
2	H30	5区			III-6	1			ベルト1
3	H30	5区			IV-1	1			ベルト3
4	H30	5区			IV-2	1			ベルト3
5	H30	5区			IV-3	1			ベルト3
6	H30	5区			IV-4	1			ベルト3
7	H30	5区	9-K4	SP5049		1			
8	H30	5区		SS5004	IV-2	1			
9	H30	5区		SS5004	IV-2	1			
令和2年度分析調査									
1	H29	2区	9-J6	SD2001	1層		1		
2	H29	2区	9-J6	SD2001	1層		1		
3	H29	2区	9-J6	SD2001	2層		1		
4	H29	2区	9-J6	SD2001	1層		1		ベルト2
5	H29	2区	9-J6	SD2001	1層		1		ベルト2
6	H29	2区	9-J6	SD2001	1層		1		ベルト2
7	H29	2区	9-J6	SD2001	2層	1	1		ベルト2
8	H29	2区	9-J6	SD2001	2層		1		ベルト2
9	H29	2区	9-J6	SD2001	3層	1	1		ベルト2
10	H29	2区	9-J6	SD2001	3層		1		ベルト2
11	H29	2区	9-J6	SD2001	3層		1		ベルト2
12	H29	2区	9-J6	SD2001	3層	1	1		ベルト2
13	H29	2区	9-J6	SD2001	3層		1		ベルト2
14	H29	2区	9-J6	SD2001	3層		1		ベルト2
15	H29	2区	9-J6	SD2001	4層		1		ベルト2
16	H29	2区	9-J6	SD2001	4層		1		ベルト2
17	H29	2区	9-J6	SD2001	5層		1		ベルト2
18	H29	2区	9-J6	SD2001	5層	1	1		ベルト2
19	H29	2区	9-I6	SS2002	3層（IV‐2）	1			
20	H29	2区	9-I7	SS2002	4層（IV‐2）	1			
21	H29	2区	9-I6	SS2002	5層（IV‐2）	1			
22	H29	2区	9-I7	SS2002	6層（IV‐2）	1			
23(1)	H29	2区	9-I7	SS2003	3層（IV‐2）	1			ベルト1
23(2)	H29					1			ベルト1
24	H29	2区	9-I7	SS2003	4層（IV‐2）	1			
令和3年度分析調査									
1	H29	1区	9-I8	SP1014	埋土	1	1	1	植栽痕、列状ピット群1
3	H29	1区	9-I8	SP1024	埋土	1	1	1	植栽痕、列状ピット群1
5	H29	1区	9-I8	SL1001	2層		1		
6	H29	1区	9-I8	SL1001	2層	1	1	1	
7	H29	2区		東西アゼ	III-1	1		1	
8	H29	2区		東西アゼ	III-2	1		1	
9	H29	2区		東西アゼ	III-3	1		1	
10	H29	2区		東西アゼ	IV-1	1		1	
11	H29	2区		東西アゼ	IV-2	1		1	
12	H29	2区		東西アゼ	IV-3	1		1	
13	H29	2区		東西アゼ	IV-4	1		1	
15	H29	4区	9-M6	SD4009	2層		1		
16	H29	4区	9-M6	SD4009	3層		1		
17	H29	4区	9-M6	SD4009	5層		1		
18	H29	4区	9-M6	SD4009	7層	1	1	1	
20	H29	4区	9-M6	SD4009	11層		1		
21	H29	4区	9-M6	SD4009	12層		1		
22	H29	4区	9-M6	SD4009	14層		1		
24	H29	4区	9-M6	SD4009	16層		1		
25	H29	4区	9-M6	SD4009	17層	1	1	1	
27	H29	4区	9-M6	SX4001	2層	1	1	1	フェンサ下層式底部内面土壌
28	H30	5区	9-K4	SP5046	埋土	1	1	1	植栽痕　列状ピット群2
29	H30	5区	9-K4	SP5047	埋土	1	1	1	植栽痕　列状ピット群2
30	H30	5区	9-J4	SL5001	5層		1	1	サンプル2　炭層
31	H30	5区	9-J4	SL5001	5層			1	サンプル3　炭層
32	H30	5区	9-L3	SL5003	2層	1	1	1	炭層
34	H30	5区	9-J5	SL5004	4層	1	1	1	炭層
38	H30	5区	9-J5	SL5005	4層	1	1	1	炭層
39	H30	5区	9-K4	SS5004	IV-2 層	1	1	1	
41	H31	6区	9-O2	遺物集中部2	IV-4層	1		1	フェンサ下層式出土
43	H31	7区	16-C3	SB7001-P1	1層	1		1	
45	H31	7区	16-B3	SB7001-P5	1層	1		1	
合計						42	39	24	

(3) 樹種同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、状態を観察する。年代測定のみ行う試料は、いずれも１～3mm 程度の破片が複数個入っており、炭化材同定が難しいだけでなく、年代測定用試料としても量が少ない。そこで、全ての試料をそのまま年代測定に用いる。炭化材同定と共通する試料の中にも、No.29 のように炭化材同定が難しく、量が少ない試料がみられる。これも炭化材同定を行わず、全ての試料を年代測定に用いる。他の炭化材同定と年代測定が共通する試料は、年代測定試料を優先させる。炭化材の周囲を削り落として、土などの不純物を取り除きながら双眼実体顕微鏡で観察し、ある程度まで種類を絞り込む。電子顕微鏡による詳細な観察には、削り落とした破片を用いる。剃刀を用いて木口（横断面）･柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割片を作成する。電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第 36 ～ 38 表、第 86 図に示す。

１区の試料についてみると、測定年代 (補正年代) は SP1014 埋土が 1,040 ± 20yrBP、SP1024 埋土が 860 ± 20yrBP、SL1001 の２層が 625 ± 20yrBP の値を示す。暦年較正年代は、測定誤差を２σとして計算させた結果、SP1014 が calAD 987 ～ 1,031、SP1024 が calAD 1,159 ～ 1,252、SL1001 が calAD 1,299 ～ 1,397 の値を示す。

２区の試料についてみると、測定年代は東西アゼのⅢ‐１が 1,540 ± 20yrBP、Ⅲ‐２が 585 ± 20yrBP、Ⅲ‐３が 810 ± 20yrBP、Ⅳ‐１が 1,265 ± 20yrBP、Ⅳ‐２が 1,220 ± 20yrBP、Ⅳ‐３が 2,875 ± 20yrBP、Ⅳ‐４が 3,090 ± 20yrBP、SD2001 の２層コムギが 660 ± 20BP、SD2001 の３層シイ属が 2920 ± 20BP、SD2001 の３層コムギが 530 ± 20BP、SD2001 の５層炭化材破片が 2165 ± 20BP、SS2002 の３層炭化材破片が 3950 ± 20BP、SS2002 の４層炭化材破片が 1130 ± 20BP、SS2002 の５層炭化材破片が 1255 ± 20BP、SS2002 の６層炭化材破片が 1420 ± 20BP、SS2003 の３層炭化材破片が 1125 ± 20BP、SS2003 の３層散孔材が 1095 ± 20BP、SS2003　４層炭化材破片が 1460 ± 20BP の値を示す。

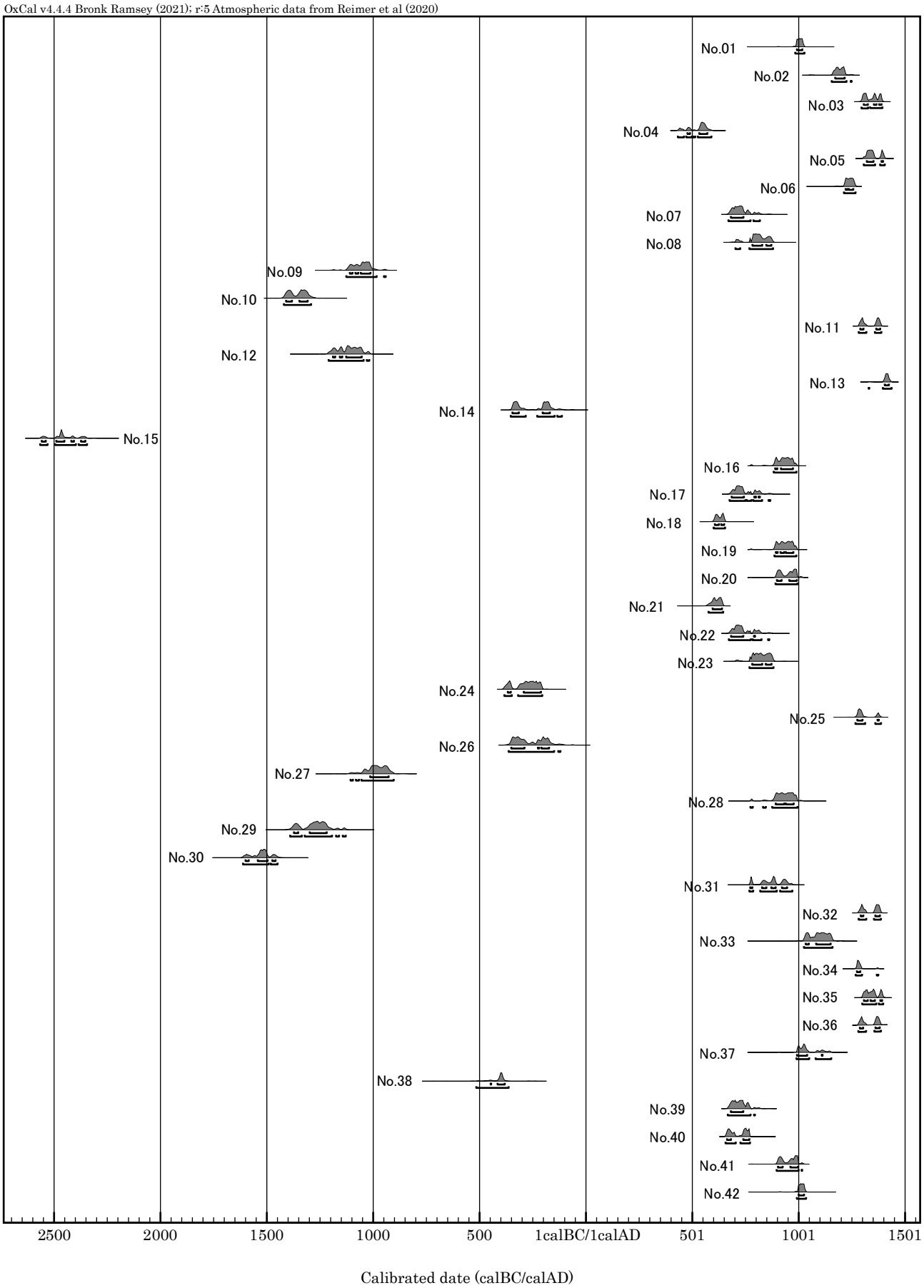
暦年較正年代は、東西アゼのⅢ‐１が calAD 436 ～ 593、Ⅲ‐２が calAD 1,309 ～ 1,408、Ⅲ‐３が calAD 1,216 ～ 1,271、Ⅳ‐１が calAD 673 ～ 821、Ⅳ‐２が calAD 706 ～ 883、Ⅳ‐３が 3,072 ～ 2,888 calBP　、Ⅳ‐４が 3,367 ～ 3,239 calBP、SD2001 の２層コムギが calAD1283 ～ 1389、SD2001 の３層シイ属が 3159 ～ 2968calBP、SD2001 の３層コムギが calAD1330 ～ 1437、SD2001 の５層炭化材破片が 2303 ～ 2063 calBP、SS2002 の３層炭化材破片が 4515 ～ 4295calBP、SS2002 の４層炭化材破片が calAD883 ～ 990、SS2002 の５層炭化材破片が calAD676 ～ 867、SS2002 の６層炭化材破片が calAD601 ～ 655、SS2003 の３層炭化材破片が calAD940 ～ 976、SS2003 の３層散孔材が calAD892 ～ 995、SS2003 の４層炭化材破片が calAD577 ～ 646 の値を示す。

４区の試料についてみると、測定年代は SD4009 の７層が 1,255 ± 20yrBP、17 層が 1,210 ± 20yrBP、SX4001 の２層が 2,230 ± 20yrBP の値を示す。暦年較正年代は、SD4009 の７層が calAD 675 ～ 865、17 層が calAD 772 ～ 885、SX4001 が 2,330 ～ 2,152 calBP の値を示す。

５区の試料についてみると、測定年代はⅢ‐４層が 700 ± 30yrBP、Ⅲ‐６層が 2180 ± 30yrBP、Ⅳ‐１層が 2830 ± 30yrBP、Ⅳ‐２層が 1120 ± 30yrBP、Ⅳ‐３層が 3020 ± 30yrBP、Ⅳ‐４層が 3260 ± 30yrBP、SP5046 埋土が 1,160 ± 20yrBP、SP5047 埋土が 655 ± 20yrBP、SP5049 が 960 ± 30yrBP、SL5003 の２層が 710 ± 20yrBP、SL5004 の４層が 605 ± 20yrBP、SL5005 の４層が 660 ± 20yrBP、SS5004 の３点が（1）1010 ± 30yrBP、（2）2340 ± 30yrBP、（3）1,270 ± 20yrBP の値を示す。暦年較正年代は、Ⅲ‐４層が calAD1267 ～ 1388、Ⅲ‐６層が 2313 ～ 2070calBP、Ⅳ‐１層が 3056 ～ 2853calBP、Ⅳ‐２層が calAD774 ～ 995、Ⅳ‐３層が 3340 ～ 3097calBP、Ⅳ‐４層が 3562 ～ 3399calBP、SP5046 が calAD 772 ～ 974、SP5047 が calAD 1,285 ～ 1,390、SP5049 が calAD1025 ～ 1160、SL5003 が calAD 1,271 ～ 1,378、SL5004 が calAD 1,302 ～ 1,401、SL5005 が calAD 1,283 ～ 1,390、SS5004 が（1）calAD990 ～ 1154、（2）2465 ～ 2313calBP、(3)calAD 670 ～ 798 の値を示す。

６区の試料についてみると、測定年代はⅣ‐４層が 1,310 ± 20yrBP の値を示す。暦年較正年代で calAD 660 ～ 775 の値を示す。

７区の試料についてみると、測定年代は SB7001 の P1 が 1,095 ± 20yrBP、P5 が 1,040 ± 20yrBP の値を示す。暦年較正年代は、SB7001 の P1 が calAD 892 ～ 1,012、P5 が calAD 987 ～ 1,030 の値を示す。


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)
No.01
No.02
No.03
No.04
No.05
No.06
No.07
No.08
No.09
No.10
No.11
No.12
No.13
No.14
No.15
No.16
No.17
No.18
No.19
No.20
No.21
No.22
No.23
No.24
No.25
No.26
No.27
No.28
No.29
No.30
No.31
No.32
No.33
No.34
No.35
No.36
No.37
No.38
No.39
No.40
No.41
No.42
2500
2000
1500
1000
500
1calBC/1calAD
501
1001
1501
Calibrated date (calBC/calAD)

第 86 図　暦年較正結果

第 36 表　放射性炭素年代測定結果 (1)

No.	試料名	性状	分析方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
							年代値		確率		
01	1区 9-I8	炭化材	AaA	1040±20	-28.72	σ	cal AD 995 - cal AD 1021	955 - 929 calBP	68.3	YU-	pal-
	SP1014 埋土	破片			±0.35	2σ	cal AD 987 - cal AD 1031	963 - 919 calBP	95.4	13951	13545
02	1区 9-I8	炭化材	AaA	860±20	-28.65	σ	cal AD 1175 - cal AD 1220	775 - 730 calBP	68.3	YU-	pal-
	SP1024 埋土	破片			±0.28	2σ	cal AD 1159 - cal AD 1228	791 - 722 calBP	94.8	13952	13546
							cal AD 1248 - cal AD 1252	702 - 698 calBP	0.6		
03	1区 9-I8	炭化材	AAA	625±20	-26.92	σ	cal AD 1303 - cal AD 1324	647 - 626 calBP	32.6	YU-	pal-
	SL1001 2層				±0.20		cal AD 1354 - cal AD 1367	596 - 583 calBP	18.4	13953	13547
							cal AD 1381 - cal AD 1393	569 - 557 calBP	17.3		
						2σ	cal AD 1299 - cal AD 1330	651 - 620 calBP	38.6		
							cal AD 1335 - cal AD 1397	615 - 553 calBP	56.9		
04	2区	炭化材	AAA	1540±20	-25.56	σ	cal AD 481 - cal AD 493	1469 - 1457 calBP	9.0	YU-	pal-
	ベルト1 III-1層	破片			±0.25		cal AD 536 - cal AD 574	1414 - 1376 calBP	59.3	13954	13548
						2σ	cal AD 436 - cal AD 465	1514 - 1485 calBP	11.6		
							cal AD 475 - cal AD 501	1475 - 1449 calBP	14.2		
							cal AD 507 - cal AD 517	1443 - 1433 calBP	1.8		
							cal AD 529 - cal AD 593	1421 - 1357 calBP	67.9		
05	2区	炭化材	AAA	585±20	-28.09	σ	cal AD 1324 - cal AD 1355	626 - 595 calBP	56.2	YU-	pal-
	ベルト1 III-2層	破片			±0.23		cal AD 1393 - cal AD 1400	557 - 550 calBP	12.1	13955	13549
						2σ	cal AD 1309 - cal AD 1363	641 - 587 calBP	71.5		
							cal AD 1386 - cal AD 1408	564 - 542 calBP	24.0		
06	2区	炭化材	AaA	810±20	-27.18	σ	cal AD 1224 - cal AD 1233	726 - 717 calBP	20.1	YU-	pal-
	ベルト1 III-3層	破片			±0.30		cal AD 1239 - cal AD 1260	711 - 690 calBP	48.1	13956	13550
						2σ	cal AD 1216 - cal AD 1271	734 - 679 calBP	95.4		
07	2区	炭化材	AAA	1265±20	-27.91	σ	cal AD 685 - cal AD 744	1265 - 1206 calBP	68.3	YU-	pal-
	ベルト1 IV-1層	破片			±0.29	2σ	cal AD 673 - cal AD 777	1277 - 1173 calBP	88.1	13957	13551
							cal AD 791 - cal AD 821	1159 - 1129 calBP	7.3		
08	2区	炭化材	AAA	1220±20	-28.59	σ	cal AD 786 - cal AD 832	1164 - 1118 calBP	49.7	YU-	pal-
	ベルト1 IV-2層	破片			±0.26		cal AD 851 - cal AD 875	1099 - 1075 calBP	18.6	13958	13552
						2σ	cal AD 706 - cal AD 729	1244 - 1221 calBP	7.5		
							cal AD 772 - cal AD 883	1178 - 1067 calBP	88.0		
09	2区	炭化材	AAA	2875±20	-30.79	σ	cal BC 1108 - cal BC 1095	3057 - 3044 calBP	9.7	YU-	pal-
	ベルト1 IV-3層	破片			±0.33		cal BC 1081 - cal BC 1068	3030 - 3017 calBP	10.1	13959	13553
							cal BC 1056 - cal BC 1011	3005 - 2960 calBP	48.4		
						2σ	cal BC 1124 - cal BC 982	3073 - 2931 calBP	94.5		
							cal BC 947 - cal BC 939	2896 - 2888 calBP	0.9		
10	2区	炭化材	AAA	3090±20	-31.69	σ	cal BC 1407 - cal BC 1380	3356 - 3329 calBP	27.6	YU-	pal-
	ベルト1 IV-4層	破片			±0.28		cal BC 1345 - cal BC 1306	3294 - 3255 calBP	40.7	13960	13554
						2σ	cal BC 1418 - cal BC 1290	3367 - 3239 calBP	95.4		
11	2区	炭化種実	AaA	660±20	-30.05	σ	cal AD 1290 - cal AD 1305	660 - 645 calBP	29.3	YU-	pal-
	SD2001　2層	コムギ			±0.38		cal AD 1365 - cal AD 1384	585 - 567 calBP	39.0	12950	13283
						2σ	cal AD 1283 - cal AD 1319	668 - 632 calBP	46.4		
							cal AD 1359 - cal AD 1389	592 - 561 calBP	49.0		
12	2区	炭化種実	AaA	2920±20	-26.90	σ	cal BC 1190 - cal BC 1179	3139 - 3128 calBP	6.9	YU-	pal-
	SD2001　3層	シイ属			±0.31		cal BC 1158 - cal BC 1146	3107 - 3095 calBP	8.2	12951	13284
							cal BC 1128 - cal BC 1055	3077 - 3004 calBP	53.2		
						2σ	cal BC 1210 - cal BC 1046	3159 - 2995 calBP	92.7		
							cal BC 1031 - cal BC 1019	2980 - 2968 calBP	2.8		
13	2区	炭化種実	AaA	530±20	-23.48	σ	cal AD 1405 - cal AD 1425	545 - 526 calBP	68.3	YU-	pal-
	SD2001　3層	コムギ			±0.32	2σ	cal AD 1330 - cal AD 1332	621 - 618 calBP	0.6	12952	13285
							cal AD 1396 - cal AD 1437	554 - 513 calBP	94.8		
14	2区	炭化材	AaA	2165±20	-31.67	σ	cal BC 346 - cal BC 316	2295 - 2265 calBP	31.8	YU-	pal-
	SD2001　5層	破片			±0.32		cal BC 204 - cal BC 170	2153 - 2119 calBP	36.5	13457	13416
						2σ	cal BC 354 - cal BC 284	2303 - 2233 calBP	43.9		
							cal BC 230 - cal BC 148	2179 - 2097 calBP	48.7		
							cal BC 135 - cal BC 114	2084 - 2063 calBP	2.8		
15	2区	炭化材	AaA	3950±20	-31.78	σ	cal BC 2559 - cal BC 2540	4508 - 4489 calBP	10.2	YU-	pal-
	SS2002　3層	破片			±0.37		cal BC 2490 - cal BC 2452	4439 - 4401 calBP	40.1	12716	13518
							cal BC 2420 - cal BC 2407	4369 - 4356 calBP	7.3		
							cal BC 2374 - cal BC 2354	4323 - 4303 calBP	10.7		
						2σ	cal BC 2566 - cal BC 2531	4515 - 4480 calBP	15.5		
							cal BC 2496 - cal BC 2398	4445 - 4347 calBP	63.3		
							cal BC 2385 - cal BC 2346	4334 - 4295 calBP	16.7		
16	2区	炭化材	AaA	1130±20	-30.41	σ	cal AD 890 - cal AD 900	1060 - 1050 calBP	10.0	YU-	pal-
	SS2002　4層	破片			±0.38		cal AD 917 - cal AD 974	1033 - 977 calBP	58.3	12717	13519
						2σ	cal AD 883 - cal AD 990	1067 - 960 calBP	95.4		
17	2区	炭化材	AaA	1255±20	-29.70	σ	cal AD 686 - cal AD 743	1265 - 1207 calBP	60.4	YU-	pal-
	SS2002　5層	破片			±0.44		cal AD 792 - cal AD 800	1158 - 1151 calBP	4.5	12718	13610
							cal AD 812 - cal AD 818	1138 - 1132 calBP	3.3		
						2σ	cal AD 676 - cal AD 751	1275 - 1199 calBP	68.1		
							cal AD 756 - cal AD 779	1194 - 1172 calBP	7.1		
							cal AD 787 - cal AD 829	1164 - 1122 calBP	19.2		
							cal AD 859 - cal AD 867	1091 - 1083 calBP	1.1		
18	2区	炭化材	AaA	1420±20	-29.43	σ	cal AD 607 - cal AD 625	1344 - 1325 calBP	37.7	YU-	pal-
	SS2002　6層	破片			±0.44		cal AD 636 - cal AD 650	1314 - 1300 calBP	30.6	12719	13161
						2σ	cal AD 601 - cal AD 655	1350 - 1296 calBP	95.4		

第 37 表　放射性炭素年代測定結果 (2)

No.	試料名	性状	分析方法	補正年代(暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
							年代値		確率		
19	2区 SS2003　3層(1)	炭化材 破片	AaA	1125±20	-30.31 ±0.40	σ	cal AD 893 - cal AD 902	1057 - 1049 calBP	9.3	YU-12720	pal-13162
							cal AD 887 - cal AD 990	1035 - 1018 calBP	95.4		
							cal AD 915 - cal AD 933	1010 - 975 calBP	19.1		
						2σ	cal AD 940 - cal AD 976	1064 - 961 calBP	39.9		
20	2区 SS2003　3層(2)	炭化材 散孔材	AaA	1095±20	-28.80 ±0.25	σ	cal AD 898 - cal AD 920	1052 - 1030 calBP	26.0	YU-13458	pal-13417
							cal AD 956 - cal AD 992	994 - 958 calBP	42.3		
						2σ	cal AD 892 - cal AD 995	1059 - 955 calBP	95.4		
21	2区 SS2003　4層	炭化材 破片	AaA	1460±20	29.11 ±0.45	σ	cal AD 596 - cal AD 640	1354 - 1310 calBP	68.3	YU-12721	pal-13163
						2σ	cal AD 577 - cal AD 646	1374 - 1305 calBP	95.4		
22	4区 9-M6 SD4009 7層	炭化材 破片	AaA	1255±20	-30.29 ±0.28	σ	cal AD 686 - cal AD 743	1264 - 1207 calBP	65.1	YU-13961	pal-13555
							cal AD 793 - cal AD 798	1157 - 1152 calBP	3.2		
						2σ	cal AD 675 - cal AD 779	1275 - 1171 calBP	76.9		
							cal AD 787 - cal AD 829	1163 - 1121 calBP	17.8		
							cal AD 860 - cal AD 865	1090 - 1085 calBP	0.7		
23	4区 9-M6 SD4009 17層	炭化材 破片	AaA	1210±20	-23.28 ±0.55	σ	cal AD 785 - cal AD 832	1165 - 1118 calBP	42.0	YU-13962	pal-13556
							cal AD 849 - cal AD 876	1101 - 1074 calBP	26.2		
						2σ	cal AD 772 - cal AD 885	1178 - 1065 calBP	95.4		
24	4区 9-M6 SX4001 2層	炭化材 破片	HCL	2230±20	-26.48 ±0.18	σ	cal BC 365 - cal BC 351	2314 - 2300 calBP	10.1	YU-13963	pal-13557
							cal BC 290 - cal BC 209	2239 - 2158 calBP	58.1		
						2σ	cal BC 381 - cal BC 346	2330 - 2295 calBP	19.4		
							cal BC 317 - cal BC 203	2266 - 2152 calBP	76.0		
25	5区 ベルト1 III-4層	炭化材	AAA	700±30	-27.28	σ	cal AD 1276 - cal AD 1301	674 - 650 calBP	59.8	Beta-519580	
							cal AD 1371 - cal AD 1377	579 - 573 calBP	8.5		
						2σ	cal AD 1267 - cal AD 1313	683 - 637 calBP	73.1		
							cal AD 1361 - cal AD 1388	590 - 563 calBP	22.4		
26	5区 ベルト1 III-6層	炭化材	AAA	2180±30	-24.79	σ	cal BC 352 - cal BC 290	2301 - 2239 calBP	42	Beta-519581	
							cal BC 227 - cal BC 221	2176 - 2170 calBP	3.1		
							cal BC 210 - cal BC 174	2159 - 2123 calBP	23.2		
						2σ	cal BC 364 - cal BC 150	2313 - 2099 calBP	94.4		
							cal BC 131 - cal BC 121	2080 - 2070 calBP	1		
27	5区 ベルト3 IV-1層	炭化材	AAA	2830±30	-26.20	σ	cal BC 1015 - cal BC 928	2964 - 2877 calBP	68.3	Beta-519582	
						2σ	cal BC 1107 - cal BC 1096	3056 - 3045 calBP	1.3		
							cal BC 1082 - cal BC 1068	3031 - 3017 calBP	1.7		
							cal BC 1056 - cal BC 904	3005 - 2853 calBP	92.4		
28	5区 ベルト3 IV-2層	炭化材	AAA	1120±30	-24.80	σ	cal AD 893 - cal AD 933	1058 - 1017 calBP	34.1	Beta-519583	
							cal AD 940 - cal AD 977	1011 - 973 calBP	34.2		
						2σ	cal AD 774 - cal AD 785	1177 - 1166 calBP	1.8		
							cal AD 833 - cal AD 846	1117 - 1104 calBP	1.4		
							cal AD 876 - cal AD 995	1074 - 955 calBP	92.3		
29	5区 ベルト3 IV-3層	炭化材	AAA	3020±30	-26.88	σ	cal BC 1373 - cal BC 1353	3322 - 3302 calBP	11.5	Beta-519584	
							cal BC 1299 - cal BC 1219	3248 - 3168 calBP	56.8		
						2σ	cal BC 1391 - cal BC 1336	3340 - 3285 calBP	21.8		
							cal BC 1323 - cal BC 1194	3272 - 3143 calBP	69.5		
							cal BC 1175 - cal BC 1161	3124 - 3110 calBP	1.9		
							cal BC 1144 - cal BC 1130	3093 - 3079 calBP	2.2		
30	5区 ベルト3 IV-4層	炭化材	AAA	3260±30	-26.35	σ	cal BC 1601 - cal BC 1586	3550 - 3535 calBP	7.7	Beta-519585	
							cal BC 1543 - cal BC 1497	3492 - 3446 calBP	52.6		
							cal BC 1475 - cal BC 1460	3424 - 3409 calBP	7.9		
						2σ	cal BC 1613 - cal BC 1492	3562 - 3441 calBP	81.6		
							cal BC 1483 - cal BC 1450	3432 - 3399 calBP	13.8		
31	5区 9-K4 SP5046 埋土	炭化材 破片	AaA	1160±20	-26.59 ±0.21	σ	cal AD 776 - cal AD 786	1174 - 1164 calBP	10.1	YU-13964	pal-13558
							cal AD 831 - cal AD 852	1119 - 1098 calBP	14.8		
							cal AD 875 - cal AD 895	1075 - 1055 calBP	22.5		
							cal AD 925 - cal AD 949	1025 - 1001 calBP	20.8		
						2σ	cal AD 772 - cal AD 790	1178 - 1160 calBP	12.9		
							cal AD 823 - cal AD 901	1127 - 1049 calBP	52.3		
							cal AD 916 - cal AD 974	1034 - 976 calBP	30.3		
32	5区 9-K4 SP5047 埋土	炭化物 破片	AaA	655±20	-12.12 ±0.24	σ	cal AD 1295 - cal AD 1307	655 - 643 calBP	23.1	YU-13965	pal-13559
							cal AD 1364 - cal AD 1385	586 - 565 calBP	45.1		
						2σ	cal AD 1285 - cal AD 1321	665 - 629 calBP	43.0		
							cal AD 1357 - cal AD 1390	593 - 560 calBP	52.4		
33	5区 9-K4 SP5049 埋土	炭化材	AAA	960±30	-27.20	σ	cal AD 1034 - cal AD 1048	917 - 902 calBP	12.6	Beta-519586	
							cal AD 1083 - cal AD 1151	868 - 800 calBP	55.7		
						2σ	cal AD 1025 - cal AD 1160	925 - 791 calBP	95.4		
34	5区 9-L3 SL5003 2層	炭化材	AAA	710±20	-32.96 ±0.20	σ	cal AD 1277 - cal AD 1293	673 - 657 calBP	68.3	YU-13966	pal-13560
						2σ	cal AD 1271 - cal AD 1301	679 - 649 calBP	91.4		
							cal AD 1371 - cal AD 1378	579 - 572 calBP	4.1		
35	5区 9-J5 SL5004 4層	炭化材	AAA	605±20	-34.45 ±0.19	σ	cal AD 1310 - cal AD 1328	640 - 622 calBP	26.2	YU-13967	pal-13561
							cal AD 1341 - cal AD 1362	609 - 588 calBP	29.5		
							cal AD 1387 - cal AD 1396	563 - 554 calBP	12.5		
						2σ	cal AD 1302 - cal AD 1368	648 - 582 calBP	75.3		
							cal AD 1380 - cal AD 1401	570 - 549 calBP	20.2		
36	5区 9-J5 SL5005 4層	炭化材	AAA	660±20	-31.26 ±0.27	σ	cal AD 1291 - cal AD 1306	659 - 644 calBP	28.1	YU-13968	pal-13562
							cal AD 1364 - cal AD 1384	586 - 566 calBP	40.2		
						2σ	cal AD 1283 - cal AD 1320	667 - 630 calBP	45.4		
							cal AD 1359 - cal AD 1390	591 - 560 calBP	50.1		

(2) 微細物分析

令和 2 年度分析調査の結果を第 39・40 表に、炭化種実出土状況を第 41 表に示し、試料 50kg あたりの個数に換算した炭化種実群集の層位変化を第 87 図に示す。また、第 88 図を掲載し、一部の計測値を表に示して同定根拠とする。

第 38 表　放射性炭素年代測定結果 (3)

No.	試料名	性状	分析方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
							年代値		確率		
37	5区 9-K4 SS5004 Ⅳ-2層 (1)	炭化材	AAA	1010±30	-11.38	σ	cal AD 993 - cal AD 1040	958 - 910 calBP	66.1	Beta-519587	
							cal AD 1109 - cal AD 1113	841 - 838 calBP	2.1		
						2σ	cal AD 990 - cal AD 1050	960 - 900 calBP	70		
							cal AD 1080 - cal AD 1154	870 - 797 calBP	25.4		
38	5区 9-K4 SS5004 Ⅳ-2 層 (2)	炭化材	AAA	2340±30	-28.70	σ	cal BC 449 - cal BC 446	2398 - 2395 calBP	1.1	Beta-519588	
							cal BC 416 - cal BC 382	2365 - 2331 calBP	67.2		
						2σ	cal BC 516 - cal BC 364	2465 - 2313 calBP	95.4		
39	5区 9-K4 SS5004 Ⅳ-2 層 (3)	炭化材	AAA	1270±20	-31.14 ±0.22	σ	cal AD 685 - cal AD 743	1265 - 1207 calBP	68.3	YU-13969	pal-13563
						2σ	cal AD 670 - cal AD 777	1280 - 1173 calBP	94.7		
							cal AD 794 - cal AD 798	1156 - 1152 calBP	0.7		
40	6区 9-O2 Ⅳ-4層 遺物集中2	炭化材	AAA	1310±20	-31.62 ±0.23	σ	cal AD 667 - cal AD 685	1283 - 1265 calBP	26.4	YU-13970	pal-13564
							cal AD 743 - cal AD 772	1207 - 1178 calBP	41.9		
						2σ	cal AD 660 - cal AD 708	1290 - 1242 calBP	46.9		
							cal AD 730 - cal AD 775	1220 - 1175 calBP	48.5		
41	7区 16-C3 SB7001-P1 1層	炭化材	AAA	1095±20	-28.86 ±0.21	σ	cal AD 898 - cal AD 920	1052 - 1030 calBP	26.1	YU-13971	pal-13565
							cal AD 957 - cal AD 993	993 - 957 calBP	42.2		
						2σ	cal AD 892 - cal AD 995	1058 - 955 calBP	94.8		
							cal AD 1009 - cal AD 1012	941 - 938 calBP	0.6		
42	7区 16-B3 SB7001-P5 1層	炭化材 破片	HCL	1040±20	-28.93 ±0.21	σ	cal AD 995 - cal AD 1021	955 - 929 calBP	68.3	YU-13972	pal-13566
						2σ	cal AD 987 - cal AD 1030	963 - 920 calBP	95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理、AaAはアルカリの処理を薄くした処理を示す。
5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7)較正データーセットは、IntCal20を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である

第 39 表　令和 2 年度分析調査微細物分析結果 (1)

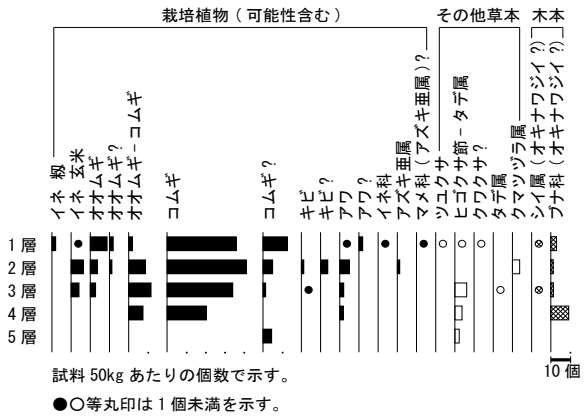
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
			2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	
			9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	
			SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	
分類群	部位･状態/粒径		1層	1層	2層	1層	1層	1層	2層	2層	3層	3層	3層	3層	3層	3層	4層	4層	5層	5層	
炭化種実																					
シイ属(オキナワジイ?)	子葉	破片	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	No.1:長さ5.66,残存幅3.85,半分厚2.12mm,No.9:長さ8.34,残存幅5.34,半分厚3.52mm
ブナ科(オキナワジイ?)	果実	破片	3	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	1	–	3	2	–	–	No.15:残存長3.35mm
ツユクサ	種子	完形	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	焼き膨れ,発芽?
キビ	穎果	完形	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	No.12:長さ1.72mm,幅1.54mm
キビ?	穎果	完形	–	–	1	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
アワ	果実	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	果皮:側面
		破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	状態不良
	穎果	完形	–	–	–	–	1	–	4	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	
アワ?	穎果	破片	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
イネ	籾(基部)	破片	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
	穎果(玄米)	完形	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–	1	–	–	–	–	No.7:長さ3.55mm,幅2.24mm,厚さ1.63mm
		破片	–	–	–	–	–	–	4	–	–	1	–	–	1	1	–	–	–	–	
オオムギ	穎果	完形	1	–	–	1	3	1	–	–	1	–	–	2	–	–	–	–	–	–	No.5:長さ4.60mm,幅2.46mm,厚さ2.31mm
		破片	–	1	–	–	2	–	3	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	
オオムギ?	穎果	破片	2	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
オオムギ-コムギ	穎果	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	2	–	–	–	–	–	
		破片	–	1	–	–	1	–	7	–	–	2	–	6	4	2	2	2	–	–	
コムギ	果実	完形	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	果皮:腹面
	穎果	完形	6	1	4	1	2	2	4	–	1	2	6	7	2	5	2	–	–	–	No.15:長さ3.13mm,幅2.11mm,厚さ2.04mm
		破片	11	3	4	–	8	2	17	4	–	2	7	8	8	2	3	6	–	–	
コムギ?	穎果	破片	8	–	2	–	5	–	2	–	–	–	–	2	–	–	–	–	1	1	
イネ科	穎果	完形	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
ヒゴクサ節-タデ属	果実	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	1	1	1	–	1	焼き膨れ
		破片	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	3	1	1	–	–	–	–	
クワクサ?	果実	完形	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
タデ属	果実	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	2面体,焼き膨れ
アズキ亜属	種子	破片	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	残存長4.26mm,幅2.31mm,半分厚1.26mm,アズキグループ初生葉残存
マメ科(アズキ亜属)?	種子	破片	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	長さ4.21mm,幅2.66mm,半分厚1.39mm
クマツヅラ属	果実	完形	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
不明(堅果類?)		破片	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–	
不明(木本?)		破片	–	–	–	–	1	–	–	2	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	

第 40 表　令和 2 年度分析調査微細物分析結果 (2)

調査年度・区・グリット・遺構・地点			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
			2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	
			9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	9-J6	
			SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	SD2001	
分類群	部位・状態/粒径		1層	1層	2層	1層	1層	1層	2層	2層	3層	3層	3層	3層	3層	3層	4層	4層	5層	5層	備考
炭化しているか不明な種実																					
イチジク属?	果実	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	
ヤンバルアカメガシワ	種子	破片	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	
アカメガシワ	種子	破片	–	–	3	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
アカメガシワ属	種子	破片	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
イヌタデ近似種	果実	破片	2	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	
オカトラノオ属?	種子?	完形	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
非炭化種実																					
カジノキ属	核	破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	
イチジク属	果実	完形	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
		破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	
キイチゴ属	核	破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	
アカメガシワ属	種子	破片	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	–	
カラスザンショウ	種子	破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	
オヒシバ	種子	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
メヒシバ類	果実	完形	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	
スズメノヒエ属	果実	完形	1	–	–	–	2	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
イネ科	果実	完形	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	
ヒユ属	種子	完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	
ナス属	種子	完形	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
タイワンソクズ	核	完形	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	1	2	–	–	1	–	–	
		破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	–	
不明		完形	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
		破片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	
不明炭化物		完形	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–	虫類の糞?
		破片	14	–	26	–	14	–	25	–	9	8	7	11	19	–	10	12	5	10	
不明炭化物(虫類?)			–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	
炭化材			4.87	7.57	10.27	7.28	7.08	7.07	6.54	8.34	11.32	9.99	5.26	6.34	7.94	5.21	8.99	8.24	8.29	5.72	最大径(mm)
	>4mm		–	0.11	0.46	0.07	0.04	0.05	0.06	0.14	0.76	0.16	–	0.03	0.11	–	0.12	0.11	0.05	–	乾重(g)
	4-2mm		0.12	0.10	0.67	0.09	0.10	0.38	0.30	0.38	0.62	0.13	0.29	0.03	0.16	0.13	0.42	0.26	0.13	0.20	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm		0.34	0.21	0.89	0.32	0.53	1.02	0.50	0.79	0.85	0.53	0.36	0.81	0.47	0.64	0.60	0.53	0.20	0.34	乾重(g)
	1-0.5mm		1.63	0.54	1.76	1.19	1.55	4.00	2.49	2.14	2.23	1.84	4.36	4.39	3.29	1.78	2.20	2.18	1.23	1.81	乾重(g)
貝類	>2mm		–	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	(個),巻貝完形含む
			–	0.16	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	乾重(g)
砂礫主体	>4mm		23.97	37.52	9.56	37.48	18.67	36.34	19.83	8.71	20.59	14.64	15.74	16.72	55.23	16.55	24.65	29.18	21.98	12.31	乾重(g)
	4-2mm		28.04	29.73	17.23	26.85	25.19	30.72	30.73	31.28	17.10	22.00	20.77	22.74	21.66	25.77	19.83	26.46	12.28	19.59	乾重(g)
	2-1mm		45.75	52.75	38.44	45.43	46.80	55.14	44.90	36.21	33.72	39.66	30.89	33.03	32.45	40.29	36.83	42.95	25.15	38.28	乾重(g)
	1-0.5mm		99.02	77.56	94.29	67.51	74.95	129.33	83.68	78.06	80.62	92.71	72.77	78.55	85.65	71.28	92.10	97.27	61.86	87.71	乾重(g),植物片,炭化材含む
土器片			–	–	28.67	–	–	–	27.49	–	22.75	–	27.29	–	–	–	–	20.55	35.14	–	最大径(mm)
			–	–	9.40	–	–	–	12.59	–	6.22	–	5.47	–	–	–	–	1.80	17.42	–	乾重(g)
			–	–	3	–	–	–	6	–	3	–	2	–	–	–	–	1	6	–	(個)
植物片			0.30	0.41	1.36	0.37	0.46	0.69	0.81	1.04	1.09	0.40	1.37	0.38	0.56	0.32	0.53	0.89	0.57	0.40	乾重(g)
分析量			8.22	8.64	12.79	8.78	10.29	15.45	13.56	13.60	12.52	12.35	11.33	12.72	12.62	11.52	14.05	12.78	9.52	12.72	乾重(kg)

第 41 表　令和 2 年度分析調査炭化種実出土状況

調査年度・区・グリット・遺構・地点		H29 2区 9-J6 SD2001 ベルト2					
	層位	1層	2層	3層	4層	5層	
分類群	部位/粒径	No.1,2,4-6	No.3,7,8	No.9-14	No.15,16	No.17,18	備考
栽培植物(可能性含む)							
イネ	籾(基部)	2	–	–	–	–	
	穎果(玄米)	1	5	6	–	–	No.7:長さ3.55mm,幅2.24mm,厚さ1.63mm
オオムギ	穎果	9	3	4	–	–	No.5:長さ4.60mm,幅2.46mm,厚さ2.31mm
オオムギ?	穎果	2	1	–	–	–	
オオムギ-コムギ	穎果	2	7	17	4	–	
コムギ	果実	1	–	–	–	–	果皮:腹面
	穎果	36	33	50	11	–	No.15:長さ3.13mm,幅2.11mm,厚さ2.04mm
コムギ?	穎果	13	4	2	–	2	
キビ	穎果	–	1	1	–	–	No.12:長さ1.72mm,幅1.54mm
キビ?	穎果	–	3	–	–	–	
アワ	果実	–	–	1	1	–	3層:果皮側面,4層:状態不良
	穎果	1	4	2	–	–	
アワ?	穎果	2	–	–	–	–	
イネ科	穎果	1	–	–	–	–	
アズキ亜属	種子	–	1	–	–	–	残存長4.26mm,幅2.31mm,半分厚1.26mm
マメ科(アズキ亜属)?	種子	1	–	–	–	–	長さ4.21mm,幅2.66mm,半分厚1.39mm
その他木本							
シイ属(オキナワジイ?)	子葉	1	–	1	–	–	No.1:長さ5.66,残存幅3.85,半分厚2.12mm No.9:長さ8.34,残存幅5.34,半分厚3.52mm
ブナ科(オキナワジイ?)	果実	3	1	2	5	–	No.15:残存長3.35mm
その他草本							
ツユクサ	種子	1	–	–	–	–	焼き膨れ,発芽?
ヒゴクサ節-タデ属	果実	1	–	9	2	1	焼き膨れ
クワクサ?	果実	1	–	–	–	–	
タデ属	果実	–	–	1	–	–	2面体,焼き膨れ
クマツヅラ属	果実	–	3	–	–	–	
不明							
不明(堅果類?)		1	–	1	1	–	
不明(木本?)		1	2	1	–	–	
炭化種実合計							
栽培植物(可能性含む)		71	62	83	16	2	
その他木本		4	1	3	5	0	
その他草本		3	3	10	2	1	
不明		2	2	2	1	0	
炭化種実合計(不明を除く)		78	66	96	23	3	
炭化材		7.6	10.3	11.3	9.0	8.3	最大径(mm)
	>2mm	1.1	2.0	2.4	0.9	0.4	乾重(g)
炭化材主体	2-0.5mm	11.3	8.6	21.5	5.5	3.6	乾重(g)
貝類	>2mm	0.2	–	–	–	–	乾重(g),3個,巻貝完形含む
砂礫主体		988.7	492.9	961.1	369.3	279.2	乾重(g),1-0.5mm;植物片,炭化材含む
土器片		–	56.2	27.3	20.6	35.1	最大径(mm)
		–	22.0	11.7	1.8	17.4	乾重(g)
		–	9	5	1	6	(個)
分析量		51.4	40.0	73.1	26.8	22.2	乾重(kg)



第 87 図　SD2001 における炭化種実群集の層位変化

全 18 試料 213.5kg を洗い出した結果、炭化種実は、木本 2 分類群 (広葉樹のシイ属 (オキナワジイ ?)、ブナ科 (オキナワジイ ?))13 個、草本 13 分類群 (ツユクサ、キビ、アワ、イネ、オオムギ、コムギ、イネ科、ヒゴクサ節 - タデ属、クワクサ ?、タデ属、アズキ亜属、マメ科 (アズキ亜属 ?)、クマツヅラ属)253 個の、計 266 個が同定された。この他、3 個は堅果類の可能性がある不明、4 個は木本の可能性がある不明としている。炭化種実以外は、不明炭化物 174 個、炭化材 6.8g(最大 1.1cm;3 層)、炭化材主体 50.6g、貝類 (巻貝含む)3 個 0.2g(1 層)、土器片 21 個 52.9g(最大 3.5cm;5 層)、植物片 11.9g、非炭化種実 (広葉樹のカジノキ属、イチジク属、キイチゴ属、アカメガシワ属、カラスザンショウ、草本のオヒシバ、メヒシバ類、スズメノヒエ属、イネ科、ヒユ属、ナス属、タイワンソクズ、不明)29 個、炭化しているか不明な種実 (イチジク属 ?、ヤンバルアカメガシワ、アカメガシワ、アカメガシワ属、イヌタデ近似種、オカトラノオ属 ?)16 個、砂礫主体 3.1kg が確認された。段丘縁辺部の緩斜面に位置し、湿地等微地形が認められない本遺跡の立地を考慮すると、非炭化植物片・種実は混入と判断されるため、考察より除外する。

炭化種実の出土個数は、試料 50kg あたりに換算すると、5 層が 7 個、4 層が 43 個、3 層が 66 個、2 層が 83 個、1 層が 76 個となる。2 層が最も多く、1 層、3 層と次ぎ、5 層が最も少ない。

炭化種実の保存状態は不良で、アワ、コムギの一部に果皮が残る。栽培植物は、概ね 4 ～ 1 層より、穀類のイネ籾 1 個、穎果 (玄米)12 個、キビ 2 個、キビ ?3 個、アワ 9 個、アワ ?2 個、オオムギ 16 個、オオムギ ?3 個、オオムギ - コムギ 30 個、コムギ 131 個、コムギ ?21 個の他、栽培の可能性があるイネ科 (未熟キビ・アワの可能性)1 個、豆類のアズキ亜属 1 個、マメ科 (アズキ亜属 ?)1 個の、計 234 個が確認され、炭化種実群全体の 88% を占める。各層を通じてコムギが最も多く、分類群数・個数ともに上部に向かって増加する。

このうち、2 層 (No.7) のイネ玄米 (炭化米) は、長さ 3.55mm、幅 2.24mm、厚さ 1.63mm を測り、佐藤 (1988) による炭化米の「粒大 (長さ×幅)」は 7.95 となり極々小型、「粒形 (長さ / 幅)」は 1.58 となり短粒に該当する。

また、2 層 (No.7) のアズキ亜属種子は、半分未満の破片で、半割面には北大基準 (吉崎 ,1992) の「アズキグループ (幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉が確認される。残存長 4.26mm、幅 2.31mm、半分厚 1.26mm を測り、簡易楕円体積（長さ /2 ×幅 /2 ×厚さ /2 × 4/3 ×π）（那須ほか ,2015）は 12.98 mm^3、1 層 (No.1) のマメ科 (アズキ亜属 ?) 種子は、長さ 4.21mm、幅 2.66mm、半分厚 1.39mm、簡易楕円体積は 16.29 mm^3 となり、2 個ともヤブツルアズキ (Vigna angularis (Willd.) Ohwi et Ohashi var. nipponensis (Ohwi) Ohwi et Ohashi) に類似するサイズの「野生型 (30mm^3 以下)」に該当する。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、木本は、常緑広葉樹で堅果類のシイ属子葉 2 個、ブナ科果実 13 個が確認され、いずれもオキナワジイと考えられる。草本は、中生植物のツユクサ 1 個、ヒゴクサ節 - タデ属 13 個、クワクサ ?1 個、タデ属 1 個、クマツヅラ属 1 個が確認された。

令和 3 年度の分析調査結果を第 42 表に示す。また、各分類群を第 89 ～ 91 図に示して同定根拠とする。

全 23 試料 17.3kg を洗い出した結果、裸子植物 1 分類群 (針葉樹のマツ属複維管亜属 (リュウキュウマツ ?))6 個の炭化葉、被子植物 7 分類群 (広葉樹のヤンバルアカメガシワ、サンショウ、草本のイネ、オオムギ、コムギ、エノキグサ ?、タイワンソクズ)8 個の炭化種実が同定された。不明種実 1 個、不明破片 7 個、不明炭化物 1 個は同定ができなかった。その他、炭化材 36.7g(最大 3.3cm)、炭化材主体 33.4g、砂礫主体 160.8g、土器片 2 個 3.4g(最大 2.3cm)、非炭化植物片 0.2g、非炭化種実 2 個 (キク科果実) が確認された。なお、非炭化植物片・種実は後代の混入と判断されるため、考察より除外する。

栽培植物は、イネ籾が SD4009 の 2 層より 1 個、オオムギが SD4009 の 3 層、SP5046 埋土より各 1 個、コムギが SD4009 の 3 層より 1 個の、計 4 個確認された。

栽培植物を除いた分類群は、木本は、常緑針葉樹のマツ属複維管亜属 (リュウキュウマツ ?) が SL5001 の 5 層より 6 個、落葉広葉樹のヤンバルアカメガシワが SD4009 の 2 層より 1 個、サンショウが SP1024 埋土より 1 個の、計 8 個が確認された。草本は、エノキグサ ? が SD4009 の 2 層より 1 個、タイワンソクズが SL5004 の 4 層より 1 個の、計 2 個が確認された。

第 42 表　令和 3 年度微細物分析結果

			1	3	5	6	15	16	17	18	20	21	22	24	25
			1区	1区	1区	1区	4区	4区	4区	4区	4区	4区	4区	4区	4区
			9-I8	9-I8	9-I8	9-I8	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6	9-M6
			SP1014	SP1024	SL1001	SL1001	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009	SD4009
分類群	部位・状態･粒径		埋土	埋土	2層	2層	2層	3層	5層	7層	11層	12層	14層	16層	17層
炭化種実･葉															
マツ属複維管亜属	葉(頂部)	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	葉	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤンバルアカメガシワ	種子	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ	種子	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	籾(基部)	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ	穎果	完形未満	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コムギ	穎果	破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
エノキグサ?	種子	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
タイワンソクズ	核	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明		完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
不明		破片	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	1	-	-
不明炭化物			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
非炭化種実															
キク科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
非炭化植物片			0.12	-	-	-	-	-	-	0.01	-	-	-	-	0.00
炭化材			-	-	-	10.98	5.96	-	3.18	-	10.36	4.06	6.59	4.26	7.92
	>4mm		-	-	-	0.17	0.03	-	-	-	0.05	-	0.02	-	-
	4-2mm		-	-	-	0.38	0.03	-	0.01	-	0.02	0.01	0.02	0.02	0.02
炭化材主体	2-1mm		0.01	0.02	0.03	0.46	0.07	0.04	0.06	0.02	0.04	0.03	0.07	0.05	0.04
	1-0.5mm		0.01	0.02	0.04	0.41	0.07	0.03	0.08	0.04	0.05	0.03	0.06	0.05	0.10
砂礫主体	>4mm		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	4-2mm		1.50	1.81	-	0.52	1.54	1.60	0.89	2.64	2.16	1.42	-	-	1.37
	2-1mm		1.88	1.55	1.58	1.43	1.02	2.22	1.73	3.00	2.40	2.59	2.41	1.69	1.27
	1-0.5mm		4.31	4.42	3.43	4.46	3.17	6.94	5.80	6.90	6.51	6.59	7.40	4.73	3.61
土器片			-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-
分析量			1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	800	1000	800	1000

			27	28	29	30	31	32	34	36	37	38	39	№
			4区	5区	5区	5区	5区	5区	5区	5区	5区	5区	5区	地点
			9-M6	9-K4	9-K4	9-J4	9-J4	9-L3	9-J5	9-J5	9-J5	9-J5	9-K4	グリッド名
			SX4001	SP5046	SP5047	SL5001	SL5001	SL5003	SL5004	SL5005	SL5005	SL5005	SS5004	遺構名
分類群	部位・状態･粒径		2層	埋土	埋土	5層	5層	2層	4層	2層	3層	4層	Ⅳ-2 層	層位
炭化種実･葉														
マツ属複維管亜属	葉(頂部)	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	リュウキュウマツ?
	葉	破片	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	
ヤンバルアカメガシワ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンショウ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ	籾(基部)	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オオムギ	穎果	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コムギ	穎果	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
エノキグサ?	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タイワンソクズ	核	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
不明		完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明		破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	
不明炭化物			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
非炭化種実														
キク科	果実	完形	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	別種
非炭化植物片			-	-	-	0.03	-	-	-	0.00	0.01	0.04	-	乾重(g)
炭化材			-	-	5.27	22.12	-	32.53	19.06	5.26	6.01	12.46	9.88	最大径(mm)
	>4mm		-	-	0.01	0.59	1.96	14.34	3.29	-	0.04	1.16	0.21	乾重(g)
	4-2mm		-	-	0.01	0.60	0.26	8.24	2.71	0.03	0.04	2.27	0.15	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm		-	-	0.03	1.23	0.50	6.93	3.55	0.08	0.12	3.56	0.15	乾重(g)
	1-0.5mm		0.00	0.01	0.02	1.58	-	5.64	3.13	0.09	0.12	4.63	0.08	乾重(g)
砂礫主体	>4mm		-	-	-	-	3.56	-	9.06	-	-	-	2.73	乾重(g)
	4-2mm		-	-	1.49	1.88	0.93	1.32	0.86	-	-	0.94	0.90	乾重(g)
	2-1mm		0.15	0.79	0.66	0.54	0.48	0.54	0.77	0.87	1.15	1.14	2.37	乾重(g)
	1-0.5mm		0.45	1.04	1.67	0.63	0.56	1.72	1.40	1.94	1.83	3.00	4.99	乾重(g)
土器片			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.44	乾重(g) 2個,最大2.3cm
分析量			60	300	400	80	110	700	700	300	250	800	1000	乾重(g)

(3) 樹種同定

結果を第 43 表に示す。検出された種類は、マツ属複維管束亜属、イタビ類 ?、クワ科 ?、クスノキ科 ?、タケ亜科である。以下に検出された種類の形態的特徴を述べる。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1 ～ 15 細胞高。

・イタビ類 ?（Ficus ?）　　クワ科イチジク属

散孔材で管壁は厚く、道管は大きく、単独および 2 ～ 4 個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、4 ～ 10 細胞幅、細胞高は高い。

イチジク属の中でもイタビ類のようなつる性木本の可能性がある。

・クワ科 ?(Moraceae ?)

環孔材で、孔圏部は 2 ～ 3 列、晩材部では単独または 2 ～ 4 個が複合して斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状。放射組織は異性、4 ～ 10 細胞幅、20 ～ 50 細胞高。

・クスノキ科 ?（Lauraceae ?）

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および 2 ～ 3 個が放射方向に複合する。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は異性、1 ～ 5 細胞幅、1 ～ 20 細胞高。柔組織は周囲状。

・タケ亜科（Bambusoideae）

第 43 表　令和 3 年度炭化材同定結果

№	年度	地点	グリッド	遺構名	層位	同定結果
1	H29	1区	9-I8	SP1014	埋土	炭化材細片
3	H29	1区	9-I8	SP1024	埋土	炭化材細片
6	H29	1区	9-I8	SL1001	2層	散孔材
7	H29	2区	-	東西アゼ	III-1	炭化材細片
8	H29	2区	-	東西アゼ	III-2	炭化材細片
9	H29	2区	-	東西アゼ	III-3	炭化材細片
10	H29	2区	-	東西アゼ	IV-1	炭化材細片
11	H29	2区	-	東西アゼ	IV-2	炭化材細片
12	H29	2区	-	東西アゼ	IV-3	炭化材細片
13	H29	2区	-	東西アゼ	IV-4	炭化材細片
18	H29	4区	9-M6	SD4009	7層	炭化材細片
25	H29	4区	9-M6	SD4009	17層	炭化材細片
27	H29	4区	9-M6	SX4001	2層	炭化材細片
28	H30	5区	9-K4	SP5046	埋土	炭化材細片
29	H30	5区	9-K4	SP5047	埋土	炭化材細片
30	H30	5区	9-J4	SL5001	5層	タケ亜科
31	H30	5区	9-J4	SL5001	5層	マツ属複維管束亜属
32	H30	5区	9-L3	SL5003	2層	クスノキ科?
34	H30	5区	9-J5	SL5004	4層	クスノキ科?
38	H30	5区	9-J5	SL5005	4層	クスノキ科?
39	H30	5区	9-K4	SS5004	IV-2 層	イタビ類?
41	H31	6区	9-O2		IV-4層	クワ科?
43	H31	7区	16-C3	SB7001-P1	1層	針葉樹&広葉樹細片
45	H31	7区	16-B3	SB7001-P5	1層	炭化材細片

横断面では、原生木部の小径の道管の左右に 1 対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

(1) 各遺構・堆積層の年代観

平成 29 年度調査の 1 区植栽痕・列状ピット群の補正年代は、SP1014 埋土が 1,040 ± 20yrBP、SP1024 埋土が 860 ± 20yrBP と近い値を示す。これらは 10 世紀後半～ 13 世紀中頃 (calAD 987 ～ 1,252) の遺構と想定される。焼土遺構の SL1001 の 2 層は、補正年代で 625 ± 20yrBP を示し、植栽痕・列状ピット群より新しい年代値を示した。焼土遺構は 13 世紀末～ 14 世紀末頃 (calAD 1,299 ～ 1,397) の遺構と想定される。

2 区の東西アゼについてみると、最下位のⅣ‐4 が 3,090 ± 20yrBP と最も古い値を示す。途中Ⅳ‐2 とⅣ‐1 およびⅢ‐2 とⅢ‐1 で年代値の逆転が認められるが、全体的には上位に向かって年代値が新しくなる傾向がある。最も新しい年代値は、Ⅲ‐2 で 585 ± 20yrBP を示すことから、東西アゼの年代は縄文時代後期～晩期 (3,367 ～ 3,239 calBP) から 15 世紀初頭 (calAD 1,309 ～ 1,408) 頃の堆積物と想定される。なお、最上位のⅢ‐1 で 1,540 ± 20yrBP と古い値が得られた点については、堆積時に古い時代の炭化材片が混入した可能性などが考えられる。Ⅳ‐2 とⅣ‐1 の測定年代値の逆転は、暦年較正年代でほぼ同時期の年代を示すことから、誤差の範囲内と思われる。SD2001 は、5 層炭化材破片が 2,303 ～ 2,063 calBP、縄文時代晩期の値を示す。2 層コムギが calAD1283 ～ 1389、3 層コムギが calAD1330 ～ 1437、概ね同様のグスク時代の年代を示し、少なくともこの頃には耕作が行われていたと言ってよい。なお、3 層シイ属が 3159 ～ 2968calBP、は、縄文時代後期となり古く、2 層、3 層で得られた年代値を考慮すると、古い時代の炭化材片が混入した可能性などが考えられる。SS2002 は、6 層炭化材破片が calAD601 ～ 655、5 層炭化材破片が calAD676 ～ 867、4 層炭化材破片が calAD883 ～ 990 であり、いずれも貝塚時代後期を示し、層位的にも矛盾はない。一方で SS2002 最上位の 3 層炭化材破片が 4515 ～ 4295calBP が縄文時代後期の値であり著しく古い。古い時代の炭化材片が混入と考えて良い。SS2003 は、4 層炭化材破片が calAD577 ～ 646、3 層炭化材破片が calAD940 ～ 976、3 層散孔材が calAD892 ～ 995 の値であり、いずれも貝塚時代後期の値を示し、層位的にも矛盾はない。

４区の溝についてみると、SD4009 の７層が補正年代で 1,255 ± 20yrBP、17 層が 1,210 ± 20yrBP とほぼ同時期の値を示す。よって、これらの層位は７世紀後半～９世紀後半 (calAD 675 ～ 885) の堆積物と想定される。これに対し、不明遺構 SX4001 の２層は、測定年代で2,230 ± 20yrBP と溝試料より古い年代値を示す。よって、不明遺構は縄文時代晩期末～弥生時代初頭 (2330 ～ 2152 calBP) 頃の可能性がある。

５区植栽痕・列状ピット群、焼土遺構、集石遺構についてみると、大きく２つの時期に分けられ、SP5046 埋土 (1,160 ± 20yrBP)、SS5004 の（3） Ⅳ‐２層 (1,270 ± 20yrBP) と、SP5047 埋土 (655 ± 20yrBP)、SL5003 の２層 (710 ± 20yrBP)、SL5004 の４層 (605 ± 20yrBP)、SL5005 の４層 (660 ± 20yrBP) である。このことから、前者は７世紀後半～ 10 世紀後半 (calAD 670 ～ 974)、後者は 13 世紀後半～ 15 世紀初頭 (calAD 1,271 ～ 1,401) の遺構と想定される。

SP5049 は、暦年代が 11 世紀前半～ 12 世紀中頃のグスク時代初頭の年代であった。SS5004 は３点実施し、（1）calAD 990 ～ 1154 と（2）2465 ～ 2313calBP と（3）calAD 670 ～ 798 でグスク時代初頭から貝塚時代後１期初頭の離れた年代を示した。（1）のδ 13 の値が -11.38 と他のものと異なることを考慮すると、試料に何らかの原因がある可能性も考えられ、再検討が必要である。

堆積層のⅢ‐４層からⅣ‐４層までの６ヵ所で実施した。上位のⅢ‐４層が 700 ± 30yrBP、Ⅲ‐６層が 2180 ± 30yrBP、Ⅳ‐１層が 2830 ± 30yrBP、Ⅳ‐２層が 1120 ± 30yrBP、Ⅳ‐３層が 3020 ± 30yrBP、下位のⅣ‐４層が 3260 ± 30yrBP である。グスク時代から貝塚時代前４期までの年代幅である。堆積の順番においては、Ⅲ‐６層とⅣ‐１層が下位の層より古い年代値を示している。

Ⅲ‐６層とⅣ‐１層は、古い時代の炭化物等が混入した可能性もある。流れ込みの状況などを再検討が必要である。

６区遺物集中部についてみると、Ⅳ‐４層で 1,310 ± 20yrBP の測定年代が得られたことから、７世紀後半～８世紀後半 (calAD 660 ～ 775) の堆積物と想定される。

７区の建物跡である SB7001 では、P1 で 1,095 ± 20yrBP、P5 で 1,040 ± 20yrBP と、ほぼ同時期の値を示す。このことから、SB7001 は９世紀末～ 11 世紀前半 (calAD 892 ～ 1,030) の遺構と想定される。

(2) 植物利用と周辺植生

令和２年度の分析調査では、２区を対象として微細物分析を行い、SD2001 の５～１層より、栽培植物が約９割を占める炭化種実群が得られた。栽培植物は、概ね４～１より、穀類のイネ籾、玄米 (短粒極々小型)、キビ、アワ、オオムギ、コムギの他、栽培の可能性があるイネ科 (未熟キビ・アワの可能性)、豆類のアズキ亜属、マメ科 (アズキ亜属 ?) が確認され、各層を通じてコムギが最も多く、分類群数・個数ともに上部に向かって増加する傾向を示した。これらの栽培植物 (可能性含む) は、当社がこれまでに実施した普天間基地周辺の分析調査においても確認されている。近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆される。一部の炭化穀粒表面に果皮 (籾) が残ることから、脱籾 (だっぷ；籾殻を取り去る) 前の段階で火を受けた可能性がある。

アズキ亜属、マメ科 (アズキ亜属 ?) は、現生のヤブツルアズキに類似する種子サイズの野生型 (30mm3 以下) (那須ほか ,2015) に該当し、供伴する多くの穀類とともに栽培・利用された可能性が高い。ただし、本地域にはヤブツルアズキが分布せず、奄美・琉球・台湾に分布するオオヤブツルアズキ (V. reflexo-pilosa Hayata) や琉球・台湾に分布するヒナアズキ (V. riukiuensis (Ohwi) Ohwi et Ohashi) の可能性もある。ヤブツルアズキから栽培化されたと考えられているアズキ (V. angularis (Willd.) Ohwi et Ohashi)(佐竹ほか ,1982 など) も含め、今後の比較検討が望まれる。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、木本は、ブナ科シイ属 (オキナワジイ ?) は、現在の沖縄島北部の非石灰岩地域に分布する常緑広葉樹林 (照葉樹林) の主要な構成種で、果実 (堅果) 内部の子葉が生食可能な有用植物である。沖縄島では古くより植物質食糧としての利用が指摘され、遺跡出土例も確認されている (渡辺 ,1991；パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2006；松元・宮城 ,2017 など)。グスク時代前半と考えられている SD2001 から出土しているが、年代値は非常に古い。このことから、供伴の穀類や豆類とは時代が異なる可能性が高く、同列に検討することは難しい。

草本は、中生植物のツユクサ、ヒゴクサ節‐タデ属、クワクサ ?、タデ属、クマツヅラ属は、調査区周辺の明るく開けた、やや乾いた草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

令和３年度の分析調査では、前年度の２区以外の状況を把握するために、多くの地点の微細物分析を行い、イネ、オオムギ、コムギなどの栽培植物が確認された。SD4009 の２層より籾が確認されたイネ、SD4009 の３層、SP5046 埋土より確認されたオオムギ、SD4009 の３層より確認されたコムギは、近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受け炭化したとみなされる。当社がこれまでに実施した普天間基地周辺の分析調査においても確認されおり、前回分析調査を実施した SD2001 の５

～１層においても、イネ、キビ、アワ、オオムギ、コムギ、栽培の可能性があるアズキ亜属が確認され、コムギ主体の組成と上層に向かって増加する傾向が得られている。栽培植物を除いた分類群は、木本は、SL5001 の５層より常緑高木のマツ属複維管亜属 (リュウキュウマツ ?)、SD4009 の２層より落葉小高木の広葉樹のヤンバルアカメガシワ、SP1024 埋土より落葉低木のサンショウが１個の、計８個が確認された。当時の調査区周辺の二次林や林縁等明るく開けた場所に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。草本は、SD4009 の２層よりエノキグサ ?、SL5004 の４層よりタイワンソクズが確認された。調査区周辺の明るく開けた、やや乾いた草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

一方、各試料から検出された炭化材はいずれも小片で、保存状態も悪い。このため用途は不明だが燃料材等として使用されたと思われる。検出された種類は、細かな種類までわからなかったものもあるが、いずれも周辺に生育可能な木材であり、容易に入手できたものと思われる。

引用文献

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三 ,1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

松元美由紀・宮城ゆりか ,2017, 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の大型植物遺体 (予報). 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅳ , 沖縄県立博物館・美術館 ,95-101.

中山至大･井之口希秀･南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版). 東北大学出版会 ,678p.

中山至大･井之口希秀･南谷忠志 ,2010, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版). 東北大学出版会 ,678p.

那須浩郎・会田　進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石甫 ,2015, 炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用 . 資源環境と人類 , 第５号 , 明治大学黒耀石研究センター ,37-52.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2006, 新城下原第二遺跡 (Ⅱ地区下層) の自然科学分析 . 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集　新城下原第二遺跡－キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告－ , 沖縄県立埋蔵文化財センター ,311-328.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編),2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫 ,1982, 日本の野生植物 草本Ⅱ 離弁花類 . 平凡社 ,318p.

佐藤敏也 ,1988, 弥生のイネ . 弥生文化の研究２生業 , 金関　恕・佐原　真編 , 雄山閣 ,97-111.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2018, 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる 734 種　増補改訂－ . ネイチャーウォッチングガイドブック , 誠文堂新光社 ,303p.

椿坂恭代 ,1993, アワ・ヒエ・キビの同定 . 吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.

渡辺　誠 ,1991, 喜友名東原ヌバタキ遺跡出土の植物遺体 . ヌバタキ－都市計画街路 2-1-1 号建設に係る緊急発　掘調査報告－ , 沖縄県宜野湾市教育委員会 ,114-121,220.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

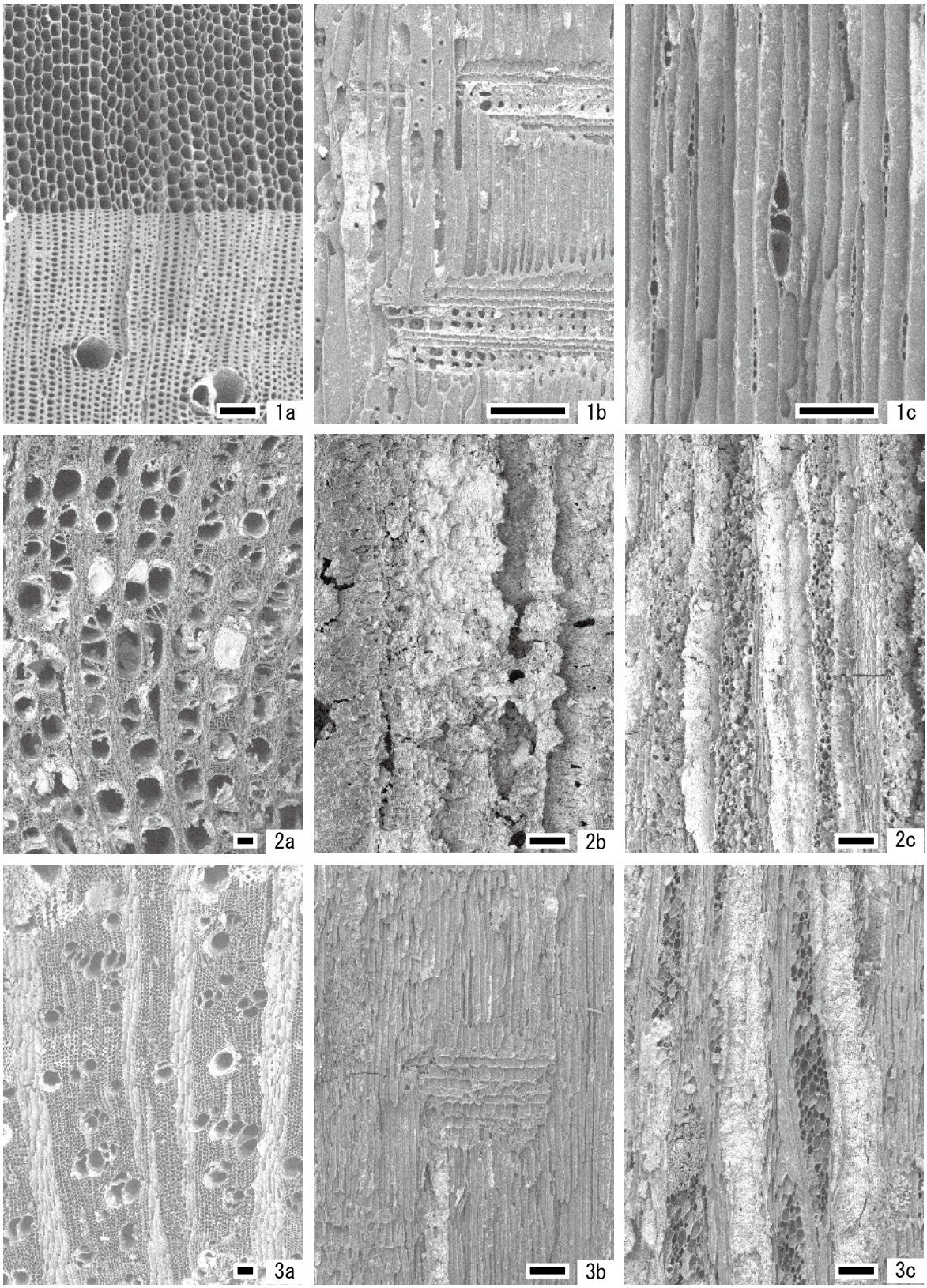
吉崎昌一 ,1992, 古代雑穀の検出 . 月刊考古学ジャーナル ,No.355,2-14.

1. シイ属(オキナワジイ?) 子葉(No. 9, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
2. シイ属(オキナワジイ?) 子葉(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
3. ブナ科(オキナワジイ?) 果実(No. 15, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 4層)
4. ツユクサ 種子(No. 6, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 1層)
5. キビ 穎果(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
6. アワ 果実(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
7. イネ 籾(基部)(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
8. イネ 穎果(玄米)(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
9. イネ 穎果(玄米)(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
10. イネ 穎果(玄米)(No. 7, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 2層)
11. イネ 穎果(玄米)(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
12. オオムギ 穎果(No. 5, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 1層)
13. コムギ 穎果(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
14. コムギ 穎果(No. 15, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 4層)
15. コムギ 果実(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
16. イネ科 穎果(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
17. ヒゴクサ節-タデ属 果実(No. 12, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
18. クワクサ? 果実(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
19. タデ属 果実(No. 13, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 3層)
20. アズキ亜属 種子(No. 7, 2区 ズケ9-J6 SD2001 ベルト2 2層)
21. マメ科(アズキ亜属?) 種子(No. 1, 2区 ズケ9-J6 SD2001 1層)
22. クマツヅラ属 果実(No. 3, 2区 ズケ9-J6 SD2001 2層)

第 88 図　炭化種実（令和 2 年度分析調査）

1. マツ属複維管亜属 葉(頂部)(No. 30, 5区 9-J4 SL5001 5層)
2. マツ属複維管亜属 葉(No. 30, 5区 9-J4 SL5001 5層)
3. ヤンバルアカメガシワ 種子(No. 15, 4区 9-M6 SD4009 2層)
4. サンショウ 種子(No. 3, 1区 9-I8 SP1024 埋土)
5. イネ 籾(基部)(No. 15, 4区 9-M6 SD4009 2層)
6. オオムギ 穎果(No. 16, 4区 9-M6 SD4009 3層)
7. オオムギ 穎果(No. 28, 5区 9-K4 SP5046 埋土)
8. コムギ 穎果(No. 16, 4区 9-M6 SD4009 3層)
9. エノキグサ? 種子(No. 15, 4区 9-M6 SD4009 2層)
10. タイワンソクズ 核(No. 34, 5区 9-J5 SL5004 4層)

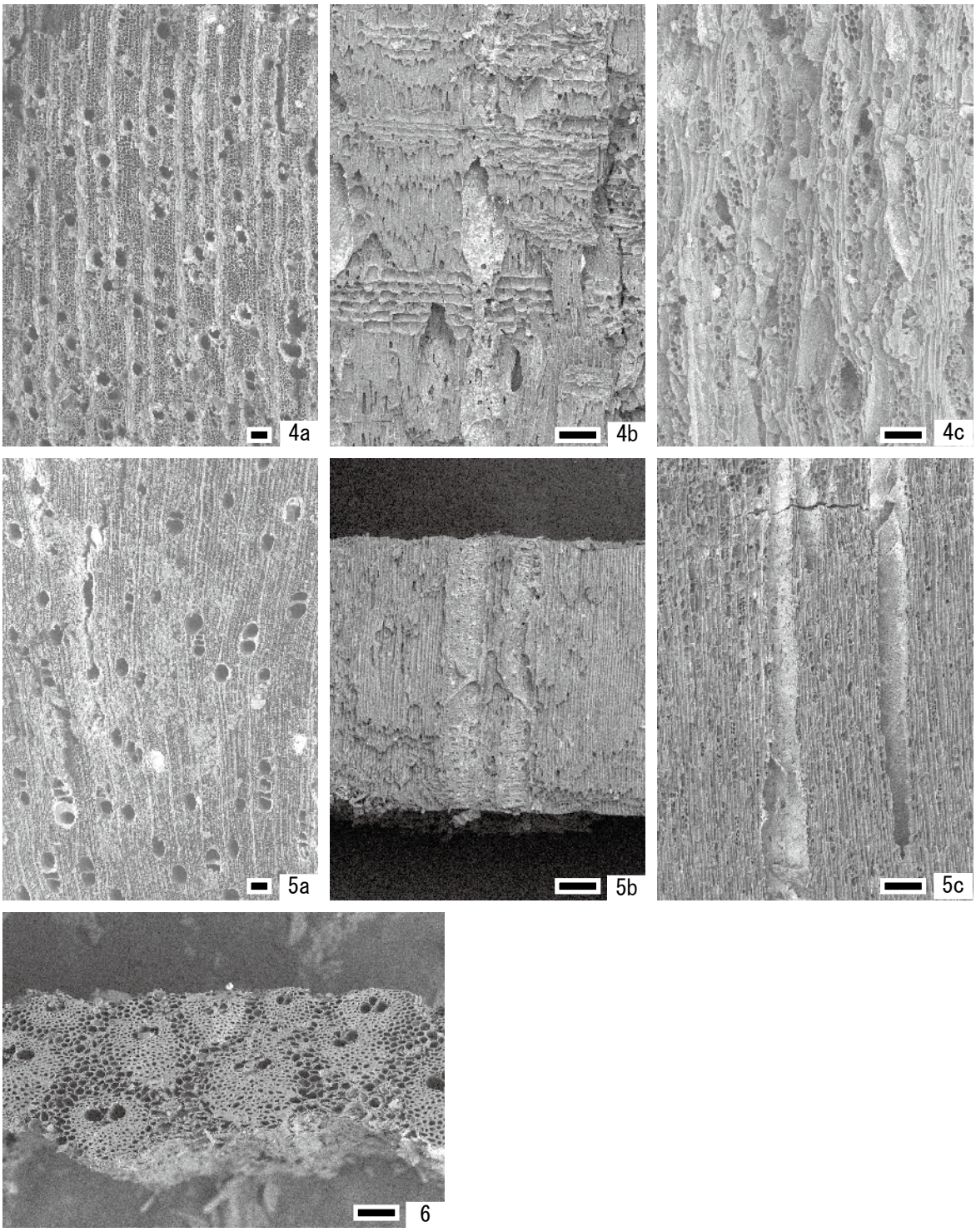
第 89 図　炭化葉・炭化種実（令和 3 年度分析調査）



1. マツ属複維管束亜属(No.31,5区 9-J4 SL5001 5層)
2. イタビ類?(No.39,5区 9-K4 SS5004 4層)
3. クワ科?(No.41,6区 9-02 Ⅳ-4層)

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

第 90 図　炭化材１（令和３年度分析調査）



4.クスノキ科(No.32,5区 9-L3 SL5003 2層)
5.散孔材(No.6,1区 9-I8 SL1001 2層)
6.タケ亜科(No.30,5区 9-J4 SL5001 5層)

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

第 91 図　炭化材 2（令和 3 年度分析調査）

第４章　普天間グスクンニー遺跡の調査成果

第１節　調査の方法と層序

普天間グスクンニー遺跡の発掘調査は、平成30年度調査５区北側のうち包蔵地にかかる範囲（ズケ９−Ｉ３〜４・Ｊ３〜４）を便宜的に１地点（400㎡）として調査対象とした。

グリッドと基本層序の考え方は普天間石川原第一遺跡と同様である。調査の便宜上、遺構番号は調査区毎に付しているため、普天間石川原第一遺跡と連続した番号となっている。基本的に遺構と遺物は区別しているが、遺跡範囲が重複するグリッド（ズケ９−Ｊ３〜４）から出土した遺物は、普天間石川原遺跡で一括している。

層序は、Ⅰ・Ⅱ層が確認されている（第92図）。調査区は南側に傾斜する地形で、一部石灰岩岩盤（Ⅵ層）が露出している。

第２節　遺構

調査は、Ⅰ層とⅡ層掘削後にⅡ層由来の遺構を地山面で検出した（第92図）。西側半分は、米軍住宅に伴う埋設管による撹乱を受けている。遺構は少なく、溝状遺構とピットが確認された。

５区１地点では、溝状遺構SD5001・5002が並行している。SD5001は東壁側で浅く広がっている。遺構周辺は岩盤が露出しており、一部岩盤の窪みを利用して溝を構築している。

SD5002は石列を伴う溝状遺構で、東側で浅くなり途切れている。石列は溝の底面より上位で検出されている。

細溝状の遺構（SX5002）はSD5002の北側に並行するもので、SD5002に関連する遺構と思われるが、性格は不明である。

また、ピット（SP5001）がSD5001北側に１基のみ確認されている。SX5001は、SD5001の北側で検出されているが、埋土や堀方が溝状遺構とは異なることから、性格不明な遺構とした。

第３節　遺物

遺物は総数187点出土している。特徴的な遺物について報告する。

土器　貝塚前期土器（1）など総数30点出土している。

石器　石斧、敲磨石類など総数３点出土している。

朝鮮系無釉陶器　Ａ群が１点出土している。

中国産陶磁器　青磁、白磁、青花が総数９点出土している。分類記号は第３章に対応する。青磁は、同安窯系青磁皿Ⅰ類（2）、龍泉窯系青磁のⅠ類かⅡ類の碗、Ⅴ類皿などがあるが小片のため図化していない。白磁はＣ３群の碗、青花では清代徳化窯の碗が得られているがいずれも小片である。

本土産近代磁器　64点出土している。分類記号は第３章に対応する。Ｂ類は瀬戸・美濃系で、ゴム判により吉祥文字を描くもの（４）、緑と青の吹き絵を施す小杯（６）がある。Ｅ類（３）は色絵で花文を描く。Ｆ類は青の三重圏線を巡らす国民食器（５）等が出土。

沖縄産施釉陶器　総数36点出土しており、碗、小碗、鉢、皿、瓶、壷、蓋、袋物、急須、火取などがみられる。小碗（７）は白釉を単掛けし、外面には花文を施す。皿（８）は内外面白釉、内面に文様を施す。灰皿（９）は口縁部に凹みを有する。

沖縄産無釉陶器　擂鉢、壷、甕、袋物など総数33点が出土している。

陶質土器　鉢など３点出土している。

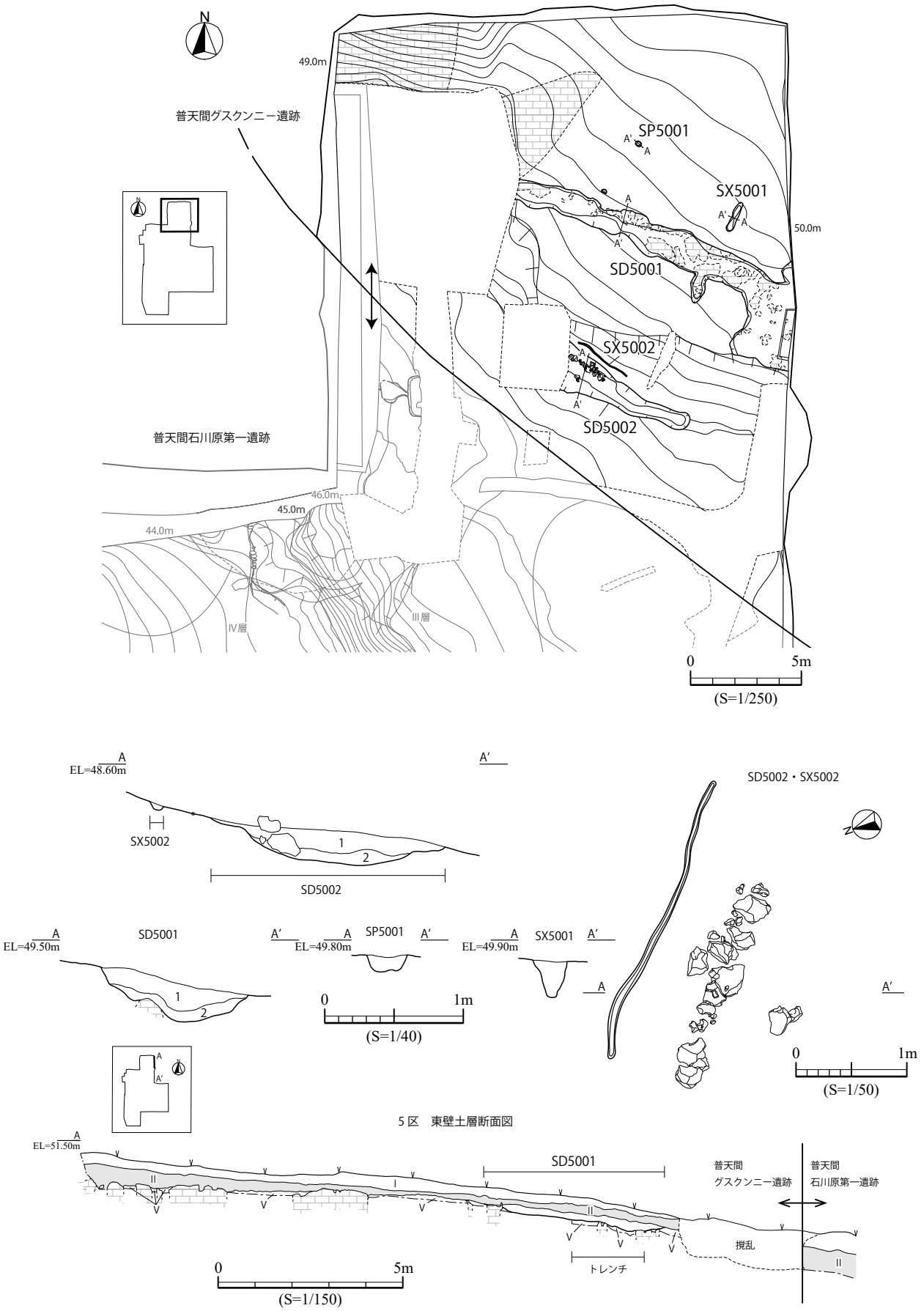
青銅製品　延べ煙管（10）が出土している。

瓦　明朝系平瓦が１点出土している。

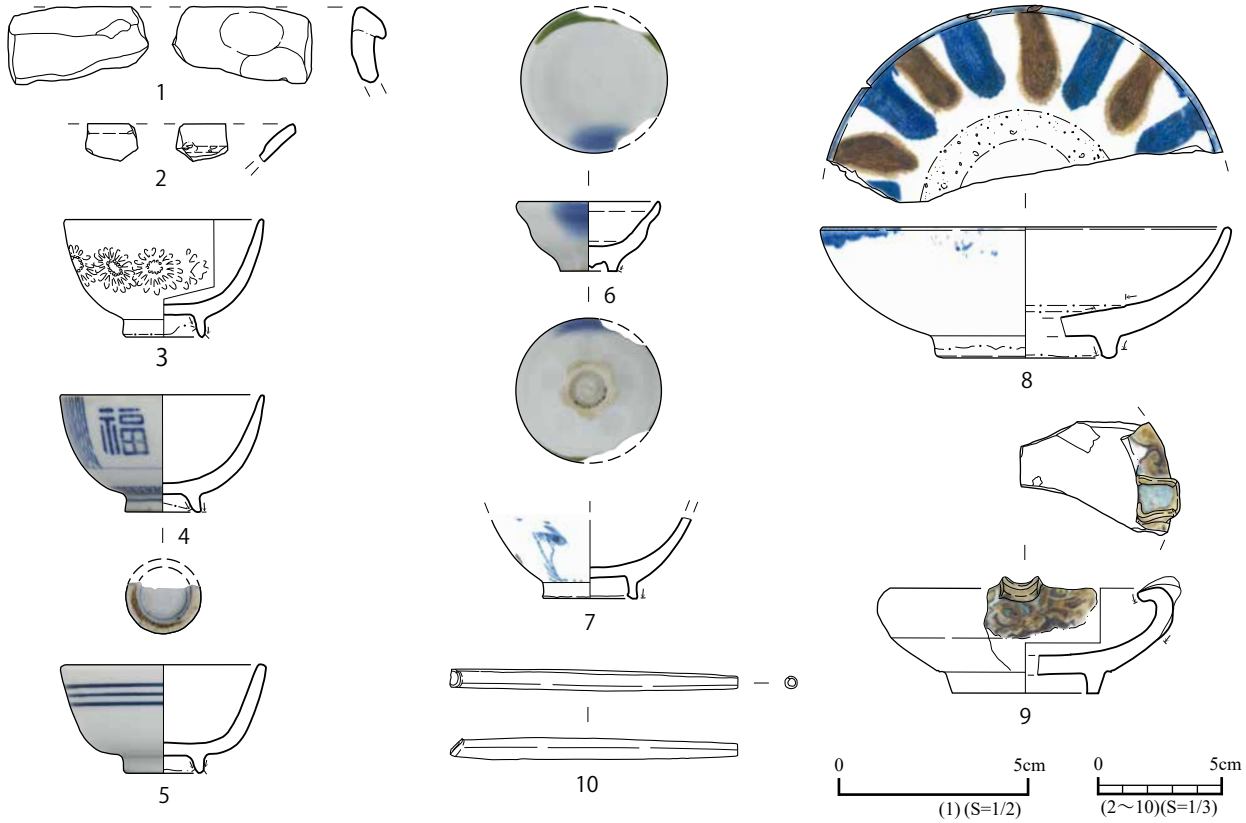
第44表　普天間グスクンニー遺跡遺構・出土遺物一覧

遺構	地区	グリッド	検出面	埋土	深さ(cm)	遺構所見等	出土遺物
SP5001	5区-1	9-I3	1	Ⅱ	10	近世〜近代　単層。7.5YR 5/8 明褐色シルト〜極細砂。しまり弱、混入物なし。	
SD5001	5区-1	9-I3〜I4	1	Ⅱ	29	近世〜近代　1：7.5YR 5/8 明褐色シルト〜極細砂。しまり弱、炭化物を僅かに含む。2：7.5YR4/6褐色シルト〜極細砂。炭化物を含む。東西方向（N 71°W）。	土器グスク器種不明(胴1)、青磁Ⅰ-Ⅱ類碗(口1)、沖無器種不明(胴2)、石器・石製品(敲摩石1)
SD5002	5区-1	9-J3	1	Ⅱ	25	近世〜近代　石列を伴う溝状遺構　1：10YR 4/6 褐色シルト〜極細砂。しまり弱、炭化物・焼土含む。2：7.5YR 4/6 褐色シルト〜極細砂。しまりやや強。明褐色ブロックと僅かに焼土が含む。北西‐南東方向（N61°W）。	朝鮮系陶器A群器種不明(胴1)、青磁器種不明(胴2)、白磁器種不明(胴1)、青花碗(口1)、沖施C類碗(口3)、沖無壺or甕(胴2)・擂鉢(胴1)・器種不明(胴5)、陶質土器鉢(口1)
SX5001	5区-1	9-I3	1	Ⅱ	25	近世〜近代　単層。7.5YR 5/8 明褐色シルト〜極細砂。しまりやや強、混入物なし。北東-南西方向（N25°E）。	
SX5002	5区-1	9-J3	1	Ⅱ	4	近世〜近代。単層。10YR 4/6 褐色シルト〜極細砂。しまり強。SD5002に並行。北西‐南東方向（N54°W）。	
表採・Ⅰ層	土器宇佐浜式深鉢(口3)・貝塚前期器種不明(胴19)・貝塚後期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴6)、青磁同安窯系Ⅰ類皿(口1)、白磁C3群碗(胴1)・ピロースクC3群碗(底1)、青花碗(口1)、本陶器種不明(胴2)、本磁A類碗(口〜底2、口11、底2)・B類碗(口〜底2、口2)・B類小碗(口〜底5、口4、胴2、底2)・B類皿(口〜底3、口1)・B類杯(口〜底1)・B類小杯(口〜底1)・C類碗(口〜底2)・D類碗(口〜底2)・D類小碗(口1)・E類小碗(口〜底1、口4、底1)・E類壺(口〜底1)・F類碗(口1)・F類小碗(口〜底2、底2)・F類急須(注口1)・F類器種不明(胴8)、沖施A類碗(口2)・B-1類碗(口1、胴1、底1)・B-2類碗(胴1)・C類碗(口1、胴2)・C-2類碗(口〜底2、底1)・分類なし小碗(底4)・皿(口〜底1、口1)・壺(胴2)・鉢(口1、底1)・灰皿(口〜底1)・急須(口1)・袋物(胴1、底1)・器種不明(胴7)、沖無壺(口1、胴2)・壺or甕(胴8、底3)・袋物(胴1)・器種不明(胴7、底1)、陶質土器器種不明(胴2)、石器・石製品(敲摩石1、磨斧1)、石材(3)、青銅製品(煙管1)、焼土(1)、瓦(丸1)	

・出土遺物は中国産褐釉陶器：中褐、本土産陶器：本陶、本土産近代磁器：本磁、沖縄産施釉陶器：沖施、沖縄産無釉陶器：沖無と略称した。



第 92 図　普天間グスクンニー遺跡の遺構



第 93 図　普天間グスクンニー遺跡出土遺物

第 45 表　普天間グスクンニー遺跡遺物観察一覧

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
1	貝塚前期土器	深鉢	宇佐浜式か	―	―	―	砂質で石英や石灰質砂粒を含む。肥厚部のつくり雑。	5区 9–H1 表採
2	中国産青磁	皿	同安Ⅰ類	―	―	―	釉は薄い透明釉。胎土灰白色。口縁端部尖る。内面に櫛描文あり。	5区 9–I2 表採
3	本土産近代磁器	小碗	E類	8.0	4.7	3.2	畳付は釉剝ぎ。外面に色絵による草花文。残存は非常に不良。素地は緻密で白色。	9-H1 表採
4	本土産近代磁器	小碗	B類	8.2	4.7	3.0	外面にゴム判による吉祥文字と蓮弁文。素地は緻密で白色。瀬戸・美濃系。	9-H3 表採
5	本土産近代磁器	小碗	F類	8.2	4.35	3.2	口縁部下部に青色の三重の圏線。国民食器。	9-H3 表採
6	本土産近代磁器	小杯	B類	5.8	2.8	2.3	底部は桜型に成形。口縁部2カ所に緑色と青色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	9-H3 表採
7	沖縄産施釉陶器	小碗	―	―	3.8	―	白化粧後、透明釉。胎土灰赤褐色。外面に呉須や褐釉で施文。	5区 9-H3 表採
8	沖縄産施釉陶器	皿	―	16.4	7.1	5.2	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状の釉剥ぎ。内面呉須と褐釉で施文。	5区 9-H1 表採
9	沖縄産施釉陶器	灰皿	―	10.8	5.8	4.6	内面・外面胴部以下露胎。胎土灰黄色。内湾口縁で一部に凹みを設ける。口縁部緑釉で施文。	5区 9-I4 Ⅰ層
10	青銅製品	煙管	―	11.5	―	―	青銅製の延べ煙管。火皿部欠損。重量16.5g。	5区 9-I4 Ⅰ層

※法量の単位はcm、器物以外は長軸・短軸・厚さとする。

第４節　自然遺物

脊椎動物遺体

今回の発掘調査で得られた脊椎動物遺体は、当センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。

普天間グスクンニー遺跡では、計３点の脊椎動物遺体が出土している。

哺乳類　得られた資料は、すべて哺乳類である。

ネコ　表面採集された資料。遺跡との関係性は不明。

イノシシ / ブタ　SD5002 埋土から出土しているが、出土数が限られている状況から、自然に混入した可能性が高い。

ヤギ　Ⅰ層出土資料。遺跡との関係性は不明。

第 46 表　普天間グスクンニー遺跡

層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	―	計
表採	ネコ	脛骨	近位部 - 遠位端	―	―		1			1
SD5002 埋土	イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	M_2/M_3	―	―			1		1
Ⅰ層	ヤギ	遊離歯（下顎）	M_2	―	―	1				1
合計						1	1	1	0	3

第５章　普天間下原古墓群の調査成果

第１節　調査の方法

調査前の状況　調査前は、谷状地形の斜面地に樹木が繁茂している状況で、地表には腐葉土が堆積している状況であった。古墓群の多くは、墓口や屋根・袖垣が良好に残存し、墓室内や墓庭には厨子甕の破片などの遺物が散乱していた。中には、基地造成土によって墓口の上部のみが僅かに確認できるものや、屋根が陥没しその上に崩落土が堆積しているものも確認された。

調査の工程　調査は、伐採・除草作業から着手した。その後、磁気探査を実施し安全を確認した後に人力により表土除去・検出作業を行ったが、表土が厚く、人力による掘削が困難な古墓は重機により掘削を行った。基地造成によって墓庭や墓室内などほぼ全体が埋没し、掘削に際して経層探査が必要なほど造成土が厚く堆積している墓もあった。

検出作業が完了した古墓から、検出状況の写真撮影と図化作業を行った。モルタルや漆喰で目張りされているものは、これらを剥がし、石積みの構造を記録した。また、墓の構築方法について検討するため、必要に応じて屋根や墓庭・袖垣のトレンチ掘削を行った。

遺物の取り上げにあたっては、調査区のグリッドは用いず、墓の部位名称で取り上げを行った。

包蔵地範囲外の古墓の取り扱い　新規確認された古墓のうち、当初の包蔵地範囲外となる普天間石川原第一遺跡の発掘調査区で確認された埋没墓については、宜野湾市教育委員会と調整を行い、古墓群の包蔵地範囲を変更して古墓群に含めており（第１章第３節第３項に記載）、本章でまとめて報告する。

なお、普天間石川原遺跡で出土した厨子甕のうち、墓室内や墓周辺から出土したものは本章にまとめている。

地区　地区分けの方針として、北側の谷状地形に所在する古墓群を北地区、南側の緩斜面地に点在する古墓群を南地区とした。さらに、北地区の古墓群は北側斜面（北１地区）と南側斜面（北２地区）で分けている。各地区の古墓のうち、今回調査実施した古墓は第 94 図の通りである。古墓の位置図は第 96 図（121 頁）に示す。

墓番号　墓番号は、宜野湾市教委の確認調査によって１～ 23 号墓まで番号が付けられていたため、本調査でも踏襲した。新規確認された古墓は、続けて 24 号墓、25 号墓‥とした。

写真撮影　撮影の方針は普天間石川原第一遺跡の調査と同様である（第３章第１節記載）。墓室内の撮影に際しては、ストロボを用いた。

実測　実測は当センター職員の監理のもと、支援業者である株式会社イビソク・株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、現地で確認･指示を行った。墓の平面図･正面および袖垣の立面図作成は写真測量・三次元レーザー測量、断面図・トレンチの土層図作成は人手もしくは測量機器を用いて行い、墓ごとに展開図を作成した。

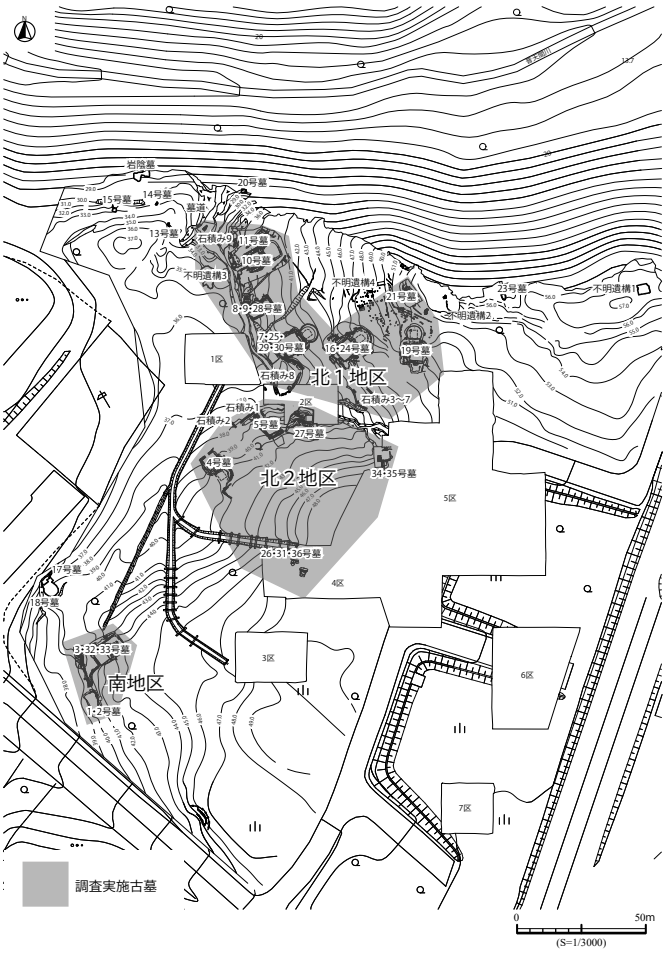
観察　墓の観察項目を取り決めた観察カードを作成し、墓ごとに所見や出土遺物などを現地で記載した。

注記　遺物の注記は、「東フテ･〇号ボ･出土場所･層名」としている。

人骨の分析　人骨は、墓室内の厨子甕内に納められた状態で出土したものや墓室内および墓庭で出土したものがある。27 号墓の墓室内で確認された厨子甕の人骨納骨状況の図化作業と人骨取り上げ作業は、当センター職員の管理のもと、株式会社埋蔵文化財サポートシステムが実施し、作業進捗にあわせて確認・指示を行った。

被葬者の情報を得るため、土肥直美氏に納骨状況の現地確認と、出土人骨の分析を委託した。

銘書の分析　厨子甕の身や蓋には銘書があるものが出土しており、銘書から墓所有者や使用期間について検討するため、山田浩世氏に依頼して銘書の分析を行った。



第 94 図　古墓群の地区

第２節　古墓の概要と基本層序

今回の調査は当初 11 基の墓が調査対象であったが、調査で新たに墓が検出されるとともに、工事範囲拡張に伴う調査対象古墓の追加もあった。分布調査時には墓としていたが、墓以外の可能性がある遺構や、人為的痕跡が認められなかったものも含めると最終的に計 29 基の調査となった。

１　墓の分類と概要

墓の分類　本報告における墓分類と名称は、名嘉真宜勝の研究を参考した（名嘉真 1972・1979・1999 等）。殆どが琉球石灰岩岩盤を横穴に掘り込む掘込式（名嘉真・高宮 1975）の墓であり、掘込墓は岩盤の自然形状を利用したもの、墓室を方形状に掘り込んだものがある。

掘込式で屋根や墓庭を構築するものは、正面の装飾や屋根形状から平葺墓・破風墓・亀甲墓に分類できる。亀甲墓のうち、切石積みにより墓室内の天井をアーチ状に構築したいわゆるマチ墓がある（19 号墓）。

さらに、墓の袖垣付近に構築され仮墓と呼称される小規模な墓がある。幼児あるいは自殺者、戦死者などは袖垣に仮墓を作り、一時的に葬るとされる（名嘉真 1979）。また、本報告における墓の部位名称は第 95 図のとおりとする。

墓の方位　墓の向きは概ね西方（北西～南西）に向くものが多い。風水上、墓口を家の方向に向けることは良くないとされ、普天間古集落が所在する東方に向く墓は存在しない。意図的に集落の方向を避けて墓を造営していると考えられる。

墓室の分類　堀込墓の墓室は、墓室内に「コ」の字状の棚と奥に複数の段を持つもの、棚を持たないもの（棚なし）に大きく分けられる。「コ」の字状棚は、平坦なものと段を有するものがあり、仁王浩司による墓室分類（仁王 2013）の平坦コの字状棚系と有段コの字状棚系に該当し、平坦コの字状棚系のものが殆どである。中には奥壁に壁龕状のイケを有する墓もある（10 号墓）。

２　基本層序

墓の構築から使用に伴う堆積状況、墓の構造を把握するため、可能な範囲で屋根や墓庭・袖垣を断ち割り堆積状況を記録した。墓の堆積状況は以下に大きく分類できる。

Ⅰ層　表土層や基地建設に伴う造成層など墓廃絶後の堆積層。普天間下原古墓群が所在する一帯は谷状地形のため基地建設時に大規模な造成がなされた。そのため墓全体が埋没し分布調査時には把握されず、調査時に新規確認された墓がある。一部の墓で基地接収時に移転され空き墓となった後に造成され、墓室内まで造成土が堆積していたものがある。

調査時は、墓の検出を優先するためにまず表土層の除去、造成土の掘削を行ったために、埋没状況は殆ど図化していない。調査で得られた遺物は、墓検出時にⅠ層として回収されたものが殆どである。

Ⅱ層　墓構築から使用に伴う堆積層。墓を構築する際の造成や石積み構築に伴う堆積、墓使用時の地表面と考えられる。墓構築に伴う造成土は下記のように細分する。

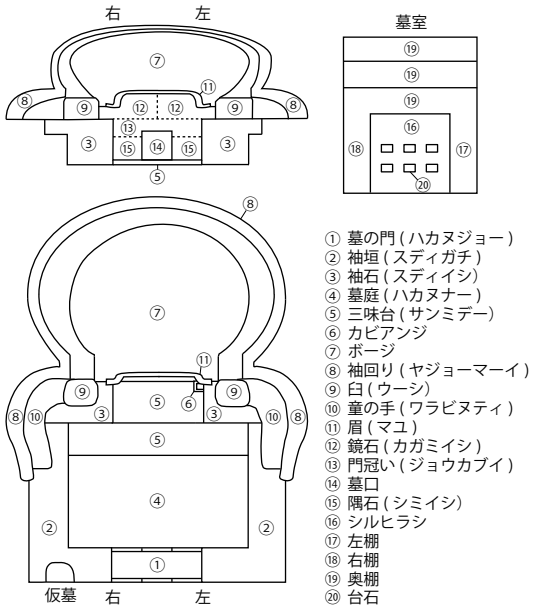
Ⅱ－１層　褐色土層。礫を多く含むものと少ないものがある。マージの掘削･切土時に発生した土と考えられる。

Ⅱ－２層　コーラル層。琉球石灰岩の掘削時に発生した土と思われる。石灰岩が風化・軟質化した土も本層に含めている。

Ⅲ層　グスク時代～近世の耕作土（普天間石川原第一遺跡・グスクンニー遺跡基本層序Ⅱ・Ⅲ層）に類似する層で、墓構築以前の堆積層と考えられる。

Ⅳ層　地山のマージ。

Ⅴ層　琉球石灰岩岩盤。



第 95 図　亀甲墓の部位名称（名嘉真 1997・1999 参考）

第３節　古墓と出土遺物

本節では各墓および墓以外の遺構について、出土遺物とあわせて報告する。なお、隣接する墓や袖墓・仮墓など関連する墓はまとめている。

（１）遺物の分類と概要

古墓からは厨子甕を中心に沖縄産陶器や本土産陶磁器のほか、副葬品と考えられる銅製指輪などが得られている。貝塚時代からグスク時代の遺物も出土しており、これらは普天間石川原第一遺跡や普天間グスクンニー遺跡に関連するものと考えられる。

１　厨子甕

厨子甕は総数 195 点出土している。最小個体数は蓋 12 点、身 24 基で、身が多く、蓋と身が対応する厨子甕は少ない。また、転用品とみられる沖縄産無釉陶器の甕や壷も出土しているが、本項では含めていない。

厨子甕の形式については、安里氏や宮城氏の分類を参考に、材質や形態、釉薬の有無などから、石厨子（大堀 2016）、ボージャー厨子（上江洲 1980）、マンガン釉甕形厨子（安里 1997）、マンガン釉庇付甕形厨子（上江洲 1980・安里 1997）、荒焼御殿形厨子（宮城 2020a）、上焼御殿形厨子（宮城 2020b）の計６タイプが確認された。最も出土数が多かったのはマンガン釉甕形厨子で 105 点、次いで上焼御殿形厨子で 78 点となっている。

Ⅰ類　石厨子　サンゴ石を素材とするもので、１基出土している（35）。屋根形態は入母屋形（34）で、大堀分類２Ｈ類（17 世紀後半～ 18 世紀主体）にあたる。

Ⅱ類　ボージャー厨子　口縁部が内湾するような形で胴部に装飾は施されない（96）。蓋はつまみがないタイプ（95）が出土しているが、先述した身との対応関係は不明。どちらも上江洲分類の新式（1732 ～ 1790 年頃）にあたる。

Ⅲ類　マンガン釉甕形厨子　沈線や粘土貼付によって、外面を装飾する荒焼の甕形厨子である。屋門上下に施される横帯や屋門左右に施される蓮華文の表現技法、屋門の形態などから４つに細分した。また、少数だが小型厨子（口径 21cm 以下・器高 40cm 以下）も確認された（105・149・169）。小型厨子は一般的に幼児用とされるが、例外として、火葬や何らかの事情で遺骨が少ない場合にも使用するとされている。なお、幼児の死者等を納める袖墓（35 号墓）を伴う 34 号墓周辺から出土した小型厨子（180 ～ 182）については、幼児用の可能性が高いと考えられる。

Ⅲａ　横帯や蓮華文が粘土貼付になるもの。安里分類Ⅲ期（1810 ～ 1850 年代）にあたる。本遺跡からは１基出土しているが、破片のため、図化していない。

Ⅲｂ　肩部付近の横帯は粘土貼付、屋門下の横帯および蓮華文は沈線となる。また、屋門は唐破風形（167）とアーチ形（42・122）がある。安里分類Ⅳ期（1850 ～ 1890 年代）にあたる。

Ⅲｃ　横帯や蓮華文が沈線表現になるもの。屋門はアーチ形を基本とするが（20・74・75）、二重屋根を表現するものもある（121）。安里分類Ⅴ期（1900 ～ 1920 年代）にあたる。

Ⅲｄ　横帯や蓮華文、屋門が沈線表現になるもの（105）。屋門を描かないものもある（149・169・180 ～ 182）。いずれも幼児用と考えられる。安里分類Ⅵ期（1930 年代以後）にあたる。

Ⅳ類　マンガン釉庇付甕形厨子　マンガン釉甕形厨子に庇を有するもの。1790 ～ 1940 年代初頭の製作とされるが、（174）は屋門が唐破風形で、安里分類Ⅲ期（1810 ～ 1850 年代）にあたる。

Ⅴ類　荒焼御殿形厨子　釉薬が掛からない荒焼の御殿形厨子で１基出土している（38・39）。宮城分類Ⅲｂ式（1800 ～ 1850 年代頃）にあたる。

Ⅵ類　上焼御殿形厨子　褐釉や緑釉、呉須などで色付けされた上焼の御殿形厨子である。屋根や屋門、庇の形態、文様表現などから５つに細分した。また、外底にクワズイモの葉形やバナナ・芭蕉などのバナナ科と思われる葉形が確認された。いずれも葉の長軸が 15cm 以上になる大型の植物で、葉にはツヤがあり、製作途中の製品を敷板などから取りやすくする剥離材として、下に敷いていたと考えられる。

Ⅵａ　屋門は瓦表現を有しない寄棟形で左右に蓮華文と像を粘土貼付。胴部には庇を有しない（147）。屋根が未出土のため、屋根形態不明。施釉については、褐釉を全体に掛け流す。宮城分類のⅢｂ式（1800 ～ 1860 年代）にあたる。

Ⅵｂ　屋門は瓦表現を有する寄棟形で左右に蓮華文と像を粘土貼付。胴部には庇を有し、庇と蓋の間は格子表現を施す（67）。屋根形態は二層唐破風形となる（66）。施釉については、Ⅵａ類同様に褐釉を施す。宮城分類Ⅲｃ式（1858 ～ 1881 年）にあたる。

Ⅵｃ　屋門は庇と接続する形で左右に蓮華文と像を粘土貼付。庇と蓋の間に格子表現を施す。施釉は白化粧後、褐釉や緑釉を施す。宮城分類Ⅳａ式（1850 年代後半 ～ 1898 年）にあたる。庇の形態で細分され、庇が唐破風形になるⅥｃ－２は 1879 ～ 1895 年に年代が分布し、近代に多い資料とされる。

Ⅵｃ－１：庇が水平になるもの（70・172）。

Ⅵｃ－２：庇が唐破風形になるもの（68・69・173）。

Ⅵｄ　屋門は庇と接続する形で左右に蓮華文と像を粘土

貼付。胴部には水平の庇を有し、庇と蓋の間の格子表現は薄くなる（37）。屋根形態は変形唐破風形となる（36）。宮城分類のⅣｂ式（1888 ～ 1906 年）にあたる。

Ⅵｅ　屋門は唐破風形で左右に蓮華文と像を粘土貼付。胴部に庇を有しない。施釉については、白化粧後にコバルト釉を施す。裏面には「南無阿弥陀仏」の文字が入る（171）。宮城分類Ⅴ式（1894 ～ 1929 年）にあたる。

２　沖縄産施釉陶器

総数 170 点出土しており、碗、小碗、鉢、皿、小皿、小杯、瓶子、壷、酒器、袋物、急須、火取などがみられる。出土数が多くバリエーションがみられた碗・小碗は、釉薬の種類や施釉方法、文様の有無などから細分した。その他の器種は報告するものについて述べる。

碗

Ａ類　灰釉単掛けで胴部以下が露胎するもの。

Ｂ類　黒釉施釉。施釉方法から、以下のように細分した。**Ｂ－１**黒釉単掛けで胴部以下露胎。内底蛇の目状釉剥ぎ（107）。**Ｂ－２**外面黒釉、内面白釉掛け分け。内底蛇の目状釉剥ぎ（83）。

Ｃ類　白釉単掛け。**Ｃ－１**無文（99・129・130）。**Ｃ－２**有文（２・11・106）

小碗

Ａ類　黒釉施釉。**Ａ－１**黒釉単掛け。**Ａ－２**外面黒釉、内面白釉（100・110）。**Ａ－３**外面黒釉、内面灰釉。

Ｂ類　白釉単掛けのもの。**Ｂ－１**無文で胴部を面取りする（101）。**Ｂ－２**無文（３・131）。Ｂ－３有文（14・116）。

小杯　内外面に白釉を施す（155）。

瓶子　外底削りを施す（175）。

鉢　口縁部は逆Ｌ字状をなし、外面黒釉、内面白釉で掛け分け（４・77・132）。（184）は内外面黒釉。

皿　黒釉単掛けで胴部以下は露胎する（76）。

急須　線彫りによって施文される身（108）や蓋（187）、釉薬が単掛けされる急須（133）がある。

３　沖縄産無釉陶器

総数 246 点出土しており、碗、皿、鉢、擂鉢、水鉢、壷、甕、蓋などがみられる。壷および甕については、口縁部～胴部中央や側面を欠損する資料が 10 点みられ、厨子甕としての利用も考えられる。壷は口縁部の形態から細分した。その他の器種は、報告するものについて述べる。

壷　**Ａ類**玉縁状。**Ｂ類**方形状（56・123）

碗　底部片で内底に溶着痕が残る（185）。

皿　轆轤成形の燈明皿である（57）。

鉢　内面に擂り目がみられないことから鉢とした（６）。

擂鉢　内面全体に擂り目を施す（５・７・114）。底部付近は削りによって成形（55）。

甕　口縁部付近や胴部側面を欠損するものが多く（８・43）、厨子甕転用品と考えられる。また、（79）は複数の出土地から接合され、割って廃棄した可能性がある。

４　陶質土器・瓦質土器

陶質土器は総数 30 点出土し、鍋（13）、鉢（23）、火炉（78・115）がみられる。瓦質土器は盤（109）のみが出土しており、外面が黒色に燻され雲母や砂粒を多量に含む胎土の特徴は、瀬戸が本土系瓦質土器（瀬戸 2004）としたものに類似する。

５　本土産陶磁器

近世の本土産陶磁器、近代磁器が出土している。

本土産陶器　本土産陶器は４点出土。肥前産の染付碗や産地不明の瓶等が出土している。

本土産近代磁器　明治～戦前・戦中にかけて使用された磁器類で 97 点出土している。Ａ～Ｆ類が出土しており、Ｃ類・Ｄ類については小片のため図化していない。

Ａ類　型紙摺りによる絵付け。（44 ～ 46）はスンカンマカイであり、（45）は高台内に「○内に１Ｋ」と銘が入る。

Ｂ類　銅板転写やゴム判、吹き絵等による絵付け。瀬戸・美濃系が多く、銅板転写で風景を描くもの（25）、梅花文を描くもの（59）、ゴム判の丸文で草花文を描くもの（135）、吹き絵で富士山を描くもの（47）等がある。

Ｃ類　染付。碗の外面に草文を施すものがある。

Ｄ類　クロム青磁。碗や杯等の外面に染付で花文を描くもの、飛び鉋や陰刻、吹き絵等を施すものが出土。

Ｅ類　色絵。色絵は型紙を利用したものが多い。色抜けしているが赤と黒で鶴を描くもの（60）、杯の内面に草花文を描くもの（97）等が出土した。

Ｆ類　上記以外のもの。口禿の小碗で丸文を描くもの（128）。他に、緑の二重圏線が入った国民食器の碗等が出土している。

６　中国産陶磁器

総数 29 点出土し、分類記号は第３章に対応する。

青磁　龍泉窯系青磁では、Ⅱ類碗底部（188）があり、円盤状製品（63）もある。Ⅲ'類（164）は発色が鈍い釉調で、Ⅳ～Ⅴ類碗も出土している。碗以外では盤（62）や鉢がある。この他、磁竈窯系の碗（151）がある。

白磁　Ｃ３群碗の口縁部（165）と底部（61･154）がある。（152）は釉調や胎土がＤ’群に類似するが高台が異なる。この他に清代徳化窯産の白磁が出土している。

青花　清代徳化窯産のものが得られており、碗（102）、小碗（15・48）、蓮華（9）がある。

黒釉陶器　天目の底部が出土している。

７　銭貨

総数 26 点出土。銭種は寛永通寶、一銭（24・94）、米国の１セントである。このうち、寛永通寶は「寶」の書体から、古寛永と新寛永に分けられ、鋳造時期によって、さらに以下、３つに分けられる。

Ⅰ期【1636 ～ 1659 年】：古寛永（87・88・124・125・158）。

Ⅱ期【1668 ～ 1683 年】：新寛永・文銭（89・136）。

Ⅲ期【1697 ～ 1747 年】：新寛永（32・82・84・90 ～ 92・103・111・112・118・126・137）。

８　金属製品

金属製品は総数 45 点出土している。鉄製品と青銅製品、その他金属製品の３つに分けて報告する。

鉄製品　イヤ、釘（157）、レールなど総数 14 点が出土している。イヤ（33）は石材の切出し時に使用する工具である。墓入口より採集されており、墓に使用する石材の切出しや墓室内の岩盤掘削時に使用した可能性がある。不明製品（178・179）は 27 号墓の厨子甕内（171）より出土したものであるが錆膨れのため判然としない。

レール（10）は大きさから、５kg/m レールと考えられる。類似資料が南西側の普天間旧道跡でも確認されており、小規模な馬車軌道に伴うものと考えられている（長濱ほか 2021）。

青銅製品　指輪や簪（93）、煙管（12）など総数 26 点が出土している。指輪は被葬者の身分によって素材や文様の有無など違いがあったとされている。（21・138）は厚さ 0.1cm 以下で細い。（176）は 27 号墓の厨子甕（171）から指骨にはまった状態で出土しており、細い指輪は重ね着けしていたと考えられる。唯一有文の (22) は、日章旗や「日本」といった文字が描かれることから、旧日本軍に関連するものの可能性がある。

その他金属製品　瓶や簪、ボタンなど５点出土している。（49）は青錆が付着する瓶で、断面は非常に薄い。ジュラルミン製と考えられる。（170）は軽量でアルミ製の簪である。（156）は銅製のスナップボタンでわずかだが、布地もみられる。

９　瓦・瓦製品

屋根瓦と瓦製品がみられる。

瓦　総数 90 点出土している。そのうち 79 点が明朝系瓦で、丸瓦（143）、平瓦（144）、役瓦（142）に分けられる。また、凸部を有する組み合わせ式の平瓦（145）が 10 点確認されている。

瓦製品　板状の瓦製品で、上縁をアーチ状に成形している（153）。墨書や陰刻はみられないが、表裏面ともに平坦面をなすことから、瓦証文（墓の造成・入手譲渡経緯や敷地について記載する）または墓中符（子孫繁栄や長寿を願う呪符）と考えられる。

10　円盤状製品

５点出土した。素材は青磁（63）、沖縄産施釉陶器（117）と沖縄産無釉陶器（186）を利用しており、（117）は外面のみ、（63）（186）は内外面の剥離加工を行っている。

11　ガラス製品

ガラス製品はガラス瓶が主体で、その他にビー玉等が確認された。出土したガラス瓶は清涼飲料瓶、アルコール飲料瓶、薬瓶、化粧瓶に種類が分けられ、出土数は 99 点を数える。時代はほぼ近代から戦後直後の製品になる。産地としては外国製のガラス瓶が大半を占める。

清涼飲料瓶　コカ・コーラ瓶（17・53・54）は「Coca－Cola」ロゴがエンボス（陽刻）される。桜井分類でコカ・コーラⅢａ式１類Ａタイプにあたる（桜井 2019）。○と◇を組み合わせたマークはガラス会社「Owens－Illinois」の商標で、「45」は西暦の下二桁を示し、1945 年製造とされる（河西 2018）。他に図化を見送ったが、Ⅲａ式１類とⅢａ式１類Ｂタイプ相当のものも出土している。ペプシコーラ瓶（98）は「PEPSI－COLA」「RYUKYUISLANDS」と直接印刷（ACL）され、胴部にも印刷跡がみられる。また胴部下端には印刷のズレを防ぐための窪みであるラグ･ディンプルがある。「ウェーブボトル」と呼ばれる肩に網目状模様と「PEPSI COLA」の文字を交互に入れたエンボスが入る。桜井分類のペプシコーラⅠ式相当で 1940 ～ 60 年頃製造（桜井 2019）。

7UP 瓶（104）は印刷の一部分「セブンアップ」の文字が残る。胴部下端にラグ・ディンプルと 1960 年頃に考案されたナーリングと呼ばれる割れ防止の凸凹の加工が底部にあるため戦後以降の製品と考えられる。

この他、図化していないが三ツ矢サイダー瓶が出土している。底部に「三ツ矢」の陰刻があり、1905 ～ 1949 年製造とみられる（中野区教育委員会 1999）。

アルコール飲料瓶　ニッポンビール瓶（18）は肩部に「Nippon ☆ Beer」のエンボスが入る。日本麦酒社（のちのサッポロビール）1949 年頃製造。

薬瓶　薬瓶は医療用薬瓶（26）が出土。ラベルが貼れるよう隅丸長方形に区切られ、胴部の両端に目盛りがエンボスされる。他にも薬瓶と考えられるもの (51・64・65) が出土したが、内容物やメーカー名が明確なものは確認できなかった。

化粧瓶　化粧瓶は柳屋などのポマード瓶や化粧クリーム瓶、化粧水瓶（159）と考えられるものが出土した。

その他の瓶　（16・141）は全体に梨地状加工が施され、

胴部に「NOT TO BE REFILLED」「NO DEPOSIT　NO RETURN」（再利用不可）とエンボスされた内容物不明の瓶である。

その他のガラス製品　瓶以外のガラス製品はビー玉とガラス皿が出土しており、ビー玉は複数色（透明地に黄）と単色（瑠璃色不透明）のものが出土。ガラス皿は緑の二重圏線が施された厚手のものが出土している。

12　プラスチック製品

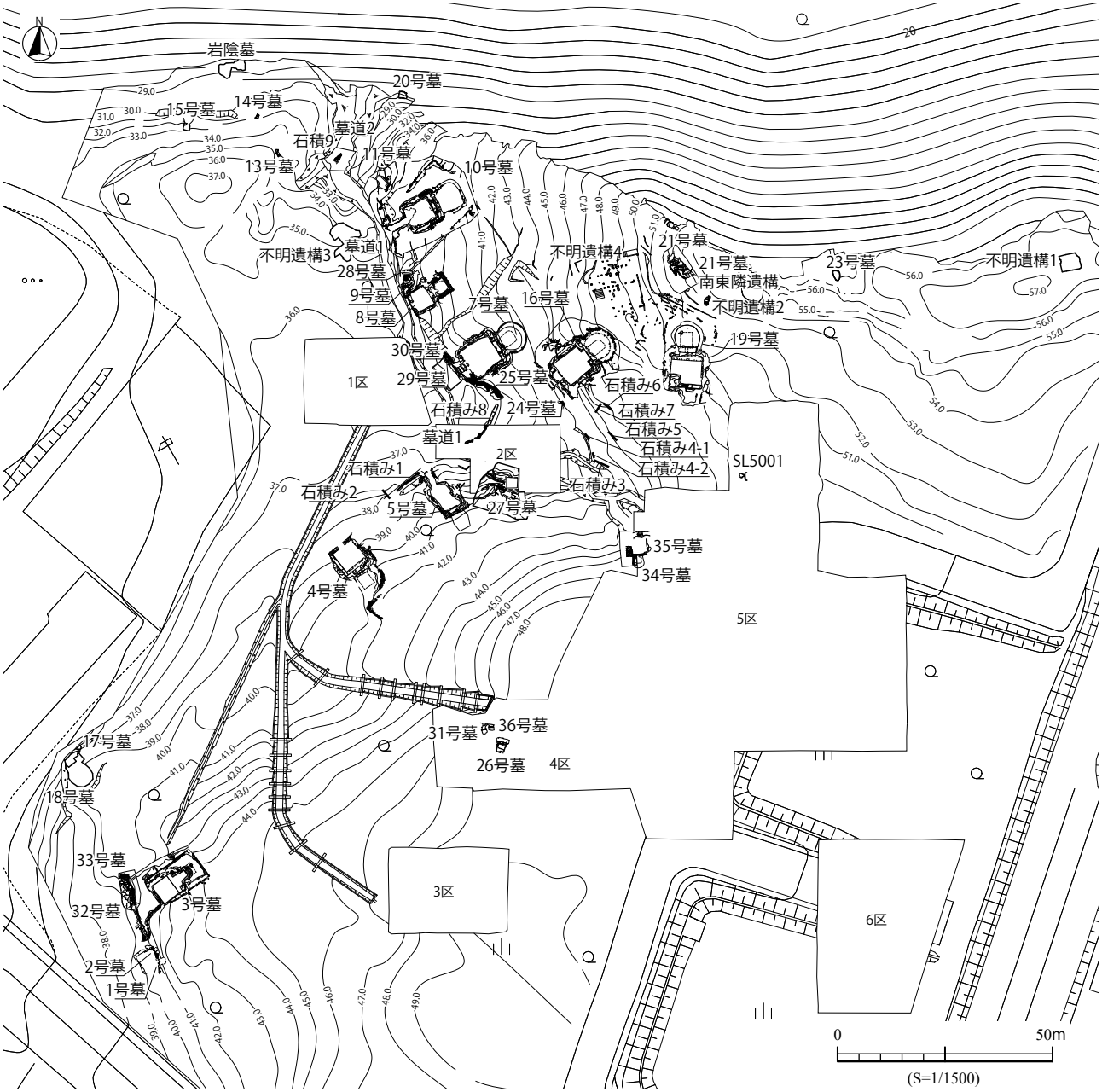
装飾の無い円形の二つ孔ボタン（119）が 1 点のみ出土している。

13　土器

総数 18 点出土し、宮古式土器の壺（163）が出土している。この他に貝塚前期土器は宇佐浜式があり、貝塚後期土器やグスク土器も胴部片が出土している。

14　石器・石製品

石器は石斧（86・162）や敲磨石類が総数 6 点出土している。また、石器の材料となるチャートなどの石材も総数 5 点出土している。石製品は石盤が 1 点出土している（161）。粘板岩製で、丁寧な研磨や擦り切り加工によって板状に成形している。



第 96 図　古墓の位置

（２）１・２号墓

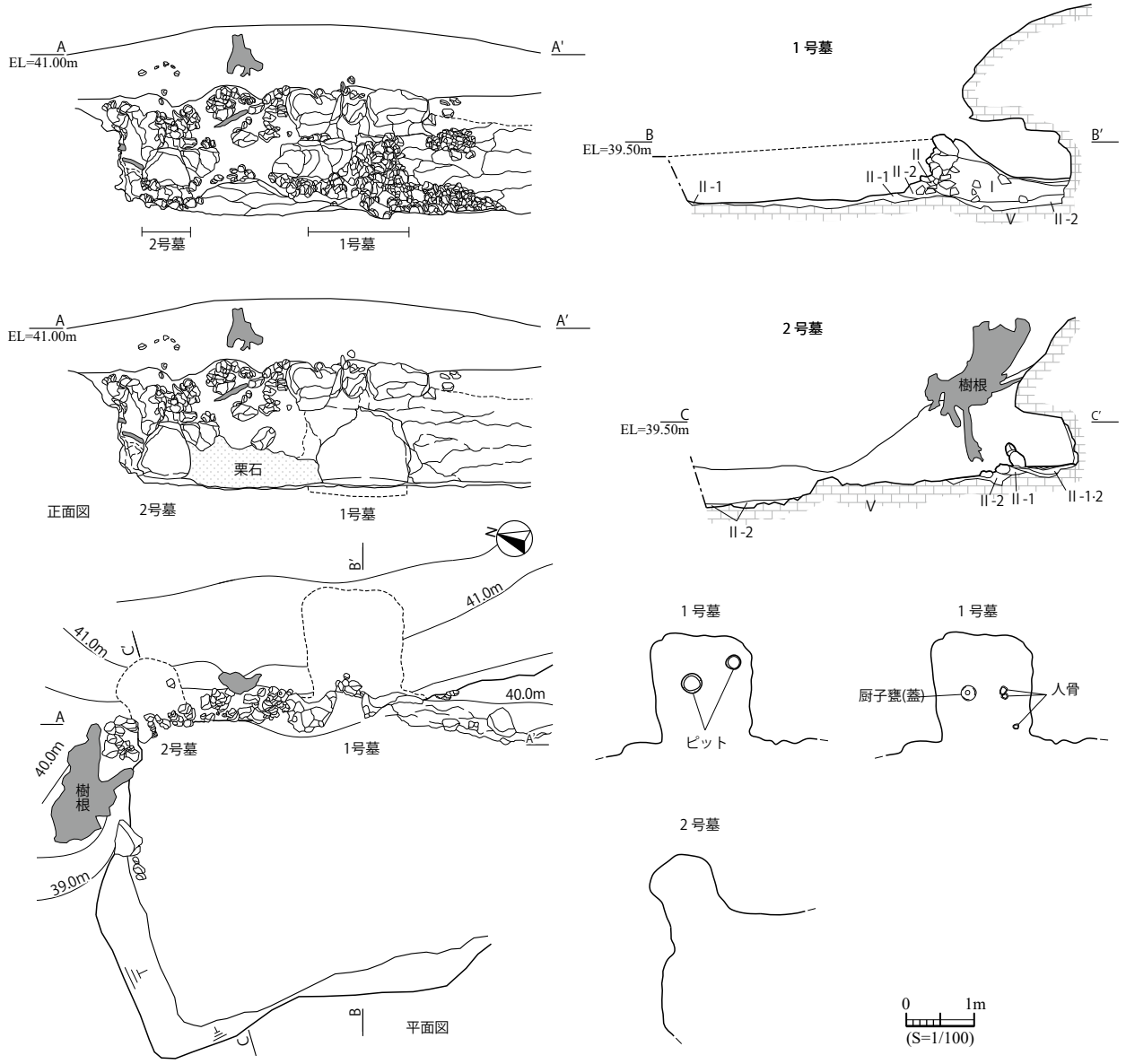
古墓群南地区の石灰岩丘陵南端に位置する。１・２号墓は隣接し南西に開口する掘込墓で、ともに空き墓である。着手前は墓庭から墓室内まで基地造成土によって埋没していた。

１号墓　掘込墓で、墓口は閉塞石積みが残る。20 ～ 30 ㎝の石灰岩礫を野面積みで積む。両袖は岩盤のくぼみを埋めるように墓口からの閉塞石積みが続く。１・２号墓間の上方には石積みが残存し、その下には石積み栗石とみられる細かい礫が広がることから、本来は１・２号墓を繋ぐ石積みが構築されていた可能性がある。墓検出時は石積みの上に 110 ｃｍ大の巨礫が落石し墓口は塞がっていた。墓移転の際に閉塞石が外された後、上部の岩盤が崩れたものと考えられる。

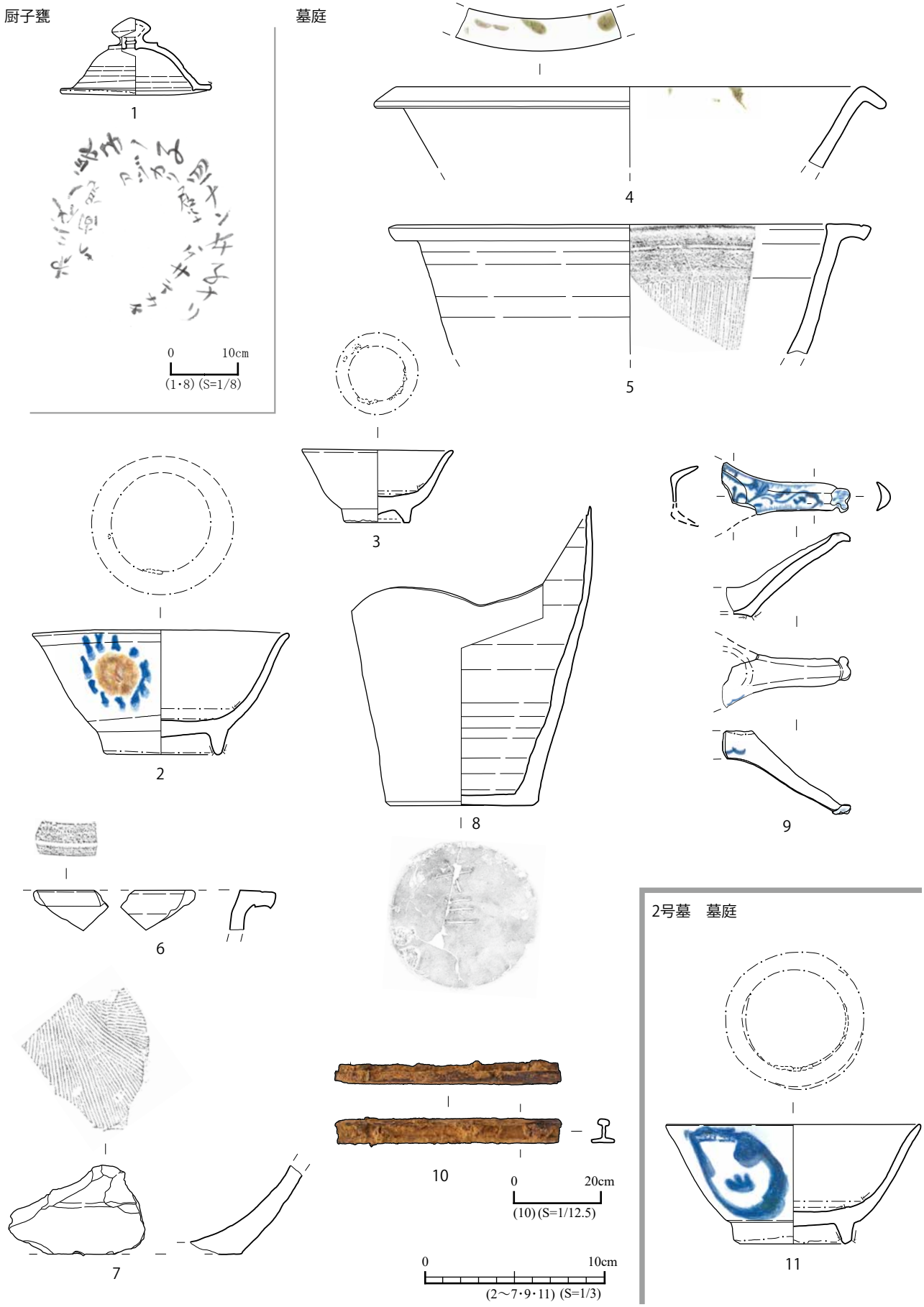
墓口から墓室にかけてコーラル（Ⅱ－２)、墓庭には褐色土（Ⅱ－１）が堆積している。この上面はやや硬化しており､墓の使用面と考えた。墓室は方形状に掘り込み、床面は墓庭より低い。床面にはピットが検出され１～７㎝程度で浅く厨子甕を据えた痕跡と思われる。

遺物は墓室内から厨子甕の蓋（１)、人骨片 (頭骨) が出土しており､墓移転時に残されたものと考えられる。墓口の巨礫前で沖縄産陶器 (８) が出土。基地造成土掘削時の磁気探査によりレール（10）が出土している。

２号墓　堀込墓で、墓口には 20 ～ 30 ㎝の石灰岩礫が列状に残り、閉塞石の根元部分と考えられる。右袖付近で転石がみられたことから、石積みがあった可能性がある。墓室は１号墓と比較すると小さく､床面は褐色土(Ⅱ－１）とコーラル（Ⅱ－２）が互層で版築状堆積である。遺物は沖縄産施釉陶器（11）がある。



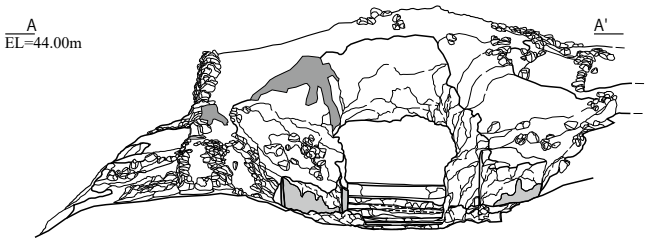
第 97 図　1・2 号墓



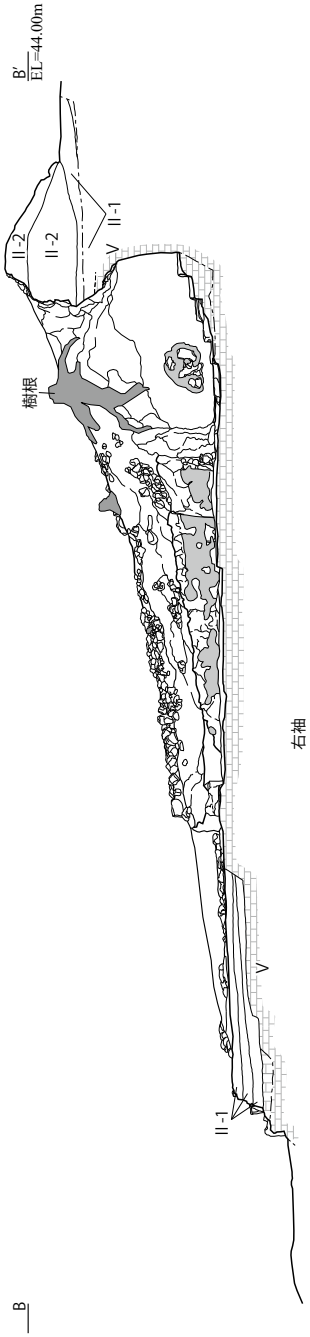
第 98 図　1・2 号墓出土遺物

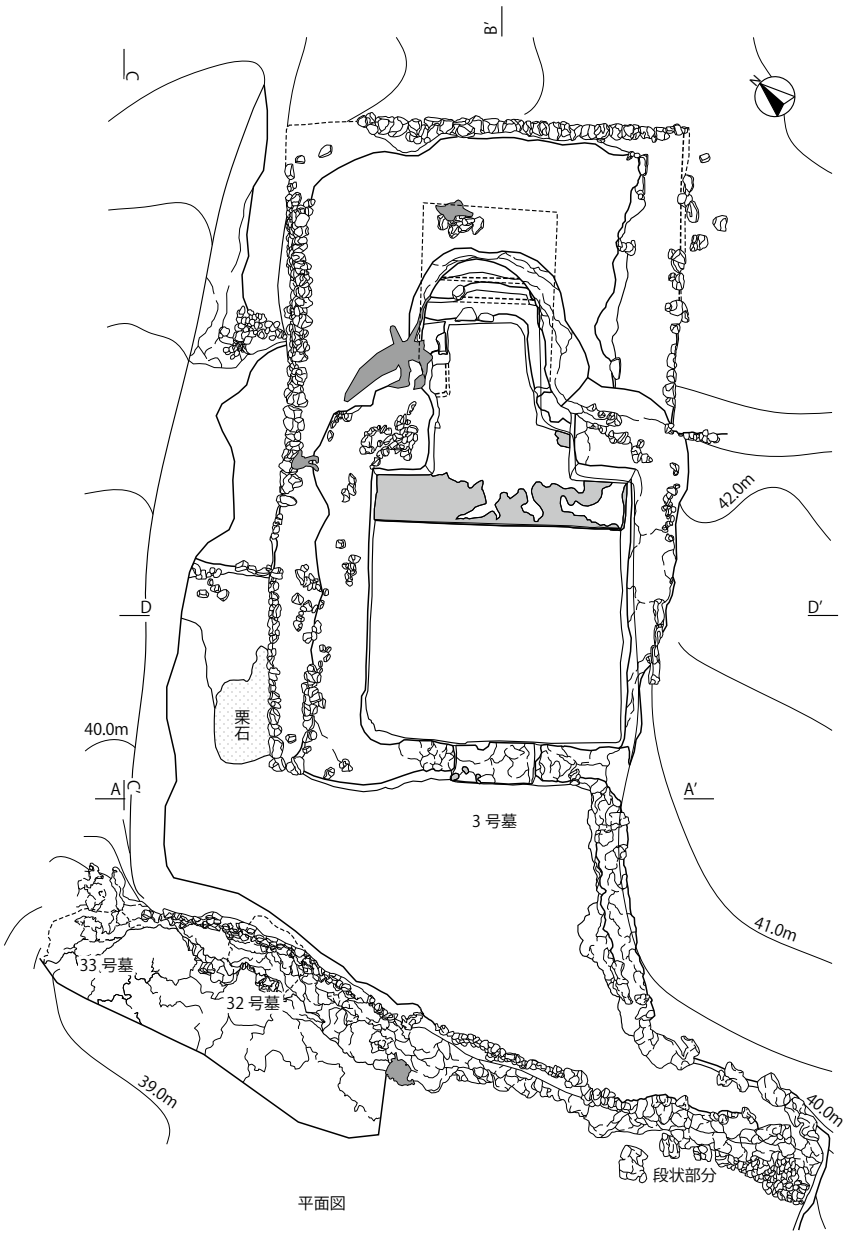
（3）3・32・33 号墓

古墓群南地区の石灰岩丘陵南西側に位置する。3 号墓は破風墓で、3 号墓の西側には埋没していた掘込墓（32・33 号墓）が今回の調査で新規確認された。32 号墓内には厨子甕が残されていた。3・33 号墓は空き墓である。



正面図





平面図

モルタル　0　2m　(S=1/150)

第 99 図　3 号墓 1

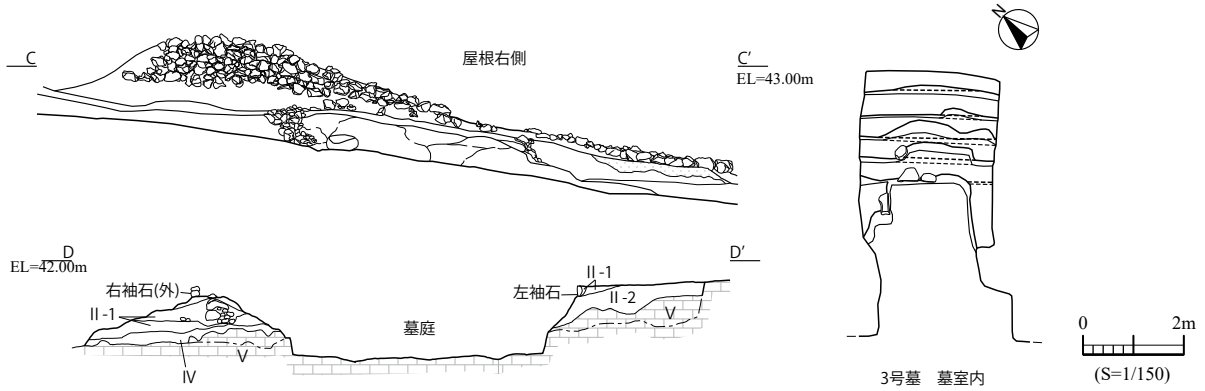
３号墓　破風墓で、堀込式の墓で屋根は破風となる。屋根の大部分は崩落し、正面の装飾などは不明である。

正面や三味台、袖はモルタル塗りである。墓室は有段コの字４段で岩盤を削り出している。墓室右壁にはモルタルで補修した痕跡がある。三味台や墓門も岩盤を削り出して構築している。墓構築時に墓域一帯を切土・岩盤を掘削し褐色土（Ⅱ－１）が造成されている。左右の高さを合わせるため、右側の造成は厚くなっている。屋根はコーラル（Ⅱ－２）を造成して作られ、屋根や袖垣の石積みは野面積みで積まれている。右袖垣の外側には土留と考えられる石積みが段状に構築されている。

３号墓門前には前庭となる空間があり、ここも岩盤掘削後に褐色土（Ⅱ－１）を造成し西側には土留と考えられる石積みが岩盤から野面積みで積まれている。この石積み下で掘込墓 32・33 号墓が検出された。

32・33 号墓の南西側には、岩盤が段状となる部分があり、階段が存在した可能性がある。この付近は昭和 20 年の航空写真の道がある付近であり、集落から墓に至る道跡で、墓への入口となる可能性がある。「道５」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015b）

遺物は墓室内から煙管の吸口（12）、周辺から染付（15）などが出土している。

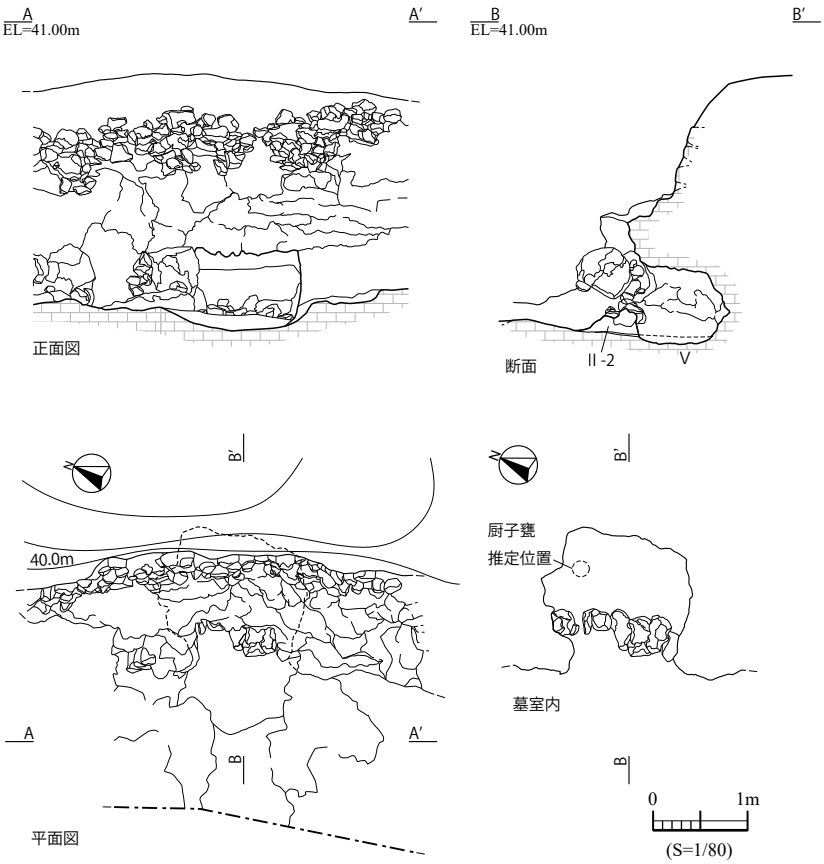


第 100 図　３号墓 2

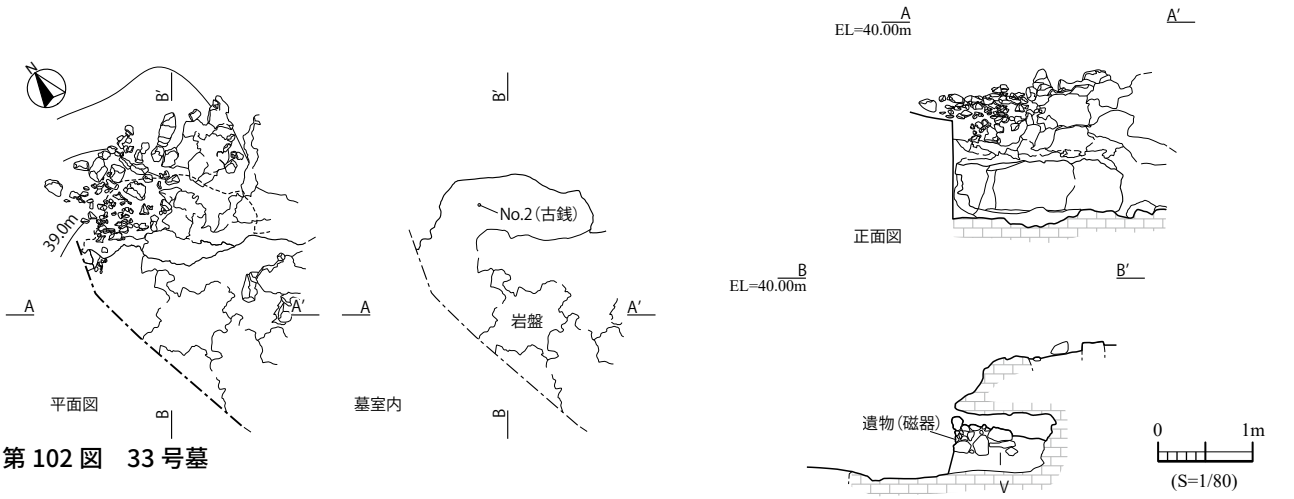
32 号墓　掘込墓で、墓口は石積みにより閉塞した状態で埋没していたが、造成土を掘削した際に石積みは崩落した。方形状の墓室内には厨子甕が１基あり、厨子甕内部に人骨が確認されたことから、調査を中断し墓地埋葬法に基づき官報公告を実施した後に調査を行った。公告期間中に雨による土砂が墓室内に流れ込み厨子甕が転倒し、内部に土が流入した。そのため、納骨状況を記録することができなかった。

墓室は方形状に掘り込まれ、床面は墓庭より低い。墓室内の厨子甕（19・20）は、Ⅲ－Ｃ類（マンガン安里Ⅴ式相当）で近代である。厨子甕内部には人骨とともに副葬品として交差する日章旗と「日本」の銘がある指輪（22）が納められていた。厨子甕（19・20）の人骨は複数体納められ、成人男性１体・成人女性１体と幼児１体の計３名とされた。

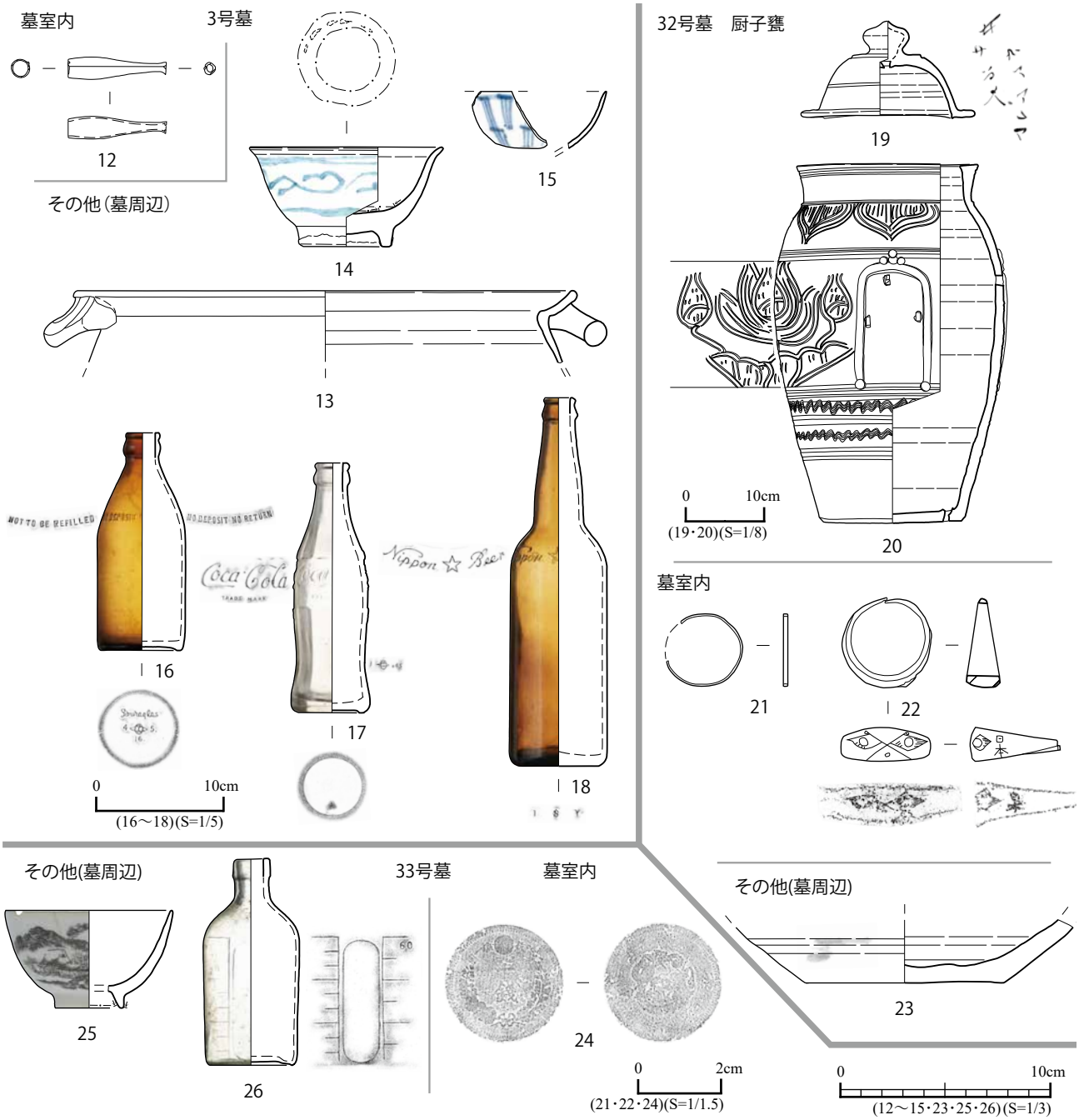
33 号墓　掘込墓で、墓室内は基地造成土によって埋没していた。床面からは近代銭（24）が出土した。



第 101 図　32 号墓



第 102 図　33 号墓



第 103 図　3・32・33 号墓出土遺物

（４）４号墓

古墓群北地区南側斜面（北２地区）の西側に位置する。掘込式の亀甲墓で、空き墓である。基地造成によって墓庭と墓室は完全に埋没していた。屋根は大きく撹乱を受け、眉や臼など正面の装飾も残存していない。

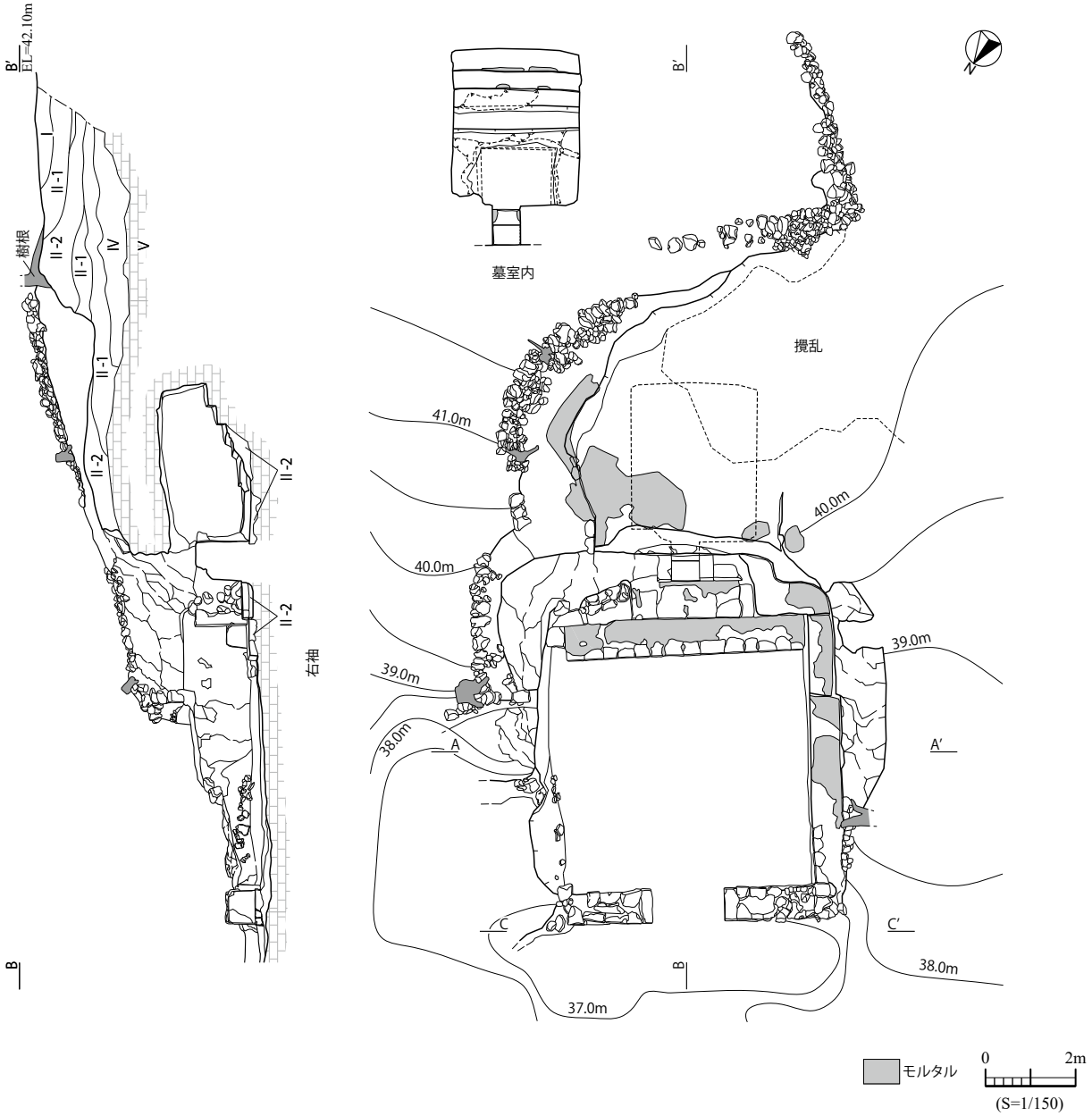
屋根や三味台、袖はモルタル塗りである。屋根（ボージ）は切土された地山に褐色土（Ⅱ－１）とコーラル（Ⅱ－２）を造成して作られている。袖回りは礫を配しており右側のみ残存している。

三味台は縁石があり２段となる。墓口も切石によって構築され隅石が残る。墓室内は岩盤を削り出して構築し、手前の棚は風化が進み明瞭ではないが、コの字４段と思われる。奥棚３・４段目や、左壁はモルタルで補修した痕跡がある。

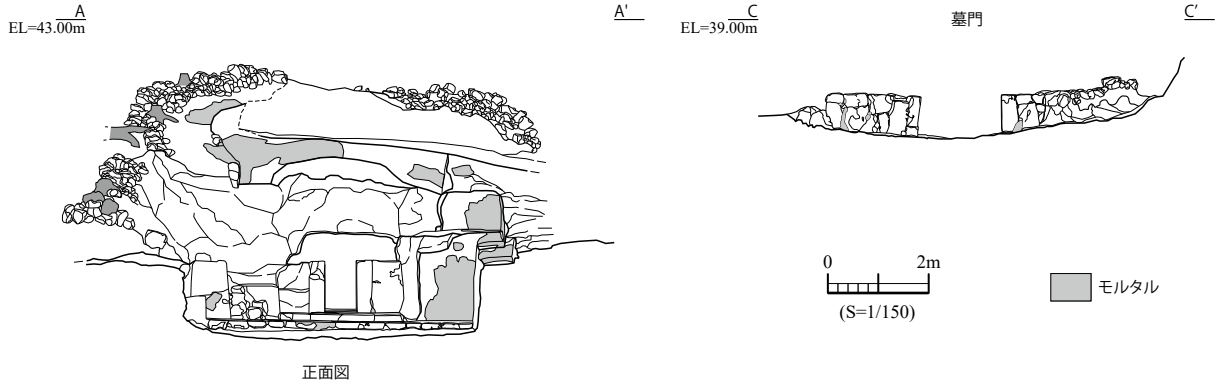
右袖は切石による布積みであるが、左袖は岩盤を削り出して構築しており、地形をうまく利用している。墓庭は岩盤を平坦に削り出している。

墓門は切石による布積みで構築されている。屋根の後方、墓南東側には野面積みの石積みがあり、墓域周辺を区画していたとみられる。

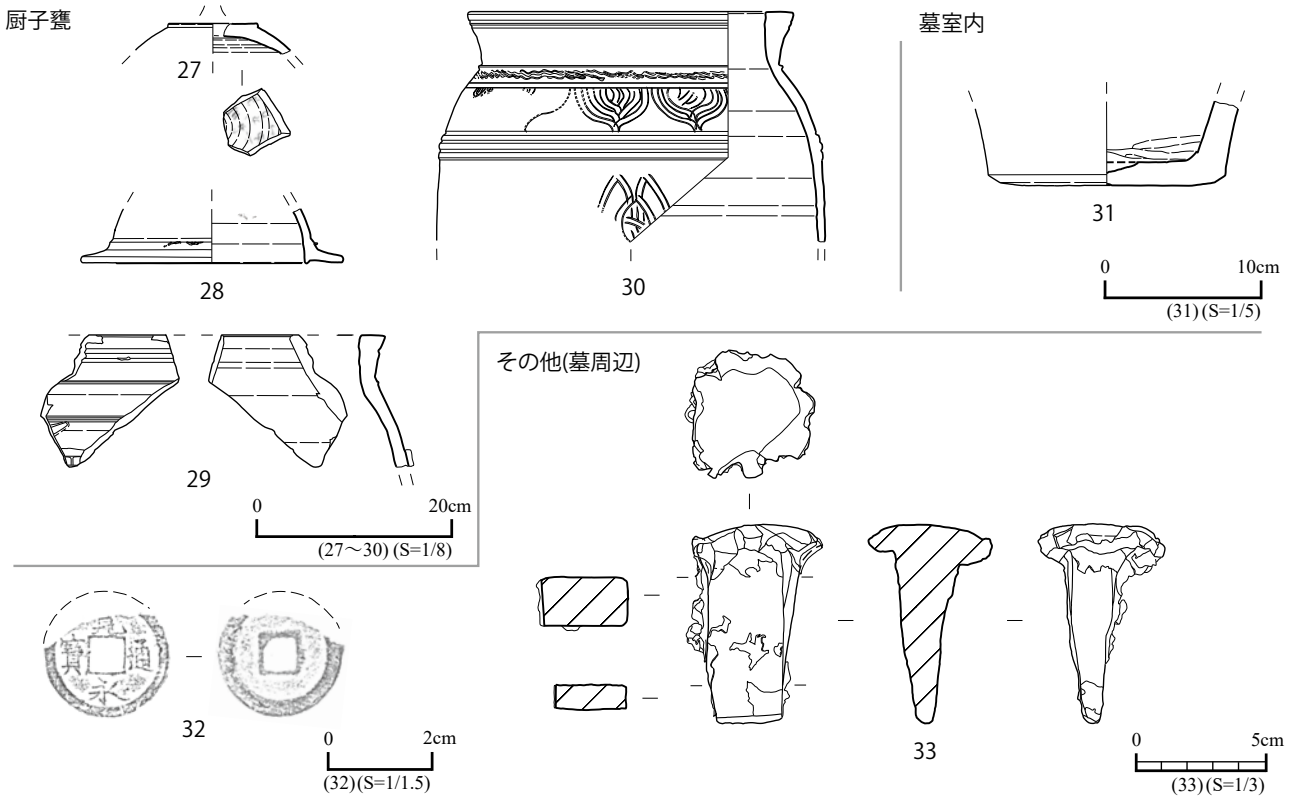
遺物のうち、厨子甕（30）はⅢａかⅢｂ類（マンガン安里ⅢかⅣ式相当）で 19 世紀代である。墓入口からはイヤ（33）が採集され、墓構築に伴うものの可能性がある。



第 104 図　４号墓１



第 105 図　４号墓２



第 106 図　４号墓出土遺物

（５）５号墓

北地区南側斜面（北２地区）にあり、４号墓の右隣に位置する。掘込式の平葺墓で、空き墓である。

正面は、岩盤の窪みに切石を積んで平坦に構築し、屋根も褐色土（Ⅱ－１）とコーラル（Ⅱ－２）を造成し平屋根となる。三味台は切石により構築され１段となる。

墓口は門冠・隅石となる切石を嵌め込み、隙間に小さめの切石を充填して構築し、さらに墓室側はモルタルも充填している。墓口上部の門冠石は蓋石を固定するための段を有し、墓口下部には石列が配されている。

墓室は平坦コの字２段で、岩盤を削り出して構築され、棚には縁石が配置されている。

袖及び袖垣は岩盤を削り出し、礫を配している。殆どの礫は崩落し、部分的に残存している。本来は石積みがあった可能性がある。墓口正面の門冠石付近から左袖・袖垣にかけて同じ高さで小孔が連続的に認められたともに、右袖側も同じ高さで岩盤が削り出された痕跡が確認された。墓正面から袖にかけて、門冠石の高さで何らかの装飾がなされていた可能性がある。

墓庭は表土直下で表面が硬化したコーラル及び岩盤風化土（Ⅱ－２）が検出され、この面を墓庭の使用面と考えた。墓門付近は褐色土（Ⅱ－１）を造成し、切石が配され段状となる。墓門から墓庭へはやや左寄りとなる。

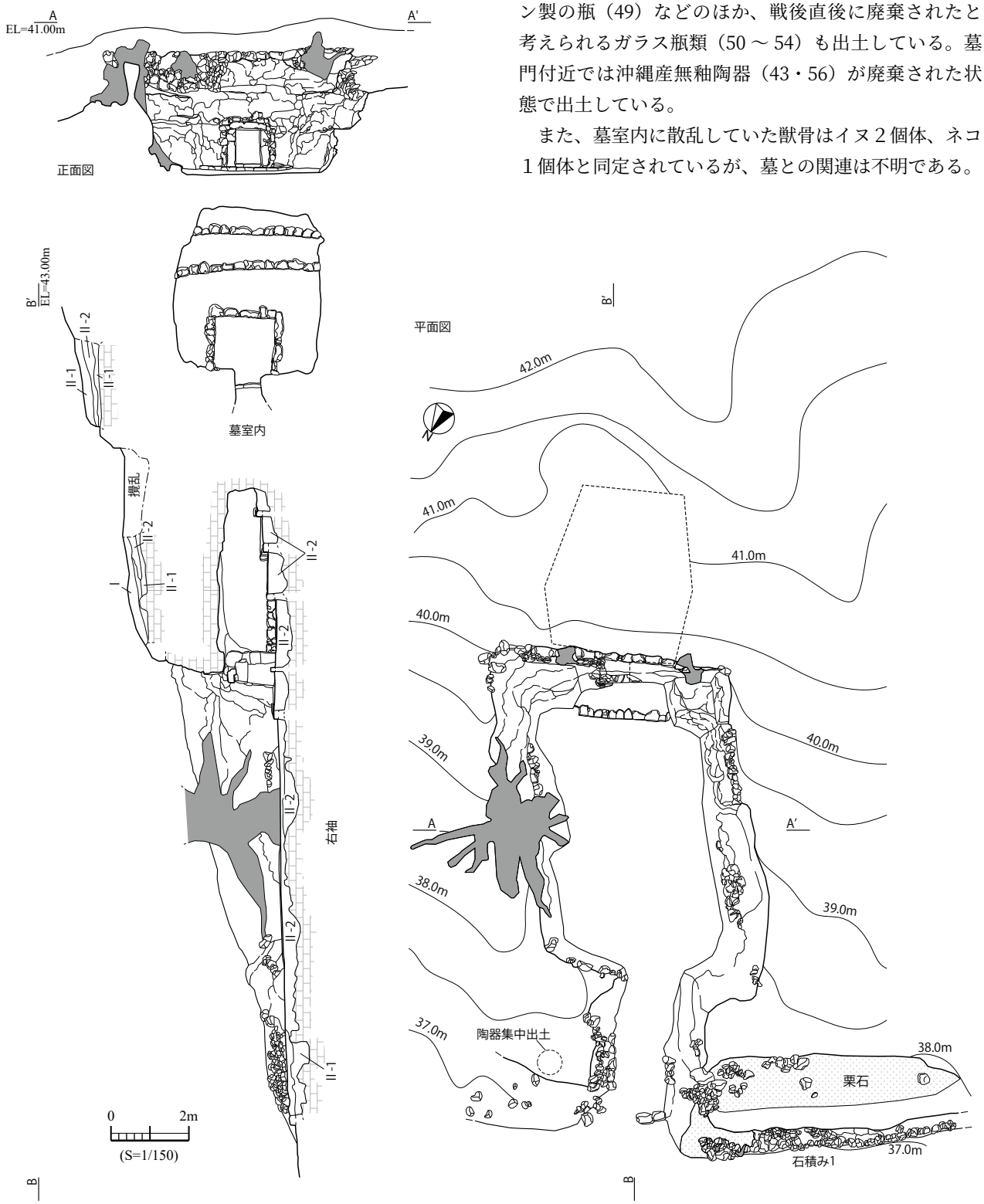
墓門から左側では石積み１が検出され、４号墓が所在する方向に伸びる。右側では礫が検出され、石積みあるいは石列としては不明瞭であったが、北西側に位置する

石積み８の向きから推測すると５号墓と７号墓は石積み８によってつながる形で区画されていた可能性がある。

最も遺物が多く出土した墓であり、墓庭に厨子甕の破片や近代磁器、ガラス瓶類が散乱し、墓室内には獣骨が散乱していた。墓庭から出土した厨子甕のうち、（35）はⅠ類（石厨子大堀２Ｈ類相当、18 世紀代）、（39）はⅤ類（荒焼宮城Ⅲｂ式相当、19 世紀前半）、（42）はⅢｂ類（マンガン安里Ⅳ式相当、19 世紀後半）で、18 ～ 19 世紀代の厨子甕が得られている。（36・37）は厨子甕Ⅵｄ類（上焼宮城Ⅳｂ式相当）で近代と考えられる。

墓庭からは本土産近代磁器（44 ～ 47）やジュラルミン製の瓶（49）などのほか、戦後直後に廃棄されたと考えられるガラス瓶類（50 ～ 54）も出土している。墓門付近では沖縄産無釉陶器（43・56）が廃棄された状態で出土している。

また、墓室内に散乱していた獣骨はイヌ２個体、ネコ１個体と同定されているが、墓との関連は不明である。

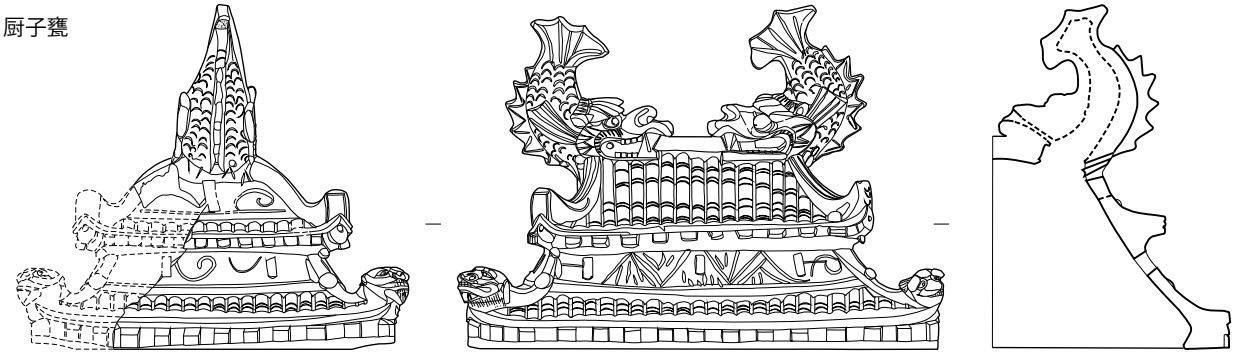


第 107 図　5 号墓

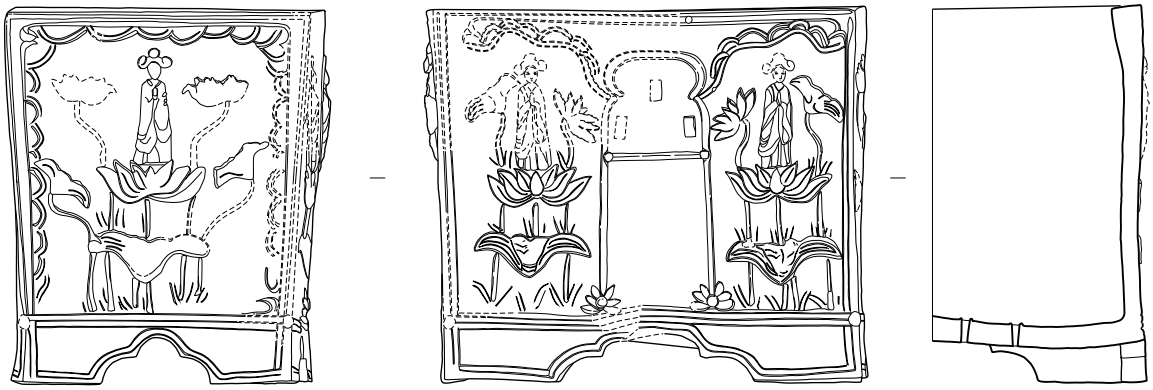
厨子甕

第 108 図　5 号墓出土遺物 1

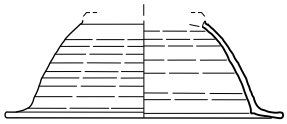
厨子甕



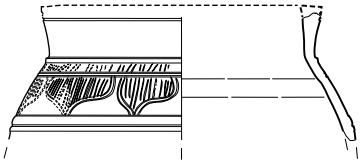
38



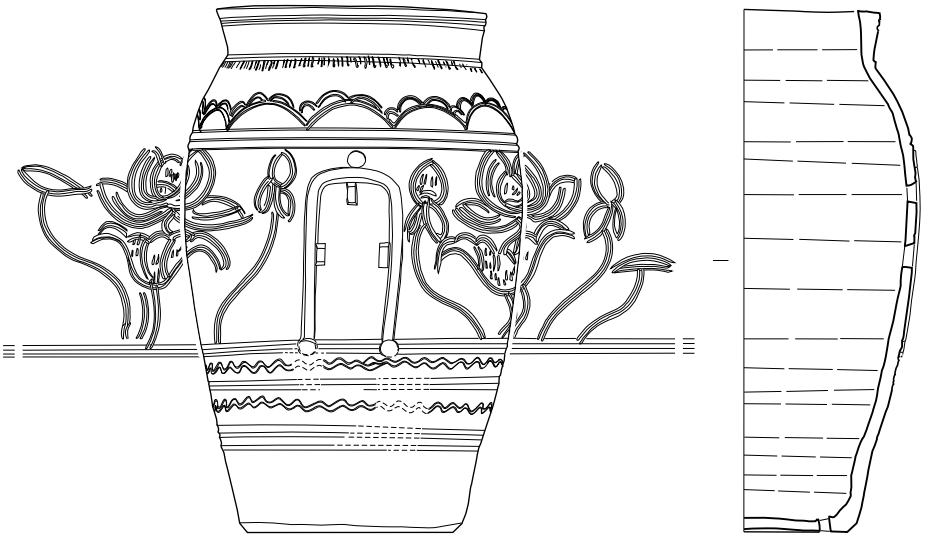
39



40



41



42

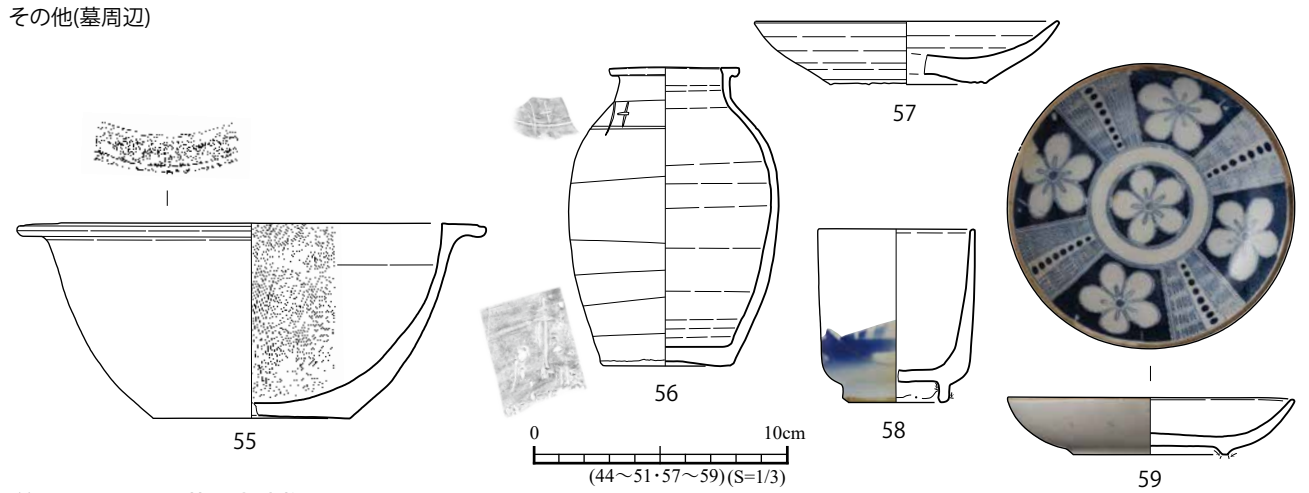
0　40cm

(38～42) (S=1/8)

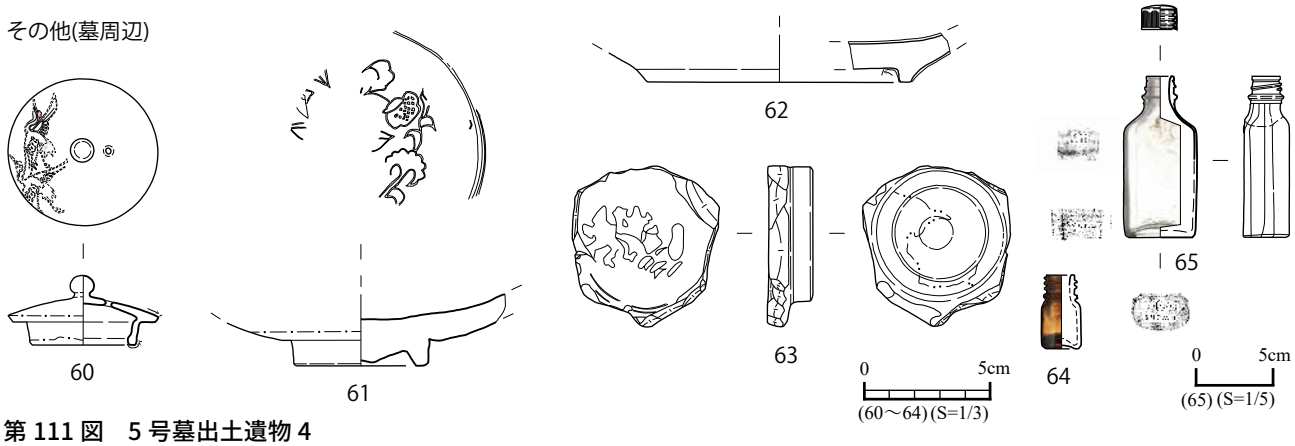
第 109 図　5 号墓出土遺物 2

墓庭

その他(墓周辺)



第 110 図　5 号墓出土遺物 3



第 111 図　５号墓出土遺物４

（６）７・25・29・30 号墓

北地区北側斜面（北１地区）に位置する。７号墓は亀甲墓で、仮墓と考えられる小規模な掘込墓が墓門前右側（29・30 号墓）と墓門左側石積み（25 号墓）で新たに確認された。いずれも空き墓である。

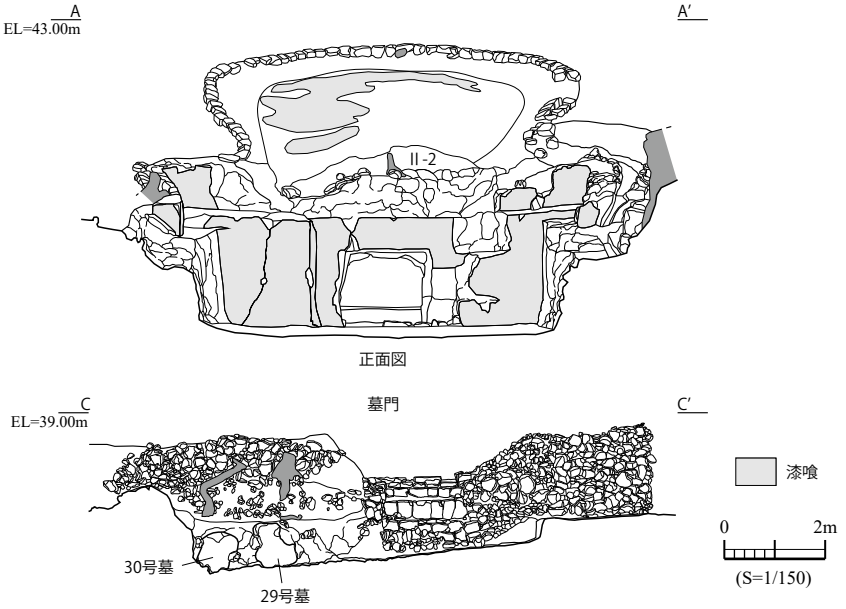
７号墓　掘込式の亀甲墓である。正面の鏡石は無く、墓室の開口部が露出している状況で眉などは残存していない。一部左臼が残存しており、岩盤を削り出して作られている。屋根や正面、袖は漆喰塗りである。屋根（ボージ）はトレンチ掘削を行っていないが正面崩落部の状況からはコーラル（Ⅱ－２）を造成しているようである。童手や袖回りは岩盤を削り出して礫を配している。

三味台は１段で僅かに切石が残存する。墓口は方形状の開口部に門冠・隅石を嵌め込んで構築されたと思われ、石積みの根元部分が僅かに残る。開口部の上部には鏡石を固定するためのホゾ穴（縦 23 ㎝・横９㎝）がある。

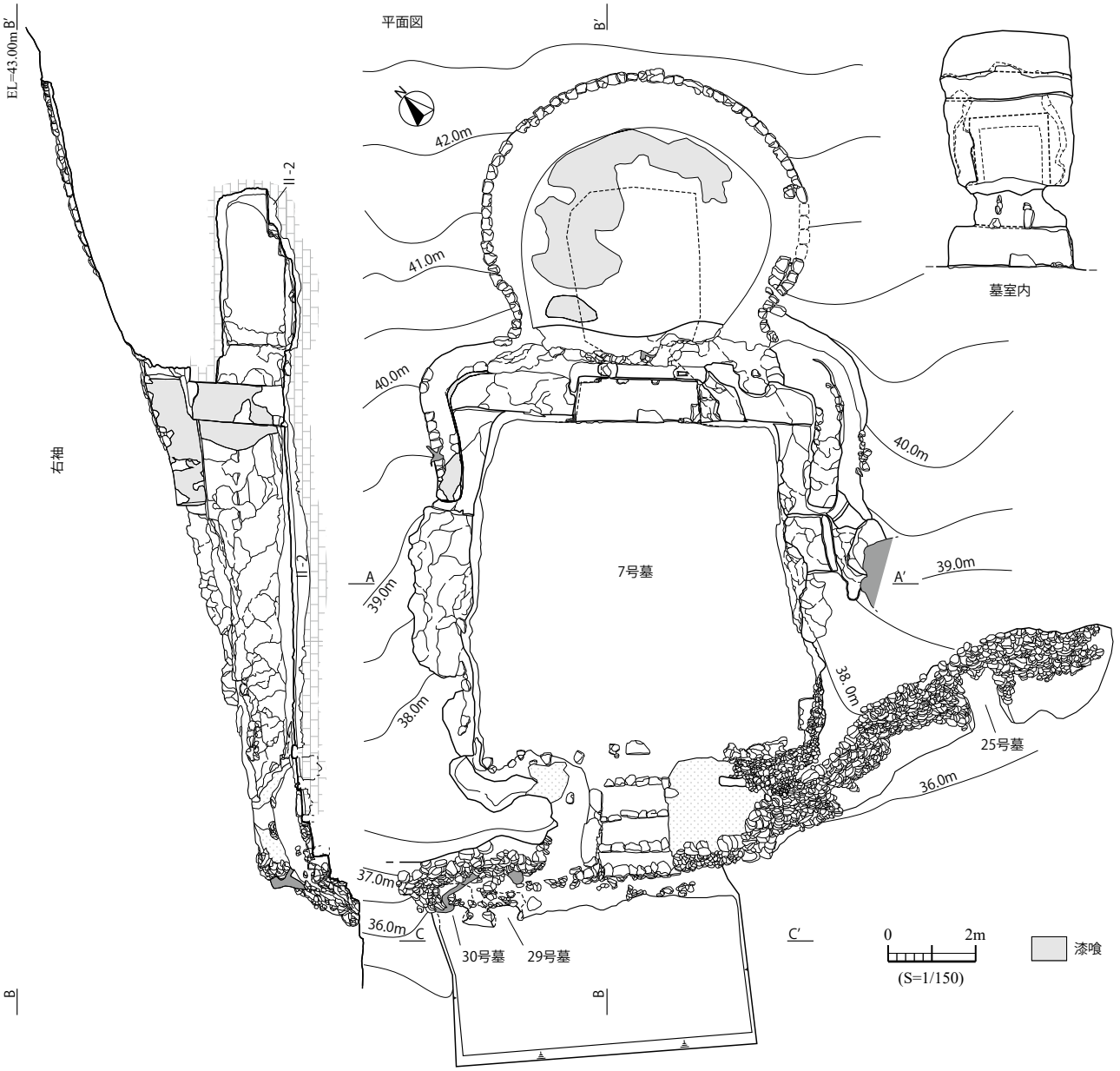
墓室は岩盤削り出しで手前の棚は風化しているが、コの字２段と思われる。

袖垣も岩盤削り出しであるが墓門付近は野面積みとなる。墓庭は表土層直下でコーラル（Ⅱ－２）が検出され墓庭使用面とした。墓門の階段は切石により５段で構築されている。下段の１段目と根元部分は基地造成土によって埋没し、階段根元部分ともに後述する 29・30 号墓が検出されたことからこの面が当時の地表面であるとともに隣接する墓へ至る墓道の検出面と考えられる。墓門右側は岩盤を利用しており、左側は野面積みとなる。この野面積みの石積みは、石積み８と繋がる。

遺物は、墓室内や墓庭周辺で厨子甕や沖縄産陶器の破片が散乱していた。厨子甕（66・67）はⅥｂ類（上焼宮城Ⅲｃ式相当、19 世紀後半）、（68・69・70）はⅥｃ類（上焼宮城Ⅳａ式相当、近代）、（74・75）はⅢＣ類（マンガン安里Ⅴ式相当、近代）で 19 世紀後半から近代の厨子甕が得られている。



第 112 図　７号墓１

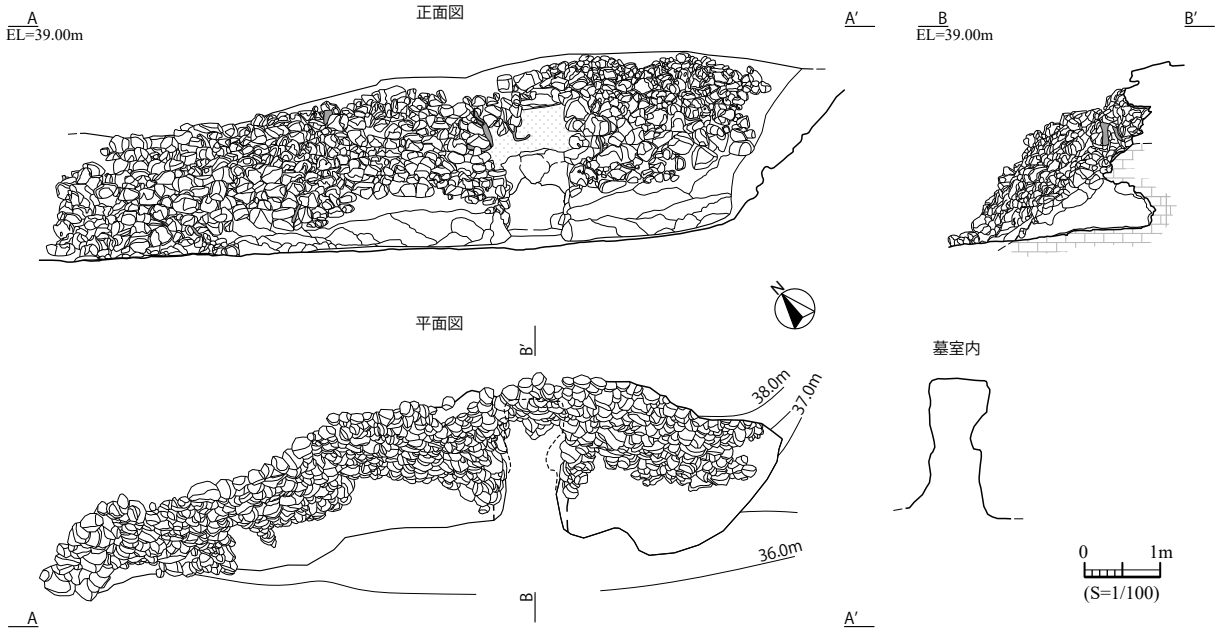


第 113 図　7 号墓 2

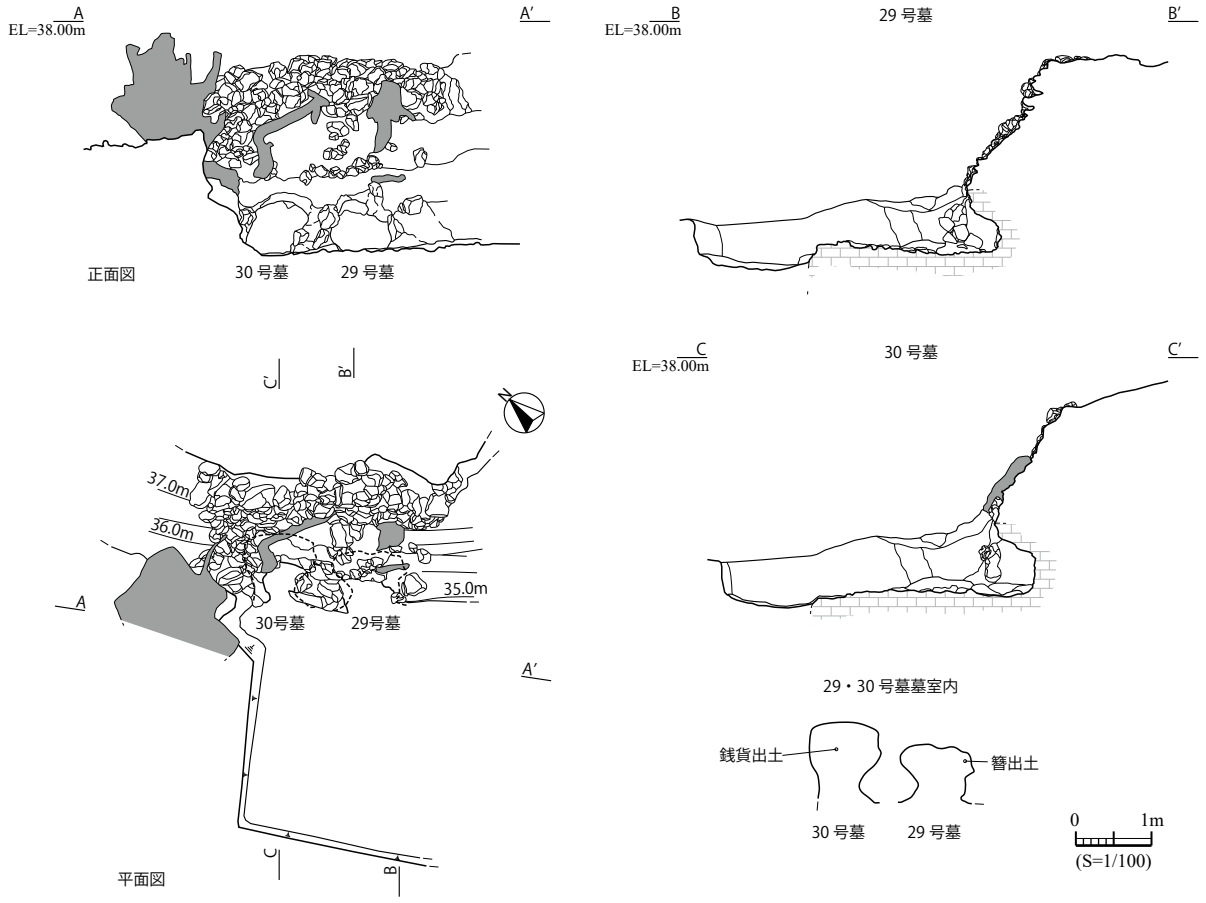
25 号墓　小規模な掘込墓で、7 号墓仮墓と考えられる。墓門左側石積み下の岩盤を掘り込み構築される。墓口上部の石積みは崩落している。墓室内からは寛永通寶が 6 枚出土しており、六道銭と考えられる（87 ～ 92）。

29 号墓　小規模な掘込墓で、7 号墓仮墓と考えられる。墓門右側石積み下の岩盤を掘り込んで構築されている。右隣には 30 号墓がある。墓口付近で礫が検出され、閉塞石もしくは上部の石積みの転石と思われる。墓室内からは簪（93）が出土している。

30 号墓　小規模な掘込墓で、7 号墓仮墓と考えられる。29 号墓の右隣に位置し、墓門右側石積み下の岩盤を掘り込んで構築されている。墓室内から近代銭（94）が出土した。



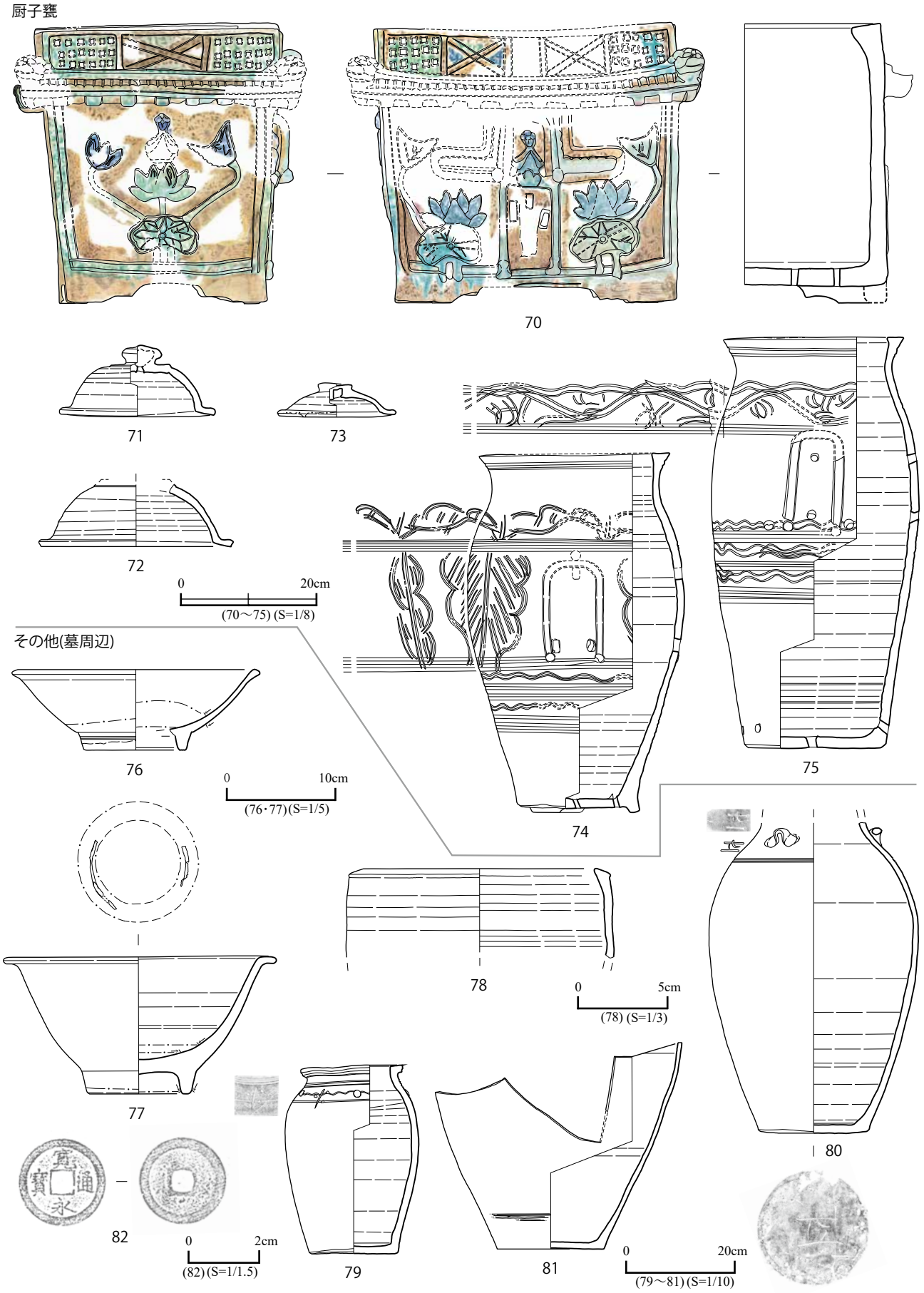
第 114 図　25 号墓



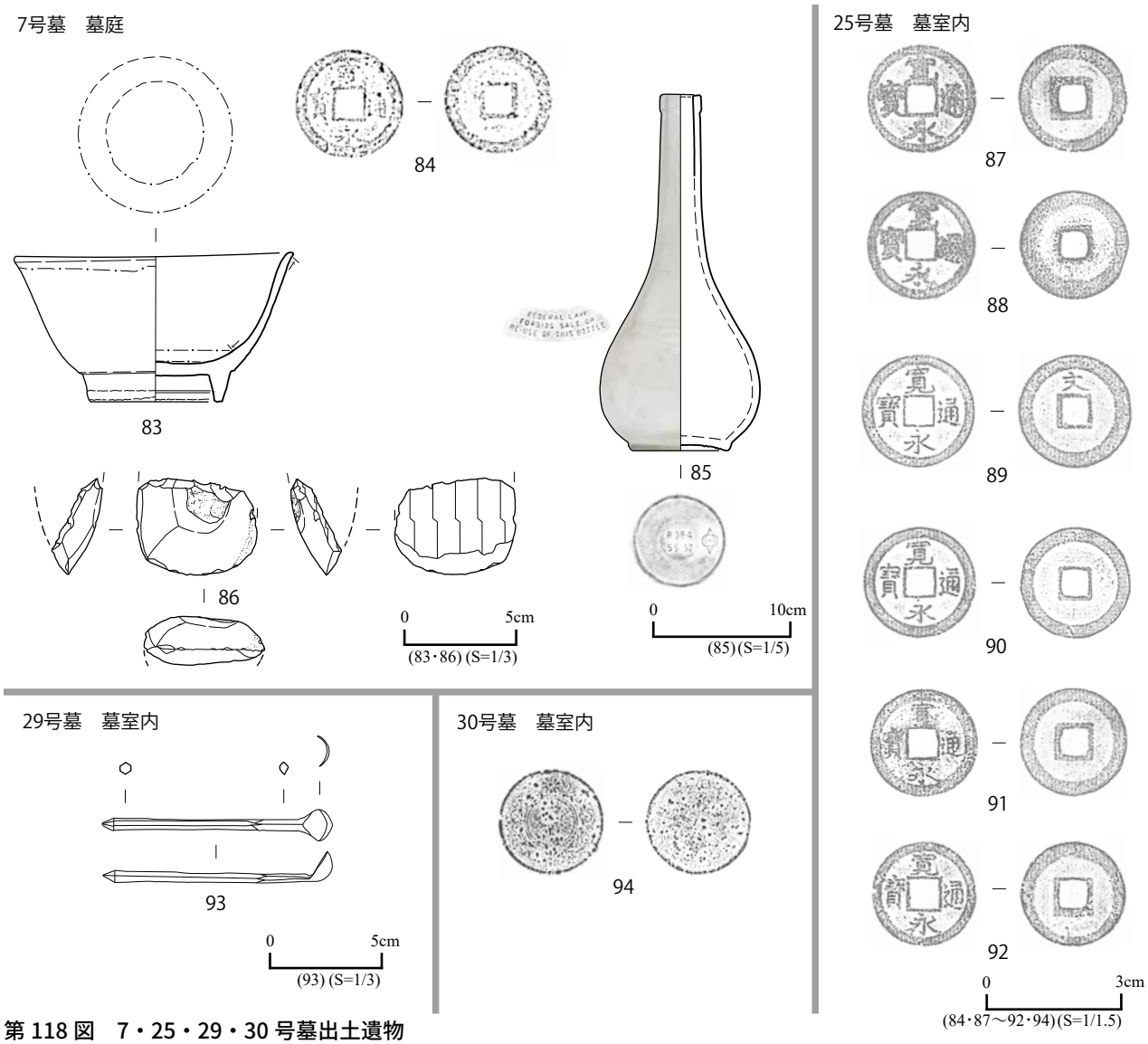
第 115 図　30 号墓

第 116 図　7 号墓出土遺物 1

厨子甕



第 117 図　7 号墓出土遺物 2



第 118 図　7・25・29・30 号墓出土遺物

（7）８・９・28 号墓

北地区北側斜面（北１地区）にあり、７号墓の右隣に位置する。８号墓は破風墓で、墓門右側には掘込墓（９・28 号墓）が所在する。いずれも空き墓である。

８号墓　掘込式の破風墓である。正面は墓室の開口部が露出している状況で装飾などは残存していない。屋根はコーラル（Ⅱ－２）造成によって切妻屋根となる。屋根端部の破風は野面積みによる３列構成で、外側２列は側溝の構造となり、屋根排水の機能が想定される。屋根や石積み、三味台には漆喰が残存し、全体に漆喰が施されていたと考えられる。

三味台は１段で僅かに切石が残存する。墓口は残存していないが、他の掘込式の墓と同様に開口部に切石を嵌め込む構築方法であったと想定される。

墓室は平坦コの字２段で、岩盤を削り出して構築され、棚には縁石が配置されている。シルヒラシには棺を置く台石がある。

袖や袖垣は石積みの根元部分が残存し、墓門付近の石積みは野面積みである。墓庭の三味台周辺はコーラル（Ⅱ－２）、墓門付近は褐色土（Ⅱ－１）が造成されている。墓門は石列が配される。墓門右側には石積みが続き、９・28 号墓が所在する。

また、屋根左側後方には方形石組が検出された。幼児葬法における童墓（ワラビバカ）は様々な形態があり、渡嘉敷村阿波連では破風墓の側に石囲いを作り、その上を三角錐状のススキで覆う事例がある（名嘉真 1979;120 頁・1999；93 頁）、この方形石組も同様に童墓（ワラビバカ）の可能性が高い。

遺物は、墓庭から近代磁器の杯（97）、墓周辺から出土した厨子甕（95・96）はⅡ類（ボージャー）で、18 世紀代の厨子甕である。他に沖縄産施釉陶器（99 ～ 101）などが出土している。

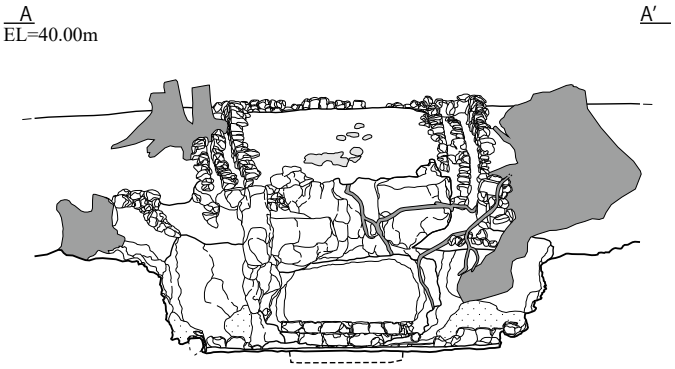
９号墓　掘込墓で、８号墓の右隣に位置し、左隣には28号墓がある。板石が墓口に立てかけられた状態で検出されたことから、本来は板石によって塞がれていたと考えられる。墓室は岩盤を掘り込んで構築される。

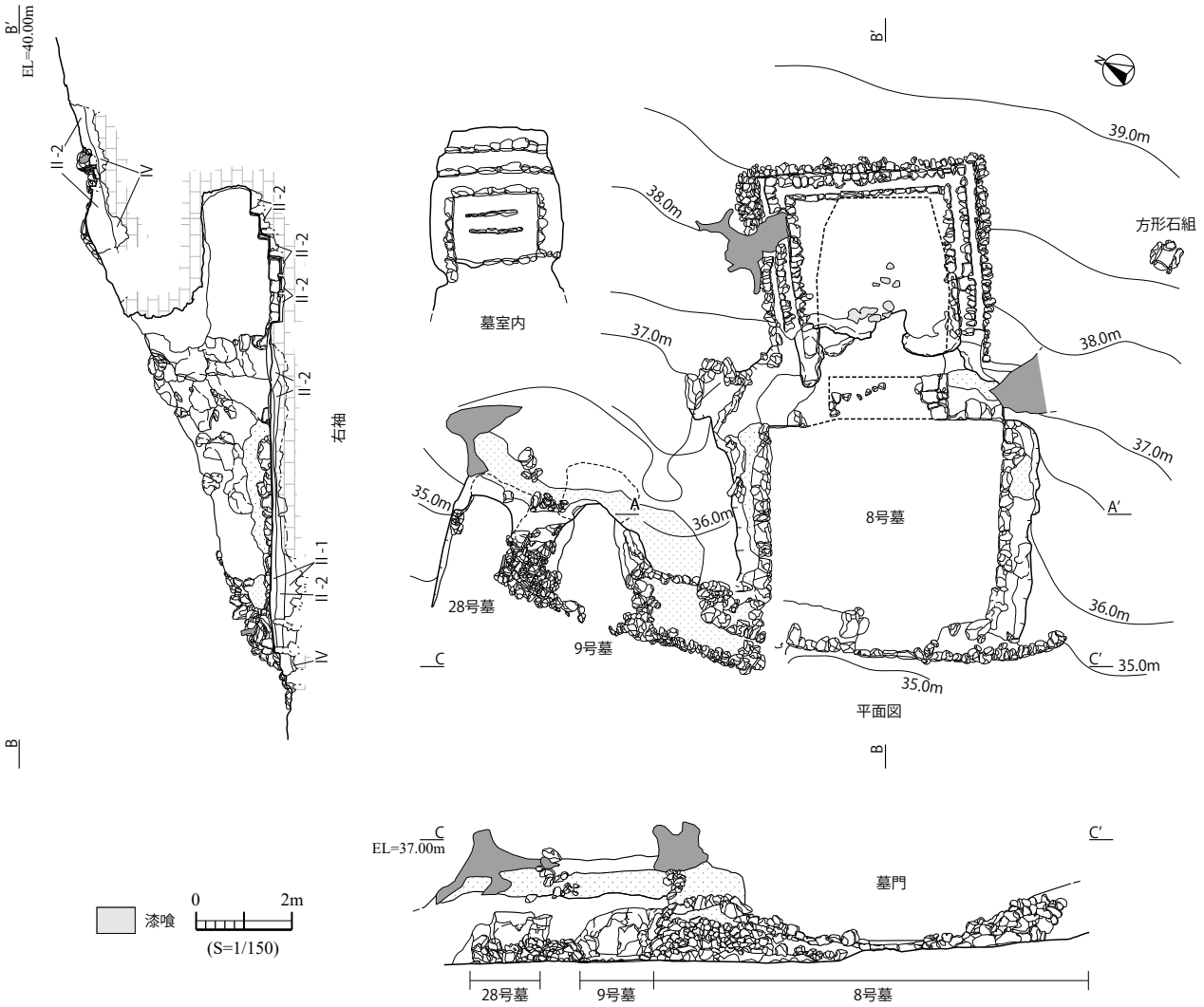
墓口前に野面積みによる袖垣が構築されることによって墓庭となる空間が設けられる。墓室から墓庭にかけて褐色土（Ⅱ－１）が造成されている。左袖垣の石積みは、隣接する８号墓の右袖垣に増築していることから、ほぼ同時期の可能性もあるが８号墓→９・28号墓の構築順が想定される。

遺物は、墓庭出土の厨子甕（105）はⅢｄ類（マンガン安里Ⅵ式相当、近代）、他に沖縄産施釉陶器（106・107）や瓦質土器の盤（109）が出土している。

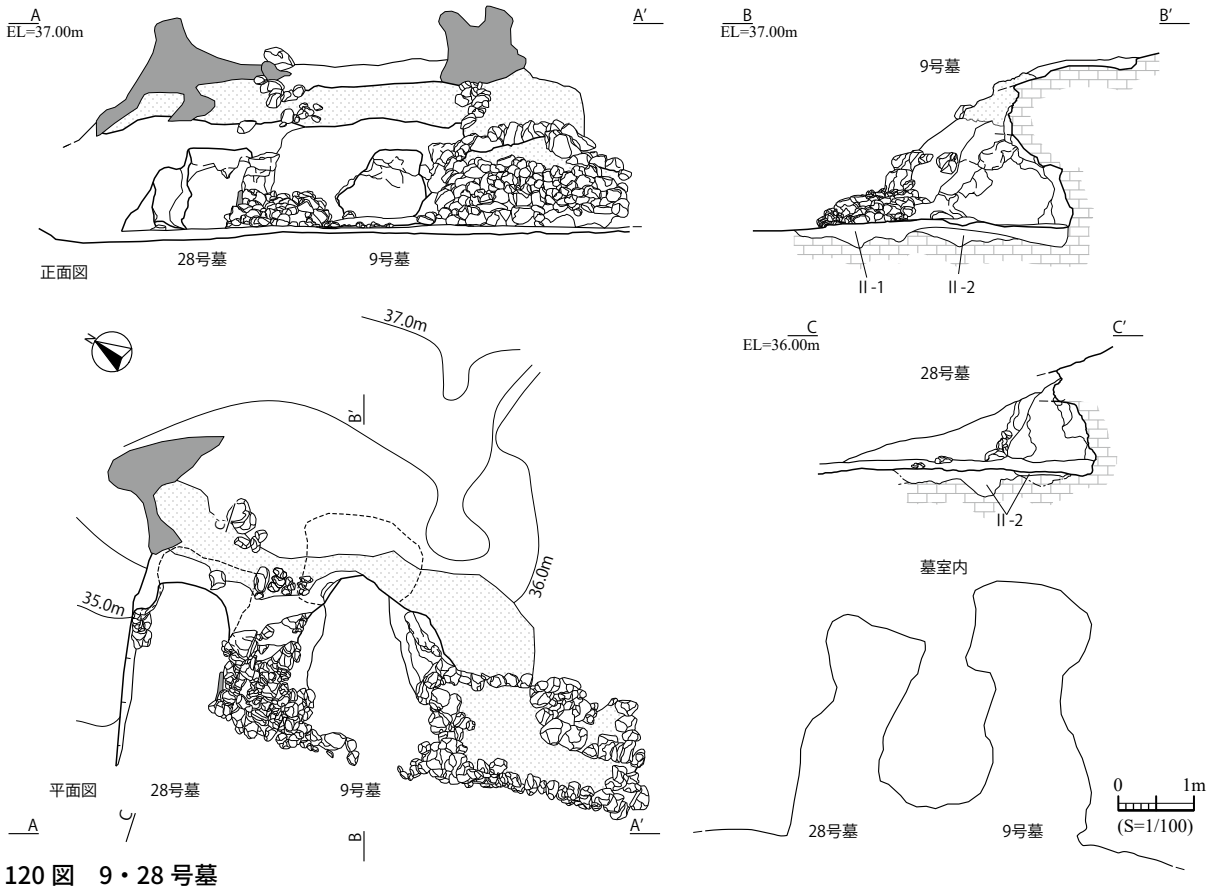
28号墓　掘込墓で、９号墓の右隣に位置する。墓口には閉塞石積みが残る。墓室は岩盤を掘り込んで構築される。袖垣は９号墓と一連で墓庭がある。墓室から墓庭にかけてコーラル（Ⅱ－２）が造成されている。

遺物は、厨子甕の蓋（113）や摺鉢（114）などがある。

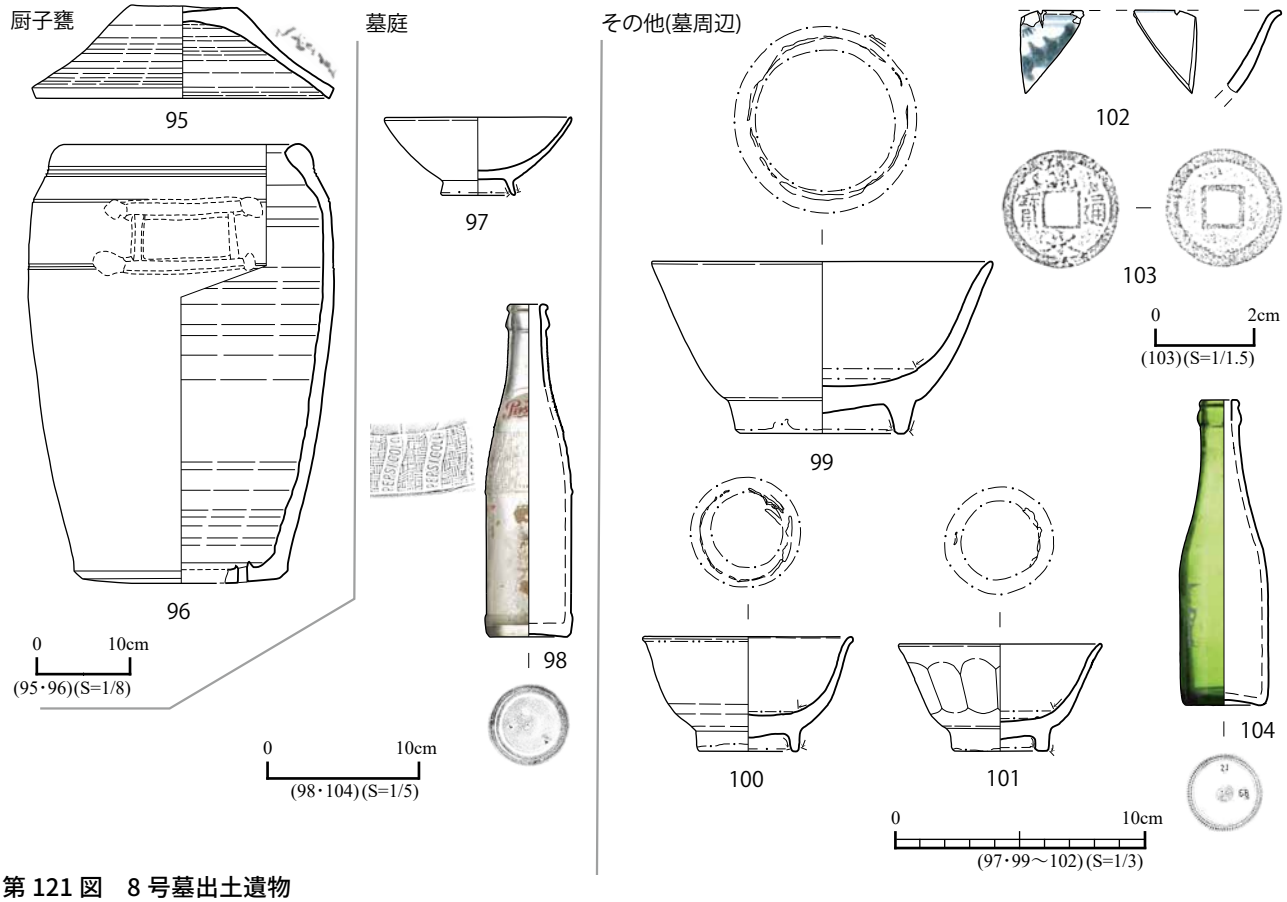




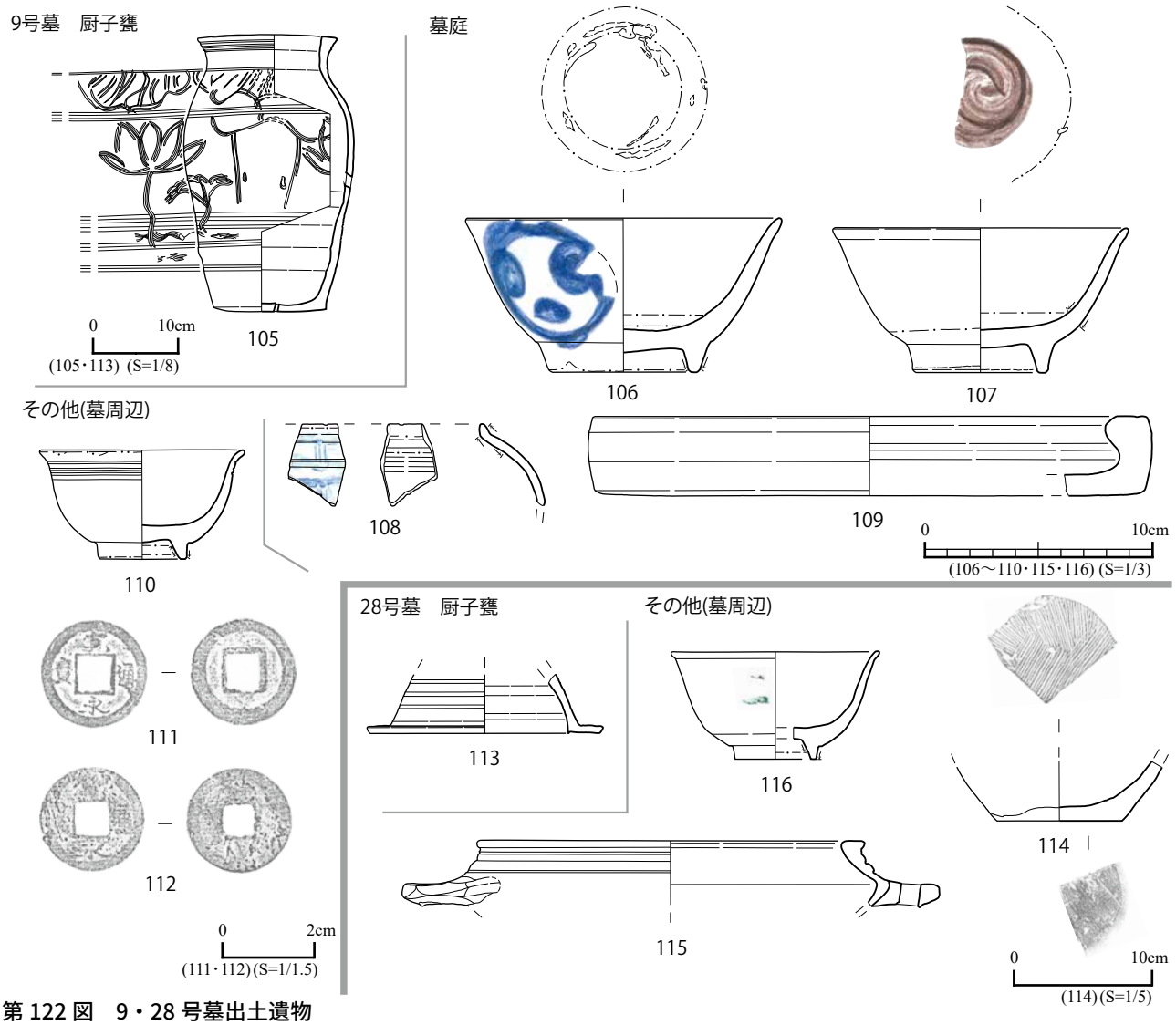
第119図　８号墓



第 120 図　9・28 号墓



第 121 図　8 号墓出土遺物



第 122 図　9・28 号墓出土遺物

（8）10 号墓

北地区北側斜面（北１地区）にあり、28 号墓の右隣に位置する。10 号墓は掘込式の平葺墓で、空き墓である。造成工事範囲拡大に伴い追加調査を実施した墓で、工事の伐採により、屋根や墓門など一部石積みが欠損した。

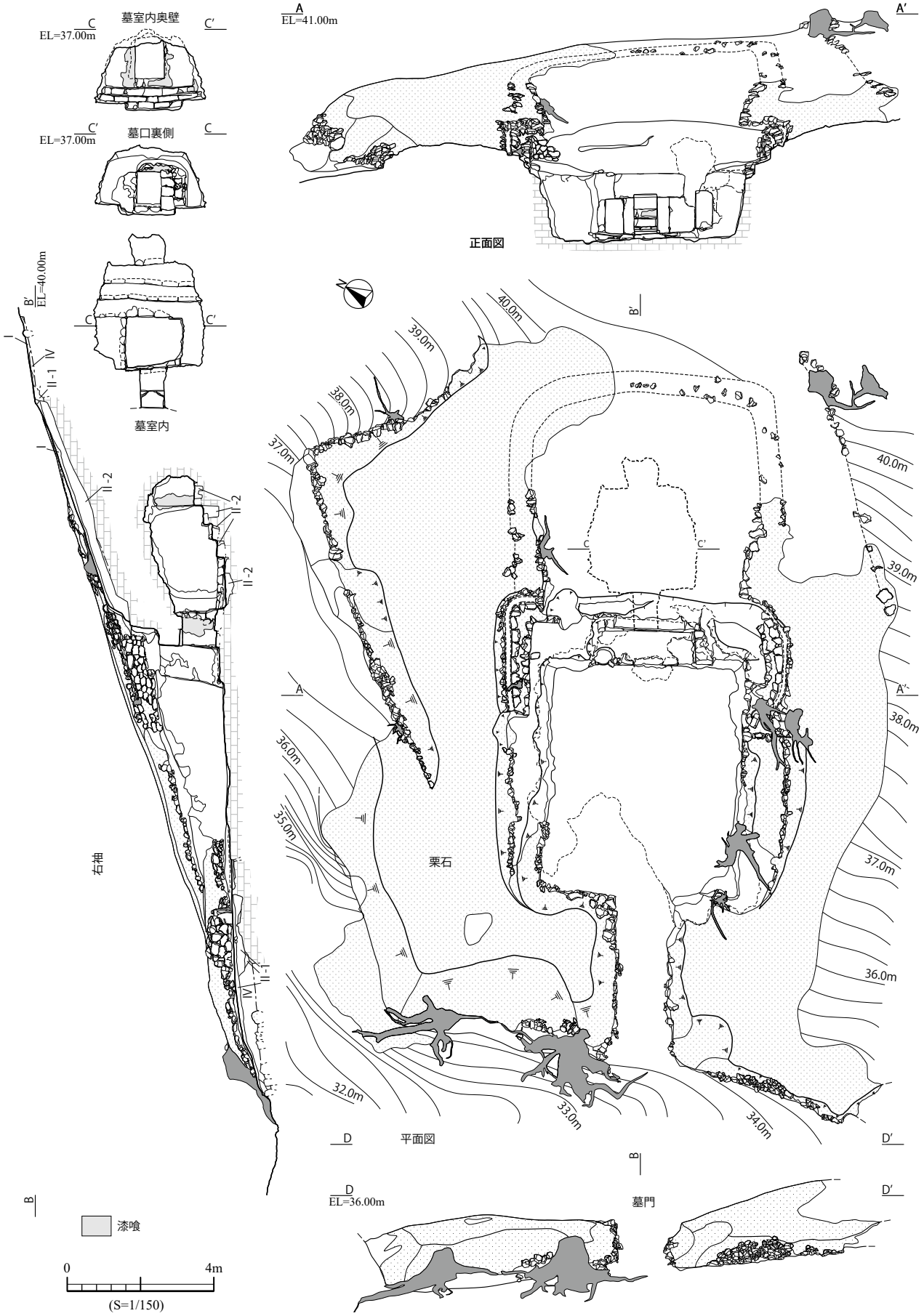
正面の鏡石は崩落し装飾は残存していない。墓室内に漆喰が残存していることから、全体にも漆喰が施されていた可能性がある。屋根はコーラル（Ⅱ－2）を造成し平屋根となり、袖回りの石列が巡る。袖周りを有することから亀甲墓にも類似するが、平屋根であることと、臼は無く袖周りから正面まで石積みで直線的に装飾されたと考えられることから平葺墓とした。

三味台は１段で切石が残存する。墓口は岩盤の開口部に門冠・隅石を嵌め込み、内面は切石を積んで構築されている。墓口内には蓋石を固定する段が認められる。

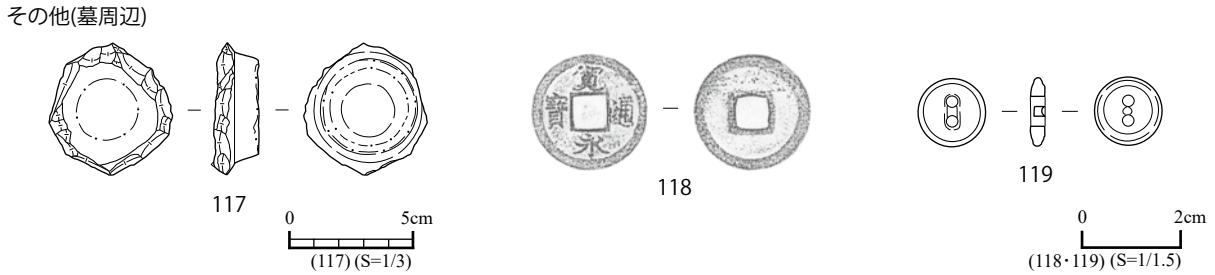
墓室は平坦コの字２段で、岩盤を削り出して構築され、棚には縁石が配置されている。奥壁には長方形の壁龕状のイケが構築されている。イケや墓口の一部は漆喰が施されている。墓室の天井は、イケがある付近で高くなっており、イケの構築時に拡張されたと思われる。イケは納所（ノーシ）とも呼ばれ 33 年忌をすませた骨を合葬するところであり、イケがない場合は、御殿小と呼ばれる御殿形厨子甕が納まる大きさの穴を設けるとされ（名嘉真 1975）、この壁龕状のイケも 33 年忌を過ぎた厨子甕を納めるために構築したものと考えられる。

袖回りや袖垣の石積みは切石を相方積みで積む。袖回りは側溝の構造となる。墓門外側は野面積みで積む。石積みは隣接する 11 号墓や 28 号墓まで続いていた可能性がある。墓庭の三味台周辺は岩盤を削り出しており、墓門付近は切土した地山面に褐色土（Ⅱ－1）が造成されている。墓の北側、右袖後方には野面積みの石積みがあり、屋根や右袖を平坦にするための土留石積みであると考えられる。右袖には褐色土（Ⅱ－1）とコーラル（Ⅱ－2）が造成されている。

遺物は少なく、円盤状製品（117）や寛永通寶（118）などが出土している。


墓室内奥壁
C
C′
EL=37.00m
墓口裏側
C′
C
EL=37.00m
墓室内
A
EL=41.00m
A′
正面図
B′
EL=40.00m
B′
右神
栗石
平面図
D
D′
D
EL=36.00m
墓門
D′
B
B
漆喰
0
4m
(S=1/150)

第 123 図　10 号墓



第 124 図　10 号墓出土遺物

（9）11 号墓

北地区北側斜面（北 1 地区）にあり、10 号墓の北側に位置する。11 号墓は掘込墓で、空き墓である。造成工事の伐採により墓庭の一部が掘削され欠損した。

正面は岩盤を平坦に削り出して構築し、装飾などは残存していない。墓口は野面積みの石積みが残る。本来は野面積みで閉塞されていた可能性がある。墓室は岩盤を方形状に掘り込む。床面は墓庭の高さより低くなっており、平坦に仕上げられる。墓口の向きは墓庭の中央より右側（西向き）に向いている。

左袖付近には裏込めと思われる栗石が広がることから石積みが存在した可能性がある。右袖は岩盤を利用して積まれた石積みが僅かに残存する。墓庭は地山(マージ)の斜面地形を切土し褐色土（Ⅱ－1）が造成されている。墓口の石積み付近にはコーラル（Ⅱ－2）が認められる。

遺物は、墓室内や墓庭周辺の腐葉土（Ⅰ層）より出土している。墓庭から出土した厨子甕（122）はⅢｂ類（マンガン安里Ⅳ式相当、19 世紀後半）、（121）はⅢｃ類（マンガン安里Ⅴ式相当、近代）で 19 世紀後半から近代である。この他、墓庭周辺から寛永通寶（124 ～ 126）が出土している。墓室内や墓庭からは、人骨片が出土し、墓移転時に残されたものと考えられる。

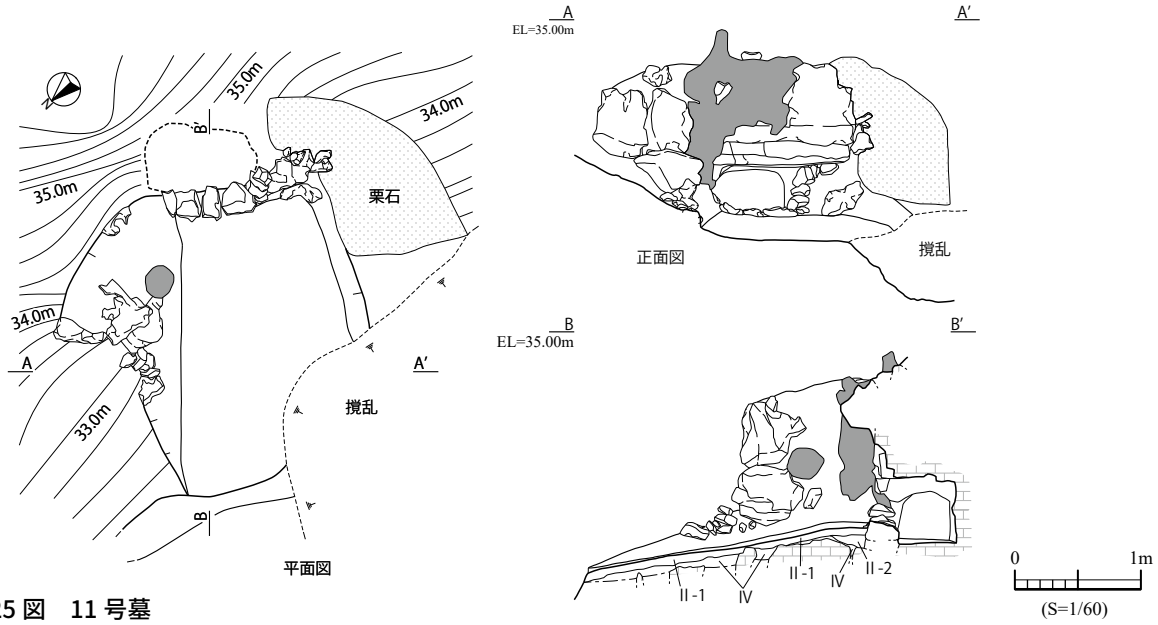
（10）16・24 号墓

北地区北側斜面（北 1 地区）にあり、7 号墓の左後方に位置する。16 号墓は亀甲墓で、墓門左前には仮墓と考えられる小規模な掘込墓（24 号墓）が新たに確認された。いずれも空き墓である。

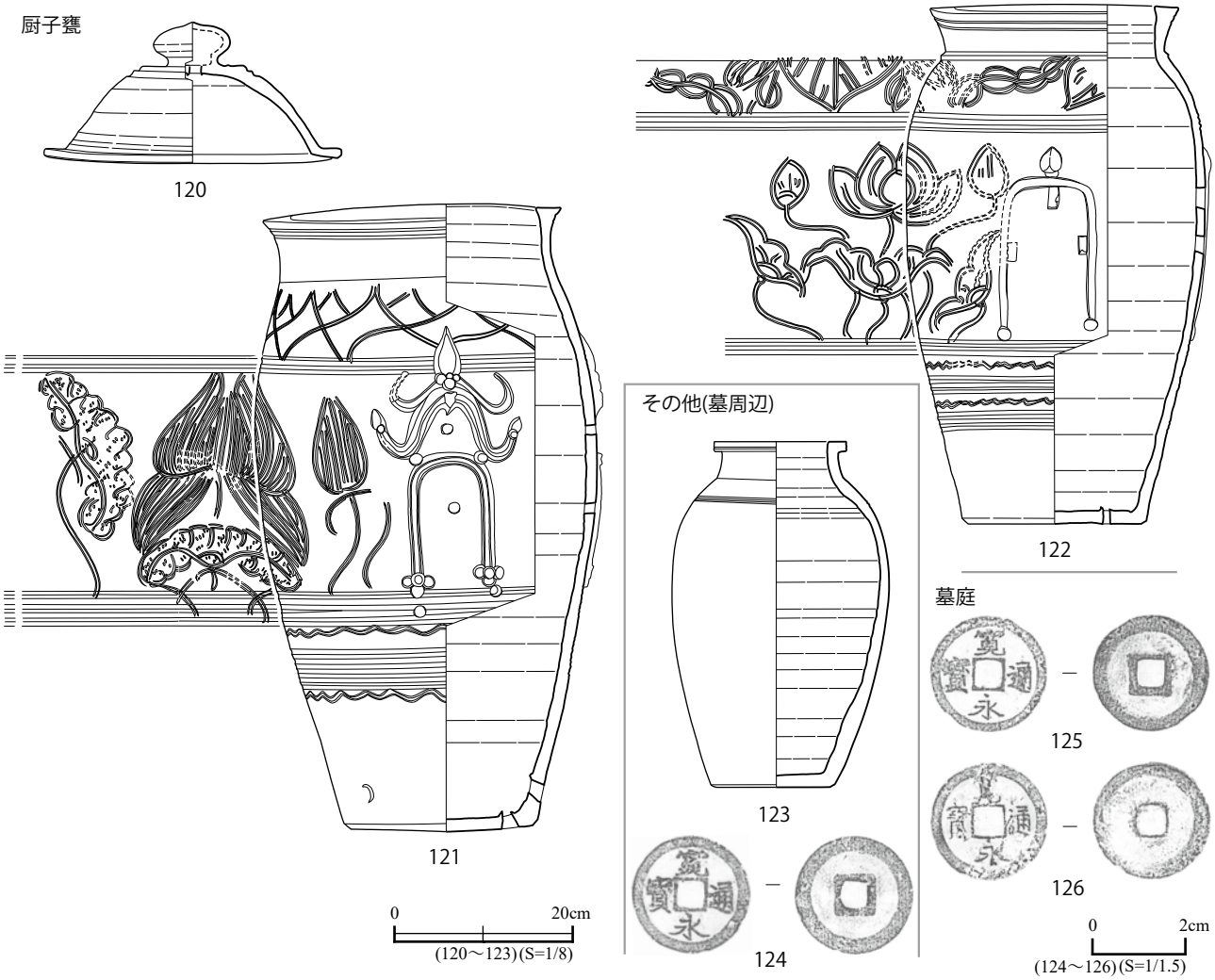
16 号墓　掘込式の亀甲墓である。正面の眉は残存していないが、左臼が残る。臼は岩盤を削り出している。正面や屋根、袖垣など全体に漆喰が施されている墓であり、岩盤の凹みや切石の隙間に褐色土（Ⅱ－1）を充填した後に漆喰を施している。屋根のトレンチ掘削は行っていないが正面崩落部の状況からはコーラル（Ⅱ－2）を造成しているようである。周囲には袖回りの石列が巡る。

三味台は 1 段で右袖側の切石が僅かに残存している。墓口は方形状の開口部に門冠・隅石を嵌め込み、隙間に小さめの切石を充填して構築されている。墓口内には蓋石を固定する段が認められる。墓口の向きは、墓門に対してやや右側 (西向き) に向いている。

墓室は平坦コの字 3 段で、岩盤を削り出して構築され、コの字棚には縁石が配置されている。シルヒラシには棺を置く台石がある。墓室壁面には漆喰が施されている。童手や袖垣は岩盤を加工して切石を配している。



第 125 図　11 号墓



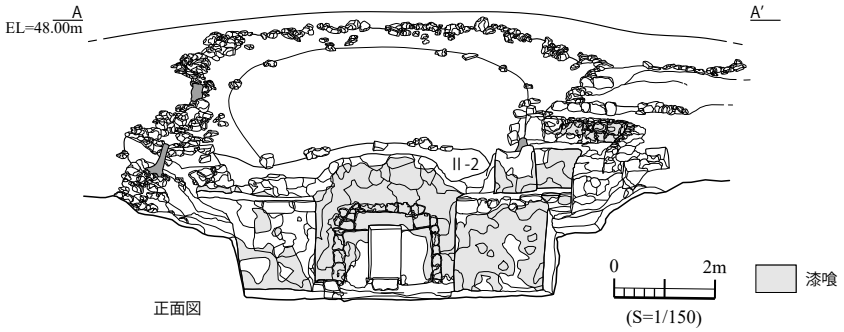
第 126 図　11 号墓出土遺物

左袖垣に施された漆喰には、なんらかの文様が線刻されていた。調査時には漆喰の崩落が進み、意匠などは不明であった（巻末図版 55）。

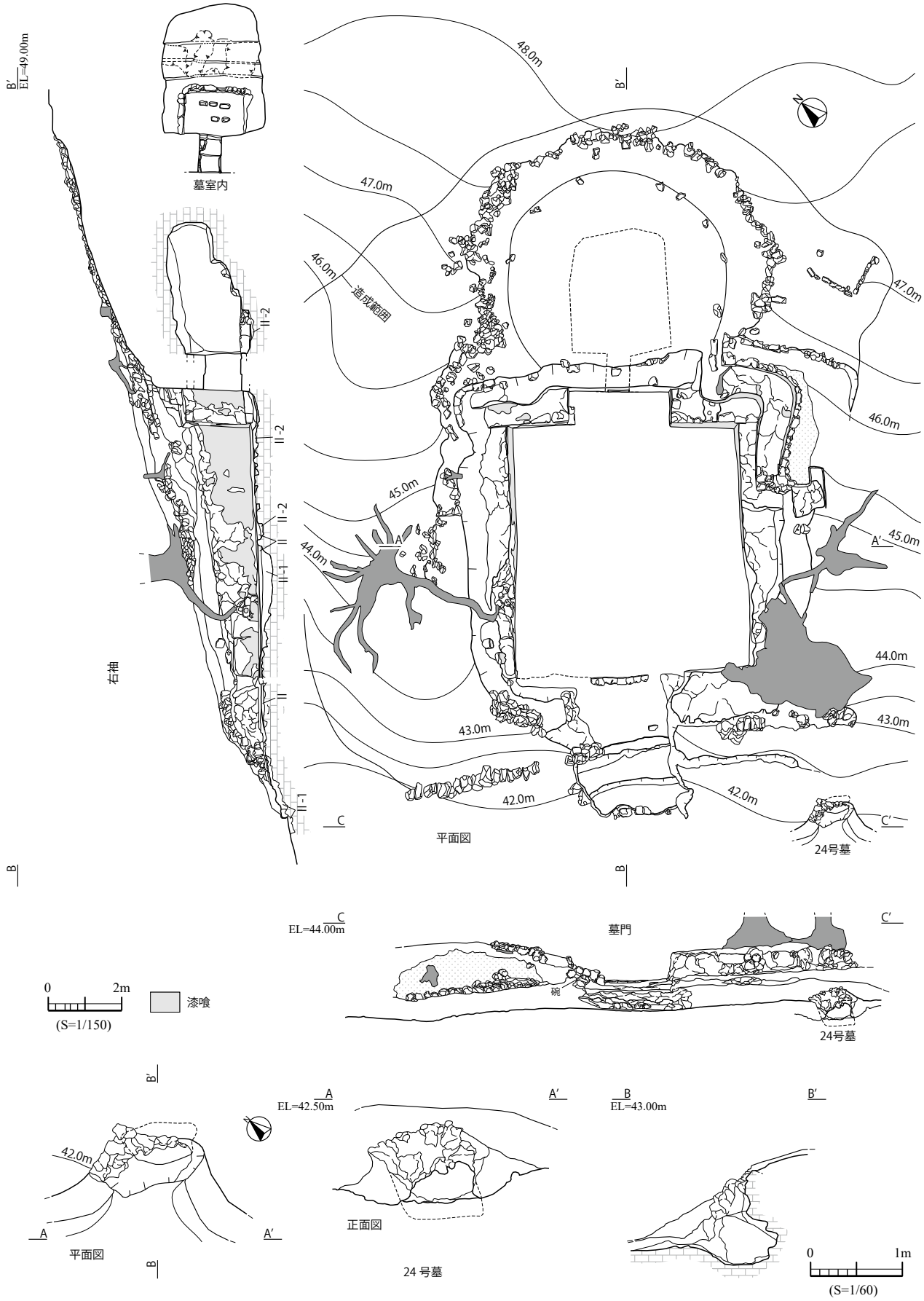
墓門外側の石積みは野面積みである。墓庭は岩盤を平坦に削り出し、使用面と考えられる面（Ⅱ層）は黒褐色土で、三味台周辺はコーラル（Ⅱ－2）、墓門付近は褐色土（Ⅱ－1）が造成されている。墓門は岩盤が段状となり、階段の縁石が存在した可能性がある。

遺物は厨子甕Ⅵ類の蓋（127）のほか、沖縄産施釉陶器（129 ～ 134）や寛永通寶（136・137）、指輪（138）、瓦（143 ～ 145）などが出土している。

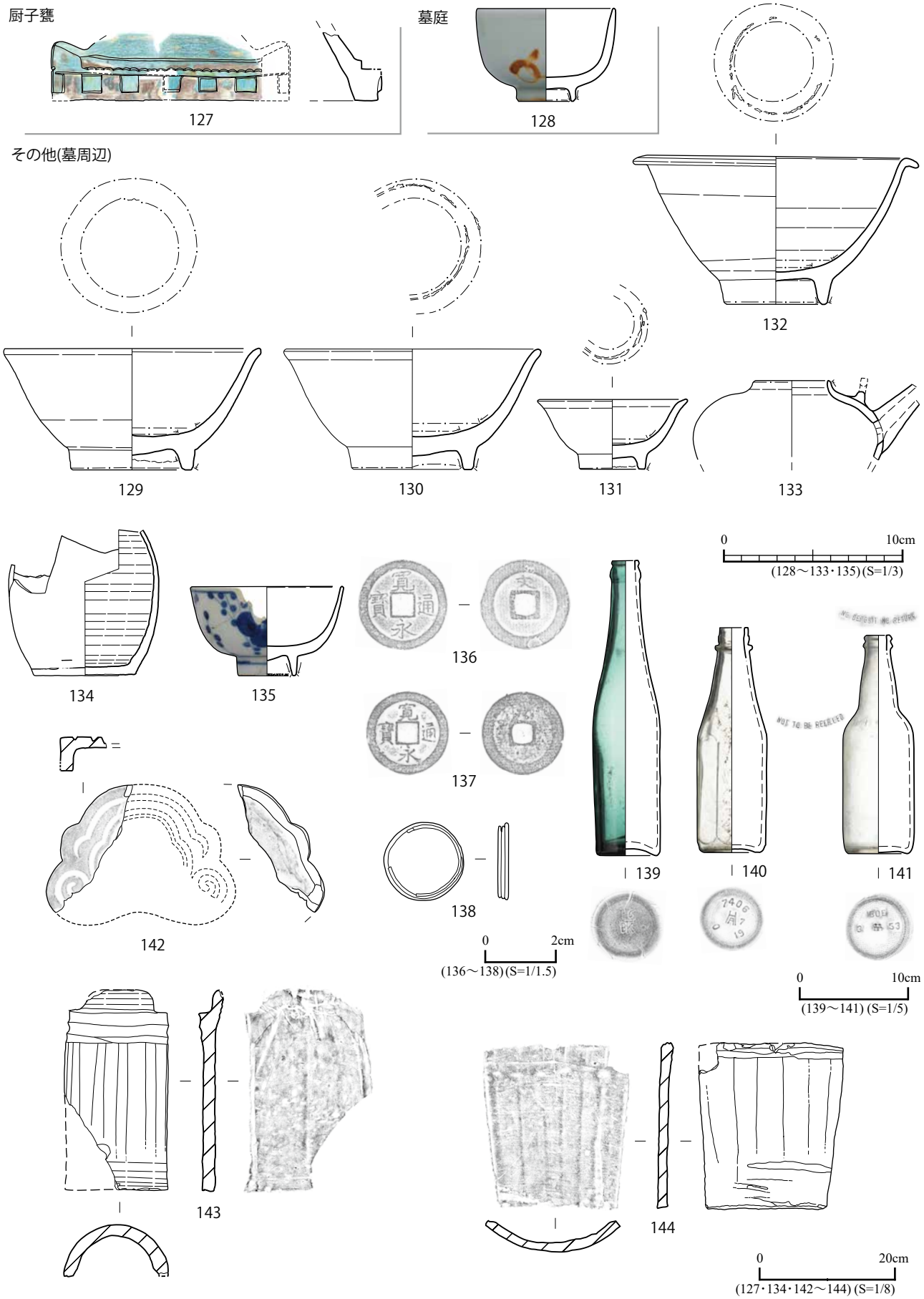
24 号墓　小規模な掘込墓で、16 号墓仮墓と考えられる。16 号墓墓門左前に位置し、岩盤を掘り込んで構築されている。遺物は出土していない。



第 127 図　16 号墓 1

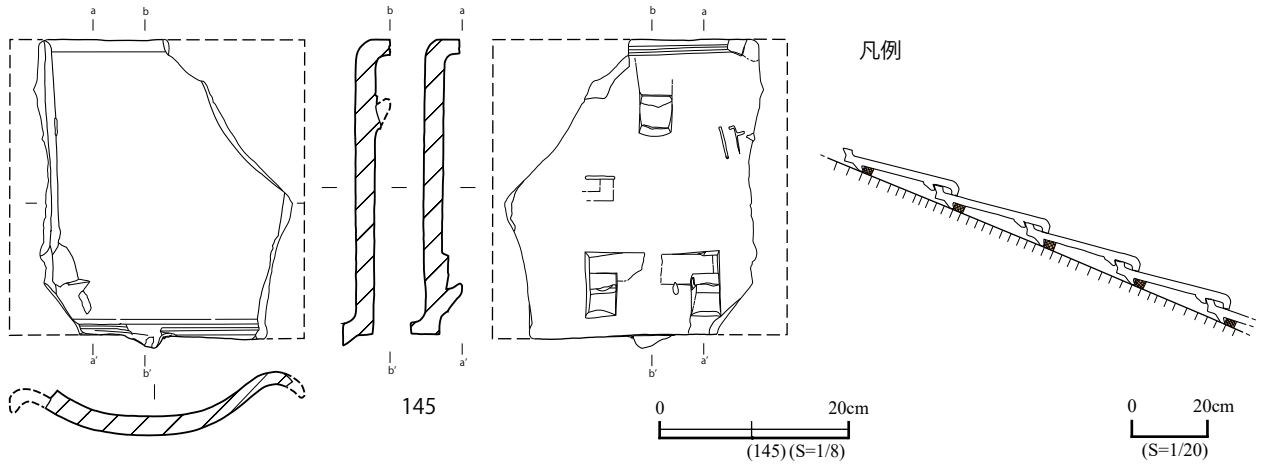


第 128 図　16・24 号墓



第 129 図　16 号墓出土遺物 1

その他(墓周辺)



第 130 図　16 号墓出土遺物 2

（11）19 号墓・壕跡と戦没者人骨

北地区北側斜面（北１地区）にあり、16 号墓の左後方に位置する。19 号墓は亀甲墓で、空き墓である。19 号墓の墓室内からは獣骨埋設遺構、墓庭からは壕跡と戦没者人骨が確認された。

19 号墓　亀甲墓で、天井をアーチ状に構築したマチ墓である。本古墓群の中で最も高い位置にある亀甲墓であり、後背にはグスクンニー丘陵頂上のガジュマルがあり、墓門付近や屋根からは墓地北側斜面全域を見渡せるとともに、東シナ海を望むことができる。また、墓の敷地面積は 176.8 ㎡を測り、古墓群の中で最も大きい墓である。正面の装飾や鏡石だけでなく、屋根や袖・袖垣は大きな石灰岩の切石積みで構築しており、他の墓より明らかにコストが掛けられた墓である。

正面の眉は端部で反り上がる。左側は大臼・小臼・ヌンチャが残る。正面や屋根、袖垣など全体に漆喰が施されている。屋根（ボージ）は切石をアーチ状に巻いて構築し、その上にコーラル（Ⅱ－2）を造成している。袖回りは褐色土（Ⅱ－１）を造成し、その上に切石を巡らせる。

三味台は２段構成であり、墓口側の上段は切石による石敷・石段となり、左端にはカビアンジが設けられる。カビアンジは方形状の縁部を削り出して構築している。三味台下段は切石が配され、隙間にコーラル（Ⅱ－2）が詰められている。

墓口正面の鏡石・門冠石は切石積みであるが、隅石は右袖・三味台上段の一部と繋がっていることから岩盤削り出しと思われる。墓口裏側は、門冠石の上に切石による相方積みで積み、隙間は漆喰で目張りしている。墓口内には蓋石を固定する段が認められる。

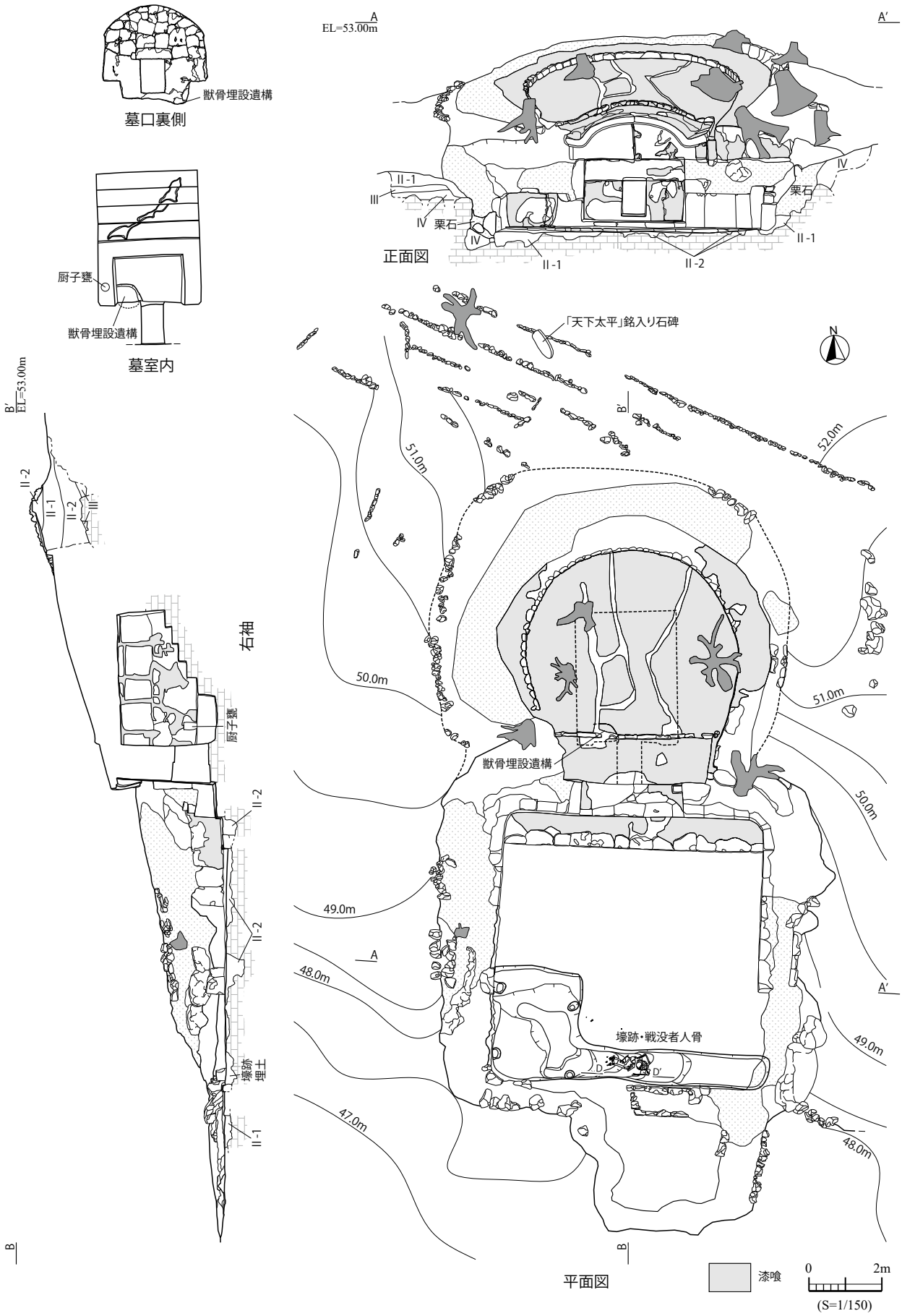
墓室は平坦コの字４段で、岩盤を削り出して構築されている。内部の壁面は岩盤部分から相方積みで一定の高さで揃え、その上にアーチ状の切石を積む。

童手や袖回りは岩盤を加工して切石を配している。袖垣は大きめの切石を布積みで積む。上部の石積みは崩落し、内部の栗石が露出している。墓庭は岩盤を平坦に削り出し、三味台周辺はコーラル（Ⅱ－2）、墓門や袖垣付近は褐色土（Ⅱ－1）が造成される。墓門は切石により区画されるが墓庭中央より左寄りである。墓門外側には野面積みの石積み僅かに残る。屋根の後方には複数の石列が検出され、「天下太平」の銘がある石碑がある。ガジュマルとその下部にある配石遺構（不明遺構２）に関連するものと思われる。また、19 号墓の墓域は普天間グスクンニー遺跡の範囲にも含まれ、グスク時代～近世の耕作土（Ⅲ）を切土して屋根や袖垣を構築している。

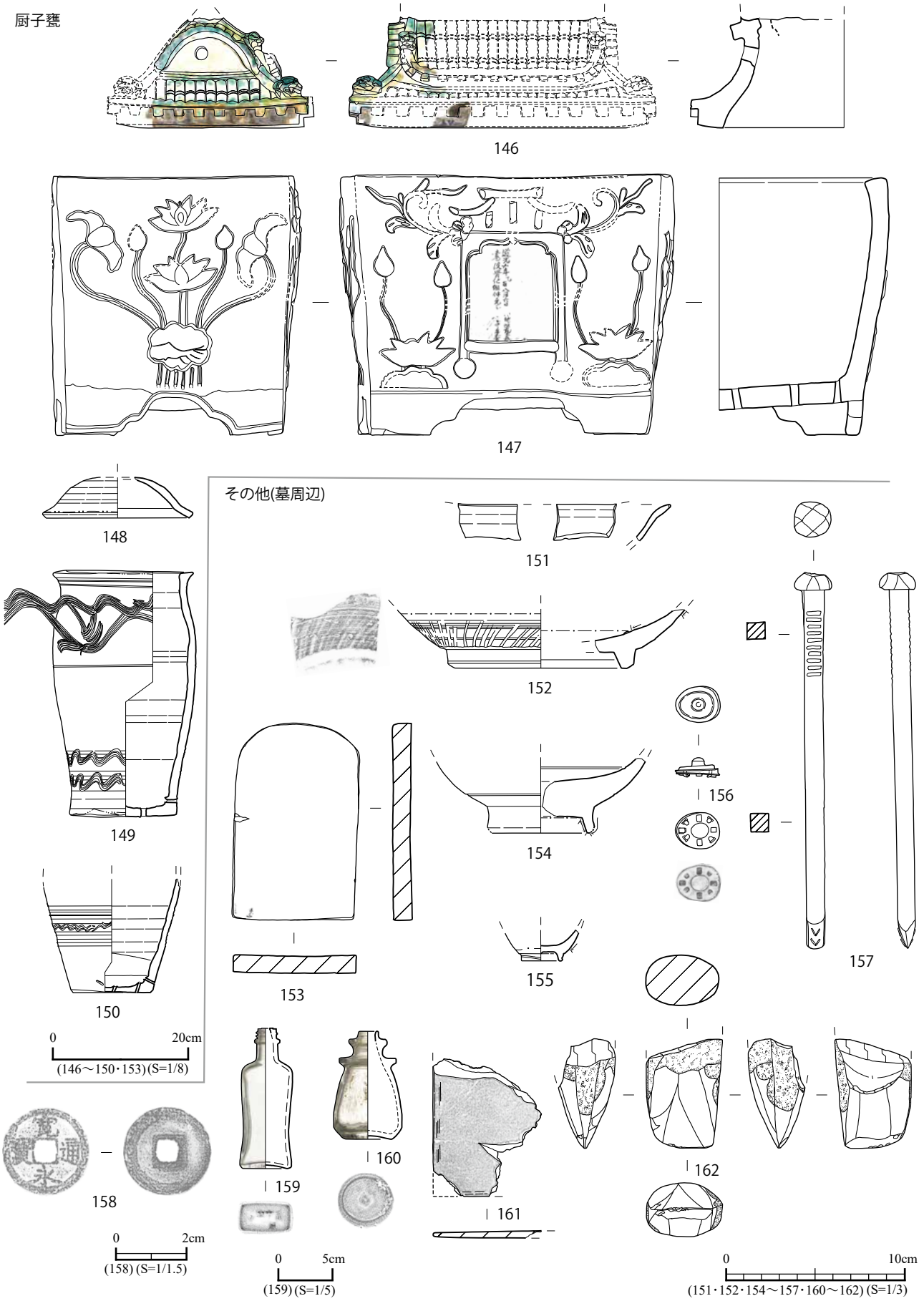
獣骨埋設遺構　19 号墓墓室内で獣骨埋設遺構が確認されており、シルヒラシ右側から墓口裏側にかけての小規模な掘込部から獣骨が集中して出土した。調査の不手際のため、埋設された獣骨の向きなど詳細な出土状況を記録することは出来ず、掘込みの範囲を記録し遺物を回収するに留まった。出土した獣骨はブタ２個体の頭蓋骨と同定されている。儀礼などの性格が想定される。

遺物は、墓室内や墓庭には厨子甕の破片が散乱し、コの字棚右側に厨子甕（149）が残され、内部は空であった。（149）は厨子甕Ⅲｄ類（マンガン安里Ⅵ式相当、近代）、（146）はⅥ類の蓋で近代に位置付けられる厨子甕が出土している。（147）はⅥａ類（上焼宮城Ⅲｂ式相当、19 世紀前半）でやや古手の資料も得られている。また、墓周辺では瓦証文などの用途が想定される瓦製品（153）や、寛永通寶（158）が得られている。

この他、屋根周辺では磁竈窯系青磁（151）、白磁Ｃ３群（154）といったグスク時代の遺物が表採されており、普天間グスクンニー遺跡に帰属するものと思われる。


獣骨埋設遺構
墓口裏側
厨子甕
獣骨埋設遺構
墓室内
A
EL=53.00m
A′
II-1
III
IV 栗石
IV
II-1
II-2
II-1
栗石
IV
正面図
B′
EL=53.00m
II-2
II-1
II-2
III
右神
厨子甕
II-2
II-2
塚跡
埋土
II-1
B
「天下太平」銘入り石碑
N
B′
51.0m
52.0m
50.0m
51.0m
50.0m
獣骨埋設遺構
49.0m
A
48.0m
A′
塚跡・戦没者人骨
D
D′
49.0m
47.0m
48.0m
B
平面図
漆喰
0
2m
(S=1/150)

第 131 図　19 号墓



第 132 図　19 号墓出土遺物

壕跡と戦没者人骨

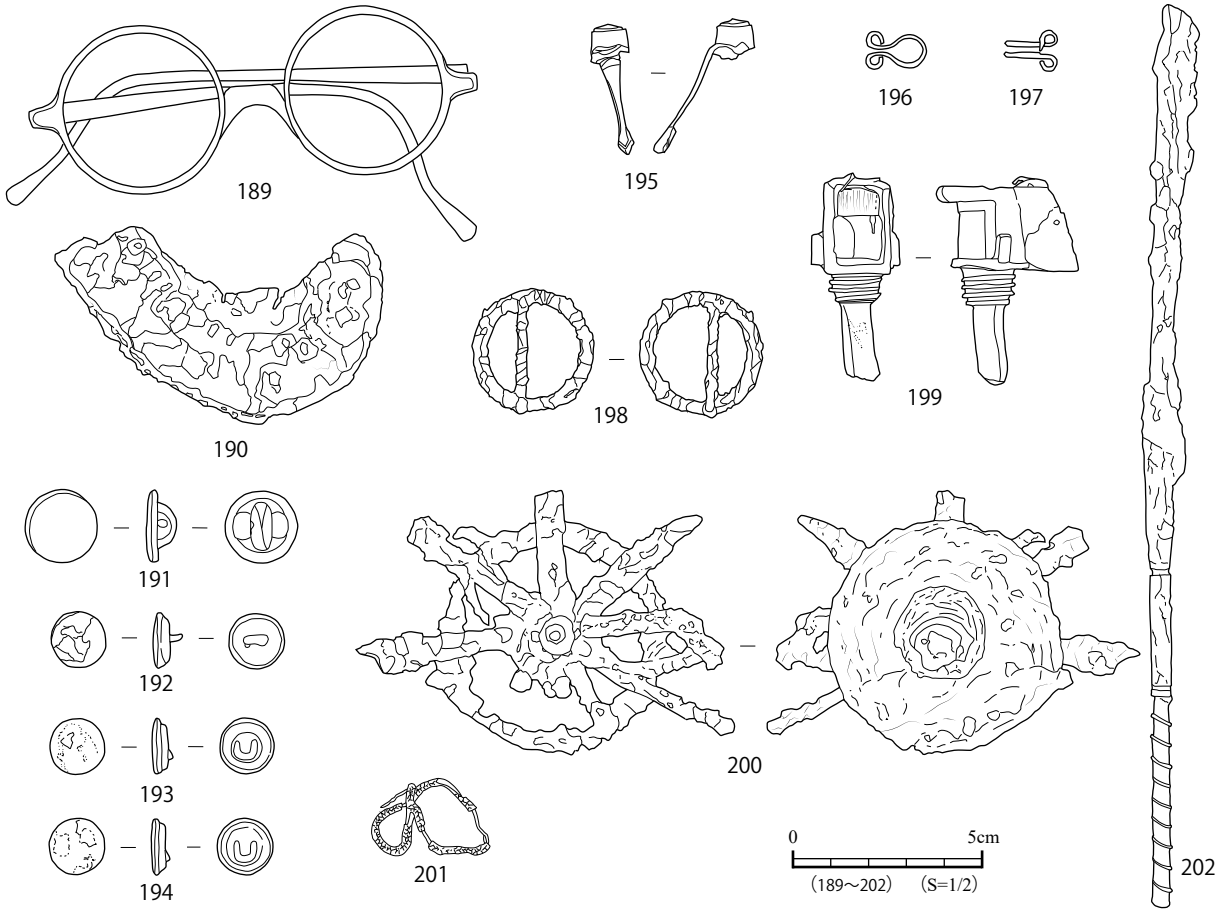
19 号墓墓庭のトレンチ掘削時に人骨（頭骨）を確認し、人骨とその周辺を掘り下げると、壕跡と戦没者人骨が検出された。壕跡は、溝状に岩盤を掘り込んで構築している。壕の幅は約 70 ㎝で、深さは墓庭検出面から約 130cm まで達する。壕入口とみられる部分は階段状に削り出され、そこに横たわる形で人骨が検出された。溝周辺には岩盤を掘り込んだ痕跡が検出され、柱穴１～４とした。柱穴の幅は 19 ～ 30 ㎝を測る。柱を立てて簡易的な屋根を構築していた可能性がある。

人骨は、壕の階段入口部分で仰向けの状態で検出された。土肥直美氏によるご教示では、20 代前半の男性で身長 160 ㎝前後とされた。人骨は解剖学的位置を保っていることと、ボタンが上半身で出土したことから衣服を着用した状態で埋まったとみられる。埋没後、頭骨はその重みにより胸付近まで移動したと考えられる。

壕跡からは、眼鏡・ボタン等の遺留品や、手榴弾・白燐弾等の兵器類等が計 41 点出土した。人骨と共伴して出土した遺物は第 134 図に示すとおりで、他の遺物は壕内から出土した。以下､壕跡出土遺物について述べる。

遺留品　眼鏡（189）、軍靴（190）、ボタン（191 ～ 194）、万年筆の蓋（195）、金具 (196・197) が出土した。眼鏡（189）はフレームがべっ甲調のセルロイド製、レンズは無色透明のガラス製で度が入る。軍靴（190）は１足分出土しており、左右共に腐食が激しく踵部の J 型鉄底金具と靴鋲、僅かな革の破片が残存する。津嘉山クボー遺跡（南風原町 2005）に類例がある。ボタンは樹脂製（191）と金属製（192・193・194）で共に装飾の無い円形脚付ボタンである。津嘉山北地区旧日本軍壕 D 壕・D － 1 壕（南風原町 2010）、南風原陸軍病院壕群 21 号壕（南風原町 2000）などで出土例がある。万年筆の蓋（195）は腐食が進み大半が欠落し金具部分に刻印があるが判然としない。金具 (196・197) は金属製のスプリングホックで、衣服の留め具である。

兵器類　手榴弾のピン（198)･信管（199)､白燐弾（200)、槊杖 (202)、薬莢、弾頭、挿弾子、砲弾片が出土した。手榴弾のピン（198）・信管（199）はマークⅡ手榴弾と考えられるもので複数出土している。（200）は手榴弾型白燐弾である。黄燐弾とも呼ばれる発煙弾で白色濃煙と高熱を発し、壕に潜伏する日本軍の燻り出しを目的として使用したとされ、同様の白燐弾が津嘉山北地区旧日本軍壕 H 壕（南風原町 2008）や神山古集落壕 C － SK004（沖縄県埋文 2019）から出土している。（202）は銃身内の洗浄用道具である槊杖の可能性がある。他に M1 カービン銃用の薬莢や、複数の弾薬を装填する器具である挿弾子等が出土した。



第 133 図　壕跡出土遺物

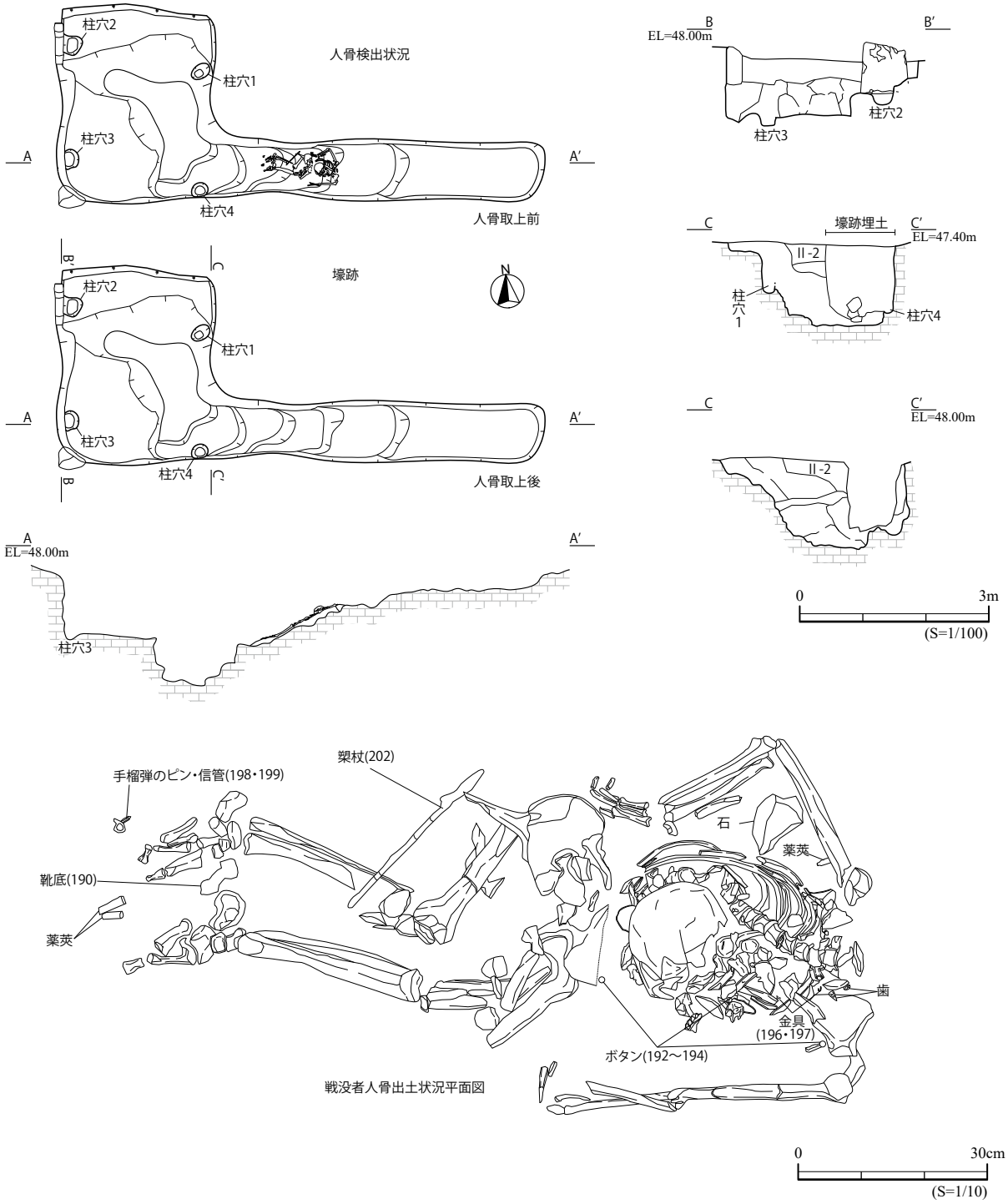
その他遺物　導線（201）と丸釘が出土。導線は金属線に網目地のゴムが被膜する用途不明のもの。丸釘は錆による腐食が著しい。

まとめ　人骨が検出された状況と共伴遺物からは、この人骨は沖縄戦戦死者の可能性が高い。

戦史叢書「沖縄方面陸軍作戦」によると、賀谷支隊（独立歩兵第 12 大隊）の第一中隊は昭和 20 年 4 月 2 日に普天間北側台地で南下する米軍と戦闘したとされ（防衛庁 1968）、この戦没者は賀谷支隊の可能性がある。

壕が構築された 19 号墓が所在するグスクンニー丘陵の頂上からは、西方は安仁屋方面の斜面地とともに東シナ海は北谷から浦添方面までの海域を見渡すことができる。東から南は普天間や喜友名方面、北は中城方面まで望める。このように眺望がきく立地であることから、陣地構築における適地とされ、この壕が構築されたと思われる。

戦没者人骨と壕跡出土遺物は、資料整理後に沖縄県平和記念財団戦没者遺骨収集情報センターに移管された。



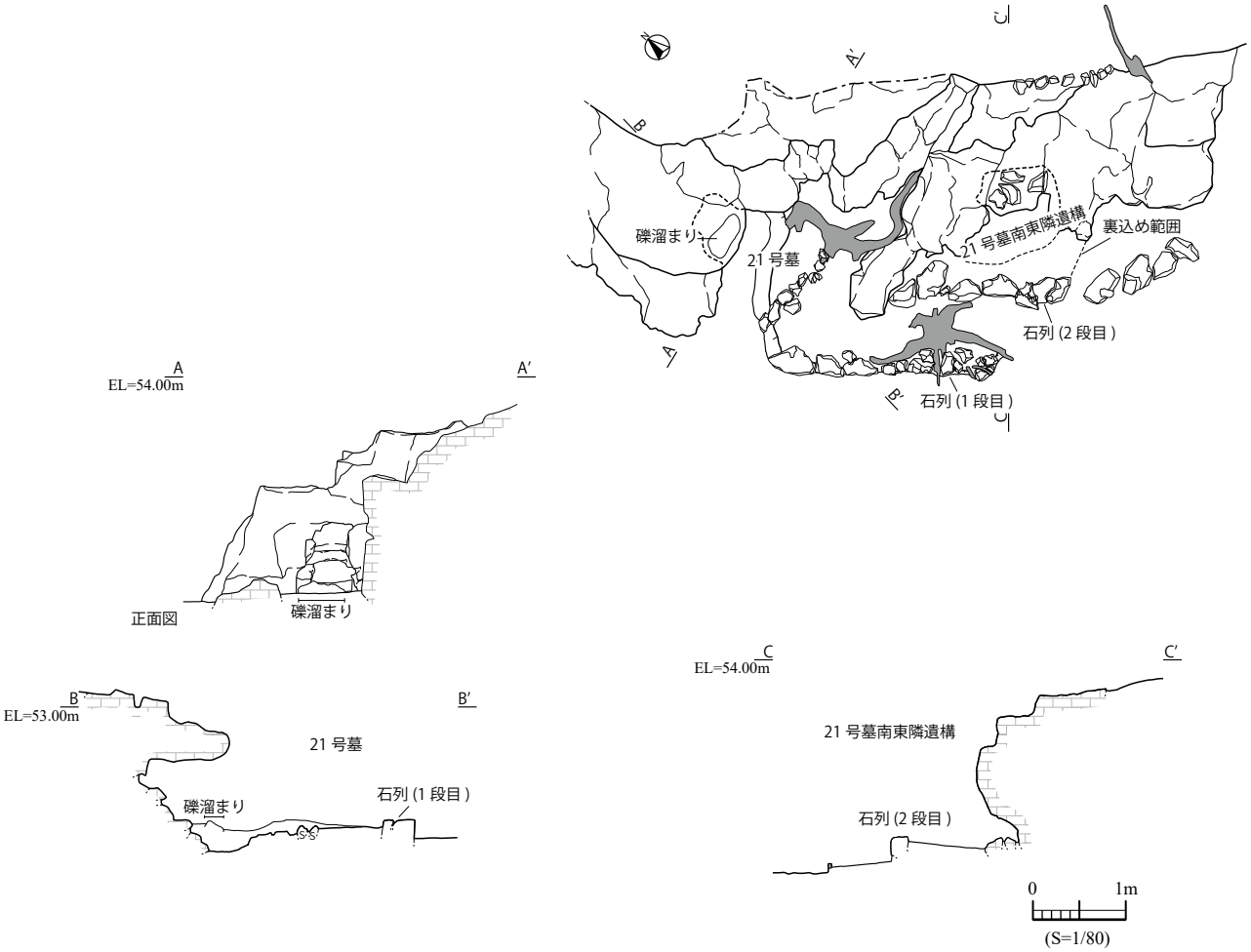
第 134 図　19 号墓壕跡と戦没者人骨

（12）21 号墓

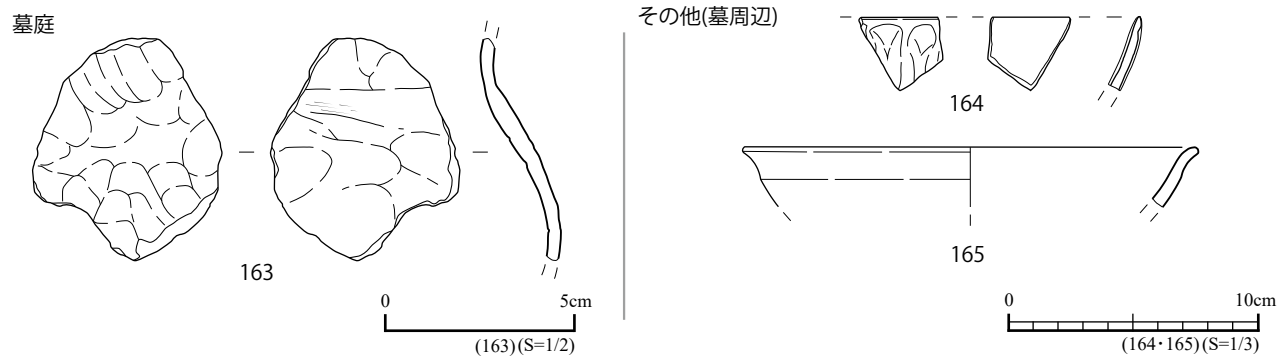
北地区北側斜面（北１地区）にあり、19 号墓の右後方に位置する。21 号墓は掘込墓で、空き墓である。南東隣に拝所とみられる遺構（21 号墓南東隣遺構）がある。

21 号墓　岩盤の窪みを利用した小規模な掘込墓である。墓口には小礫がまとまる範囲があり、墓口に石積みがあった可能性がある。墓庭と考えられる空間には石列が段状に配される。遺物は、墓庭から宮古式土器（163）が出土している。また、墓庭の腐葉土（Ⅰ層）から貝が集中して出土した。墓周辺からは青磁Ⅲ’類（164）や白磁Ｃ３群（165）が出土しており、普天間グスクンニー遺跡に帰属するものと思われる。

21 号墓南東隣遺構　宜野湾市教委による分布調査で確認されていた遺構で、21 号墓の南東隣に窪みとその前面に石列が検出された。人為的遺構の可能性は高いが墓室としては不明瞭であった。拝所などの性格が考えられる。



第 135 図　21 号墓



第 136 図　21 号墓出土遺物

（13）26・31・36 号墓（４区内）

北地区南側斜面（北２地区）にあり、普天間石川原第一遺跡４区の調査によって新規確認された墓であり、完全に埋没していた。26 号墓は亀甲墓と思われ、左前には掘込墓 31・36 号墓がある。31 号墓には厨子甕が残されていた。26・36 号墓は空き墓である。

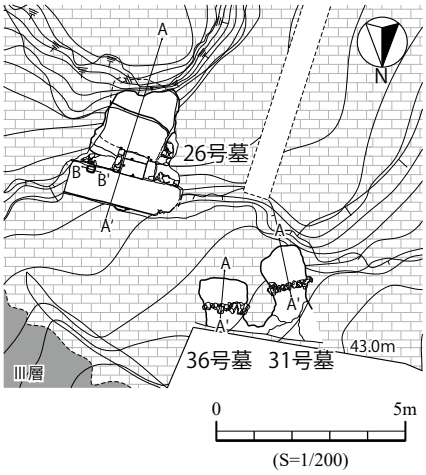
26 号墓　屋根や袖回り・正面の装飾などは残存していないが、亀甲墓の可能性がある。墓口や墓室内、三味台にはモルタルが施されている。三味台は１段で切石が配され、隙間にコーラル（Ⅱ－２）が詰められている。右端にはカビアンジが設けられる。カビアンジは方形状に掘り込み、モルタルを塗って構築している。

墓口の隅石は切石積みで、隙間に栗石を充填している。墓口には蓋石を固定する段が認められる。墓室は岩盤を方形状に掘り込む。床面は段状となり棚は１段以上あったと思われる。墓室内左壁は一部野面積みで積まれている。袖や墓庭は岩盤を利用して構築されたとみられるが殆ど残存せず、その範囲も不明瞭であった。

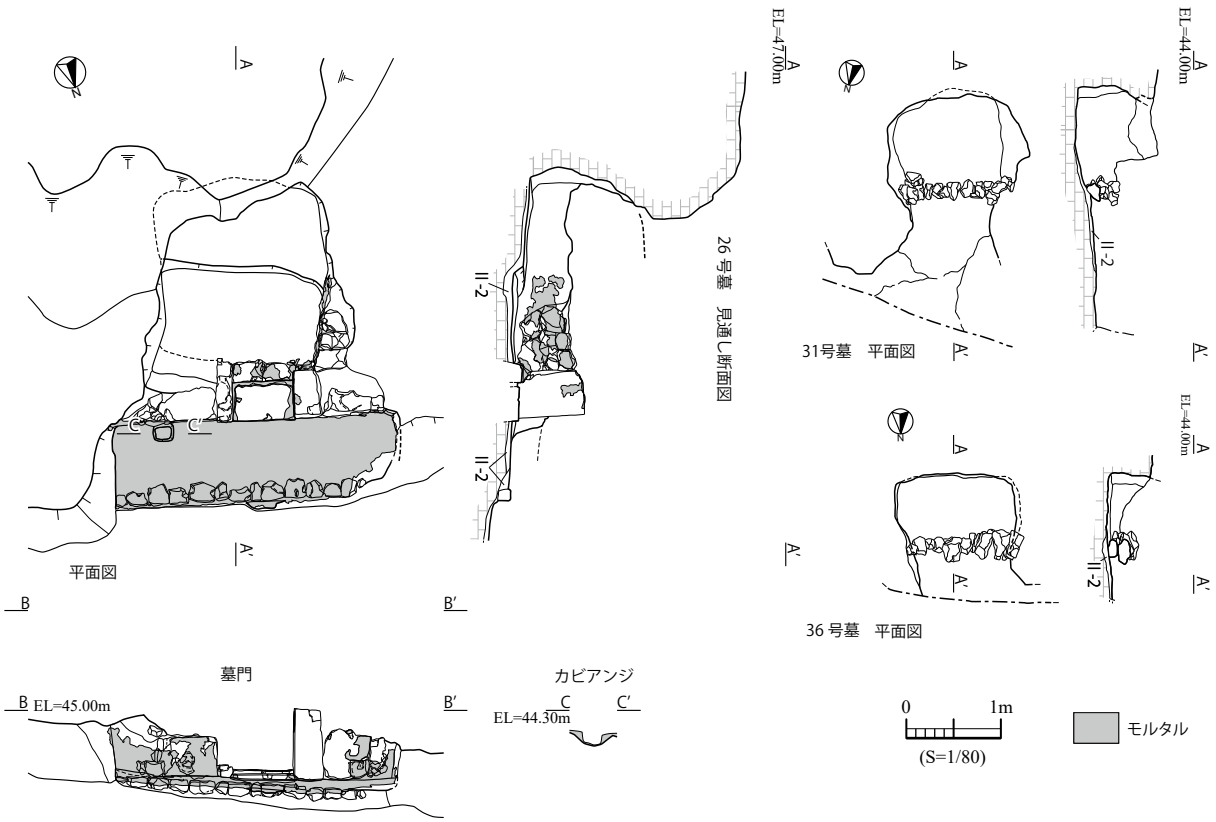
31 号墓　掘込墓で、屋根は崩落していた。墓室内には厨子甕が１基倒れていた状態で検出された。厨子甕内部に人骨が確認されたことから、調査を中断し墓地埋葬法に基づき官報公告を実施した後に調査を行った。しかし公告期間中に何者かに厨子甕が割られたため、納骨状況を記録することができなかった。

墓室はやや方形状に掘り込まれ、床面は墓庭より低い。墓口には閉塞石と考えられる石列が確認された。墓室内の厨子甕（167）は、Ⅲｂ類（マンガン安里Ⅳ式相当、19 世紀後半）である。人骨は成人一体と推定された。

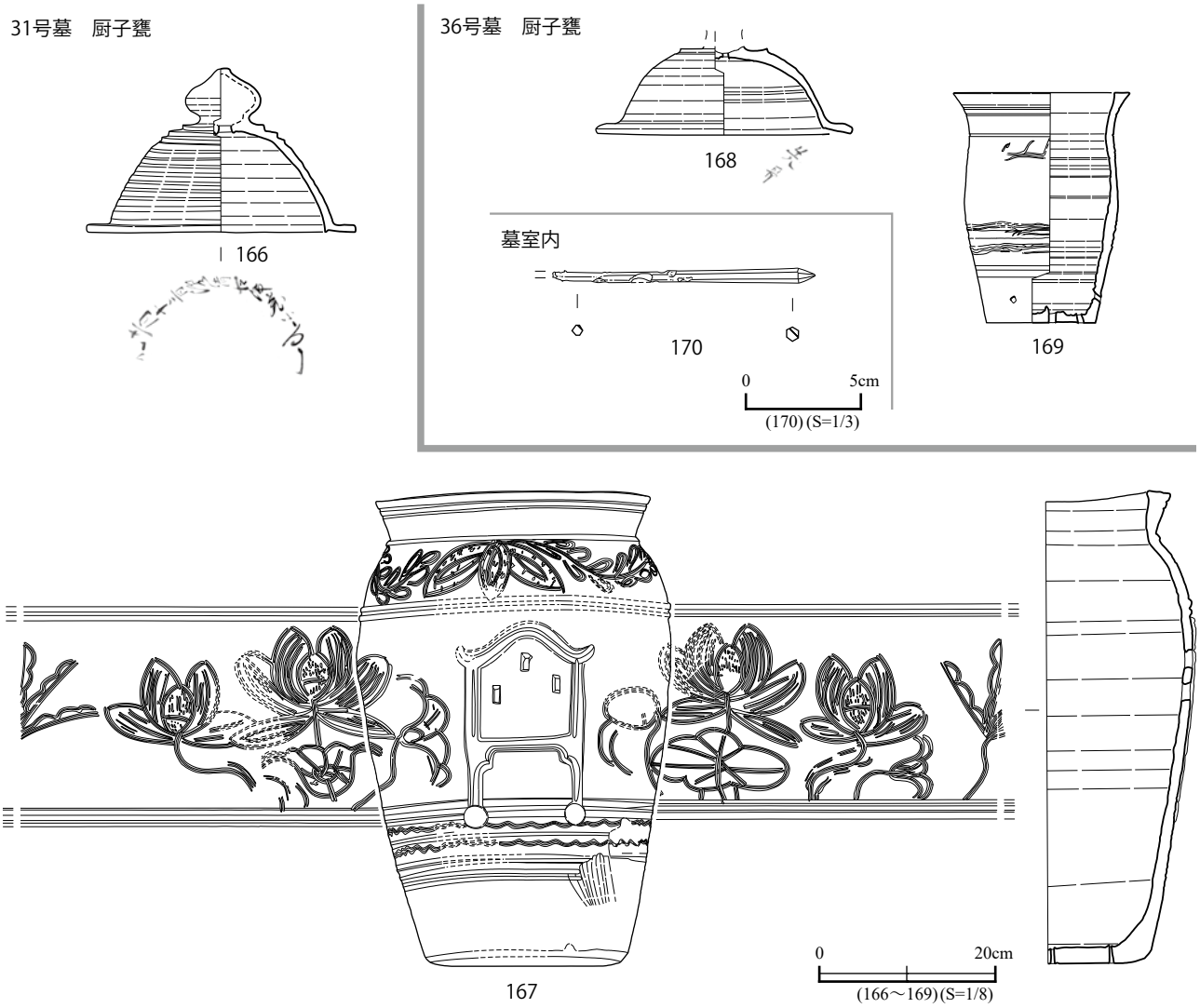
36 号墓　掘込墓で、屋根は崩落していた。墓室は方形状に掘り込まれ、墓口には閉塞石と考えられる石列が確認された。遺物のうち厨子甕（169）は、Ⅲｄ類（マンガン安里Ⅴ式相当、近代）が墓庭から出土し、墓室内からは簪（170）が出土している。



第 137 図　26・31・36 号墓位置図



第 138 図　26・31・36 号墓



第 139 図　31・36 号墓出土遺物

（14）27 号墓（２区内）

北地区南側斜面（北２地区）にあり、普天間石川原第一遺跡２区の調査によって新規確認された墓であり、５号墓の右隣に位置する。27 号墓は掘込墓で墓室内まで完全に埋没していた。厨子甕が４基あり内部に人骨が確認されたことから、調査を中断し墓地埋葬法に基づき官報公告を実施した後に調査を行った。

掘込墓で、屋根や正面の装飾は残存していない。墓口には隅石と思われる切石が残る。墓室は岩盤を方形状に掘り込む。床面は低く墓口から床面にかけて傾斜する。

墓室内には厨子甕４基が隙間なく納められていた。墓室左側は大きくオーバーハングし、厨子甕を納めるために拡張された可能性がある。厨子甕は全て蓋がなく、厨子甕内部にも基地造成土（Ⅰ）が入り込んでいた。厨子甕は右側から厨子１～４と番号を付した。厨子１～３は人骨が納められ奥壁に向き、厨子４は空で墓口に向く。

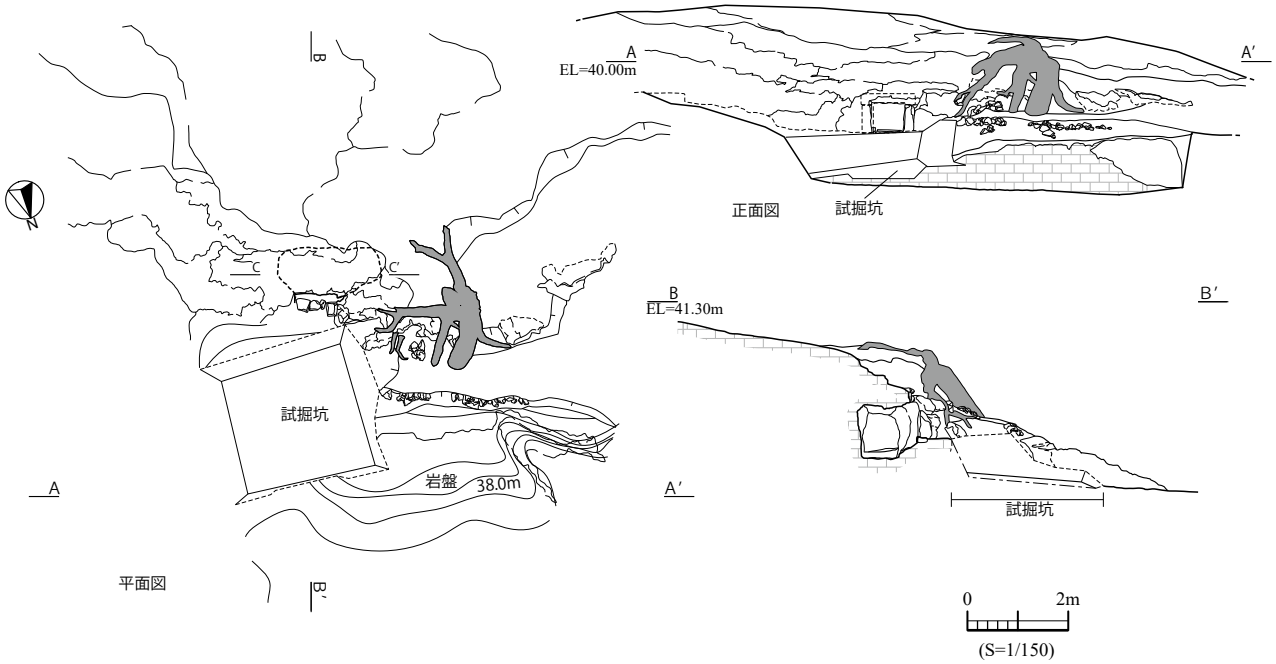
右袖・三味台付近は試掘坑により残存していない。左袖側は石列が僅かに残る。墓庭の範囲も不明瞭であった。

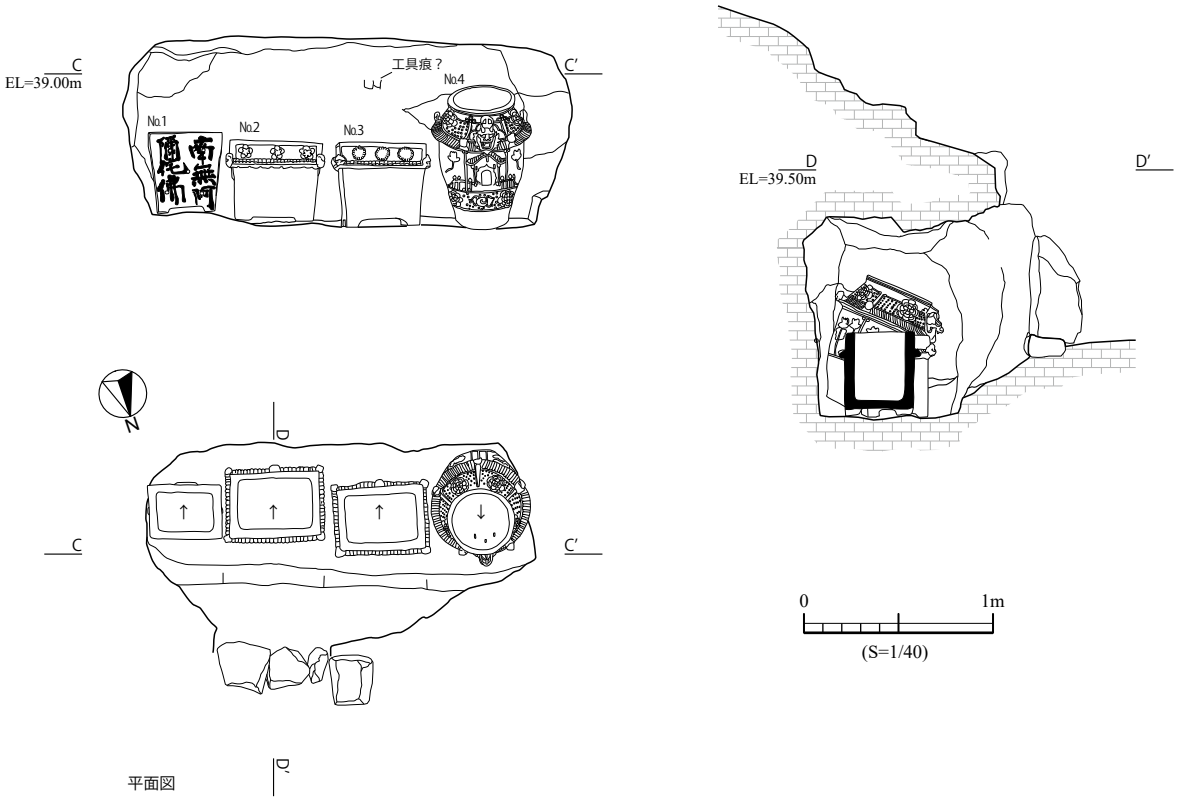
遺物のうち、厨子１（171）はⅥe 類（上焼宮城Ⅴ式相当、近代）で、副葬品として指輪（176･177）が出土し、（176）は指骨に着装された状態であった。厨子２（172）・３（173）はⅥc 類（上焼宮城Ⅳa 式相当、19 世紀後半～近代）、厨子４（174）はⅣ類（マンガン庇付で 19 世紀代）で、本墓の使用年代は 19 世紀から近代と考えられる。

厨子１～３には人骨が納められ、厨子１は若年の被葬者１体と推定された。厨子２・３はともに複数体で、成人男性１体・成人女性１体・乳児１体の計３体で、男女に未成人が加わると推定された（第 141・142 図納骨状況）。詳細な取り上げ図は第５章第６節第 156 図に示す。

厨子４内には一部の人骨が残されており、小児１体と推定された。

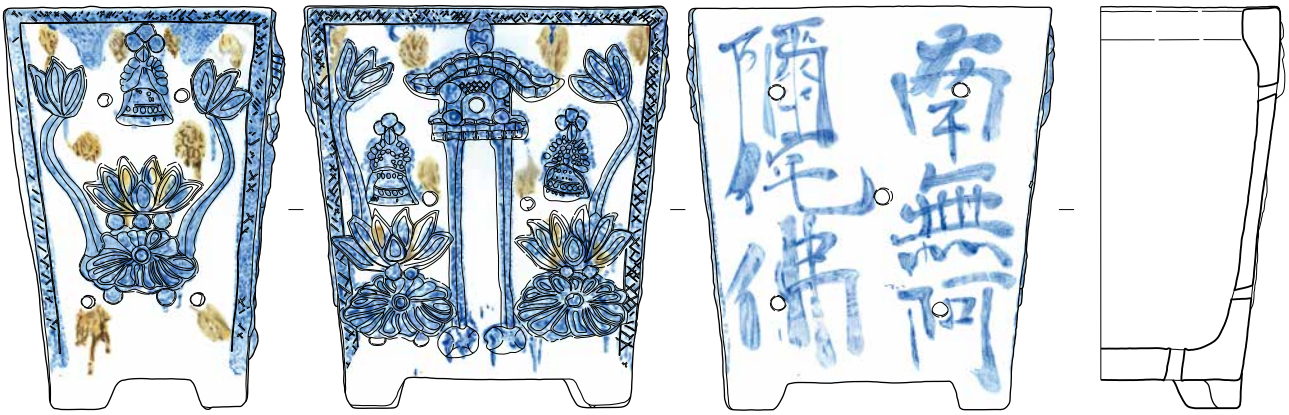
特に、厨子１からは指骨に指輪（176）が着装した状態で出土し、指骨は緑青色に変色している。人骨の分析では、右手第３基節骨（中指）で、着色は指輪に由来し、着色した指骨は右手に多いとされた。納骨時の指骨は靱帯などで連結していた可能性が指摘されている。


A
EL=40.00m
A′
正面図
試掘坑
B
B′
EL=41.30m
試掘坑
C
C′
試掘坑
岩盤
38.0m
A
A′
平面図
B
B′
0
2m
(S=1/150)


C
EL=39.00m
C′
工具痕？
No.4
No.1
No.2
No.3
D
EL=39.50m
D′
N
D
C
C′
D′
平面図
0
1m
(S=1/40)

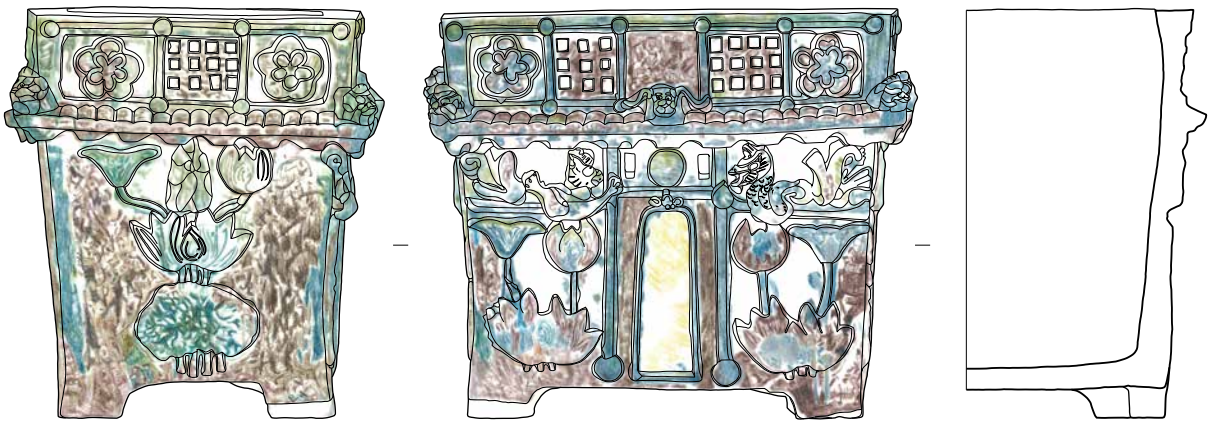
第 140 図　27 号墓

厨子甕①



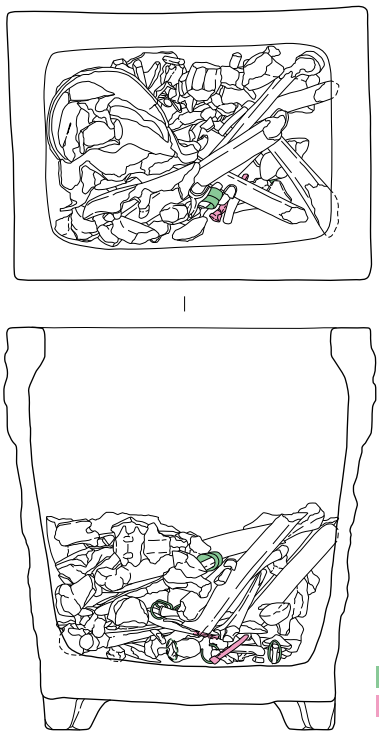
171

厨子甕②

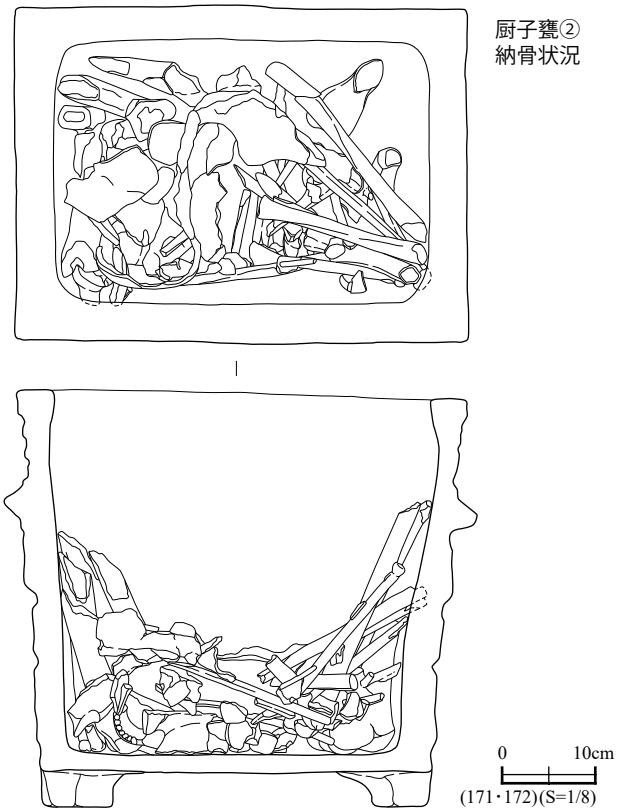


172

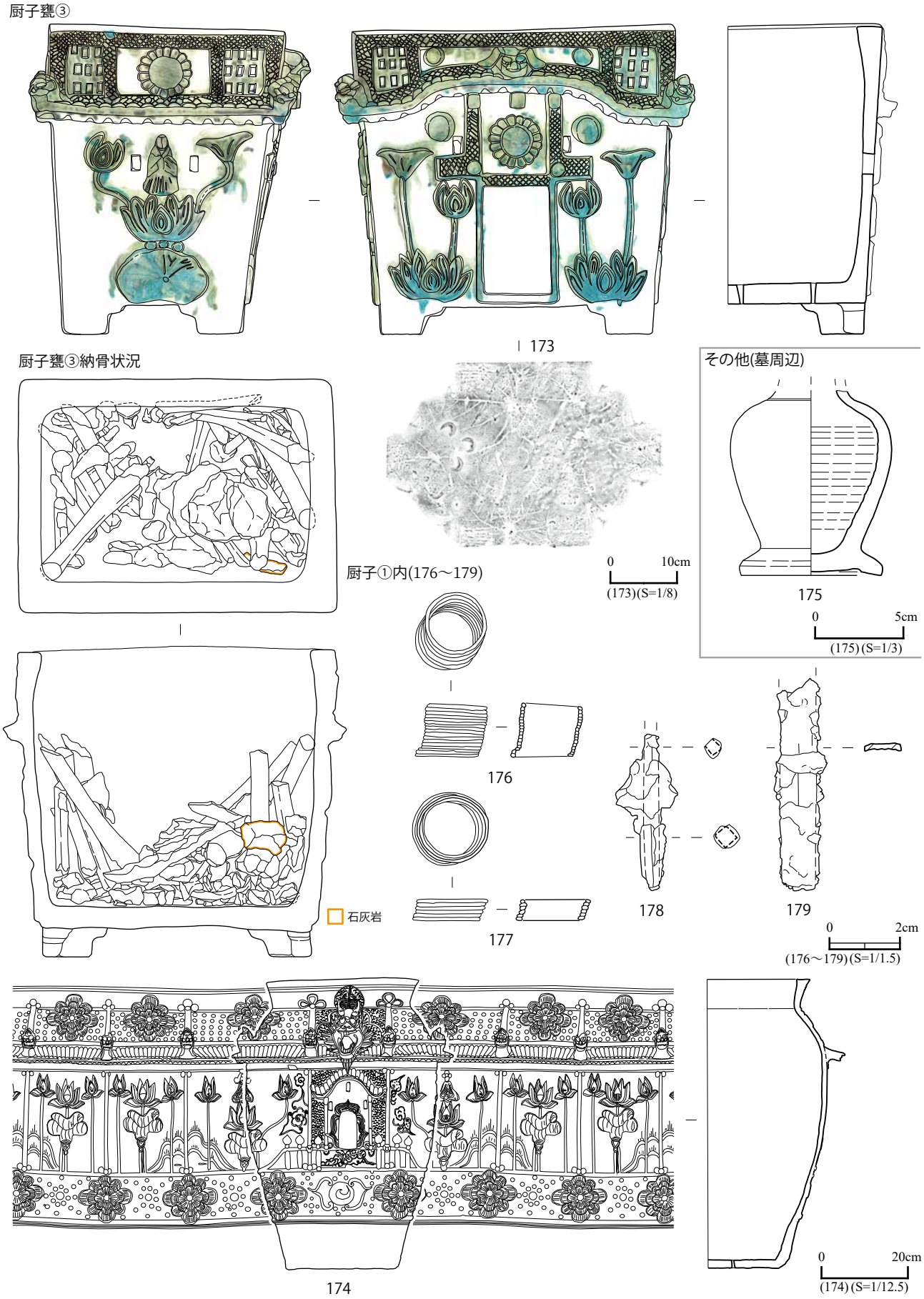
厨子甕①
納骨状況



厨子甕②
納骨状況



第 141 図　27 号墓出土遺物 1



第 142 図　27 号墓出土遺物 2

（15）34・35 号墓（５区北側内）

北地区南側斜面（北２地区）にあり、普天間石川原第一遺跡５区の調査によって新規確認された墓であり、墓室内まで完全に埋没していた。34 号墓は破風墓で、右袖に仮墓と考えられる小規模な掘込墓（35 号墓）が確認された。いずれも空き墓である。

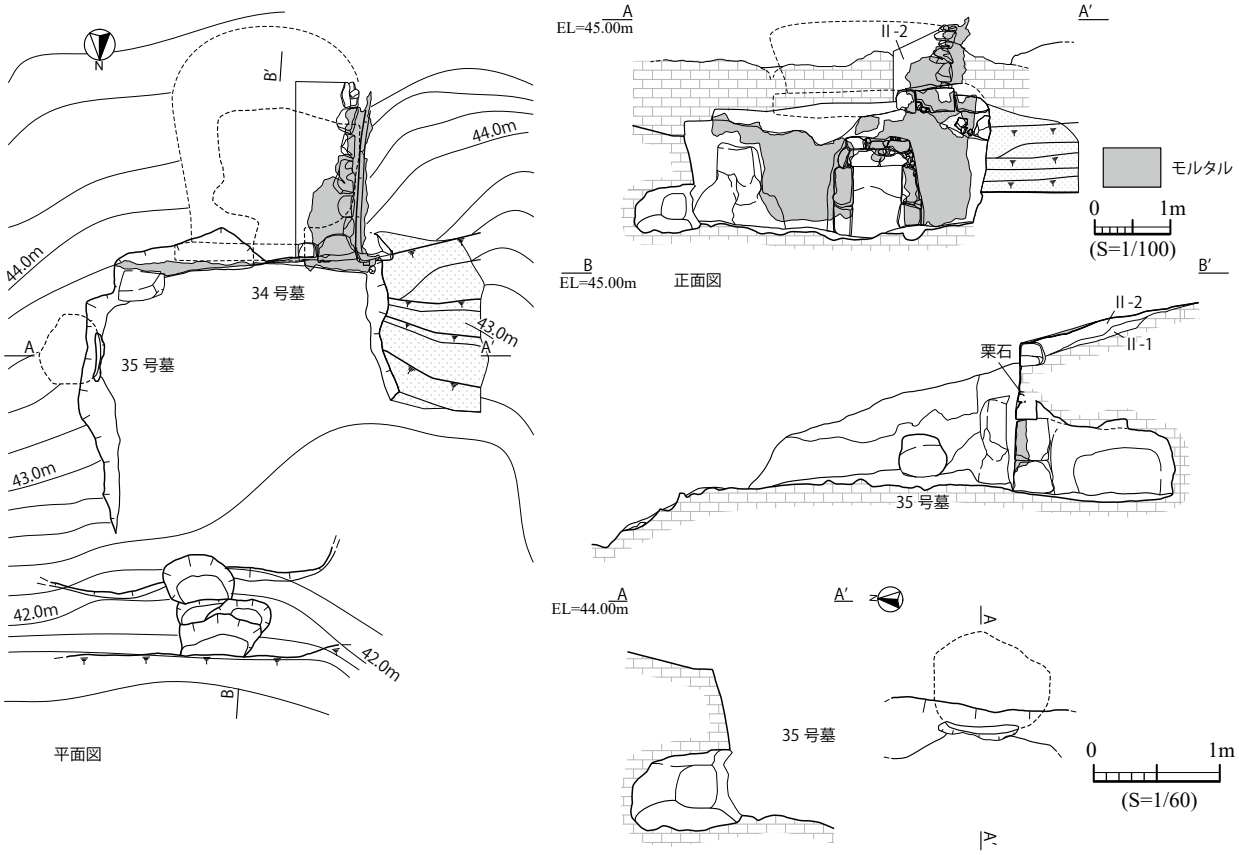
34 号墓　掘込式の平葺墓である。わずかに残る正面や屋根が直線的になることから平葺墓と考えられる。

屋根は一部残存しており、コーラル（Ⅱ－2）を造成し切石を巡らせモルタルで仕上げている。袖回りなどの装飾は残存していない。

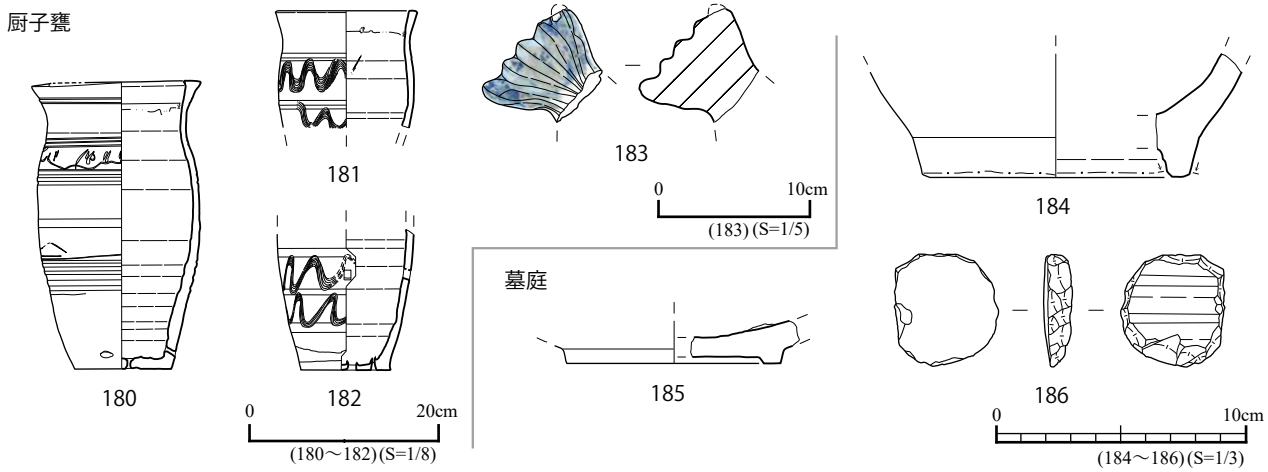
墓口は開口部に切石を嵌め込み構築している。三味台はみられない。墓室は岩盤を方形状に掘込み棚はなく、床面は墓庭よりやや低い。右袖や袖垣は岩盤削り出しにより構築されているが、左袖は地形的に低く栗石が広がっていたことから、石積みがあった可能性がある。墓庭も岩盤を平坦に掘り込んでいる。墓門付近は岩盤が段状となっており、階段が存在したと考えられる。

遺物は、墓周辺より出土した厨子甕（180 ～ 182）はⅢｄ類（マンガン安里Ⅵ式）で近代である。

35 号墓　小規模な掘込墓で、34 号墓仮墓と考えられる。34 号墓右袖の岩盤を掘り込んで構築されている。



第 143 図　35 号墓



第 144 図　34 号墓出土遺物

（16）その他の遺構

墓以外の遺構についてまとめて記載する。

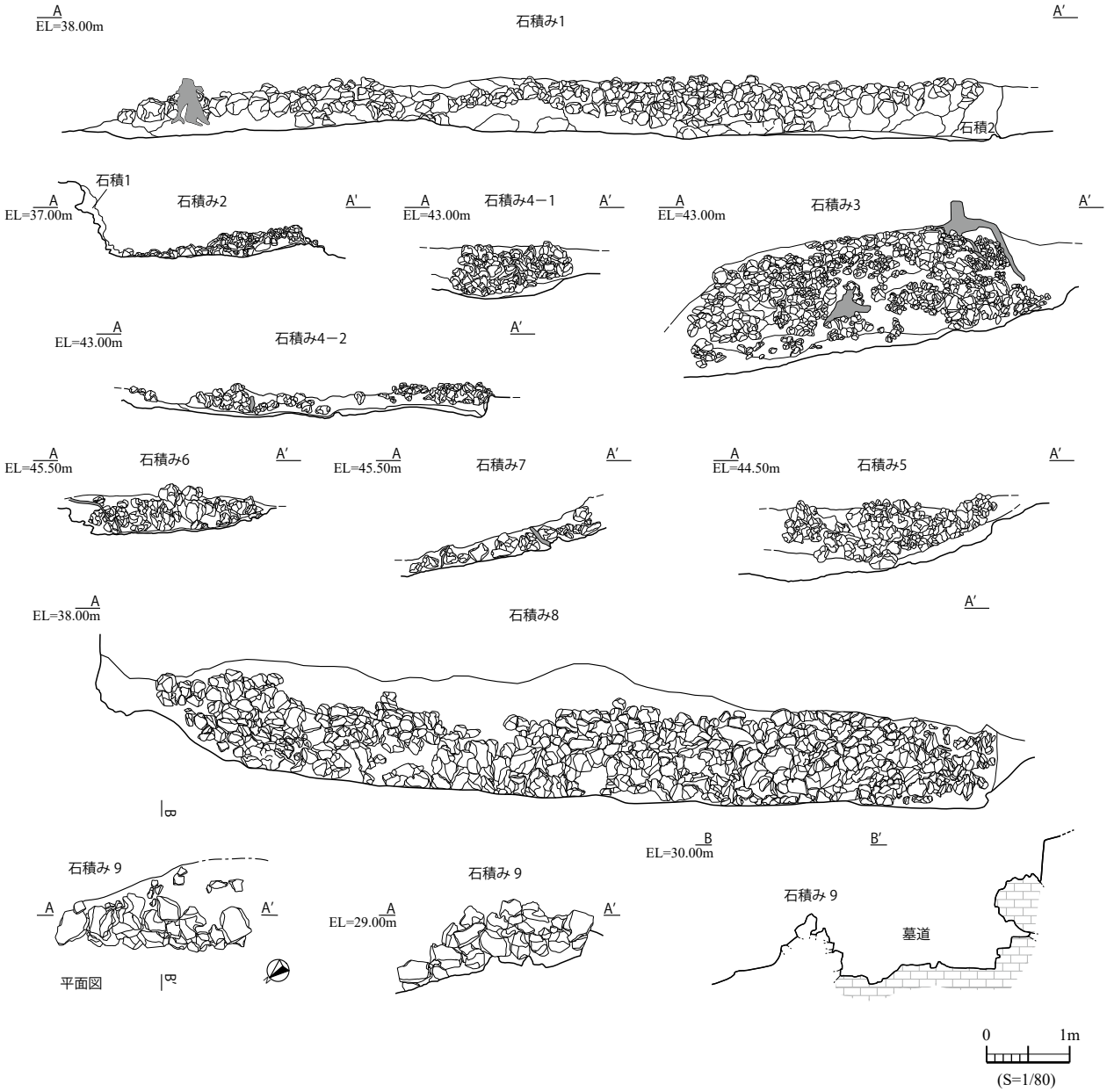
石積み１～９　墓周辺では石積みが検出されている。墓に伴う石積みは墓とまとめて記録しているが、墓から離れたものについては任意に番号を付し石積み１～９とした。墓地を区画するとともに、墓地造営の土留め石積みなどの性格が考えられる。

石積み１・２　基地造成によって埋没していた野面積みによる石積みである。石積み１は５号墓墓門左側から４号墓方面まで伸びる。石積み２は石積み１に垂直（北西方向）に伸びる石積みで根本部分が残る。５号墓および４号墓付近を区画する石積みと考えられ、石積み１前は墓道であった可能性がある。

石積み３～７　16 号墓の左側斜面に広がる石積みである。崩落しているものが多く、いずれも野面積みの石積みである。最も下段の石積み３・４、中段の石積み５、上段の石積み６・７は斜面下に向け面を持ち、土留め石積みの可能性があるものとした。

石積み８　７号墓左側からは５号墓が所在する南西方向に伸び、北西に面を持つ石積みである。石積みの向きから推測すると５号墓と７号墓は石積み８によってつながる形で区画されていた可能性がある。７号墓から５号墓まで至る墓道際の石積みと考えられる。

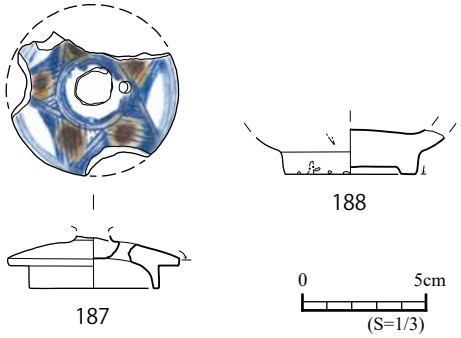
石積み９　10・11 号墓が所在する北側斜面下の谷底地形に位置する。野面積みの石積みで、北西に面を持つ。20 号墓まで至る墓道際の石積みと考えられる。



第 145 図　石積み１～９

不明遺構 2　グスクンニー丘陵頂上のガジュマル根本部分にある配石遺構で、拝所関連の遺構とみられる。南側には岩盤が階段状となる部分がある。さらにその南側、19 号墓屋根後方には石列が複数検出されるとともに、「天下太平」の銘がある石碑が落ちていた。この不明遺構 2 とガジュマルは造成工事範囲から外され現地保存されている。また、「天下太平」銘石碑も造成工事の影響がないよう、調査時にガジュマル根本付近へ移動した。

不明遺構 4　16 号墓北側後方にあるコンクリート造りによる階段や柱状の構築物である。当該遺構については、宜野湾市教委の分布調査で確認されている遺構で、宜野湾市教委と調整し、工事により撤去された。



第 146 図　石積み 8・9 出土遺物

第 47 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 1

墓名	地区	調査	形式	墓室形態	面積(㎡)	方位	墓口寸法(㎝) 奥行：幅：高	墓室寸法(㎝) 奥行：幅：高	備考
1号墓	南	H29	掘込墓	棚なし	2.5	S 74°W 南西	ー：124：120	160：150：117	空き墓。
	出土遺物　墓室内：厨子甕蓋Ⅲ類甕形(完形1)、沖施酒器(胴1)、沖無甕(胴1)、銭貨(1セント1)、**墓庭：**沖施A類碗(胴1、底1)・B-2類小碗(口～底1、口1、底1)・C類碗(口1)・C-2類碗(口～底1)・分類なし鉢(口1)・壺(底1)・酒器(胴1)・火取(口1)・蓋(庇1)・器種不明(胴1)、沖無壺(胴8)・鉢(口2)・擂鉢(口1、胴1、底1)・器種不明(胴6)、沖無転用品甕(1)、陶質土器鉢(口1)・器種不明(胴1)、本磁B類小碗(口～底1)・C類小碗(底1)・F類小杯(底1)、青花蓮華(把手1)、鉄製品(レール1)、瓦(丸1、平1)、円盤状製品(1)、**墓口前：**沖施C類碗(底2)				
2号墓	南	H29	掘込墓	棚なし	0.9	S 59°W 南西	ー：97：86	91：94：75	空き墓。
	出土遺物　墓室内：ガラス製品(薬品瓶?1)、**墓庭：**沖施B-2類小碗(底1)・C類碗(底1)・C-2類碗(口～底1)・鉢(底1)、沖無器種不明(胴4)、本磁A類碗(口2)・B類小碗(底1)、**墓庭・墓室内：**本陶瓶(胴1、底1)、**墓口前：**瓦(丸・平不明1)・ガラス製品清涼飲料瓶(口1)								
3号墓	南	H29	破風墓	有段コ字4段	104.5	S 52°W 南西	ー：ー：ー	344：272：ー	空き墓。モルタル塗。
	出土遺物　墓室内：青銅製品煙管(吸口1)、**墓域外：**沖施A類碗(胴1)・A-1類小碗(口1)・B類小碗(底1)・B-2類碗(底1)・B-3類小碗(口～底1)・C類碗(口2)・C-2類碗(底1)・分類なし皿(底1)・鉢(口1)・急須(口1)・酒器(胴1)、沖無壺(胴1)・蓋(1)・器種不明(胴5)、陶質土器鍋(口1)、本磁B類小碗(口～底1、口1)、白磁皿(底1)、青花小碗(口1)、鉄製品(器種不明3)、青銅製品(鍵プレート付き4)、金属製品(腕時計1)、瓦(平2)、ガラス製品コカコーラⅢa式Ⅰ類Aタイプ瓶(口～底1)・アルコール飲料瓶(口～底1)・瓶不明(口～底1)、不明(器種不明1)								
4号墓	北2	H29	亀甲墓	コ字4段か	104.1	N 41°W 北西	87：61：ー	355：278：193	空き墓。モルタル塗。
	出土遺物　墓室内：厨子甕身ⅢaまたはⅢb類甕形(胴1)、沖施A類碗(底1)、沖無壺(胴2)・甕(底1)、本磁B類小碗(底1)・E類小杯(胴1)、鉄製品(ライター1)、ガラス製品清涼飲料瓶(口～底1)、**入口：**鉄製品(イヤ1)、**墓庭：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴1)・ⅢaまたはⅢb類(甕形1)、沖無器種不明(胴6)、本磁A類碗(胴1)、**屋根：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴4、底2)・ⅢaまたはⅢb類甕形(口1、胴1)・厨子甕蓋Ⅲ類甕形(撮1、鍔1)、沖施A類碗(底2)・A-3類小碗(胴1)・B-1類碗(底1)・B-2類小碗(胴1)・C類碗(口1)・分類なし壺(胴1)・鉢(口1)・瓶(頚1)・器種不明(胴1)、沖無壺(胴14、底2)・甕(胴2)・鉢(口1、胴1)・擂鉢(底4)・器種不明(頚1)、陶質土器火炉(把手2)・急須(把手1)、染付碗(胴1)、本磁A類器種不明(口1)・B類小碗(底1)・D類碗(口1)・F類小碗(口1)、銭貨(新寛永通寶Ⅲ期1)、瓦(丸・平不明1)、**左石積み：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴1)・ⅢaまたはⅢb類甕形(胴1)・厨子甕蓋Ⅲ類甕形(鍔1)、沖施A-2類小碗(底1)、沖無壺(底2)・壺or甕(胴5)、**墓域外：**厨子甕身Ⅱ類甕形(胴1)・Ⅲ類甕形(胴3)・Ⅲa類甕形(胴1)・ⅢaまたはⅢb類甕形(胴1)、沖施酒器(胴1)・器種不明(胴1)、沖無A類壺(口1)・分類なし器種不明(胴1)、陶質土器鍋(口1)・器種不明(胴1)、本磁A類碗(口1)								
5号墓	北2	H29	平葺墓	平坦コ字2段	93.2	N 37°W 北西	85：62：101	415：376：149	空き墓。モルタル塗。
	出土遺物　墓室内：金属製品(器種不明1)、**墓庭：**厨子甕身Ⅰ類家形(御殿形)(完形1)・Ⅲ類甕形(胴2)・Ⅲb類甕形(完形1)・Ⅵd類家形(御殿形)(完形1)、厨子甕蓋Ⅰ類家形(御殿形)(完形1)・Ⅲ類甕形(体～鍔1)・Ⅴ類家形(御殿形)(完形1)・Ⅵd類家形(御殿形)(完形1)、沖無壺(胴4)・器種不明(口2、胴4)、本磁A類碗(口～底6、口6、胴1)・B類碗(底2)・B類皿(口～底7)、青花小碗(口1)、金属製品瓶(口～底1)、ガラス製品コカコーラⅢa式1類Aタイプ瓶(口～底2)・アルコール飲料瓶(口～底5)・薬瓶(口～底3)・食料瓶か?(口～底1)・清涼飲料瓶(口～底11)・瓶不明(口～底24)、**墓庭・入口・墓室内：**厨子甕身Ⅴ類家形(御殿形)(口～底1)、**屋根：**沖無壺(胴1)・鉢(口1)、本磁B類皿(口～底1)・B類湯呑(口～底1)、**入口：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴3)・ⅢaまたはⅢb類甕形(口1、胴1)、沖施A類碗(口1、底2)・B類小碗(底1)・B-2類碗(胴1)・C類碗(口1)・分類なし瓶(胴1)、沖無B類壺(口～底1)・甕(胴～底1)、沖無壺(胴5)・鉢(口1)・擂鉢(口～底1)・器種不明(胴7)、陶質土器火炉(胴1)、本磁A類碗(口1)・B類碗(口2)・B類小碗(底1)・E類蓋(完形1)・F類碗(口1)、染付碗(口1)、円盤状製品(1)、鉄製品器種不明(口2)、瓦(平2、丸・平不明1)、ガラス製品薬瓶(口～底1)・清涼飲料瓶(口～底4)・瓶不明(口～底4)、**墓域外：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴2)、厨子甕蓋Ⅲ類甕形(鍔1)、沖施C-2類碗(口1)・鉢(胴1)・急須(持ち手1)、沖無皿(口～底1)・壺(胴8、底1)・器種不明(胴3)、本磁A類碗(口2、胴1、底1)・A類皿(底1)・B類碗(底1)・B類皿(底1)・D類碗(口1、胴1)・F類小碗(底1)・鉢(底1)・瓶(底1)、青磁盤(底1)、白磁C3群碗(胴1、底1)、瓦(平3、丸・平不明7)、ガラス製品薬瓶(口～底1)・染料瓶(底1)・化粧瓶(口～底2)・清涼飲料瓶(口～底1)・ビー玉(2)、土器貝塚前期器種不明(胴3)・グスク器種不明(胴2)、石材(1)、焼土(1)								
欠番	北2	H29	調査を行ったが、墓や遺構としての人為的痕跡が認められず欠番とした。						

第 48 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧２

墓名	地区	調査	形式	墓室形態	面積(㎡)	方位	墓口寸法(㎝) 奥行：幅：高	墓室寸法(㎝) 奥行：幅：高	備考
7号墓	北1	H29	亀甲墓	コ字2段か	166	S 57°W 南西	－：－：－	349：290：170	空き墓。漆喰塗。
	出土遺物　墓室内：厨子甕身VI類家形(御殿形)(口1)・厨子甕蓋VIe類家形(御殿形)(装飾1)・VIc類家形(御殿形)(屋根1)、**墓庭：**厨子甕身III類甕形(胴3、装飾1)・IIIa類甕形(胴7)・VIb類家形(御殿形)(口～底1、口3)・厨子甕蓋III類甕形(完形1、体～鍔2)・VI類家形(御殿形)(装飾5、庇1)・VIb類家形(御殿形)(鍔1、装飾8)・VIc-2類家形(御殿形)(鍔1)・VIe類家形(御殿形)(装飾12)、厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明8)、沖施A-1類小碗(口1)・B-1類碗(胴1)・C類碗(胴1)・分類なし皿(口～底1)、沖無壺(胴1)・壺or甕(胴3)、本磁A類小杯(口1)、銭貨(古寛永通寶Ⅰ期1、新寛永通寶III期1)、瓦(丸2、平2)、ガラス製品アルコール飲料瓶(口～底1)・清涼飲料瓶(口～底2)、石器・石製品(石斧1、敲磨石1)、**墓室内・墓庭：**厨子甕身IIIc類甕形(口～底2)、**墓室内・墓庭・入口：**厨子甕蓋VIe類家形(御殿形)(装飾1)、**墓室内・墓庭・入口・墓域外：**厨子甕身VIc-Ⅰ類家形(御殿形)(口～底1)、**入口：**厨子甕の身III類甕形(胴4)・IIIa類甕形(胴1)、VI類家形(御殿形)(装飾2)・VIe類家形(御殿形)(装飾2、鍔8)、沖施鉢(胴1)、沖無壺(胴1)・擂鉢(口1、底1)、陶質土器器種不明(胴1)、本磁A類碗(口1)、瓦(丸・平不明3)、**入口・墓域外：**厨子甕身VIe類家形(御殿形)(口～底1)、沖施鉢(口～底1、口1)、**墓庭・入口・墓域外：**厨子甕身VIc-2類家形(御殿形)(口～底1)、**墓庭・墓域外：**沖施B-2類碗(口～底1)・分類なし皿(口1)、**右袖：**本磁B類皿(底1)・銭貨(新寛永通寶III期1)・青銅製品(器種不明10)、**屋根：**沖施C類碗(口1)、カムィヤキ壺(頸1)、瓦(平瓦1)、**石積み：**厨子甕身III類甕形(胴1)、**墓域外：**厨子甕身III類甕形(胴3)、厨子甕蓋III類甕形(完形1)、沖施A類碗(底1)・A-3類小碗(口2)・B-2類碗(底1)・C類碗(胴1、底1)・分類なし皿(底1)・器種不明(胴1)、沖無転用品甕(口～底1、胴～底2)、沖無壺(胴3)・擂鉢(口1)・器種不明(口1、胴1、底2)、陶質土器壺(底1)・鉢(胴1)・火炉(口1)、本磁F類小碗(胴1)、銭貨(1セントコイン1)、瓦(平瓦1)、石器・石製品(敲磨石1)							
8号墓	北1	H29	破風墓	平坦コ字2段	58.7	S 59°W 南西	－：－：－	285：272：161	空き墓。漆喰塗。付近に童墓？あり
	出土遺物　墓室内：沖施C-2類碗(口1)、本磁A類碗(底1)、ガラス製品化粧品容器(胴1)、**墓庭：**厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明1)、沖施B-2類碗(底1)、本磁E類杯(口～底1)・F類器種不明(胴1)、瓦(丸・平不明1)、ガラス製品皿(口4)・清涼飲料瓶(口～底2)・化粧品容器(胴1、底1)、**入口：**沖施B-1類碗(口2、胴1)・C類碗(胴1)、沖無壺(胴1)、陶質土器鉢(口1)、**墓域外：**厨子甕身Ⅱ類甕形(口～底1、口1、胴1)・III類甕形(胴5、底1)、厨子甕蓋Ⅱ類甕形(撮～鍔1)、厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明1)、沖施A類碗(底1)・A-2類小碗(口～底1)・A-3類小碗(口1、底1)・B-1類碗(口2、底1)・B-1類小碗(口～底1)・C類碗(口1)・C-1類碗(口～底1)、沖無壺(胴6、底1)・壺or甕(胴4)・器種不明(胴1)、陶質土器火炉(口1)・器種不明(胴2)、本磁A類碗(胴2)、染付碗(底1)、青花碗(口1)、銭貨(新寛永通寶III期1)、瓦(丸・平不明1)、ガラス製品清涼飲料瓶(口～底5、底1)・瓶不明(口～底1)、石器・石製品(石皿・砥石1)							
9号墓	北1	H29	掘込墓	棚なし	4	S 76°W 西	－：94：－	112：152：78	空き墓。
	出土遺物　墓庭：厨子甕身III類甕形(底1)・IIId類甕形(口～底1)、沖施A-2類小碗(底1)・B類小碗(底1)・B-1類碗(口～底2、底1)・B-2類碗(胴1)・C類碗(底1)・C-2類碗(口～底1、口1)・分類なし急須(口1)、沖無壺(頸1、胴2)・壺or甕(胴1)・器種不明(胴2)、陶質土器器種不明(胴1)、瓦質土器盤(口～底1)、銭貨(寛永通寶時期不明1、1セントコイン1)、瓦(平2)、**屋根：**沖施A-2類小碗(口～底1)・C-2類碗(底1)、沖無器種不明(胴1)、銭貨(新寛永通寶III期2)、**墓域外：**沖無鉢(口1)、本磁B類皿(口1)							
10号墓	北1	H30	平葺墓	平坦コ字2段 +壁龕状イケ	146.2	S 61°W 南西	110：65：100	355：295：182	空き墓。漆喰塗。
	出土遺物　墓庭：沖施B-1類碗(底1)、**袖：**沖無壺or甕(胴2)、円盤状製品(1)、銭貨(新寛永通寶III期1)、プラスチック(ボタン1)								
11号墓	北1	H30	掘込墓	棚なし	12.3	N 46°W 北西	－：111：70	65：125：75	空き墓。
	出土遺物　墓室内：厨子甕蓋III類(鍔1、体1)、**袖：**銭貨(古寛永通寶Ⅰ期1)、**墓庭：**厨子甕身IIIb類甕形(口～底1)・IIIC類甕形(口～底1)、厨子甕蓋III類(完形1)、銭貨(古寛永通寶Ⅰ期1、新寛永通寶III期1)、**墓域外：**厨子甕蓋III類(鍔2)、沖施C類碗(口1)、沖無転用品か?B類壺(口～底1)、沖無器種不明(胴1)、瓦(丸1)							
欠番	北1	H30	調査を行ったが、墓や遺構としての人為的痕跡が認められず欠番とした。						
13号墓	北1	－	調査対象外						
14号墓	北1	－	調査対象外						
15号墓	北1	－	調査対象外						
16号墓	北1	H29	亀甲墓	平坦コ字3段	150.9	S 54°W 南西	95：64：108	358：269：205	空き墓。漆喰塗。
	出土遺物　墓庭：厨子甕蓋VI類家形(御殿形)(鍔1)、本磁F類小碗(口～底1)、組み合わせ式瓦(平1)、ガラス製品瓶不明(口～底1)、**墓庭・墓域外：**沖施C-1類碗(口～底1)、**墓庭・入口・墓域外：**沖施鉢(底1)、**入口：**沖施C-1類碗(口～底1)・鉢(口1)、瓦(平2)、ガラス製品清涼飲料瓶(胴～底1)・調味料瓶か?(口～底1)・瓶不明(口～底2)、**墓域外：**厨子甕身III類甕形(底1)・IIIa類甕形(胴1、底1)、沖施B-1類碗(底1)・B-2類小碗(口～底1)・C類碗(口2、胴1)・C-1類碗(口～底1)・C-2類碗(口1)・分類なし鉢(胴2)・急須(胴1)、沖無転用品壺(胴～底1)、沖無壺(胴2)、本磁B類小碗(口～底1)・D類杯(口～底1)、円盤状製品(1)、銭貨(新寛永通寶Ⅱ期2)、金属製品(指輪?1)、瓦(軒平1、丸2、平2、丸・平不明1)、組み合わせ式瓦(平5)							
17号墓	南	－	調査対象外						
18号墓	南	－	調査対象外						
19号墓	北1	H29	亀甲墓 マチ墓	平坦コ字4段	176.8	S 1°W 南	105：68：107	361：280：257	空き墓。漆喰塗。墓室で獣骨埋納。墓庭に壕と戦没者人骨。
	出土遺物　墓室内：厨子甕身IIId類甕形(完形1)、**墓庭：**厨子甕身Ⅱ類甕形(胴1)・VIa類家形(御殿形)(口～底1)、厨子甕蓋III類甕形(体～鍔1)・VIb類家形(御殿形)(体1)、厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明3)、沖施A類碗(口1)・A-2類小碗(口1)、沖無壺(胴3、底1)・壺?(頸1)・擂鉢(胴1)・器種不明(胴2)、本磁A類碗(胴1)、染付袋物(胴1)、瓦(丸・平不明1)、組み合わせ式瓦(平1)、ガラス製品(眼鏡1)、土器グスク器種不明(胴1)、**右袖：**青磁Ⅴ類碗(胴2)、**左袖：**沖無壺(胴1、底1)、**屋根：**厨子甕身III類甕形(装飾1)、厨子甕蓋III類甕形(台座部1)、沖施A類碗(胴1)・B-1類碗(胴1)・C類碗(胴1)・分類不明碗(底1)・分類なし鉢(胴2)、沖無B類壺(口1)・壺(胴6)・甕(胴3)・鉢(口1)・器種不明(胴9、底1)、陶質土器急須(口1)、本磁A類碗(口2、底1)・B類皿(口3)・F類碗(底1)・F類小碗(胴1)・F類瓶(口1)、青磁磁竈窯系碗(口1)、白磁C3群碗(胴1、底1)・分類なし碗(底1)・小碗(口1)、鉄製品器種不明(底?3)、瓦(丸1、平8)、組み合わせ式瓦(平1)、ガラス製品化粧瓶か?(口～底1)・瓶不明(口～底1)、石器・石製品(石斧1)、石材(1)、**入口：**厨子甕身III類甕形(胴1)、厨子甕蓋VI類家形(御殿形)(装飾1)、厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明1)、沖施A-2類小碗(口1)・B類小碗(胴1)・B-1類碗(胴2)・C類碗(胴1)・C類小碗(口1)・分類なし皿(底1)・急須蓋(鍔1)・器種不明(胴1)、沖無転用品壺(底2)、沖無壺(胴4、底1)・甕(口1)・擂鉢(胴1)・器種不明(胴3)、陶質土器器種不明(胴1)、本磁A類碗(胴1)・B類小碗(口～底1)・F類蓋(撮1)、白磁C群碗(胴1)、青花碗(胴1)、銭貨(古寛永通寶Ⅰ期1)、金属製品(ボタン1)、鉄製品(釘1)、ガラス製品薬瓶?(口～底1)・薬瓶?点眼?(胴1)、石器・石製品(石板1)、**入口・墓庭：**厨子甕身IIId?類甕形(底1)、**墓域外：**厨子甕身・蓋不明VI類家形(御殿形)(不明1)、沖施小杯(底1)・壺(耳1)・急須(口1)、沖無壺(胴1)・瓶(胴2)・器種不明(胴2)、青磁IV類碗(胴1)・分類なし鉢(底1)、瓦証文(1)、組み合わせ式瓦(平1)、ガラス製品清涼飲料瓶(口～底1)							

第 49 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧 3

墓名	地区	調査	形式	墓室形態	面積(㎡)	方位	墓口寸法(㎝) 奥行：幅：高	墓室寸法(㎝) 奥行：幅：高	備考
20号墓	北1	―	調査対象外						
21号墓	北1	H30	掘込墓	棚なし	0.2	S 8°W 南	―：61：112	87：45：62	空き墓。
	出土遺物　墓庭：瓦(丸・平不明1)、石器・石製品(敲磨石1)、石材(1)、土器貝塚前期鉢(胴1)・宮古式壺(胴1)、**墓域外：**陶質土器器種不明(胴1)、土器グスク器種不明(胴2)、**南東隣遺構：**沖無壺(底1)、本磁B類皿(口2)、青磁Ⅲ'類碗(口1)・磁竈窯系碗(胴1)、白磁C3群碗(口1)、瓦(丸2)								
欠番	北1	H30	調査を行ったが、墓や遺構としての人為的痕跡が認められず欠番とした。						
23号墓	北1	―	調査対象外						
24号墓	北1	H29	仮墓	棚なし	0.5	S 52°W 南西	―：80：―	73：76：52	空き墓。16号墓仮墓。
25号墓	北1	H29	仮墓	棚なし	1.2	S 38°W 南西	―：65：―	60：80：66	空き墓。7号墓仮墓。
	出土遺物　墓室内：銭貨(古寛永通寶Ⅰ期2、新寛永通寶Ⅱ期1、新寛永通寶Ⅲ期3)								
26号墓	北2	H29	亀甲墓か	棚１段か	9.4	N 17°E 北	60：65：―	194：185：―	空き墓。モルタル塗。
27号墓	北2	H30	掘込墓	棚なし	2.2	N 16°E 北	―：62：―	110：203：105	厨子甕あり。官報公告実施(H30.2.1付)
	出土遺物　墓室内厨子①：厨子甕身VIe類家形(御殿形)(完形1)、**厨子①内：**鉄製品(器種不明2)、青銅製品(指輪7)、**墓室内厨子②：**厨子甕身VIc-1類家形(御殿形)(完形1)、**墓室内厨子甕③：**厨子甕身VIc-2類家形(御殿形)(完形1)、**墓室内厨子④：**厨子甕身Ⅳ類甕形(完形1)、**墓室内：**石材(1)、**墓域外：**沖施瓶(底1)、沖無壺or甕(胴1)、瓦(丸3、平5)								
28号墓	北1	H29	掘込墓	棚なし	2.8	N 87°W 西	―：80：―	102：130：94	空き墓。
	出土遺物　墓口：厨子甕蓋Ⅲ類甕形(体1)、**墓域外：**厨子甕身Ⅲa類甕形(胴1)、厨子甕蓋Ⅲ類甕形(体～鍔1、鍔3)、沖施B-3類小碗(口～底1)・分類なし皿(口1)、沖無壺(胴3)・壺or甕(胴1)・擂鉢(底1)、陶質土器手焙り(口1)、青磁Ⅴ類碗(胴1)、瓦(丸1、丸・平不明1)								
29号墓	北1	H29	仮墓	棚なし	0.5	S 53°W 南西	―：74：59	37：93：43	空き墓。7号墓仮墓。
	出土遺物　墓室内：沖無器種不明(胴1)、青銅製品(簪1)、**墓域外：**沖施鉢(口1)・急須蓋(体～鍔1)、沖無鉢(口1)・器種不明(胴1)								
30号墓	北1	H29	仮墓	棚なし	0.7	S 55°W 南西	―：58：77	47：90：68	空き墓。7号墓仮墓。
	出土遺物　墓室内：沖施A類碗(胴1)、銭貨(一銭1)、**墓域外：**沖無擂鉢(胴1)・甕(胴1)								
31号墓	北2	H30	掘込墓	棚なし	1.7	N 12°W 北	―：87：―	120：115：―	厨子甕あり。官報公告実施(H30.2.19付)
	出土遺物　厨子内：厨子甕身Ⅲ類甕形(胴1)、**墓室内：**厨子甕身Ⅲb類甕形(口～底1)・厨子甕蓋Ⅲb類甕形(完形1)、**墓域外：**陶質土器器種不明(胴1)								
32号墓	南	H30	掘込墓	棚なし	1.7	S 76°W 西	―：106：88	130：156：80	厨子甕あり。官報公告実施(H29.11.29付)
	出土遺物　厨子内：青銅製品(指輪2)、**墓室内：**厨子甕身ⅢC類甕形(完形1)、厨子甕蓋ⅢC類甕形(完形1)、瓦(丸1)、**墓域外：**沖施C-2類碗(胴1)・分類なし壺(胴1)、沖無壺or甕(胴1)、陶質土器鉢(底1)・火炉(胴1)								
33号墓	南	H30	掘込墓	棚なし	1	S 36°W 南西	―：168：65	90：162：60	空き墓。官報公告実施(H29.11.29付)
	出土遺物　墓室内：銭貨(一銭1)、**墓域外：**沖施B-2類碗(胴1)・分類不明碗(胴1)・分類なし小杯(口1)・壺(胴1)・急須(胴2)・袋物(胴1)、沖無擂鉢(胴1)、陶質土器火炉(底1)・器種不明(胴1)、本磁B類小碗(口～底1)、瓦(平2)、ガラス製品薬瓶(口～底1)、焼土(1)								
34号墓	北2	H30	平葺墓	棚なし	38	N 2°E 北	49：65：94	152：178：94	空き墓。モルタル塗。
	出土遺物　墓室内：厨子甕蓋Ⅵ類家形(御殿形)(装飾2)、沖施A類碗(口1、胴1)・B-1類碗(胴1)・C類碗(胴1)・C-2類碗(底1)・分類なし鉢(底1)、沖無壺or甕(胴3)・器種不明(胴1)、本磁A類碗(胴3)・F類小碗(口1)・F類皿(底1)、瓦(丸1、平3)、土器宇佐浜式深鉢(口1)・貝塚前期鉢(胴4)、**墓庭：**厨子甕蓋Ⅲ類(鍔1)、沖施C類碗(口1、胴1)、沖無初期?碗(底1)・壺or甕(胴2)、陶質土器急須(底1)、本磁F類小碗(口1)、青花器種不明(胴1)、瓦(丸1)、円盤状製品(1)、**墓域外：**厨子甕身Ⅲd類甕形(口～底1、底1)・Ⅲd類甕形(口1)、沖施C類碗(口2)、沖無壺(胴2)・壺or甕(胴4)、本陶器種不明(胴1)、本磁F類皿(口1)・急須?(把手1)、白磁C3群碗(胴2)、瓦(丸・平不明2)、土器貝塚後期器種不明(胴1)								
35号墓	北2	H30	仮墓	棚なし	0.6	S 88°W 西	―：63：56	86：92：60	空き墓。34号墓仮墓。
36号墓	南	H30	掘込墓	棚なし	1.3	N 5°E 北	―：100：―		空き墓。
	出土遺物　墓室内：厨子甕蓋Ⅲ類甕形(体～鍔1、鍔1)、青銅製品(簪1)、**墓庭：**厨子甕身Ⅲ類甕形(胴3)・Ⅲd類甕形(口～底1)、厨子甕蓋Ⅲ類甕形(鍔1)、褐釉陶器壺(胴1)								
石積み1	北2	H29	5号墓門左側から北東ー南西方向（N51°E）で、北西に面を持つ。野面積み。石積み２より北に90度振る。						

第 50 表　普天間下原古墓群遺構・出土遺物一覧４

墓名	地区	調査	形式	墓室形態	面積(㎡)	方位	墓口寸法(㎝) 奥行：幅：高	墓室寸法(㎝) 奥行：幅：高	備考
石積み2	北2	H29	北西－南東方向（N41°W）で、北東に面を持つ。野面積み。石積み１より北に90度振る。						
石積み3	北1	H29	北西－南東方向（N66°W）で南西に面を持つ。野面積み。石積み４より北へ50度振る。						
	出土遺物		青磁Ⅳ類碗(底1)、石材(1)						
石積み4	北1	H29	北西－南東方向（N16～40°W）で南西に面を持つ。野面積み。石積み３より北へ50度振る。						
石積み5	北1	H29	北西－南東方向（N44°W）で南西に面を持つ。野面積み。						
石積み6	北1	H29	北西－南東方向（N52°W）で南西に面を持つ。野面積み。石積み７より南に85度振る。						
石積み7	北1	H29	北東－南西方向（N33°E）で南東に面を持つ。野面積み。石積み６より南に85度振る。						
石積み8	北1	H29	北東－南西方向（N21～36°E）で北西に面を持つ。野面積み。７号墓から５号墓まで至る墓道際の石積み。						
	出土遺物		沖施C類碗(口1)・急須蓋(体～鍔1)、沖無器種不明(胴3)、本磁F類小碗(口～底1)、瓦(平1、丸・平不明2)						
石積み9	北1	H30	北東－南西方向（N46°E）で北西に面を持つ。野面積み。10号墓から20号墓まで至る墓道際の石積み。						
	出土遺物		厨子甕蓋Ⅳ類(鍔1)、青磁Ⅱ類碗(底1)						
不明遺構1	北1	－	調査対象外						
不明遺構2	北1	－	ガジュマル下部の配石遺構。拝所関連遺構か。付近に「天下太平」銘の石碑あり（工事に伴いガジュマル根本付近に移動）。ガジュマルとともに現地保存。						
不明遺構3	北1	H30	調査を行ったが、墓や遺構としての人為的痕跡が認められず欠番とした。						
不明遺構4	北1	－	コンクリートによる階段遺構。宜野湾市教育委員会と調整し、工事に伴い撤去。						
墓範囲外	**出土遺物**		沖施A類碗(底1)・B-1類碗(胴1)・C類碗(胴2、底1)、沖無壺or甕(胴1)・壺or甕?(胴1)・擂鉢(胴1、底1)、陶質土器蓋(庇1)、本陶?器種不明(胴1)、本磁F類小杯(口1)、瓦(平1、丸・平不明1)、土器貝塚前期器種不明(胴1)・グスク器種不明(胴1)						

・面積は墓庭と袖垣周辺を含む墓域と考えられる範囲。墓庭の範囲が不明なものは墓口と墓室の面積とする。
・方位は墓が開口する方向。南北を基準とし東西への角度で示した。方位角は22.5度刻みとする。
・出土遺物は沖縄産施釉陶器：沖施、沖縄産無釉陶器：沖無、本土産陶器：本陶、本土産近代磁器：本磁、中国産褐釉陶器：中褐、と略称した。

第 51 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧１

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
1	厨子甕	蓋	Ⅲ	22.2	－	11.3	外面：マンガン釉により暗褐色、内面：灰黄褐色。つまみ宝珠形。内面銘書あり。	1号墓 墓室内Ⅰ層
2	沖縄産施釉陶器	碗	C-2	14.2	6.6	6.9	白化粧後、透明釉。胎土黄褐色。外面に印花文。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
3	沖縄産施釉陶器	小碗	B-2	8.4	3.7	4.1	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
4	沖縄産施釉陶器	鉢	－	28.6	－	－	外面：黒釉、内面：透明釉。胎土浅黄色。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
5	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	26.9	－	－	外面：灰黄色、内面：明赤褐色。鍔上面凹線1条。内面全体に擂り目。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
6	沖縄産無釉陶器	鉢	－	－	－	－	内外面ともに明赤褐色。鍔上面凹線1条。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
7	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	－	－	－	内外面ともに明赤褐色。胎土粗白粒混じる。内面全体に擂り目。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
8	沖縄産無釉陶器	甕	－	－	21.0	－	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外底ヘラ記号「十三」あり。上部欠。転用の可能性あり。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
9	中国産青花	蓮華	徳化窯	－	－	－	内面に唐草文。外面底部釉剥ぎ。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
10	鉄製品	レール	－	52.3	5.2	5.4	馬車軌道用5kg/mレールか。錆膨れあり。全長52.3㎝。重量3240g。法量は断面の寸法。	1号墓 墓庭 Ⅰ層
11	沖縄産施釉陶器	碗	C-2	14.2	6.6	6.6	白化粧後、透明釉。胎土黄褐色。外面に呉須で丸文。	2号墓 墓庭 Ⅰ層
12	青銅製品	煙管	－	4.7	－	－	吸口。重量4.3g。	3号墓 墓室内 Ⅰ層
13	陶質土器	鍋	－	24.0	－	－	胎土橙色で、雲母と赤色粒を含む。把手が付く。	3号墓 墓域外 Ⅰ層
14	沖縄産施釉陶器	小碗	B-3	9.2	4.4	4.7	白化粧後、透明釉。胎土黄褐色。外面に呉須で施文。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	3号墓 墓域外Ⅰ層
15	中国産青花	小碗	徳化窯	－	－	－	外面に梵字文。直口口縁。	3号墓 墓域外 表採
16	ガラス製品	瓶	不明	2.7	6.3	17.1	胴部に「NOT TO BE REFILLED NO DEPOSIT NO RETURN GB50」、底部に「Duraglas 4」「○・◇組合せ」「5 16.」のエンボス。色調は茶色。	3号墓 墓域外 表採
17	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	2.7	5.1	19.6	胴部の両面に「Coca-Cola TRADE-MARK」片面の下部に「1」「○・◇組合せ」「45」、底部に「A」のエンボス。色調は透明。	3号墓 墓域外 表採
18	ガラス製品	瓶	アルコール飲料瓶	2.5	6.4	29.0	胴部に「Nippon☆Beer」、底部に「I」「◇・N組合せ」「Y」のエンボス。色調茶色。	3号墓 墓域外 表採
19	厨子甕	蓋	Ⅲc	21.8	－	12.2	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉施釉。つまみ宝珠形。内面銘書あり。20と対応。	32号墓 墓室内 Ⅰ層
20	厨子甕	身	Ⅲc	22.8	18.3	45.3	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面沈線による施文。底部円形の孔。19と対応。	32号墓 墓室内
21	青銅製品	指輪	－	1.8	1.7	－	重ね付け用の細い指輪か。文様なし。重量0.6g。	32号墓 厨子内
22	青銅製品	指輪	－	2.1	2.1	－	中央に交差する日章旗、左側には「日本」の文字が描かれる。重量3.1g。	32号墓 厨子内
23	陶質土器	鉢	－	－	9.4	－	胎土橙色で、雲母と赤色粒を含む。口縁部に煤付着。	32号墓 墓域外 Ⅰ層
24	銭貨	一銭	－	2.7	2.7	1.33	一銭銅貨。紀年不明。重量6.1g。	33号墓 墓室内 Ⅰ層
25	本土産近代磁器	小碗	B類	8.0	3.3	4.65	外面に銅板転写による家屋と松の風景の文様。素地は緻密で白色。	33号墓 墓域外 Ⅰ層
26	ガラス製品	瓶	薬瓶	1.7	4.0	9.8	型合わせ跡明瞭。ラベル貼る区画あり。胴部に目盛りと「60」のエンボス。色調は透明。	33号墓 墓域外 Ⅰ層

第 52 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 2

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
27	厨子甕	蓋	Ⅲ	―	9.0	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。つまみ台より上部欠。内面銘書あり。28と同一個体か。	4号墓 屋根 Ⅰ層
28	厨子甕	蓋	Ⅲ	27.0	―	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉施釉。内面銘書あり。27と同一個体か。	4号墓 左石積 Ⅰ層
29	厨子甕	身	Ⅲ	―	―	―	外面：灰黄褐色、内面：明赤褐色。貼付文一部残る。	4号墓 墓庭 Ⅰ層
30	厨子甕	身	ⅢaかⅢb	33.4	―	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉施釉。外面胴部を沈線で施文。	4号墓 屋根 Ⅰ層
31	沖縄産無釉陶器	甕	―	―	15.2	―	外面：灰黄色、内面：明赤褐色。胎土白色粒含む。外面一部煤ける。底部片。	4号墓 墓室内 Ⅰ層
32	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.4	―	1.52	Ⅲ期：1697～1747年。一部欠。重量2.2g。	4号墓 屋根 Ⅰ層
33	鉄製品	イヤ	―	5.5	2.6	7.7	楔形。頭部平面形は方形状。錆あり。重量325.9g。	4号墓 入口 表採
34	厨子甕	蓋	Ⅰ	29.2	46.9	18.2	サンゴ石製。屋根：入母屋形。縁部研磨するが、ノミ痕が残る。35と対応。	5号墓 墓庭 表採
35	厨子甕	身	Ⅰ	46.2	4.4	52.0	サンゴ石製。ノミ痕が脚部に集中。全体的に研磨雑。34と対応。	5号墓 墓庭 表採
36	厨子甕	蓋	Ⅵd	―	48.7	44.4	白化粧後、透明釉。胎土灰白色、粗白粒混じる。呉須・褐釉・緑釉施釉。ツノ付き。37と対応。	5号墓 墓庭 表採
37	厨子甕	身	Ⅵd	49.0	39.7	43.7	白化粧後、透明釉。胎土灰白色、粗白粒混じる。呉須・褐釉・緑釉施釉。36と対応。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
38	厨子甕	蓋	Ⅴ	―	35.6	48.5	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面は丁寧にマンガン釉施釉。39と対応。	5号墓 墓庭 表採
39	厨子甕	身	Ⅴ	43.7	43.1	39.1	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面は丁寧にマンガン釉施釉。38と対応。	5号墓 墓庭･入口･墓室内 Ⅰ層
40	厨子甕	蓋	Ⅲ	28.8	―	―	外面：暗褐色、内面：灰黄褐色。外面に刷毛目残る。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
41	厨子甕	身	ⅢaかⅢb	―	―	―	外面：明赤褐色、内面：暗褐色。内面にもマンガン釉施釉か。外面沈線施文。	5号墓 入口 Ⅰ層
42	厨子甕	身	ⅢIb	27.9	21.3	54.2	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面沈線による施文。底部いびつな長方形状の孔。	5号墓 墓庭 表採･Ⅰ層
43	沖縄産無釉陶器	甕	―	―	23.1	―	外面：灰黄褐色、内面：明赤褐色。上部欠。転用品の可能性あり。	5号墓 入口 Ⅰ層
44	本土産近代磁器	碗	A類	13.5	5.0	5.8	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部焼。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
45	本土産近代磁器	碗	A類	13.2	4.8	6.3	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。高台内に「〇内に１K」の銘。砥部焼。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
46	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	4.95	6.4	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部焼。	5号墓 墓庭 表採･Ⅰ層
47	本土産近代磁器	碗	B類	―	4.6	―	畳付は釉剝ぎ。外面に吹き絵による富士山の文様。素地は緻密で白色。瀬戸系。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
48	中国産青花	小碗	徳化窯	―	―	―	外面に唐草文。直口口縁。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
49	その他金属製品	瓶	―	3.4	6.4	13.9	厚さ約0.1㎝程度。重量203.7g。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
50	ガラス製品	瓶	不明	2.0	2.2	4.75	底形は隅丸方形。底部にナーリングと「7」「〇・◇組合せ」「4 3.」のエンボス。色調は茶色。	5号墓 墓庭 表採
51	ガラス製品	瓶	薬瓶	2.1	2.3	4.0	胴が垂直な円筒形。底部に「H・A組合せ」「13」のエンボス。色調は茶色。	5号墓 墓庭 表採
52	ガラス製品	瓶	不明	2.2	5.1	13.9	胴部の両面に「Duraglas」、底部に「7」「〇・◇組合せ」「4 7.」のエンボス。金属製の蓋が固着し残存。色調は透明。器高は蓋を含む。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
53	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	―	5.0	18.6	口は被熱を受け変形。胴部に「Coca-Cola TRADE-MARK」「11」「〇・◇組合せ」「45」、底部に「A」のエンボス。色調は透明。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
54	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	―	5.2	29.6	口は被熱を受け変形。胴部に「Coca-Cola TRADE-MARK」「11」「〇・◇組合せ」「45」、底部に「A」のエンボス。色調は透明。	5号墓 墓庭 Ⅰ層
55	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	30.6	12.8	12.7	内外ともに明赤褐色。内面全体に擂り目。外面下部削り痕目立つ。	5号墓 入口 Ⅰ層
56	沖縄産無釉陶器	壺	B	13.6	3.3	31.0	外面：灰黄褐色、内面：明赤褐色。肩部凹線1条、「|＋」のヘラ記号あり。	5号墓 入口 Ⅰ層
57	沖縄産無釉陶器	皿	―	12.0	6.0	2.4	内外ともに明赤褐色。胎土緻密。外底剥離。	5号墓 墓域外 Ⅰ層
58	本土産近代磁器	湯呑	B類	6.2	4.2	6.85	畳付は釉剝ぎ。外面に吹き絵による文様。素地は緻密で白色。瀬戸・美濃系。	5号墓 屋根 表採
59	本土産近代磁器	皿	B類	11.3	6.1	2.3	銅板転写による梅の花文。口錆。瀬戸・美濃系。	5号墓 屋根 Ⅰ層
60	本土産近代磁器	蓋	E類	5.9	4.2	2.75	外面に色抜けがあるが、赤･黒の色絵による鶴文。	5号墓 入口 Ⅰ層
61	中国産白磁	碗	C３群	―	5.2	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込みに印花文。外底露胎。	5号墓 墓域外 Ⅰ層
62	中国産青磁	盤	―	―	10.4	―	釉は淡い緑色で厚く貫入多い。胎土白色。外底釉剥ぎされる。	5号墓 墓域外 Ⅰ層
63	円盤状製品	―	―	6.35	5.8	1.8	龍泉窯系青磁Ⅱ類の碗底部を利用。内底に印花文。両面を剥離加工。重量82.8ｇ。	5号墓 入口 表採
64	ガラス製品	瓶	薬瓶	11.0	1.3	2.9	胴が垂直な円筒形。色調は茶色。	5号墓 入口 Ⅰ層
65	ガラス製品	瓶	薬瓶	1.8	4.1	10.45	胴部に「ʒ(オンス) ii Duraglas」、底部に「OWENS 5.」「〇・◇組合せ」「6」のエンボス。プラスチックの蓋が残存し、径2.3㎝。色調は透明。器高は蓋を含まない。	5号墓 墓域外 Ⅰ層
66	厨子甕	蓋	Ⅵb	47.2	―	28.0	外面：白化粧後褐釉・緑釉施釉、内面：褐釉のみ。胎土淡橙色で白色粒含む。67と対応。	7号墓 墓庭 表採
67	厨子甕	身	Ⅵb	46.0	40.8	42.1	外面：白化粧後、褐釉施釉。貼付文は緑釉施釉。内面：褐釉。胎土淡橙色。外底クワズイモやバナナ科の葉形。66と対応。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
68	厨子甕	蓋	Ⅵc-2	51.8	―	14.2	外面：白化粧後褐釉・緑釉施釉。内面：褐釉。胎土灰黄褐色で白色粒含む。縁に銘書あり。69と対応。	7号墓 墓庭 表採･Ⅰ層
69	厨子甕	身	Ⅵc-2	42.2	38.1	43.2	外面：白化粧後褐釉・緑釉施釉。庇部は透明釉。胎土淡黄色で白色粒含む。内面：褐釉。外底バナナ科の葉形。門に銘書あり。68と対応。	7号墓 入口Ⅰ層 墓庭･入口･墓域外表採

第 53 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 3

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
70	厨子甕	身	VIc-1	43.5	41.5	41.3	外面：白化粧後、褐釉施釉。貼付文は緑釉施釉。内面：褐釉。胎土灰黄褐色。底部円形の孔。外底バナナ科の葉形。	7号墓 墓庭･入口･墓域外･墓室内 表採
71	厨子甕	蓋	Ⅲ	23.0	5.8	10.5	外面：暗褐色、内面：明赤褐色で一部暗褐色。外面雑にマンガン釉施釉。つまみ宝珠形。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
72	厨子甕	蓋	Ⅲ	28.7	―	―	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。胎土細かな白色粒含む。外面刷毛目残る。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
73	厨子甕	蓋	Ⅲ	17.5	5.0	5.0	内外面ともに暗赤褐色。胎土細かな白色粒含む。浅めの蓋。つまみ扁平形。	7号墓 墓域外 表採 8号墓 墓域外 Ⅰ層
74	厨子甕	身	Ⅲc	28.1	17.9	53.0	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。胎土細かな白色粒含む。外面刷毛目残る。底部長方形状の孔。	7号墓 墓庭 表採･Ⅰ層 墓室内 表採
75	厨子甕	身	Ⅲc	26.6	20.9	60.8	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉を丁寧に施釉。外面沈線による施文。底部円形の孔。	7号墓 墓庭 表採･Ⅰ層 墓室内 表採
76	沖縄産施釉陶器	Ⅲ	―	22.8	9.3	7.45	内外面ともに黒釉、胴部以下露胎。胎土灰黄褐色。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
77	沖縄産施釉陶器	鉢	―	25.2	9.7	12.6	外面：黒釉、内面：透明釉。胎土黄褐色。見込み蛇の目状に釉剥ぎ。	7号墓 墓域外･入口表採 8号墓 墓域外 Ⅰ層
78	陶質土器	火炉	―	14.6	―	―	胎土黄橙色で、雲母と赤色粒を含む。口縁断面三角形状。	7号墓 墓域外 Ⅰ層
79	沖縄産無釉陶器	甕	―	18.8	16.4	34.8	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。胴部側面欠。転用の可能性あり。	7･8･9号墓 墓域外 表採
80	沖縄産無釉陶器	壷	―	―	20.5	―	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。耳貼付。肩部「七一」のヘラ記号。上部欠。転用の可能性あり。	7･8号墓 墓域外 表採･Ⅰ層
81	沖縄産無釉陶器	壷か甕	―	―	19.7	―	内外面ともに暗赤褐色。内面雑にマンガン釉施釉。上部欠。転用の可能性あり。	7号墓 墓域外 表採 8号墓 墓域外 Ⅰ層
82	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.7	Ⅲ期：1697～1747年。重量2.8g。	7号墓 右袖 Ⅰ層
83	沖縄産施釉陶器	碗	B-2	12.3	5.8	6.6	外面：黒釉、内面：透明釉。風化により内面白化粧露出。胎土黄褐色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	7号墓 墓域外 表採･Ⅰ層、墓庭Ⅰ層 8号墓 墓域外Ⅰ層
84	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.25	Ⅲ期：1697～1747年。「寛」の部分に小孔あり。重量2.5g。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
85	ガラス製品	瓶	―	3.0	7.0	26.1	平底フラスコ状。胴部に「FEDERAL LAW FORBIDS SALE OR REUSE OF THIS BOTTLE」、底部に「R384 55 52」「○・◇組合せ」のエンボス。色調は透明。	7号墓 墓庭 表採
86	石器	石斧	―	5.3	―	1.25	石斧の刃部。輝緑岩製。一部敲打痕が残るが、全体丁寧な研磨。横斧。重量45g。	7号墓 墓庭 Ⅰ層
87	銭貨	寛永通寶	古寛永	2.3	2.3	1.18	Ⅰ期：1636～1659年。六道銭か。重量2.8g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
88	銭貨	寛永通寶	古寛永	2.3	2.3	1.25	Ⅰ期：1636～1659年。六道銭か。重量3.2g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
89	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.4	2.4	1.23	Ⅱ期：1668～1683年。背面に「文」。六道銭か。重量3g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
90	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.4	2.4	1.2	Ⅲ期：1697～1747年。六道銭か。重量3.5g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
91	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.3	Ⅲ期：1697～1747年。六道銭か。重量3g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
92	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.13	Ⅲ期：1697～1747年。六道銭か。重量2.5g。	25号墓 墓室内 Ⅰ層
93	青銅製品	簪	―	10.15	1.4	―	カブは匙状。断面は六角形になる。最大厚4.38㎝。重量11.1g。	29号墓 墓室内 Ⅰ層
94	銭貨	一銭	―	2.2	2.3	1.56	桐一銭銅貨。大正十三年。重量3.7g。	30号墓 墓室内 Ⅰ層
95	厨子甕	蓋	Ⅱ	32.0	11.3	9.8	内外面ともに明赤褐色。胎土軟質。内面銘書あり。96と同一個体の可能性あり。	7号墓 墓域外 表採 8号墓 墓域外 Ⅰ層
96	厨子甕	身	Ⅱ	25.0	22.5	46.4	内外面ともに暗赤褐色。頸部や肩部に沈線。底部円形の孔。95と同一個体の可能性あり。	8号墓 墓域外 表採･Ⅰ層
97	本土産近代磁器	杯	E類	7.5	3.0	3.1	畳付は釉剝ぎ。内面に色絵による草花文。素地は緻密で白色。	8号墓 墓庭 表採
98	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	2.7	5.15	22.1	首部に「PEPSI-COLA RYUKYU ISLANDS」の印刷。肩部にウェーブボトルの模様、底部に「14 A 61」「○の中にT」「4」のエンボス。色調は透明。	8号墓 墓庭 表採
99	沖縄産施釉陶器	碗	C-1	13.6	6.9	6.9	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	8号墓 墓域外 Ⅰ層
100	沖縄産施釉陶器	小碗	A-2	8.4	3.9	4.6	外面：黒釉、内面：透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。重ね痕あり。	8号墓 墓域外 Ⅰ層
101	沖縄産施釉陶器	小碗	B-1	8.2	3.9	4.3	白化粧後、透明釉。胎土灰黄褐色。外面面取。内底蛇の目状釉剥ぎ。	8号墓 墓域外 Ⅰ層
102	中国産青花	碗	徳化窯	―	―	―	外面に梅花文。端反口縁。	8号墓 墓域外 Ⅰ層
103	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.2	2.2	1.03	Ⅲ期：1697～1747年。重量2.3g。	8号墓 墓域外 Ⅰ層
104	ガラス製品	瓶	清涼飲料瓶	2.6	5.0	20.2	首部に「セブンアップ」印刷。胴部にラグディンプル、底部にナーリングと「21」「○の中にTO」「68」のエンボス。色調は緑色。	8号墓 墓域外 表採
105	厨子甕	身	Ⅲd	16.2	13.1	31.9	内外面暗赤褐色でマンガン釉施釉。刷毛目あり。外面沈線施文。底部円形の孔。幼児用か。	9号墓 墓庭 Ⅰ層
106	沖縄産施釉陶器	碗	C-2	13.9	6.7	6.8	白化粧後、透明釉。外面３か所に呉須で丸文。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	9号墓 墓庭 表採
107	沖縄産施釉陶器	碗	B-1	13.0	6.0	6.3	内外面ともに黒釉、胴部以下露胎。胎土黄褐色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	9号墓 墓庭 Ⅰ層
108	沖縄産施釉陶器	急須	―	―	―	―	白化粧後、透明釉。口縁部露胎。胎土黄褐色。外面線彫りによる施文。呉須施釉。	9号墓 墓庭 表採
109	瓦質土器	盤	―	24.4	24.2	3.5	胎土灰色で多量の雲母、白色粒や赤色粒を含む。外面燻され黒色。	9号墓 墓庭 Ⅰ層
110	沖縄産施釉陶器	小碗	A-2	9.0	3.9	4.8	外面：黒釉、内面：透明釉。胎土灰黄色。	9号墓 屋根 Ⅰ層
111	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.1	Ⅲ期：1697～1747年。重量1.8g。	9号墓 屋根 Ⅰ層
112	銭貨	寛永通寶	新寛永？	2.2	2.15	1.0	Ⅲ期：1697～1747年。字が潰れており、不鮮明。重量1.8g。	9号墓 屋根 Ⅰ層
113	厨子甕	蓋	Ⅲ	27.4	―	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉を丁寧に施釉。	28号墓 墓域外 Ⅰ層
114	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	―	9.0	―	外面：灰黄褐色、内面：暗赤褐色。内面全体に擂り目。底部丁寧な成形。	28号墓 墓域外 Ⅰ層
115	陶質土器	火炉	―	17.0	―	―	胎土黄橙色で、雲母と赤色粒を含む。把手が付く。	28号墓 墓域外 Ⅰ層

第 54 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 4

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
116	沖縄産施釉陶器	小碗	B-3	9.1	3.6	4.7	内外面ともに透明釉。胎土黄白色。外面に薄く二条の線。	28号墓 墓域外 Ⅰ層
117	円盤状製品	―	―	5.3	4.9	1.8	沖縄産施釉陶器の碗の底部を利用。外面を剝離加工。重量30.1ｇ。	10号墓 袖 表採
118	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.2	2.2	1.15	Ⅲ期：1697～1747年。重量2.6g。	10号墓 袖 Ⅰ層
119	プラスチック製品	ボタン		1.3	1.3	0.3	２つ孔のボタンで、両面とも膨らむ形状。片面のみ通し穴の部分凹む。灰緑色。	10号墓 袖 Ⅰ層
120	厨子甕	蓋	Ⅲ	33.4	8.6	15.8	内外面ともに暗赤褐色。外面雑にマンガン釉施釉。つまみ宝珠形。	11号墓 墓庭 Ⅰ層
121	厨子甕	身	Ⅲc	33.4	20.4	70.2	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面沈線による施文。底部三日月形の孔。	11号墓 墓庭 Ⅰ層
122	厨子甕	身	Ⅲb	27.9	19.4	58.4	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面沈線による施文。底部円形の孔。	11号墓 墓庭 Ⅰ層
123	沖縄産無釉陶器	壷	B	14.8	14.0	38.8	内外面ともに明赤褐色。肩部沈線２条。上部一部欠。転用の可能性あり。	11号墓 墓域外 Ⅰ層
124	銭貨	寛永通寶	古寛永	2.5	2.4	1.28	Ⅰ期：1636～1659年。重量3.4g。	11号墓 袖 Ⅰ層
125	銭貨	寛永通寶	古寛永	2.4	2.4	1.2	Ⅰ期：1636～1659年。重量2.9g。	11号墓 墓庭 Ⅰ層
126	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.4	2.4	1.72	Ⅲ期：1697～1747年。重量3.0g。	11号墓 墓庭 Ⅰ層
127	厨子甕	蓋	Ⅵ	―	―	―	屋根庇部。外面：白化粧後、緑釉と褐釉施す。内面：明赤褐色。胎土軟質で粗く、種子圧痕あり。	16号墓 墓庭 表採
128	本土産近代磁器	小碗	F類	7.8	3.3	5.2	畳付は釉剝ぎ。釉は明緑灰色。口禿で丸文。素地は緻密で白色。	16号墓 墓庭 表採
129	沖縄産施釉陶器	碗	C-1	14.4	6.6	6.8	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	16号墓 入口 表採
130	沖縄産施釉陶器	碗	C-1	14.4	6.8	6.7	白化粧後、透明釉。胎土灰黄褐色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。	16号墓 墓域外 表採
131	沖縄産施釉陶器	小碗	B-2	8.4	3.7	3.9	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。重ね痕あり。	16号墓 墓域外 表採
132	沖縄産施釉陶器	鉢	―	26.4	9.6	13.7	外面：黒釉、内面：透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ。重ね痕あり。	16号墓 墓庭･入口･墓域外 表採
133	沖縄産施釉陶器	急須	―	4.4	―	―	外面緑釉か。風化により不明瞭。内面露胎。胎土灰黄褐色。	16号墓 墓域外 表採
134	沖縄産無釉陶器	壷	―	―	15.0	―	外面：灰黄褐色、内面：明赤褐色。上部欠。転用品の可能性あり。	16号墓 墓域外 表採
135	本土産近代磁器	小碗	B類	8.6	3.3	5.0	畳付は釉剝ぎ。外面にゴム判と筆描き併用。外面に草花文。素地は緻密で白色。瀬戸・美濃系。	16号墓 墓域外 表採
136	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.4	2.4	1.31	Ⅱ期：1668～1683年。背面に「文」。重量3.81g。	16号墓 墓域外 表採
137	銭貨	寛永通寶	新寛永	2.3	2.3	1.05	Ⅲ期：1697～1747年。重量2g。	16号墓 墓域外 表採
138	青銅製品	指輪	―	2.2	2.15	0.3	重ね付け用の細い指輪。文様なし。重量0.8g。	16号墓 墓域外 表採
139	ガラス製品	瓶	不明	2.3	5.5	27.3	底部に「16」「BTK組合せ」のエンボス。色調は緑色。	16号墓 入口 表採
140	ガラス製品	瓶	調味料瓶か	2.6	5.2	20.8	ケチャップ瓶か。胴部中央から八面体、底部は円形。底部に「7406」「H・A組合せ」「7０19」のエンボス。色調は透明。	16号墓 入口 表採
141	ガラス製品	瓶	不明	2.1	5.6	20.2	胴部に「NOT TO BE REFILLED」「NO DEPOSIT　NO RETURN」、底部に「130E 31」「S・AA組合せ」「53」のエンボス。色調は透明。	16号墓 入口 表採
142	瓦	明朝系役瓦	―	―	―	1.9	隅棟飾瓦（鬼板）。胎土灰～橙色で雲母含む。瓦当面は隅丸三角形状。凹線で雲文を描く。	16号墓 墓域外 表採
143	瓦	明朝系丸瓦	―	29.5	15.3	1.8	内外面ともに明橙色。胎土軟質精良。内面に白色粒多。	16号墓 墓域外 表採
144	瓦	明朝系平瓦	―	24.4	21.0	1.3	内外面ともに明橙色。胎土軟質精良。胎土わずかに白色粒含む。	16号墓 入口 表採
145	瓦	組合せ式平瓦	―	32.5	―	2.0	内外面ともに橙色。胎土緻密でわずかに白色粒含む。裏面に「17」のようなヘラ記号？	16号墓 墓域外 表採
146	厨子甕	蓋	Ⅵ	46.4	―	―	外面：白化粧後、透明釉や緑釉施釉、内面：褐釉。胎土淡黄色で粗白色粒含む。	19号墓 墓庭 表採
147	厨子甕	身	Ⅵa	45.1	40.5	38.5	内外面：褐釉施釉。胎土暗赤褐色。底部円形の孔。門に銘書あり。	19号墓 墓庭 表採
148	厨子甕	蓋	Ⅲ	22.2	―	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。浅めの蓋。外面丁寧な施釉。	19号墓 墓庭 Ⅰ層
149	厨子甕	身	Ⅲd	20.7	15.8	36.5	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉を丁寧に施釉。刷毛目あり。外面沈線による施文。底部円形の孔。幼児用か。	19号墓 墓室内 表採
150	厨子甕	身	Ⅲd？	―	11.4	―	外面：暗赤褐色、内面：灰黄褐色、一部暗褐色。外面沈線で波状文施文。底部くさび形状の孔。	19号墓 入口Ⅰ層､墓庭 表採
151	中国産青磁	碗	磁竈窯	―	―	―	釉は薄い。器壁薄く胎土に黒色粒を多く含む。外反口縁。	19号墓 屋根 表採
152	中国産白磁	碗	―	―	10.4	―	釉は灰色。胎土灰白色。見込み釉剥ぎ。外面に飛鉋。外底露胎。	19号墓 屋根 表採
153	瓦製品	瓦証文・墓中符	―	29.1	18.1	2.6	表裏面ともに橙色で平坦に成形。胎土緻密で雲母含む。	19号墓 墓域外 表採
154	中国産白磁	碗	Ｃ３群	―	6.0	―	全体的に風化している。	19号墓 屋根 表採
155	沖縄産施釉陶器	小杯	―	―	2.3	―	白化粧後、透明釉。外面腰部以下露胎。胎土浅黄色。	19号墓 墓域外 表採
156	その他金属製品	ボタン	―	2.5	2.0	1.1	銅製のスナップボタン。間に布残る。重量6.2g。	19号墓 入口 Ⅰ層
157	鉄製品	釘	―	21.0	2.0	1.0	頭部8面に面取。胴部に10条刻み。胴部にはV字状凸加工2条。	19号墓 入口 表採
158	銭貨	寛永通寶	古寛永	2.3	2.3	1.5	Ⅰ期：1636～1659年。重量2.2g。	19号墓 入口 Ⅰ層
159	ガラス製品	瓶	化粧瓶	1.7	4.8	12.95	化粧水瓶か。口に「14」底部に「4458７１K」のエンボス。極細口。色調は透明。	19号墓 屋根 表採
160	ガラス製品	瓶	不明	1.1	2.6	6.05	胴部八面体で底部円形。肩部に「31」のエンボス。色調透明。	19号墓 屋根 表採
161	石器	石板	―	―	―	0.4	粘板岩製。研磨や擦り切りにより板状に成形。重量26.5g。	19号墓 入口 Ⅰ層
162	石器	石斧	―	―	4.2	―	石斧の刃部。輝緑岩製。全体丁寧な研磨。両側面に成形時の敲打痕が残る。縦斧。重量109.6g。	19号墓 屋根 表採
163	宮古式土器	壺	―	―	―	―	胎土橙色で、赤色粒と石灰質砂粒を含む。薄手。	21号墓 墓庭 Ⅰ層

第 55 表　普天間下原古墓群遺物観察一覧 5

番号	種類	器形	分類	口径	底径	器高	観察事項	出土地
164	中国産青磁	碗	Ⅲ’	―	―	―	釉は淡い緑色で厚い。胎土灰白色。外面に鎬蓮弁文。	21号墓 南東隣遺構 Ⅰ層
165	中国産白磁	碗	C３群	18.2	―	―	釉は灰色。胎土灰白色。外反口縁。	21号墓 南東隣遺構 Ⅰ層
166	厨子甕	蓋	Ⅲb	30.6	8.5	18.7	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面マンガン釉施釉。つまみ宝珠形。内面銘書あり。167と対応。	31号墓 墓室内
167	厨子甕	身	Ⅲb	31.2	23.1	54.1	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外面雑にマンガン釉施釉。外面沈線による施文。底部三日月状の孔。166と対応。	31号墓 墓室内
168	厨子甕	蓋	Ⅲ	29.6	―	―	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。胎土緻密で細かな白色粒含む。内面銘書あり。	36号墓 墓室内 Ⅰ層
169	厨子甕	身	Ⅲd	20.0	12.4	26.2	外面：暗赤褐色、内面：明赤褐色。外面沈線による雑な施文。底部方形状の孔。幼児用か。	36号墓 墓庭 Ⅰ層
170	その他金属製品	簪	―	―	―	0.6	アルミ製か。カブ欠。断面は六角形状。重量4.2g。	36号墓 墓室内 Ⅰ層
171	厨子甕	身	Ⅵe	37.6	29.3	42.4	外面：白化粧後、透明釉施釉。貼付文等は呉須や褐釉施釉。背面呉須で「南無阿弥陀仏」の文字あり。内面：褐釉。底部円形の孔。完形品。	27号墓 墓室内 厨子①
172	厨子甕	身	Ⅵc-1	48.4	42.6	43.6	外面：白化粧後、褐釉や緑釉施釉。内面：褐釉。底部孔無し。表面に長方形状孔2つ。完形品。	27号墓 墓室内 厨子②
173	厨子甕	身	Ⅵc-2	47.2	40.0	45.5	外面：白化粧後、透明釉。貼付文は緑釉施釉。内面：褐釉。両側面に長方形状の孔2つずつあり。外底クワズイモの葉形。完形品。	27号墓 墓室内 厨子③
174	厨子甕	身	Ⅳ	37.0	24.4	67.0	外面：暗褐色、内面：赤褐色。外面マンガン釉を丁寧に施釉。外面は沈線や貼付によって装飾。底部三日月状の孔。完形品。	27号墓 墓室内 厨子④
175	沖縄産施釉陶器	瓶子	―	―	8.0	―	外面：黒釉、内面：露胎。胎土灰橙色。	27号墓 墓域外 Ⅰ層
176	青銅製品	指輪	―	2.0	1.9	0.6	青銅製。細い指輪を6個重ね着けしたもの。錆付着。指骨着装状態で出土。重量2.7g。	27号墓 厨子①内
177	青銅製品	指輪	―	1.7	1.7	1.5	青銅製。細い指輪を17個重ね着けしたもの。錆付着。重量2.5g。	27号墓 厨子①内
178	鉄製品	不明	―	―	―	0.6	錆膨れで判然としないが、断面は五角形状を呈する。重量3.8g。	27号墓 厨子①内
179	鉄製品	不明	―	―	1.0	0.1	錆膨れのため判然としない。断面は細い棒6本連なる。重量3.6g。	27号墓 厨子①内
180	厨子甕	身	Ⅲd	18.0	10.2	30.5	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。マンガン釉施釉。外面沈一部漆喰付着。幼児用か。	34号墓 墓域外 Ⅰ層
181	厨子甕	身	Ⅲd	15.0	―	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。マンガン釉施釉。外面沈線で波状文を施文。幼児用か。182と同一個体の可能性あり。	34号墓 墓域外 Ⅰ層
182	厨子甕	身	Ⅲd	―	9.4	―	外面：暗褐色、内面：明赤褐色。外底までマンガン釉施釉。外面沈線による波状文。底部方形状の孔。幼児用か。181と同一個体の可能性あり。	34号墓 墓域外 Ⅰ層
183	厨子甕	蓋 (装飾)	Ⅵ	―	―	―	鯱の尻尾。白化粧後、呉須施釉。胎土灰色で粗白色粒含む。	34号墓 墓室内 Ⅰ層
184	沖縄産施釉陶器	鉢	―	―	10.6	―	内外面ともに黒釉。胎土赤褐色。	34号墓 墓室内 Ⅰ層
185	沖縄産無釉陶器	碗	―	―	8.6	―	内外面ともに暗赤褐色。胎土緻密で細かな白色粒含む。内底砂粒付着。	34号墓 墓庭 Ⅰ層
186	円盤状製品	―	―	4.5	4.15	1.15	沖縄産無釉陶器の胴部を利用。両面を剥離加工。重量25g。	34号墓 墓庭 Ⅰ層
187	沖縄産施釉陶器	蓋	―	6.8	5.2	―	白化粧後、外面甲蓋端部に透明釉。上面線彫りによる施文。胎土黄褐色。呉須と褐釉施釉。	石積8 Ⅰ層
188	中国産青磁	碗	Ⅱ	―	5.2	―	釉は灰色味を帯び薄い。胎土灰色。外底露胎。外面に蓮弁文か	石積み9
(189)	プラスチック製品	眼鏡	―	12.1	4.5	―	フレームはべっ甲調のセルロイド。ガラス製レンズの色調は透明。金具部分は錆で覆われる。	19号墓 壕内
(190)	その他	軍靴	―	7.8	7.2	―	右足用軍靴の踵部。大半が腐食で欠落、J型の鉄底金具と僅かな革が残存。重量48.5g。	19号墓 壕内
(191)	プラスチック製品	ボタン	―	2.0	2.0	0.85	脚付ボタン。色調は茶色。	19号墓 壕内
(192)	金属製品	ボタン	―	1.5	1.5	0.4	脚付ボタン。	19号墓 壕内
(193)	金属製品	ボタン	―	1.5	1.5	0.4	脚付ボタン。	19号墓 壕内
(194)	金属製品	ボタン	―	1.5	1.5	0.4	脚付ボタン。	19号墓 壕内
(195)	プラスチック製品	万年筆の蓋	―	4.2	1.1	―	万年筆の蓋の一部。金具部分に刻印があるが判然としない。蓋内は錆で腐食。	19号墓 壕内
(196)	金属製品	金具	―	1.65	1.0	0.1	スプリングホック。メス側。衣服等に使用か。	19号墓 壕内
(197)	金属製品	金具	―	1.5	1.0	―	スプリングホック。オス側。衣服等に使用か。	19号墓 壕内
(198)	金属製品	手榴弾のピン	―	約3.3	約3.3	0.6	マークⅡ手榴弾の安全ピン、全体が赤錆で腐食。	19号墓 壕内
(199)	金属製品	手榴弾の信管	―	5.2	3.7	―	マークⅡ手榴弾の信管。重量50.8g。	19号墓 壕内
(200)	金属製品	白燐弾	―	6.0	―	5.0	手榴弾型白燐弾の上部。信管を軸に金属帯が付く。赤錆付着。重量174g。	19号墓 壕内
(201)	金属製品	導線	―	―	―	0.2	金属線にゴム被膜の加工。重量0.7g。	19号墓 壕内
(202)	金属製品	槊杖	―	約23.5	―	0.6	先端がネジ状になる。銃身内の洗浄用か。錆付着。重量38.6g。	19号墓 壕内

※法量の単位はcm、（）内の数値は復元値とする。器物以外は長軸・短軸・厚さとする。

※（189）～（202）は沖縄県平和記念財団戦没者遺骨収集情報センターに移管した。

第４節　自然遺物

(1)　脊椎動物遺体

今回の発掘調査で得られた脊椎動物遺体については、当センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。同定作業及び計測作業の際には、丸山真史氏（東海大学）の協力を得た。

計測作業はイヌ頭蓋骨・臼歯・脊椎・四肢骨、ブタ臼歯で実施し、イヌ頭蓋骨の計測位置は斎藤 1963 に従い、それ以外は、Driesch1976 に従っている。

普天間下原古墓群からは哺乳類が確認された（第 56 表）。同定資料に関しては、同定標本数（NISP）で示しており、最小個体数は算出していない。

哺乳類　今回出土数は第 57 表に示した。

各古墓からの出土状況は第 150 図に示した。

１号墓

墓室内Ⅰ層から種不明の頭蓋骨の破片が２点出土。

２号墓

イヌ　墓室内Ⅰ層から頭頂骨から四肢骨まで出土している。中足骨（左）の同一部位と考えられる資料が２点出土しており、２個体分の可能性が考えられる。骨端部が残存している部位では未癒合の資料が多く、幼獣の個体と考えられる。

３号墓

ウシ　墓域外Ⅰ層から大腿骨が出土。カットマークが見られる。

４号墓

ネコ　屋根Ⅰ層から脛骨が出土。

ウシ / ウマ　墓域外表採で部位不明の破片資料が出土。

イノシシ / ブタ　屋根Ⅰ層で下顎骨が出土。

第 56 表　脊椎動物遺体種類一覧

哺乳綱	MAMMALIA
イヌ	Canis familiaris
ネコ	Felis catus
ウマ	Equus feres
ウシ／ウマ	Bos taurus ／ Equus feres
ブタ	S. s.domesticus
イノシシ／ブタ	Sus scrofa ／ S. s.domesticus
ヤギ	Capra hircus
ウシ	Bos taurus
マングース	Herpestidae

ウシ　墓域外表採で大腿骨が出土。

５号墓

イヌ　墓室内Ⅰ層で頭蓋骨から椎骨、四肢骨、中手骨、中足骨が出土している（図版 90 上：上、左下）。同一部位が２点ずつ出土しており、２個体分確認できる。骨端部は、癒合、未癒合のものがそれぞれ出土しているため、幼獣と成獣がそれぞれ１個体ずつ出土している。明確に解体痕と判断できる資料はない。

頭蓋骨や四肢骨の保存状態が良好で、頭蓋骨をはじめ四肢骨を計測することができた（第 63 ～ 67 表）。計測値を他遺跡と比較するため、広島県草戸千軒遺跡の成果（茂原・松井 1995）を参考にした（第 66 表・第 151･152 図）。計測値にバラツキがあるが、脳頭蓋長（第 151 図）や下顎骨全長（第 152 図）で、弥生イヌ♂（平均）や中世イヌ♂（平均）と近い値が得られた。現生シバイヌ♂・♀（平均）の値と比べると今回出土個体は、やや大型の個体である可能性が高い。

５号墓は空墓の状態で、これらの資料は散乱した状況で確認されており、解剖学的位置を保った状態だったか不明である。加えて、遺棄された年代等も不明だが、今回の計測値をふまえて今後類例資料と比較し、どの年代に属する資料か検討する必要がある。

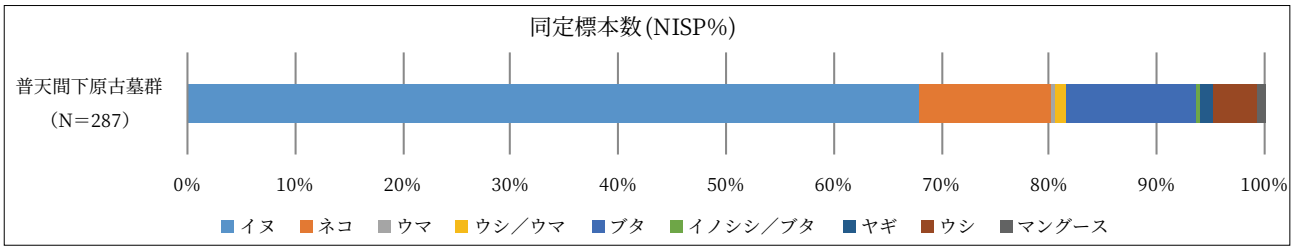
ネコ　下顎骨から四肢骨、中足骨、指骨が出土しており、１個体分の資料が得られている（図版 90 上:右下）。骨端部が残存している部位は未癒合状態のため、幼獣である可能性が高い。散乱した状況で確認されており、解剖学的位置を保っている状態か不明。

ブタ　庭Ⅰ層から大腿骨が出土している。

ヤギ　庭表採で上腕骨が出土しており、カットマークが

第 57 表　哺乳類同定標本数（NISP）

種類＼地区	普天間下原古墓群（N ＝ 287）
イヌ	195
ネコ	35
ウマ	1
ウシ／ウマ	3
ブタ	35
イノシシ／ブタ	1
ヤギ	3
ウシ	12
マングース	2
合計	287



第 147 図　哺乳類同定標本数 (NISP%)

見られる。食用に供されたと考えられる。

ウシ　入口Ⅰ層から椎骨（腰椎）が出土しており、切断痕がある。墓室内Ⅰ層では肋骨が出土しており、カットマークが見られる。墓域外Ⅰ層及び墓域外表採で脛骨が得られており切断痕がある。屋根表採では踵骨が出土している。これらは出土位置がそれぞれ異なるが、解体して食用にされたことが考えられ、５号墓に関連した資料の可能性が高い。

７号墓

イヌ　庭表採で橈骨が出土。

ウシ　右袖Ⅰ層で脛骨が出土しており、螺旋状剥片が見られる。食用に供されたと考えられる。

８号墓

ウシ　墓室内Ⅰ層から大腿骨が出土しており、螺旋状剥片が見られる。食用に供されたと考えられる。

16 号墓

ウマ　庭Ⅰ層から遊離歯（下顎）が出土。

ウシ / ウマ　墓域外表採で部位不明骨が出土。

ウシ　庭表採で上腕骨が出土しており、切断痕がある。食用に供されたと考えられる。

19 号墓

ブタ　墓室内獣骨集中部から頭蓋骨が出土している（図版 90 下）。下顎骨の歯列部分が肥大化していることや、頭蓋骨上部の表面が海綿質状になっている特徴から、ブタと考えられる（第 148・149 図）。後頭骨が２点出土しており、２個体分の資料である。部位不明の破片資料が得られているが､ほとんどが頭蓋骨の破片と思われる。四肢骨等は得られていない状況から、頭蓋骨のみを埋設したことが考えられる。

ヤギ　入口Ⅰ層から橈骨が出土。

21 号墓

ウシ / ウマ　庭Ⅰ層から部位不明骨が出土。

ウシ　墓室内Ⅰ層から大腿骨が出土。

26 号墓

イヌ　Ⅰ層から上顎骨が出土。

27 号墓

マングース　墓室内から頭蓋骨及び下顎骨が出土。自然に迷い込んだ個体と考えられる。

28 号墓

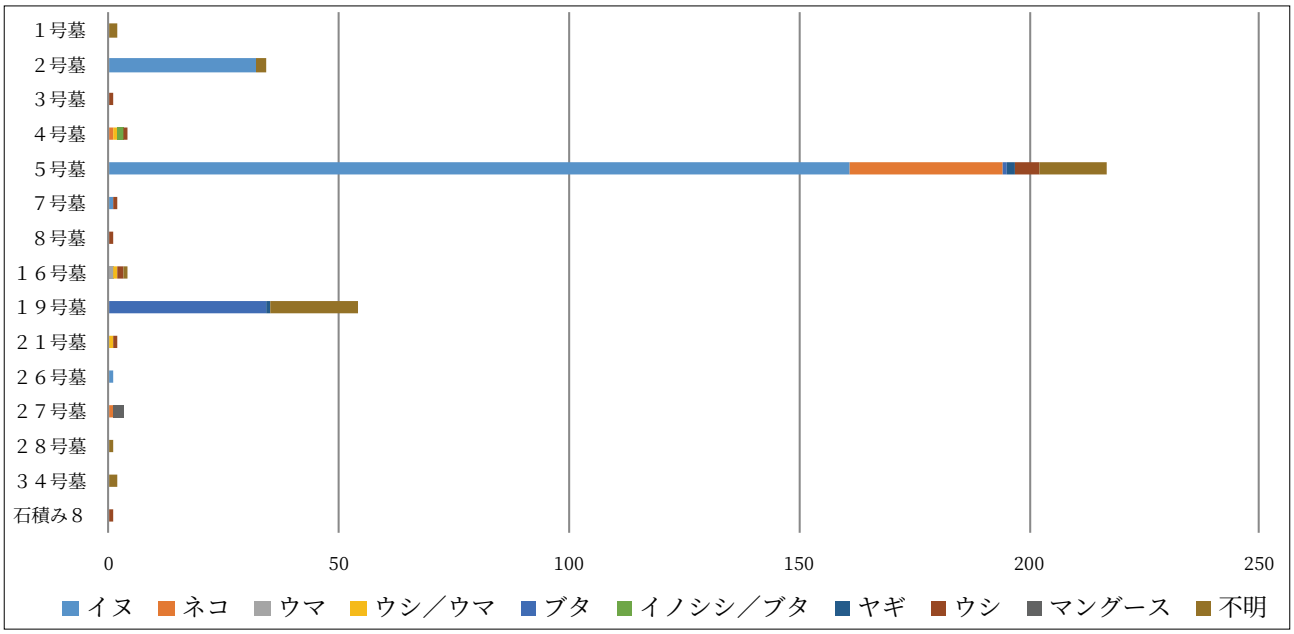
庭Ⅰ層から種不明骨が出土。

石積８

ウシ　Ⅰ層から距骨が出土。

第 148 図　19 号墓出土ブタ下顎骨

第 149 図　19 号墓出土ブタ頭蓋骨



第 150 図　哺乳類各古墓出土数

第 58 表　a（古墓）

1 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 Ⅰ層	不明	頭蓋骨	破片	—	—			2		2

2 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 Ⅰ層	イヌ	頭蓋骨	頭頂骨（破片）	幼	—			1		1
		遊離歯（下顎）	C ↓	幼	—			1		1
		椎骨（胸椎）	棘突起	幼	—				1	1
		椎骨（腰椎）	椎体欠損	幼	—				1	1
		椎骨	椎体板（完存）	幼	—				1	1
		肋骨	近位端 - 骨幹部	幼	—	3				3
			骨幹部		—			4		4
		肩甲骨	骨幹部 - 遠位部	幼	—		1			1
			遠位部 - 遠位端	幼	—	1				1
		上腕骨	近位骨端のみ	幼	—	1				1
			近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	—		1			1
			近位部 - 骨幹部	幼	—	1				1
		橈骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	—	1				1
			骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	—		1			1
		尺骨	滑車切痕 - 骨幹部	未癒合（近位端）	—	1	1			2
		中手骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	—	1	1			2
		寛骨	腸骨 - 寛骨臼	未癒合（寛骨臼）	—		1			1
		大腿骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	—	1	1			2
			骨幹部	幼	—	1				1
		脛骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近位端）	—	1				1
		踵骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近位端）	—	1				1
		中足骨	近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	—	2				2
			近位端 - 骨幹部	幼	ｶｯﾄﾏｰｸ？		1			1
	不明	頭蓋骨	破片	—	—	1	1			2
合　計						16	9	6	3	34

3 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓域外 Ⅰ層	ウシ	大腿骨	遠位骨端のみ	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	1				1

4 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
屋根 Ⅰ層	ネコ	脛骨	近位部 - 遠位部	—	—	1				1
墓域外 表採	ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—			1		1
屋根 Ⅰ層	イノシシ / ブタ	下顎骨	下顎角	—	—		1			1
墓域外 表採	ウシ	大腿骨	近位部 - 遠位部	—	—	1				1
合　計						2	1	1	0	4

5 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 Ⅰ層	イヌ	頭蓋骨	頭頂骨	—	—	1				1
			前頭骨+ 頭頂骨+ 後頭骨+ 側頭骨+ 頬骨(R 欠損) $P^3P^4M^1M^2$(左)P^4(右)	—	—	1				1
		下顎骨	結合部 - 関節突起 C ××× $P_4M_1M_2$	—	—		1			1
			結合部 - 関節突起 $P_2P_3P_4$	(M_1M_2) 未萌出	—		1			1
			結合部 - 関節突起 ×××× $P_4M_1M_2$	—	—	1				1
		椎骨（環椎）	完存	—	—				1	1
			環椎翼一部欠損	—	—				1	1
		椎骨（軸椎）	完存	—	解体痕？				1	1
		椎骨（頸椎）	完存	—	—				4	4
			ほぼ完存	—	—				2	2
		椎骨（胸椎）	完存	—	—				2	2
			ほぼ完存	—	—				6	6
			椎体欠損	—	—				5	5
		椎骨（胸椎 / 腰椎）	ほぼ完存	—	—				4	4
			椎体欠損	—	—				3	3
		椎骨（腰椎）	ほぼ完存	—	—				10	10
		椎骨（尾椎）	完存	—	—				1	1
		仙骨	ほぼ完存	—	—				1	1
			仙骨翼周辺	未癒合	—				1	1
		肋骨	完存	—	—	5	7			12
			近位端 - 遠位部	—	—	4				4
			近位端 - 骨幹部	—	—	6	4			10
			近位部 - 遠位端	—	—		4			4
			近位部 - 遠位部	—	—	1	1			2
			近位部 - 骨幹部	—	—	6				6

第 59 表　b（古墓）

５号墓（つづき）

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	―	計
墓室内Ⅰ層	イヌ	肋骨	骨幹部	―	―		2	8		10
			骨幹部 - 遠位端	―	―	1				1
			遠位部 - 遠位端	―	―			2		2
		肩甲骨	骨幹部	―	―	1				1
		上腕骨	近位骨端のみ	―	―		1			1
			近位部 - 遠位部	未癒合（近位端）	―	1				1
				未癒合（近・遠位端）	―		1			1
			遠位骨端のみ	―	―	1	1			2
		橈骨	完存	―	―	1				1
			ほぼ完存	―	―		1			1
			近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	―	1	1			2
		尺骨	完存	―	―		1			1
			近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	―	1	1			2
				―	―	1				1
		中手骨（Ⅱ）	完存	―	―		1			1
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1	1			2
			近位端 - 骨幹部	―	―	1				1
		中手骨（Ⅲ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―		1			1
		中手骨（Ⅳ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1	1			2
		中手骨（Ⅴ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1	1			2
		寛骨	腸骨 - 坐骨	癒合中（寛骨臼）	―	1	1			2
				―	―	1				1
			腸骨 - 恥骨	―	―		1			1
		大腿骨	ほぼ完存	―	―	1	1			2
			近位骨端のみ	―	―		1			1
			近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	―	1				1
				―	―		1			1
		脛骨	完存	―	ｶｯﾄﾏｰｸ？		1			1
			近位骨端のみ	―	―	1				1
			近位端 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	―		1			1
			遠位骨端のみ	―	―		1			1
		腓骨	近位部 - 遠位部	―	―		1			1
			骨幹部	―	―	1				1
			遠位部	未癒合（遠位端）	―		1			1
		距骨	完存	―	―	1				1
		踵骨	完存	―	―	1				1
			近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	―		1			1
		中足骨（Ⅱ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1	1			2
		中足骨（Ⅲ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 骨幹部	―	―	1	1			2
		中足骨（Ⅳ）	完存	―	―		1			1
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1	1			2
		中足骨（Ⅴ）	完存	―	―	1	1			2
			近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―	1				1
				―	―		1			1
	イヌ？	胸骨	胸骨体	―	―				1	1
	ネコ	下顎骨	関節突起＋角突起	―	―	1				1
		椎骨（胸椎）	ほぼ完存	―	―				1	1
		椎骨（腰椎）	ほぼ完存	―	―				4	4
		仙骨	完存	―	―				1	1
		肋骨	完存	―	―	2				2
			近位端 - 骨幹部	―	―	1	1			2
			骨幹部 - 遠位端	―	―		1			1
		肩甲骨	近位部 - 骨幹部	―	―		1			1
			骨幹部 - 遠位端	―	―		1			1
		上腕骨	近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	―	1	1			2
		橈骨	近位端 - 骨幹部	―	―	1				1
			骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―		1			1
		尺骨	近位端 - 遠位部	―	―	1				1
			近位端 - 骨幹部	―	―		1			1
		中手骨（Ⅱ）	完存	―	―	1				1
		中手骨（Ⅲ）	完存	―	―	1				1
		寛骨	腸骨 - 坐骨	―	―	1	1			2
		大腿骨	完存	―	―	1	1			2

第 60 表　c（古墓）

5 号墓（つづき）

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 Ⅰ層	ネコ	脛骨	近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	—	1				1
				—	—		1			1
		距骨	完存	—	—	1				1
		中足骨（Ⅲ）	完存	—	—		1			1
			近位端 - 骨幹部	—	—	1				1
		中足骨（一）	近位端 - 骨幹部	—	—			1		1
		指骨（中節骨）	完存	—	—			1		1
庭 Ⅰ層	ブタ	大腿骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	—		1			1
庭 表採	ヤギ	上腕骨	近位部	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	1				1
					—			1		1
入口 Ⅰ層	ウシ	椎骨（腰椎）	椎体	—	切断				1	1
墓室内 Ⅰ層		肋骨	近位部 - 骨幹部	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	1				1
墓域外 Ⅰ層		脛骨	近位部	未癒合（近位端）	切断		1			1
墓域外 表採			骨幹部	—	切断	1				1
屋根 表採		踵骨	近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	—		1			1
墓室内 Ⅰ層	不明	椎骨（一）	椎体板	—	—				2	2
墓域外 Ⅰ層		肋骨	骨幹部	—	—		1			1
墓室内 Ⅰ層		部位不明	近位部 - 遠位部	—	—			1		1
		部位不明	破片	—	—			6	5	11
合　計						1 / 71	1 / 67	20	57	218

7 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
庭 表採	イヌ	橈骨	骨幹部	—	—	1				1
右袖 Ⅰ層	ウシ	脛骨	近位部 - 骨幹部	幼？	螺旋状剝片		1			1
合　計						1	1	0	0	2

8 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 Ⅰ層	ウシ	大腿骨	骨幹部 - 遠位部	—	螺旋状剝片	1				1

16 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
庭 Ⅰ層	ウマ	遊離歯（下顎）	P_4	—	—	1				1
墓域外 表採	ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—				1	1
庭 表採	ウシ	上腕骨	近位部 - 遠位部	—	切断		1			1
墓域外 表採	不明	部位不明	骨幹部	—	—			1		1
合　計						1	1	1	1	4

19 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内 獣骨集中部	ブタ	頭蓋骨	前頭骨 + 頭頂骨 + 後頭骨 + 側頭骨	—	—	2				2
			前頭骨（破片）	—		1				1
			側頭骨（破片）	—	—	1				1
			頬骨（破片）	—	—	1				1
			岩様部骨胞	—	—		1			1
			後頭顆	—	—		1			1
			破片	—	—			9		9
		上顎骨	上顎体 I^1 ××××	I^1 未萌出	—	1				1
			上顎体 × P^3P^4 × M^2	P^4M^2 萌出中	—		1			1
			上顎体 ×× M^2	M^2 萌出中 M^3 未萌出	—	1				1
		下顎骨	結合部 - 下顎角 I^1 ×× $dP_2P_3P_4$ × M_2	P_3P_4 未萌出	—	1				1
			下顎体 - 筋突起×× M_1M_2	M_3 未萌出	—	1				1
			下顎体 ×× M_2		—		1			1
			結合部	—	—				1	1
			下顎角	—	—	1				1
			筋突起	—	—	1				1
			関節突起	—	—	1	1			2
			破片	—	—			1		1
		遊離歯（下顎）	C ↓	—	—	1	1			2
			I_1/I_2	—	—			2		2
		遊離歯（上顎 / 下顎）	破片	—	—			2		2
入口 Ⅰ層	ヤギ	橈骨	近位端 - 骨幹部	—	—		1			1
墓室内 獣骨集中部	不明	部位不明	破片	—	—				19	19
合　計						3 / 10	7	14	20	54

第 61 表　d（古墓）

21 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
庭 Ⅰ層	ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—				1	1
墓室内 Ⅰ層	ウシ	大腿骨	近位端（大腿骨頭）	—	—		1			1
合　計						0	1	0	1	2

26 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
Ⅰ層	イヌ	上顎骨	上顎体 $P^1P^2P^3P^4M^1M^2$	—	—	1				1

27 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内	マングース	頭蓋骨	前頭骨+ 頭頂骨+ 後頭骨+ 側頭骨+ 頬骨 C × $P^2P^3P^4M^1M^2$	幼	—	1				1
		下顎骨	結合部 - 関節突起 C × $P_2P_3P_4M_1$	幼	—		1			1
墓室内Ⅰ層	ネコ	上腕骨	近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	—	1				1
合　計						1		0	0	3
						1	1			

28 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
庭 Ⅰ層	不明	部位不明	破片	—	—				1	1

34 号墓

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
墓室内	不明	肋骨	骨幹部	—	—			1		1
		部位不明	破片	—	—				1	1
合　計						0	0	1	1	2

石積み 8

出土層位	種類	部位	残存状況	成長	加工	左	右	不明	—	計
Ⅰ層	ウシ	距骨	ほぼ完存	—	—	1				1

第 62 表　ブタ臼歯の計測値（㎜）

単位：㎜　（）は参考値

墓番号	層位	部位	顎骨	左／右	左			右		
				部分	P4	M1	M2	P4	M1	M2
5 号墓	墓室内 Ⅰ層	下顎骨	下	長			16.06			
				幅			13.47			
				咬耗指数			a ～ b			
				長		12.12	14.14			
				幅		9.69	12.27			
				咬耗指数		c	a ～ b			
				長						15.24
				幅						13.43
				咬耗指数						c

第 63 表　イヌ臼歯の計測値（㎜）

単位：㎜　（）は参考値

墓番号	層位	部位	顎骨	左／右	左			右		
				部分	P4	M1	M2	P4	M1	M2
5 号墓	墓室内 Ⅰ層	頭蓋骨	上	長	17.16	12.48	7.42	17.51		
				幅	6.84	16.24	10.16	6.72		
				最大幅	8.21			8.35		
		下顎骨	下	長		19.94	9.04		19.83	9.24
				幅		7.69	7.31		7.65	7.08

第 64 表　イヌ脊椎・四肢骨の計測値（㎜）

単位：㎜　（）は参考値

墓番号	層位	種類	残存状況	左／右	GL	GB	BFcr	H	LAPa	LCDe	Bp	Bd	HFcr	SD	PL	DC	DPA	SDO
5 号墓	墓室内 Ⅰ層	椎骨 (環椎)	完存	—	38.97	74.29	30.99	25.62										
		椎骨 (軸椎)	完存	—				36.92	53.37	46.00								
		仙骨	ほぼ完存	—	36.37	51.24	26.12						10.86		34.53			
		橈骨	完存	左	158.64						17.46	23.42		11.88				
			ほぼ完存	右	(157.50)						—	23.07		11.67				
		尺骨	近位端 - 遠位部	左													21.53	20.19
			完存	右	187.97												22.12	20.51
		大腿骨	ほぼ完存	左	173.00						—	30.01		12.97				
			ほぼ完存	右	(173.40)						36.77	30.33		12.98		17.85		
		脛骨	完存	右	177.97						32.84	22.68		12.44				
		踵骨	完存	左	43.56													
		距骨	完存	左	26.02													

第 65 表　イヌ頭蓋骨（5 号墓 墓室内 I 層出土）計測値

単位：㎜　（）は参考値

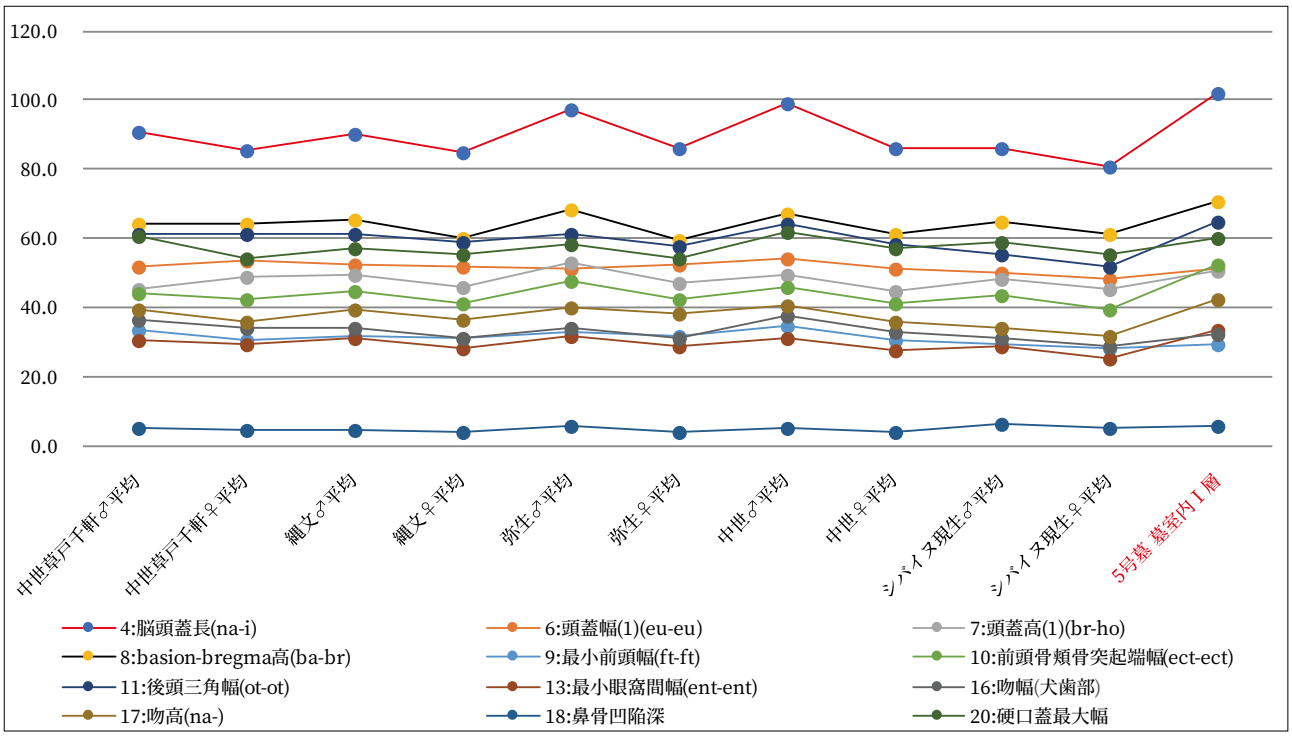
計測項目	計測点	斎藤計測箇所 No.	計測値	計測項目	計測点	斎藤計測箇所 No.	計測値
頭蓋最大長	i-pr	1	—	後頭三角幅	ot-ot	144	64.94
基底全長	pr-		—	最小眼窩幅	ent-ent	42	33.42
頬骨弓幅	zy-zy	8	—	顔長	pr-na	33	—
脳頭蓋長	na-I	9	102.03	吻長（1）	pr-oa	64	—
頭蓋幅（1）	eu-eu	35	51.43	吻幅（犬歯部）		46	(32.17)
頭蓋高（1）	ho-br	152	(50.60)	吻高	na-	162	42.20
バジオン・ブレグマ高	ba-br		70.57	鼻骨凹陥深		73	5.67
最小前頭幅	fs-fs	40	29.49	硬口蓋骨長	pr-sta	86	—
前頭骨頬骨突起端幅	ect-ect	41	52.50	硬口蓋最大幅		125	(60.12)

第 66 表　イヌ頭蓋骨・下顎骨（5 号墓 墓室内 I 層出土）計測値と比較表

単位：㎜　（）は参考値

計測箇所	中世		縄文平均		弥生平均		中世平均		シバイヌ平均		5 号墓墓室内 I 層
	草戸千軒								現生		普天間下原古墓群
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
4: 脳頭蓋長 (na-i)	90.9	85.4	90.0	84.8	97.1	86.3	99.0	86.3	86.1	80.8	102.03
6: 頭蓋幅 (1)(eu-eu)	52.1	53.4	52.5	51.6	51.0	52.3	54.4	51.4	50.1	48.3	51.43
7: 頭蓋高 (1)(br-ho)	45.2	49.1	49.5	45.8	52.8	47.2	49.7	44.7	48.5	45.2	(50.60)
8:basion-bregma 高 (ba-br)	64.2	64.1	65.2	59.9	68.2	59.8	67.5	61.1	65.0	61.4	70.57
9: 最小前頭幅 (ft-ft)	33.8	30.4	31.7	31.4	33.0	32.1	34.7	30.9	29.5	28.2	29.49
10: 前頭骨頬骨突起端幅 (ect-ect)	44.2	42.2	44.6	41.2	47.8	42.3	46.0	41.2	43.5	39.3	52.5
11: 後頭三角幅 (ot-ot)	61.3	61.6	61.6	58.8	61.5	58.0	64.3	58.3	55.2	51.6	64.94
13: 最小眼窩間幅 (ent-ent)	30.9	29.3	31.1	28.2	31.6	28.6	31.3	27.6	28.7	25.4	33.42
16: 吻幅 (犬歯部)	36.5	34.4	34.1	31.5	34.0	31.5	37.6	32.8	31.5	28.9	(32.17)
17: 吻高 (na-)	39.3	36.0	39.7	36.8	40.2	38.1	40.8	36.1	34	32	42.2
18: 鼻骨凹陥深	5.5	4.8	4.5	3.9	5.6	3.9	5.1	4.0	6.4	5.5	5.67
20: 硬口蓋最大幅	60.5	54.4	57.3	55.2	58.6	54.0	61.8	56.9	59.2	55.2	(60.12)
21: 下顎骨全長 (1)(id-goc)	125.4	122.7	123.5	113.3	128.0	114.2	131.3	117.9	114.1	107.0	(136.89)
22: 下顎骨全長 (2)(id-c.mid)	124.5	122.1	123.1	113.7	128.3	114.0	131.3	116.3	114.2	107.0	(136.27)
23: 下顎枝高	49.7	48.7	48.8	43.4	50.6	44.9	52.7	47.6	44.6	41.3	(52.51)
24: 下顎枝幅 (最小値)	32.2	30.4	31.3	27.4	35.0	29.0	32.1	28.5	27.7	25.5	33.27
25: 下顎体高 (M1 の中央)	24.8	23.3	23.6	21.1	23.5	21.4	23.3	21.0	18.9	17.2	22.86
26: 下顎体厚 (M1 の中央下方)	11.5	10.6	11.0	9.9	12.2	10.3	10.9	10.0	9.1	8.2	10.14
27: 咬筋窩深 (下顎枝幅位)	7.6	6.8	7.9	6.7	-	5.2	7.4	6.5	5.8	5.3	5.26

草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨の計測値と比較資料（茂原・松井 1995）　※今回報告の計測が可能だった部分の値を抜粋し、追記。



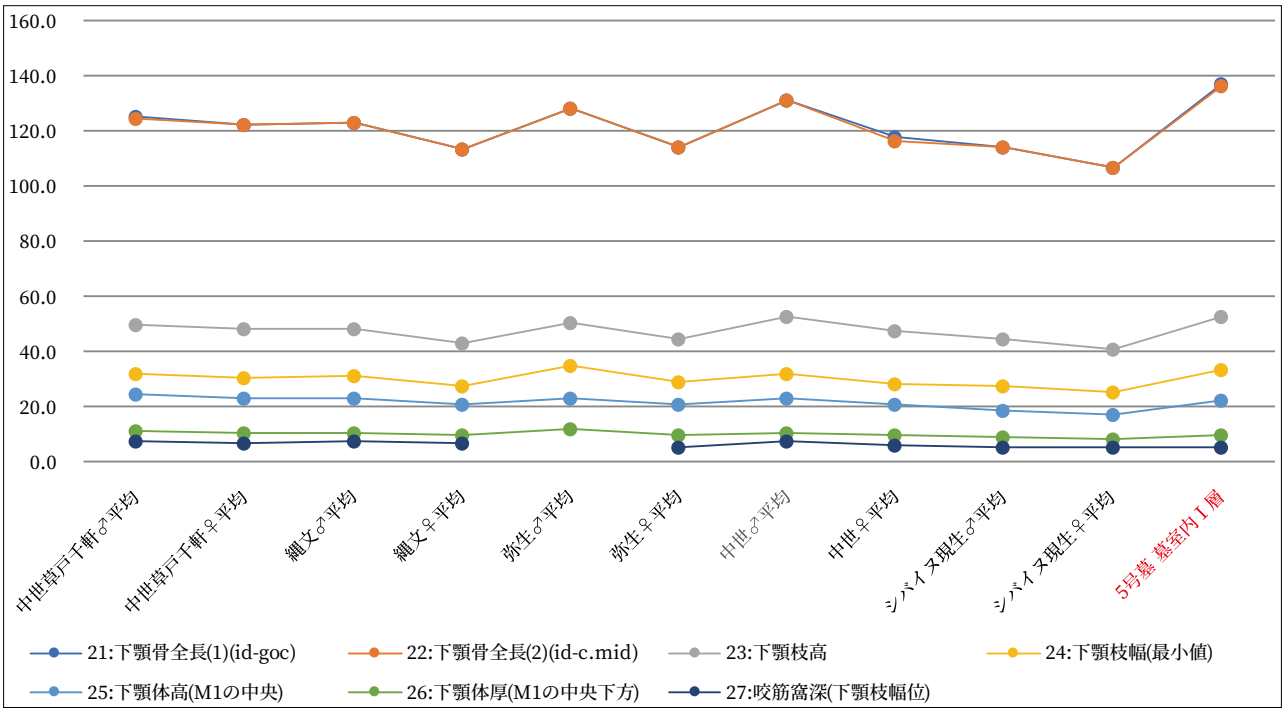
第 151 図　イヌ頭蓋骨計測値比較

数値は茂原・松井1995による

第 67 表　イヌ下顎骨（５号墓 墓室内Ⅰ層出土）計測値

単位：mm　（）は参考値

計測項目	計測点	斎藤計測	計測値		計測項目	計測点	斎藤計測	計測値	
		箇所 No.	左	右			箇所 No.	左	右
下顎骨全長（１）	id-goc	1	(136.89)	(128.73)	下顎体高（２）	M1 中央	17	22.86	22.24
下顎骨全長（２）	id-cm	2	(136.27)	(126.61)	下顎体高（３）	P4M １間	18	20.64	20.95
下顎枝高	kr-gov	7	(52.51)	55.25	下顎体厚	M１中央下方	25	10.14	10.03
下顎枝幅	Minimum	11	33.27	32.65	咬筋窩深			5.26	5.06
下顎体高（１）	M2 後部	16	24.48	24.08					



第 152 図　イヌ下顎骨計測値比較　数値は茂原・松井1995による

（２）　貝類遺体

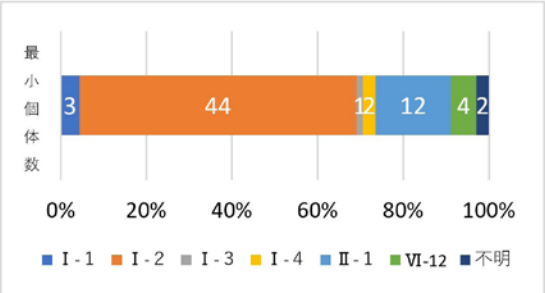
普天間下原古墓群の報告対象サンプルは、平成 29 年度調査の１～３・５・７・19・28 号墓、平成 30 年度調査の 21 号墓からピックアップ法によって得られたものである。12 科 17 種の総数 175 点出土しており、いずれもⅠ層からの出土である。また、全体の約９割は 21 号墓からの出土となっている（表３）。

21 号墓は墓庭に貝集中部が確認され、158 点の自然貝が出土している。そのうち、最も多いのはシャコガイ科の貝種で総数 104 点確認された。また、シャコガイ科の貝種は長軸 15cm 以上に成長するが、出土資料は長軸約 2.3 ～ 5.7cm の幼貝が主体であった。

古墓群全体の最小個体数は 68 個体で、これらを生息域別でみると、サンゴ礁域（Ⅰ類）の貝が多く、中でもⅠ- ２類が最多であった（図３）。また、わずかだが化石化した貝も確認された。墓構築時の岩盤掘削により混入したとも考えられたが、出土した層序がⅠ層であることや戦後の基地造成などを考えると墓造営時の資料とは断定し難い状況である。

第 68 表　古墓別貝類出土表

貝種	生息域	1号墓	2号墓	3号墓	5号墓	7号墓	19号墓	21号墓	28号墓	合計
チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a							1		1
カンギク	Ⅱ-1-b							15		15
ニシキウズ科	-							8		8
ニシキウズ	Ⅰ-2-a							3		3
ギンタカハマ	Ⅰ-4-a	1								1
サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	1		1				1		3
オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8					2				2
オニノツノガイ	Ⅰ-2-c							1		1
マガキガイ	Ⅰ-2-c							10		10
クモガイ	Ⅰ-2-c	1				1				2
タカラガイ科	-							1		1
イモガイ科	-							8		8
アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c							1		1
ツネガイ科	-				2			1		3
ベニエガイ	Ⅰ-1-a							3		3
シナイタヤ	Ⅵ-12		1							1
メンガイ類	Ⅰ-2-c							1		1
シャコガイ科	-							72		72
シラナミ類	Ⅰ-2-a							29		29
ヒレジャコ	Ⅰ-2-c						1	2		3
シャゴウ	Ⅰ-2-c							1		1
ヒナキンチャク	Ⅵ-12	1								1
ウニ化石	Ⅵ-12				1				1	2
不明	-				3					3
合計		4	1	1	6	3	1	158	1	175



第 153 図　生息域別貝類出土割合 (MINI)

第５節　銘書の分析

山田　浩世
(沖縄県教育庁文化財課史料編集班)

１．はじめに

銘書は、厨子甕などに記された被葬者や墓の由来などを記した墓誌銘のことである。沖縄の葬墓制において銘書が見られ始めるのは17世紀後半（康熙年間）からで、被葬者名と死去年を記すのが一般的な形式である。18世紀前半（乾隆年間以降）には洗骨年なども記されるようになるが、干支または中国年号の使用など含め記載方法や内容は個々のケースで異なる場合が多い。なお、近代に入るとカタカナや日本年号の使用など、記載方法が変化することなども知られる。

銘書が書かれる位置は、主に厨子甕の蓋の内面または身の正面（屋門内）などである。一般的に銘書を記す行為は、近世を通じて被葬者を特定しようとする首里・那覇などの町方に居住する士族の文化として定着したが、徐々に地方へも伝播していった。

本章では、調査の過程で出土した厨子甕に記された銘書について報告を行う。調査によって確認された銘書を含む厨子甕（破片含む）は、蓋８点・身２点の計10点である。対象となるこれら厨子甕は、墓室内から出土したもののほかに、墓の周囲で破砕した状態または蓋だけの状態で出土したものが多い。以下では、墓毎に情報を整理し、出土状況も加味して銘書の内容を検討する。

２．銘書資料に見る各墓の被葬者について

（銘書 No. １）

１号墓の墓室内から銘書のある蓋１点が出土した（１）。対応する身はなく、蓋の内面に書かれた銘書No. １は次の通りである。

第三代ノ長子ノ子四十二女子ナリ
□間□（親ヵ）　アヅカリニ及候ナ□（リヵ）　□サテナ及□

銘書にカタカナを使用する一方、「～候」などの表現を用いていることから、近代初期（凡そ19世紀後半～20世紀前半）に書かれたものと推定される。１号墓からは、成人女性１体（20歳代くらい）の人骨が出土しているが、銘書では42歳とあるため別の人物と考えられる。

（銘書 No. ２・３）

４号墓の屋根および左石積から銘書のある破片２点が出土した（27・28）。亀甲墓の造営時または退去時などにおいて使用に耐えなくなり廃棄された蔵骨器の破片と考えられる。ともに形状からマンガン釉甕形厨子の蓋で、同一個体となる可能性がある。墓の左石積出土の蓋(28)の銘書No. ３は断片のため判読できず、屋根で採取された蓋（27）の内面に書かれた銘書No. ２は次の通りである。

明□（治ヵ）［後欠］
戌九月［後欠］
二女□［後欠］

20世紀初頭までの編年を持つマンガン釉甕形厨子の蓋に墨書きされた「明□」の文字から、日本年号である「明治」が記されていたと考えられる。また、銘書に書き込まれる年号は、概ね日清戦争（1894～95年）を境に中国年号から日本年号へ変移したことが知られるため、二行目に記された戌年は1898年（明治31）または1910年（明治43）と考えられる。

（銘書 No. ４・５）

亀甲墓である７号墓からは複数の上焼御殿型厨子の破片が出土しており、銘書のあるものは墓室内や墓入口、墓庭から破砕された状態で出土し、上焼御殿形厨子（VI c-2類）の蓋（68）と身（69）が復元できた。形状から蓋と身は対応する可能性がある。蓋（68）の口縁部左右に残された銘書No. ４は次の通りである。

【右側】
〔前欠〕弐年甲戌□（九ヵ）月□日洗骨安里筑登之童名か満と
【左側】
〔前欠〕□（未ヵ）七月廿三日洗骨
〔前欠〕□子か満と

左右の銘書には、同じく「か満（ま）と」の名が見えることから、同名の２人の人物の洗骨記録であることが分かる。

また、上焼御殿型厨子の編年と整合し、右側の銘書に書かれた「甲戌」の干支と合致する年次は同治13年（1874）であるが、前欠する「～弐年」の表記とは整合しない。もっとも、干支で時間を認識していた当時において、銘書を書き込む際の年号を用いた換算違いはしばしば起こっていることから、甲戌を「同治12年」（前欠のため読みとれる文字は「弐」のみ）と誤記した可能性が高い。以上であるとすると、右側に書き込まれた安里筑登之（童名：かまと）の洗骨年は1874年であると考えられる。

左側の銘書について、順当に右側に書かれた銘書の後に記されたものとすると、1874年（甲戌）からほど近

い「未」年である光緒９年（1883）または光緒 21 年（1895）などに比定され、「□子」とあることから、右側の人物と親子関係にある「かまと」が洗骨された可能性が高い。男子（男性）であるのか、女子（女性）であるのかは判読できなかった。なお、復元された昭和 20 年代の普天間の屋号地図に「安里」の名が確認できることから、７号墓は同家との関係が想定される。

同じく７号墓から出土した身（69）の正面に書かれた銘書 No. ５は次の通りである。

同治拾年辛□（未ヵ）
　　女うし

「うし」という女性が、同治 10 年（1871）に死去（または洗骨）したことが窺われる。７号墓出土の銘書が残る蓋（68）と対応するとした場合、厨子内には女性のうし（1871 年死去または洗骨）、安里筑登之（童名：かまと、1874 年洗骨）、子のかまと（1883 年以降に洗骨）の３名が葬られていた可能性がある。

（銘書 No. ６）

７・８号墓周辺で銘書が確認できるボージャー厨子の蓋１点が表採された（95）。蓋の内面に書かれた銘書のほとんどが判読できず詳細は不明である（判読できた銘書は「〔前欠〕之□□」）。厨子の編年から、銘書があるものとしてはもっとも古い 1730 ～ 1770 年代のものと推定される。

（銘書 No. ７）

19 号墓の墓庭で破砕した状態で銘書のある上焼御殿形厨子（Ⅵａ類）の身１点が出土した（147）。本調査で確認できる銘書としては最も古く、厨子の編年とも整合する道光５年（1825）の記銘が確認できる。身の正面に書かれた銘書 No. ７は次の通りである。

道光五年乙酉八月六日古波蔵筑親□□（雲上ヵ）
妻洗骨仕、但、仲元□□（女ヵ）子嘉□

銘書から道光５年（1825）８月６日に古波蔵筑登之親雲上の妻を洗骨し葬ったこと、この妻が「仲元□」の娘の「嘉□」であったことが分かる。昭和 20 年代の普天間の屋号地図には、同系統と思われる「後仲元」や「前仲元」などの名が確認でき、字の中心地に近い位置に「古波蔵」の名も見える。また、古波蔵が筑登之親雲上の称号を名乗っている点から見て、地方役人などを勤める有力な家系の人物であったことが推定される。

（銘書 No. ８）

マンガン釉甕形厨子（Ⅲｂ類）１点が 31 号墓の墓室内から出土し、蓋（166）内面の銘書 No. ８は次の通りである。

十一月十三日洗骨古波蔵小か満戸

銘書から、11 月 13 日に古波蔵小の「か満（ま）戸（と）」を洗骨したことが分かる。古波蔵の名は、19 号墓で確認された上焼御殿形厨子（147）でも確認されており、関係性が窺われる。

（銘書 No. ９）

マンガン釉甕形厨子（Ⅲｃ類）１点が 32 号墓の墓室内から出土し、蓋（19）内面の銘書 No. ９は次の通りである。

女　かマアンマ
　サる人

銘書にカタカナが使用されていることから、被葬者は近代期に葬られた女性と考えられ、「かま」の「アンマ」（母）とも記されており、近親者（子供か）が被葬したことを窺わせる。また、「サる人」ともあり、当該女性が申年の生まれであったことが分かる。

（銘書 No.10）

マンガン釉甕形厨子（Ⅲ類）の蓋１点が墓室内から出土しており（168）、蓋の内面には「先（洗ヵ）骨」との記載がある。

３　まとめ

調査区域内から出土した厨子甕の中で銘書によって明らかとなる最も古い年代は、19 号墓で確認された道光５年（1825）である。なお 19 号墓が、近代以降に造営されるようになった亀甲墓であることから考えると、墓の造営などにともなって近世期の厨子の移動や整理がなされた可能性を窺わせる。全体として銘書によって確認できる年代は数点の 18 世紀および 19 世紀前半の事例を除き、19 世紀後半および近代以降に集中している。地方（じかた）において銘書を書く行為がどの段階で定着したのかを考える上で貴重な資料であろう。

また、銘書によって確認された古波蔵や仲元などの名前から、調査区域は普天間村の人々を葬る墓域であったことを伝える。沖縄戦による影響や、墓室外で確認された厨子が多いことなど、近世から近代にかけての宜野湾における墓域の状況を伝える点でも貴重な情報を多く含んでいると評価できる。

第 69 表　銘書一覧表

銘書 No.	遺物 No.	墓	厨子分類	銘書箇所	銘書	被葬者	死去年	洗骨年
1	1	1号墓	Ⅲ類：マンガン釉甕形厨子	蓋（内面）	第三代ノ長子ノ子四十二女子ナリ □間□（親ヵ）　アヅカリニ及候ナ□（リヵ）　□サテナ及□	女子	—	—
2	27	4号墓	Ⅲ類：マンガン釉甕形厨子	蓋（内面）	明□（治ヵ）［後欠］ 戌九月［後欠］ 二女□［後欠］	二女□	1898か1910？	
3	28	4号墓	Ⅲ類：マンガン釉甕形厨子	蓋（内面）	［前欠］□	不明	—	—
4	68	7号墓	Ⅵc-2類：上焼御殿形厨子（宮城分類Ⅳa、1850年代後半～1898年）	蓋（縁）	【右側】 〔前欠〕弐年甲戌□（九ヵ）月□日洗骨安里筑登之童名か満と 【左側】 〔前欠〕□（未ヵ）七月廿三日洗骨 〔前欠〕□子か満と	①安里筑登之／童名かまと ②□子のかまと	—	①1874？ ②1883～？
5	69	7号墓	Ⅵc-2類：上焼御殿形厨子（宮城分類Ⅳa、1850年代後半～1898年）	身（正面）	同治拾年辛□（未ヵ） 女うし	女うし	1871？	
6	95	7・8号墓	Ⅱ類：ボージャー厨子	蓋（内面）	〔前欠〕之□□	不明	—	—
7	147	19号墓	Ⅵa類：上焼御殿形厨子（宮城分類Ⅲb、1800～1860年代）	身（正面）	道光五年乙酉八月六日古波蔵筑親□□（雲上ヵ） 妻洗骨仕、但、仲元□□（女ヵ）子嘉□	古波蔵筑登之親雲上妻（仲元□女子嘉□）	—	1825
8	166	31号墓	Ⅲb類：マンガン釉甕形厨子（安里分類Ⅳ期、1850～1890年代）	蓋（内面）	十一月十三日洗骨古波蔵小か満戸	古波蔵小かまと	—	—
9	19	32号墓	Ⅲc類：マンガン釉甕形厨子（安里分類Ⅴ期、1900～1920年代）	蓋（内面）	女　かマアンマ サる人	女かまアンマ	—	—
10	168	36号墓	Ⅲ類：マンガン釉甕形厨子	蓋（内面）	先（洗ヵ）骨	不明	—	—

第 6 節　人骨の分析

土肥　直美
(元琉球大学医学部)

１．はじめに

平成 29 年度～ 30 年度に実施された、沖縄県立埋蔵文化財センターによる普天間下原古墓群の発掘調査において出土した人骨について、令和 2 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターからの委託を受け、人骨の整理、人類学的調査・分析を行ったので報告する。
人骨は、墓室内および墓室内に安置された厨子内から二次葬の状態で出土している。いずれも保存状態が悪く、形質的な分析は出来なかったが、被葬者像を示す興味深い情報などが得られている。

２．人骨資料の概要

洗浄・注記作業を終えた人骨について、詳細な部位鑑定を行い、それらをリストアップし、台帳を作成した。台帳作成に際しては、同一個体の可能性を検討し、最小個体数の推定精度の向上に努めた。

３．人骨の調査方法

人骨の性別・年齢の推定は、Knussman(1988)[1] Brothwell(1981)[2] の方法に従った。年齢区分は乳児（1 歳未満）、幼児（1 ～ 6 歳）、小児（7 ～ 14 歳）、若年（約 15 ～約 20 歳）、成年（約 20 ～約 40 歳）、熟年（約 40 ～約 60 歳）、老年（60 歳以上）、成人（詳細な区分不明の成人）とした。

被葬者数は最小個体数で示した。最小個体数は、各骨の同一方向（左右）、同一部位（骨体中央部や骨端部など）をカウントし、また実物も併せて確認しながら推定した。

４．結果

人骨の保存状態が非常に悪く、洗浄によって情報が消失する可能性もあったため、骨の鑑定作業は洗浄前と洗浄後の 2 回行った。鑑定結果のリストは前項の調査結果に示している。

５．分析

１）被葬者数の推定

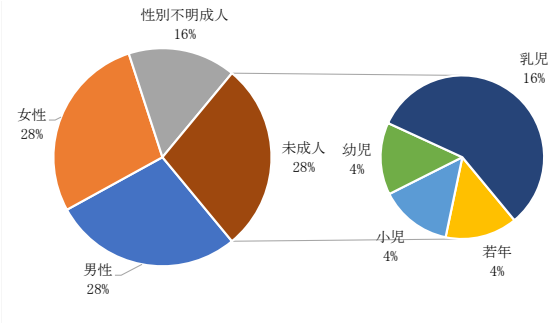
推定最小個体数を第 70 表にまとめた。全体で 25 人（男性 7 人、女性 7 人、性別不明 4 人、若年 1 人、小児 1 人、幼児 1 人、乳児 4 人）と推定された。第 154 図に被葬者の構成を示す。被葬者の構成では、性差はなく、未成人が 28％含まれるなど、久米島ヤッチのガマ[3] などの同時代の古墓被葬者の構成と大差はないようである。また、厨子ごとの被葬者数は、詳細不明の 34 号墓を除き、1 体のみが 3 基（成人 2 基，未成人 1 基(若年 (指輪着装))、複数体が 6 基(男女 2 体が 1、男女 2 体に未成人 1 体が 3 基など）であった。複数体の構成は基本的に男女、あるいは男女に未成人が加わるというパターンのようである。

２）指輪が装着された指骨

27 号墓の墓室内で検出された厨子 1 には若年（約 15 ～約 20 歳）の被葬者 1 体が納められていた。骨が華奢で脆いことから性別に関する十分な情報は得られなかった。しかしながら、本例には他には見られない興味深い特徴があった。全部で 12 点検出された手の指骨のうち、緑青色に着色した指骨が 7 点あり、特に取上番号 15 の基節骨は銅製の指輪が装着された状態で出土した点である。指輪の出土例は知られていても、本例のように骨に指輪が装着状態で検出される例は珍しい。納骨がどのように行われたのか興味深いところである。そこで、本厨子内で検出された指骨について、少し詳しく記述しておきたい。

(1) 指骨の鑑定と着色の由来

まず、残存する指骨の鑑定であるが、それぞれにかたちが異なる中手骨の鑑定は容易である。第 1 指（親指）も他とは大きさもかたちも違うので分かりやすい。しか



第 154 図　普天間下原古墓群被葬者の構成

第 70 表　普天間下原古墓群被葬者の推定最小個体数

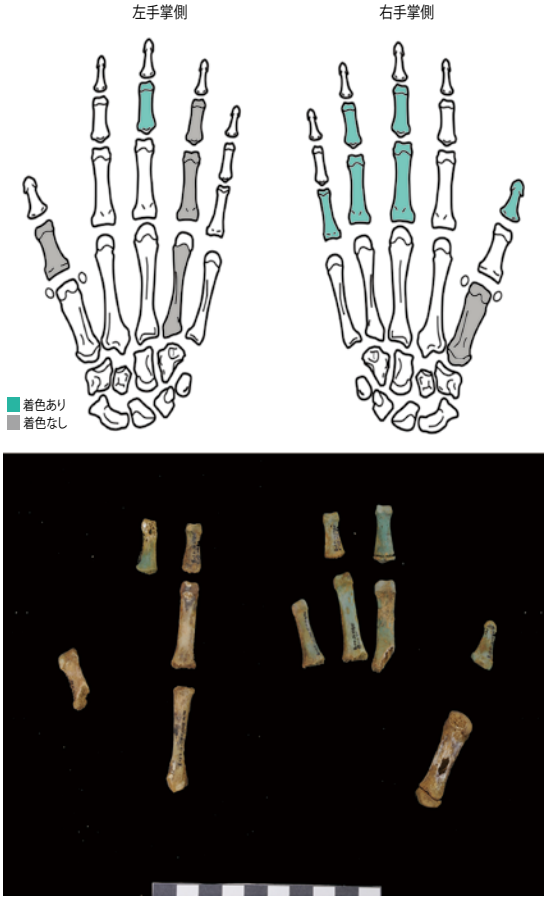
墓番号	出土場所	層など	成人				未成人					計	備考
			男性	女性	性別不明成人	成人計	若年	小児	幼児	乳児	未成人計		
1号墓	墓室内	1 層		1		1						1	
5号墓	墓域外	1 層	1			1						1	
7号墓	庭	表採	1			1						1	
11号墓	墓室内	1 層	1	1	1	3				1	1	4	
	庭	1 層											骨片のみで詳細不明
19号墓	庭	1 層		1		1						1	
21号墓	庭	1 層	1	1		2						2	他に動物骨
26号墓		1 層			1	1						1	
27号墓	墓室内	厨子1					1				1	1	左手に指輪装着
	墓室内	厨子2	1	1		2				1	1	3	
	墓室内	厨子3	1	1		2				1	1	3	
	墓室内	厨子4						1		1	2	2	
31号墓	壷内、室内				1	1						1	
32号墓	壷内、室内		1	1		2			1		1	3	
34号墓	石川原地区				1	1						1	歯1本のみで詳細不明 他に動物骨あり
推定個体数			7	7	4	18	1	1	1	4	7	25	

し、他の指の基節骨、中節骨、末節骨となると、一見しただけでは識別が困難であり、さらに詳細な観察と専門的知識が必要となる。今回は、京都大学の佐々木智彦博士のご協力により、ほぼ全指骨の鑑定をすることが出来た。

鑑定の結果を第 155 図に示す。青色の指骨は着色のあるもの、灰色の指骨は着色が見られないものである。着色のある指骨は明らかに右手に集中している。指輪は右手第 3 指（中指）に装着されていたようである。指骨全部の出土状況を見てみると、確実に装着された状態ではないが、着色のある指骨のすぐ近くからは他の指輪が出土している（第 156 図）。確実なところは分からないが、右手第 3 指（中指）の他に第 4 指（薬指）、第 5 指（小指）にも指輪が装着されていた可能性はあるのではないだろうか。左手で唯一着色のある第 3 中節骨はどうだろう。実は、指輪が装着された右手第 3 基節骨に接して出土しており、着色は右手の指輪に由来すると考えて良さそうである。つまり、左手には指輪は無かったと考えられる。

（2）納骨時の状況

次に納骨時の状況を類推することは可能だろうか。第 156 図の指骨の分布をみると、指輪の嵌まった基節骨などは上部で検出されているが、多くは底部から出土している。指骨は細かいため、上部に置かれたものが何らかの衝撃によって落下したものと考えられる。一般的に、厨子内の骨の配置では、周りに長管骨を置き、中央に椎骨や細かい手足の骨、最上部に頭蓋骨が置かれることが多い。本例は指輪の付いた手の骨を特別丁寧に他の骨の上に安置したように見える。



第 155 図　27 号墓厨子 1 内出土の指骨

６．まとめ

平成 29 年度～ 30 年度に実施された、沖縄県立埋蔵文化財センターによる普天間下原古墓群の発掘調査において出土した人骨の調査結果は、以下のようにまとめられる。

１）被葬者数は全体で 25 人（男性 7 人、女性 7 人、性別不明 4 人、若年 1 人、小児 1 人、幼児 1 人、乳児 4 人）と推定された。

２）被葬者の構成では、性差はなく、未成人が 28％含まれるなど、同時代の古墓被葬者の構成と大差はないようである。

３）厨子ごとの被葬者数は、1 体のみが 3 基（成人 2 基，未成人 1 基（若年 (指輪着装)）、複数体が 6 基（男女 2 体が 1 、男女 2 体に未成人 1 体が 3 基など）であった。複数体の構成は基本的に男女、あるいは男女に未成人が加わるというパターンのようである。

４）27 号墓厨子 1 内から銅製指輪が装着された状態の右手第 3 基節骨（中指）が検出された。手の指骨は全部で 12 点発見されたが、この内 7 点に着色が認められ、詳細な鑑定の結果、着色のある指骨は右手に集中していることが明らかになった。

５）納骨に際しては、手の骨を特別丁寧に他の骨の上に安置したように思われる。納骨時の指骨はあるいは靱帯などで連結した状態だった可能性もあるが、確実な証拠は見つからなかった。

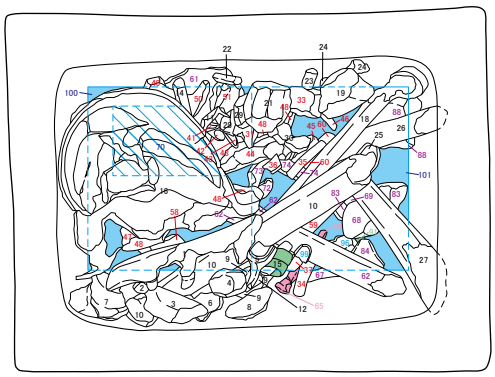
謝辞：人骨調査の機会を与えていただいた沖縄県立埋蔵文化財センター、特に現場から分析まで貴重なアドバイスをいただいた具志堅清大氏に感謝いたします。また、指骨の鑑定にご協力いただいた京都大学佐々木智彦博士に心より感謝申し上げます。

参考文献

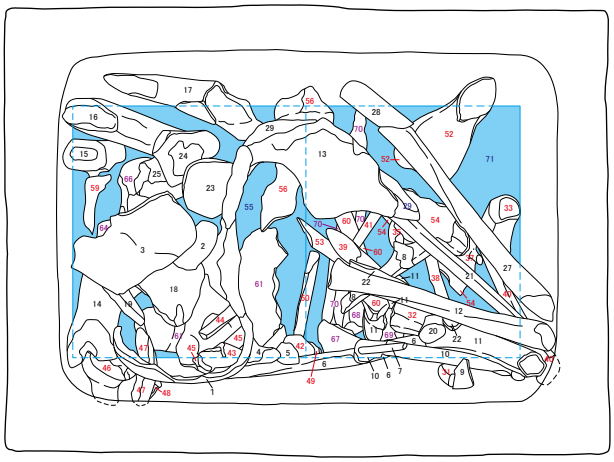
1）Knussman R. (1988): Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.

2）Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.

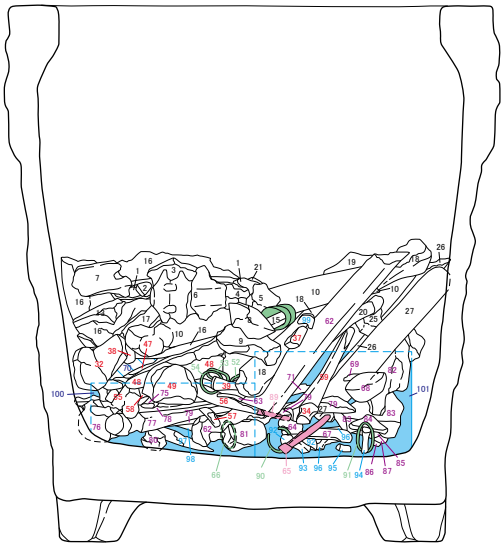
3）譜久嶺忠彦・土肥直美・石田　肇・瑞慶覧朝盛・泉水　奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子（2001）　ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨.「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集，沖縄県立埋蔵文化財センター，pp.345-385.



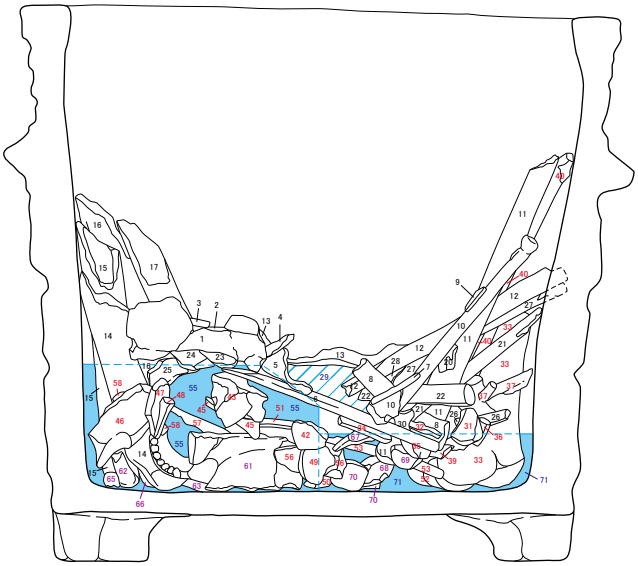
厨子甕１　平面



厨子甕２　平面



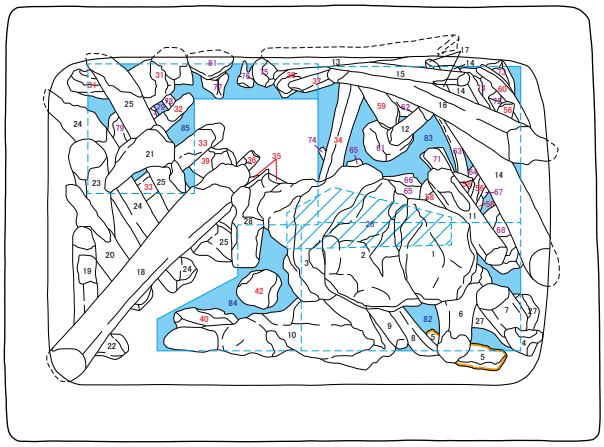
厨子甕１　断面



厨子甕２　断面

厨子甕３　断面

※人骨取上げ図は、遺物図化業務委託により作成



厨子甕３　平面

銅製品

鉄製品

・：人骨を含む土壌。

0　10cm
(S=1/6)

第 156 図　27 号墓厨子甕１～３　人骨取り上げ図

第 71 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 1

年度	墓番号	出土場所	層など	取上No.	人骨	備考
H29	1号墓	庭	1層			動物骨
H29	1号墓	墓室内	1層		頭骨のみ（左右頭頂骨、前頭骨、後頭骨片、左右上顎骨、蝶形骨片、歯（左上顎3,4,5,6茶色の変色あり、エナメル質減形成あり）、頭頂部に径１*２cm溶融状ピットあり、梅毒か？）。	20歳代くらいの女性１体 動物骨あり
H29	5号墓	墓域外	1層		左寛骨（♂）	
H29	7号墓	庭	表採		左橈骨（♂）	
H30	11号墓	墓室内	1層		成人：下顎骨左（//○○○×○×）、遊離歯（上顎右1,3,7、下顎左5（齲歯））、上腕骨右2（♂♀）左1（♀）、鎖骨右♂左♀、橈骨右2（♂♀）左１(♂)、尺骨左右(♂)、腓骨右(♀)左(♂（骨膜炎）)、膝蓋骨左（♂♀）右(♂)、距骨右２（♂♀）左3（♂♀不明）、踵骨右1（♂？）左２（♂、不明）、寛骨片（♀）、手足指骨多数 乳児：上腕骨左右、橈骨左、腸骨右、大腿骨左右、脛骨左、肋骨右１	成人男性1体 成人女性１体 性別不明成人1体 乳児１体
H30	11号墓	墓室内	1層		脛骨左♀、橈骨右♀、胸椎１、肩甲骨片1	成人女性１体が含まれるが、上欄墓室内のものとペアと思われる人骨も含まれるため、別にカウントする必要はないと考える
H30	11号墓	庭	1層		骨片数点のみ	詳細不明
H29	19号墓	庭	1層		左大腿骨（♀）	
H30	21号墓	庭	１層		頭骨片、右大腿骨、左大腿骨片、右脛骨（♀）、右踵骨片、距骨片、右舟状骨（足）、椎骨片、肋骨片、左距骨片（♂）、左橈骨（♀）、左鎖骨（♀）、第1中足骨（♂）、第3中足骨、第1中手骨左右、第5中手骨左右、右第2第3中手骨、中節骨、骨片	成人男性1体 成人女性1体 他に動物骨
H29	26号墓		1層		右手第1基節骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	1	左下顎骨片、遊離歯（下顎右3、下顎左3,4,5,7、咬耗ほとんどない）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	2	右下顎7（①と同一個体か？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	3	上顎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	4	左上顎6,7（①②と同一個体？）、上顎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	5	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	6	仙骨片（未成人）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	7	頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	8	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	9	骨片、椎骨？	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	10	左大腿骨（未成人、62とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	11	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	12	手中節骨（左第3）	緑青付着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	13	下顎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	14	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	15	手基節骨（右第3）	緑青、指輪装着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	16	頭骨　保存不良	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	17	下顎骨片（右）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	18	左上腕骨（細い、♀？又は未成人）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	19	椎体（骨端外れ）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	20	中足骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	21	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	22	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	23	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	24	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	25	左足舟状骨片（小さい）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	26	右脛骨（♀？表面剥離）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	27	左脛骨（♀？表面剥離）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	28	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	29	胸椎体（小さい）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	30	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	31	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	32	大腿骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	33	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	34	基節骨（右第4、近位骨端外れ）	緑青付着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	35	肋骨（細い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	36	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	37	肋骨（太い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	38	頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	39	手中節骨（右第3、近位骨端外れ）	緑青付着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	40	椎体片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	41	骨細片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	42	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	43	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	44	足根骨？（距骨？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	45	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	46	骨小片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	47	左肩甲骨片（小さい）、肋骨（太い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	48	寛骨片右？、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	49	椎体片（脆い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	50	胸椎体（小さい）	

第 72 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 2

年度	墓番号	出土場所	層など	取上No.	人骨	備考
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	51	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	52	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	53	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	54	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	55	胸椎2個	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	56	肋骨（太い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	57	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	58	寛骨片右？、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	59	左尺骨（小さい）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	60	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	61	左寛骨（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	62	右大腿骨（細い、骨頭端外れ、未成人、⑩とペア？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	63	肋骨（細い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	64	手基節骨（左第1）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	65	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	66	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	67	手基節骨（左第4、近位骨端外れ）	薄く緑青あり
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	68	大腿骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	69	手指骨片（骨端外れ）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	70	右橈骨片（劣化）、骨片、下顎歯右6or7	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	71	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	72	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	73	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	74	肋骨（太い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	75	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	76	胸椎（小さい、若い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	77	右橈骨片（劣化）、骨片、下顎歯右6or7	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	78	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	79	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	80	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	81	椎骨（骨端外れ）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	82	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	83	左大腿骨遠位端（外れ）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	84	右膝蓋骨（小さい、85とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	85	左膝蓋骨（小さい、84とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	86	手中節骨（左第4、小さい、骨端外れ）	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	87	右第1中手骨（骨端外れ）	95骨端が接合
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	88	中足骨？	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	89	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	90	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	91	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	92	右手中節骨（4、近位骨端外れ、未成人）	緑青付着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	93	左第4中手骨（骨端外れ）	緑青無し
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	94	右第5手中節骨（近位骨端外れ）	緑青付着
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	95	外れた指骨端	87に接合
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	96	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	97	橈骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	98	骨片、肋骨？	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	99	外れた指骨端	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	100	椎骨片、肋骨片（大小）、手中節骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	101	歯（右上顎8、右上顎5？、右下顎7、左下顎8）、第5右中足骨？、足根骨、第1基節骨、右手第1末節骨（緑青あり）	末節骨（緑青あり）
H30	27号墓	墓室内	厨子１内	合計	若年（女性？）1体	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	1	側頭骨片、乳児左大腿骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	2	頭骨片1片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	3	頭骨片2片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	4	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	5	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	6	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	7	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	8	四肢骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	9	乳児頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	10	右橈骨（保存不良）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	11	左脛骨（表面剥離あり、♂？？）、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	12	右上腕骨（表面剥離、♂？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	13	頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	14	右脛骨（表面剥離、♂？、11とペア?）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	15	大腿骨片（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	16	右大腿骨近位片（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	17	脛骨片（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	18	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	19	頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	20	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	21	橈骨片（左？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	22	骨片（前腕？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	23	寛骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	24	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	25	骨片	

第 73 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧 3

年度	墓番号	出土場所	層など	取上No.	人骨	備考
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	26	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	27	左上腕骨（表面剥離あり、細い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	28	四肢骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	29	大腿骨片？、上顎右第2or3大臼歯、乳児：頭骨片、肋骨片、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	30	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	31	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	32	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	33	大腿骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	34	手基節骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	35	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	36	無し	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	37	寛骨片、乳児骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	38	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	39	骨片（前腕？）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	40	腓骨（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	41	乳児左上腕骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	42	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	43	胸椎片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	44	乳児右上腕骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	45	肋骨or鎖骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	46	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	47	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	48	左第4中手骨？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	49	足根骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	50	右橈骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	51	乳児右橈骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	52	右大腿骨遠位部	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	53	橈骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	54	骨片（胸椎片など）、乳児：頭骨片、肋骨片など	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	55	骨片（椎骨片、頭骨片）、乳児左側頭骨 上顎右第2or3大臼歯、下顎右犬歯、下顎左側切歯	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	56	寛骨片、下顎左第1小臼歯、乳児：頭骨片、肋骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	57	上腕骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	58	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	59	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	60	左橈骨♂？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	61	左寛骨♀、胸椎片、肩甲骨片、下顎骨（熟年）、下顎左犬歯、乳児：左脛骨、椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	62	左足第1基節骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	63	大腿骨頭片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	64	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	65	左第5中手骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	66	左大腿骨遠位端（劣化）	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	67	乳児左腸骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	68	足根骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	69	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	70	左尺骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	71	骨片（胸椎片、乳児肋骨片など）、下顎左第2小臼歯、歯片	
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	他に取上番号無し骨片あり 右大腿骨片、右脛骨片♀？、鎖骨片、上顎右犬歯、乳児：頭骨片、右側頭骨、肋骨片、乳児：肋骨片、鎖骨片、腓骨片、 椎骨片など		
H30	27号墓	墓室内	厨子２内	合計　成人男性1体、成人女性1体、乳児1体		
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	1	後頭骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	2	頭骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	3	左寛骨	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	4	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	5	石	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	6	右大腿骨♀？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	7	左大腿骨♀？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	8	右橈骨♂？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	9	左橈骨♀？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	10	右寛骨♀	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	11	左上腕骨♀（13とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	12	腓骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	13	右上案骨♀（11とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	14	左脛骨♀？（16とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	15	左腓骨♀	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	16	右脛骨♀？（14とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	17	左尺骨♀？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	18	左大腿骨♂？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	19	左上腕骨♂（20とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	20	右上腕骨♂（19とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	21	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	22	左上腕骨遠位端	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	23	左脛骨♂（24とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	24	右脛骨♂（23とペア）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	25	右大腿骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	26	鎖骨片、肋骨片、下顎右側切歯（う歯）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	27	大腿骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	28	寛骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	29	右距骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	30	右腓骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	31	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	32	四肢骨片	

第 74 表　普天間下原古墓群出土人骨一覧４

年度	墓番号	出土場所	層など	取上No.	人骨	備考
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	33	四肢骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	34	橈骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	35	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	36	上顎右第2大臼歯（咬耗弱い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	37	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	38	下顎骨片、下顎左第1大臼歯	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	39	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	40	足根骨？、踵骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	41	上顎左犬歯（咬耗弱い）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	42	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	43	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	44	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	45	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	46	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	47	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	48	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	49	下顎右第2小臼歯	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	50	下顎右側切歯	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	51	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	52	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	53	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	54	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	55	肋骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	56	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	57	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	58	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	59	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	60	肋骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	61	右膝蓋骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	62	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	63	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	64	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	65	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	66	下顎骨片、上顎左第2小臼歯	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	67	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	68	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	69	乳児：腸骨片？	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	70	右肩甲骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	71	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	72	胸椎片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	73	左膝蓋骨♂	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	74	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	75	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	76	上顎左第1大臼歯（咬耗弱い、サイズ大）	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	77	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	78	基節骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	79	椎骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	80	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	81	骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	82	上顎右第1小臼歯、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	83	左鎖骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	84	上顎右側切歯、上顎右犬歯、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	85	下顎右第1小臼歯、骨片	
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	他に取上番号なしの骨片、歯片あり		
H30	27号墓	墓室内	厨子３内	合計	成人男性1体、成人女性1体、乳児1体？	
H30	27号墓	墓室内	厨子４内		頭骨片、四肢骨片、大腿骨片（左下端部、骨端外れ）腓骨下端部（骨端外れ）、指骨、左有頭骨、遊離歯（上顎右：6，5，4，3，1、上顎左：1，2，3，6，7、下顎右：6，5，4，3、下顎左：1，3，4，5，6）	小児1体分（12～15歳）
H30	31号墓	墓室内	厨子内		頭骨片、寛骨片、右大腿骨、右脛骨、左橈骨、中手骨、中足骨、骨片	成人1体？
H30	32号墓				骨片１のみ	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	1	骨片１のみ	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	3	頭骨片（保存不良成人）	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	4	椎骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	5	後頭骨片（頑丈）、右側頭骨♀？、下顎骨片♂？、大腿骨片、右橈骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	6	大腿骨片？	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	7	肋骨片、四肢s骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	8	腰椎	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	9	頸椎、胸椎、腰椎片、腓骨片、右踵骨片、右坐骨片（幼児）、左坐骨片、手基節骨（着色あり）	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	10	環椎片、肋骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	11	寛骨片（右？）	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	12	胸椎（2個連結）、鎖骨片、肋骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	13	左寛骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	14	右腓骨片♂	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	15	右上腕骨♂、骨片	中央径（20、15，61）
H30	32号墓	墓室内	厨子内	16	左上腕骨近位半♂？、頸椎、骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	17	椎骨3個	腰椎圧迫骨折あり
H30	32号墓	墓室内	厨子内	18	肋骨片	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	19	右大腿骨（21と接合）、肋骨片	中央径（23，24，77）、上部径（29，21）
H30	32号墓	墓室内	厨子内	20	左大腿骨	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	20	左大腿骨♂？	頭部径（41，41，129）上部径（30，22）
H30	32号墓	墓室内	厨子内	21	右大腿骨近位片（19と接合）、左脛骨近位片	頭部径（41，42，132）
H30	32号墓	墓室内	厨子内	22	椎骨、右尺骨♀、寛骨片、肋骨、左距骨♂？、右距骨♀、第3中手骨近位部、手基節骨左3，4？、骨片	
H30	32号墓				下顎左犬歯（熟年）、上顎左6or7(壮年？)	
H30	32号墓	墓室内	厨子内	合計	成人男性1体、成人女性1体、幼児1体	
H30	34号墓	5区	１層		上顎右第１小臼歯のみ	成人1体？

第６章　総括

本章では、普天間石川原第一遺跡・普天間グスクンニー遺跡、普天間下原古墓群の調査成果について整理し、本報告の総括とする。

第１節　普天間石川原第一遺跡の調査成果

１　貝塚時代の旧地形について

普天間石川原第一遺跡では、調査区をまたがって広がる一連の埋没した谷地形（埋没谷１・埋没谷２）を確認することができた。埋没谷にはⅡ～Ⅳ層が堆積し、調査では貝塚時代に相当するⅣ層まで掘削し、Ⅴ層の地山面による埋没谷の底を検出した（第 157 図）。谷の上位面と考えられる多くの範囲では、Ⅰ層直下で岩盤が検出され、遺構も殆ど残っていない状況であった。

埋没谷１　５区北側から２区、１区と北西方向に下り、北西側の古墓群が所在する一帯に至り、最終的には北側の普天間川が流れる谷地形に合流する。

埋没谷１は谷筋が合流することによって大きな谷地形となっている。５区東壁や南側の谷筋は残存幅約 10m 前後で、５区中央の合流地点では谷幅は広がり残存幅 20m 前後となる。５区東壁周辺はⅠ層直下でⅣ層や地山・岩盤が検出されたため、谷底に近い部分が残存していたと考えられる。試掘結果でも５区より東側一帯は撹乱が及ぶとされている。本来は緩やかな谷地形が続いていたと考えられる。

５区中央の谷筋合流地点は比較的緩やかな傾斜であるが北西側で傾斜が急となり段状に落ち込む場所がある。２区も急な傾斜で谷幅は狭く、１区は古墓が所在したため、谷全体を検出することは出来なかったが、２区よりはやや広い谷幅だったとみられる。谷幅や斜面の角度が変化しながら緩やかに落ち込む地形であった。

埋没谷１より東側の一帯は地形的に標高が高く、海軍病院および関連施設が所在する。海軍病院建設に伴う普天間下原第二遺跡の発掘調査では、埋没谷１の東側にあたる宜野湾市教育委員会調査区の２区北側と７区で谷地形が確認されており（宜野湾市教委 2016）、谷地形はその付近から続いていた可能性が高い。

埋没谷２　６区から５区南側、４区へ西側に蛇行しながら下る。埋没谷２は埋没谷１と比較すると谷幅が狭く、規模は小さめである。６区では東壁から北側に蛇行して西壁に至る谷地形の地山が検出され、５区南側と４区では岩盤が露頭する谷地となる。

６区の東側は、普天間下原第二遺跡の調査（宜野湾市教委 2016）の２区南側に隣接し、ここからも谷地形が確認されていることから、埋没谷２は普天間下原第二遺跡の範囲にも続くと考えられる。

旧地形の推定　調査で検出された埋没谷１・２について概観してみたが、埋没谷１は埋没谷２より規模が大きく、より谷深い地形であったことが窺える。谷部の上位はグスク時代以降の土地改変行為が及ぶ。

調査区以外の範囲については、宜野湾市教委による普天間飛行場内及びキャンプ瑞慶覧海軍病院地区の旧地形推定復元（宜野湾市教委 2009・2017）を参考にして、試掘調査成果からの旧地形推定を試みる。１区の南側から３区の周辺にかけては古墓が所在するとともに、一部戦後の住宅建設工事による地形改変が及んでいる。試掘調査では表土層直下で岩盤が確認されている箇所が多いものの、地山のマージ下で確認された削平されていない岩盤の標高から推定すると、旧地形は北側に傾斜する斜面地であったとみられる。また、５区の南側から７区周辺については、岩盤の標高から推定すると、現況と大きく変わらない平坦な地形であったとみられる。

上記を踏まえ、地山と岩盤の検出面から貝塚時代の旧地形を大凡であるが推定したものが第 158 図である。貝塚時代の地形は、岩盤がいたるところに露頭し、その間を縫うよう谷筋が蛇行し、平坦な面がほとんど無い起伏に富んだ地形であった。貝塚時代は谷地形で起伏に富む地形であり、住居をかまえて定住するには適さない場所であったようである。

貝塚時代の遺物　普天間石川原第一遺跡では貝塚時代前期の遺構は確認されていないが、埋没谷のⅣ層からは、貝塚時代前期の土器や石器片が出土している。前期土器は古手のものとして籠目文系・点刻線文系土器が若干出土するが、主体は室川式・宇佐浜式の肥厚口縁系土器である（第 161 図土器型式出土割合）。貝塚前期土器全体の推定個体数は 452 個体であり、うち肥厚口縁系土器の推定個体数は 372 個体を数え、本遺跡の主体をなす土器群といえる。貝塚時代の土器平面分布状況（第 159 図）からは、前期土器は埋没谷１に集中して分布する。後期土器は前期土器と比べると少ないものの、埋没谷２にも分布する傾向にある。埋没谷から出土した遺物の殆どが小破片であるが、５区からほぼ一個体の前期土器が潰れた形で１点出土している（第 56 頁第 59 図）。

埋没谷１は規模が大きく、層の堆積も厚く、遺物の出土も多い。２区および５区の埋没谷１のⅣ–1・2 層は貝塚後期後半～グスク時代初期相当、Ⅳ–3・4 層は貝塚時代前期～後期相当の堆積と見られ年代測定値とも齟齬はない。谷底部は貝塚時代前期相当の堆積とみて良い。

埋没谷周辺の遺跡　埋没谷の周辺では貝塚時代前期の遺跡が確認されている。普天間グスクンニー遺跡の竪穴住居跡（市調査６区 SI.1）、普天間下原第二遺跡の土坑（市調査８区 SK65）、溝状落ち込み遺構（市調査 11 区 SD48）からは肥厚口縁系土器が主体的に出土してい

る（宜野湾市教委 2016）。普天間下原第二遺跡の東隣、普天間フィールー丘陵の南側には普天間後原第二遺跡が所在する。遺跡西側の竪穴住居跡（県教委調査Ⅳ地区 SK54）からは点刻線文系土器が出土している（沖縄県埋文 2015b）。遺跡東側でも竪穴住居跡（市調査 24 区土坑集中部、30 区 SI07・SK165）が確認され、ここでは前期末の無文尖底系土器が主体的に出土する。住居跡の周辺では落とし穴の可能性がある大型土坑が直線状や弧状に分布している（宜野湾市教委 2017）。

このように、埋没谷のすぐ東側一帯は貝塚時代前期の住居が点在する居住域であったことがわかる。当該地は台地上で居住に適しており、旧地形は現地形と大差ないものの小規模な谷地が存在したと推定されている（宜野湾市教委 2017）。普天間石川原第一遺跡は、普天間下原第二遺跡や普天間後原第二遺跡と時期的にほぼ同時期の遺跡であり、特に肥厚口縁系土器が主体となる普天間下原第二遺跡とは隣接している。

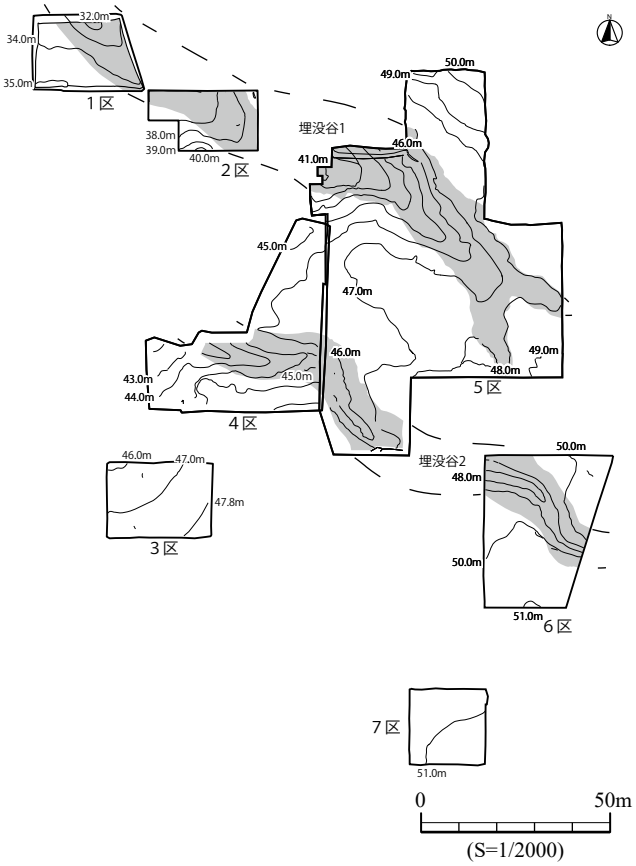
オキナワジイ　グスク時代の溝状遺構 SD2001 からは、多数の栽培植物の炭化種実とともに、シイ属オキナワジイとみられる炭化種実が確認されている。年代測定の結果、2920 ± 20BP で貝塚時代前期の年代が得られている（第 36 表 No.12）。SD2001 からは貝塚時代前期の遺物も出土していることから、耕作により貝塚時代前期のオキナワジイが巻き上げられたと考えられる。

貝塚時代の植物質食糧とされるオキナワジイは、現在では沖縄本島北部の非石灰岩地帯に分布が限られているが、伊礼原遺跡の調査では多数のシイ属の種実や花粉遺体が出土し、貝塚時代はシイ属を伴った照葉樹林が現在よりも広がっていたとされる（辻ほか 2007）。宜野湾市では喜友名東原ヌバタキ遺跡（宜野湾市教委 1991）の出土例のほか、本遺跡に隣接する普天間下原第二遺跡 SK67 や普天間後原第二遺跡 24 区土坑集中部からも出土しており、沖縄島の植生変遷を検討する上で重要な資料とされた（宜野湾市教委 2016・2017）。

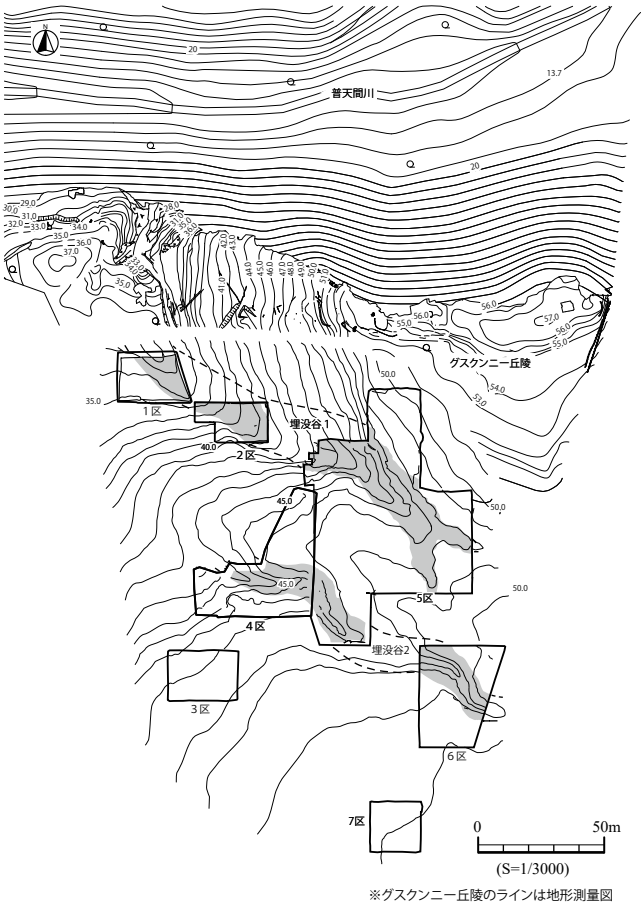
今回出土したオキナワジイも、貝塚時代前期の食糧として持ち込まれたと考えられる。

埋没谷と貝塚時代人　今回の調査では、貝塚時代の遺構を確認することはできなかったが、埋没谷のほぼ全域から貝塚時代の遺物が多く出土するとともに、居住域と考えられる遺跡に隣接することからも、この埋没谷は貝塚前期人の狩猟採集活動の範囲内にあったと考えられる。殆どの遺物が細片化しているため不要なモノを廃棄した場所であった可能性もある。

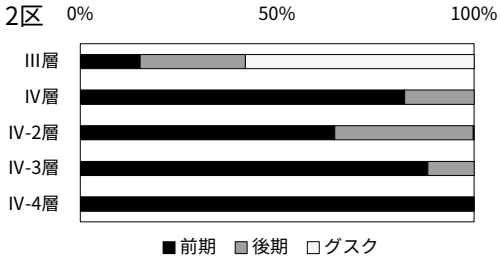
なお、本遺跡の北側には普天間川が流れており、下位には普天間シチャヌカー古湧泉が所在する。河口へのアクセスや水資源の確保など、狩猟採集活動における資源獲得のためのルートでもあったのかもしれない。



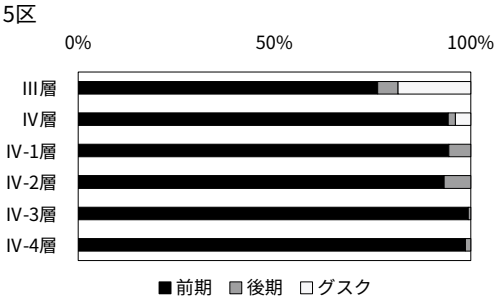
第 157 図　普天間石川原遺跡の埋没谷地形



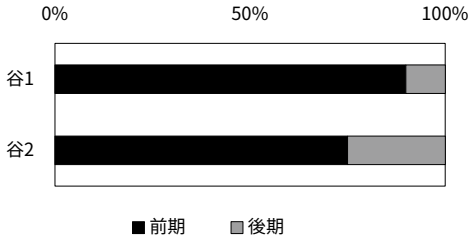
第 158 図　貝塚時代前期の地形復元



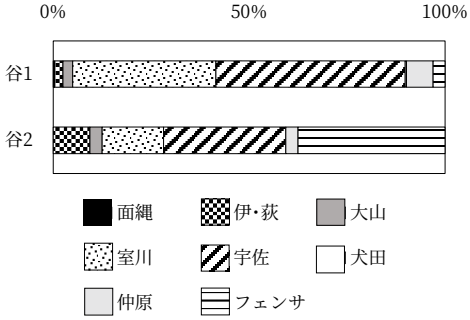
層位別土器出土割合(2区)



層位別土器出土割合(5区)

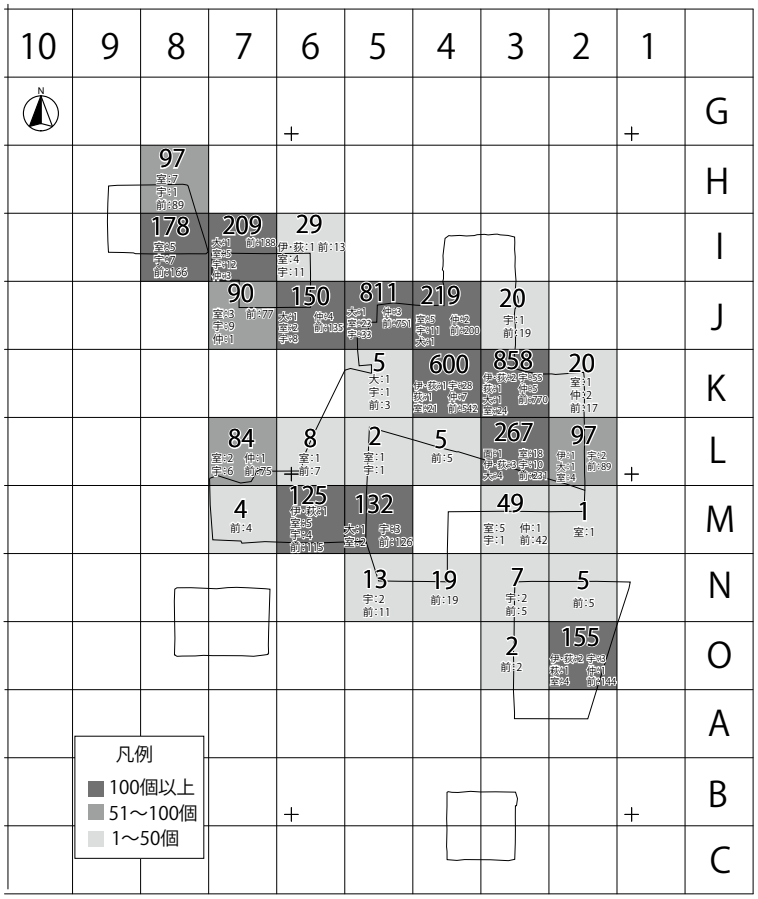


谷部別土器出土割合

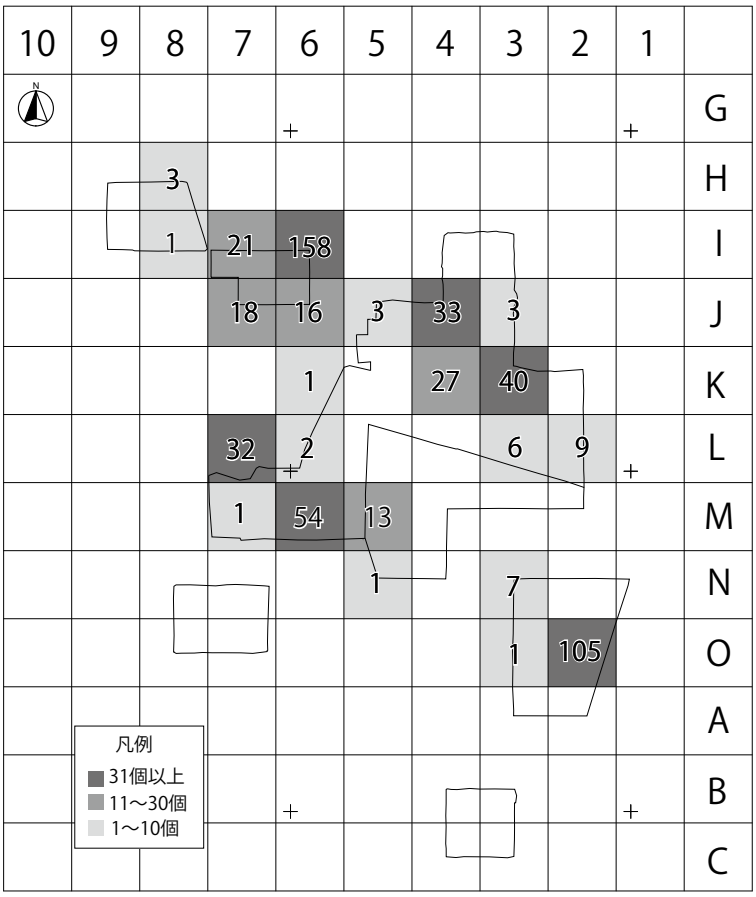


谷部別土器型式出土割合

第 161 図　埋没谷の貝塚時代土器出土割合



第 159 図　貝塚時代前期土器の平面分布図



第 160 図　貝塚時代後期土器の平面分布図

２　グスク時代の耕作跡について

普天間石川原第一遺跡の埋没谷１・２ではグスク時代の植栽痕と考えられる列状ピット群をはじめ、溝状遺構、石列、炉跡などの遺構が確認された。これらは、グスク時代の谷地形を利用した耕作跡とみられる。ここでは、検出された遺構や出土遺物などから、グスク時代の耕作の様相について復元してみたい。

遺構の特徴　列状ピット群は４箇所で確認されている。列状ピット群１は１区埋没谷１、列状ピット群２と３は５区の埋没谷１、列状ピット群４は５区埋没谷２で、傾斜が比較的緩やかな場所で検出されている。

溝状遺構は埋没谷１と２で確認され、その多くは谷筋に沿って構築されており、地形を区画するだけでなく入排水としての機能も兼ねていたとみられる。

石列は埋没谷１で確認されている。５区の石列（SS5002・SS5003）谷地形を段状に区切るとともに、平坦面を区画している。また本来畦のような構造であった可能性がある。２区の石列（SS2001）は、溝状遺構（SD2001）に沿って構築されており、谷部上位から流入する水を堰き止める役割もあった可能性がある。

炉跡は、１区と５区で確認されている。いずれも壁面は熱により赤色化し、底面に炭層を伴う同様の形態・構造である。

階段状の耕作地　５区北側埋没谷１のⅣ層上面では、谷地形を段状に区画する石列（SS5002・SS5003）が検出され、その周辺は平坦面となる。土留と考えられる石列は、畦としての役割もあったと思われる。この石列付近の平坦面では、列状ピット群２や炉跡（SL5004）が検出されている。谷の両端は、岩盤が露頭する斜面となり、地山のマージ部分で溝状遺構（SD5008・SD5009）が谷地形に沿う形で検出されている。水が流入しやすい谷地形であることから、溝状遺構（SD5008・SD5009）は谷地を区画するだけでなく、入排水を目的とした遺構の可能性も考えられる。

埋没谷１は、５区から２区・１区にかけて段状に落ち込む地形となる。５区北西側の谷底平坦部で列状ピット群３が確認されている。２区では溝状遺構（SD2001・2003）により斜面地が区画され、畦の可能性がある石列 SS2001 が検出されている。１区では谷地形に沿った溝状遺構（SD1007・1008）とともに、石列（SS1001・1002）が確認されている。SS1001・1002 は残りが悪く判然としないが水平に配石されていることから、SS5002・SS5003 のように谷地形を段状に区画していた可能性がある。

埋没谷２Ⅳ層上面でも、６区では蛇行する埋没谷に沿う溝状遺構（SD6011）が確認され、５区南側では列状ピット群４が検出されている。４区西側で検出された溝状遺構も斜面地を区画している。

埋没谷１のⅣ層上面では、谷地形を石列や溝により区画され、平坦面が構築された階段状の耕作地であったことを確認することができた。埋没谷２では、階段状に平坦面が構築されている状況を明確に検出することはできなかったが、埋没谷１と同様に階段状の耕作地であった可能性は高いと考えられる。

畑跡の可能性　今回検出された谷地の耕作跡は、どのような穀類の生産跡であったのであろうか。沖縄本島では宜野湾市の野嵩タマタ原遺跡（宜野湾市教委 1995・2006）、浦添市の浦添原遺跡（浦添市教委 2005）、北谷町の伊礼伊森原遺跡（北谷町教委 1998）などで類例がある。野嵩タマタ原遺跡で検出された列状ピット群について「穀類種子を蒔く播種穴ないし根茎作物を植える植穴の耕作痕」とし、堀棒耕作による畑跡と考えられている（宜野湾市教委 1995）。本遺跡で検出された列状ピット群も断面鍋底状で、地山を掻き上げ撹拌された痕跡が認められる（巻末図版 19）。

一方、徳之島伊仙町川嶺辻遺跡（伊仙町教委 2010）・前当り遺跡（伊仙町教委 2018）・大セノ嶺遺跡（伊仙町教委 2021）で谷地の耕作跡が検出されている。新里亮人は、土層の特徴や区画された平坦面、水の入排水施設の存在から谷水田跡と結論づけている（新里 2020）。

普天間石川原第一遺跡も谷地となり水の集まりやすい地形である。埋没谷底面や土層観察用畦では、水の影響によりグライ化し灰色に近い箇所も見受けられたが、あくまでも部分的であった。溝状遺構の断面観察でも、ラミナのような痕跡は認められなかった。

また、炉跡が点在して検出されている。炉跡の性格については断定できないが、耕作に関連する遺構と思われる。同様の遺構が伊礼伊森原遺跡（北谷町教委 1998）でも報告されている。列状ピット群２と同じ面で検出された SL5004 の炭層からはタイワンソクズが確認され、燃焼材として用いた可能性がある。タイワンソクズは明るく開けたやや乾いた草地に生息するとされる。

列状ピット群２の SP5046 からはオオムギの炭化種子が１点のみ得られている。２区 SD2001 からは穀類のイネ籾、玄米、キビ、アワ、オオムギ、コムギの他、豆類のアズキ亜属、マメ科などの炭化種実が出土し、コムギが最も多く検出された。埋没谷１ではコムギなどが栽培されていた可能性がある。

埋没谷１・２Ⅳ層上面で検出された階段状の耕作地は、水田としての機能も想定されたが、水の影響を受けた痕跡が谷部全体に認められなかったこと、遺構埋土のフローテーション処理を実施した結果、コムギが多数とする炭化種実の同定結果を得られたことから、階段状の畑跡となる可能性が高いと考えられる。

遺物について　５区埋没谷１のⅢ層からは、青磁Ⅰ類や同安窯系青磁、グスク土器第２様式、カムィヤキＡ群など 12 世紀後半～ 13 世紀前半のものを上限に、青磁Ⅳ・Ⅴ類無文外反碗・白磁Ｃ３・Ｄ群といった 14 ～ 15 世紀初頭までの遺物が出土している。他の調査区におけるⅢ層出土遺物も同様であることから、Ⅲ層は 12 ～ 15 世紀にかけての耕作に伴う堆積と考えられる。

５区北側の列状ピット群２からはグスク時代の遺物は殆ど出土せず、貝塚時代の土器が含まれることから、下層の遺物を巻上げたものと考えられる。列状ピット群２と同じ段に位置する SS5003 からは同安窯系青磁が出土しており、列状ピット群２の年代推定の手がかりとなる。さらに東側上段の SS5002 周辺からは青磁Ⅱ・Ⅳ'・Ⅴ類、グスク土器第３様式などが出土している。谷部上位縁辺に位置する SD5009 からは、青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅴ類、白磁Ａ・Ｃ３・Ｄ群、グスク土器、カムィヤキなど 12 ～ 15 世紀にかけての遺物が出土している。

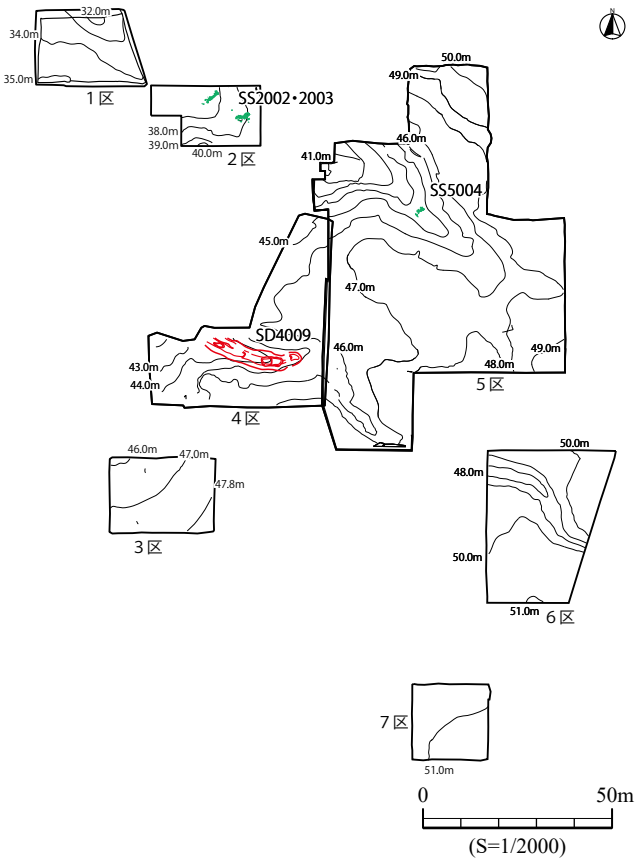
列状ピット群３の SP5068 からはグスク土器第３様式が出土し、SL5005 からもグスク土器第３様式甕が出土し 660 ± 20BP（13 世紀後半～ 14 世紀後半）の年代が得られている。

２区の溝状遺構 SD2001 からは青磁Ⅰ～Ⅴ類、磁竈窯系青磁、白磁Ｃ・Ｄ群、グスク土器第２様式、カムィヤキ 12 ～ 15 世紀にかけての遺物が出土している。

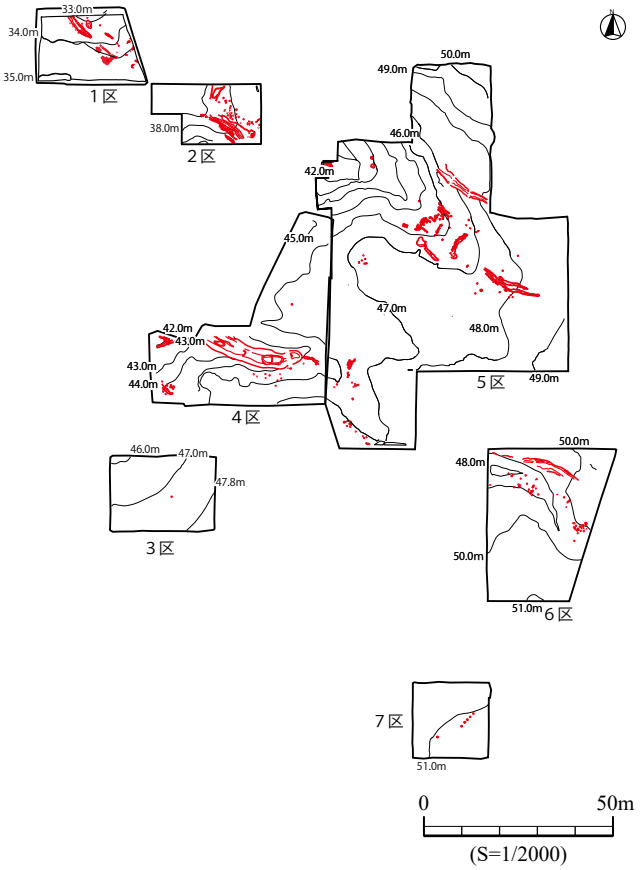
開拓期の遺構　埋没谷１・２の谷底Ⅳ層では貝塚時代後期後半のくびれ平底土器が出土するとともに、貝塚時代後期後半の年代を示す集石遺構（SS2002・2003・5004）や大溝（SD4009）が検出されており、貝塚時代後期後半からグスク時代初期にかけて谷地を開拓して土地利用を行っていたと考えられる（第 162 図）。集石遺構（SS2002・2003・5004）は、谷地を区画する畦のような構造であったと思われる。SD4009 は谷地形を利用した大溝であり、SD4009 からは栽培植物であるイネ籾やオオムギ、コムギの炭化種実が僅かに得られている。SD4009 からは遺構の年代を示す遺物は出土していないが、SD4009 底面で検出された土坑よりくびれ平底土器が出土している。これらは貝塚時代後期後半からグスク時代初めごろにおける沖縄の農耕開始期の遺構となる可能性は高い。

耕作跡の変遷　５区埋没谷１のⅢ−１～６層の堆積過程と遺構と遺物から、耕作跡の変遷過程について検討してみたい。

５区埋没谷１のⅢ層は、層厚最大 1.5m を測るほど厚く堆積し、Ⅲ−１～６層に細分可能であり、暗褐色（10YR 3/4）のⅢ−２･４･６層と褐色（10YR 4/6）に近いⅢ−１･３･５層が互層となり、谷地形に沿って水平に堆積する。前者が耕土、後者が休耕土とも考えられている（宜野湾市



第 162 図　貝塚後期後半～グスク時代初期の遺構分布



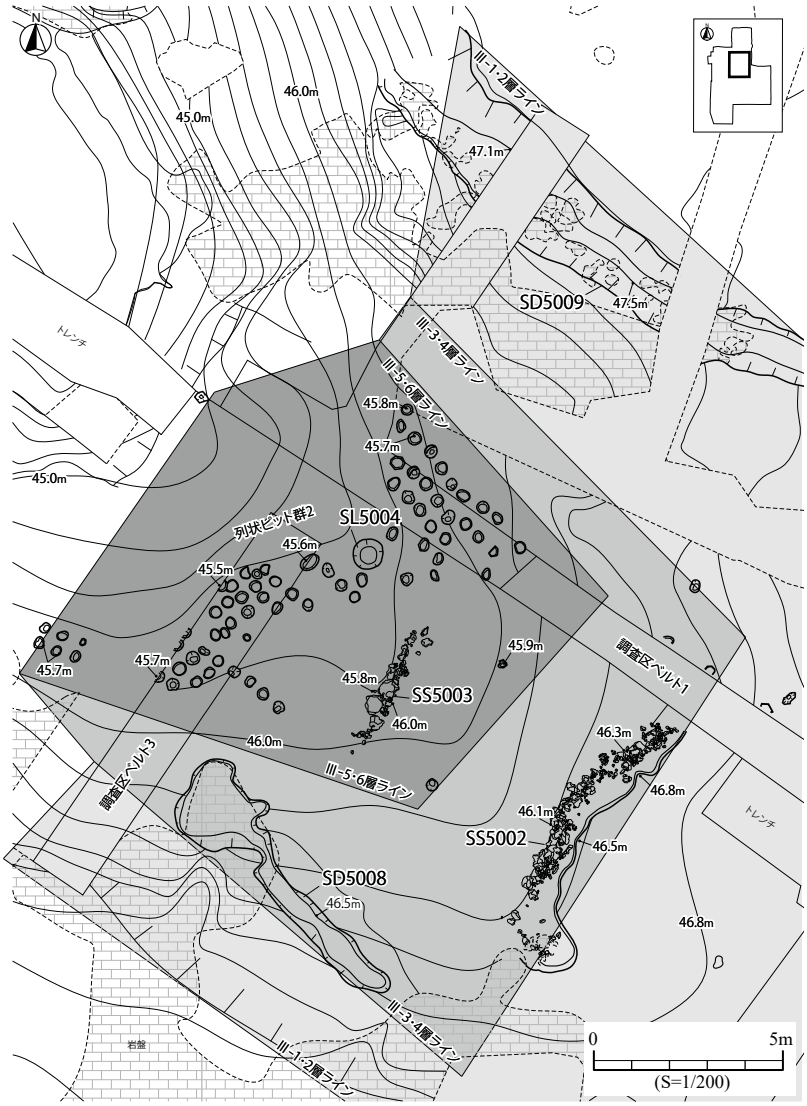
第 163 図　グスク時代の遺構分布

教委 1995)。上位になるにつれ谷部の堆積範囲は広がる。堆積過程で耕作面が拡張する傾向がこれまでに指摘されている（宜野湾市教委 1995、伊仙町教委 2010・2018、新里 2020)。

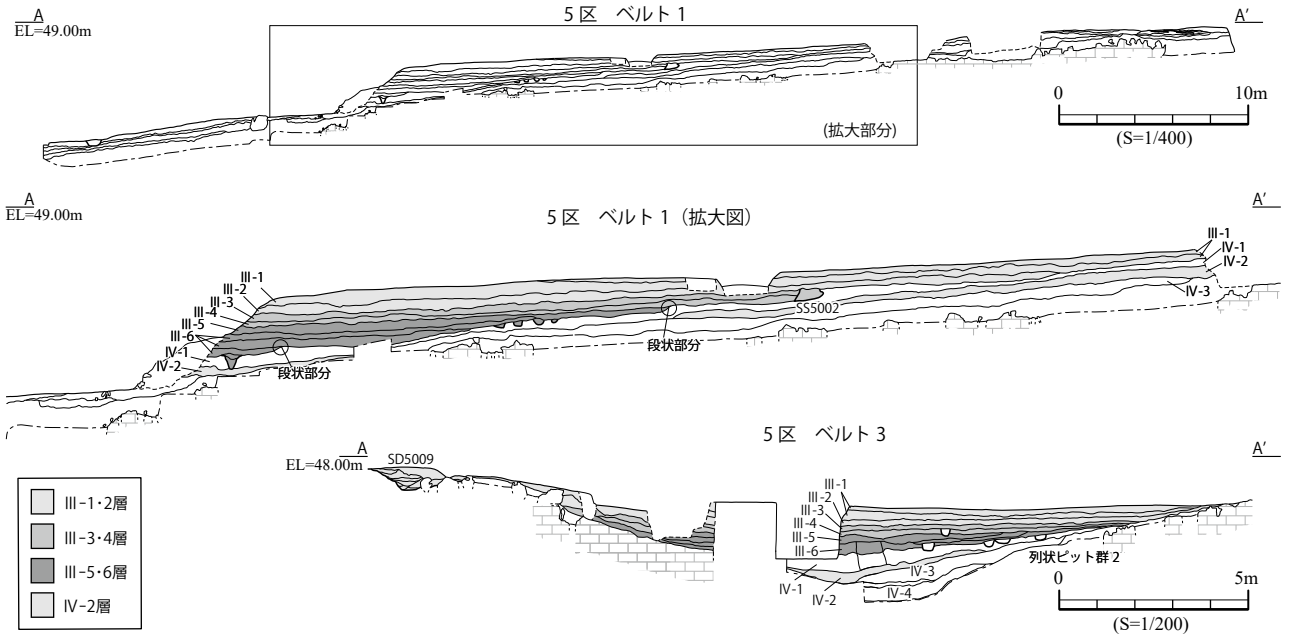
Ⅲ−１～６層のうち、暗褐色のⅢ−２・４・６層の下層面が土地利用変遷の画期を示すと考えられ、調査区ベルト１・３を基にⅢ−１～６層の堆積範囲を示したのが第 164 図である。

谷底のⅣ層上面で検出された遺構のうち、最下層のⅢ−５・６層に由来する遺構として列状ピット群２や SS5003、SL5004 がある。列状ピット群の底面は標高 45.5 ～ 46m 前後を測る。SS5003 も標高 45.8 ～ 46m で近い。SS5003 からは同安窯系青磁が出土していることから、12 ～ 13 世紀代の遺構と推察される。５区ベルト１では、Ⅲ−５層は SS5002・5003 間の段状となる部分で途切れ、Ⅲ−６層の下部も段状部分で層境となり水平に堆積している状況が確認でき、複数の段差面があったことが窺える。

Ⅲ−5・6 層及び列状ピット群２・SS5003 が埋没する過程で耕作面積である平坦面が拡張されるとともに、SS5002 により段状に区画された範囲内にⅢ−３・４層が堆積する。



Ⅲ-1～Ⅲ-6層堆積範囲復元



第 164 図　5 区埋没谷 1 の遺構と堆積

SD5008 底部の標高は 46.5m を測り、SS5002 の標高と近いことから SS5002 と SD5008 によって方形状に区画するとともに平坦面を構築していた可能性がある。Ⅲ−3・4 層に由来する遺構と考えられる。

SS5002 からは青磁Ⅱ・Ⅳ’・Ⅴ類といった 13 世紀後半から 14 ～ 15 世紀代の遺物が出土している。SS5002 は上位のⅢ−１・2 層との層境にあるため、上位の遺物が混入した可能性もある。後述するⅢ−１・2 層の年代観も踏まえると SS5002 は 14 世紀代には埋没したと考えられる。

谷部の上位縁辺にある SD5009 は、５区ベルト３の土層堆積状況からは谷部がある程度埋没し、耕作面積が最も拡大した段階で、層位的にはⅢ−１・2 層に由来する遺構と考えられる。SD5009 は、古手のものも含まれるが青磁Ⅳ・Ⅴ類無文外反碗、白磁Ｃ３・Ｄ群が出土することから 14 世紀後半～ 15 世紀初頭の遺構と考えられる。Ⅲ−１・2 層の年代観もこの頃とみられる。古手の遺物については、耕作時の攪拌により下層の遺物が巻き上げられたと想定される。

栽培植物について、コムギが多数出土した２区の SD2001 も出土遺物から SD5009 と同時期の 14 世紀後半～ 15 世紀初頭の遺構と考えられ、14 ～ 15 世紀代はコムギなどを栽培していた可能性がある。高宮広土は、大型グスクが建造される少し前に農耕の生産性が高まった可能性を指摘している（高宮 2021）。SD2001 とはフローテーション処理を実施した土量が異なるが、SD4009 や列状ピット群などグスク時代初期から 13 世紀代と考えられる遺構からは炭化種実があまり得られなかったことは、農耕の生産性とも関連があるのだろうか。栽培植物も時代とともに変化した可能性もある。

埋没谷１の遺構と堆積状況から、以下のような耕作地の変遷過程が想定される。

１期：貝塚時代後期後半～グスク時代初期

谷地が開拓される。Ⅳ−１・２層に相当する。溝状遺構や集石遺構を構築し、農耕を行っていた可能性がある。

２期：グスク時代（12 世紀後半～ 13 世紀代）

階段状の耕作地で食物栽培が行われる。５区Ⅲ−５・6 層に相当する。この時期の遺構として列状ピット群２や SS5003 がある。複数の段差面があったとみられる。

３期：グスク時代（14 ～ 15 世紀代）

耕作の過程で２期面は埋没し、溝と石列により区画され、耕作面積が拡張していく。５区Ⅲ−１～４層に相当する。この頃はコムギ栽培を行っていた可能性がある。

４期：近世以降

近世以降も戦後米軍基地として接収されるまで継続して耕作が行われる。近世～近代の耕作土Ⅱ層に相当する。

耕作地と集落　グスク時代の人々は、地形をうまく利用して排水や区画のための溝・石列を構築することによって、耕作を行っていたことがわかる。埋没谷はグスク時代の耕作地の開拓とその後継続的な耕作によって埋没していった。埋没谷だけでなく周辺を含めた範囲を耕作地として利用したとみられる。

東側の海軍病院地区では、普天間後原第二遺跡の範囲を中心に多数の掘立柱建物跡からなるグスク時代初期の集落跡が確認されている（宜野湾市教委 2017、沖縄県埋文 2017）。この集落は内陸部の開発・農耕に関係していた開拓型集落とされ（瀬戸 2018）、もし今回検出された耕作地と普天間後原第二遺跡の集落跡との関連があるとすれば、集落の形成とともに耕作地の開拓が行われた可能性がある。具体的には１期とした遺構が挙げられる。普天間後原第二遺跡でも列状ピット群や溜池の可能性がある遺構が検出されている（宜野湾市教委 2017）。普天間後原第二遺跡はグスク時代初期の集落であるが、普天間石川原第一遺跡は 14・15 世紀代までも継続的に耕作されるため（２～３期）、普天間後原第二遺跡が廃絶した後は、別の集落によって耕作された可能性がある。

普天間石川原第一遺跡より南西約１km に所在する喜友名グスクは、周辺集落の統合と再編によって登場し、内陸の開拓と生産に関与したと想定されている（瀬戸 2019）。今後、グスク時代における集落形成と耕作地開拓に伴う土地利用について検討していく必要があろう。

第 165 図　周辺のグスク時代遺跡分布図

３　近世～近代の道跡、耕作跡などについて

近世～近代は、道跡や耕作に関する遺構が検出されている。道跡と考えられる遺構は、昭和 20 年の航空写真における道の区画と合致する溝状遺構で、道跡の側溝と考えられる。側溝の間は、道の路面に対応すると想定した。昭和 20 年の航空写真と調査区の重ね図は第 168 図（197 頁）に示す。

道３　５区で検出された道跡（SF5001）は、アヒラービラと呼称され、普天間古集落から安仁屋へ至る道跡である。この道の両側は山で墓があり、舗装されていない道であったとされる（宜野湾市教委 2012）。調査では５区２地点と５区３地点において部分的に検出された。南北に側溝を伴う道跡で、道跡の幅は 3.3m、路面の幅は推定 1.4m である。普天間古集落の調査報告で「道３」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015b）。

道１　６区で検出された道跡（SD6007・SD6008）は、普天間古集落から北西方向にのびる道跡で、５区３地点で確認された道跡に合流する。南北に側溝を伴う道跡で、道跡の幅は 4.5m、路面の幅は推定 1.5m である。普天間古集落の調査報告では「道１」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015a）。

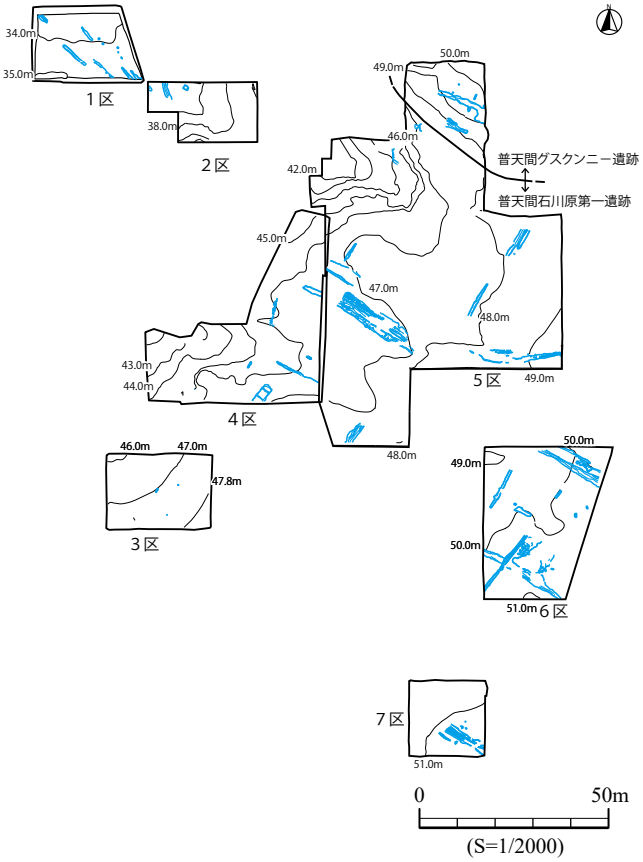
道５　７区で検出された道跡（SD7001 ～ 7003）は、北東−南西方向にのびるもので、道の区画と合致している。普天間古集落の調査報告では、「道１」から分岐する「道５」とされている道跡に対応する（沖縄県埋文 2015b）。この道跡は３区の南側を通り、古墓群南地区に至る。

耕作に伴う遺構として、溝状遺構が検出されており、その多くは昭和 20 年の航空写真における耕作地の区画と向きが合致している。耕作地に伴う区画溝と考えられ、石列を伴うものや、溝内に礫を充填しているものがみられる。耕作地を区画するとともに、排水などの機能を有していたと考えられる。

このほか、特筆すべき遺構として５区で検出された窯跡（SL5001）がある。窯跡は燃焼部と前庭部が連結する形で、燃焼部内に多量のサンゴ礫が含まれることから、漆喰製造の材料となる生石灰を生成した窯ではないかと推定される。周辺に漆喰仕上げの墓が所在するため、墓造営に関わる遺構と考えられる。墓との関連については第３節で触れたい。

遺物は、沖縄産陶器や本土産近代陶磁器を中心に、遺構や包含層から出土しており、近代のものが主体である。また、調査区内では埋没した古墓が検出されており、厨子甕など古墓に関連する遺物も出土している。

昭和 20 年の航空写真では、埋没谷が存在した付近は平坦な耕作地となっており、埋没谷は貝塚時代から近代に到る遺跡形成・土地利用の過程で埋没した。



第 166 図　近世～近代の遺構分布

第２節　普天間グスクンニー遺跡の調査成果

貝塚時代からグスク時代の遺跡とされているが、今回の調査では、普天間石川原第一遺跡と一連とみられる近世～近代の耕作関連遺構が確認された。遺物は近世～近代の陶磁器類のほか、貝塚時代の土器やグスク時代の陶磁器類も得られている。遺跡範囲にかかる古墓調査でもグスク時代から近世に相当する包含層が確認されたとともに、グスク時代の遺物が得られている。

今回の調査では、貝塚時代からグスク時代の遺構は確認することはできなかったが、未調査範囲にこれらの遺構が存在する可能性は高い。

第３節　普天間下原古墓群の調査成果

普天間下原古墓群では、36 基の古墓が確認されているが、その大半となる 29 基が記録保存調査の対象となった。厨子甕の銘書から、当該古墓群は普天間古集落の墓地であることが確認された。本節では、古墓の調査成果から普天間の墓制について復元してみたい。

１　墓の特徴について

形態と構造　普天間下原古墓群の殆どが岩盤を横穴に掘り込む掘込式（名嘉真・高宮 1975）の墓である。
掘込墓は岩盤の自然形状を利用したもの、墓室を方形状に掘り込んだものがある。掘込式で屋根や墓庭を構築するものは、平葺墓・破風墓・亀甲墓に分類できる。亀甲墓のうち、切石積みにより墓室内の天井をアーチ状に構築したマチ墓がある（19 号墓）。なお、墓室に棚を持つものの殆どは、平坦コの字状棚系の構造となる。

さらに、仮墓と呼称される小規模な墓がある。仮墓は、墓庭内外の袖垣や墓門などに構築されている。今回調査を実施した仮墓と考えられる墓の多くは埋没し、新規発見されたものが殆どであった。仮墓は幼児あるいは自殺者、戦死者などは袖垣に仮墓を作り、一時的に葬ったものとされている（名嘉真 1979）。８号墓では方形石組が墓域内に構築されており、三角錐状のススキにより幼児を葬った童墓と考えられる。

当該古墓群では埋没して屋根部分や墓口が部分的に露出する墓（１・２・４号墓）のほか、全体が完全に埋没している古墓も確認された（27 号墓、26・31・36 号墓、34・35 号墓）。これらの墓は、米軍基地接収後の造成工事によって埋没していた。普天間下原古墓群の殆どが移転された空き墓であったが、埋没した古墓は墓の中身が移転されずに厨子甕が残っているものもあった。

墓の向きは概ね西方（北西～南西）に向くものが多い。風水上、墓口を家の方向に向けることは良くないとされ（名嘉真 1979）、普天間古集落が所在する東方に向く墓は存在しない。意図的に集落の方向を避けて墓を造営していると考えられる。

墓造営の土木技術　掘込式の墓は丘陵斜面を掘り込んで構築しており、墓室内に掘削時の工具痕が残る墓もある。袖垣は岩盤を削り出し、礫を配している。斜面地形のため左右で高低差がある場合は、一方を造成することによって左右の高さを合わせており、地形をうまく利用して墓を構築している。

屋根や袖垣の構築に伴う造成土として褐色土や黄褐色のコーラル土を用いており、墓構築時に地山や岩盤を掘削した際に発生した土を屋根や袖垣の造成に用いている。墓の多くは、屋根の造成にコーラル土を用いている。

掘込式の墓の多くは、墓口は方形状の開口部に門冠・隅石を嵌め込み、隙間に小さめの切石を充填して構築する方法によるものが多い。墓の装飾や石積みに使用されている石材は、ほぼ全てが琉球石灰岩であり、推測であるが墓造営に必要な石の切り出しを想定して岩盤を掘削し、発生した石を石積みに用いたと考えられる。７号墓では、開口部の上部に鏡石を固定するためのホゾ穴（縦 23・横 9 ㎝）が確認されている。墓室の構築について、棚は岩盤削り出して縁石を配置するものが多い。墓室内床面と墓庭の使用面はほぼ同じ高さのものが多い。10 号墓の墓室天井はイケがある付近で高くなっており、イケの構築時に墓室を再構築した可能性も想定される。27 号墓は墓室が左側に大きくオーバーハングしていることから、厨子甕を納めるために拡張した可能性がある。

墓正面の仕上げとして、岩盤の凹みや切石の隙間には褐色土（Ⅱ－１）を充填して外面を平坦にしている墓もあった。外面仕上げとして漆喰やモルタルを施す墓があり、北側斜面の北１地区の古墓が漆喰塗り、南側斜面の北２地区の古墓はモルタル塗りとなっており、斜面地によって仕上げの方法が異なっている。セメントは新たな建築材であることから、モルタルが施されている墓が新しい可能性がある。

普天間石川原第一遺跡５区の SL5001 は、燃焼部内に多量のサンゴ礫が含まれることから、漆喰製造の材料となる生石灰を生成した窯ではないかと推定される。生石灰は、サンゴ起源の土砂や礫を熱することによって生成される。出土したサンゴ礫は熱を受けているものもあり、生石灰の材料の可能性がある。燃焼部の炭化材同定によりリュウキュウマツを燃料材に用いたと考えられる。

SL5001 は埋没谷１の縁辺部に位置し、北西には漆喰仕上げの 19 号墓が所在する。同じ斜面の下位にある古墓群も同様に漆喰仕上げである（第 167 図）。このように SL5001 周辺には、漆喰を施した墓が点在することから、墓の付近でサンゴを焼き、生石灰作りから漆喰製造を行い、墓表面の仕上げを行ったと考えられる。

このように、古墓の考古学的な調査成果からは、当時の墓造営における土木技術を知ることができる。また、亀甲墓や破風墓の墓口・墓室の構築や屋根造成方法からは、墓造専門の職人によって構築されたと考えられる。

遺物　厨子甕を中心に沖縄産陶器や本土産陶磁器などが出土している。厨子甕についてみると、本報告でⅠ・Ⅱ類とした石厨子やボージャー厨子は僅かであり、Ⅲ・Ⅵ類としたマンガン釉甕形厨子や上焼御殿形厨子のうち 19 世紀後半から近代にかけてのものが主体となる。確認された銘書の年代も 19 世紀後半および近代以降に集中している。沖縄産無釉陶器の壺甕類で、厨子甕に転用されたと考えられるものがある。

副葬品は指輪や簪、煙管などがある。指輪は、重ね着けしていたと考えられる細い指輪や、日章旗と「日本」銘入りの指輪が厨子甕内から出土している。25 号墓からは寛永通寶が６枚出土し、六道銭と考えられる。沖縄産無釉陶器の摺鉢が墓庭や墓門から出土しており、盆中に亡くなった人は、後生では泥棒とされ頭を打たれると信じられており、護身用として頭に摺鉢を被せたとされる（佐喜真 1925、名嘉真 1979・1999）。

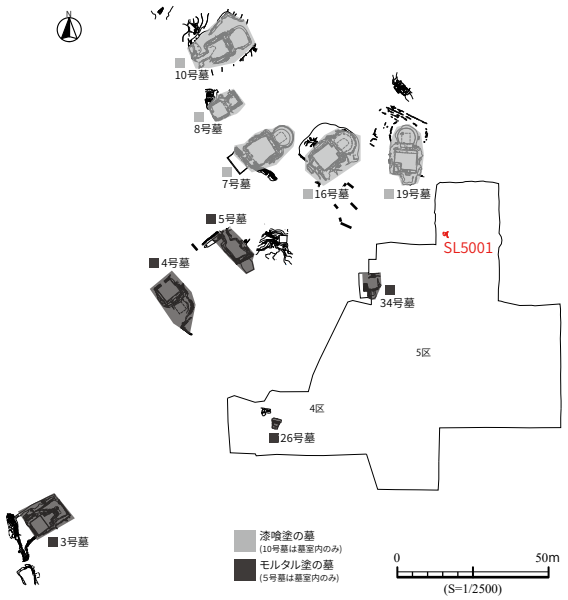
２　被葬者について

古墓の多くは空き墓であったが、移転されずに厨子甕が残されているものや、移転後も一部の人骨が残されている墓があった。人骨の分析では全体で 25 人（男性７人、女性７人、性別不明４人、若年１人、小児１人、幼児１人、乳児４人）と推定された。

指輪着装指骨　27 号墓厨子１（171）内からは指骨に銅製指輪が装着された状態で検出されている。厨子１はVI e 類（上焼宮城Ⅴ式相当）で近代に納骨されたと考えられる。若年（約 15 ～約 20 歳）の被葬者で、この指骨は右手第３基節骨（中指）とされた。指骨は全 12 点確認され、うち７点に着色が認められ、着色のある指骨は右手に集中していることから、着色は右手の指輪に由来し、左手には指輪は無かったことが明らかになった。

また、納骨に際し指輪の付いた右手の骨を特別丁寧に他の骨の上に安置し、納骨時の指骨は靱帯などで連結した状態だった可能性が指摘されている。

遺体が十分に腐敗せず白骨化していなくても洗骨する場合もあり、死後 10 日経たずに洗骨を行った事例もあるとされる（名嘉真 1968・1979）。宜野湾市新城の事例として、洗骨時に十分に腐敗せずに屍蝋になっている遺体を鎌などで切り刻んで骨を取り上げたとされる（佐喜真 1925）。このような民俗事例から、十分に遺体の削ぎ落としがなされずに納骨される場合があったと考えられる。27 号墓厨子１の指輪着装指骨は、靱帯などで連結した状態であった可能性は高いと思われる。近代の洗骨習俗に関する貴重な事例と考えられる。



第 167 図　漆喰・モルタル塗りの墓と SL5001

３　墓の規模・造営年代について

普天間下原古墓群は戦後基地接収時まで使用された普天間古集落の墓域である。墓の多くは空き墓であるため断定はできないが、出土した厨子甕や銘書の年代観からは 19 世紀後半から近代にかけての墓地であると考えられる。

近世琉球では墓地の造営や面積などが制限されている。1809 年「田地奉行規模帳」によると、士族の墓地面積は 12 間角、百姓は６間角以内と定められ、亀甲墓の築造、墓の装飾・墓庭の石垣も禁止されていた。庶民が立派な墓を造ると役人により取り壊されたこともあるとされる（佐喜真 1925；108 頁）。亀甲墓や破風墓の築造が許されたのは、1879（明治 12) 年の廃藩置県以後とされ（名嘉真 1972･1975）、一般に広く流行したのは、明治中期から大正・昭和初期にかけてとされる（名嘉真 2000、福島 2007）。

当該古墓群の面積についてみると、最も大きな亀甲墓である 19 号墓が 176.8 ㎡を測り、次に７号墓（166 ㎡）、16 号墓（150.9 ㎡）、10 号墓（146.2 ㎡）で、北１地区の古墓の多くは６間角（119.2 ㎡）を超えている。一方で、北２地区や南地区では６間角の範囲内に収まっている。

当該古墓群の亀甲墓や破風墓は、６間角の制限を超えているものもあることから、亀甲墓の築造が許される 1879（明治 12) 年以降に造営された可能性が高い。また、北２・南地区のモルタル仕上げの墓が新しい可能性があることから、北から南に墓地が形成されていった可能性もある。亀甲墓や破風墓の墓室はコの字状棚系で共通することから、近い時期に造営されたと思われる。

北１地区の墓は６間角を超え規模が大きいことや、19 号墓は「古波蔵筑登之親雲上」、７号墓は「安里筑登之」の銘書が厨子甕に確認されることから、地方役人など普天間でも有力な家柄の墓であったと考えられる。

また、18 ～ 19 世紀前半で近世に位置付けられる厨子甕を含む墓もあり、墓の造営などにともなって近世期の厨子甕の移動や整理がなされた可能性が窺える。

４　墓道について

当該古墓群の調査成果を踏まえ、当時の集落から墓に至る道跡を復元してみたい。石積みの区画から墓道と考えられるものがあり、これらを墓道１・２とする。

道３　普天間古集落から古墓群を通り安仁屋に至る道跡である。この道跡は、普天間石川原第一遺跡５区でも確認され「道１」と合流する。道３に関連する遺構として、５号墓西側の石積み２は北西方向に伸び、この付近は斜面となっていることから、アヒラービラと呼ばれた坂道であったと考えられる。さらに、この部分が墓地への入口であったとみられる。

道５　南地区３・32・33 号墓の南西側は、岩盤が段状となり階段が存在した可能性がある。この付近は普天間石川原第一遺跡７区から続く「道５」とされる道跡にあたり、墓への入口となる可能性がある。

墓道１　普天間古集落からの道跡「道３」から墓域に入る道跡である。北地区の古墓はそれぞれ隣接し、墓門から続く石積みによって整然と区画されている。道３とした石積み２を起点とし、５号墓から７・８号墓前を通り、10 号墓付近に至る墓道が存在したと考えられ、これを墓道１とする。この墓道１に関連する遺構として、石積み１・８があり、これらは５号墓から７号墓の墓門付近を区画する石積みである。本来は７号墓から 10 号墓までの墓門も石積みが続いていたと思われる。

墓道２　13 ～ 15 号墓が所在する一帯から北東に下り、墓道１と合流して石積み９前を通り、最終的に断崖にある 20 号墓まで至る道を墓道２とする。

今回の普天間石川原第一遺跡・普天間下原古墓群の調査で確認された道跡と、過去の普天間古集落の調査で確認された道跡（沖縄県埋文 2017）を、昭和 20 年に撮影された普天間付近の航空写真に重ねた図が第 168・170 図である。道跡とした遺構のラインと航空写真にみえる道跡は合致している。過去の調査成果も踏まえると、集落から墓地へ至る道跡を確認することが出来た。

５　動物供犠について

19 号墓の獣骨埋設遺構　19 号墓の墓室内入口壁側右隅の掘込部分から獣骨が出土し、獣骨埋設遺構とした。調査時に埋設状況を記録することができなかったのは大きな反省点である。出土した獣骨の分析では、ブタの頭蓋骨２個体とされている。

墓の落成祝い時にブタの頭蓋骨を墓の中や周辺に埋めるとする民俗事例がある（名嘉真 1979・1999）。このような獣骨埋設遺構は沖縄本島中南部の近世墓を中心に確認され、浦添市伊祖の入め御拝領墓の調査報告では死者が出ないようにと意を込めた墓大工に伝わる儀礼と考えられている（玉木 1996）。一方で獣骨埋設遺構の検出数が墓群全体に対して僅かなことから、「落成」という全ての墓に共通して存在する儀礼とは考えにくいとし、「埋設遺構を構築することができる経済力や社会的地位が求められる」「頭蓋を埋設すべき特別な葬送儀礼を行う必要のある状況」等何らかの条件・事情による稀な行為であったとも考えられている（菅原 2013・2019a）。

獣骨埋設遺構が検出された 19 号墓は本古墓群で最も高い場所にある最も大きな亀甲墓で、唯一墓室内の天井をアーチ状に構築したマチ墓でもある。本古墓群でも経済力がある有力な家柄の墓であったと考えられる。

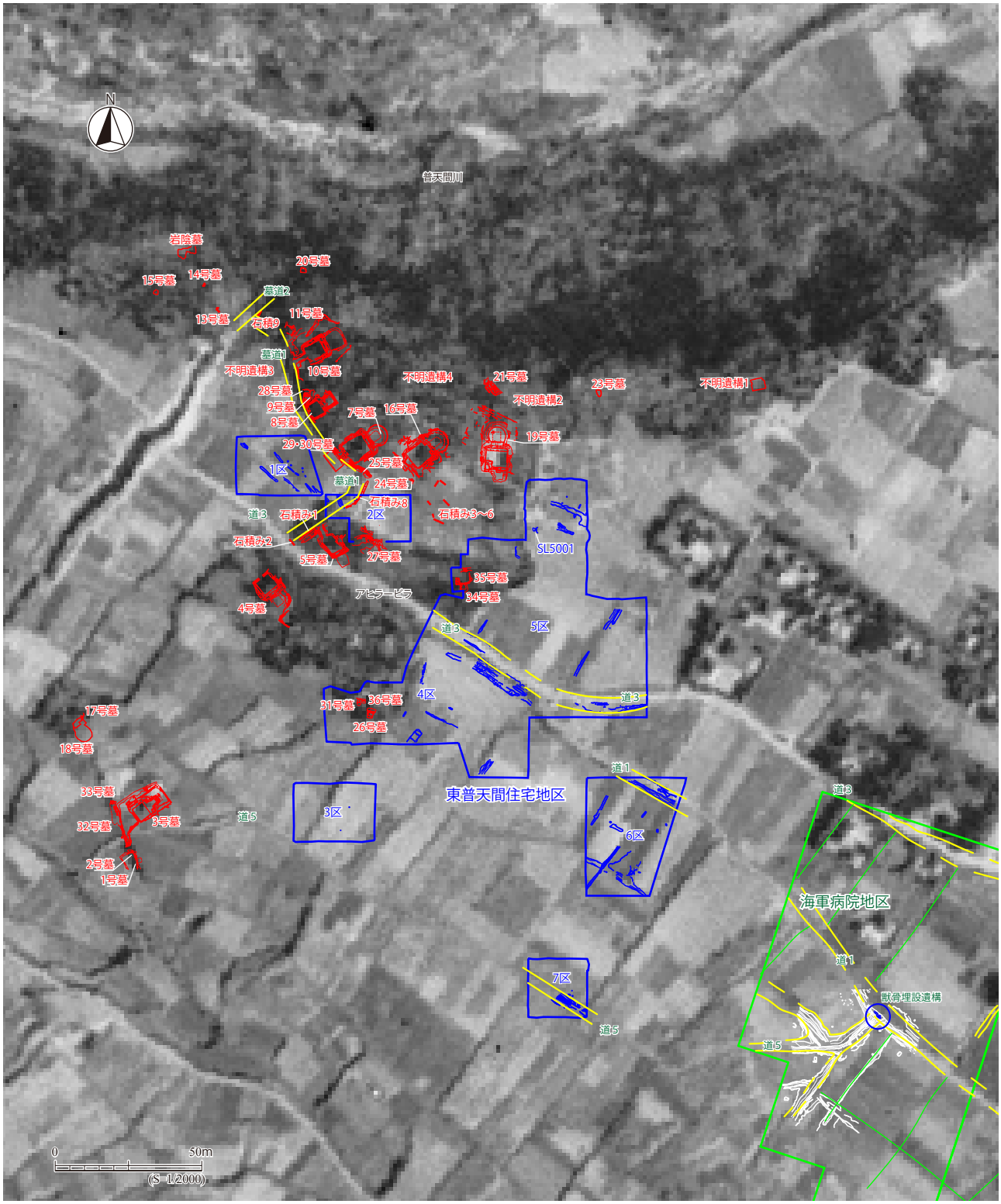
５号墓出土の獣骨　５号墓シルヒラシに獣骨が散乱していた。獣骨の分析ではイヌ２個体とネコ１個体で、特にイヌについてはほぼ全身の骨格が確認されている。墓移転後の空き墓となった後にこれらの獣骨が入り込んだ可能性も考えられ、墓との関連性は不明である。

普天間古集落の獣骨埋設遺構　平成 21 年度の普天間古集落の調査で、獣骨埋設遺構が確認されている。調査報告書は既に刊行されたが（沖縄県埋文 2015b）、この遺構について取り上げられなかったため、今回紹介したい。獣骨埋設遺構の図を第 169 図、写真を図版 63・64 に示す。なお、遺構番号は資料整理時に変更されている。

獣骨埋設遺構は、平成 21 年度海軍病院地区の発掘調査Ⅲ地区で確認された道跡と考えられる溝状遺構 SD47 より、複数の獣骨の頭蓋骨が一定の方向を向き列状に埋設されている。注目されるのが、獣骨の頭蓋骨は普天間下原古墓群が所在する北西方向に向いている。意図的に墓の方向に向けて埋設した可能性がある。獣骨はブタと考えられ、SK100・105・108 の頭蓋骨は穿孔されている。SD47 は、普天間古集落の中心から北西方向に伸びる「道１」とされている。この「道１」は「道３」と合流して、普天間下原古墓群に至る。SD47 および獣骨埋設遺構は、集落北西側の境界付近にあたる（第 171 図）。

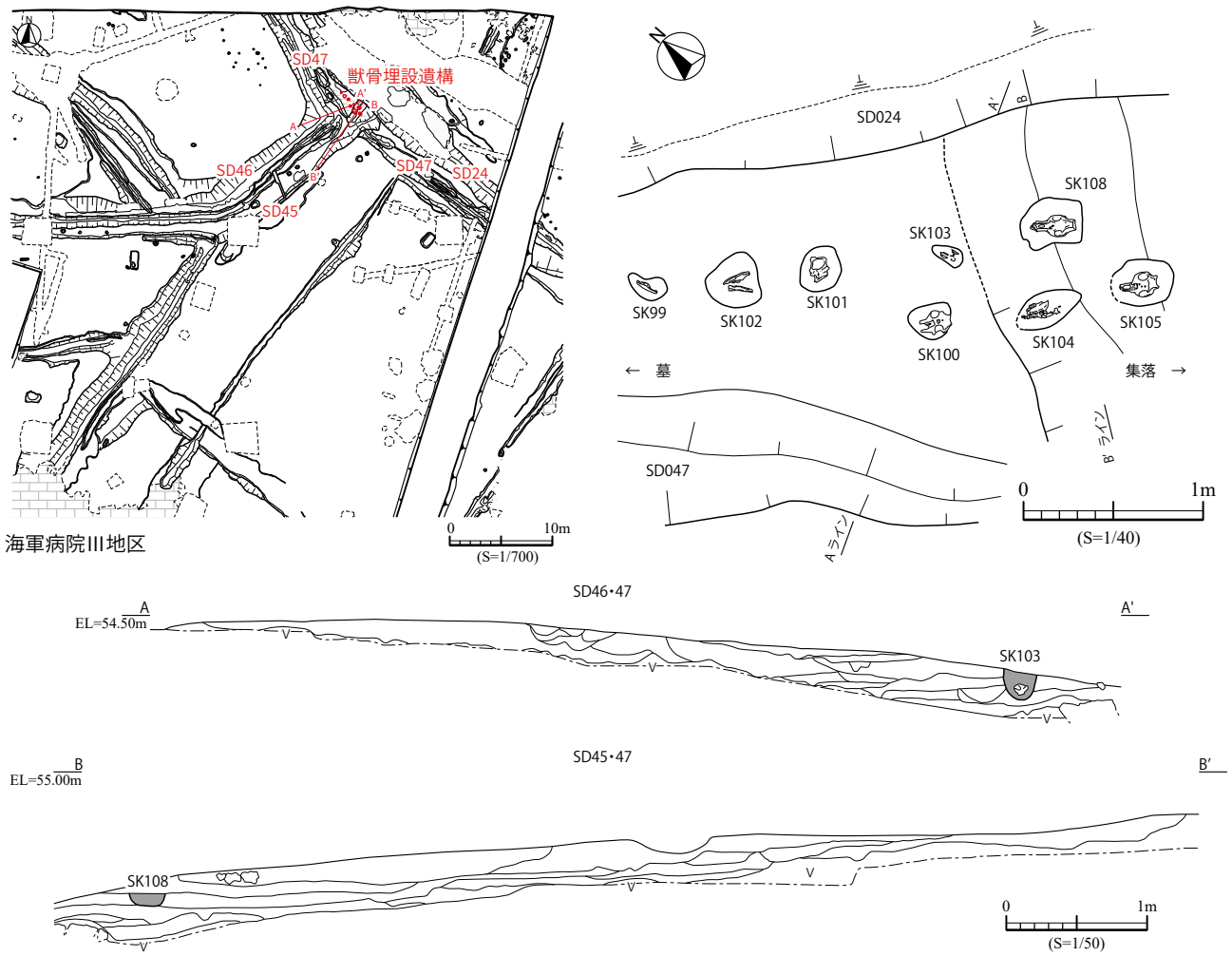
この獣骨埋設遺構については、年中行事であるシマクサラシに用いられたブタ頭骨がその場に残された可能性が指摘されている（菅原 2019b）。シマクサラシは沖縄全域で行われたカンカーとも呼ばれる厄払いの儀礼である。牛や豚を屠殺した後、血は家の壁や門などに塗布し、骨は注連縄に吊るして集落の境界・入り口に張り、外からの疫病を入れないようにしたという（多和田 1972・比嘉 1973）。シマ（集落）を腐った状態にして魔物を近づけないとようにしたなどと説明されている（上江洲 2005）。シマクサラシの悉皆調査では、古村とされる伝統的な集落を中心に行われ、集落の入口や端、境界で行われたとされる（宮平 2012）。

獣骨埋設遺構が普天間古集落の境界付近で検出されていること、獣骨には穿孔された痕跡があることから、シマクサラシの行事の中で吊るされた可能性は高い。

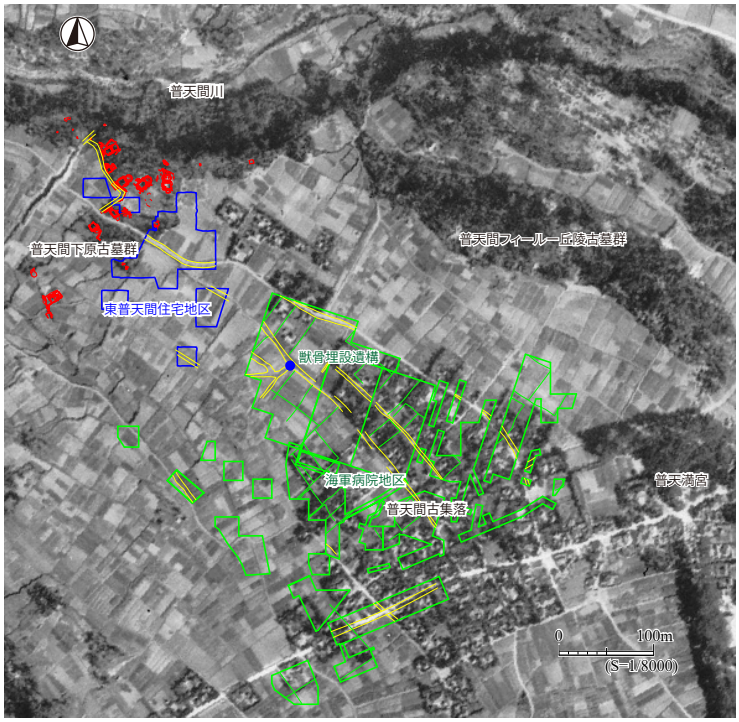


写真：宜野湾市教育委員会提供

第 168 図　昭和 20 年撮影航空写真と東普天間住宅地区

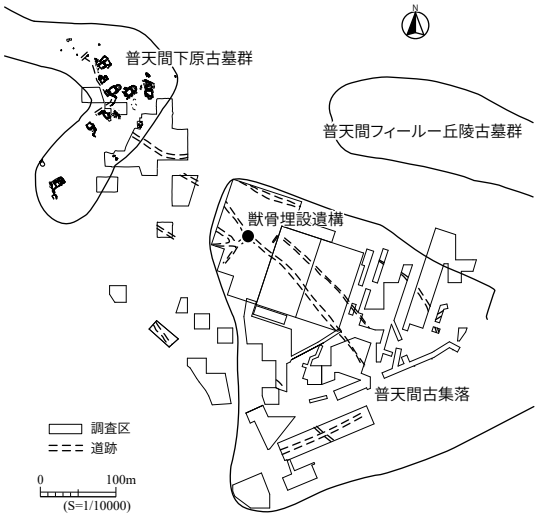


第 169 図　海軍病院地区の獣骨埋設遺構



写真：宜野湾市教育委員会提供

第 170 図　昭和 20 年撮影航空写真と東普天間住宅地区・海軍病院地区



第 171 図　集落と墓域

また、獣骨は一定の方向を向いた状態で埋設されているが、その向きは集落の外であり、墓が位置する方向でもある。集落と墓域の境界部分にあたる地点で獣骨埋設遺構が集中していることからも、意図的に墓の方向に向けて埋設し、悪霊などの霊的災厄を意識していた可能性がある。

普天間古集落におけるシマクサラシ儀礼の中で、集落の境界付近で獣骨を吊して魔除けとし、その後吊るした獣骨は集落の外（墓）に向けて埋設する取り決めがあったのかもしれない。シマクサラシに関する重要な資料であるとともに、当時の人々の墓に対する考え方が窺える。

６　戦時中の墓

亀甲墓や破風墓のうち、７・８号墓は墓室の開口部が露出している。埋没墓ではなく、墓庭に正面の装飾や切石が崩落した痕跡は認められず、７・８号墓のみが墓室の開口部が露出している状態となっており、基地接収後に撤去されたとは考えにくく、戦時中に撤去もしくは破壊された可能性が高いと考えられる。

第２章第２節にも記載したが、昭和 19 年には普天間には賀谷支隊（独立歩兵第 12 大隊）隊等が国民学校の校舎や普天間北側のフィール―丘陵に兵舎を作り駐屯し、昭和 20 年４月１日に米軍は上陸するとその日の内に普天間の下原近くまで進撃（宜野湾市 1982）、賀谷支隊の第一中隊は昭和 20 年４月２日に普天間北側台地で南下する米軍と戦闘したと記録がある（防衛庁 1968；279 頁）。19 号墓墓庭の壕跡と戦没者人骨が示すように、この下原古墓群があるグスクンニー丘陵では激しい戦闘が行われたと考えられ、墓は戦時中は陣地の一部としても有効に利用されたとあることから（防衛庁 1968；14 頁）、７・８号墓も戦時中に利用された可能性がある。

７　今後の古墓群の調査に向けて

今回の普天間下原古墓群の調査では米軍基地造成によって埋没した古墓が次々と確認され、計画より調査に時間を要した。普天間石川原第一遺跡の調査区内でも埋没墓が確認され、古墓群の包蔵地範囲も拡張された。

調査対象古墓の多くは空き墓であったが、新規確認された墓で厨子甕内に人骨を含む墓については、墓地埋葬法の規定に基づき官報公告を実施し、１年間の公告期間終了後に発掘調査を行うこととなり、発掘調査計画だけでなく調査後の造成工事計画にも大きな変更を余儀なくされることとなった。調査の進捗は工事計画にも影響することから、工事側とは工程会議により情報共有を行い、造成工事と並行しての調査となった。

調査の規模にもよるが、古墓の調査に際しては、埋没墓の存在を考慮して墓地埋葬法の規定に基づく手続きを事前に実施しておくべきであろう。その為の開発側との事前の調整も必要となる。

米軍基地内は旧地形が大規模な造成によって埋没していることがあり、米軍基地内の古墓においては、埋没墓が存在している可能性を念頭に置いて調査計画を立てる必要がある。地上に露出している部分の調査だけでなく、墓の袖垣の根元には仮墓などの小規模な掘込墓が検出される可能性がある。場所によっては、屋根や墓庭を持つ墓も完全に埋没しており注意が必要である。

第４節　結語

最後に、今回の東普天間住宅地区発掘調査のまとめを行い、本調査報告の結語とする。

普天間石川原第一遺跡では大きな二つの埋没谷を確認し、貝塚時代は谷筋が蛇行して平坦な面がほとんど無い起伏に富んだ地形であった。貝塚時代前期の遺物が多く出土し、貝塚時代前期の居住地と考えられる遺跡が隣接することから、本遺跡は狩猟採集活動の範囲内であった可能性を想定した。また、貝塚時代後期後半の年代を示す集石遺構や大溝、グスク時代における植物栽培の痕跡と考えられる列状ピット群、谷地を段状に区画する石列、溝状遺構が確認された。貝塚時代後半からグスク時代初期にかけて谷地が開拓され、グスク時代は階段状の畑跡が展開していたことが確認された。遺構からはコムギの炭化種実が多く検出され、コムギを栽培していた可能性がある。近世から近代にかけての耕作関連遺構とともに、普天間古集落から続く道跡も検出された。

普天間グスクンニー遺跡では近世～近代の耕作関連遺構が確認された。

普天間下原古墓群は、掘込墓や亀甲墓・破風墓によって構成される 19 世紀後半から近代にかけての墓地である。厨子甕の銘書から普天間古集落の墓域であったことが確認された。墓の構築は地形を上手く利用しており、墓の付近でサンゴを焼き生石灰づくりから漆喰製造を行い、墓表面の仕上げを行っていた可能性もあり、当時の墓地造営における土木技術を知ることができた。27 号墓厨子甕１内の指輪着装指骨は靴帯などで連結していた可能性があり、近代の洗骨習俗について窺える。19 号墓では儀礼の可能性がある獣骨埋設遺構も確認されたほか、沖縄戦時の壕跡と戦没者人骨が墓庭で検出された。

過去の海軍病院地区の発掘調査成果も踏まえると、普天間古集落と耕作地・墓地の範囲一帯を調査したことになる。今回、普天間古集落から墓地へ至る道跡を確認することが出来た。また、普天間古集落の境界付近で墓の方向に向けられた獣骨埋設遺構は、年中行事のシマクサラシと考えられ、集落と墓域の関係性が窺える。

参考文献

論文・書籍等

赤司善彦 1991「朝鮮系無釉陶器の流入−高麗期を中心として−」九州歴史資料館研究論集 16、PP.53-67、九州歴史資料館

安里進ほか 1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－』第 25 集、浦添市教育委員会

新垣力 2003「沖縄出土の清朝陶磁」『沖縄埋文研究』１、PP.73-88、沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣力 2014「17 ～ 19 世紀の琉球列島における貿易陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁』第 35 回日本貿易陶磁研究集会（沖縄大会）発表要旨・資料集、PP.41-50、日本貿易陶磁研究会

新垣力 2018「琉球王国における近世陶磁器の流通」『琉球王国の近世陶磁器流通』第 8 回近世陶磁研究会資料、PP.1-24、近世陶磁研究会

新垣力・瀬戸哲也 2005「沖縄における 14 ～ 16 世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究』３、PP.79-98、沖縄県立埋蔵文化財センター

有銘倫子 2011「沖縄県内における遺跡出土硯」『南島考古』No.30、PP.61-72、沖縄考古学会

安斎英介 2013「沖縄の石切場跡と石切技法について－浦添市西海岸の石切場跡の調査成果を中心に－」『南島考古』No.32、PP. １-12、沖縄考古学会

安斎英介・宮城明恵 2013「沖縄における蔵骨器研究の現状と課題－分類と編年に関する考古学研究史を中心に－」『廣友会誌』６号、PP.25-39、廣友会

市村慎太郎 2010「近現代ガラス製目薬瓶の型式学的研究」『大阪文化財研究』第 37 号、PP.35-49、財団法人大阪府文化財センター

伊藤慎二 2000『琉球縄文文化の基礎的研究』小林達雄監修　未完成考古学叢書 1

上江洲均 1973『沖縄の民具』考古民俗叢書 12　慶友社

上江洲均 1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』、PP.341-374、新日本教育図書

上江洲均 1982『沖縄の暮らしと民具』慶友社

上江洲均 2005『沖縄の民俗と生活』琉球弧叢書 11

上原静 2005「沖縄諸島における近現代の島瓦とセメント瓦」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』29 号、PP.17-36

上原静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林

大鎌淳正 1997『改定増補 古銭語事典』国書刊行会

大澤正己 1979「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』PP.65-100、渡名喜村教育委員会

大城慧 1986「グスク遺跡出土の鉄滓について」『紀要』３号、PP.103-119、沖縄県教育委員会

小野武夫 1932「第２巻農業制度の１（農政）」『近世地方経済史料』第九巻、PP.60-150、吉川弘文館

小野正敏 1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№２、PP.71-87、日本貿易陶磁研究会

大堀皓平 2013「沖縄の遺跡から出土する石製硯について－沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料より－」『南島考古』No.32、PP.13-28、沖縄考古学会

大堀皓平 2016「沖縄県内に出土する石厨子の分類と編年試案」『よのつぢ 浦添市文化部紀要』12 号、PP.31-40、浦添市教育委員会文化部

河西大地 2018『琉球ガラスの年代物コレクション～沖縄ガラス工芸図鑑～』、PP.34-38、白雨草木庵

金武正紀 1988「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8、PP.148-157、日本貿易陶磁研究会

金武正紀 1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320、PP.2-6、ニュー・サイエンス社

金武正紀 2009「今帰仁タイプとビロースクタイプ−設定の経緯・定義・分類−」『13 ～ 14 世紀の琉球と福建』平成 17 ～ 20 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書、PP.21-26、熊本大学文学部

金武正紀 2010「今帰仁城跡出土の白磁研究」『坪井清足先生卒寿記念論文集−埋文行政と研究のはざまで−』下巻、PP.1266-1275、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

具志堅亮 2014「グスク土器の変遷」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究第１集、PP.215-226、六一書房

国吉房次「造形素材としての漆喰について−沖縄漆喰研究序説−」『沖縄県立芸術大学紀要』No.12、PP.37-50、沖縄県立芸術大学

窪田蔵郎 1987『改訂 鉄の考古学』雄山閣出版

倉成多郎 2005「厨子甕の製作について」『壺屋焼博物館紀要』６号 PP.1-8、那覇市立壺屋焼物博物館

栗山初美 2005「沖縄出土の焼物について－銘苅古墓群・ナーチュー毛古墓古墓群の蔵骨器を中心として」『壺屋焼物博物館紀要』６号、PP. ９-50、那覇市立壺屋焼物博物館

小林義孝ほか 2009『六道銭の考古学』高志書院

斎藤弘吉 1963『犬科動物骨格計測法』株式会社国際文献印刷社

佐喜真興英 1925『シマの話　風俗・明治の沖縄』沖縄書籍販売社

桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

桜井準也 2019『ガラス瓶の考古学』六一書房

茂原信生・松井章 1995「４　草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ−南部地域北半部 - の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

城間肇 2000「厨子甕に見られる文様についての一考察」『文化課紀要』16 号、PP.33-52、沖縄県教育委員会

新里亮人 2003a「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』第 49 巻第 4 号（通巻 196 号）、PP.75-95、考古学研究会

新里亮人 2003b「徳之島カムィヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論究Ⅳ』、PP.387-413、龍田考古会

新里亮人 2004「カムィヤキ古窯の技術系譜と成立背景」『グスク文化を考える』、PP.325-352、今帰仁村教育委員会

新里亮人 2018『琉球国成立前夜の考古学』同成社

菅原広史 2013「近世墓から出土する脊椎動物遺体」『琉球近世墓の考古学−発表報告編 -』2013 年度研究発表会資料、PP.59-67、沖縄考古学会

菅原広史 2019a「奥首川流域古墓群ミーチェ地区 19 号墓出土の獣骨埋設遺構」『ミーチェの古墓群』金武町の歴史と文化第８集、PP.114-117、金武町教育委員会

菅原広史 2019b「近世・近代の人々の暮らしと動物の関わり−遺跡から出土する動物の骨から考える−」『堀り出された戦前の沖縄』令和元年度企画展示図録、PP.44-45、沖縄県立埋蔵文化財センター

鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『沖縄埋文研究』５、PP.55-76、沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也 2004「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える』、PP.417-436、今帰仁村教育委員会

瀬戸哲也 2010「沖縄における 12 ～ 16 世紀の貿易陶磁 – 中国産陶磁を中心とした様相と組成 –」『貿易陶磁研究』No.30、PP.17-40、日本貿易陶磁研究会

瀬戸哲也 2013「沖縄における 14・15 世紀中国陶磁編年の再検討」『中近世土器の基礎研究』25、PP.113-126、日本中近世土器研究会

瀬戸哲也 2014「沖縄における 14 ～ 16 世紀の中国陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁』第 35 回日本貿易陶磁研究集会（沖縄大会）発表要旨・資料集、PP.25-40、日本貿易陶磁研究会

瀬戸哲也 2015「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No.35、PP.17-32、日本貿易陶磁研究会

瀬戸哲也 2018「沖縄本島におけるグスク時代の階層化」『考古学研究』第 65 巻第 3 号、PP.81-101、考古学研究会

瀬戸哲也 2019「集落からグスクへ−グスク時代における交易と農耕の展開 –」『琉球の中世』中世学研究２、PP.45-67、中世学研究会

玉木順彦 1996「民俗学からみた伊祖の入め御拝領墓」『伊祖の入め御拝領墓−マンション建設に伴う近世墓の発掘調査−』第 24 集、PP.31-32、浦添市教育委員会

高宮広土 2021『奇跡の島々の先史学』ボーダーインク

多和田真淳 1972「第７章 民間療法」『沖縄県史』第 22 巻各論編 10 民俗１、PP.843-901、琉球政府

辻誠一郎・大松しのぶ・辻圭子 2007「伊礼原遺跡の植物遺体群」『伊礼原遺跡 – 伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査 –』第 21 集、PP.433-444、北谷町教育委員会

当間嗣一 1971「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」『琉大史学』２号、PP.35-46、琉球大学史学会

永井久美男 1996『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会

仲宗根求 2009「熱田原型石器の提唱－アッズ・ブレイドの類例集成」『廣友会誌』５号、PP. １-18、廣友会

長濱健起・宮城明恵・仁王浩司 2021「近代沖縄交通遺跡「鉄軌道」関

連資料について」『廣友会誌』10 号、PP.103-108、廣友会
名嘉真宜勝・高宮広衛 1975「沖縄の墓地」『日本古代文化の探究・墓地』、PP.179-196、社会思想社
名嘉真宜勝 1968「沖縄の洗骨習俗」『日本民俗学会報』第 58 号、PP.29-42、日本民俗学会
名嘉真宜勝 1972「第５章 第４節葬制・第５節墓制」『沖縄県史』第 22 巻各論編 10 民俗１、PP.567-694、琉球政府
名嘉真宜勝 1979「沖縄県の葬送・墓制」『沖縄・奄美の葬送・墓制』、PP.9-164、明玄書房
名嘉真宜勝 1983「仮墓」『沖縄大百科事典』上巻、PP.777、沖縄タイムス社
名嘉真宜勝 1985「第７章第４節葬制第５節墓制」『宜野湾市史』第五巻資料編四、PP.453-486、宜野湾市史編集委員会
名嘉真宜勝 1997「第八章　信仰・針突・葬制・墓制」『上勢頭誌』上巻通史編（Ⅰ）、PP.449-495、上勢頭誌編集委員会
名嘉真宜勝 1999『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社
名嘉真宜勝 2000「沖縄の墓と別れ遊び」『風俗史学』日本風俗史学会誌 13 号、PP.36-53、日本風俗史学会
仁王浩司 2013「近世墓の形態」『琉球近世墓の考古学−発表報告編 -』2013 年度研究発表会資料、PP.7-10、沖縄考古学会
西銘章 2001「沖縄への仏教浸透の度合い－厨子研究にあたってのいくつかの試み－」『地域文化論叢』４号、PP.43-54、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
西銘章 2004「厨子研究における方法論の検討（１）－久米島のヤッチのガマ資料の検討」『地域文化論叢』６号、PP.15-4、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
西銘章 2005「厨子研究における方法論の検討（２）－ボージャー厨子の初現と終末期のタイプ」『地域文化論叢』７号、PP.81-94、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
萩尾俊章 2001「沖縄の墓誌に関する調査覚書」『文化課紀要』17 号、PP.29-44、沖縄県教育庁文化課
萩尾俊章 2009「沖縄県立博物館収蔵品にみる墓誌と墓中符について」『博物館紀要』２号、PP.37-45、沖縄県立博物館・美術館
比嘉政夫 1973「第１章 年中行事」『沖縄県史』第 23 巻各論編 11 民俗２、PP.1-73、琉球政府
福島駿介 2007「建築学から見た銘苅古墓群」『銘苅古墓群　重要遺跡確認調査報告』第 72 集、PP.127-156、那覇市教育委員会
深山直子 2017「サンゴを原材料とする沖縄漆喰の盛衰 ― 沖縄・石垣島を中心に」『OceanNewsletter』第 414 号、海洋政策研究所
防衛庁防衛研修所戦史部 1968「第 10 章米軍の沖縄本島上陸と前方部隊の戦闘」『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』、PP.258-345、朝雲新聞社
真栄田義見ほか 1972「指輪」『沖縄文化史辞典』、PP.399、東京堂出版
真栄平房敬 1983「指輪」『沖縄大百科事典』下巻、PP.783、沖縄タイムス社
宮城弘樹 2014「貿易陶磁出現期の琉球列島における土器文化」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究第１集、PP.199-214、六一書房
宮城弘樹 2019「御殿形厨子の研究（１）－紀年銘資料の集成を中心として－」『南島考古』No.38、PP. １-20、沖縄考古学会
宮城弘樹 2020a「御殿形厨子の研究（２）－赤焼・荒焼御殿形厨子の編年－」『南島考古』No.39、PP.115-126、沖縄考古学会
宮城弘樹 2020b「御殿形厨子の研究（３）－上焼御殿形厨子の編年－」『沖縄国際大学 総合学術研究紀要』22 巻１号、PP.23-38
宮城弘樹・具志堅亮 2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第３号、PP.2-16、廣友会
宮平盛晃 2012「南島におけるシマクサラシの性格」『捧げられる生命 – 沖縄の動物供犠』、PP.21-95、お茶の水書房
森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２、PP.47-54、日本貿易陶磁研究会
屋比久壮実 2004『沖縄の野山を楽しむ植物の本』アクアコーラル企画
吉岡康暢 2002「南島の中世須恵器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 94 集、PP.409-439、国立歴史民俗博物館
Angela Von Den Driesch　1976　"A Guide to Measurement of Animals Bones From Archeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Aecheology and Ethnology. Harvard University

文化財調査報告書

伊平屋村教育委員会 1981『久里原貝塚』第１集
伊仙町教育委員会 2005『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』第 12 集
伊仙町教育委員会 2010『川嶺辻遺跡』第 13 集
伊仙町教育委員会 2018『前当り遺跡・カンテナ遺跡』第 17 集
伊仙町教育委員会 2021『大セノ嶺遺跡』第 19 集
浦添市教育委員会 2004『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』
浦添市教育委員会 2005『浦添原遺跡』
浦添市教育委員会 2010『浦添市西海岸の石切場跡』
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群５』
浦添市教育委員会 2017『前田・経塚近世墓群９』
沖縄県教育委員会 1985『金石文』第 69 集
沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡』第 67 集
沖縄県教育委員会 1986『地荒原遺跡』第 75 集
沖縄県教育委員会 1989『沖縄県史料 前近代６ 首里王府仕置２』
沖縄県教育委員会 1991『上村遺跡』第 98 集
沖縄県教育委員会 1992『安仁屋トゥンヤマ遺跡』第 105 集
沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）』第 111 集
沖縄県教育委員会 1995『湧田古窯跡（Ⅱ）』第 121 集
沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』第 134 集
沖縄県教育委員会 2008『沖縄の金工品完形資料調査報告書』第 146 集
沖縄県教育委員会 2012『沖縄の葬制に関する総合調査報告書』第 150 集
沖縄県立博物館・美術館 2015『琉球弧の葬墓制－風とサンゴの弔い－』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』第６集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『伊佐前原第一遺跡』第４集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺（Ⅱ）』第８集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』第 29 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『西長浜原遺跡』第 39 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『鏡水箕隅原 A 遺跡』第 57 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』第 63 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『宮国元島上方古墓群』第 66 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』第 68 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2015a『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書１－普天間古集落遺跡－』第 74 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2015b『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書２－普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡・普天間下原第二遺跡・普天間石川原遺跡－』第 79 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書３－普天間古集落遺跡－』第 83 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書４－普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡－』第 90 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『基地内文化財８- 平成 27・28 年度キャンプ瑞慶覧西普天間地区試掘・確認調査 -』第 94 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019a『神山古集落』第 99 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019b『掘り出された戦前の沖縄』令和元年度沖縄県内埋蔵文化財公開活用合同企画展図録
沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡（首里高校内）・櫨園跡 - 首里高校校舎改築に伴う発掘調査 (2)』第 110 集
沖縄市立郷土博物館 1990『沖縄市の自然－身近な動植物』
勝連町教育委員会 1990『勝連城跡』勝連町の文化財 第 11 集
喜界町教育委員会 2008『城久遺跡群　山田中西遺跡Ⅱ』第９集
喜界町教育委員会 2009『城久遺跡群　山田半田遺跡（山田半田 A 遺跡・山田半田 B 遺跡）』第 10 集
喜界町教育委員会 2011『城久遺跡群　前畑遺跡・小ハネ遺跡』第 11 集
喜界町教育委員会 2013『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡）』第 12 集
宜野湾市 1982『宜野湾市史』第三巻資料編二　市民の戦争体験記録
宜野湾市教育委員会 1982『宜野湾市の遺跡』第４集
宜野湾市教育委員会 1984『洞穴』第６集
宜野湾市教育委員会 1985『宜野湾市史』第五巻資料編四
宜野湾市教育委員会 1987『植生』第９集

宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』第 10 集
宜野湾市教育委員会 1991『ヌバタキー都市計画街路２－１－１号建設に係る緊急発掘調査報告ー』第 13 集
宜野湾市教育委員会 1991『写真集ぎのわん』宜野湾市史別冊
宜野湾市教育委員会 1995「野嵩タマタ原遺跡の畑址」『上原濡原遺跡発掘調査記録』第 43 集
宜野湾市教育委員会 2000『宜野湾市史』第９巻資料編８　自然
宜野湾市教育委員会 2005『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第 36 集
宜野湾市教育委員会 2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第 38 集
宜野湾市教育委員会 2009『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』第 44 集
宜野湾市教育委員会 2011『普天間フィールー丘陵古墓群』第 48 集
宜野湾市教育委員会 2012『ぎのわんの地名－内陸部編－』市民民俗芸能調査報告書
宜野湾市教育委員会 2016『瑞慶覧基地内病院地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書１』第 51 集
宜野湾市教育委員会 2017『瑞慶覧基地内病院地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書２』第 52 集
宜野湾市教育委員会 2019『基地内埋蔵文化財調査報告書７』第 56 集
宜野湾市教育委員会 2020『文化財情報図（令和元年度版）』第 78 集
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ−陶磁器分類編−』第 49 集
玉城村教育委員会 1991『糸数城跡』第１集
北谷町教育委員会 2008『伊礼伊森原遺跡』第 18 集
北谷町教育委員会 2003『後兼久原遺跡』第 21 集
北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡』第 21 集
北谷町教育委員会 2016『平安山原Ａ遺跡』第 38 集
中野区教育委員会・旧国立療養所中野病院跡地遺跡調査会 1999『江古田遺跡Ⅰ』
今帰仁村教育委員会 1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』第 14 集
今帰仁村教育委員会 2011『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅴ』第 29 集
名護市教育員会 2007『屋部前田原貝塚』第 18 集
那覇市教育委員会 1997『銘苅原遺跡』第 35 集
那覇市教育委員会 2001『銘苅古墓群（Ⅲ）』第 50 集
那覇市教育委員会 2005『銘苅古墓群（Ⅵ）』第 66 集
那覇市教育委員会 2007『銘苅古墓群　重要遺跡確認調査報告』第 72 集
那覇市教育委員会 2018『那覇市大嶺海岸の石切場等跡』107 集
那覇市立壺屋焼物博物館 2014『沖縄宗教藝術の精華 厨子』門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書
南風原町教育委員会 2000『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』第３集
南風原町教育委員会 2005『津嘉山古島遺跡　仲間村跡Ａ地点　仲間村跡Ｂ地点　津嘉山クボー遺跡』第４集
南風原町教育委員会 2008『第三十二軍司令部　津嘉山豪群　津嘉山北地区旧日本軍壕群』第７集
南風原町教育委員会 2010『津嘉山北地区旧日本軍壕群Ⅱ』第８集
本部町教育委員会 2009『瀬底島・アンチの上貝塚』第９集

図　　版

図版 1 ～ 44	普天間石川原第一遺跡 ・・・・・・・・	205 ～ 248
図版 45	普天間グスクンニー遺跡 ・・・・・・・	249
図版 46 ～ 62 図版 65 ～ 89	普天間下原古墓群 ・・・・・・・・・・	250 ～ 267 270 ～ 294
図版 63 ・ 64	普天間古集落獣骨埋設遺構 ・・・・・	268 ・ 269
図版 90 ～ 93	脊椎動物遺体 ・・・・・・・・・・・・	295 ～ 298

1区 第1遺構面完掘 南から

列状ピット群1検出 南西から

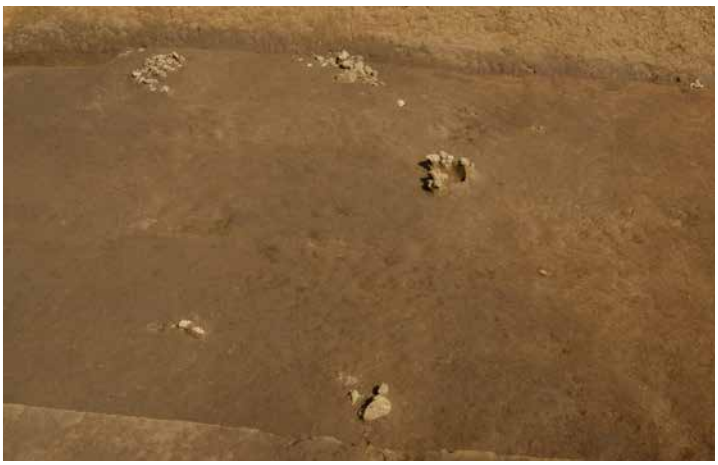
列状ピット群1完掘 南東から

列状ピット群1 断面

SP1002 断面 西から

Ⅲ層遺物出土状況

Ⅳ層遺物出土状況



SS1001・1002 検出 西から

図版 1　普天間石川原第一遺跡（１区）

1区 第2遺構面完掘 北から

SL1001 断面(上)・完掘(下) 北から

SD1008・SK1001 完掘 南から

SD1007・1008 ベルト1 断面 南から

1区 北壁 南から

図版 2　普天間石川原第一遺跡（１区）

2区 第1遺構面 西から

2区 第1遺構面 北西から

図版 3　普天間石川原第一遺跡（２区）

SD2001・SS2001 北西から

SD2001 内礫検出

SD2001 断面 西から

SD2001 掘削作業

SD2001 遺物出土状況

図版 4　普天間石川原第一遺跡（２区）

SS2001 検出 西から

Ⅲ層遺物出土状況

SP群検出 西から

SP群完掘 西から

2区 第2遺構面完掘 北西から

図版 5　普天間石川原第一遺跡（２区）

SS2002 検出 東から

SS2003 検出 南から

SS2002 断面 東から

SS2003 断面 南から

SS2003 検出作業

Ⅳ層遺物出土状況

図版 6　普天間石川原第一遺跡（２区）

2区 ベルト1上部 南から

2区 ベルト1下部 南から

2区 ベルト2 南西から

2区 作業状況

2区 土層堆積状況 南西から

図版 7　普天間石川原第一遺跡（２区）

3区 遺構検出 東から

SK3001 断面 西から

SP3002 断面 北から

3区 重機掘削作業

3区 作業状況

図版 8　普天間石川原第一遺跡（3 区）

4区 第1遺構面検出 南から

SS4001 検出 南から

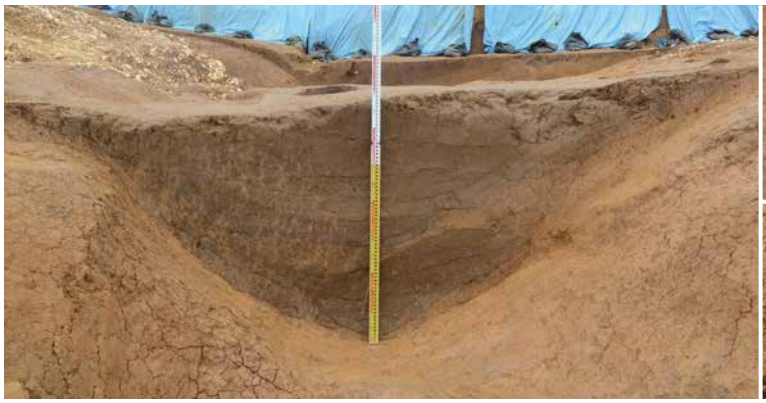
SD4001 断面 西から

4区 西側遺構検出 西から

4区 南西側遺構半截 北西から

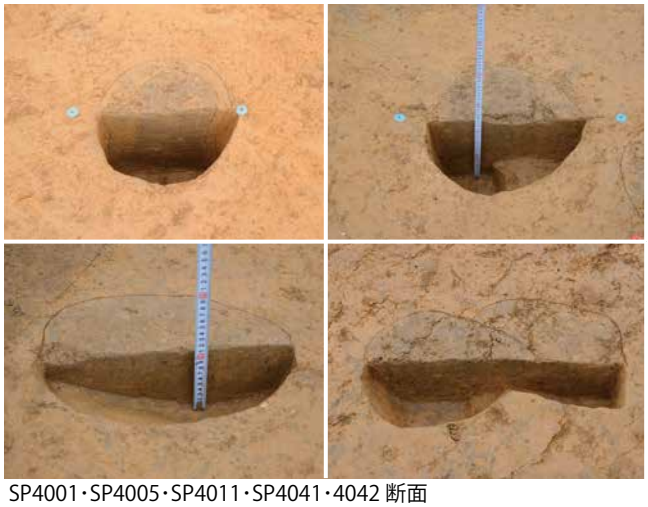
図版 9　普天間石川原第一遺跡（４区）

SD4009 西から

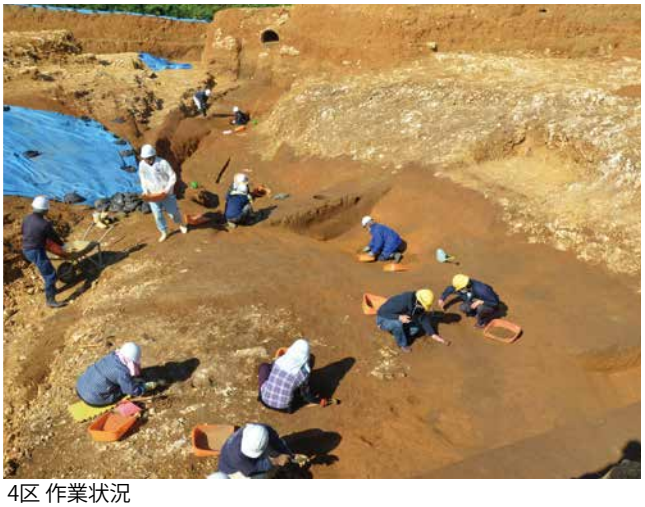


SD4009 断面 西から

Ⅲ層遺物出土状況



SP4001・SP4005・SP4011・SP4041・4042 断面



4区 作業状況

図版 10　普天間石川原第一遺跡（４区）

SX4001 南西から

SX4001 掘削作業

SX4001 遺物出土状況

SX4001 完掘 西から

Ⅳ層遺物出土状況

4区 東壁 西から

図版 11　普天間石川原第一遺跡（４区）

5区 第1遺構面検出 北から

5区 第1遺構面完掘 東から

図版 12　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

SF5001 検出 西から

SD5003・5004 完掘 北東から

SL5001 検出 西から

SL5001 珊瑚礫層・炭層検出 東から

SL5001 断面 南から

SL5001 完掘 東から

SL5001 燃焼部断面 南から

SL5001 被熱部断面 南東から

図版 13　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

5区 第2遺構面完掘 北から

図版 14　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

5区 第2遺構面検出 南から

5区 第2遺構面完掘 北から

図版 15　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

５区 第2遺構面検出 東から

５区 第2遺構面東側完掘 南から

図版 16　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

5区第2遺構面検出 北西から

図版 17　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

SS5002・5003 検出 北西から

SS5002 検出 北西から

SS5002・5003 検出 北東から

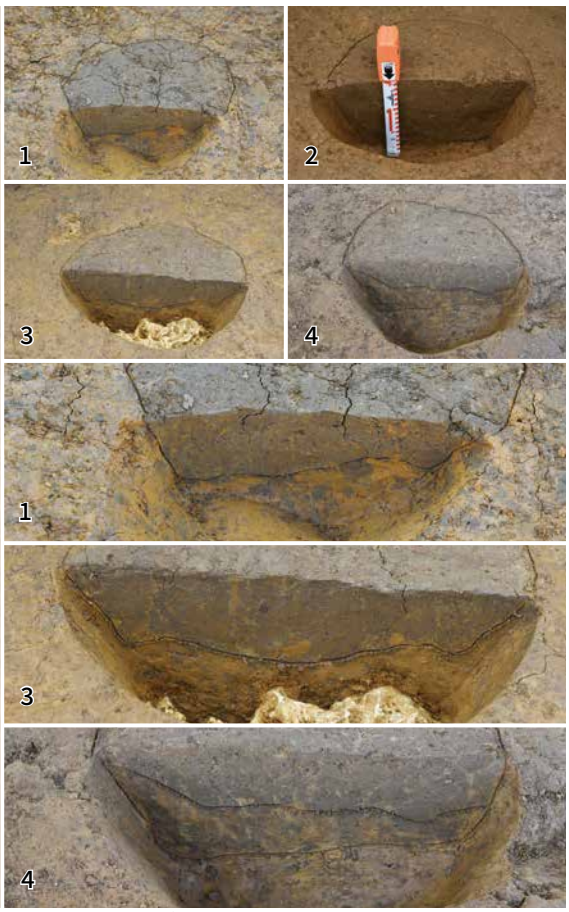
SD5009 検出 北から

SD5009 断面 西から

図版 18　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

列状ピット群2完掘 西から

列状ピット群2検出 南から



列状ピット群2断面(1:SP5022 2:SP5047 3:SP5049 4:SP5105)

図版 19　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

列状ピット群2 半截状況

列状ピット群2 作業状況

列状ピット群3 検出 北西から

列状ピット群3 断面

列状ピット群3 作業状況

SP5062・5063 断面 北から

5区 北側作業状況

図版 20　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

SL5003　左上:検出　右上:断面・遺物検出
左下:完掘　右下:作業状況

SL5003 炭層検出 北から

SL5004 炭層検出 北から

SL5004　左上:検出　右上:断面・礫検出
左下:完掘　右下:被熱部断面

SL5005　左上:検出　右上:断面
左下:完掘　右下:被熱部断面

SL5005 炭層検出 東から

図版 21　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

SS5004 検出 北から

SS5004 検出 北西から

Ⅳ層 土器検出状況

Ⅲ・Ⅳ層 遺物出土状況

5区 土器記録作業

図版 22　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

5区 北壁 南から

5区 北壁西側下部 南から

5区 ベルト1 南から

5区ベルト3（上:上層部 下:下層部）西から

5区 ベルト2 西から

5区 ベルト3 作業状況

図版 23　普天間石川原第一遺跡（５区北側）

5区 第1遺構面検出 北東から

SF5001 検出 東から

SF5001 完掘 東から

SF5001 遺物出土状況

SF5001 作業状況

図版 24　普天間石川原第一遺跡（５区南側）

SD5011 礫検出 西から

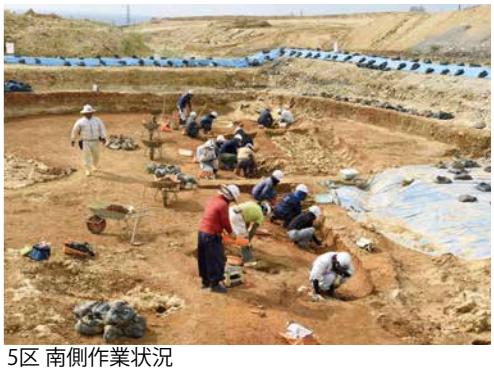
SD5011 礫検出 東から

SD5011・SD5012 完掘状況 西から

SD5011 遺物出土状況

SD5012 クワ跡検出 西から

SD5012 断面 西から

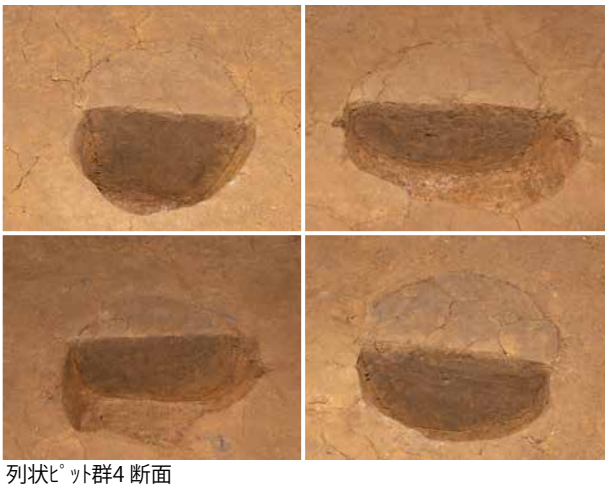


5区 南側作業状況

図版 25　普天間石川原第一遺跡（5 区南側）

5区 第2遺構面検出 北西から

列状ﾋﾟｯﾄ群4 完掘 北西から



列状ﾋﾟｯﾄ群4 断面

Ⅲ層遺物出土状況

5区 南壁 北東から

図版 26　普天間石川原第一遺跡（5 区南側）

6区 第1遺構面完掘 北から

SD6007・6008 完掘 東から

SD6007 断面 東から

SU6001 検出 西から

SD6008 遺物出土状況

6区 重機掘削

6区 作業状況

SD6007 石列検出 南西から

図版 27　普天間石川原第一遺跡（6 区）

6区 第2遺構面検出 西から

SD6011 遺構出土状況 西から

SD6011 断面 西から

SP6003・6024 断面 西から

SD6011 遺物出土状況

図版 28　普天間石川原第一遺跡（6 区）

Ⅳ層遺物集中部1 西から

Ⅳ層遺物集中部1

Ⅳ層遺物集中部2 南から

Ⅳ層遺物集中部2 1面目

Ⅳ層遺物集中部2 2面目

Ⅳ層遺物集中部2

Ⅳ層遺物集中部3 北西から

Ⅳ層遺物集中部3

Ⅳ層遺物集中部1 作業状況

図版 29　普天間石川原第一遺跡（6 区）

6区 第3検出面 西から

6区 ベルト3 西から

6区 東壁 西から

6区 作業状況

図版 30　普天間石川原第一遺跡（6 区）

7区 遺構完掘 西から

7区 遺構検出 北から

SB7001 検出 東から

SD7002・7003 断面 東から

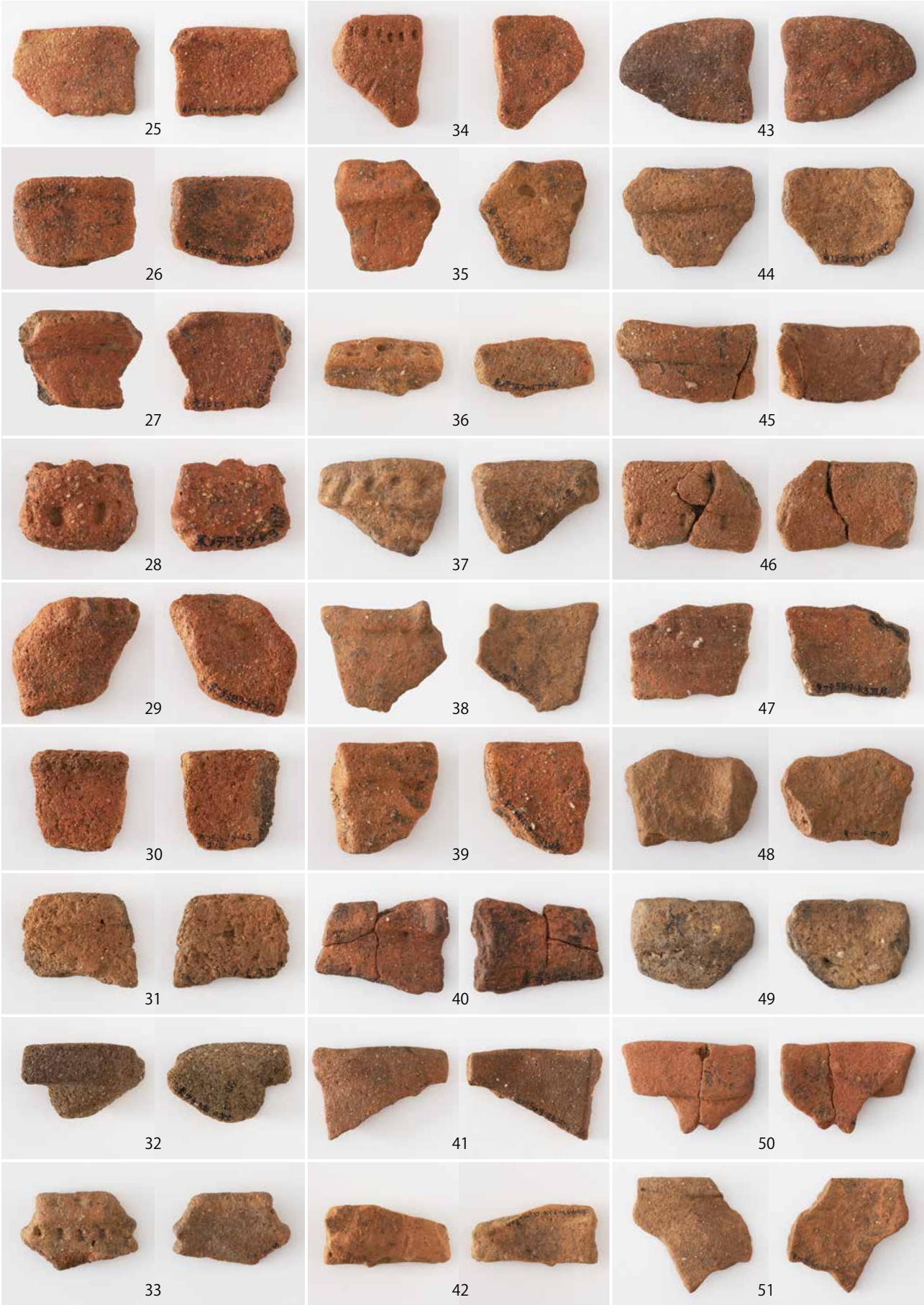
SB7001-P5 断面 東から

SP7003 断面 東から

SB7001 完掘 東から

図版 31　普天間石川原第一遺跡（7 区）

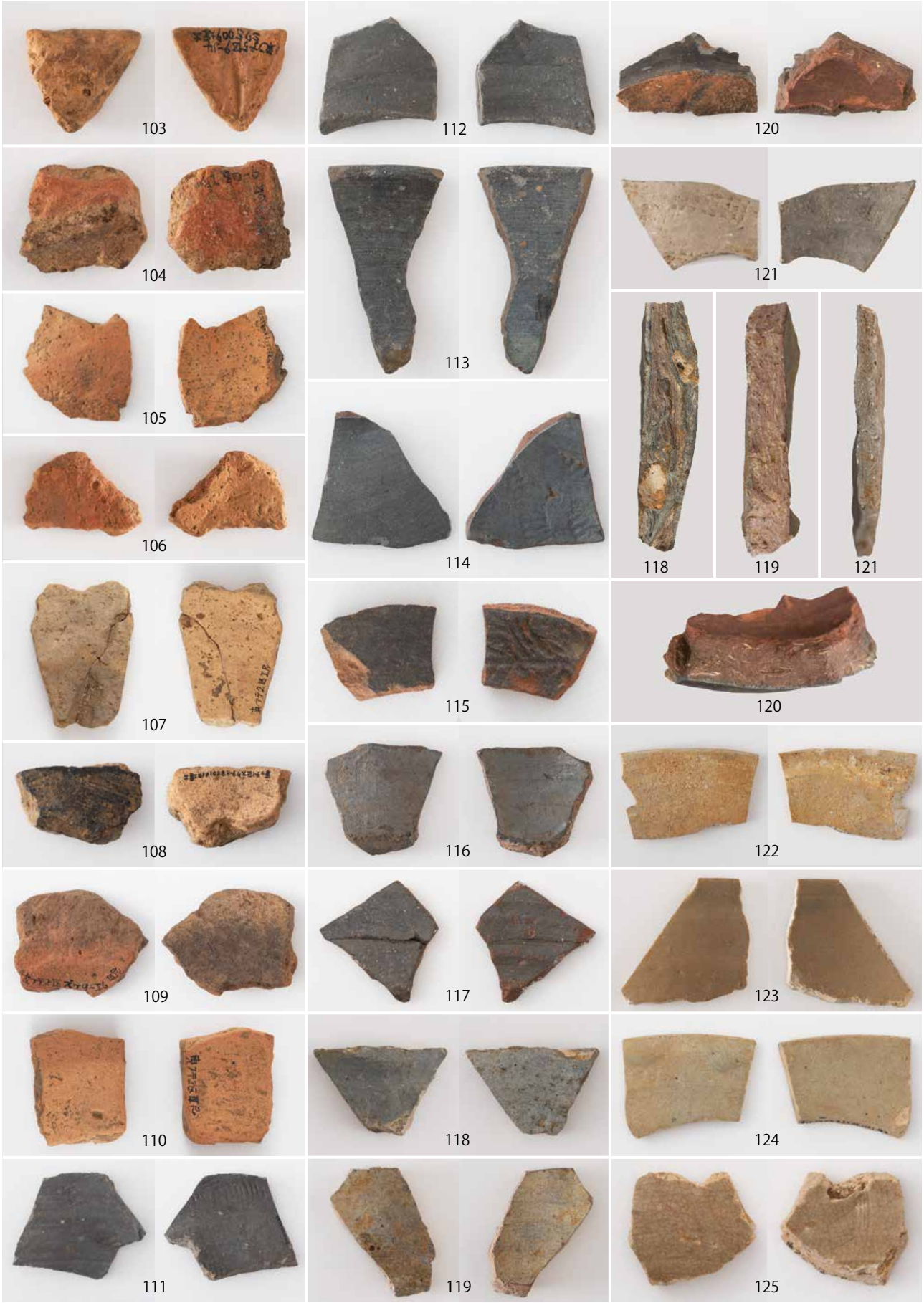
図版 32　普天間石川原第一遺跡出土遺物 1



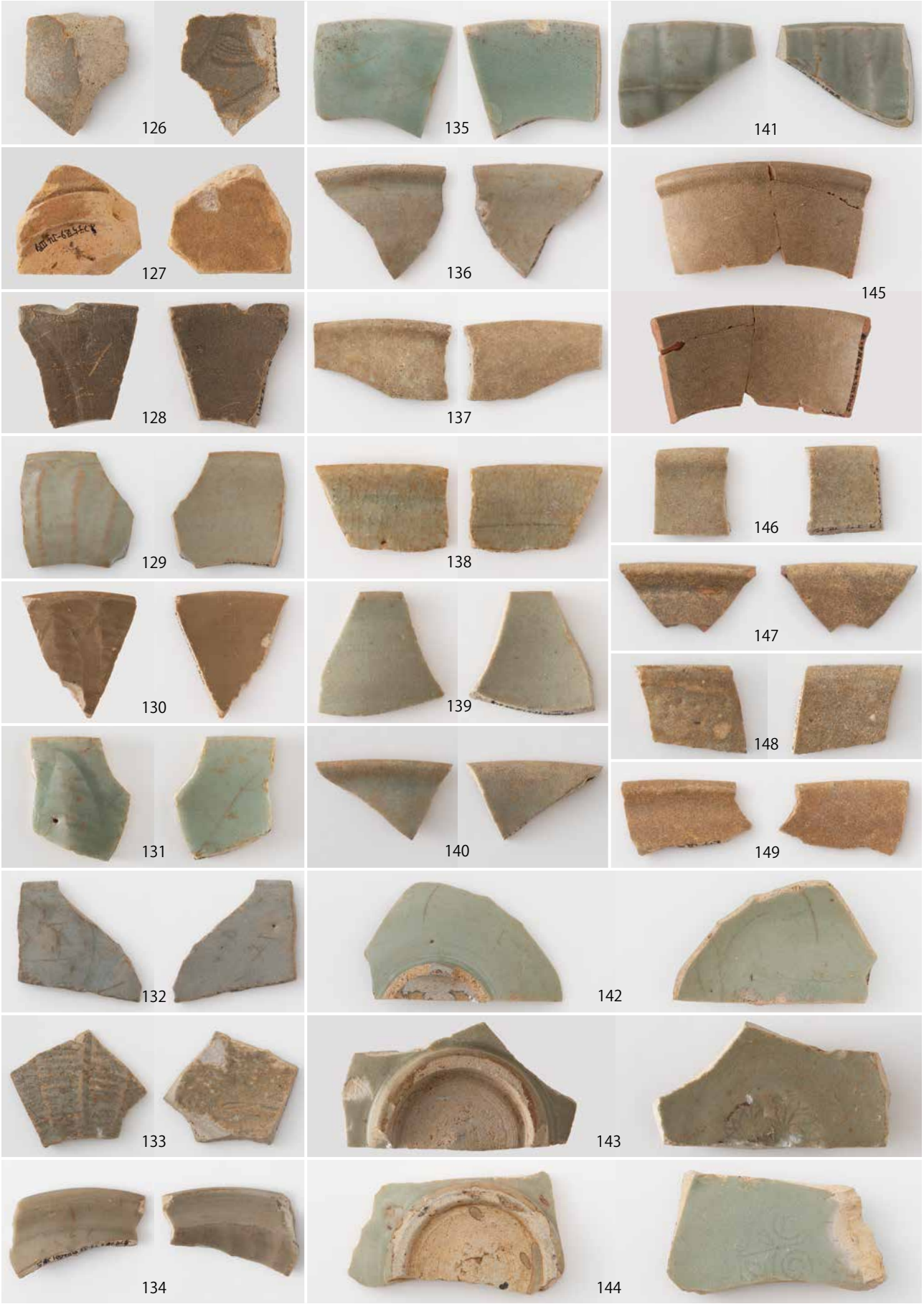
図版 33　普天間石川原第一遺跡出土遺物 2

図版 34　普天間石川原第一遺跡出土遺物 3

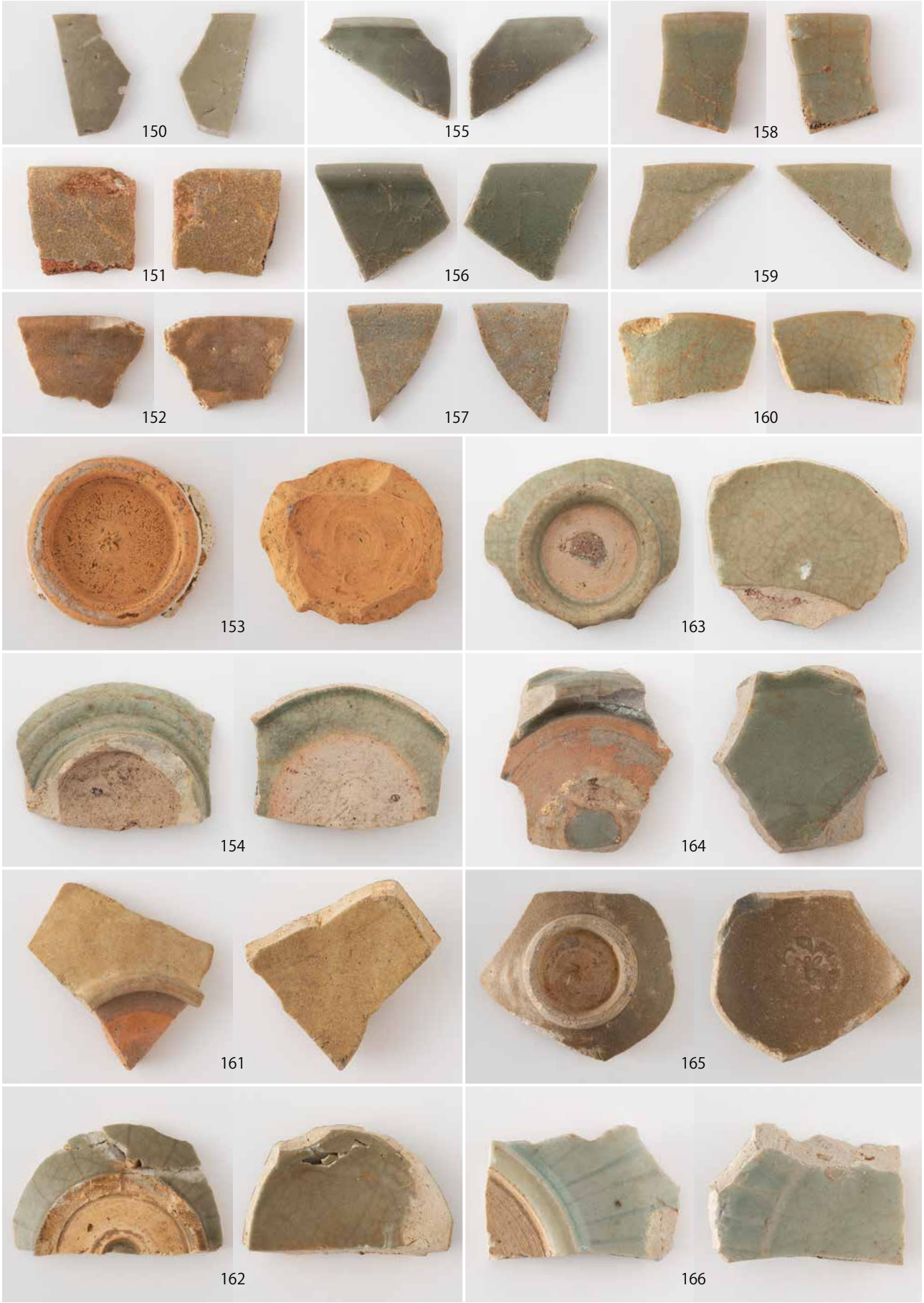
図版 35　普天間石川原第一遺跡出土遺物 4



図版 36　普天間石川原第一遺跡出土遺物 5

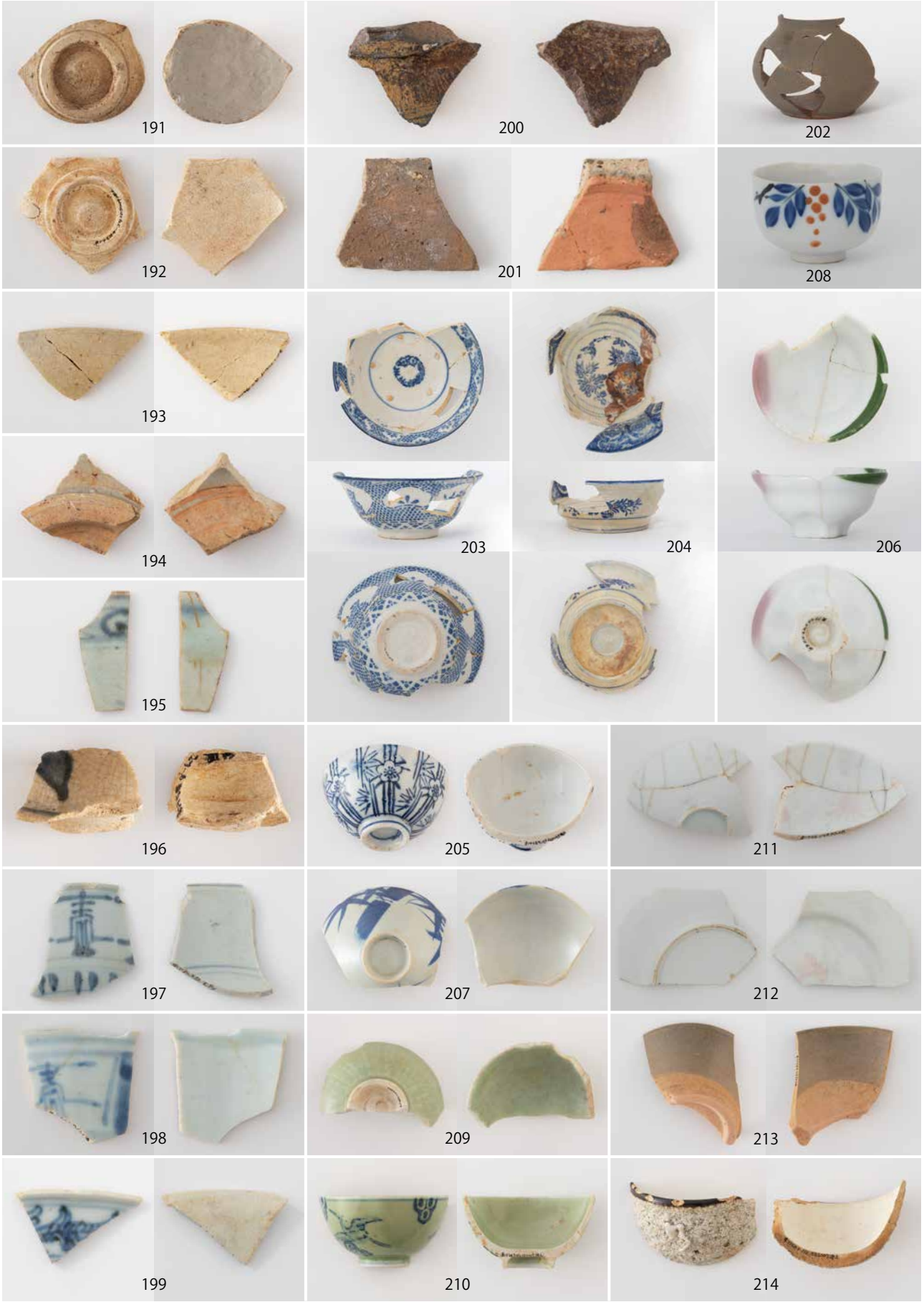


図版 37　普天間石川原第一遺跡出土遺物 6

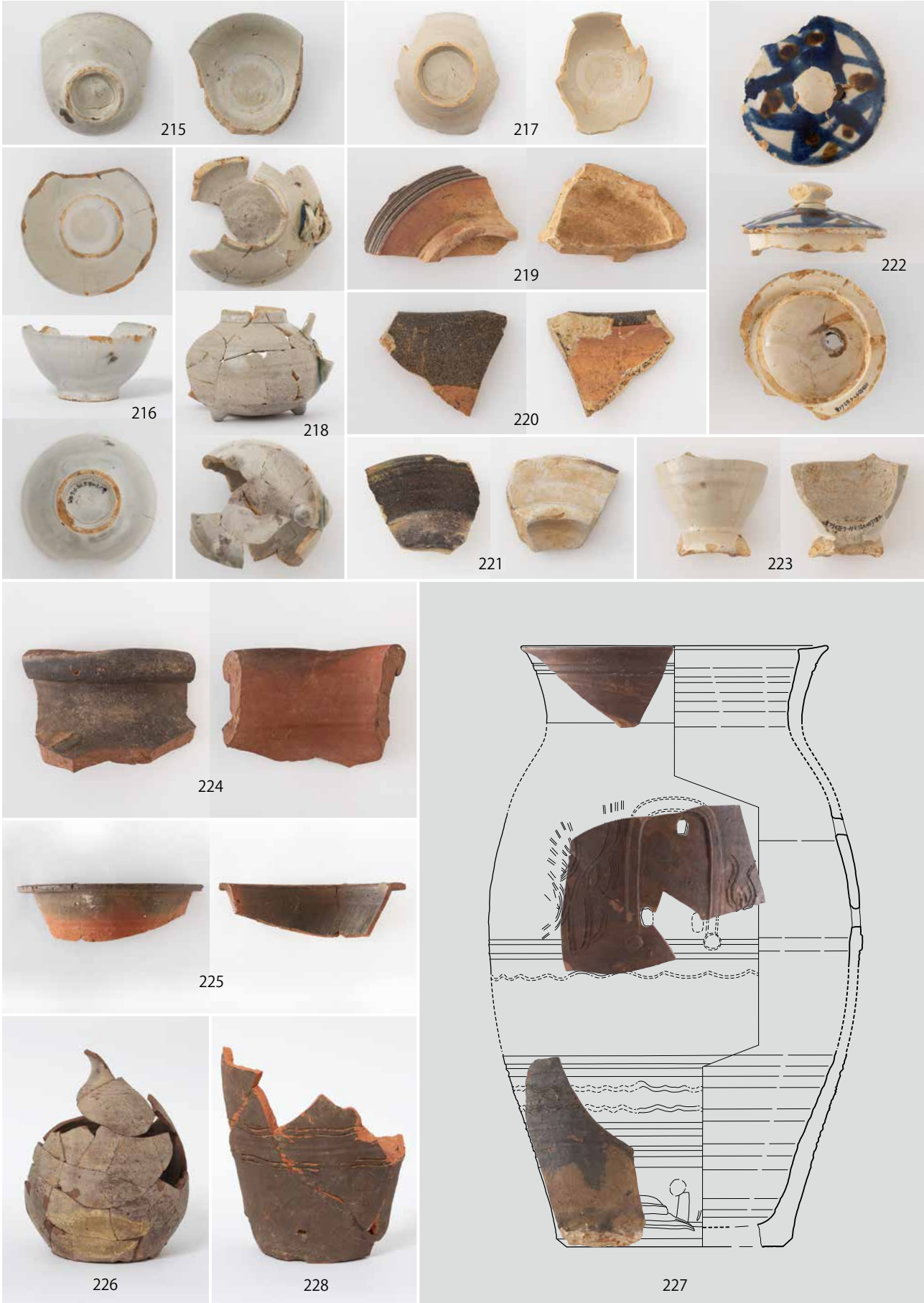


図版 38　普天間石川原第一遺跡出土遺物 7

図版 39　普天間石川原第一遺跡出土遺物 8



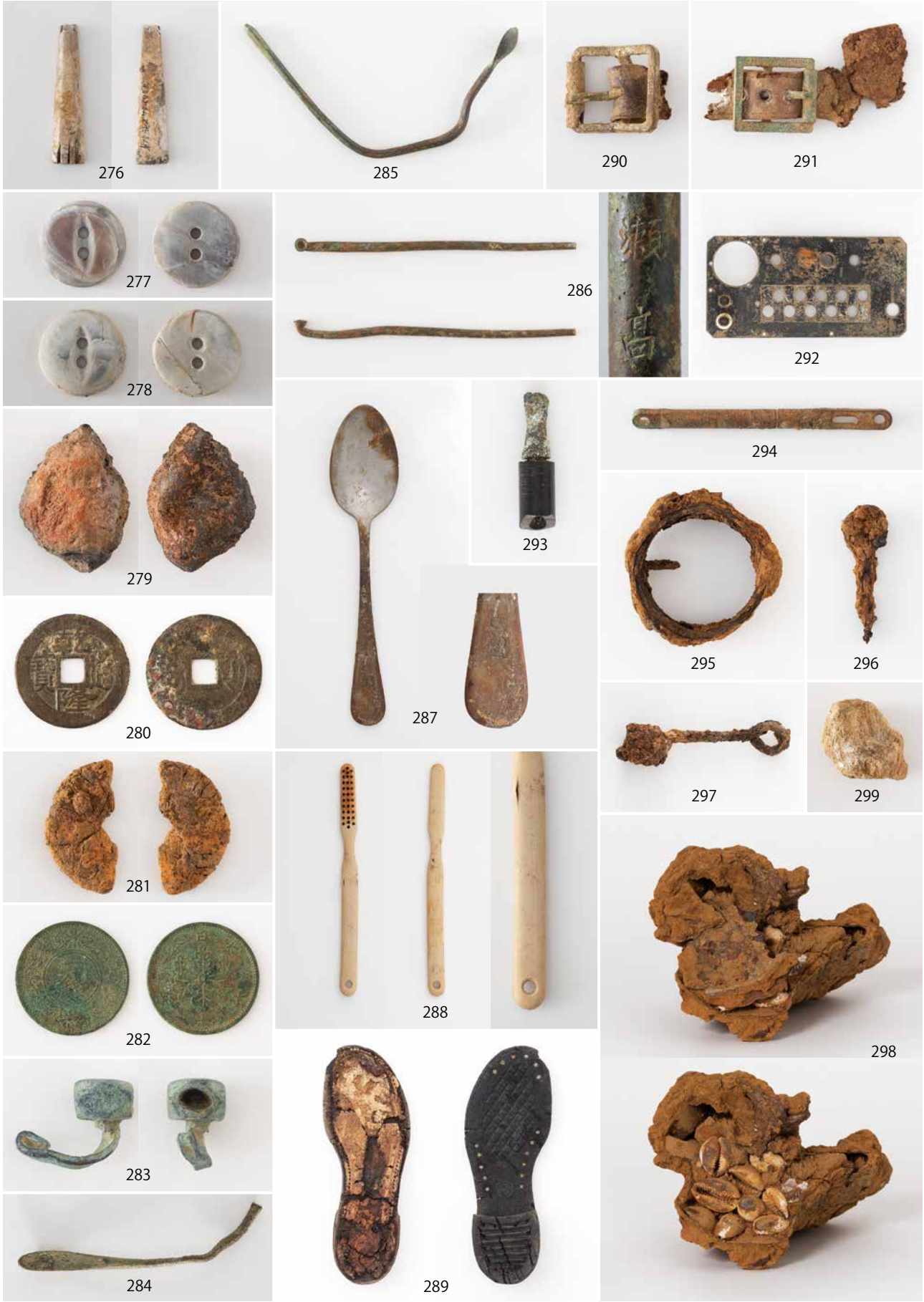
図版 40　普天間石川原第一遺跡出土遺物 9



図版 41　普天間石川原第一遺跡出土遺物 10

図版 42　普天間石川原第一遺跡出土遺物 11

図版 43　普天間石川原第一遺跡出土遺物 12

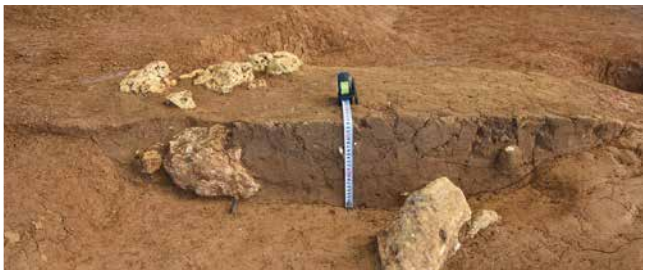


図版 44　普天間石川原第一遺跡出土遺物 13

遺構検出 北から

SD5001断面 西から

作業状況



SD5002断面 西から

図版 45　普天間グスクンニー遺跡の遺構と出土遺物

北1地区の古墓群 全景 西から

図版 46　普天間下原古墓群

1･2号墓 全景 南西から

1･2号墓 掘削前

1号墓 墓口石積み検出 南西から

1号墓 墓室内遺物出土状況

1号墓 墓室内人骨出土状況

2号墓 墓口石積み検出 南西から

1号墓 墓室検出 南西から

1号墓 墓室内遺構断面

2号墓 墓室検出 南西から

図版 47　普天間下原古墓群（1・2 号墓）

3号墓 全景 南から

3号墓 掘削前

3号墓 墓口正面 南西から

3号墓 墓室検出 南西から

3号墓 屋根 北西から

3号墓 墓室右壁

3号墓 右袖垣 南東から

3号墓 右袖垣断面 南西から

3号墓 屋根断面 南東から

図版 48　普天間下原古墓群（3 号墓）

3号墓 前庭部石積み 北西から

3号墓 前庭部断面 南東から

32･33号墓 全景 南西から

32号墓 閉塞石除去後

32号墓 墓室検出 西から

32号墓 墓室内厨子甕

33号墓 墓口 南から

32号墓 厨子甕内遺物出土状況

図版 49　普天間下原古墓群（3・32・33 号墓）

4号墓 全景

4号墓 墓室検出 北西から

4号墓 墓室左壁

4号墓 墓口正面 北西から

4号墓 墓口裏側

4号墓 左袖垣 北東から

4号墓 屋根断面 南西から

4号墓 屋根左後方の石積み 南西から

4号墓 作業状況

図版 50　普天間下原古墓群（4 号墓）

5号墓 正面全景 北西から

5号墓 墓口正面 北西から

5号墓 墓庭トレンチ

5号墓 着手前 墓室獣骨散乱状況

5号墓 墓室検出 北西から

5号墓 墓口裏側

5号墓 墓庭遺物出土状況

5号墓 墓門付近遺物出土状況

5号墓 作業状況

図版 51　普天間下原古墓群（5 号墓）

7号墓 全景 南西から

7号墓 屋根 西から

7号墓 右袖垣 南東から

7号墓 墓庭トレンチ

7号墓 墓室検出 南西から

鏡石を固定するホゾ穴

7号墓 墓門階段 南西から

25号墓 墓口 南西から

29･30号墓 墓口 南西から

29号墓 墓室内遺物出土状況

図版 52　普天間下原古墓群（7・25・29・30 号墓）

8号墓 全景 南西から

8号墓 屋根（上:南東から、左下:西から、右下:断面）

8号墓 墓室検出 南西から

8号墓 墓室断面

8号墓 方形石組（童墓）

8号墓 墓庭トレンチ

9･28号墓 墓口 南西から

図版 53　普天間下原古墓群（8・9・28 号墓）

10号墓 全景 南西から

10号墓 墓口正面 南西から

10号墓 左袖垣 北西から

10号墓 墓室内写真撮影状況

10号墓 墓室検出 南西から

10号墓（上:壁龕状イケ、下:墓口裏側）

11号墓 墓室検出 北西から

11号墓 墓口正面 北西から

11号墓 墓庭トレンチ

図版 54　普天間下原古墓群（10・11 号墓）

16号墓 全景 南西から

16号墓 墓口正面漆喰除去後

16号墓 左袖垣 北西から

16号墓 童手・左袖垣 北東から

16号墓 墓室検出 南西から

16号墓 (上:墓口裏側、下:左袖垣線刻)

24号墓 墓室検出 南西から

図版 55　普天間下原古墓群（16・24 号墓）

19号墓 全景 南から

19号墓 左袖垣 西から

19号墓 カビアンジ

19号墓 墓室(上:検出、下:左壁)　19号墓 墓室(上:天井、下:墓口裏側)　19号墓 墓室(上:遺物、下:獣骨埋設遺構)

図版 56　普天間下原古墓群（19 号墓）

19号墓 墓庭トレンチ

19号墓 屋根トレンチ

19号墓 墓庭トレンチ掘削作業

19号墓 左袖垣断面

丘陵頂上のガジュマルと19号墓

図版 57　普天間下原古墓群（19 号墓）

19号墓 墓庭 壕跡 検出 北から

19号墓 墓庭 壕跡内 柱穴1・2

19号墓 墓庭 壕跡 戦没者人骨

19号墓 墓庭 壕跡 戦没者人骨 近景

19号墓 墓庭 壕跡 戦没者人骨 近景

図版 58　普天間下原古墓群（19 号墓壕跡と戦没者人骨）

21号墓・21号墓南東隣遺構 全景 南から

21号墓 墓口検出 南東から

21号墓 貝集中部検出 南から

26号墓 墓口正面 北から

26号墓 モルタル除去後 北から

26号墓 墓室左壁石積み 東から

26号墓 カビアンジ

26・31・36号墓 北西から

31・36号墓 墓室検出 北から

31号墓 墓室内厨子甕

図版 59　普天間下原古墓群（21・26・31・36 号墓）

27号墓 全景 北から

27号墓 墓室内厨子甕1～3

27号墓 墓室内厨子甕1～4

27号墓 厨子甕1内人骨 正面側から

厨子甕内人骨 正面側から（上:2、下:3）

27号墓 上:掘削前、下:作業状況

図版 60　普天間下原古墓群（27 号墓）

34号墓 全景 北西から

34号墓 墓口正面 北から

34号墓 モルタル除去後 北から

34号墓 右袖垣と35号墓 西から

34号墓 墓室検出 北から

35号墓 墓口 西から

34号墓 作業状況（上:重機掘削、下:墓室内）

図版 61　普天間下原古墓群（34・35 号墓）

石積み1・2 検出 北西から

石積み3～6 検出 南から

石積み8 検出 西から

上:石積み9と墓道 北東から、下:石積み9 検出 北から

現地保存されたガジュマル

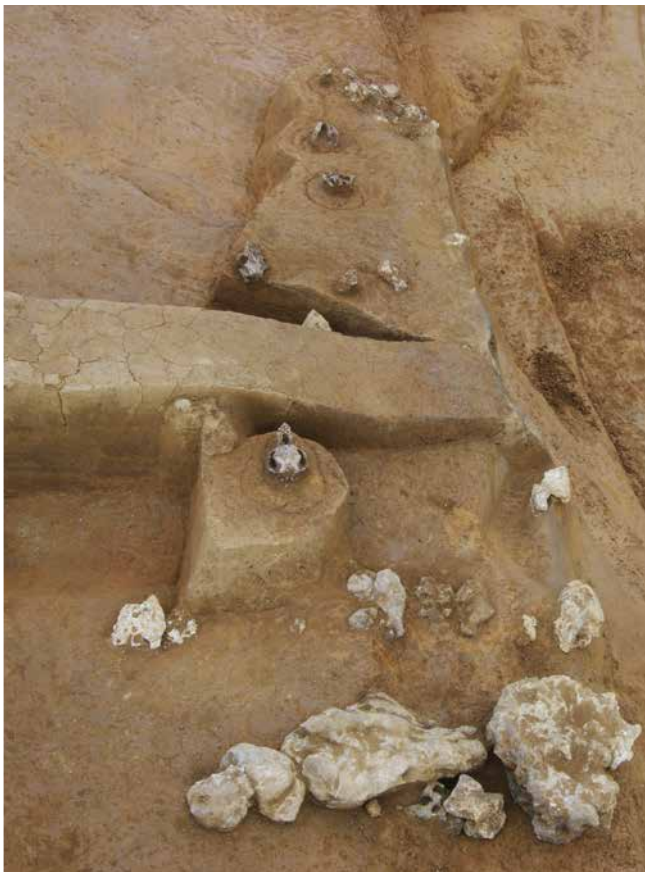
ガジュマル根元の配石遺構（不明遺構2）

19号墓屋根後方石列・石碑 北西から

図版 62　普天間下原古墓群（石積み及び不明遺構）

獣骨埋設遺構 検出状況 南から

獣骨埋設遺構 検出状況 西から



獣骨埋設遺構 検出状況 東から

図版 63　普天間古集落の獣骨埋設遺構（海軍病院地区Ⅲ地区）

道跡と獣骨埋設遺構遠景 東から

SK105 獣骨検出状況 上面から

SK105 獣骨検出状況 拡大

SK105 獣骨検出状況 北から

SK105 断面 東から

図版 64　普天間古集落の獣骨埋設遺構（海軍病院地区Ⅲ地区）

図版 65　普天間下原古墓群出土遺物 1

図版 66　普天間下原古墓群出土遺物 2

1号墓

2号墓

3号墓

4号墓

5号墓

図版 67　普天間下原古墓群出土遺物 3

32号墓

33号墓

25号墓

29号墓

7号墓

図版 68　普天間下原古墓群出土遺物 4

30号墓

8号墓

9号墓

28号墓

10号墓

11号墓

16号墓

21号墓

図版 69　普天間下原古墓群出土遺物 5

19号墓

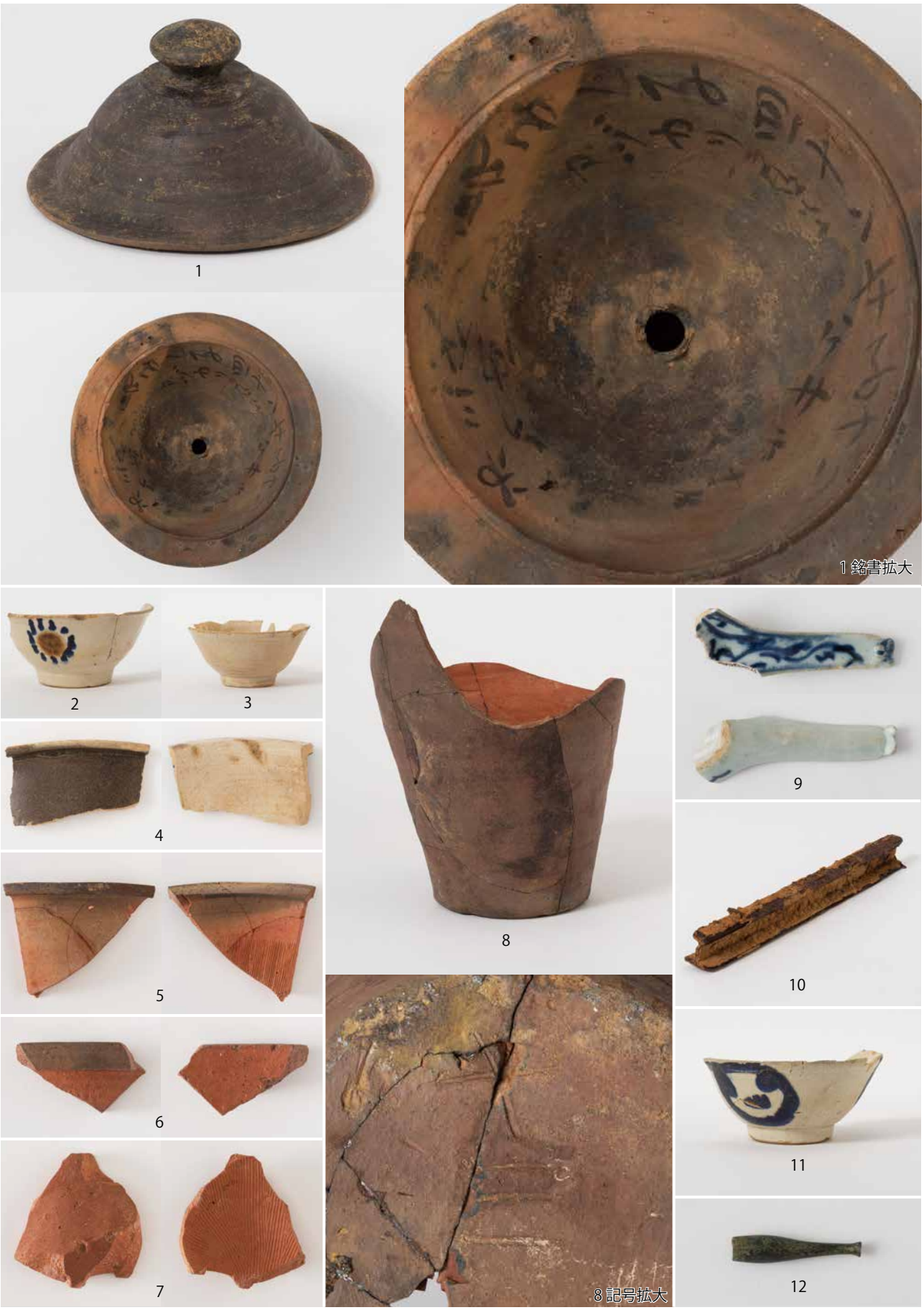
31号墓

36号墓

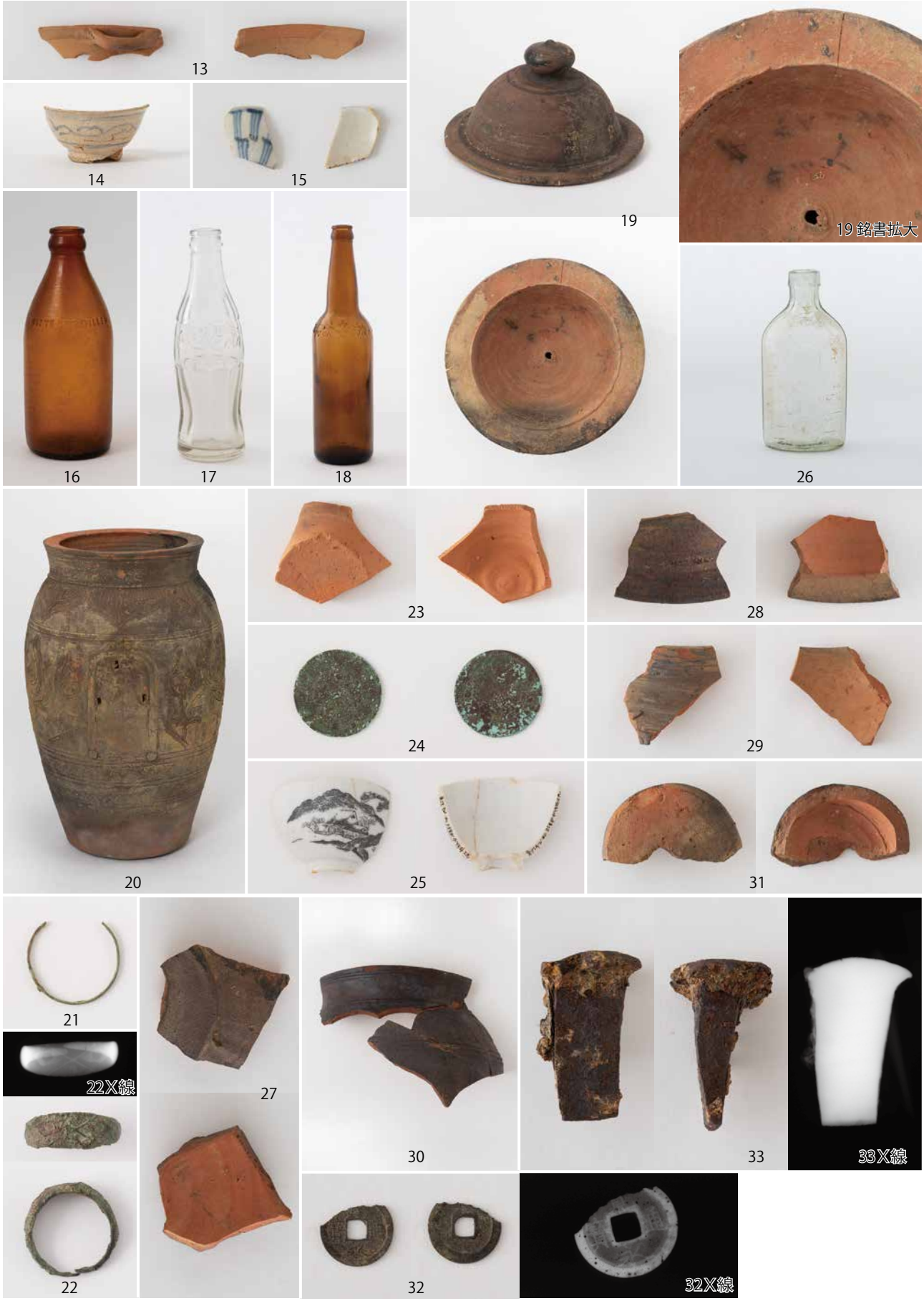
34号墓

27号墓

図版 70　普天間下原古墓群出土遺物 6



図版 71　普天間下原古墓群出土遺物 7



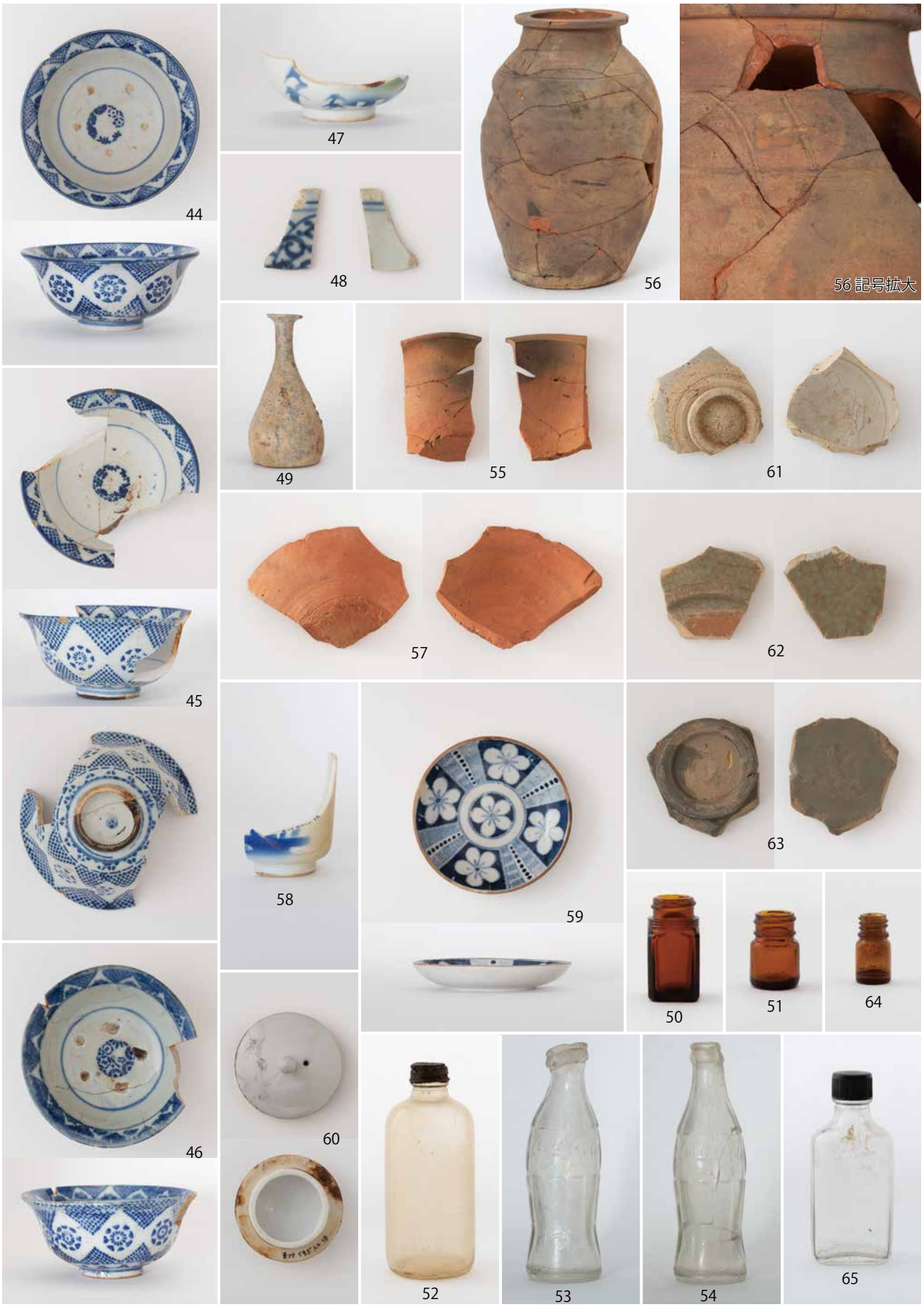
図版 72　普天間下原古墓群出土遺物 8

34・35

36・37

図版 73　普天間下原古墓群出土遺物 9

図版 74　普天間下原古墓群出土遺物 10



図版 75　普天間下原古墓群出土遺物 11

66・67

67 裏面

68 銘書拡大

68

図版 76　普天間下原古墓群出土遺物 12

69

69 裏面

69 銘書拡大

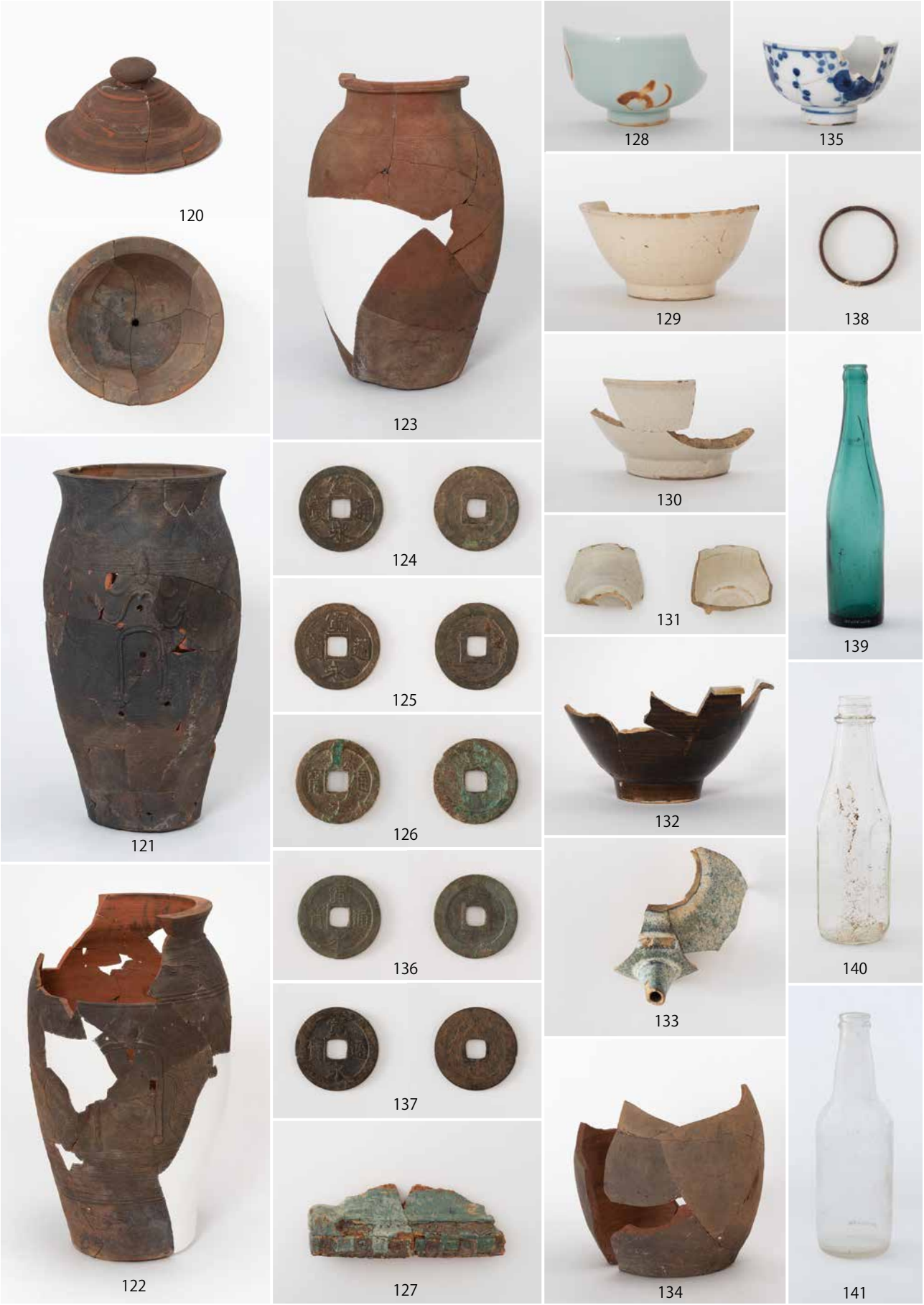
70

図版 77　普天間下原古墓群出土遺物 13

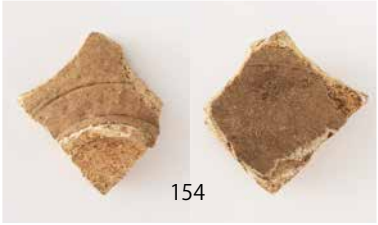
図版 78　普天間下原古墓群出土遺物 14

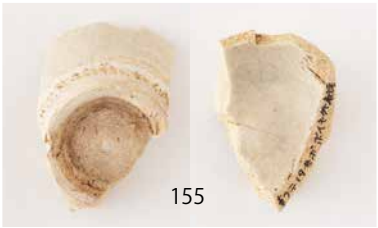
図版 79　普天間下原古墓群出土遺物 15

図版 80　普天間下原古墓群出土遺物 16



図版 81　普天間下原古墓群出土遺物 17





図版 82　普天間下原古墓群出土遺物 18

図版 83　普天間下原古墓群出土遺物 19

171

172

173

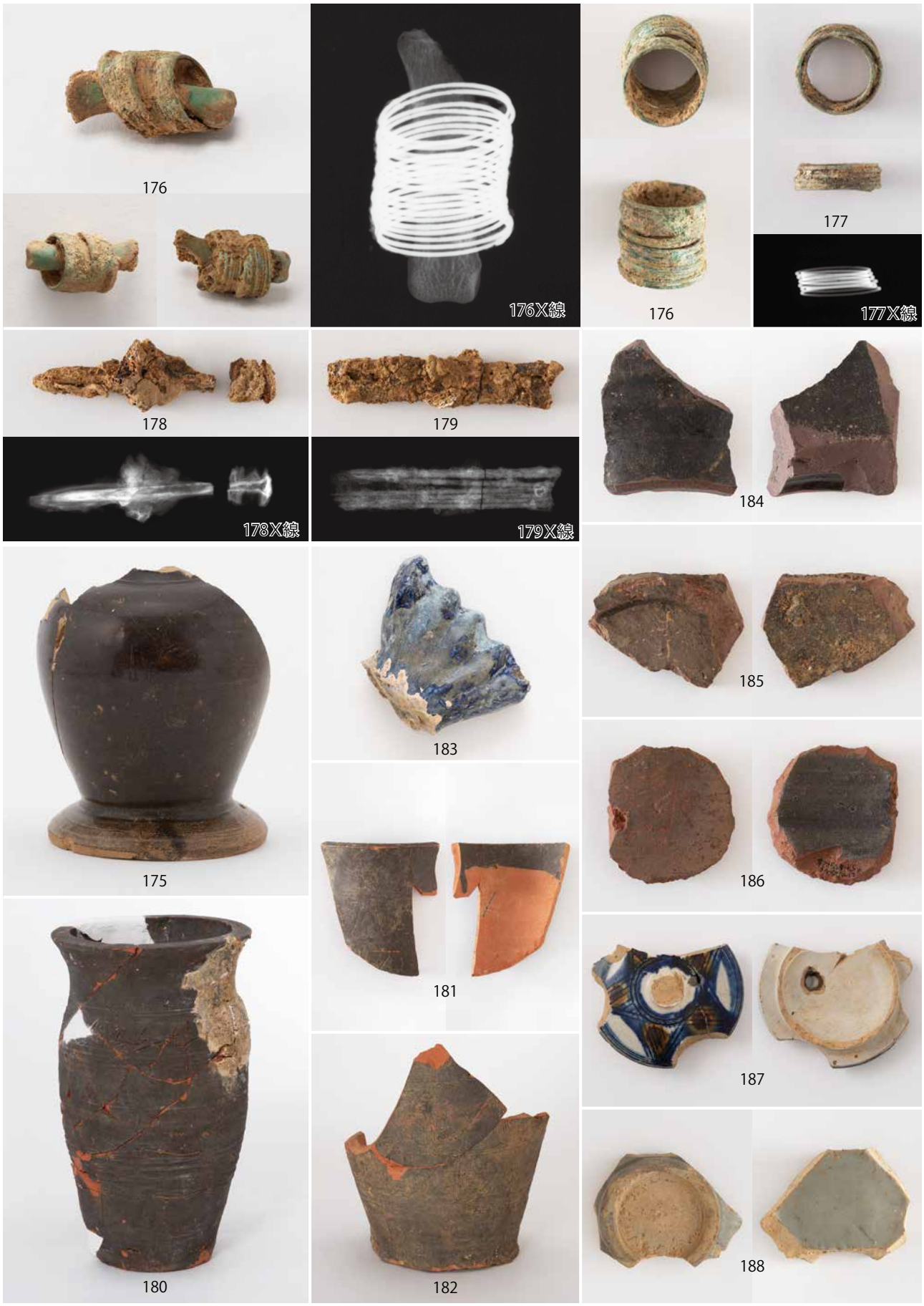
図版 84　普天間下原古墓群出土遺物 20

173 裏面

174

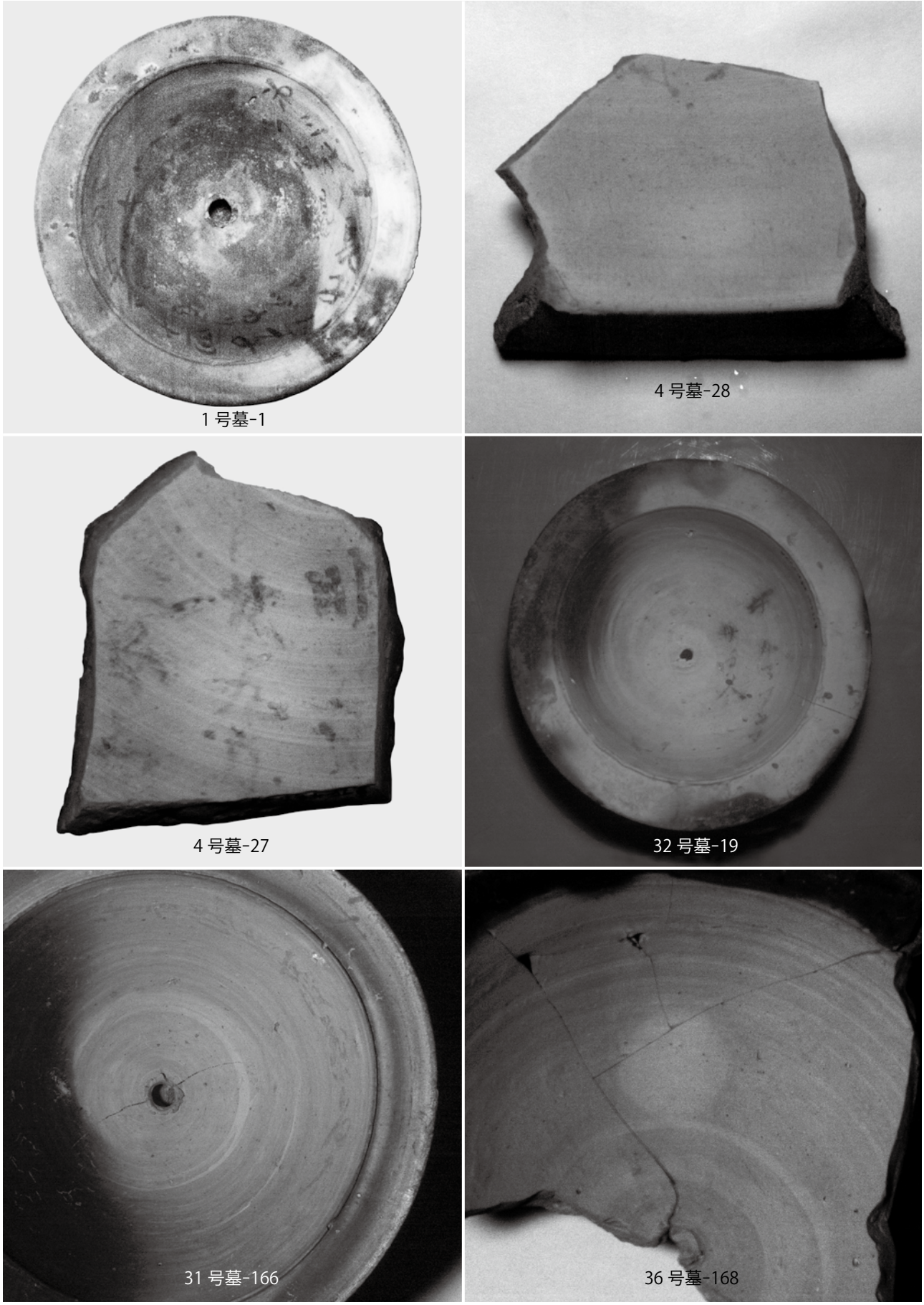
174 展開写真

図版 85　普天間下原古墓群出土遺物 21

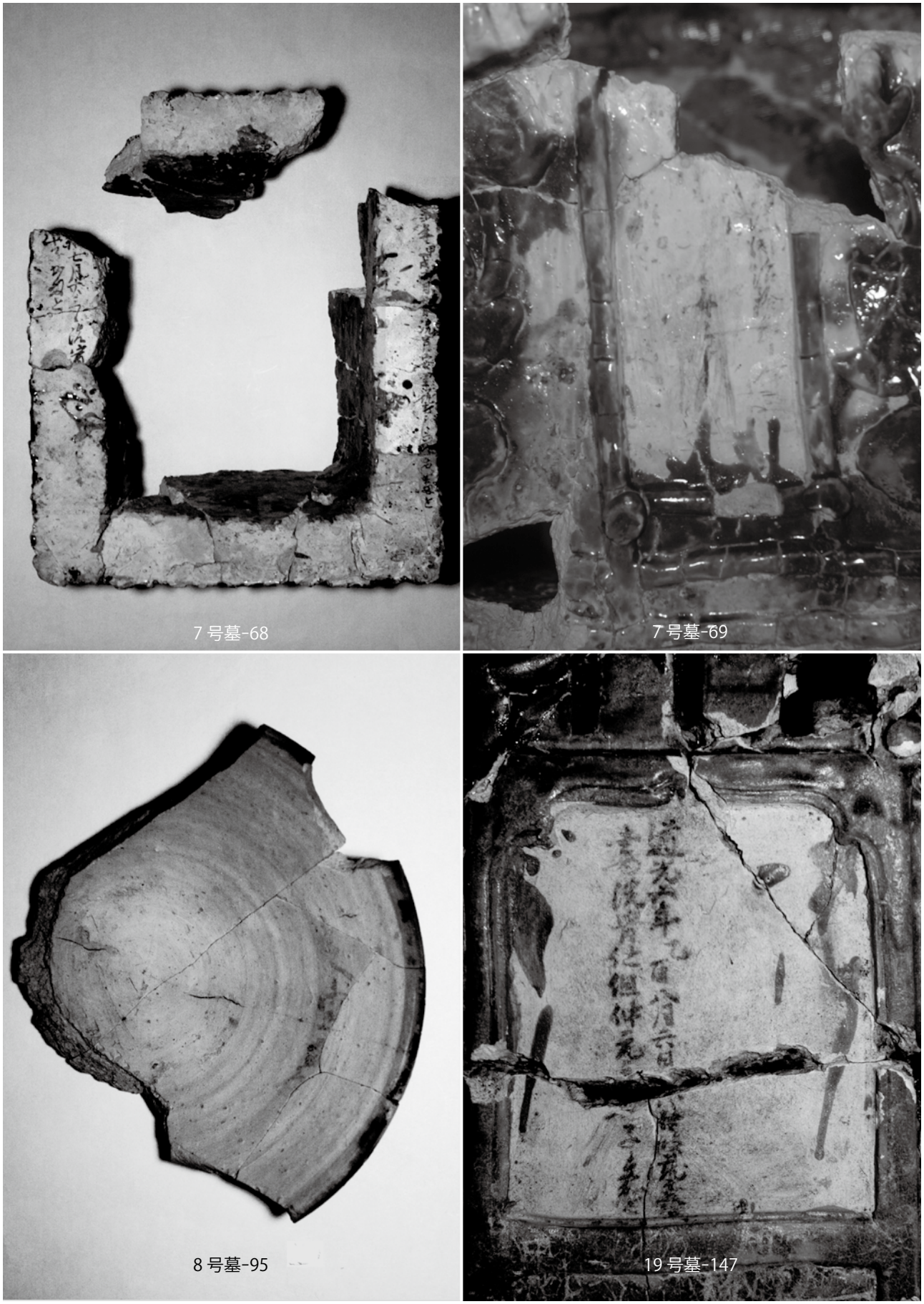


図版 86　普天間下原古墓群出土遺物 22

図版 87　普天間下原古墓群出土遺物 23

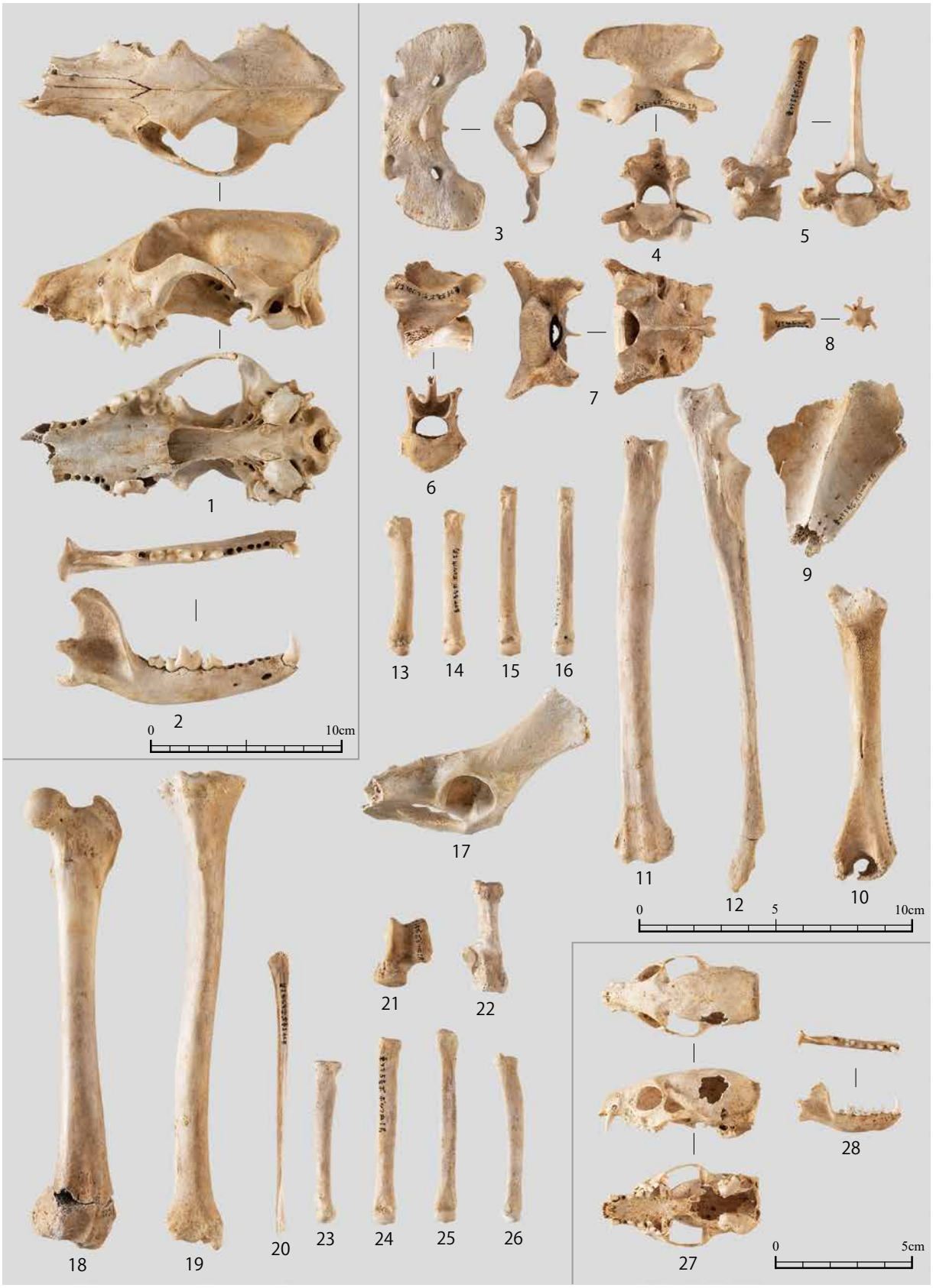


図版 88　銘書の赤外線写真 1



図版 89　銘書の赤外線写真 2

図版 90　脊椎動物遺体（上：5 号墓 イヌ（上、左下）・ネコ（右下）　下：19 号墓 ブタ）

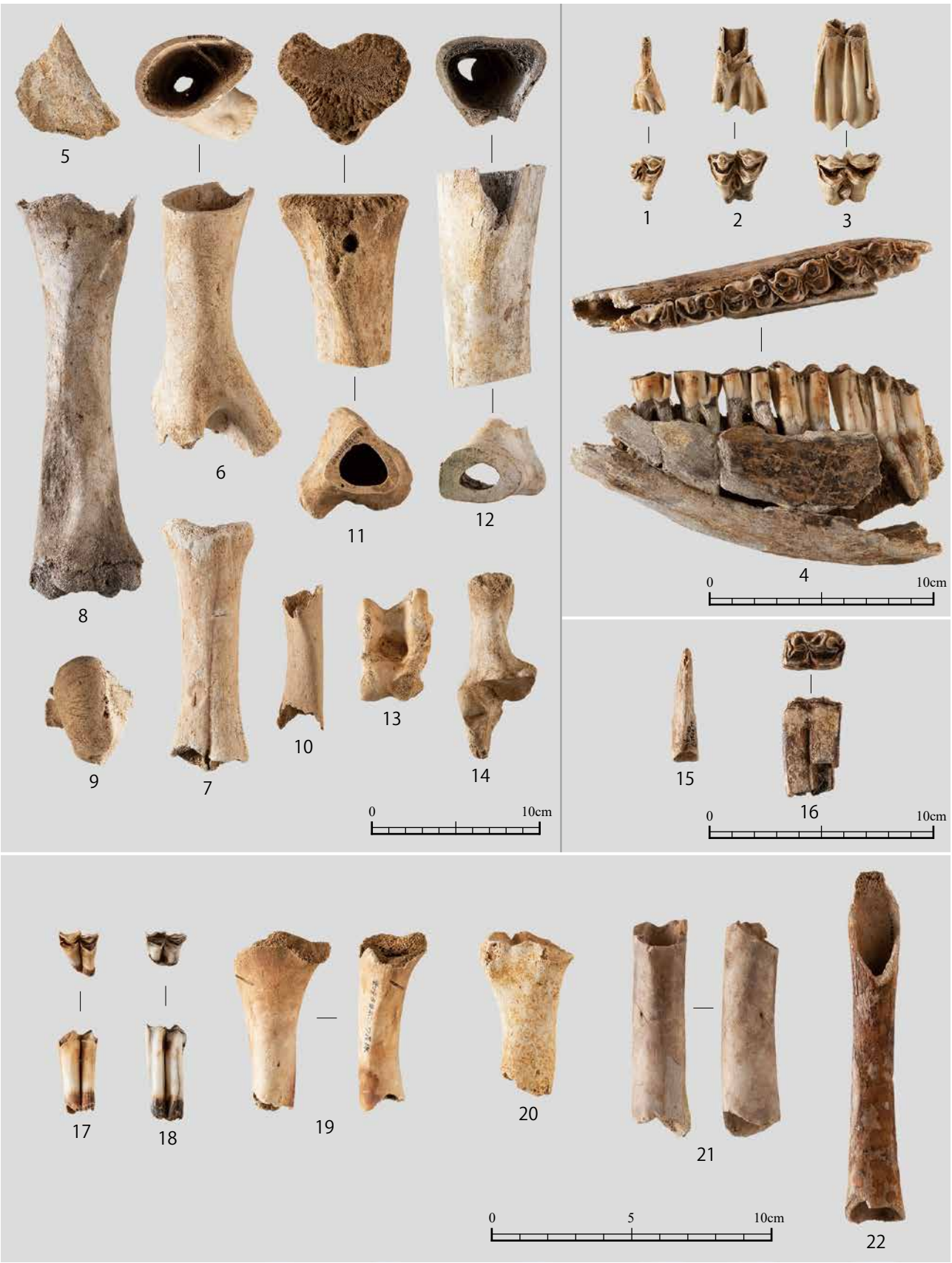


図版 91　脊椎動物遺体 1

イヌ 1. 頭蓋骨 $P^3P^4M^1M^2$(左)P^4(右)　2. 下顎骨 C××P_4 M_1M_2× 右　3. 環椎　4. 軸椎　5. 胸椎　6. 腰椎　7. 仙骨　8. 尾椎　9. 肩甲骨 左
10. 上腕骨 左　11. 橈骨 左　12. 尺骨 右　13. 中手骨 II 右　14. 中手骨III 右　15. 中手骨IV 右　16. 中手骨 V 右　17. 寛骨 右　18. 大腿骨 右　19. 脛骨 右
20. 腓骨 右　21. 距骨 左　22. 踵骨 左　23. 中足骨 II 右　24. 中足骨III 右　25. 中足骨IV 右　26. 中足骨 V 右　**マングース**　27. 頭蓋骨 C×$P^2P^3P^4M^1M^2$(左右)
28. 下顎骨 C×$P^2P^3P^4M_1$× 右

図版 92　脊椎動物遺体 2

ネコ 1. 下顎骨 左　2. 胸椎　3. 腰椎　4. 仙骨　5. 肋骨 左　6. 肩甲骨 右　7. 上腕骨 左　8. 橈骨 左　9. 橈骨 右　10. 尺骨 左　11. 中手骨Ⅱ左　12. 中手骨Ⅲ左　13. 寛骨 左　14. 大腿骨 左　15. 脛骨 左　16. 距骨 左　17. 中足骨Ⅲ右　18. 中節骨　**ブタ** 19. 頭蓋骨　20. 上顎骨 (I^1)×××× 左　21. 上顎骨 ××〖M^2〗(M^3) 左　22. 下顎 C 左　23. 下顎骨 ××M_1M_2(M_3) 左　24. 下顎骨 I_1××$dP_2(P_3P_4)$×M_2 左　**イノシシ / ブタ** 25. 肩甲骨 左　26. 上腕骨 左 (螺旋状剝片)　27. 上腕骨 右 (螺旋状剝片)　**ブタ** 28. 大腿骨 右　　※〖　〗萌出中　(　) 未萌出



図版 93　脊椎動物遺体 3

ウシ 1. 上顎 dm^4 左　2. 上顎 M^1 左　3. 上顎 M^2 左　4. 下顎骨 $dm_3dm_4M_1M_2M_3$ 左　5. 肩甲骨 右　6. 上腕骨 右 (切断)　7. 中手骨 左　8. 大腿骨 左　9. 大腿骨 左 (カットマーク)　10. 脛骨 右 (螺旋状剝片)　11. 脛骨 右 (切断)　12. 脛骨 左 (切断)　13. 距骨 左　14. 踵骨 右　**ウマ** 15. 上顎 / 下顎 I^1 左　16. 下顎 P_4 左　**ヤギ** 17. 下顎 M_1/M_2 左　18. 下顎 M_2 左　19. 上腕骨 左 (カットマーク)　20. 橈骨 右　21. 大腿骨 右 (カットマーク、螺旋状剝片)　22. 脛骨 右

報告書抄録

ふりがな	ふてんまいしちゃーばるだいいちいせき・ふてんまぐすくんにーいせき・ふてんましちゃばるこぼぐん
書　　名	普天間石川原第一遺跡・普天間グスクンニー遺跡・普天間下原古墓群
副　書　名	キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第111集
編著者名	具志堅清大　照屋匠美　我喜屋優真　亀島慎吾　山田浩世　土肥直美　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL　098-835-8751・8752
発行年月日	令和４（2022）年３月９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ふてんまいしちゃーば 普天間石川原 るだいいちいせき 第一遺跡	おきなわけんぎのわんし 沖縄県宜野湾 あざふてんま 市字普天間	472051	16	26° 17′ 42″	127° 46′ 18″	20170823～ 20180314 20180717～ 20190304 20190701～ 20191213	8,292㎡ (延面積 22,576㎡)	沖縄防衛局による キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区の住宅建設に伴う記録保存調査
ふてんまぐすくんにー 普天間グスク いせき ンニー遺跡			15	26° 17′ 45″	127° 46′ 21″		400㎡	
ふてんましちゃばるこ 普天間下原古 ぼぐん 墓群			302	26° 17′ 44″	127° 46′ 16″		5,593㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
普天間石川原第一遺跡	田畑、交通	貝塚時代、グスク時代、近世～近代	列状ピット群、溝状遺構、石列、炉跡、道跡	土器、石器、カムィヤキ、中国産・本土産陶磁器、沖縄産陶器、金属製品など	グスク時代の階段状の畑跡で14～15世紀はコムギを栽培。
普天間グスクンニー遺跡	田畑	近世～近代	溝状遺構	土器、石器、中国産・本土産陶磁器・沖縄産陶器など	近代の耕作跡を確認。
普天間下原古墓群	墓	近世～近代	掘込墓・亀甲墓・破風墓、獣骨埋設遺構	厨子甕、中国産・本土産陶磁器・沖縄産陶器、銭貨、金属製品、瓦・瓦製品など	普天間古集落の墓域で、厨子甕内から指輪着装指骨を確認。

要約	キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区の記録保存調査を実施した。普天間石川原第一遺跡では、貝塚時代の埋没谷地形を確認した。貝塚時代後半からグスク時代初期にかけて谷地が開拓され、グスク時代は階段状の畑跡が展開していたとみられる。列状ピット群や溝状遺構、石列などの耕作関連遺構が検出されている。溝状遺構からコムギの炭化種実が多く検出され、14～15世紀はコムギを栽培していた可能性がある。普天間グスクンニー遺跡では近世～近代の耕作関連遺構が確認された。普天間下原古墓群は、掘込墓や亀甲墓・破風墓によって構成される19世紀後半から近代にかけての墓地で、厨子甕の銘書から普天間古集落の墓域であったことが確認された。墓の構築は地形を上手く利用しており、墓の付近でサンゴを焼き生石灰づくりから漆喰製造を行い、墓表面の仕上げを行っていた可能性もあり、当時の墓地造営における土木技術を知ることができた。27号墓厨子甕１内の指輪着装指骨は靱帯などで連結していた可能性があり、近代の洗骨習俗について窺える。19号墓では儀礼の可能性がある獣骨埋設遺構も確認されたほか、沖縄戦時の壕跡と戦没者人骨が墓庭で検出された。過去の海軍病院地区の発掘調査成果も踏まえると、普天間古集落から墓地へ至る道跡を確認することが出来た。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 111 集

普天間石川原第一遺跡
普天間グスクンニー遺跡
普天間下原古墓群

－キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書－

発　行　日　令和 4（2022）年 3 月 9 日
編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL：098‐835‐8751・8752
印　　刷　有限会社　サン印刷
〒 901‐1111　沖縄県島尻郡南風原町兼城 577
TEL：098‐889‐3679